
或る戦艦と艦長

E F 1 2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る戦艦と艦長

【Nコード】

N1542M

【作者名】

EF12

【あらすじ】

星の海を航く艦種と魔法少女達は唐突に出逢った。

西暦23世紀初頭、対白色彗星戦を皮切りに、伝説の宇宙戦艦として名高い『ヤマト』と同時期に、様々な任務で活動した2201年式主力戦艦の1隻『相模』と、それを指揮し続けた地球防衛軍初の女性艦長が辿った、数奇かつ不可思議な戦歴の記録である。

御注意

8 / 2 1 ? 次回からの本編エピソードは『或る戦艦く2』にて掲載します。

? 最終話の最後、ビーメラ星の管理局側名称を変更しました。

第1話『艦長代理が代理でなくなり…』（前書き）

初めまして、ヲサーンと申します。

よりによって初寄稿で「宇宙戦艦ヤマト」と「魔法少女リリカルなのは」（他にもクロスしてしまいかも）のクロスオーバーという無謀な企画に手をつけてしまいました。

亀のごとき更新になってしまいますが、生温かく見守っていただければ幸いです。

なお、しばらくは白色彗星帝国との戦いが続きます。

第1話『艦長代理が代理でなくなり…』

「艦長代理が代理でなくなり…」

（西暦2201年8月25日 地球防衛軍・連合艦隊暫定旗艦『長門』艦橋）

「嶋津艦長代理、土方司令がお呼びです。3分以内に来いと」

「…わかった」

通信長から声をかけられて振り向いた「艦長代理」と呼ばれた妙齡の女性は、一瞬僅かに顔をしかめたが、すぐ表情を改めて頷いた。

時間まで限定、それも極めて短時間での出頭を命じてくるのは、かつて主任教官と訓練生の間柄だった頃から変わらない。いつもながらあの人らしい…。

内心で苦笑しながら、彼女・嶋津冴子は踵を返して艦長室に小走りで向かった。

呼ばれる理由はいくつか思いつくが、最大の理由はこれだろう。

来月早々、軍部並びに多くの地球連邦市民が待ちに待った新型指揮戦艦の1番艦『アンドロメダ』が引き渡され、同時に連合艦隊司令部も同艦に移るため、艦長も兼任している土方司令も当然移乗する。従って、『長門』には後任の艦長が着任することになるだろうが、その新艦長についての話と引き継ぎのことであろうと思われる。

何しろ、『長門』の就役から半年近く、艦隊総司令官を兼ねる艦長の土方は急速に進む艦隊の編成にあたっており、『長門』自体の指揮やら事務統括は戦闘班長兼艦長代理の冴子が執っていたのである。

半年前、冴子は護衛艦『若竹』艦長からこの『長門』の戦闘班長に任じられた。

地球防衛軍では初めての女性戦闘士官、そして艦長に任せられ、男性艦長に伍して武勲も挙げた冴子が、旗艦とはいえ戦闘班長というのは一見降格人事に思え、物議をかもしたが、当の冴子は意に介さず、むしろこれで楽ができる、等と不埒な事を考えつつ、艦長の土方の元に着任の報告に行ったところ、

「嶋津、フネの事はお前に全部任せる。判断に困った事案だけ持って来い」

と、いきなり丸投げ。もとい、艦長代理に据えられてしまった。

『何ですと　っ！？艦隊総旗艦なのに、副長置かないの？？私が艦長代理？？それでいいんですか！？安直過ぎやしませんか、土方司令？』

心の中で激しくツッコんだが、冷静に考えれば拒否できるわけがない。

何しろ同期生で親友その1の弟が、弱冠18〜19歳にして、あの『ヤマト』の艦長代理職を全うしてみせたのだ。

年齢、実戦歴ともに上回る自分が、「私にはできません」等と言えるわけがないじゃないか！

以来半年間、懸命に操艦指揮にデスクワークに励んだ冴子だが、連合艦隊旗艦の操艦指揮は生半可ではない。旗艦の動きが艦隊の運命を左右するのだ。

演習が終わること、艦長室に呼びつけられては叱言を頂戴したものだ。

齡五十を過ぎても『鬼方』こと『鬼の土方』は意気軒昂だった。訓練生時代と同様に散々搾られて自室に戻るたび、遠くイスカンドルで、文字どおり絶世の美人妻と日夜乳繰り…もとい、イチヤツいているであろう親友その1を何度羨んだことか。

そんな生活も間もなく終わる。新艦長に相当部分を押し付け、ただの戦闘班長に戻るべく、どんな策を弄してやろうか等とほくそ笑んだ冴子だったが、現実はそんなに甘くなかったのである。

「嶋津、お前に新造戦艦艦長の内示だ」

「…は？」

『…司令は今なんだった？新造艦で言ったのはわかったけど、駆逐艦でも巡洋艦でもなくて戦艦？…て、おいおいマジですかっ！？』

伝えられた内容に絶句した冴子の鼻先に、土方はメディアと示達書がついたファイルを突き出した。

「…呆然とする暇があるならさっさと読め」

手渡された示達書には、

「戦艦『相模』艦長を命ずる」

「来る9月9日1300時までに南部重工長崎造船所の現場事務所に出頭せよ」

要約すればそんな内容が明記されていたのだ。

部下になる乗組員の名簿は来月早々交付されるらしい。

それにしても、30歳前で戦艦の艦長など前例がないというのに、未だ防衛軍の女性士官では唯一の艦長経験者　突撃駆逐艦『ひびき』と護衛艦『若竹』だけだが　ということでは何かと目立ちまくり、風当たりが強いというのになあ…。

そういえば、9月9日といえば、あの古代弟と森雪の結婚披露宴の翌日ではないか!?

出席する顔触れの中にあの親友その2がいる以上、丑三つ時前には帰してもらえまいな…。

等と次第に本題から脱線した思いを馳せたのもつかの間、

「復唱はどうした!？」

有無を言わさぬ響き。こりゃ肚を決めるしかないか…。

「…拝命しました。『相模』艦長に就任します」

姿勢を正して拳手。答礼する土方司令の顔が一瞬綻んだように見えたが、いやいや、絶対悪魔の笑みに決まっている…。

第1話『艦長代理が代理でなくなり…』（後書き）

次回は主人公等の設定です。

なお、主人公にリンカーコア等の魔導師資質はありませんが、一流の宇宙戦士ゆえ、身体能力と射撃（光学兵器）・武術で対抗できます。

(第2話) 登場人物・艦船設定1

各種設定1

かなり独自設定を入れています。

主人公：嶋津 冴子

地球防衛軍連合艦隊旗艦『長門』艦長代理兼戦闘班長 戦艦『相模』艦長(地球防衛軍には明確な階級がないが、大佐ノ一佐に相当)

西暦2172年3月生まれ、日本国神奈川県海鳴市出身、満29歳。

親友その1は「古代 守」。

親友その2は「真田 志郎」で、ともに宇宙戦士訓練学校の同期生。(2190年卒業)

地球防衛軍初の女性艦長であり、2201年9月現在、最年少の戦艦艦長でもある。

イメージは、容姿は頬傷がない「エメラルダス」で、口調は「オスカル」。

イメージCVは戸田恵子。

土方 竜

地球防衛軍連合艦隊総司令官兼戦艦『長門』『アンドロメダ』艦長。(大将相当)

2147年生まれ。54歳。

かつて宇宙戦士訓練学校において冴子、古代、真田らの期の主任教官兼総隊長を務め、その厳格かつ妥協なしの指導で『鬼の土方』と畏怖された。

その後艦隊勤務を経て、宇宙戦士訓練学校校長になり、古代進、島大介らを輩出した。

『ヤマト』艦長の沖田十三とは同期生で親友。
CV：木村幌（故人。「さらば〜」、「2」で実際に土方を担当した人）

艦船の設定（パート1、「さらば〜」、「2」の艦船データにオリジナル設定を付加）

地球防衛軍連合艦隊暫定旗艦『長門』

主力戦艦（俗に『ドレッドノート級』）第5番艦。

『アンドロメダ』級就役まで連合艦隊暫定旗艦として運用するため司令部設備を追加し、艦橋構造物がやや大型化されている。

『アンドロメダ』就役後も予備旗艦として同一戦隊を組んだが、土星空域会戦において、白色彗星帝国軍バルゼー艦隊旗艦『メダルーザ』の『火炎直撃砲』で轟沈させられた。

突撃駆逐艦『ひびき』

M-21881式雪風型宇宙突撃駆逐艦の1隻。冴子が艦長として初指揮を執った艦。

2199年、冥王星空域でガミラス艦隊と交戦し、駆逐艦1隻を撃破したが中破し、地球への帰路、火星軌道付近で乗組員退艦の上放棄された。

僚艦『ゆきかぜ』は大破し土星衛星タイタンに不時着。そのまま現地で記念艦として保管中。

護衛艦『若竹』

2200年3月、『松』級護衛艦の2番艦として建造。冴子が初代艦長を務めた。

ネームシップ『松』、あすなろ『翌松』、『丁汝昌』（中国籍）の4隻で「

第1特務戦隊」を組み、土方 竜の指揮で『ヤマト』帰還までの数ヶ月間、土星圏までの輸送ルート維持と残存ガミラス軍掃討に従事した。

本艦を含む初期建造10隻は資材節約と早期竣工のため艦首波動砲を諦め、ヤマト主砲を大口径化したシヨックカノン砲を装備したが、ガミラスのデストロイヤー艦相手ならアウトレンジで撃沈できた。

設計は極めて優秀で、駆逐艦・パトロール艦・巡洋艦は本級の準同型・拡大強化版である。

第3話『本部と墓参』（前）（前書き）

第3話です。

真田さんとヤマトクルーが2名登場します。
そしてあのお店もチラリと…。

第3話『本部と墓参』（前）

9月2日

『長門』新艦長への引き継ぎを終えた嶋津冴子は、戦艦『相模』艦長辞令受領のため地球防衛軍本部にいた。

防衛軍史上最若年、かつ初めて女性が戦艦の艦長に就任する報せはとうに広まっており、痛いほどの視線を感じる。歓迎・憧憬と、同じ位の嫉視も。

正式な辞令と乗組員名簿等も受け取り、どこか腰を下ろす場所を探している、見知った顔の男女数人が歩いて来る。

周囲の者は続々と彼らに対して直立不動になり敬礼している。

冴子にとっても、彼らのうち1人は敬意を払うべき立場にあるためそれに倣う。

すると、その1人 防衛軍司令長官・藤堂平九郎 が冴子に気

付き、表情を幾分緩めながら答礼した。

その後ろの長官秘書・森 雪は柔らかな微笑を浮かべながら会釈してきた。

雪は古代弟と結婚してからも、しばらくは仕事を続けるという。

…でもな雪、早く子供も作れ。森のご両親はもとより、泉下の古代のご両親や、あの白髭親父も喜ぶぞ…。

自分の事を遥か頭上の棚に放り投げて、冴子は思っのだった。

本部の一角、高級士官用カフェ「水交舎」に入り、奥の席に座って乗組員名簿を開いた。

案の定、多くは訓練学校を出たばかりのヒヨツ子ばかりだが、女性が全体の3割強もあり、これまでの艦と比べても異例なほど多い。

対ガミラス戦での男性の人材枯渇の影響もあるうが、冴子やそれに

続いた少数の後輩達、あるいは先程の森 雪が『ヤマト』で見せた縦横無尽の活躍の実績もあるのだろう。

いずれは女性だけで運用される艦も出てくるだろうか。

一方で見知った顔も見受けられ、思わず表情が綻んだ。

副長兼務の航海長・大村 耕作は3期後輩で、かつての乗艦『ひびき』では何度も死線をくぐり抜けた相棒ともいえる存在で、操舵術は元『ヤマト』航海長の島 大介すら凌ぐはずだ。

また、炊事班長の幕之内 勉は同期。専攻こそ違うが、あの『鬼』の薫陶とともに受けた仲であり、調理の腕も確かなのはプライベートルドでも体験済み。古代（守）や真田と痛飲した翌朝、彼に駄々をこねて 真田いわく、最悪な泥酔女の難癖 作らせたしじみ汁の何と旨かったこと…。

フネの食事は旨いという定評があるが、幕之内ならば単なる定評で済むことはないだろう。

次いで、乗艦『相模』のデータを確認する。

全長・全幅や拡散波動砲（1門）は現有の主力戦艦と変わらないが、変更・改良点も少なからず見受けられる。

大きなところでは、艦前半部にある片舷4門の舷側砲が小口径・速射化されるとともに格納式のガトリングパルスレーザー砲4基×2が艦橋基部に追加されたこと、メインコンピュータが揚羽電機製の新型機種に変更され、より大容量・高速演算化されたこと、主砲のエネルギー集束率を改善したこと、メインエンジンが2割出力向上した新型に変わったことだろう。

艦隊旗艦設備は搭載されていないが、コンピュータは対応済みのため、短期日で搭載可能で、今のままでも数隻程度で編成した戦隊規模の旗艦なら十分務まるとのこと。

まあ、当面の間、ルーキー揃いの『相模』に期待されるのは、打撃

力と波動砲戦用の戦力、いわば戦列艦としての役割であり、本艦が旗艦になる状況＝敗走戦だ。

問題の配属先は内惑星防衛艦隊ということだが、あくまで一時的であり、乗組員の錬成が済み次第、第1〜第7いずれかの外周艦隊に転属となるう…。

…ここでコーヒーとチョコケーキが来たので一旦端末を閉じた。

ここの店のコーヒーもスイーツも悪くない。自分の知る限りでは五指に入ると言ってもいいだろう。

しかし、実家近くで7代続けて営業していた喫茶店『翠屋』のそれに比肩するとは言い難い。

ここのがまずいのではなく、あの店の旨過ぎただけなのだが。

舌と脳はその味を覚えているが、もう『翠屋』のそれを実物で味わうことはできない…。

「よっ」

些かブルーな気分になった冴子を現実に戻したのは、左隣に座った真田志郎だった。

「新艦長が何黄昏れてるんだ？」

「別に黄昏れちゃいないさ。…その言葉、熨斗つけて返すぜ」

かれこれ14年も同性同士のように付き合っていれば、互いに浮かない気分であるのもわかっってしまう。

真田は少し黙っていたが、やがて言葉を選ぶように語り始めた。

「…ヤマトのことなんだが…」

「明々後日に帰還するんだよな。それがどうかしたのか？」
「…単刀直入に言おう。『アンドロメダ』に準じた近代化改造を行うことになった」

…また憂鬱な材料が増えてしまった…。

『イスカンドルへの大航海の成功は機械力の賜物』

ヤマトの連中を煙たがる閣下方たちの考えそんな理屈だ。
確かに、イスカンドルからもたらされたタキオン推進機関のテクノロジーは凄しいし、絶望的な状況下でそれを実用化した地球の工業力は大したものだが、フネを動かすのは人間以外の何者でもない。
人材が払底している現状では大幅な自動化を導入しなければならぬ現実を理解するが、機械の性能に溺れた先に待つものは、またいつぞやの悪夢の再現ではないのか？

同日 1730時 英雄の丘

沖田十三の立像を中心に、対ガミラス戦の戦没者や訓練での殉職者の氏名が彫られた御影石板が立ち並ぶ。

沖田の像に花を捧げて一礼してから、石板に歩み寄る。

知った者の名前を見つけるたびに、彼らのありし日の面影と最期の姿や声が脳裏に蘇る。

自分は、今の地球防衛軍は、彼らの霊に胸を張っていられるだろうか？

この数ヶ月は特にそう思わずにはいられない。

沖田の像を見て、殊更その思いが強くなり、拳を握る力が強くなる。

『死んだ英雄こそが正しい英雄』とはよくぞ言ったものだ。

『沖田艦長、こんな像作られるの、貴方は望んじやいなかったでしょー!?!?』

やりきれない思いでブロンズ像に語りかけた。

第3話『本部と墓参』（前）（後書き）

次回は家族やご近所さんへの手向けのお話です。
主力戦艦『相模』発進まで今しばらくお待ち下さい。

第4話 『本部と墓参（後）』 『（前書き）』

何というか……。はしより過ぎていないでしょうか？
我ながら文才の無さに茫然自失しております。

追伸

m お気に入り登録いただきました方、厚く御礼申し上げますm（――）

第4話 『本部と墓参（後）』

9月3日 0830時

『ヤマト』を含む第3外周艦隊が謎の敵飛行物体から奇襲を受けていた頃…。

神奈川県湘南市海鳴区 旧海鳴市戦没者慰霊公園

『ヤマト』が持ち帰ったコスモクリーナーによる再テラフォーミングの結果、再び居住可能になった湘南一帯は、市町村再編成で「湘南市」に統合されていた

かつての故郷の市役所が存在していた場所に建つ慰霊塔の前に冴子は立っていた。

8年前のあの日まで海鳴市役所があった場所。

これまで北米大陸やヨーロッパ、中国等に着弾していたガミラスの遊星爆弾が初めて日本に着弾したのが、よりにもよってこの地。

一発で旧海鳴市は市民の約9割にあたる50万人余りとともに地図上から消滅。隣接の遠見市も市民の半分、約20万人が一瞬にして命を奪われた。

そして、冴子は年老いた両親 捨て子だった自分を実の娘以上に慈しんでくれた養父母 と、家族同様に交流し、かつ剣術修業の場でもあった『翠屋』の高町一家、同級生の月村一家等、友人とその家族のほとんどを失った。

「……………」

地区・番地毎に犠牲者名を刻んだ石板の間を通り過ぎ、ある一角で

足を止めた。

そこにある両親の名前を確かめるように指でなぞる。

同じように、高町、月村一家の名前も確かめた。

脳裏に彼らのありし日の面影が浮かぶ。悲しみが込み上げてきたが、何とか抑えつける。

地球防衛軍の軍人たる自分には、死者に謝罪する義務こそあれ、涙する資格などない。慰霊塔に携えてきた花を供え、公園を後にした。

本部に戻ると、何やら慌ただしくスタッフが行き来している。どう見てもただ事ではない。

見知った顔の女性司令部員を捕まえて問い質した。

「第3外周艦隊が突然攻撃されたんです！」

彼女によれば、撃沈された艦船はないものの、『ヤマト』他数隻が損傷を受けたらしい。

「ガミラスの残党ではないのか!？」

「詳細はまだわかりませんが、まるでカプトガニのような機体に攻撃されたとの報告が！」

それだけ言うと、彼女は失礼しますと素早い敬礼とともに走り去った。

ガミラスにある円盤形の宇宙船といえば、沖田をして名将と言わしめたドメル将軍が七色星団での決戦で座乗した旗艦だが、どうも違うようだ。

どうにも嫌な予感がする。あの遊星爆弾が飛来する直前の時のような感覚だ。

地球防衛軍も、艦艇など表向きの物は対ガミラス戦時を遙かに上回るまでに整備されたが、肝心の人材育成は端緒にいたばかり。今の防衛軍ではまだ戦い抜くことはできない。せめてあと1年待つて欲しかったのだが…。

「何処の誰かは知らんが、あちらさんにはこっちの事情なんか知ったことではないよな…」

その独白は空しく消えていった…。

第4話 『本部と墓参(後)』 (後書き)

地上編はこれにてひと区切りです。
次回は追いかけてこの予定です。

第5話『主砲全開！目標ヤマト！…って無謀じゃん！』（前）（前書き）

評価ポイントを下さった読者様、お気に入り登録下さった読者様に、
あらためて厚く御礼申し上げます。

第5話 『主砲全開！目標ヤマト！…って無謀じゃん！』（前）

あのはねっ返りどもが飛び出した以上、こうなることはある程度予想していたとはいえ、やはり実際に命令が来ると緊張は隠せないものだ。

1時間前、火星空域 衛星ダイモス付近、戦艦『相模』

「艦長、『アンドロメダ』の土方司令より入電です」

訓練を初めてから僅か30分後、『アンドロメダ』からこの『相模』に呼び出しがかかった。通信長に電文を読むよう促す。

「はっ。」「相模』は本艦に合流、ともに『ヤマト』を追跡し、脱走を阻止すべし」とのことです」

次いで合流ポイントと時刻が伝えられた。

ブリッジクルーに戸惑いと緊張が走る。

冴子は艦長席から立ち上がった。

「皆、聞いたとおりだ。」

『相模』はこれより『アンドロメダ』とともに『ヤマト』を阻止する！…これは演習ではない。総員、気を引き締めてかかれ！」

「は、はい！」

ブリッジクルーが続く。

いきなりの戦闘体制、しかも相手はよりによって『ヤマト』。

ルーカー達を中心に、クルーに戸惑いと不安が広がるであろうことは想像に難くないが、命令は命令だ。出来ませんでは済まされない。

「取り舵120！ 両舷全速！」
「取り舵120！ 両舷全速宜候！」

新任航海士の町田順子が復唱した。町田の横には副長兼航海長の大村が座り、目を光らせている。

主機関の回転が上がり、艦は増速した。

大村が町田に言う。

「急げよ。会合ポイントに『アンドロメダ』より遅れて着いたら、土方司令から訓練延長命令が来るぞ！あの人は本当にやるからな！」
「は、はい！」

新型機関だけに加速レスポンスは良好だ。カタログデータでは、『アンドロメダ』や巡洋艦ほどではないが、主機関を改良した『ヤマト』と比べればより高加速で機動性も高いのだ。

1時間足らずで『相模』は予定会合ポイントに到着。まだ『アンドロメダ』は着いていないようだ。

大村が冗談めかして言う。

「どうやら土方司令の雷を受けないで済みそうですね」
「5分前集合絶対厳守だからな」

そして、予定会合時刻のきっかり5分前に『アンドロメダ』も到着した。

その『アンドロメダ』

から信号弾が打ち上げられる。

『我二続ケ』だ。少し距離を置いて『相模』も続航した。

さらに1時間程経ち、『アンドロメダ』から『ヤマト』発見の報告が入った。連合艦隊旗艦だけあってレーダー性能が段違いだ。

冴子はすかさず指示を飛ばす。

「総員戦闘配備！主砲1番2番スタンバイ！ミサイル発射管、1番から14番までスタンバイ！」

艦内に再度アラームが鳴り渡る

『アンドロメダ』 『相模』 は距離を詰めていったが、しばらくすると『ヤマト』 もさすがに気付いたらしく、急に増速して小惑星帯に向かう。

向こうの狙いは明白。こちらに加速で敵わない『ヤマト』 は小惑星帯に飛び込んで我々を振り切るつもりだ。それだけ操艦に自信があるのだろう。
だが、こちらの航海長を侮ってもらっては困る。

「町田、大村と替われ」

ルーキーの町田に経験を積ませてやりたいが、今はいわば実戦だ。このまま小惑星帯に突っ込む可能性が高い以上、大村に任せるのがベストだ。

「『アンドロメダ』に『我先行ス。許可サレタシ』と伝える」

通信長にも指示する。

『アンドロメダ』の航海長も実戦経験はないはずで、小惑星帯内でのオールマニュアル操舵は無理だろう。

小惑星帯でフルオートやセミオートでの操舵は回避優先で、スピードダウンは否めない。

『アンドロメダ』から許可の回答が来た。

「大村、このまま『ヤマト』を追え！」

「わかりました！」

基本的に、こんなところでオールマニユアルで操艦できるのは、護衛艦や輸送船の超ベテラン連を除けば、若手中堅ではウチの大村と『ヤマト』の島大介等、両手に満たない。

『相模』はアンドロメダの左舷から一気に追い越した。

第5話『主砲全開！目標ヤマト！…って無謀じゃん！』（前）（後書き）

ここはさすがに1話ではまとまりませんでした。

短くても投稿間隔を詰めた方がいいかも知れませんね。

次回も戦艦チキンレースです。

第6話 『主砲全開！目標ヤマト！…って無謀じゃん！(中)』 (前書き)

昼食時、小説情報をチェックしていて、お気に入り登録がまた増えているのと、破格の高評価がついていることに思わずご飯を嘔き出してしまいました。

読者の皆様、ありがとうございます。薄く高頻度の投稿を目指しますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

第6話 『主砲全開！目標ヤマト！！…って無謀じゃん！（中）』

『ヤマト』が速度を保ったまま小惑星帯に突入した。

「本艦はこれより『ヤマト』に続航して小惑星帯に入る。総員対シヨック防御！繰り返す、総員対シヨック防御！」

『相模』艦内にアナウンスが流れ、医務室や厨房ではスタッフがぎりぎりまで道具や薬品を棚に突っ込んでいく。

「お前ら慌てるなよ！皿は落ちてても割れやしない！包丁だけはしっかり固定しとけ！」

「はいッ！」

厨房で炊事チーフの幕之内が新人スタッフに檄を飛ばす。

「小惑星帯に突入します！」

『ヤマト』に続いて『相模』も速度を維持したまま小惑星帯に進入した。たちまち前方に無数の小天体が出現しては後方に流れる。

「大村、操舵は任せる！『ヤマト』に食らいつけ！」

「了解！皆、イスから落ちるんじゃないぞ！」

「はい！」

大村はスロットルと艦体各所のバーニアを巧みに扱いながら242？・55000？の巨躯を操り、その様をアシスタント席の町田が食い入るように見詰める。

冴子は旗艦の状況を聞く。

「『アンドロメダ』は!？」

「本艦に続いて進入しましたが、距離が開いています!」

「このまま『ヤマト』追尾を続ける!」

『ヤマト』と『相模』はほとんど速度を落とさず小惑星帯を走り抜ける。

『アンドロメダ』 艦橋

「何をしている!?!もっとスピードを上げる!」

小惑星帯に入った途端、『ヤマト』『相模』に引き離されていることに焦った副官が増速を命じる。

若い航海長が懸命に舵を取るが、セミオートではコンピュータが回避優先で艦を操作してしまうため、どうしても速度が取れず、先行した2艦に引き離されてしまう。

その時、艦首が微小惑星に接触したのか、ドーンという音響と衝撃が艦を襲った。

ブリッジが揺れて副官が自分の席につこうとして転倒するが、艦長席の土方は腕を組み、瞑目したまま一言も発しない。

あの2隻は明らかにフルマニュアルで操舵しながら速度を維持しているのに、自分にはできない。

カタログデータでは『ヤマト』はおろか、主力戦艦と同等以上に軽快な機動性を持っている『アンドロメダ』の性能を発揮できていない事実にも、航海長は顔を歪めた。

彼の名誉のために書き記すが、仮にも総旗艦の航海長に抜擢される程であるから十分優秀なのだが、手練れの舵取り2人を相手に回し

ては余りにも分が悪かった。

(ふむ、あいつらなかなかやるな)

土方は内心で島と大村の腕に高評価を与えつつ、航海長に指示を与える。

「慌てるな。2隻のペースに乗せられることはない。『ヤマト』の追尾は『相模』に任せて、確実に小惑星帯から出ることを優先しろ」「は、はい…！」

航海長はいくらか落ち着きを取り戻した。

『相模』艦橋

目の前に再び星の海が広がる。

「小惑星帯を抜けました！」

「被害報告！」

「艦の損傷、ありません！」

幸い、艦の損傷はなかった。

冴子は『ヤマト』の位置を質した。すかさずレーダー手が答える。

「1時の方向、約15宇宙キロ！木星軌道に向け直進中！」

「よし、間隔を保ったまま追尾！」

どのみちこちらの方が船脚は速いのだ。慌てることはない。

「『アンドロメダ』は？」

「レーダーには映りませんが、まだ小惑星帯の中と思われれます！」
「よし、本艦はこのまま追尾！現在位置を逐次『アンドロメダ』に報告しろ！」

どのみち『アンドロメダ』はこちらより高加速なのだ。小ワープも絡めて、すぐ追い越していくだろう。

それからしばらく『ヤマト』と『相模』のカーチエイスならぬシツプチエイスが続いた。

『ヤマト』は時に急転舵等で『相模』をまこうとするが、大村は彼我的間隔を保ったまま『相模』を『ヤマト』主砲の有効射程ぎりぎり外につけ続けた。

やがて、木星軌道に近づいた時、『ヤマト』前方10時の方向に『アンドロメダ』が姿を現わした。

『アンドロメダ』は前進すると『ヤマト』の進路を塞ぐように停止した。

冴子も改めて指示を飛ばす。

「艦首下げ10！間隔を保ったまま『ヤマト』の下腹につける！」

『相模』は『ヤマト』3番主砲搭の死角になる後下部についた。これで『ヤマト』からの攻撃手段はミサイルだけになる。

姑息と言われようが、格上相手には金的蹴りならぬ急所撃ちに限る。勝てば官軍なのだ。

第6話 『主砲全開！目標ヤマト！！』…って無謀じゃん！（中）『（後書き）』

主人公（恋愛の予定はないので、ヒロインとは言い難い…）を女性としたのは至って簡単でした。

『ヤマト』では、当初、古代守は『キャプテン・ハーロック』になつて『ヤマト』を支援する予定だったのを知り、ならば『エメラルダス』がないのは片手落ちではないか！という安直な理由でした。そこから企画？して今回の事態と相なりました。

ちなみに艦も、当初は戦艦ではなく「あかつき」というパトロール艦で、オール女性クルーも考えておりました。

パトロール艦「あかつき」は別の形で出したいなあ。

あと、リリなのネタは、まだ遊星爆弾で消滅した旧海鳴市と全滅した高町・月村両家しか出ていません…。

もちろん今後出ていきますので、今しばらくお待ち下さい。

第7話『主砲全開！目標ヤマト！…って無謀じゃん！』(後) (前書き)

戦艦チエイスも今話でおしまいです。

お気に入り登録が増えてた！

登録いただいた読者様、ありがとうございます。

第7話 『主砲全開！目標ヤマト！！…って無謀じゃん！（後）』

『アンドロメダ』に進路を塞がれた『ヤマト』だが、速度を落とさず進路を変えることなく直進を続けていた。

『相模』も『ヤマト』の後下にぴったりつけて続航する。

その時、通信長が告げた。

「艦長！『ヤマト』と『アンドロメダ』間に回線が繋がっています
！」

「モニターに映してくれ」

画像データがメインモニターに送られた。

そこには土方と、直立不動で敬礼する古代弟が映し出されている。

口火を切ったのは土方だった。

「古代、多くは言わん、戻れ。…私がどういふ男か、お前たちはよく知っているだろう？」

「お断りします。あのメッセージは総司令もご存じでしょう？あれは宇宙の危機を訴えているんです！何も確かめず、危機が目の前に来てからでは対処できません！」

古代弟もはなから譲歩する気はないようだ。

『そりゃ、頑固親父が師匠じゃ、弟子も頑固になるわな』
弟分の強情ぶりに冴子も内心で苦笑する。

訓練学校と実戦部隊で同じ頑固親父2人のしごき…もとい鍛練と薫陶を受けただけのことはある。

土方はもう1度言う。

「否定はしない。だが『ヤマト』1隻で何が出来るというのだ？
悪い事は言わん。今なら私が何とかしてやる…戻れ」

「お断りします！」

「…わかった。ならば仕方ない。我々は実力を行使するが、いいな
？」

「やむを得ません。しかし我々の考えは変わりません」

「そうか、わかった」

通信が切れた。

案の定物別れか…。ブリッジに不安の声があがるが、冴子はそれを
遮って矢継ぎ早に指示を出す。

「全砲門開け！主砲1番・2番は『ヤマト』艦載機発進口に照準を
合わせる！ミサイル発射管1番から6番は対空ミサイル装填！ 7
番から14番は対艦ミサイルを装填して待機！パルスレーザー砲、
艦橋砲全門スタンバイ！」

「お前ら、ぼけっとしてんじゃねえ！急げっ！」

躊躇するブリッジクルーに冴子の指示と大村の叱咤が飛び、慌ただ
しく艦内各所に指示が届けられた。1・2番主砲の砲身に仰角がか
かり、『ヤマト』を指向する。やがて、

「主砲、発射準備完了！」

「全ミサイル発射管、発射準備完了！」

「パルスレーザー砲、発射準備完了！」

「艦橋砲、発射準備完了！」

準備完了の報告が届く。

錬成開始から日が浅いゆえ、満足できるレベルには程遠いが、仕方

あるまい。

「このままでは『ヤマト』、本艦と『アンドロメダ』の進路が交差。接触または衝突の恐れがあります！」

観測員が危険を喚起する。

「『ヤマト』の進路は？」

「依然、変わりません！」

「よし、本艦も進路そのまま！」

「了解！」

完全に三つ巴のチキンレースの様相を呈してきた。

さすがに冴子の顔にも汗が浮かんでいる。

多少は経験ある自分もこうなのだから、ルーキーたちはさぞや生きた心地がしないだろうが、それは『ヤマト』『アンドロメダ』も同じだ。

否、一番しんどいのは土方以外の『アンドロメダ』のブリッジクルーだろう。

『アンドロメダ』の1・2番主砲が回転しながら仰角をかけ、『ヤマト』を照準に収めたようだ。

一方、ヤマトは艦を僅かに右舷に傾けて全ての主砲と副砲を『アンドロメダ』に指向している。

多分、『相模』に対してはミサイルで対処するつもりだろう。妥当な判断だ。

「『ヤマト』、あと20秒で『アンドロメダ』に最接近！ 本艦もあと25秒で最接近します！」

「……………」

ブリッジクルーは皆押し黙り、手に汗握っている。
観測員のカウントダウンの声だけがブリッジに響き渡った。

やがて、『ヤマト』は『アンドロメダ』の艦橋直前を直進。やや経
つてから『相模』も『アンドロメダ』の艦底すれすれを通過した。
『アンドロメダ』に動きはない。

「『アンドロメダ』は!?!」

「動きはありません!」

「攻撃命令もありません!」

冴子の問いに、観測員と通信長が応じた。

『ヤマト』は直進のまま遠ざかっていく。

やはり、そういうことだったか。土方さん……。

土方の真意を再認識し、冴子は表情を緩めた。

「減速しろ。面舵いっぱい。『アンドロメダ』の横につける!」

「了解!面舵いっぱい。よーそろー!」

大村の復唱に、ブリッジにホツとした空気が流れた。

『アンドロメダ』艦橋

艦橋の直前すれすれを『ヤマト』が通過、続いて艦底ぎりぎりを『
相模』が通過した時、ブリッジの緊張はピークに達した。

航海長や砲術士は顔面蒼白で、両腕は震えていた。

『ヤマト』はそのまま遠ざかっていく。艦底を通過していった『相模』はしばらく『ヤマト』を追尾していたが、やがて減速して右に転舵し始めた。

副官は舌打ちして追撃を命じる。

「嶋津め、何勝手な真似を…！面舵90！追撃…」

「やめろ…！」

皆まで言わせず土方が制した。

「しかし！司令…！」

なおも言い募る副官だが、土方は追撃を許さない。

「もういい、行かせてやれ。…責任は私が取る！いいな？」

最後は否を言わせぬ断固たる口調で言い切った。

沖田、さすがはお前の子供たちだな。と心中で続けながら。

その後、『アンドロメダ』は参謀本部に『ヤマト発見ニ至ラズ』と打電。続いて土方と冴子は個人名で『ヤマト』に激励電を打った。これにて一件落着、めでたしめでたし！

…などと終わらせるほど、土方司令は甘い人ではなかった。
小惑星帯に近づくや、

「これより『アンドロメダ』と『相模』で模擬戦3本勝負を行う」

と言い出した。しかも、

「諸君、喜べ。私自ら教導してやるぞ」

とても、とても有難いお言葉つきで…。

この模擬戦とその結果、『アンドロメダ』『相模』両艦のクルーがどんな目に遭ったのか、詳しい事は未だ判明していない。

というのも、『アンドロメダ』のクルーはそれから間もなく勃発した対白色彗星帝国戦役ではほぼ全員が戦没。

同じ戦役の最終局面で大破しながらも、辛うじて地球に帰還した『相模』のクルーも白色彗星帝国やそれ以降の星間戦争で半数以上が戦没。また、当時の艦長、嶋津冴子以下の生存者も多くを語っていないからである。

第7話『主砲全開！目標ヤマト！…』って無謀じゃん！（後）（後書き）

ぼつぼつなのはネタも出さないと…。

第8話 『帝国執事長日誌』 (前書き)

今回は総統閣下の執事長ことタラン将軍が語ります。

……………情報を確認したら、評価ポイントがありえないことに！
このような駄小説でも楽しみにしていただけに、いる読者様にただただ感謝です。

第8話『帝国執事長日誌』

(DEII デスラー紀元)

DE105・6・217

ナスカ艦隊が、かの『ヤマト』と数隻の地球の警備艦隊に奇襲をかけ、損失ゼロでいくばくかの損害を与えた由。

油断もあつたのだろう。地球側からの反撃はごく限定されたものだったが、『ヤマト』から新型の戦闘機が1機発進して反撃を試みてきたという。

映像データを見た我が総統は一言、

「あれに乗っているのはあの坊や…コダイ・ススムだ」

コダイ・ススム…。

ヤマトの艦長代理として、地球の命運をその肩に背負って戦った若者。

我がガミラスにとっては憎んでも余りあるが、その割に総統は実に嬉しそうでいらっしやる。

しかしすぐ真顔に戻られ、こう付け加えられた。

「ナスカはあの戦闘機をどんな手段を使つても撃墜しなければならなかった。見逃したその代償は、途方もなく高いものになるだろう…」

DE105・6・242

先年の地球進攻作戦時、彼らの恒星系・太陽系の第4・第5惑星の間にある小惑星帯に敷設しておいたデスラース・ネット（恒星系間通信傍受システム）の幾つかの再起動に成功した。

これで地球人の惑星間通信も傍受でき、我らの『ヤマト』復讐戦に多大なる貢献が望める。

それはそれで宜しいことなのだが、我が総統は、地球軍が惑星基地に駐在する兵士向けの娯楽通信がことの他お気に入りになってしまわれた。

地球人が言うところの「ウタノソング」という歌謡音楽、「マンザイ」という他人を笑わせる芸というもの等だが、特にお気に入りなのが、地球人が「サンデー」という定期的な休日の終わりに近く送信されてくる「ショーテン」というプログラムを、欠かさず保存するようお命じになるのだ。

総統はお休みの前にそのプログラムをご覧になるのだが、その前後は何人たりとも絶対お部屋に近づけてはならないと厳命されている。一体何故なのだ……。

DE105・6・304

遂に『ヤマト』が地球を出発、否、脱出した。

軍命令に逆らったの強行突破らしく、自軍の戦闘衛星を破壊しての念の入れように、総統は実にご機嫌麗しくあられた。

彼らの鮮やかな手際から見て、先日とは異なり、乗り組んでいるのはかつて我が軍を打ち破った精鋭のようだ。

月という衛星の基地からも相当数の戦闘機がヤマトに合流した模様だ。
面目を潰された地球軍本部だが、どうやら第2惑星にいる『アンドロメダ』という地球艦隊旗艦に追撃命令を出し、さらに第4惑星近くで訓練中の『サガミ』という戦艦も合流するらしい。
果たしてどうなるか、私も興味深い。

DE105・6・407

結論から書き記す。

『ヤマト』は無事地球軍の妨害を突破し、テレザートに向かった。
『ヤマト』を追跡した『アンドロメダ』と『サガミ』だが、『ヤマト』『サガミ』が小惑星帯を難無く突破したのに対し、『アンドロメダ』は乗組員の技量が低いのか、かなり苦心していたようだ。
しかし、艦速に勝るのか、小惑星帯を出るや、全速力で第5惑星軌道まで先回りし、追尾していた『サガミ』とで『ヤマト』を挟撃する態勢になった。

映像データによれば、『アンドロメダ』を指揮するヒジカタという男が地球艦隊の司令官だが、『ヤマト』のコダイとは旧知の間柄らしく、居丈高な態度ではなかった。
興味深いことに『サガミ』の艦長は女性で、かのスターシア陛下と同年代くらいに見えた。

考えてみれば、先の戦争でも地球艦隊に僅かながら女性が参加している形跡があり、慢性的人材不足の地球軍としては、優秀な人材は女性や若者であっても艦長に抜擢しなければならぬのかも知れない。

進路を塞ぐ『アンドロメダ』に構わず『ヤマト』は直進し、接触すれすれで通過した。

攻撃すれば撃沈できた可能性が高い絶好の機会にも関わらず、ヒジカタも『サガミ』の女性艦長も『ヤマト』を攻撃しなかった。

恐らく、ヒジカタ達はコダイ達の覚悟を試し、よしとしたのだろう。

総統は一言だけおっしゃった。

「地球にも、まだひとかどの将が残っていたか……」

DE105・6・412

総統の再三のご忠告にも関わらず、『ヤマト』を力攻めしたナスカ提督は大敗した。

憐憫の情がわかないでもないが、総統のご忠告を敗者の戯言としか受け取らなかったナスカ提督自らが招いた破局だ。

総統はナスカ提督の弁解を途中で遮るように通信をお切りになると、お部屋に引き上げられた。

例の「シヨーテン」をお楽しみになるために……。

第8話『帝国執事長口誌』（後書き）

どの辺でなのちゃん達を出そうかなあ…

第9話『調査任務と初戦果』（前書き）

また、「ヤマト2」の補足エピソードみたいになってしまいました
が、戦闘は置いといて、当然こういう事はやったはずだろうという
話です。

第9話『調査任務と初戦果』

第11番惑星基地が『ヤマト』を奇襲したのと同じ敵に空襲されているとの報せに、『ヤマト』や海王星軌道にあった第4外周艦隊が救援に向かった結果、先着した『ヤマト』が敵艦隊と交戦し、旗艦らしい空母を除く艦船全てを撃沈破した。

しかし基地は壊滅状態で、駐屯していた空間騎兵隊は多数の死傷者を出した。

本来なら生存者は後送されるどころ、現地指揮官の斉藤 始ら無傷・軽傷者は『ヤマト』乗り組みを強硬に希望した。

閉口した第4外周艦隊司令官が土方総司令にお伺いを立てたところ承諾を得たため、重傷者以外は『ヤマト』とともにテレザート星に向かった…。

火星空域『相模』艦橋

「護衛、ですか？」

「そつだ」

画面の先の恩師兼最高指揮官に冴子は問い返す。

第11番惑星の地上と空域における戦闘では、敵の艦船や各種兵器の残骸が多数発生した。

こちらにすれば未知の部分が多かった新たな敵の詳細を知ることができる宝の山である。

「『ヤマト』が敵の艦艇をほとんど沈めてくれたので、短期的な脅威は解消されたからな。今のうちに解析できるものはしておきたいのだ」

「わかりました。それで関係のフネは？」

「工作艦『なると』と輸送艦『かむい』を月から差し向けた。合流し次第出発しろ。現地では第4外周艦隊の指揮下に入れ」
「わかりました。合流し次第出発します」

翌日0530時、『相模』『なると』『かむい』は予定どおり第1番惑星に到着。先着の第4外周艦隊と合流した。

既に残骸の一部は第4外周艦隊が回収しており、それらは『なると』『かむい』に積み換えられた。

さらに、敵艦の乗組員らしい遺体も収容された。

「敵は徹底的に破壊していきましたね」

「ああ…」

操舵士の町田が憤りを込めて呟き、大村が応じた。

生き残った空間騎兵隊員が『ヤマト』乗り組みを志願した理由も少しは理解できる。

その時、ブリッジ後ろのドアが開いて冴子が入ってきた。

「「おはようございます！」」

「おはよう」

挨拶を交わし、艦長席につくや、冴子は

「町田、艦首上げ90。その姿勢で警戒を続ける」

と指示を出した。

「艦首上げ90…。つまり艦隊に対して直立姿勢に？」
「そうだ。ここをやった敵艦隊はあらかた片付いたと思うが、旗艦らしい空母の沈没は確認されていない。その敵が最後の抵抗を試みるかも知れん、それも真上から…。向こう（第4外周艦隊司令）の承諾は貰ってある」

真意を尋ねる町田に冴子は返した。

数で不利になった敵が、こちらがすぐに対応できない天頂方向から襲ってくる可能性は確かに考えられるし、そもそも宇宙空間には上下左右という概念すらないのだ。

『相模』はゆっくり艦首をもたげ、他の艦に対して直立するような姿勢で停止した。

その姿は、まるで直立した姿で泳ぐ珍魚「ヘコアユ」のようである。

その珍妙な姿勢に、『相模』は他の艦のクルーからは呆れられるやら爆笑の的になった。

その間にも『なる』、『かむい』による敵の残骸回収と調査が続く。地上では敵の装甲車が完全な形で手に入り、宇宙空間では敵艦のブランクボックスらしき物や推進機関の主要部分らしき部分が回収されたと報告が入る。

基地と人員の損害に比べれば微々たるものだが、それでも確かに収穫はあった。

誰もが表情を和らげたその時、観測員の緊迫した声がブリッジに響いた。

「前方12時、30宇宙？にワープアウト反応！大型艦1！」

案の定というべきか、艦隊から見て天頂方向だ。戦艦や巡洋艦の主砲では直上への砲撃はできない。しかも敵にすれば横腹を晒しているに等しい。

敵ながらやるじゃないか。

「敵の艦種はわかるか!？」

間髪入れず冴子が尋ねた。

操舵席では大村が全艦戦闘配備を命じ、通信士は僚艦に敵発見を伝えている。

「敵艦判明!…空母ですつ!艦載機は…ありません!」

「主砲1番2番、発射用意!ミサイル発射管1番から14番、対艦ミサイル装填!対空戦闘用意!照準、落ち着いて狙えつ!」

かつて、太平洋戦争の折、

「搭載機がなくなったのなら、空母ごと突撃せよ!」

と言った猛将が日本海軍にいたが、まさか本当にやる者がいたとは。あの空母にとって最強の打撃力はカブトガニ形の艦上攻撃機だが、円盤形の艦上戦闘機ともども『ヤマト』の対空砲火とコスモタイガーに阻まれ、ほぼ全滅している。となれば、あとは空母自体の武装だが、見る限り大口径の砲はなく、あとはミサイルくらいだろうが、甘く見る訳にはいかない。

真上を衝かれた形になった第4外周艦隊の各艦も艦首を上げ、主砲を真上に向け始めたが、果たして間に合うか。

「主砲、発射準備完了しました!」

「全発射管、ミサイル装填完了！」
「照準出来ました！」

よし、土方司令の「教導」と日頃の訓練の効果がいくらかだが出てきたようだ。

冴子が僅かに口許を綻ばせた次の瞬間、

「撃て
撃ーっ！」

ブリッジに攻撃命令が響いた。

2時間後、『相模』艦橋

『なると』『かむい』は敵旗艦と思しき空母の残骸回収に取りかかっていた。

遮二無二突撃をかけてきた敵の空母は『相模』の砲雷撃で全艦火達磨になり、針路がそれたところを、第4外周艦隊旗艦『アルミランテ・ラトーレ』と、巡洋艦『ヘネラル・ベルグラノ』（南米連合籍）が引導を渡した。

共同撃沈ではあるが、『相模』にとっては初戦果である。

「実際のところ、間一髪でしたね、艦長」

「ま、珍妙な姿勢にも意味があつたわけだ（笑）」

警戒体制は続いているが、艦はいくらかホツとした雰囲気になっていた。

「食事です！」

手提げ籠を提げた炊事班員が入ってきた。
籠の中は鮭おにぎりと冷茶である。

「よし、皆、飯にしよう！」

大村の声に、皆が笑顔で応じた。

第9話『調査任務と初戦果』（後書き）

艦船ファンの皆様には失礼致します。

話中に出た第4外周艦隊の旗艦『アルミランテ・ラトーレ』は1910 - 1950年代に実在したチリの超ド級戦艦からいただきました。

実際の本艦は南米諸国では最大最強の戦艦でしたが、最後は日本で解体されています。

巡洋艦『ヘネラル・ベルグラノ』も実在したアルゼンチンの巡洋艦からいただきましたが、実際の本艦は太平洋戦争時、アメリカ巡洋艦として建造され、その後アルゼンチンに移籍しました。

しかしフォークランド紛争でイギリス潜水艦に撃沈され、多数の犠牲者が出ています。

ぼつぼつ管理局にも出ていただきますか…。

登場人物・艦船設定2

当然、オリジナル設定でんこ盛り。

人物設定

大村 耕作

『相模』副長兼航海長（少佐・三佐相当）

2175年生まれ 26歳

冴子とは対ガミラス戦以来の付き合いで、何度か上官・部下として肩を並べて戦った。

航海士・操舵士としての手腕は若手・中堅ではトップクラス。

（後年一時地球防衛軍を離れ、古代 進とともに辺境宇宙貨物船に乗り組んだが、2220年、防衛軍に復帰。新生『ヤマト』副長に就任）

青年期イメージCV：千葉進歩（復活篇では茶風林）

幕之内 勉

『相模』炊事班長（後、『ヤマト』炊事班長）

2171年生まれ。

冴子・古代守・真田と同期生の間柄。

酔った時の冴子や古代の最大の被害者。（必ず叩き起こされ、しじみ汁を作らされている）

町田 順子

『相模』操舵士（軍曹／一曹相当）

2181年生まれ 20歳
高等商船学校から防衛軍に志願入隊。
イメージCV：川澄綾子

艦船設定

戦艦『相模』

主力戦艦（『ドレットノート級』）第39番艦
2201年9月、南部重工長崎造船所にて竣工。就役。

全長242?、排水量55,200?。

兵装：拡散波動砲×1、3連装40.6?主砲塔×3、20.3?
6連装固定艦橋砲×1、12.7?4連装舷側防御パルスレーザー
砲×2、ミサイルランチャー×18、近接用舷側格納式ガトリング
パルスレーザー砲×8、パルスレーザー砲×12

艦載機：救命艇、連絡兼上陸艇、コスモタイガー等若干機

乗組員数：正規状態97名

（全て竣工時）

第10話『これが宇宙戦争!?!』(前書き)

気がついたら5000アクセス過ぎていました。

お楽しみいただいていたければこれ以上の事はありません。

今回、『ヤマト』とあの義兄妹がニアミスします。

では、どうぞ。

第10話『これが宇宙戦争!?!』

「こ、こんな……」

「何が、一体……」

そこにあるはずだった緑に満ちた惑星は影すら留めず、無数の岩のかけらが漂うだけ。

私たちは声もなくその光景を見詰めるしかできなかった。

第145管理外世界『アクル』はデバイスに最適な高品質のレアメタルやストーンが採掘できることと、大型竜の生息地が多数存在すること、先住人類が存在しないため、時空管理局にとって欠かせない世界になりつつあり、採掘や自然保護のため局員が常駐する等、管理世界への格上げも秒読み段階にあった。

かく言う私の愛機『バルディッシュ』や、我が親友・高町なのはの愛機『レイジングハート』の基礎素材もこの産出だという。

ところが、最近になって、資源輸送船が消息不明になる事件が相次ぎ、さらに調査に向かった次元航行艦、それも最新のXV級2隻までが行方不明になってしまった。

しかし、2隻目は消息を絶つ直前、正体不明のミサイル艦隊と遭遇し交戦中と連絡してきた。

次元航行艦には魔導砲『アルカンシエル』や少なからず火器も装備されていたが、それらを使う暇もなく撃破されたものと予想された。そしてこの度、第3次調査に『クラウドディア』と私・フェイト・T・ハラオウンが派遣されたのだが……。

「誰が、こんなひどい事を…」

抑えがたい憤りが込み上げてきた。

あそこには採掘や竜の保護・観察に従事する2000人余りの管理局員もいた。

彼らも星もるともこの暗黒の虚空に命を散らされたのだ。何のいわれもなく。

「正体不明のミサイル艦隊」は既に私たちの中で敵と認識されていた。

当然、首謀者と構成員は逮捕しなければならないが、現状では敵が何者かすらわからない。

まずは敵の正体を掴まなければならないが、質量兵器を多数搭載する艦艇を多数擁する敵など、これまで聞いたことがない。

「周辺空域に異常はないか？」

「ありません」

『クラウドディア』は私の義兄、クロノ・ハラオウンの指揮の元、慎重に宇宙空間を進んでいた。万一の時はすぐ次元転移できる態勢で。

「せめて、敵の正体だけでも掴まないと…」

「そうだね、クロノ」

遭難した次元航行艦のうち、1隻はクロノの指揮下にあった。彼らやその家族のためにも、敵を捕まえる手を整えるためにも、まずは敵を知らなければならぬ。

『クラウドディア』は隣接する第144管理外世界『テレザート』に接近した。

ここには最近まで、ミッドチルダをも凌ぐ高度な文明が存在してい

たのだが、世界を二分する内戦がエスカレートした揚げ句、ほとんどの人類が死滅してしまった。

どうやら生存者がいるらしいのだが、何者かによって幽閉されているという。

「提督、惑星の向こう側に多数の艦船らしき反応があります！」

「よし、慎重に近づき、解析するぞ」

オペレーターの報告にクロノが指示を下した。

「ビンゴ…かな？」

「そうあってほしいがね」

『クラウドディア』は注意深く、惑星の向こう側が望める位置に移動した。

すぐさまオペレーターが解析にかかったが、ほどなく結果が報告された。

「エネルギー反応、2ヶ所で確認！ 手前は約40隻、大型艦です！…向こう側に1隻。距離があるので詳しくはわかりませんが、やはり大型艦の模様！ かなりの高速で互いに接近しています！」

「映像に出せるか？」

「手前の艦隊なら！」

ディスプレイに艦隊が映し出された。

「全身をミサイルで固めている…」

「艦首には超大型ミサイルが2本……。一連の犯人は恐らくこの艦

隊だな」

クロノが怒気を含んだ口調で呟く。
私も拳を固く握り締めた。

何としても彼らを逮捕したい。しかし、余りに彼我の数が違い過ぎる上、向こうは純粋な戦闘艦、こちらはあくまで調査母艦的な艦船で、まともに渡り会えない。

悔しいが、今の私たちにはどうにもできない…。

「手前の艦隊、ミサイルを一斉に発射しました。目標は恐らく奥の艦船！」

オペレーターが緊迫した声を上げた。

無数の中小型ミサイルが奥の1隻の宇宙艦船を襲う。

『逃げて！』

心の中で、ミサイルに見舞われる1隻の船の無事を祈った。

「着弾します！」

例の艦船がいるあたりで無数の光が瞬く。

「あの船は反撃しないのか!？」

クロノが思わず叫んだ。

あの船は逃げるでもなく、反撃も迎撃もせずミサイルに見舞われるままだ。

「どこか故障したのか、あるいは…」

劣勢を一気に覆す手段を持っているのかも…？

「超大型ミサイルが発射されました！」

オペレーターの声に、思わずモニターを見る。

全てのミサイル艦から超大型ミサイルが1隻あたり2発。合計約60発が発射された。

第1波攻撃ではたいした損害を受けなかったように見えたあの艦だが、さすがにあのミサイル相手では持ちこたえられないだろう。

「まずい！逃げるんだ！」

あの艦に向けるようにクロノが叫んだが、次の瞬間、オペレーターは真逆のことを叫んだ。

「奥の艦から急激なエネルギー増大反応を確認！」

急激なエネルギー増大、つまり何らかの超高エネルギー砲による反撃。そして『クラウドディア』はミサイル艦隊の真後ろにいる。

あの艦の目標は当然手前のミサイル艦隊。ということは…。

「クロノ、いけない！」

「針路右！左舷スラスター全開！かわせ！」

『クラウドディア』は急ぎ右に回頭する。

あの艦がいるあたりで光が煌めいたかと思った次の瞬間、凄まじい光の柱が襲ってきた。

次の瞬間、左舷に大きな衝撃を受け、艦が震えた。

「被害報告、急げ！」

「左舷補助機関、損傷！」

「左舷の装甲、一部剥離及び破損！」

損傷は小さくはなかったが、次元転移は可能だ。

しかし、この空域に留まることはリスクが大き過ぎる。

そういえば、あのミサイル艦隊はどうなったのか？

オペレーターに確認したところ、

「反応、1隻残らず消えました…」

信じられない報告が返ってきた。

「あのミサイル艦隊を一撃で消滅させたというのか!？」

クロノも呻くように言う。事実ならば、『アルカンシエル』すら軽く凌ぐ、文字どおりの最終兵器だ。

どのみち、あんな力がある艦とやり合うなんて無謀極まる。クロノはこの空域からの離脱を命じた。

2時間後、『クラウドディア』ブリッジ

応急処置を終え、艦は次元転移の準備に入っている。

「今にしてみると、もったいないことをしてしまったな…」

「何が？クロノ」

お茶を口にしながらクロノが残念そうに言った。

「ミサイル艦隊を一掃したあの艦さ…あの艦の乗組員と話をしてみ
たかったよ」

「そうね…でも仕方ないよ」

本音は私もそうだった。

ミサイル艦隊はともかく、あの艦にはなぜかさほどの不安は感じな
かった。ひよつとしたら友達になれるかも知れない…。とさえ思っ
てしまった。

あの艦とコンタクトは取れなかったが、消滅したミサイル艦隊内の
通信データを入手したので、ミッドに戻ったら解析してみよう！

ミッドに戻るや、『クラウドディア』が持ち帰った各データが解析さ
れた。

その結果、ミサイル艦隊は例の艦が発射した超高エネルギー砲撃で
全滅したことが確認された。

一方で、ミサイル艦隊内の通信の中に、何度となく『ヤマト』とい
う単語が出ていた。

日本に住んでいた私も、その発音は何度となく耳にしており、気に
ならないでもないのだが、今の地球に、あんな宇宙戦闘艦を建造す
る技術はどこにもないはずだ…。

第10話『これが宇宙戦争!?!』(後書き)

無理矢理絡ませた感がありますな…。

第11話『土方司令、シッコミがましていいでしょっか?』(前書き)

最初に…

前に話中で触れた「ヘコアユ」という魚は、通常は直立ではなく倒立状態で泳ぐ魚でした。
確認不足でした。

…今回はゲルン機動部隊奇襲の前日譚です。

第11話 『土方司令、ツッコミがましていいでしょうか?』

第11番惑星での収集・調査護衛任務を無事終え、偶然とはいえ初戦果も挙げた『相模』は月基地へ帰還。軍工廠でその巨躯を休めていた。

乗組員は今日と明日で半舷ずつの上陸が許され、おのおの民間エリアに繰り出していった。

一方で、艦内外の整備も行われるため、各部門のチーフとサブチーフは艦に残った。

月基地 士官第2会議室

基地司令部からの呼び出しを受けた『相模』艦長・嶋津 冴子はこの部屋に通されていた。

「遅くなって申し訳ありません。嶋津艦長」

「いえ、私も先程入ったばかりですので、お気遣いなく」

互いに挙手礼を交わす。

部屋に来たのは基地事務局次長の朱 豪であった。

「大活躍だったそうで。初戦果おめでとうございます」

「いえ。たまたま思いつきが当たっただけのことですよ。乗組員にも艦にも損害がなかったのが何よりです」

艦を直倒立させて警戒する拳に出たのは冴子が初めてで、なおかつ初戦果まで挙げたことは既に艦隊内に伝わっていた。

一見バカげたことではあるが、敵襲にすぐ対処出来たのは事実なので、表立って批判の声は上がらなかつた。しかし、最年少かつ女性初の戦艦艦長という、何かと目立つ立場にある冴子を疎む者からは、

「勃 する戦艦」

「チンチン犬戦艦」

などと、早くも妙な二つ名を頂戴していた。

話題を変えるように朱が言う。

「それはそうと、土方総司令から辞令をお預かりしております」

「私に、ですか？」

「ええ」

手渡された辞令書に目を通した冴子は、しばし呼吸を忘れた。

辞令書には、

内惑星防衛艦隊所属 系内遊動艦隊 独立第13戦隊司令官代行兼
任を命じる

独立第13戦隊編成 戦艦『相模』・『ヤマト』

補足：同戦隊は、当分の間、連合艦隊総司令官直属とする。

戦艦艦長になって間がないのに、戦隊司令代行？

何だ？このツッコミどころ満載の辞令は…？

要はひよこと暴れん坊という、艦隊行動が取れない者同士の部隊じゃないか！？

多くの僚艦に先駆けて初の実戦を経験し、初戦果まで挙げたとはいえ、『相模』はまだ艦隊行動訓練を受けていない。

一方『ヤマト』は、乗組員のスキルでは突出しているが、やはり本格的な艦隊行動訓練は受けていない上、性能面でも『アンドロメダ』や主力戦艦と異なる部分が多く、容易に艦隊に組み込むには問題がある。

現実問題として、近日中に白色彗星との全面戦争が始まる現状では、両艦を既存の艦隊に組み込む時間はもうなくなっていた。

実際のところ、『ヤマト』はテレザート星からの帰途についており、2隻揃って行動するには今しばらくの時間がかかる。

ともあれ、『相模』が『ヤマト』の足を引っ張っては意味がない。

「『ヤマト』が戻るまで今しばらく訓練漬けだな……」

ドックに戻る車中で、冴子はひとりごちた。

艦に戻ったら各チーフと訓練メニューを組み直そう。

彼らの休暇を潰してしまうかも知れないが、今は皆のスキルアップが最優先だ。

第11話『土方司令、ツッコミがましていいでしょうか?』(後書き)

仕事の途中でネタを思いつく私は色んな意味で終わってるな…。

「詫びろ！私達同様、死してお詫びしろ！」(バルゼー&ゲルン)

第12話『再コンタクト…』（前書き）

また義兄妹が登場します。前回の続きといつやつです

第12話『再コンタクト…』

時空管理局次元航行本部港内、次元航行艦『アースラ』ブリッジ

「出港30分前」

「各部最終チェックにかかれ」

「了解」

艦長兼提督のクロノがブリッジクルーに指示を出している。

私、フェイト・T・ハラオウンは先日の第145管理外世界『アクル』の崩壊・駐在局員行方不明事件、それに続く第146管理外世界『テレザート』付近空域で、『アクル』を攻撃し崩壊させたと思われる所属不明のミサイル艦隊を一瞬のうちに全滅させた、これも所属不明の宇宙戦闘艦について再調査すべく、クロノとともに再びこの世界に赴こうとしていた。

「各システム、異常ありません」

「管制に連絡。予定どおり出発すると」

「はいっ！」

艦船は、先日の戦闘に巻き込まれて損傷した『クラウディア』の修理が間に合わないため、老朽化が目立ち、予備艦籍編入予定になっている馴染み深い『アースラ』を急遽運用することにした。

「あの艦がまだ『テレザート』に滞在してくれればいいんだが…」
「うん」

あの艦の超高エネルギー砲撃で消滅したミサイル艦隊が、直前の艦隊内通信でしきりに出していた『ヤマト』という名。地球、それも日本で6年余り生活していた私にはとても偶然で片付けることはできなかつた。

私は、あの艦の乗組員と話をしてみたかった。所属する世界のこと、あのミサイル艦隊と戦った理由。

あれだけの艦船を運用できる国家なり組織なのだから、ミッドや時空管理局と同等以上の文明を持っているのは間違いない。迂闊に刺激して敵対するのは避けたいが、私は何故か、あの艦とは話ができるという確信を持っていた。

第146管理外世界『アクル』空域。

そこにはあの日と同じ無残な光景が広がっていた。星だったもの骸。

この中には駐在していた局員の亡骸もあるだろう。できることなら家族の元に連れ帰ってあげたい。

「こんな…」

「ひど過ぎる…！」

初めてこの世界に来たクルーは絶句し、痛憤の声を上げたり、泣いている。

私も、彼らと心情を共有していた。唇を噛み締め、拳を強く握る。私たちは肅然と頭を垂れ、彼らに安らかな眠りあれと祈るしかなかつた。

「提督、執務官、第146管理外世界に大型天体が急速に接近しています！」

観測担当クルーが緊迫した声を上げる。

「…どういう事？私たちが数日前に来た時には、そんな天体確認で
きなかったよ」

「間違いありません…直径数千？の天体で、強力な電波と重力場を
確認！」

映像がディスプレイに映し出された。

「あ…ああ！」

「これは……」

映し出された映像に、誰もが声と顔色を失う。

『テレザート』に接近する巨大白色彗星が映し出されていたのだ。
数日の間にこんな彗星が現れるなんて…。

私たちが学んだ彗星ではあり得ない速度だ。

絶句した私たちにさらなる重要情報をもたらされる。

「本艦より1時の方向、先日 of 戦闘艦…『ヤマト』を確認！遠ざか
つています！」

「間違いないか？」

「先日と同じ熱反応です。間違いないかと」

私たち関係者の中では、あの艦を暫定的に『ヤマト』と呼んでいる
のだ。

「クロノ！」

「ああ！…追いつけるか？」

「正直ぎりぎりですが、やってみます」

『アースラ』が老体に鞭打って加速する。

「あの艦…『ヤマト』に呼びかけて。こちらに敵対の意思はないことと、こちらの所属・艦名を。地球の英語・日本語文は私が作るから、あなたはミッド語とベルカ語文をお願い！」

「わかりました！」

キーボードを叩いて『ヤマト』に呼びかける英文と日本語文メッセージを作り、オペレーターに渡す。

その時、観測員が一段と緊迫した声を上げた。

「『テレザート』からエネルギー反応！急激に増大しています！！」

「強力な磁場発生！通信できません！」

「諦めるな！何度でも呼びかけ続ける！」

『テレザート』の異常の影響だろう。なかなか『ヤマト』に繋がらない。

「『テレザート』に異常なエネルギー反応…。爆発の可能性極めて大！」

「攻撃か！？」

「その反応はありません。重力による地殻崩壊でもありません！」

「『テレザート』の光学映像、出します！」

目に飛び込んできた光景に、私たちは文字どおり言葉を失った。

『テレザート』が黄色い光に包まれていたのもさる事ながら、光の中に青いドレスらしい服をまとった若い女性が、祈るような姿勢

で浮かび上がったのだ。

しばらくその光景が続いたが、やがてその姿がかき消え、遂に終局がやって来た。

5時間後、『アースラ』艦内 執務官室

色々なことがあり過ぎた1日だった。

結局のところ、確認できたのは『テレザート』の自爆に近い崩壊、白色彗星、『ヤマト』の不鮮明な光学データだった。

『テレザート』爆発の衝撃波を回避するための緊急次元転移で、『ヤマト』へのコンタクトはとれなかった。

残念なものには変わりないが、あの艦、『ヤマト』とは、またいつか逢える気がしてならない…。

それにしても、ジェイル・スカリエツィといい、この世界の崩壊、特に『テレザート』の自爆はあまりに衝撃的過ぎた。

あの白色彗星も含めて、次元世界はまだまだ波が高い…。

第12話『再コンタクト…』（後書き）

バルゼー「蛆作者よ、そろそろ私の出番であろうっ？」

冴子「その仮面剥がせよ、ネズミ男」

第13話 『模範的軍人（笑）』 （前書き）

月基地滞在2日目の話になります。
艦長の地金出まくりの話です。

第13話 『模範的軍人（笑）』

月基地で巨躯を休める『相模』。

その舷側タラップから笑顔の若者たちが降りていく様を、艦長の嶋津冴子と副長の大村耕作が見下ろしていた。

「皆、元気ですねえ」

「ああ…」

一般の乗組員たちは昨日、今日と半舷ずつの上陸を許され、思い思いの休日を満喫しに行くのだ。

冴子と大村は艦橋から彼（彼女）らを見送った。

明日からは今までに増して厳しい訓練と、恐らくは実戦が待ち構えている。実戦ともなれば、この前とは訳が違う。数倍する敵と相対することになる。

「楽しめる時はめいっぱい楽しむ。これも宇宙戦士の務めさ」

かつての自分たちを思い起こして冴子は呟いた。

「艦長に古代（守）さん、真田技師長らお歴々の雷名は今なお轟いてますからねえ（笑）」

「悪名以外の何物でもないさな…。地元のバカども叩きのめして警察やらMPが出勤するわ、飲み屋に出入り禁止喰らうわで、何度始末書書いたり、沖田さんたちに怒鳴られたことか（苦笑）」

負け戦続きで鬱屈してたこともあるが…。今にしてみれば、穴があったら入りたい気持ちだ。

今の若手乗組員たちにあの頃の悲壮感はない。地球艦隊の戦力も比べ物にならない位強化されている。しかし…。

「これからはあの頃並に厳しくなりますね…。先日の勝ち戦の記憶を引きずってでは生き残れません。また仕込み直さない」と
「ん…」

大村の危惧は正しい。今日の勝ち戦が明日の負け戦の原因になった例は無数にある。

ましてやこれからはあの『ヤマト』が僚艦になるのだ。ともすれば『ヤマト』への依存心が湧いてしまいがちだが、戦闘が激化すれば、いかに『ヤマト』とて、自艦を守るのが精一杯。『相模』への支援など期待する方が無理難題だ。

戦場での依存心は命取り。そんな破滅の芽は未然に摘み取らなければならぬ。

「よし、ぼつぼつ行こうか」

「はい」

ブリッジを当直通信士に任せ、冴子と大村はチーフミーティングに出るべく会議室に向かった。艦の整備、装備・備品の補充、訓練メニューのすり合わせ等々、やるべき事は山積しているのだ。

「そつえば、昨日の取材はいかがでした？」

自動通路を歩きながら大村が振ったのは、辞令受領の後の女性雑誌・ネット企画の取材。もちろん軍の広報官同席だ。

「…聞くな」

途端に塩を撒かれたナメクジみたいな表情になった。

冴子が地球防衛艦隊初の女性艦長になったのは一昨年。27歳になったばかりだった。

同期の古代 守に遅れること半月だったが、同時に最年少記録も更新してしまった。

そして今年、まだ20代で戦艦を預かる身になり、さらに、実質的な戦隊指揮官にまで「なつてしまった」（本人主張）

しかも容姿にも恵まれていたため、軍の内外で目立つ存在になってしまったのだ。

もつとも、真田や幕之内ら生き残りの同期からのからかい混じりの評価は、

「毒茸」

「沈黙限定美人」

「アルコールブラックホール」

と聞いていたらくだ。

「広報部が同席してるんだ。人畜無害に徹したよ」

「そうですか（笑）」

「当たり前だ。「宇宙戦士も雑撃ち上等！」だなんて言えるかよ」

「言いたかつたんでしよう？（笑）」

「…まあな。教練じゃ本当の事だし」

冴子のぼやきは止まらない。

「だいたいだ。ニュースソースなら古代弟や島、南部の俣とかもいるだろう？」

「確かにそうでしょうが、『ヤマト』はお偉方やセンセイ方に煙たがられてますからねえ」

「…奴ら、きつと慢性の肛門狭窄症を患ってるに違いないぞ」

地金丸出しの冴子に大村が苦笑した。

記事が出るのは来月らしいが、果たして我らが艦長殿はどんな猫っ被りで出ているのか興味深いのが、果たして日の目を見る機会があるだろうか、と大村は思った。

2030時 『相模』艦橋

「艦長、全員配置完了しました」

「わかった」

冴子は、全乗組員が持ち場についている報告を受けると艦長席から立ち上がった。

「全員に告げる。『相模』は昨日付けで新設された独立第13戦隊に編入された。当面、土方司令直属として動くことになるが、代行指揮官は私、パートナーシップは『ヤマト』だ」

ブリッジにどよめきが起きる。艦内全体がそうだろう。

「今のところ作戦行動命令は出ていないので、明日以降も暫く訓練航海になるが、『ヤマト』がテレザートから帰還次第合流する。それまでに、足手まといにならない程度にレベルアップすること。これが目下の課題だ…。白色彗星軍との本格的な戦闘も間近に迫っている。これに勝利し、皆揃って地球に帰ろう。……皆の努力に期待する。以上だ！」

「はッ！」

ブリッジクルーが敬礼し、冴子が答礼する。
出航は東京時間2300時だ。

第13話『模範的軍人（笑）』（後書き）

冴子の幼少期は吉永双葉（吉永さん家のガーゴイル）、ハイティーン辺りまではノーヴェ（リリなの）に近いです。イメージC.Vもまんま斉藤さんです。

第14話『不本意なコンタクト』（前書き）

気がついたら10,000アクセス超えてた！何ということだ！

お読みいただけてます皆様、厚く御礼申し上げます。

今回、地球防衛軍と管理局が接触します。
それと、あの艦隊も初登場です。

第14話『不本意なコンタクト』

ヤマトがテレザートから太陽系を目指している頃。

小マゼラン銀河辺境部某空域

時空管理局シ級次元航行艦『レム』ブリッジ

艦に衝撃が走り、ブリッジの照明が明滅する。

「右舷前部被弾！」

「障壁、効果ありません！全弾貫通！」

オペレーターの悲痛な報告に、まだ若い艦長は歯ぎしりする。

「右舷に高速で接近！艦影10！…その後方に大型艦1！包囲されます！」

これはダメだ。こちらは完全に嘲弄されている。一糸すら報えないのは無念だが、これ以上留まっては撃沈される…。
意を決した艦長は最後の賭けに出た。

「緊急次元転移！座標ランダム！」

「艦長！それは危険過ぎます！」

オペレーターが驚いた声を上げるが、艦長は畳みかけるように命じた。

「座標を入力している間に撃沈されるぞ！緊急次元転移、急げ！」

「は、はい！」

『レム』を包囲し、とどめの一斉射撃を放ったのは、ガミラスとも白色彗星軍とも違う、円盤形の艦体に塔状艦橋構造物を持つ戦闘艦群。

その後方に控える、ひときわ巨大なシルエットを持つ巨大戦艦
暗黒星団帝国軍第1艦隊旗艦『プレアデス』艦橋

「目標、消滅！…着弾直前に空間転移したものと思われます！」

「よし、隊列を戻せ！あれではワープしても助かるまい」

指揮官席に座るひときわ恰幅のいい人物、艦隊司令官データーは陣形を戻すよう命じた。

あの艦、時空管理局とか言っていたな。

次元世界の管理云々を言っていたが、あんなひ弱な艦でこの世界にのこのこ出てくるとは笑わせる。

せめて亜光速で巡航できる艦で来るべきだったな。

この世界は我々に任せておけばいい。時空管理局とやらは黙って見ているがいい。

データーはそれきり、時空管理局艦のことを脳裏から抹消し、後日、『ヤマト』に討たれるまで思い出すことはなかった。

地球・火星間のほぼ中間空域、戦艦『相模』

訓練予定の小惑星帯に向かう『相模』は総員体制を解き、当直体制

に切り替わっていた。

ブリッジ当直の航海士・町田順子は、自動操舵に切り替えて観測員席につき、レーダー、センサーを監視していた。

突然、アラームが鳴り、警告灯が点滅する。

「これは…亜空間からの転移…、ワープアウト反応…？。え…？左舷至近！？」

町田は弾かれたように席を立って操舵士席に戻ると手動操舵に切り替えた。

「面舵いっぱい！回避！」

「ブリッジ、どうした？」

すぐに大村からの通信が入る。

「副長、左舷至近にワープアウト反応が出ましたので、右に緊急転舵しました」

「わかった、すぐ行く！総員起こし！警戒体制！艦長には俺が報告する！」

「はい！」

艦内に緊急配置警報が鳴り渡り、休んでいた乗組員がわらわらと自分たちの配置場所に走る。

ほどなくブリッジに艦長以下の全員が揃い、配置完了の連絡が届いた。

「左舷至近にワープアウト確認。大型宇宙船のようです。映像出します！」

映像を見た全員は少なからず驚いた。

あちこちから煙を噴き上げていることもさりながら、船体の形状がガミラスとも白色彗星とも全く違い、何とも複雑な形状をしていたからだ。

「完全に行き足が止まっているな…。救難信号は出ているか？」

「自動と思われませんが信号が出ています…。これは…SOSモールス信号です！」

「SOSだと!？」

ブリッジにどよめきが走るが、被せるように冴子と大村が指示を飛ばした。

「とにかくあの船の救助が先だ」

「自分が指揮します!…各班の当直外から数名ずつ出せ。医療班はスタンバイ!不測事態に備えて全員銃を携帯しろ。予備のエネルギーパックも忘れるな!救命艇1号2号、発進準備!」

指示を終えると大村は足早にブリッジを出た。

所属がどこであれ、遭難者は可能な限り助けるのが、海であれ宇宙であれ、船乗りの仁義だ。

次元航行艦『レム』舷側

地球防衛軍やガミラス軍の艦艇とも全く異なる造りの宇宙船に皆戸惑っていたが、ブリッジらしい個所を特定。近くの破口から船内に進入することにした。

「必ず複数で行動！無理はするなよ！」
「了解！」

大村たちは2人1組で艦内の捜索に入った。

「艦内捜索開始しました！」

報告に冴子は頷く。

それにしても実に変わった形の艦だ。一体どこの所属なのか？新たな敵というのだけはごめんだ。

「あの船からタキオン反応は出ているか？」

「ありません。何度も確認したのですが……」

あの船はタキオン機関ではないのか。それでワープ、あるいは空間転移が可能というのは、乗組員救助もそうだが、あの船自体も捨ててはおけない。冴子は通信長のパクを呼ぶ。

「タイタンの連合艦隊司令部に連絡。所属不明の遭難艦を発見、艦内の捜索救助作業中。なお、極めて珍しい形状の艦につき、詳細な調査の必要を認める。工作艦を至急派遣されたし。画像データも添付してな」

「わかりました！」

土星衛星タイタン基地、連合艦隊司令部

「これが例の艦……か」

『相模』から送られてきた画像を見ながら、土方は呟く。
各所から煙を噴いているが、爆発の恐れは薄いようだ。

確かに未知の形状の宇宙艦船だ。報告のように、推進機関も我々やガミラスとは異なるのかも知れない。

だとすれば、決戦が近い今は無理としても、調査する価値はあろう。副官を呼び、工作艦『なると』の発進命令を出した。

「艦長、残念ですが、確認できた38名は全員死亡していました」「そうか……。で、人種は？」

大村は僅かに躊躇ってから続けた。

「：目視した限り、我々人類との違いは見受けられませんでした」「む……」

ブリッジにどよめきが走った。

大村の報告が続く。

「それと、ネームプレートと、全員が金属あるいは石らしい物を身につけていました」

「ネームプレートは読めそうか？」

「はい。というか、地球の英語等に極めて似通っています。：名前もそうですが、所属機関や地名らしい表記もです。例えば『時空管理局』『ミッドチルダ』『ヴァイゼン』とか……」

「ますます興味深い船だな。生存者がいなかったのが残念だ」

「画像データを送ります。それと、いくつか持ち帰ります」

「わかった。：彼らは丁重に弔ってやらないとな」

「ええ」

……工作艦『なると』が到着したのは4時間後だった。
宇宙船の船体と乗組員の遺体を託し、『相模』は訓練予定空域の小惑星帯に向かう。

『相模』でも大村達が持ち帰った金属片や乗組員が身につけていた物、毛髪などの鑑定と分析が行われた。

ミーティング室に艦長・副長と各班長、艦医が集まって結果について話し合った。

艦医の水野治子からは、DNA構成、血液組成、血液型とも地球人類と同一であるとの鑑定結果が伝えられた。

「ガミラス人やイスカンダル人、白色彗星軍の人間も我々と非常に近いと聞いて驚きましたけど、今度はまさに我々の双子の兄弟ですからね……」

「それだけに、1人も救えなかったのは残念でしたね」

「ああ。いつか彼らの故郷に葬ってやりたいものだな……」

『相模』艦長名で連合艦隊司令部宛のレポートが提出されたのは3時間後だった。

第14話『不本意なコンタクト』（後書き）

冴子・大村・フエイト

「お気に入り」登録いただきました読者様、阿呆作者に変わり御礼申し上げます。

白いあく…もとい高町なのは

「私の出番はまだなの？」

第15話『根こそぎ集結』（前書き）

m () m () m () m () m ()
m () m () m () m () m ()

今回は平板な話です。

一部、ヤンとユリアン（銀河英雄伝説）風です。

第15話『根こそぎ集結』

シリウス星系 ガトランチス 白色彗星帝国軍 第6遊動機動艦隊旗艦『メダ
ルーザ』艦橋

「ズオーダー大帝のご命令が下った。我が艦隊はこれより地球人どもが太陽系と呼ぶ、奴らの恒星系に進攻。地球軍を撃滅して一気に地球本星を陥とす！ 全艦出撃！プロキオンのゲルンにも伝えよ！」
戦艦・駆逐艦主体の打撃艦隊が進撃を始めた。いずれも地球防衛軍の同級艦よりひと回り大きい。

その中で、他の艦とは全く異なるフォルムを持つのはバルゼー座乗の旗艦『メダルーザ』。

艦橋に立つ、軍服にマントを羽織った男、艦隊総司令官を担うバルゼーが幕僚に命じた。

程なく、プロキオン星系に待機していたゲルン率いる航空戦力を担う機動部隊も太陽系目指して進撃を開始した。

当然、彼らの動きは太陽系外縁に進出していた地球艦隊の警戒部隊にキヤッチされることになり、木星衛星・タイタン基地の連合艦隊司令部に伝達された。

火星第一基地・戦艦『相模』

「艦長！艦隊司令部より通達です！」

「ん」

緊迫した表情のパク通信長に、冴子は続きを促した。

「命令。内惑星防衛艦隊全艦は本日1600時、木星タイタン基地に向け出航する」

「わかった。全員に伝達してくれ」

2時間後か。いよいよおいでなすったな。

乗組員の練度に不安がないわけではないが、その不安を皆の前で表してはいけない。

ふと、自らが保護者になっている亡き親友の末妹・雪菜を思い出した。

『相模』艦長を拝命して以来、なかなか帰宅できず、名ばかりの保護者化しているが、軍服を着ていないとマダオ（まるで駄目なおねいさん）そのものの、自分みたいな保護者でも慕ってくれているようだ。

雪菜の夢は『翠屋』の再興だそうだが、彼女が本当の夢に向かって歩き出すまでは、まだくたばる訳にはいかない。

その頃、連合艦隊司令部は艦隊の動員をめぐって参謀本部と半ば喧嘩腰でやり合っていた。

土方総司令は火星より外側の惑星にある全艦隊、さらに本来は輸送船団用の護衛艦群の大半にもタイタンへの集結を命じたのだ。

敵艦隊の接近で輸送船団は運航停止状態だが、土方には、これら護衛艦を遊ばせておく気はなかった。

護衛艦の大半には波動砲が装備されており、活用しなければ宝の持ち腐れだし、これらに乗り組む大ベテランの宇宙戦士たちも、後輩たちにだけ戦わせるつもりは毛頭なかった。

それに、敵艦隊の数はこちらを大きく上回る。艦隊を分散配置しては各個撃破して消滅してしまうだろう。

可能な限り戦力差を縮め、こちらの地の利を活かして敵艦隊と渡り合う方が得策だ。

規則上、これほどの大規模な艦隊の移動は防衛会議の承認が必要だが、平時はともかく、有事ではそんな悠長なことは言っていない。

時間との勝負と読んだ土方は一部幕僚の異議を抑え、独断で集結命令を出した。

参謀本部幕僚の中には、越権行為だとして土方の罷免を叫ぶ者もいたが、到底現実的ではない上、土方の作戦が現時点では最善とみた藤堂司令長官は黙殺していた。

ともあれ、僚艦『ヤマト』がまだ帰還していない『相模』は、内惑星防衛艦隊の隊列最後尾、ぶら下がるように土星に向かった。

『相模』艦橋

当直の町田と交代する大村が引き継ぎをしていた。

「…土方総司令も思い切ったことをなさいますね。大丈夫なんでしようか？」

「やる時は一切妥協なしだからな、土方司令は…。それに、明らかに数に勝る相手とやり合うのに、戦力の分散配置なんて愚の骨頂だよ」

防衛族とやらの利権政治家や参謀本部の一部幕僚からの受けは必ずしも良くないが、連中の人脈に連なる高級軍人にはろくな者がいない。

「…では、よろしく願います。副長」

「ああ、ゆっくり休めよ」

引き継ぎが終わり、町田は引き上げ、大村は航海士席についた。

タイタン基地まで、あと数時間。

第15話『根こそぎ集結』（後書き）

考えると、冴子艦長は、NOS諸作品の主人公、特に女性の間では間違いなく「高齡」の部類でしょうね……。
ヒロインで柄じゃありませんね。恋愛要素出そうにないし。

第16話『六課にて』（前書き）

今回はリリナの側の話です。無力感に苛まれています。こっちはさほど原作知らんから難しいです…。

第16話『六課にて』

ミッドチルダ・時空管理局『機動六課』隊舎

3件、立て続けに発生した次元航行艦の行方不明・遭難事件の捜査は遅々として進まないまま、旧『アクル』『テレザート』一帯は機械観測による観測世界とされ、当分の間、封鎖世界になってしまった。

私も、はやてが立ち上げた『機動六課』のライトニング分隊長になり、レリックやスカリエッティの捜査がメインになったが、今の事案が解決したら、またこの事件を手掛けたい。

クロノのOKを貰い、持ち帰った映像『ヤマト』とミサイル艦隊の戦闘、『テレザート』と白色彗星、『テレザート』自爆、『ヤマト』の不鮮明な画像等を副隊長以上とヴォルケンリッターだけに見せた。

皆、驚きの色を隠せなかった。

『アクル』の残骸を見た皆は正視できずにいたが、一様に憤りの表情を浮かべていた。

「我らとは別の常識を持つ連中か……。実際に目の当たりにするとはな」

シグナムが苦い表情で呟く。

ハリネズミのように全身ミサイルで固めた大型戦闘艦群。

「航行本部も、『アクル』を破壊したのはこの艦隊だと断定したよ」
「すげえ腹立つぜ！…でも、こんなのが相手じゃ、XV級が殺られたのも解るな」

ヴィータが画面を睨みつけながら言った。

「でも、この艦隊も一瞬で全滅しちゃったのよね？」

シヤマルが話すと、ミサイル艦隊が別の戦闘艦・通称『ヤマト』の超高エネルギー砲撃で一隻残らず消滅する場面が出た。

「反則だよ、この砲撃…」

「『アルカンシエル』が水鉄砲にしか見えんわ…」

「伝説の『ゆりかご』も一撃で墜とせるんじゃないか？」

なのは、はやて、ヴィータが呻く。

確かに、今の時空管理局の艦船では、これらの戦闘艦相手に武力では歯が立たないだろう。

「これじゃ、観測世界扱いになるのも無理ないけど…」

全滅したミサイル艦隊の内部通信でしきりに連呼されていた『ヤマト』という言葉。

「フェイトちゃんやクロノ君たちはこの艦を『ヤマト』と呼んだんやな？」

「うん…。何とか話をしたかったんだけど、白色彗星の出現や『テレザート』の自爆で、結局ダメだった…」

フェイトはひと息ついて続ける。

「でも、あの艦…『ヤマト』は、多数の相手にも動じず、肉を斬らせて骨を断つような戦いだっただ。そう…、日本の侍みたいな戦い方…。絶対敵に回したらいけないタイプだけど、素晴らしい友人にもなり得る相手に思えた…。そういう戦い方をする艦のクルーなら、こちらが誠実に接すれば、ちゃんと話をしてくれると思ったから…」

「そういうことか…」

シグナムが頷く。

「でも、結局何もできなかった…。ミサイル艦隊も『ヤマト』も、何もわからずじまい…。『アクル』『テレザート』の崩壊も止められず、白色彗星の正体もつかめないまま、逃げ帰って来た…」

フェイトは拳を握り、悔しさをあらわにする。

「テストロツサ、お前が責任を感じる必要はない…。あんな強力な宇宙戦闘艦や艦隊との遭遇自体、管理局の歴史にはなかったのだから。むしろ、2度の調査で情報を得て、帰還したことこそ称賛に値すると思うぞ」

「シグナム…」

同席した皆が頷く。既に3隻の次元航行艦、うち2隻は最新型のXV級が遭難しているのだ。そんな中で、『クラウディア』が小破したものの、全員が生還し、『アースラ』も無事帰還したのだから、成功と言っている。

しかし、彼女たちの話は『聖王教会』の騎士、カリム・グラシアからの通信で中断した。

フォワードを含む機動六課の主要メンバーが第97管区外世界地球 に向かったのは3時間後であった。

第16話『六課にて』（後書き）

次回からはしばらく地球防衛艦隊×バルゼー・ゲルン艦隊のガチンコ対決です

第17話『急造機動部隊』（前書き）

最近、久しぶりにウォーターラインを買いました。

買ったのは2等駆逐艦『樫』、水雷艇『鴻』、特設油槽船…。

昔は『大和』だの『赤城』だったのになあ…。

第17話『急造機動部隊』

あの暴れはつちやく達は、飛び出した時と同様、派手な帰還ぶりだった。

ワープアウトした時、タイタン近くまで忍び寄っていたらしい敵の長距離偵察機を踏み潰したのだ。
それを見た土方総司令は

「相変わらず荒っぽい連中だ」

と苦笑し、各艦隊の司令官や幕僚も、呆れ返る者、苦笑する者、眉を潜める者と様々だった。

タイタン基地内・大会議室

土方総司令を初め、各艦隊司令官と一部の戦隊司令が召集され、白色彗星艦隊迎撃戦の最終作戦会議が行われていた。

末席には「独立第13戦隊」司令官代理として、『相模』艦長の嶋津冴子と、土方から出席を命じられた『ヤマト』艦長代理の古代進もついていた。

席上、敵艦隊は前衛の戦艦・駆逐艦からなる打撃艦隊と、後方の機動部隊からなること、本隊は海王星軌道に到達し、東京時間の明日未明に土星圏に達することが告げられ、土星軌道を最終防衛ラインに敵艦隊を迎撃することが告げられた。

途中、既に敵艦隊との戦闘経験を持つ古代が指名された。

「敵の戦艦、駆逐艦ともに高速ですが、無砲身回転砲は射程は比較

的短いものの、速射性能は高いと感じました。

ただ、戦艦の艦橋部にある固定砲については注意が必要です」

「第11番惑星で回収した敵戦艦の残骸を解析した結果でも、あの艦橋砲は確かに大口径で、我々のシヨック・カノン砲とは構造が異なっていた。

波動砲のような決戦兵器こそないが、敵戦艦の正面に出るのは避けるべきだと思う」

古代の意見を土方が補足した。

散会后、数名が残り、総司令官室への出頭が命じられたが、冴子と古代もその中に含まれていた。

総司令官執務室

出頭したのは冴子、古代の他、戦闘空母部隊である第1航空戦隊ヨナミネ司令、第2航空戦隊のフィリップス司令、火星空域での錬成を終えたばかりの第14水雷戦隊司令らであった。

「君達に来て貰ったのは、敵機動部隊への奇襲攻撃を行うためだ」

冒頭、土方はそう告げた。

「敵機動部隊は、確認できた限りでは大型空母2隻、『相模』が討ち取ったものと同型の中型空母が86隻と、我が方とは到底比較にならないほどの航空戦力を擁している。

それが大挙して我が艦隊に押し寄せれば、決戦を待たずに我が艦隊は潰滅するだろう。」

だからこそ、敵機動部隊を無力化し、地の利を活かした砲雷撃戦に持ち込みたいのだ」

土方の言葉に全員が頷く。

「つまり、かのミッドウェー海戦の再現、ということですか？」

ヨナミネが返した言葉に土方が我が意を得たりと頷いた。

「そのとおりだ。敵の攻撃隊が発進する前に空母を叩く。これがこの作戦の力ギだ」

「正に綱渡り、ですな」

フリリップスが唸った。

困難だが、小勢で多勢を制するには、それしか方法がないのも確か。皆の回答は決まっていた。

出撃まであまり時間がないため、詳細は決められなかったが、一応の作戦内容は、

1・偵察機は『ヤマト』戦闘機隊から数機が爆装して出撃し、敵艦隊を発見し次第空母を攻撃して艦載機発進を阻止。攻撃終了後は空域に留まり、制空戦闘を行う。

2・敵艦隊発見の連絡があり次第、各空母から攻撃隊と第2次制空戦闘機隊が出撃、敵空母を攻撃・無力化する。

3・攻撃が成功した場合、『ヤマト』『相模』が進出して敵空母を攻撃する。

4. 戦況により、第14水雷戦隊も攻撃に参加する。
5. 万一、作戦が失敗した場合は『ヤマト』が殿軍になって敵の攻撃を引き受け、味方の退却を支援する。

護衛の艦艇は原則として無視するが、戦艦の正面には出ないこと。等々……。

この急造機動部隊は、『第201任務部隊(201TF)』と命名された。

201TFの編成は次のとおり

総指揮官、：ヨナミネ第1航空戦隊司令兼任。

次席指揮官：フィリップス第2航空戦隊司令

打撃部隊指揮官：嶋津独立第13戦隊司令官代理

護衛部隊指揮官：クリューガー第14水雷戦隊司令

艦船編成

戦闘空母『サラトガ』(旗艦)・『レキシントン』・『レンジャー』
・『フューリアス』・『クレマンソー』、以上5隻

戦艦『相模』・『ヤマト』、以上2隻

巡洋艦『リュッツォー』、1隻

駆逐艦『Z41』 他7隻

ともあれ、急造ながら部隊編成は完了。

数時間後、201TFの各艦は、主力部隊に先駆けてタイタン基地を出撃していった。

第17話『急造機動部隊』（後書き）

次回はどこまで書けるのでせうか……。

第18話『トラ・トラ・トラ2201(前)』(前書き)

作者的に、『ヤマト2』で一番可哀相なキャラは白色彗星軍のゲルン提督であると思います。

上司の「緑のねずみ男」ですら、火炎直撃砲で地球艦隊をタコ殴りできたのに…。

彼の、

「何の働きも出来ず、残念だ…」

という無念の呟きは、何度視聴しても悲しくなってしまう。

本話はゲルン提督の名誉回復を図ってみました。果たしてどんなものでしょうか…？

第18話『トラ・トラ・トラ2201(前)』

タイタン基地を出撃した201TF 第201任務部隊 は敵機動部隊を発見すべく、『ヤマト』より索敵機を発進させていた。

いずれも一騎当千のエース、加藤三郎と山本 明が率いる各8機のコスモタイガー?に、『ヤマト』技師長の真田志郎とアナライザーが搭乗した長距離索敵専門のコスモタイガー三座型の計9機。

加藤・山本両隊は増槽とともに対艦ミサイルを搭載し、敵発見即攻撃の態勢をとっていた。

その愛機のコクピットで加藤はぼやいていた。

「たく、レーダーも無線も使えないなんて、零戦か隼にでも乗った気分だぜ」

山本もぼやきを漏らす。

「太平洋のど真ん中で星の砂を探すようなもんだな」

彼らのぼやきもわかるが、レーダー、無線とも敵発見まで使用禁止というのは、敵艦隊に悟られない為で、加藤たちも十分理解した上でぼやいてみせたのだ。

加藤・山本たちとは別行動の真田・アナライザー機も、衛星を縫うように土星圏外縁部に向けて索敵を続けていた。

「反応あるか!」

「アリマセン」

このやり取りを何度繰り返しているか。
アナライザーは敵艦隊の通信信号を探っているのだが、まだ何の反応もないようだ。

201TFの各艦、そして後方の艦隊主力各艦でも、敵機動部隊発見の報せを待ち詫びていた。

敵影を見ぬまま、真田機は土星圏の最も外側、衛星フェーベに達しようとしていた。

さすがの真田にも焦りが見え始めていた。

敵機動部隊は速度を上げて本隊と合流したか、既に攻撃隊を発進させてしまったのか……。

空の空母を攻撃しても意味がないのだ。艦載機発進の直前、格納庫や飛行甲板に爆装した攻撃機が並んでいるところを叩かないと意味がないのだ。

その時、アナライザーが目まぐるしく頭部を回転させ始めた。

真田機からの連絡を受け、加藤・山本両隊が翼を翻してフェーベに向かう。

201TFの各艦も戦闘体制に入った。

「第1次攻撃隊、全機発進！」

ヨナミネ司令の号令を受け、5隻の戦闘空母からCT ?艦上攻撃機と爆装したコスモタイガーが次々と発進していく。

『ヤマト』からもコスモタイガーと、後部甲板から古代自ら操縦す

るコスモゼロが発進した。『ヤマト』搭載機は制空任務だ。
第1次攻撃隊は古代機を先頭に編隊を組み、敵機動部隊を目指し、
一路フェーベに向かった。

白色彗星帝国軍機動部隊旗艦、第1空母

2220年代以降、地球防衛軍からの機密文書保存期間満了に伴い、順次情報公開が進んだ結果、『ヤマト』の活躍を描いたアニメーションやドラマ、映画が数多く制作されたが、それらの劇中で、白色彗星帝国の機動部隊を率いていたゲルン提督は、ともすれば油断していた愚将のような描写をされることが多いが、彼は決して油断しきっていたわけではない。

後日、戦闘空域から莫大な量のデブリとともに回収された、彼の旗艦のブラックボックスが奇跡的に回収され、解析された結果判明している。

本隊が地球艦隊の集結地たる衛星タイタンに差し向けた偵察機が、何の連絡もなく未帰還になったことを知ったゲルンは、独自で偵察機をタイタンと地球艦隊に向けて派遣していた。

彼の元には各空母からの準備状況が報告されていた。
今のところ予定どおりに進んでいる。

彼は幕僚を鼓舞するように言う。

「先制攻撃を担うは軍人の名誉だ。本隊の仕事を無くしてやろうではないか！」

「はっ！」

幕僚が敬礼して応じた。

その時、幕僚がゲルンの元に歩み寄った。

「提督、偵察隊からの報告では、出撃した地球艦隊の中に『ヤマト』の姿がありません」

「何？タイタンにもいないのか？」

「はっ、おっしゃるとおりです。それに、数隻確認されていた戦闘母艦（戦闘空母）の姿も見えないと報告がありました」

地球側の標準型戦艦の後部を設計変更して、空母の機能を持たせたりしい中途半端な艦。

その艦も『ヤマト』と前後して姿を消したというのか。

「提督、『ヤマト』にはゴランド艦隊を一掃した『ハドゥホウ』があります。敵将は本隊を囿にして『ヤマト』を切り札に使うのではないのでしょうか？」

「うむ…」

ゲルンは考え込む。デスラー大統領の情報では、『ヤマト』は単独での長期間行動が得意な上、クルーの技量も高く、打たれ強さでは地球の最新鋭戦艦『アンドロメダ』をも凌ぐという。

待てよ、その情報が本当なら、『ヤマト』を突出させて盾代わりにし、戦闘母艦と艦載機で何か仕掛けてくるかも知れない。

その場合の目標は、何も本隊である必要はない。

「急いで偵察機を出せ。念のため、近くの衛星付近を探索するのだ」

しかし、その命令は遅きに失した。

観測員が艦隊に迫る、味方識別信号を出していない編隊を確認したと報告してきたのだ。

第18話『トリア・トリア・トリア2201(前)(後書き)』

次回は、要するにゲルン提督⇨南雲提督になってしまいます。

第19話『トラ・トラ・トラ201(中)』(前書き)

不運なゲルンさんがもっと酷いことになっています……。

第19話『トラ・トラ・トラ2201(中)』

地球防衛軍・連合艦隊旗艦『アンドロメダ』艦橋

「司令、201TFの『レキシントン』から入電しました！」

「読め」

「はいっ…」1725時、威力偵察隊が敵艦隊に攻撃開始。先頭の中型空母と旗艦らしき大型空母各2隻に命中弾。4隻とも炎上中、続いて第1次攻撃隊も攻撃中、敵戦闘機の妨害なし…以上です！」
「そうか…」

土方の厳しい表情が少し綻び、艦橋スタッフからも喜びの声が上がった。

序盤は上々だ。敵が浮足立っている間にどれだけ戦果を拡大できるか、だな。

とにかく、敵攻撃機の発進を阻止することだ。艦載機を発進できない空母などただの浮かぶ箱に過ぎない。

頼んだぞ、201TF、『ヤマト』、『相模』…。

201TFは一路フェーベ空域に近づいていた。

既に第2次攻撃隊は全機発進し、第1次攻撃隊の出撃機が続々と帰還している。

「奇襲成功とはいえ、それなりに被害は出ているな…」

艦長席で冴子は一人ごちた。

『ヤマト』から出た真田機と加藤・山本両隊は全機が帰ってきたが、大部分がルーキーの戦闘空母搭載機はそうはいかなかったようだ。

少ないものの、何機から煙を引いたり、傍目からもわかるほど、ヨタヨタしながらやっと飛んでいる機もあった。

『相模』も、先程1機の攻撃機を『相模』で收容したばかりだ。

初実戦の搭乗員は3人と軽傷あるいは無傷だったが、極度の緊張でコクピットや後部銃座からなかなか降りられずにいた。

搭乗員はそのまま『相模』預かりになったが、彼らの機体は損傷がひどく、修理不能と判定され、ブラックボックスを回収後、強制投棄処分になった。

彼らは悔しがったが、程なく『人間万事塞翁が馬』の意味を、身をもって知ることになる。

フェーベ空域、ゲルン機動部隊

時間を追うごとに、機動部隊は無残な状況になっていった。

加藤隊が大型空母を、山本隊が先頭グループの中型空母を攻撃したため隊列が乱れ、旗艦からの指示も一時滞ったため、迎撃が遅れたのだ。

さらに第1次攻撃隊により、大半の空母が被弾した。攻撃隊には、

「護衛の戦艦は放っておけ。獲物は空母だけだ！」

と何度も念を押してあったため、若い搭乗員たちも脇目を振らず空母に襲いかかったのだ。

空母は攻撃機が爆装して発進を待っていたため、被弾した艦ではたちまち誘爆が発生。中型空母の中には爆沈したり、隊列から外れて漂流状態になる艦が続出していた。

旗艦を含む大型空母も艦内の誘爆が続き、隔壁の閉鎖や区画放棄で持ち堪えようとしていた。

『ヤマト』艦載機は第1次攻撃隊の攻撃が始まってからもしばらくその場に留まり、空母艦橋や発進を図る敵艦載機にパルスレーザー掃射を加え続けた。

「加藤隊、山本隊は帰還せよ！」

第1次攻撃隊の指揮官を兼ねていた古代進は空域に留まって支援を続けていた加藤達に帰還命令を出した。

ゲルン艦隊側も手をこまねいていただけではなかった。

「とにかく急いで発進させろ！攻撃機のミサイルは発進してから捨ればいい！」

果敢にも、戦闘機や攻撃機を発進させようとする空母もあった。攻撃機は爆装解除の時間も惜しみ、発進後に投棄して敵攻撃機の妨害に使うつもりだったが、それらはコスモタイガーに発見され、大部分は発進直後までに撃破された。また、辛うじて発進できた迎撃機もコスモタイガーの牙にかかり、虚空に破片を散らしていった。

ゲルン艦隊旗艦艦橋

バルゼーからの通信は、案の定、作戦の変更はないとの回答だった。

「まだ無事な空母から攻撃機を出せ、敵本隊はダメでも、敵攻撃隊

を追尾して『ヤマト』と奴らの母艦を叩くのだ！」

こうも艦隊が混乱しては、敵の本隊への空襲はできない。せめてこの敵攻撃隊の母艦と『ヤマト』だけでも沈めなければ、何のためにここまで大艦隊を率いてきたのだ。

まだ艦載機数ではこちらの方が上回っている。大丈夫。やれるはずだ。

しかし、その命令はすぐには届かなかった。

旗艦が大鳴動し、ブリッジクルーの大半が転倒した。敵攻撃機が放った大型対艦ミサイルが旗艦の機関部に命中。艦の電源を担っていた補機の1基が破壊されたため、旗艦は一時通信不能状態に陥ったのだ。

「ちくしょう！」

護衛の戦艦や駆逐艦の乗組員は、悔しげな表情を隠そうとしなかった。

敵機の大部分は我々の対空砲火を次々とかい潜って空母を仕留めていく。

駆逐艦の中には、敵の射線上に艦を割り込ませて空母の盾になる艦もいたが、操舵を誤って空母に衝突し、2隻とも大火球と化す艦もあった。

『アンドロメダ』艦橋

ワンサイドゲームと化した201TFの戦況に、ブリッジ内の雰囲気はだいぶ和らいでいた。

「司令、『レキシントン』から入電。「第3次攻撃隊発進中」とのことです」

「わかった」

第1次攻撃隊の帰還機の中から無傷の機体で編成した第3次攻撃隊が出撃していった。

航空攻撃はせいぜいあと1回が限度。あとは艦砲による掃討戦になるだろう。

敵の護衛艦は混乱から立ち直ったのか、第2次攻撃隊からも少なからず被害が出ているようだ。

自分で選んだ道とはいえ、若者が次々と命を落としていくのを聞くのはやはり辛いものだ。 。
土方はしばし瞑目して、散華した若いパイロット達を悼んだ。

『相模』艦載機格納庫

また1機、第2次攻撃隊の損傷機が着艦してきた。

煙を上げる機体に消火剤がかけられ、コクピットから搭乗員が引き出されてきた。

今度は重傷だ。彼はストレッチャーに乗せられ、医務室に運ばれていった。

結局この機体も修理困難とされ、投棄されることになった。

『相模』艦橋

「今回は損傷機が増えてますね」

「敵もただ殺られてばかりじゃないからな」

町田と通信長のパクが言葉を交わしている。

まだ空域に留まっている古代からの報告では、第2次攻撃隊も結構な戦果を挙げているようだが、護衛艦が態勢を立て直しつつあるのか、被弾機が増えている。

『相模』も既に4機の損傷機を収容し、うち3機は投棄した。

航空攻撃はあと1回が限界だろう。その後は砲雷撃戦になるが、早まる可能性もあるな…。

「全砲門・発射管スタンバイ。いつでも突撃できるようにしておけ！」

緩みかけたブリッジクルーに喝を入れるかのように、冴子は艦長席から立ち上がり、心持ち声を大きくして命じた。

そう、戦闘はまだ始まったばかりだ。きっちり決めてはじめて先手を取ったと言えるのだ。

第19話『トリ・トリ・トリ201(中)』(後書き)

次回で『フェーブ空域会戦』は終わります。
多分(汗)

第20話『トラ・トラ・トラ2201(後)』(前書き)

ゲルン提督、お疲れ様でした…。

20000アクセス超えてました！

ご愛読、感謝します！

第20話『トラ・トラ・トラ2201（後）』

連合艦隊旗艦『アンドロメダ』

「201TF『レキシントン』から入電。第4次攻撃隊が敵残存空母への攻撃を開始しました！」

「うむ」

通信士の報告に、土方は頷く。

第3次攻撃隊の攻撃をかい潜った敵空母が、反撃の攻撃隊を向けてきたから、これはその空母への引導になるだろう。

「201TF各艦も砲雷撃戦準備が完了した模様です。あと30分で敵艦隊と接触します」

「敵本隊は？」

「針路・速度とも変わりません！真っ直ぐこちらに向かってきます」

機動部隊を切り捨てたか……。敵も浮足立ってはいないようだ。艦隊戦でも勝てるかと踏んでいるというわけか。

こちらに波動砲があることはとうに知っているだろうに。何らかの切り札を持っている可能性は高いな。

『相模』艦橋

第4次攻撃隊を発進させ、第3次攻撃隊を収容した201TFは敵機動部隊との距離を詰めていた。

第4次攻撃隊の攻撃が終わると同時に砲雷撃戦に入り、空母を全て

片付ける手筈だ。

「敵艦隊まで、あと20分です！」

「ん。全火器自由！艦内隔壁閉鎖！合戦準備だ！」

「はっ！！」

すかさず冴子は戦闘態勢入りを命じた。

艦隊は対空警戒フォーメーションの輪形陣から突撃隊形の縦陣形に変わっている。

『ヤマト』『相模』の独立13戦隊を先頭に、『レキシントン』ら戦闘空母5隻、最後尾の『リュッツォー』と続き、戦闘空母の両舷を駆逐艦が固めていた。

ブリッジクルーでは、先程突撃してきた10機余りほどの敵艦載機の話で持ち切りだった。

彼らは巧みに第3次攻撃隊を追尾し、果敢にもこちらの艦載機収容作業中に攻撃をしかけてきたのだ。

しかし、彼らの敢闘精神自体には敬意を表するが、攻撃対象を誤っていた。

敵攻撃隊はこちらの艦隊で最も目立つ『ヤマト』を狙ってきたのだが、それは完全にこちらの思う壺。

上空直衛の加藤・山本隊と対空砲火に阻まれ、戦闘機1機が『ヤマト』の右舷側に衝突しただけに終わったのだ。

「結果はともかく、向こうにも諦めが悪い奴はいたんですね…」

「ああ、惜しむらくは『ヤマト』に気を取られたことだ…」

まさか、敵にもかの山口（多聞）提督みたいな奴がいたとは驚きだ。多数の優位を失ったら意気消沈するのかと思っただが、例外はあるも

のだな。

「敵艦隊まで25宇宙?! 映像、出します!」

ブリッジクルーから喜びの声が上がった。

映像で見る限り、無傷の空母はいないようだ。

艦の各所から火炎や煙を噴き上げている。

時折、閃光を発し、大火球と化して沈んでいくものもある。

それは一昨年までの自分たちの僚艦と同じ光景。

敵とはいえ、真っ先に死んでいくのは最前線の下っ端からなのは同じこと。

手離して喜べるものではないが、こんなことを考える私は甘いかな
…?

そんな冴子を現実に戻そうかとはかりにパク通信長が艦隊通信を見て声を上げた。

「『レキシントン』から砲雷撃戦用意の指令です!」

「わかった! 全主砲、艦橋砲、パルスレーザー砲開け!、全発射管、対艦ミサイル装填! 第4次攻撃隊を待避させる!」

「はいっ!」

「それと、『ヤマト』の南部砲術長に通信! 「有効射程に入り次第、先に砲撃せよ」とな」

「わかりました!」

『ヤマト』艦長代理の古代がコスモゼロで出ている間は、砲術長の南部が戦闘指揮をとっている。

主砲の射程距離は、主力戦艦は改装前の『ヤマト』とほぼ同等だったが、脱走直前の改装で『ヤマト』の主砲は一層射程距離が伸ばされた。

しかも、命中精度も熟練者揃いの『ヤマト』が群を抜いている。主力戦艦が勝っているのは発射間隔の短さくらいだ。ならば、先に『ヤマト』に撃たせる方が持ち味を出せよう。

『ヤマト』が主砲を放つ閃光が明滅する。

「中型空母1、撃沈！」

「本艦の有効射程距離まで、あと20秒！」

観測員の声が響く。

「炎上している空母を集中して狙え！確実にとどめを刺すんだ」

冴子が指示を飛ばす。後方の戦闘空母でも主砲をおのこの目標に指向し始めた。

「中型空母に照準完了！」

「撃ち方、始めっ！」

『相模』と戦闘空母5隻の前部主砲、計36門が火を噴いた。

ゲルン機動部隊は末期的な状況を迎えていた。

無傷の空母は1隻とてない。地球戦艦や戦闘空母に捕捉され、砲雷撃で次々と爆発炎上し、轟沈していく。

果敢に立ち向かう護衛の戦艦、駆逐艦も『ヤマト』の正確な砲撃に貫かれて沈んでいく。

『ヤマト』は矛先を護衛の戦艦と駆逐艦に向け、1隻ずつ仕留めていく。

空母は専ら『相模』と戦闘空母、さらに『リュッツォー』が仕留めていた。
『リュッツォー』指揮下の駆逐艦も、魚雷を放って敵駆逐艦を炎上させる。

ゲルン機動部隊・旗艦艦橋

「提督、火災消火の見込みはありません」
「そうか。皆、ご苦労だった…。総員退艦しろ」

ゲルンの表情からは、先程までの焦りと苦渋は消えていた。

「提督、我々も残ります！」
「いかん！貴様らも退艦しろ！」

幕僚たちも退艦を拒むが、ゲルンは退艦命令を取り消さない。

これだけの失態を冒したのだ。どの面下げて帝国に帰れよう。
自分にできることは、彼らの責任を出来るだけ軽くしてやることだけだ。

「我が艦隊の戦闘は終わりだ。敗戦の全責任は司令官たるこの私にある！……残存艦をまとめて本隊に合流せよ。抗弁は認めん！」
司令官の尋常ではない気魄に、幕僚はこれ以上抗弁できないと悟り、最敬礼して退出していった。

連絡艇が旗艦を離れるのを見届けたゲルンは、操舵士席に座ると、

「大帝、誠に申し訳ございません…。バルゼー司令、私の力がなくて済まない…。かくなる上は我が帝国に仇なす『ヤマト』を道連れにすることで敗戦の罪をお詫び致します…」

と言つや、コントロールスティックを握り、高らかに

「最大戦速！目標『ヤマト』！」

と宣言した。

旗艦らしい敵の大型空母が炎上しながら大きく転舵してこちらに向かって来ることは、すぐに知るところになった。

「敵大型空母、こちらに向かって来ます！」

観測員の緊迫した報告に、冴子も表情を改める。

「刺し違える気が…。ならば介錯してやろう。主砲、ミサイル発射管、敵旗艦に向けて全門発射！」

『ヤマト』『相模』をはじめとする各艦から無数の砲撃とミサイルを浴びせかけられた大型空母は巨体でしばらく持ち堪えたが、火薬庫に誘爆したか、大火球に変わって消滅していった。

バルゼー艦隊旗艦『メダルーザ』艦橋

ゲルン機動部隊潰滅の報せに驚きの声を上げる幕僚をバルゼーは叱咤する。

「多少予定が狂ったが、数ではこちらが有利だ…。それに、我々には『火炎直撃砲』がある。地球艦隊など恐れることはない！」

その顔には自信が漲っていた。

『アンドロメダ』艦橋

「『レキシントン』から入電です」
「読め」

「201TFは敵空母の撃滅に成功。喪失艦なし。これより艦隊に合流の予定…以上です！」

「そうか…やってくれたか」

土方の表情が綻んだ。

まずはこちらが先手をとった。次は我々の番だ。

「司令、敵本隊までの距離、140万？です！」

「全艦、戦闘用意！」

土星圏決戦の第2幕にして本番の幕が上がる。

第20話『トラ・トラ・トラ2201(後)』(後書き)

次回はガチンコにしようかな。それとも…？

第21話『バルゼー憤死』（前書き）

今話で土星圏の決戦は終わりです。

第21話『バルゼー憤死』

『相模』艦橋

本隊や参謀本部との通信では、敵本隊と我が連合艦隊の殴り合いは一方的に殴られているらしい。

敵艦隊の中に1隻混じっていた変わった型の大型艦が旗艦らしいが、そいつが、エネルギー弾をワープさせるといふ手段で、地球艦隊にアウトレンジ砲撃を加えているのだ。

「あれはガミラスの技術供与なんでしょうか…？」

「その可能性はあるな。エネルギー弾を転移させるとは予想外だったが…」

町田の疑問に冴子は可能性を示唆した。

こちらの拡散波動砲の射程をも上回るとは始末が悪い。

唯一の救いは被害範囲がさほどではないこと。

一撃で沈められるのは戦艦1隻、駆逐艦2隻程度だ。

それでも、手をこまねいていれば一方的に撃ち続けられて潰滅は必至だ。

201TFも最大戦速で急行しているが、敵本隊の進撃速度もかなり速い。

もう一つ気になるのが、白色彗星本体が行方不明になっていること。敵機動部隊攻撃の前に『ヤマト』からもたらされた情報だ。

こちらにも注意が必要だが、差し当たりの問題は敵本隊だ。

「『レキシントン』から艦載機発進準備命令が出ました！」

土方司令から航空支援要請が出たのだろう。

程なく、『ヤマト』と戦闘空母から数十機のコスモタイガーとCT
? 艦攻が発進していった。

「艦隊、土星の環に向けて後退していきます!」

敵艦隊を引き連れる形で土星の環に向けて反転していく。

ブリッジクルーから不安げな声上がるが、冴子は冷静さを失わな
かった。

あの撤退を、敵の大将はどう解釈しているか。
潰走と受け取ってくればしめたものだが…。

『アンドロメダ』艦橋

「201TFからの艦載機はまだか!？」

「あと3分で敵艦隊の最後尾に到達します!」

待ち兼ねた航空支援が来た。土方は口元に凄みのある笑みを浮かべ
る。

「よし、このまま敵艦隊を環の中に引きずり込め!」

さあ、どんどんついて来い。そして環の中であのエネルギーワープ
砲を撃った時が、お前たちの運の尽きだ。

地球艦隊を追うバルゼー艦隊の最後尾に201TFの艦載機が食
つき始めた。

C-T攻撃機が放った大型対艦ミサイルが戦艦の横腹を食い破って炸裂する。

戦艦が艦橋砲を放ち、衝撃波に変化したエネルギー弾がコスモタイガーを粉碎した。

コスモタイガーが駆逐艦に対艦ミサイルを放ち、命中した駆逐艦は機関をやられたのか、炎上しながら落伍していく。

敵艦隊は次々と土星の環の中に進入していく。

一方、地球艦隊はカッシーニの隙間に到達。火炎直撃砲の影響を抑えるため散開し始めた。

コスモタイガーが反転し、敵艦隊がほとんど環に進入した頃、敵艦が遂にあのワープ砲を発射した。

次の瞬間、旗艦艦首付近で瞬間的に強い気流が発生。中央突破のため密集隊形をとっていたのが裏目に出たか、気流に巻き込まれ、操舵不能に陥った。

バルゼー艦隊旗艦『メダルーザ』艦橋

「何をやっているのだっ!？」

バルゼーは、旗艦をコントロールできない不甲斐ない操舵士を怒鳴りつけた。

「原因は何だっ!？」

「大規模な水蒸気爆発と思われませす!」

苛立つバルゼーの問いに幕僚の1人が答えた。

「この環には大量の水が浮遊していたのでしよう。それが火炎直撃砲の高温の発射炎で爆発的に蒸発し、気流になったと考えられます」
「くっ…！火炎直撃砲！」

まんまと敵に騙された。

バルゼーはほぞを噛みながらも火炎直撃砲用意を命じたが、あっさりと否定された。

「ダメです！艦が安定せず照準不能！」

「おのれ…ッ!?」

バルゼーが毒づいた時、艦に大きな衝撃が走った。

「敵艦隊の砲撃です！左舷損傷！」

『アンドロメダ』艦橋

「全艦、撃ち方始めっ！」

土方の号令を受け、カッシーニの隙間で再集結した地球艦隊に、隙間の内側に潜んでいたパトロール艦や護衛艦も合流し、気流に揉まれる敵艦隊を容赦なく撃ちまくった。

敵艦は砲撃で、あるいは味方艦同士との衝突であえなく爆沈していく。

「敵艦を気流から出すな！封じ込めたまま沈めるんだ！」

副官が活を入れるように叫んだ。

『メダルーザ』艦橋

状況は最悪だった。敵将の仕掛けた罠にまんまと嵌まり、攻守は完全に逆転してしまった。

こちらは1発も反撃できないまま、次々と敵艦隊の砲火で沈められ、あるいは味方艦同士との衝突で消えていく…。

「早く気流から脱出しろ！」

『メダルーザ』は煙を噴きながらスラスターを全開にして気流からの離脱を図る。

生き残っている艦もそれに倣うが、なかなか艦を安定できないまま砲火の串刺しになって爆散していく。

それでも『メダルーザ』は辛うじて脱出に成功。味方の合流を待ったが、合流したのは戦艦6、駆逐艦8隻に過ぎなかった。

それもつかの間、地球艦隊とは正反対に近い方向から何本もの火線が伸びてきて、隣の戦艦の艦橋が崩壊したかと思うと、次の砲撃で串刺しにされて轟沈した。

「どうした!？」

「『ヤマト』です! 『ヤマト』からの長距離砲撃です!」

「何っ!？」

スクリーンに映し出されたのは、こちらに追いついてきた『ヤマト』を含む小規模な艦隊。

迂闊だった。地球艦隊を潰すことに気を取られ、『ヤマト』の存在を疎かにしていた…。

どのみち、もはや我等の勝利は望めない。

十字砲火の餌食になるくらいなら…。

「全艦反転！こうなったら敵旗艦だけを目標にしる！」

『相模』艦橋

すっかり撃ち減らされた旗艦を含む敵の残存艦が反転しようとしている。

『アンドロメダ』と刺し違える気が…。

意気は認めるが、降伏しない侵略者にかける情はひと欠片とてない。

「敵艦の回頭中を狙い撃て！情け無用だ！」

「了解、目標、回頭中の敵艦！」

冴子の命令を大村と砲術士が復唱し実行する。

「主砲、斉射三連！……撃てっ！！！」

『ヤマト』に続き、『相模』と5隻の戦闘空母の前部主砲36門が発射され、『リュッツォー』も前方に指向できる砲と魚雷を全門発射した。

駆逐艦は魚雷を放つ。

それらが敵艦の横腹に襲いかかった。

『アンドロメダ』艦橋

「敵旗艦、反転してきます！」

辛うじて追撃を免れた旗艦を含む10隻余りがこちらに向かってくるようだが、201TFの砲雷撃で大半が消えた。残りは片手に余る程度だ。

差し違えるつもりか。その意気やよし。全力で叩き潰すのみだ。土方は立ち上がり、力を込めて命令した。

「全艦砲撃用意！敵将を介錯してやれ！」

「はっ！」

炎上しながら突撃をかけてくる、旗艦を含む敵残存艦に無数の火線が襲いかかった。

『メダルーザ』艦橋

「おのれ……！地球人ごときに、この俺が敗れるのか。この、俺が
「！」

被弾で幕僚もクルーも斃れたブリッジで、バルゼーは無念の叫びを上げた。

何がいけなかった？ どこで間違えたのだ。俺は……？
しかし、考える暇は与えられなかった。

猛烈な爆発が起き、バルゼーは壁に叩きつけられた。

「ん……ぐはあっ……！」

ようやく起き上がるも、体内から何かが込み上げ、鮮血となって口から噴き出した。

視界も意識も薄れ、何も考えられなくなっていく。

そして、ようやく誰にも聞こえない声を発すると、バルゼーは意識を手離した。

「…死して、大帝にお詫びを……」

第21話『バルゼー憤死』（後書き）

次回からしばらく『相模』『ヤマト』は苦難の道を辿ります。

第22話『悩む執務官』（前書き）

インターミッション的な話です。

なかなか、なのは達が出せません…（滝汗）

第22話『悩む執務官』

「そんな…っ」

時空管理局執務官・フェイト・T・ハラウンが義兄のクロノから旧第145・146世界が封鎖世界になったと聞かされたのは、レリックと共に、ヴィヴィオと名乗る身元不明の幼女を保護した後のことだった。

「…『アクル』『テレザート』とも消滅してしまったので、観測する必要性が薄くなったのと、大規模な宇宙戦争が発生しているからだ、と判断したんだ」

「それはわかるけど…」

なおも言い募ろうとする義妹を抑えて、クロノは続ける。

「あの近くで中規模な次元余震が発生したらしくて、観測機からのデータも届かなくなっただ。こちらからの通信もできなくなった」

「そんな…」

「気持ちはわかるけど、フェイトも今はレリック関係の捜査が最優先だろう？」

義兄にそう言われては反論の余地がない。

「それに、あのミサイル艦隊や『ヤマト』の戦闘力を見せつけられ
ては、『アクル』『テレザート』と同次元の世界には手が出せないのが現実さ…。こちらの艦船は基本的に治安維持用の母艦。向こ
うは純粹な戦闘艦なんだから」

「……………」
「それに、あれだけの戦闘力を持つ艦船を開発建造するには莫大な費用と高度な技術が要るけど、その二つとも工面できるめどはないんだ…。」

ただでさえ予算面で地上本部と冷戦状態なのに。それに、管理世界市民の理解を得られるかどうか…」

クロノの言うとおり、予算面で冷遇されている地上本部の、本局への反感は相当なものだ。

自分も管理局の仕事をするようになって、ある程度はわかってきた。「陸」、特に地上本部職員の、自分たち本局局員を見る目は決して優しいものではない。

自分やなのは、はやてには、本局が地上本部より上だという意識は毛頭ない。世界平和のために働く同じ仲間だと思っているが、本局所属者の中には「陸」所属の人を見下す者も少なくないし、「陸」側にも、自分たちが本局所属と知るや冷たくあしらわれて、悲しくなったことも一度や二度ではなかった。

「でも、管理局が未来永劫、次元世界の要でいられると言い切れるのかな…?」

「どういう意味だ?」

クロノは義妹に聞き返す。

「言葉どおりの意味よ…。これまではこの次元世界でも宇宙戦争なんかなかったでしょう…。でも現実には、管理局の艦船を簡単に沈め、惑星を粉々にするミサイル艦や、『アルカンシエル』さえ問題にならない威力のエネルギー砲撃を放つ宇宙戦闘艦が現れた。

一つの次元世界で起きた事が、他の次元世界で起きないとは誰も言

い切れないよね…？ もしミッドにこんな艦が1隻でも攻めてきたら、どれだけの被害が出るか…」

「それはそうだが…。でも今の状態では無い物ねだりだぞ。フェイト…」

「うん。そう、そうだよね…」

フェイトも、自分の主張が、現状では受け入れがたいことは重々承知だった。

ただ、あの艦、『ヤマト』を目の当たりにしてから、レリックやスカリエッティとは異なる不安感を抑え切ることができないでいた。

その不安感に対する答えが出るのには、まだ少なからず時間を費やすことになる。

第23話『敗走(前)』(前書き)

アクセス27000を超えておりました。
ご愛読、真に有難うございます。

第23話『敗走（前）』

木星・土星中間空域・戦艦『相模』

『相模』は煙の尾を引きながら木星圏に向けて退避行動を続けていた。

右舷には破口が生じ、艦橋周りのレーダーやアンテナも原型を留めていない。

「艦長、火災は全て鎮火しました。…後は応急修理でだましました。イオまで持っていくしかないでしょうね」

「ご苦労さん…」

消火作業を指揮していた大村が煤だらけの姿で鎮火の報告をした。冴子はここでひと息つき、艦を預かる者として最も辛い、しかし最優先で知らなければならぬことを把握するための質問をした。

「…死者は17名、それにトリアージブラックが5名…重傷者が6名です」

「……わかった」

トリアージブラックを含めれば2割以上の乗組員が斃れ、重傷者を含めると3割近くが戦線離脱を余儀なくされた。

それでも、『アンドロメダ』をはじめとする喪失艦に比べれば、遙かにましなのだろうが…。

「…後を頼む」

大村にブリッジを預け、冴子は艦内居住ブロックに向かった。

…好事魔多しを凶でいくような戦闘だった。

敵本隊に引導を渡し、味方本隊と合流したのもつかの間、後方に突然白色彗星が現れ、数多の艦が彗星の重力帯に飲み込まれた。

本隊の被害は少なかったが、201TFは『ヤマト』とこの『相模』以外の全艦が飲み込まれ、潰滅した。

その『ヤマト』も巡洋艦と衝突して大破。戦闘不能になり炎上しながら落伍していった。

機関室まで火が入り、一時は総員退去命令まで出たが、どうにか持ちこたえてイカルス基地に入ったと聞き、安堵したものだ。

一方、迫る白色彗星に対して、『相模』を含む地球艦隊は護衛艦まで加わって拡散波動砲を放ったが、周りのガス帯を取り除くだけに留まった。

「全艦砲撃開始！エネルギーが尽きるまで、怒りを込めて撃ち尽くせ！」

土方司令の号令下、都市帝国に向けて苛烈な砲雷撃戦を挑んだが、結果は悲惨、いや、一方的な屠殺だった。

都市帝国の回転装甲帯らしきものが動き出すとともにガスが噴き出して都市部を覆い、砲撃もミサイルも全て無効にされてしまった。そして、回転装甲帯から飛んできたのはランダムに発射される大型ミサイルと大口径エネルギー砲。

大口径砲は戦艦をも一撃で轟沈させ、飛んで来るミサイルの中にはクラスタ弾みたいな物を射出する物まであって、艦体をボロボロ

にされ爆沈する艦が続出した。

『相模』はミサイル迎撃に徹していたが、

「取り舵40！急げ！」

冴子の突然の命令どおりに左に転舵した直後、前方に閃光が走った次の瞬間、右舷に大きな衝撃が走り、爆発が発生した。

さらに、右舷と第1主砲塔付近にもミサイルが命中して右舷の傷が広がり、第1主砲塔は使用不能になってしまった。

「右舷第6から第10ブロック、第15から第18ブロック閉鎖！」
「風呂場の残り湯を消火に回すんだ！無人ブロックには未処理汚水を流し込め！」

……マイナーチェンジにより、『相模』以降の日本籍主力戦艦には男女ともスクリーン投影式大浴場が設けられ、風呂の湯は消火水利の用途を兼ねていた。

居住ブロックまで火の手が及んでいたため、通常の消火水利や薬剤はそちらに回し、無人ブロックの火災には未処理の汚水もあてた結果、一帯は汚物にまみれ、悪臭が立ち込めるほどだった。

それでも『相模』は持ちこたえていたが、右舷にまたミサイルが2発命中・炸裂したことで、影響は機関室に及び、針路と速度を維持できずに落伍を余儀なくされた。

「…艦首下げ40。戦線を離脱する」

ここに及び、冴子は戦線離脱を指示、『相模』は火煙を噴き出しながら針路を木星に向けた。

地球艦隊潰滅と土方司令戦死の報せは届いたのは、火災鎮火の
めどがついた時だった。

第23話 『敗走(前)』 (後書き)

『ヤマト』『相模』と地球艦隊の残存艦にとっては、まさにこれか
らが正念場です……。多分

第24話『敗走(後)』(前書き)

敗残兵たちの話です。

修理を受けている基地が、「2」とは異なっています。

第24話『敗走（後）』

「『アンドロメダ』から全周波帯通信です！」

パク通信長の緊迫した声がブリッジに響いた。

総旗艦からの全周波帯通信。

宇宙戦士に、それが何を意味するか理解しない者はいない。

『アンドロメダ』と土方総司令の命運が尽きようとしている。

それでも、自分が斃れた後も戦い続けようとしている宇宙戦士たちへの最期のメッセージなのだろう。

冴子は、艦内一斉放送で全員に聴かせるよう指示した。表情は変えず、艦長席コンソールの下で拳を強く握り締め、震わせながら。

……ノイズや空電混じりながらも、土方の肉声が艦内に流れる。

都市帝国のウィークポイントは要塞都市の下部にあること、生き延び、まだ戦う意思と気力がある者は、最後まで諦めることなく戦えということ。

最後に、

「諸君とともに戦えたことを誇りに……」

と、唐突に切れた。

啜り泣く者、鼻を擽る者……。

「……………」

冴子は立ち上がり、虚空に向かって拳手の礼をとった。

ブリッジクルーをはじめ、重傷者以外の乗組員も、各々の持ち場で敬礼を捧げた。

冴子は知っていた。土方が自らの長寿を望んでいなかったことを。ガミラス戦時、送り出した教え子たちが次々と戦死したり殉職していくことに苦悩し悲しんでいたこと。

彼が肌身離さず持っていた手帳に、先に逝ってしまった教え子全員の名前が書いてあったこと。

彼自身の家族も既になく、教え子に厳しくも愛情を持って接していたことを。

だからこそ、訓練生時代や部下として仕えた時、どんなに厳しい指導や罰直を受けても、一度たりとも不満を持ったことはなかった。

泣きたい気分だが、艦長たる者、それをぐつと飲み込んで表情には出さない。

『また、親父に死なれちまったな……』

とだけ、心の中で呟いた。

白色彗星を叩きのめすこと。これがあの頑固親父への何よりの手向けなのだから。

……『相模』は消火作業と応急修理をしながら木星圏に向かう。

イオ、ガニメデ等の衛星基地には修繕ドックや兵站基地があり、『なる』等の工作艦や支援艦艇も複数入港している。

そこで修理と補給を受けて、白色彗星を追うのだ。

『ヤマト』や『相模』同様、木星圏を目指していた残存艦は何隻かあった。

皆大なり小なり損傷していたが、何とか自力航行していた。それらは自然と『相模』を中心に集結する形になったが、イタリア籍の巡洋艦『ボルツアーノ』は機関室火災が鎮火しなかったため、生存者は『相模』とタイ籍の巡洋艦『トンブリ』に移乗し、『相模』の第3主砲で撃沈処分とした。

……『相模』はイオ基地で、『ヤマト』の隣で修復作業を受けることになった。

他の衛星基地でも生き残った艦艇の修復作業が行われているが、損傷が軽い艦は工作艦に横付けしての作業になった。

修復に時間がかかると判断された艦は順番待ち。

全損と判断された艦は部品取りに転用され、それらの艦のクルーは戦闘可能な他艦に転属したが、『相模』にも旧『ボルツアーノ』等から10名が転属してきた。

修復と補給作業は各艦の乗組員も参加して進められた。

先に『ヤマト』の作業が終わり、ガニメデ基地に移って最終調整と補給作業にかかっていた。

イオにおける『相模』の作業も進み、8割まで進んでいる。完了し次第ガニメデで補給を受けて出撃する予定だった。

しかし、その氣勢を削ぐかのように飛び込んできたのは、地球連邦政府が白色彗星帝国に降伏したという報せだった。

第24話『敗走(後)』(後書き)

次回以降は、都市帝国と戦ったのは『ヤマト』だけではない、という話になります。

第25話『反攻艦隊出撃(前)』(前書き)

30000アクセス超えておりました!

毎度のご笑覧、ありがとうございます。

阿呆作者になりかわり、乗組員を代表して御礼申し上げます。

地球防衛軍、宇宙戦艦『相模』

艦長・嶋津冴子

副長・大村耕作

第25話 『反攻艦隊出撃（前）』

「降伏だと！？冗談じゃない！」

「俺達はまだ戦える！」

「降伏したつて、利用価値がなくなれば皆殺しに決まってる！破局を先延ばしにするだけだ！」

連邦政府の無条件降伏決定に、軍部、特に前線の宇宙戦士達は強く反発した。

本部職員にも同様の考えを持つ者が多く、武装解除命令などはなかなか具体化しなかった。

第一、直接の最高指揮官たる防衛軍司令長官からの命令がない以上、現状維持しかない。

何より、連邦政府の中も混乱しているのだ。

それはここ、木星圏各基地や修理で入港していた艦艇のクルーも同じで、彼らの意思は徹底抗戦で一致していた。

『相模』でも修復作業を中断して艦内食堂に全乗組員を集め、艦長の嶋津冴子は、自分は降伏拒否を明言した上で、皆には自分の方針を強制しないので、自分自身で考えて結論を出すよう伝えたところ、全員一致で徹底抗戦を選択した。

…ともあれ、作業は再開されたが、『ヤマト』の補給作業が終了したのに対し、『相模』はまだ艦体の修復作業中だったため、冴子は古代進からの『ヤマト』単独出撃申請を認めた。
ここで僚艦と合流を待っているのは、正式に武装解除命令が出てしま

う。
シベリアンコントロールの面では大問題であるが、ここはやった者

勝ちだ。

一方、木星圏各基地で修復中の各艦艦長の間で『ヤマト』を支援するための艦隊を編成しようという動きが出た。

デスラー総統率いるガミラス艦隊や、白色彗星軍太陽系侵攻艦隊の残存艦や都市帝国固有の艦隊による『ヤマト』への攻撃。

特にデスラーは必ず攻撃してくると予想されたため、戦闘可能な艦船で小規模ながらも艦隊を組み、『ヤマト』への注意と攻撃を分散させようという目的である。

ただ、それも全ての艦の修理を待っているのでは時期を失するため、早期に修理を終えた艦で暫定編成を行うこととした。

その結果、

戦艦『レナウン』『相模』

巡洋艦『クリーブランド』『トンブリ』

パトロール艦『エムデン』

駆逐艦6隻、護衛艦4隻で最初の反攻艦隊を編成し、司令官は『レナウン』のテナント艦長が兼任することになった。

また、戦艦『テキサス』、巡洋艦『白根』、パトロール艦『あかつき』に駆逐艦と護衛艦数隻も2・3日以内に戦列に加わる予定だった。

その矢先、『ヤマト』とガミラス艦隊が衝突したというニュースが走った。

『ヤマト』にとっては、力攻め一本やりの白色彗星艦隊よりも厄介な相手で、案の定『ヤマト』は苦戦を強いられているようだ。

「くそっ！何もできないのか!？」

応援に行けないもどかしさに、皆齒ぎしりしながら戦況を案じていたが、やがて当の『ヤマト』の相原通信長から第13戦隊司令官代行、つまり冴子宛で通信が入った。

『…デスラー総統は旗艦を移し、ガミラス艦隊とともに空域から退去。ヤマトは損傷したが、自力修復可能』

との通信が入ったため、皆一様にホツとしたが、続報に『相模』ブリッジクルーは凍りついた。
内容は、

『当艦航海長、島 大介は白兵戦の途中、爆発に巻き込まれMIA。当面は当艦艦長代理・古代進と技師長・真田志郎が職務を、分析ロボット『アナライザー』が操舵を代行する』

というものだった。

各員が準備を進める中、冴子は、拡散波動砲の使い方を考えていた。拡散波動砲は「面」を制圧するための物で、敵艦隊や地上基地の無力化には絶大な威力を持つが、都市帝国のような対要塞戦闘では、内部への致命傷を与えるのは、単艦では困難だ。

ならば、波動エネルギー弾の拡散開始点を、例えば都市帝国の内部に合わせてはどうか？

波動砲自体の出力は、エネルギー増幅装置のおかげで『ヤマト』より上回っているから、拡散前の貫通力も理論上は上回っている。内部で拡散させれば、拡散した波動エネルギーは毛虫に寄生したヤドリバエの幼虫の如く、敵の内臓を食い尽くし、死に至らしめる。

ただ、問題は射程だ。

単なる拡散波動砲より敵との距離を詰めなければならぬし、発射

態勢中は一切無防備になるのだ。

単艦では極めて難しい。

味方艦の支援なしでは危険だろう。

単艦では極めて難しい。

味方艦の支援なしでは危険だろう。

いずれは拡散・集束のデュアルモード波動砲なども開発されようが、今は都市帝国を潰すのが先だ。

とはいえ、今浮かんだ事も、我等が敗れば元の黙阿弥であることはわかつている。

冴子は気持ちを出撃準備に切り替えた。

艦長席に着信があった。

発信先は厨房だ。

「忙しいとこ悪いな、艦長」

モニターに映っているのは炊事班チーフの幕ノ内だ。

「いや。構わないが…どうした？」

「今朝『しおや』が入ったおかげで、薩摩黒豚が入ったんだ。晩飯はカツ丼でいいか？」

土星決戦の直前に地球を発った補給艦隊が、白色彗星を避けての迂回航行の末、ようやく木星圏に到着したのだ。

その中の日本籍補給艦『しおや』から積み込んだ生鮮食材に、幕ノ内が言った鹿兒島産黒豚があったのだ。

いくら幕ノ内の腕でも、グルテンのカツじゃ飽きが来るだろうし、落ち込んでる時は元気が出るものを食べるに限る。

「メニューは任せるよ。皆が元気出るのを作ってくれ」
「了解、任せておけ！」

幕ノ内も嬉しそうだ。

第25話『反攻艦隊出撃(前)』(後書き)

次回は急造艦隊出撃!…予定です

第26話『反攻艦隊出撃(後)』(前書き)

残党艦隊発進です。

ちなみに、『ヤマト』乗組員の制服は、決して『ヤマト』専用ではありません。

…『ヤマト』クルーではなかった、沖田十三の仲は何を着て写真に写っていたでしょうか？

第26話『反攻艦隊出撃（後）』

幕ノ内特製『薩摩黒豚カツ丼』が振る舞われた翌日、急ごしらえのレジスタンス・フリートはガニメデ基地で弾薬の補充と最終調整を行っていた。

防衛軍本部の同調者からは、東京時間の明日1000時に降伏使節団と白色彗星側が接触するとの最新情報が入っていたのだ。

『ヤマト』はその直前に、日本近海・太平洋に着水している都市帝国に空海同時の直接攻撃をかけるつもりらしい。

また、日本やアジア、極東ロシア、マリアナ諸島に展開している各国空軍部隊の出撃可能機や、海軍の攻撃潜水艦も呼応すること。『ヤマト』は都市帝国を宇宙空間に押し出すつもりで、宇宙空間に上がってきたら、こちらも都市帝国に攻撃をしかける。

場合によっては我々が都市帝国の攻撃を引き付け、その間に『ヤマト』の波動砲で仕留められれば御の字だ。

旗艦『レナウン』から通信が入った。

出撃は東京時間2100時。

迂回ルートを取って、明日、降伏使節団の出発直前に地球の衛星軌道に到着する予定だ。

「…まだノーサイドの笛が鳴ったわけではない。我々にはまだ鋭い爪と牙が残っている。最後まで諦めることなく戦い抜こう」

テナント艦長の、英国紳士らしい、静かな口調での訓示だ。

…そういえば、彼の何代か前のご先祖様は、英国海軍東洋艦隊で日

本海軍の航空隊と戦ったことがある、と言ってたな…

最終作業は順調に進み、16時前には終了した。出撃まで5時間あり、艦内はひと時の静けさを取り戻していた。上陸はないが、当直以外の乗組員はつかの間の休息に入っている。どのみち、この先は地獄すら生温いことになるのだから、休める時に休むのも宇宙戦士の能力だ。

冴子も一旦艦長室に引き上げ、休息をとった。

戦艦だけあって、艦長室には専用のバスルームがついているが、冴子のシャワーはカラスの行水にしか見えないものだった。均整のとれた肢体 古代守いわく、歩く毒茸の本体 をバスロ―プに包みながら汗が引くのを待っていた冴子は、ふと思いついて、デスクの引き出しから大型のファイルを取り出した。

先日の所属不明の遭難艦から回収した資料の一部。

時間ができた時しか読めないのではなかなか読み進めないが、『時空管理局』とやらはツツコミ甲斐が もとい、興味深いものだった。一緒に回収したブラックボックスらしきユニットはまだ手付かずなので、確証は持てず、また俄かには信じがたいのだが、「魔法」が科学として成立しており、生活にも密着しているという。また、世界観も我々とはかなり異なるようだ。

『時空管理局』とやらのいう世界は、多重に重なる次元に存在するものという。

それらの世界 彼らは次元世界と言う に住む人々も、何と我々地球人と何等変わらないこと等々…。

ただ、ツツコミたい、否、納得し難い事も多々ある。乗組員の遺体を検視したところ、どう見ても10代前半にしか見え

ない者が何人も見受けられ、他の乗組員も全体に若かったのだ。最年長らしき遺体もせいぜい30代前半というところ。

こんな年端もいかない子供たちが何でこんな目に遭わなければならぬ？

我々も18・19で最前線に出るから、一概には言えないが、こちらの常識ではあり得ない年齢だ

さらに、組織のあり方も。

象徴的なのが警察機関と裁判機関の境界線が不明確なこと。失笑するしかなかった。

時空管理局とやらの、特に上層部はネ申なんだろうよ。

でなきゃ、あんな年端もいかない子供たちを最前線に立たせて、惨い死を遂げさせたりはすまい。

…まあ、こちらとあちらの物差しでは根本的に単位が違うのかも知れないが。

それに、今の我々は、正に母屋に燃え移った火を消し、放火犯をぶっ叩かなければならない。他所様の心配をしているどころではないのだ。

汗が引いた冴子がシンプルな下着の上に着けたのは、艦長制服ではなく、戦闘服兼簡易宇宙服だ。

それも、現行の青ベースの服ではなく、2198～99年の正味1年半の間のみ導入されたデザインのものだ。要するに、ヤマト乗組員の戦闘服そのもので、ラインと襟元が黒の艦長用戦闘服である。

若い宇宙戦士や訓練生が強く憧れるこの戦闘服を堂々と着用できるのは、『ヤマト』の乗組員と『ヤマト』就役以前からの数少ない生き残りしかない。

その上に青のジャケットを羽織り、ガミラス戦時から愛用してきた南部重工製コスモガンとホルスターを装着する。

コスモガンのエネルギーパックとメディカルキットを確認し、スペ

アのエネルギーパックも携行する。

この先は厳しい戦闘になる。戦況次第では白兵戦すらあり得るのだ。

冴子は前の『長門』ではこのスタイルで通っていた。

理由は乗組員に一目で艦長代理と認識させるとともに、自らの言動を律するため、敢えて退路を断った。

この姿での迂闊な言動は『長門』乗組員にも、先に逝ってしまった仲間たちにも示しがかたない。

その『長門』も敵旗艦のワープ砲撃で呆気なく沈んでしまったのだが。

…そろそろ時間だ。ブリッジに行こう。

出撃30分前、冴子は艦内一斉放送で『相模』乗組員に呼びかけた。

「…これからの戦闘は、恐らく誰もが未経験の激しいものになる。全員で地球に戻る事は極めて困難になると思う。

しかし、私は絶望などしていない。『相模』と『ヤマト』、僚艦のクルーならば、彗星帝国を倒すことも決して不可能ではないと信じる。皆、各々が胸に描いている未来を信じて戦おう！…以上だ」

ブリッジで、それぞれの持ち場で、応！と掛け声が響き、敬礼が戻ってきた。

定刻、旗艦『レナウン』から「全艦出撃」の発光信号が上がった。各艦で艦長が発進命令を出す。

「『相模』、発進！」

「了解！『相模』、発進！」

冴子の命令に大村が応じ、『相模』の巨体が上昇していく。

ガニメデ基地は発光信号で、他の衛星基地からは激励の電文が各艦に送られている。

地球防衛艦隊の最後の槍が都市帝国に向けて進み始めた。

第26話『反攻艦隊出撃(後)』(後書き)

さて、どう戦闘を表現したのか…。
頭いたひ…。

第27話『諦めざる者たちの戦い(1)』(前書き)

『ヤマト』は都市帝国との戦闘に入ろうとしていますが、『相模』と僚艦も別の敵と相対します。

テレビには出なかつた戦闘が迫っています。

第27話 『諦めざる者たちの戦い(1)』

0630時、戦艦『相模』艦橋

「現在位置、地上から50万？です」

定刻にガニメデ基地を出撃した俄か仕立ての艦隊は、予定どおりの時間で地球に向かっていく。

降伏使節団と白色彗星帝国側の接触まであと3時間を切った。

「艦内全システム異常なし」

「全兵装異常なし」

「よし、旗艦に報告」

ハード面は異常なし。医務室からも今のところ異常の報告はない。ソフト面、特にメンタル面も問題ないようだ。

「おはようございますっ！炊事班です！」

炊事班員がボックスミールの朝食を持ってきた。

警戒態勢なので艦内食堂は閉店。炊事班と医療班の手で臨時救護所に模様替えだ。

事前に和・洋・朝粥を指定できるが、やはり和食の注文が多かった。飲み物はミネラルウォーターだ。茶やコーヒーは利尿作用があるので、戦闘糧食には向かないのだ。

各々、コンソールのテーブルを引き出して朝食を口にする。

皆、口には出さないが、これが最後の朝食になるかも知れないと心しているのだ。

日本、北海道・千歳基地

地下格納庫には戦闘攻撃機が並び、空対地ミサイルの取り付けと最終整備を受けていた。

日の丸をつけた航空自衛隊の機体が多いが、ロシア・アメリカ・韓国空軍の機体も混じっている。

これらの機体は、早朝までに低空で関東・関西以外の航空自衛隊基地に続々と集結してきた。

軍用機の低空飛行はよほどの事がない限り認められていないが、民間人は既に地下都市に強制避難させられていたので、苦情はなかった。

機体の脇やブリーフィングルームでは各国のパイロットが情報交換を行っていた。

また、太平洋・日本近海には、日本・アメリカ・ロシア・中国・韓国海軍の攻撃潜水艦が、ゆっくりと都市帝国に迫っている。

宇宙艦隊と月基地が壊滅しても、地球上の空軍・海軍にはまだ戦力が残っているのだ。

「地球には、『ヤマト』以外にもまだ戦う力があることを、侵略者たちに見せてやる！」

皆、思いは同じだった。

遠くに、灼熱状態の月が見える。

「ちくしょう…!!」

「侵略者どもめ!」

見るも無残な姿になった月に、皆怒りを見せる。

あそこには軍人だけではない。その家族等、数多くの民間人もいたのだ。

そこに追い打ちをかける報せが入った。

「艦長、『あかつき』が敵艦隊を探知しました!」

「ん!」

ひと足遅れてガニメデ基地を発進したパトロール艦『あかつき』が、火星軌道付近で、高速で地球に向かう白色彗星軍艦隊を探知したというのだ。

「戦艦5、駆逐艦20!」

「空母は?」

「『あかつき』からは確認されていません!」

「目標は『ヤマト』か…!」

予想していたとはいえ、内心、思わず舌打ちが出る。

敵の残存艦隊も、ガス帯が消滅したのを重大視したのだろう。

「『レナウン』より入電! 本艦隊八敵残存艦隊を排除スル。予想会敵時刻八1005です!」

仕方がない。相手が変わるが、やることは同じだ。『ヤマト』の邪魔はさせない。

「皆、こつちには地の利がある。奴らを1隻残らず流れ星にしてやるうじゃないか！」

「はいっ！」「」

大村の喝に皆が元気に応じた。

自信過剰は困るが、敵を前に萎縮するのはもっと困る。

ルーキーたちも、最初に比べればいい面構えになりつつあるようだ。

「『レナウン』から、全艦戦闘配備命令です！」

「よし、総員戦闘配備！空間ヘルメットをすぐ出せるようにしておけ！」

「はい！」「」

艦隊同士の殴り合いが予想される。最低限の宇宙空間装備は欠かせない。

「政府使節団が出発しました！」

軍本部の同調者から連絡が入った。

使節団の団長は首相。副団長は藤堂司令長官と聞いている。

藤堂長官が加わっているのは僥倖だ。反乱に等しい行為だが、少なくともあの人はわかってくれるだろう…。

「『ヤマト』から暗号電！『我、間モナク大気圏ニ突入ス』です！」

「都市帝国の様子は？」

「変化ありません！」

どうやら油断してくれているようだ。

やり方が汚い？戦争に綺麗も汚いもない。

第一、宣戦布告もなく手を出してきたのは白色彗星の方だ。

それに、連中は我が同胞を奴隷か弾除けにして使い潰す気なのだ。そんな奴らに払う礼儀なんかない。

先祖たちがしてきた愚行蛮行と同じことだ。勝者こそ正義とはよくぞ言ったものさ。

冴子は内心で自嘲したが、負ければ全てが無に帰るのだ。もう後に退けないことはわかりきっている。

表現の違いこそあれ、皆、考えることは似通っていた。

そんな思いとともに、反攻の艦隊は地球に迫っていった。

第27話『諦めざる者たちの戦い(1)』(後書き)

次は、『ヤマト』も『相模』も、地球上の部隊も戦闘に入ります。

第28話『諦めざる者たちの戦い(2)』(前書き)

冴子

「作者もよく毎日更新するな。ただでさえ少ない脳みそのしわが減っているのに」

大村

「何とかは風邪ひかないと言いますから」

大帝

「…地球人には、風邪をひける愚か者もいるようだな」

作者

「……………」

第28話 『諦めざる者たちの戦い(2)』

鹿島灘・海上保安庁大型巡視船『むさし』

連邦政府の降伏使節団を乗せた『むさし』は、20ノットで都市帝国に近付いていた。

「都市帝国上空に友軍機！…20機以上！、高度35000…北方、南方からも機影多数接近！…これは、宇宙軍『ヤマト』所属機、空自機、アメリカ空軍・海軍・海兵隊機に、ロシア空軍や中国空軍機もいます！」

「海中にも反応多数！『ヤマト』に、海自、アメリカ、ロシア、中国、韓国の攻撃潜水艦です！」

観測員が驚きの声を上げる。

「何だと…？いかん！もう遅いつ…！」

ブリッジに詰めていた首相の表情が変わり、副団長たる防衛軍司令長官、藤堂平九郎を睨みつけた。

「藤堂長官、すぐにやめさせたまえっ！」

しかし、藤堂は表情を変えない。

「首相閣下。これが地球人の意思なのです…」

「…馬鹿なっ！我々が敢えて苦難の道を選択したのを忘れたのかっ！？」

「たとえ一時的に命永らえても、彼らは我々を使い潰すことしか考

えていません！閣下も『ヤマト』が持ち帰ったテレサのメッセージはご覧になったでしょう！？」

藤堂も引かない。首相は絶句した。

「…船長、『むさし』を反転させたまえ」

有事には防衛軍司令長官は各国の沿岸警備隊にも指揮命令権があり、まだ正式に降伏したわけではないため、この命令は有効なのだ。そして、船長をはじめとする『むさし』の乗組員も思いは同じだった。

「進路反転、180度。鹿島港に戻る！」

「反転180度！鹿島港に戻ります！」

船長の指示を操舵士が復唱し、ステアリングを切った。

「藤堂長官！！」

「…やらせてあげて下さい。これが最後の賭けなのです…」

静止衛星軌道付近、『相模』艦橋

「都市帝国に『ヤマト』並びに友軍からの攻撃が始まりました！」

「敵艦隊、1時方向！距離2500！」

いよいよ世紀の大博打が始まった。もう後には引けない。

「オールウェポンズフリー！目標、敵艦隊！落ち着いて狙えよ！」

「はいっ！」

他の艦も同様に主砲を敵艦隊に指向し、ミサイルランチャーのドアを開いた。

敵艦隊の回転速射砲は距離をおけば怖くないが、艦橋砲が脅威なのは、先にヒペリオン艦隊を潰滅させられたことで実証済。正面での戦闘は禁物だ

向こうは逆にこちらの拡散波動砲を警戒しているだろう。

戦艦でなくても、巡洋艦や護衛艦のそれで十分致命的被害を与えられるのだ。

「『レナウン』より、火線を敵の先頭艦に合わせるように、との指示です！座標データ入りました！」

旗艦『レナウン』から敵艦隊先頭艦の照準データが来た。即座に入力され、照準が調整された。

「機械に頼りきるなよ、自分の目でも確認するんだ。訓練を思い出せ！」
「はいっ！」

砲術士が力強く応えた。

揚羽電機製のメインコンピューターはさすがに優秀だが、それに頼りきってはいけない。

元々、宇宙戦士たちの照準能力は『ヤマト』就役以前から高かった。ガミラス艦隊との戦闘でも、先に命中弾を与えたのはたいてい地球側だったのだ。

ただ、当時の光学兵器は出力不足で、接近戦に持ち込まないとガミラス艦の装甲を撃ち抜くことができなかった。

一番強力だった戦艦の艦首砲ですら、中距離以遠では話にならず、最も戦果が多いのは、突撃駆逐艦による近接雷撃戦だった。

その分、犠牲も多かったのだが。

『ヤマト』の帰還後再編された新艦隊でも、光学照準による砲雷撃訓練は続けられた。

参謀本部あたりからは、そんなの無駄だ、と言われもしたが、故・土方総司令は従来どおりの訓練を課した。牙子も『長門』『相模』で同様の訓練を行い、模範として、自ら光学照準だけで砲撃し、命中させて見せた。

「狙点、固定！」

光学照準でも敵の先頭艦、戦艦に照準が合わさっているのを、艦長席でも確認した。

そして、艦長席と副長席、砲術士席で射撃サインが点灯した。

「撃てえつー!!」

地球側全艦からの主砲砲撃が敵艦隊の先頭艦に向かって伸びていった。

鹿島灘

『ヤマト』と友軍による海中と直上からの雷爆撃は絶妙な連携を見せた。

都市帝国頂上部のビル群は光の破片を撒き散らしながら崩壊し、海中からは重くくぐもった爆発音が響き、激しい気泡が沸き上がった。

着弾の度に揺れる都市帝国の奥深く、玉座にあった大ガトラン

チヌ帝国の国家元首にして絶対君主たる大帝・ズオーダー5世は、取り乱すサーベラーら側近の醜態には関心を示さず、冷静にこの同時攻撃を分析していた。

都市帝国直上と真下への同時攻撃とは、なかなか味な事をするものだ。偶然とは思えない。

あの『ヤマト』をはじめ、地球軍にもまだ、出来る者がいるということか。

やはり、あのガミラスを相手に屈しなかっただけのことはあるようだ。

だが、我が帝国はガミラスほど甘くはない。

宇宙唯一にして絶対の支配者たるこの私の慈悲を振り払い、なおも戦いを挑んできた以上、その罪はお前たち地球人全ての命であがなわせてやる。

それにしても、この者たちの狼狽ぶりは見苦し過ぎる。

地球が片付いたら、帝国の体制を根本から改めないと、これからの征服行は実に心許なくなる。

ズオーダーは玉座から立ち上がるや、未だ有効な指示を出せないサーベラーたちには一瞥もくれなかった。

「いつまでうるたえておるかっ！愚か者ども！」

叱咤するや、直接兵士に勅命を下していく。

「防御ガスを放出しろ！対空戦闘開始！都市帝国は直ちに浮上！浮上し次第、海中に向けてミサイル発射！…地球があくまで抵抗するなら、我が帝国の力を見せつけてやるのだっ！」

その姿に、うろたえていた側近も落ち着きを取り戻しつつあった。
地球側にとつての不幸は、ズオーダーが血筋をよりどころにするよ
うな、単なる世襲君主ではないことだった。

第28話 『諦めざる者たちの戦い(2)』 (後書き)

これ、全3話で終わるかなあ…。

第29話『諦めざる者たちの戦い(3)』(前書き)

この章は「前中後」から「1」に変えました。

とても3回では終わらないと今さらながら気付きました。

何たる見通しのなさよ…

第29話『諦めざる者たちの戦い(3)』

鹿島灘

都市帝国は浮上するや、回転装甲帯からミサイルを海上に向けて投射した。

それらは着水直前に点火して海に飛び込むや、攻撃潜水艦に牙を剥いた。

続けざまに轟音が響くとともに、ゆっくりと水柱が噴き上がる。

一度に10隻以上の潜水艦が艦体を折られ、圧壊しながら鹿島灘の底に沈んでいった。

一方、航空攻撃は都市帝国が浮上した後も、成層圏に達するまで断続的に、下部に向けて執拗に続けられていた。

また、『ヤマト』も都市帝国を追って上昇し、宇宙へと向かう。

地球上空・宇宙空間

地球・白色彗星両軍の小艦隊同士の戦闘は、互いに決定打を与えられないまま推移していた。

白色彗星側は地球艦隊との距離を詰めて正面で捕捉しようとするのに対し、地球艦隊は拡散波動砲による殲滅戦を企図して距離をとろうとしたため、千日手状態に陥っていた。

しかも、互いの艦隊機動の結果、戦場は次第に日本上空から離れ、都市帝国と『ヤマト』、それぞれの支援対象・攻撃対象からも遠退く恰好になった。

『相模』艦橋

「駆逐艦『バートン』、メインエンジン停止！、総員退去！…艦長戦死！」

「敵駆逐艦1、撃沈！」

「10時の方向から敵駆逐艦2接近！」

「…蹴散らせ！主砲1番2番、左舷艦首発射管、撃てっ！」

艦橋内に敵情報報告と迎撃命令が飛び交う。

艦体に数発食らっているが、かすり傷程度だ。幸い、戦死者も出ていない。

向こうも戦艦には大した被害が出ていない代わりに、駆逐艦は双方とも喪失艦が出ている。

駆逐艦『むらくも』艦橋

「敵駆逐艦、突撃してきます！」

「主砲、発射管、落ちついて狙え！ガミラスの連中に比べりゃ屁でもねえぞ！」

若林艦長の顔に不敵な笑みが浮かんだ。

実際には結構きついのだが、部下を鼓舞するためにはこの程度の腹芸は当然だ。

実際、今の駆逐艦はかつての突撃駆逐艦より格段に強い。主砲で敵駆逐艦と渡り合えるなんて夢のようだし、加速力や機動力は比べものにならない。

「敵艦発砲！」

「慌てるな。十分引きつけて全弾叩っ込め！」

何発か直撃があり、艦が揺れる。

「照準よし！」

「主砲、発射管5番から8番、撃てっ！」

艦に軽い衝撃音が続けざまに走った。

次の瞬間、凄まじい閃光と爆発が艦橋を襲い、若林たちは薙ぎ倒されて意識を失った。

『相模』艦橋

「『むらくも』被弾！……このままでは敵駆逐艦と衝突します！」

「若林……」

観測員の報告に、冴子は宇宙戦士訓練学校で1期後輩の名を呻くように呟き、コンソールの下で拳を強く握った。

『むらくも』は艦橋から煙を噴き上げている。あれでは助かるまい。若林、来年早々、親父になると喜んでたのに……。

敵の駆逐艦も『むらくも』の攻撃が艦橋に命中したらしい。火煙に包まれ、舵がきかなくなったのか、衝突コースを維持したままだ。

やがて、両艦とも速度を維持したまま、敵駆逐艦の左舷に『むらくも』が衝突し、一瞬おいて大火球と化した。

「……………」

敬礼してやりたいが、今はそんな余裕がない。

『相模』艦橋スタッフは目礼で『むらくも』の乗組員を悼んだが、
肅然とした空気を破るかのように通信長のパクが叫ぶように報告し
た。

「『ヤマト』より入電です！……『コレヨリ都市帝国内部二突入シ、
主動力源ヲ破壊スル』です！」

冴子は黙ったまま頷いた。

『ヤマト』はまたも孤軍奮闘だ。結果としては、まんまと敵艦隊に
乗せられたということか…。

第29話 『諦めざる者たちの戦い』(3) 『(後書き)』

明日は多分、更新はありません…

第30話『諦めざる者たちの戦い(4)』(前書き)

夏風邪にやられました…。

風邪ひける阿呆もいるんですね。

今話、サーベラーさんについて独自解釈(ねつぞうと読む)致しました。アニメ本編と違うという苦情はお受け致しかねますので、悪しからずご了承下さいませ。

第30話『諦めざる者たちの戦い(4)』

衛星軌道上、戦艦『レナウン』艦橋

「『ヤマト』から入電！挺身隊が都市帝国内部に突入しましたっ！」
「そうか…」

司令官兼任のテナント艦長は一瞬瞑目した。

敵の心臓部隊に突入するのだ。彼らの大半ないしほとんどは生還できないただろうことは容易に想像がつく。

また、前途ある若者たちの命が失われるかと思うと、やりきれない思いになるが、今は目の前の敵を都市帝国の支援に行かせないことだ。

「敵艦隊を『ヤマト』に向かわせてはならない。態勢を立て直すのだ。損傷艦は内側に移動させよ…急げ！」

敵艦隊も本国に敵が侵入した知らせは行っていよう。国王陛下と地球市民に誓って、奴らに都市帝国への合流などさせない。

『相模』艦橋

「右舷、第1から第3、及び第10発射管損傷！第5から第8ブロットク閉鎖後注水！第5、第7ガトリングパルスレーザ砲損傷！…波動砲に損傷なし！」

「敵戦艦、漂流を始めました！」

『相模』は右舷前・中央中から煙を噴き上げながら前進を続けてい

た。

既に敵味方とも無傷な艦はなく、破口を生じたり、火煙を引きながら戦闘が続いている。

『相模』も敵戦艦の速射砲で右舷に少なからぬ被害を被ったが、艦橋と右舷艦体に主砲を撃ち込んでやったため、猛火に包まれて漂流し始めた。

「止めを刺してやれ。第3主砲、3斉射!…艦尾発射管、対艦ミサイル撃てっ!」

冴子の指示から数瞬後、漂流していた敵戦艦は大小無数の金属片と人体だったものの残骸と化した。

よし、こちらは敵艦隊が都市帝国へ行く道を塞ぐ形で布陣している。『ヤマト』に手出しはさせないぞ。

しかし、冴子達は程なく信じ難い光景を見ることになった。

白色彗星帝国本営

帝国総参謀長サーベラーは顔色を失っていた。

愚かにも『ヤマト』乗組員が内部に突入してきたのだ。

「おのれ、身の程知らずの野蛮人もめが…」

憤怒の余り、手にしていた指揮杖を手折っていたことにも気づかなかった。

それでも、飛行場で蛮人どもを殲滅できると楽観視していたのだが、彼らは予想以上に精強で、こちらの防衛ラインを突破し続け、主動

力炉のエリアに迫っていた。

地球人を侮り、兵力を逐次投入したのが直接の原因だが、サーベラーは気付くよしもなかった。

彼女は地球人を罵り、無能な兵士たちを罵ることしかできなかった。

彼女はこの大失態の責めから如何に逃れるかしか考えがなかった。

帝国総参謀長たる者、政治・軍事ともに権限と責任がある。

彼女は政治家ではあったが、軍人ではなかった。

にも関わらず、軍事行動にまで干渉し続けた。

ゲーニッツやレーザーから軍高官も、内心で彼女を疎みながらも妥協してきた。口では到底敵わなかったから。

これまではそれで良かった。彼女が政敵を蹴落とし、現大帝の信任厚かった前任者の老いと病気による引退に伴い、総参謀長に就任したのはアンドロメダ銀河での強敵があらかた片付き、あとは掃討戦や弱い国家ばかり相手に行っていた時期だったから。

しかし、ガミラスを倒した『ヤマト』に代表される地球軍の頑強な抵抗に、彼女のメッキが剥がれ始めたのだ。

サーベラーは、彼女が言うところの蛮人の女の手にかかり憤死を遂げるのだが、それは少し後のこと。

ともかく、サーベラーは一つの命令を出した。

衛星軌道上で地球艦隊の残党と戦っていた味方艦隊に、都市帝国にまわりつく『ヤマト』を攻撃せよというものだった。

無論、ゲーニッツやレーザーは猛反対したが、総参謀長の職権で強引に通した。

しかし、彼女は、味方艦隊が都市帝国に行くには、地球の残存艦隊を突破しなければならぬことを失念していた。

第30話『諦めざる者たちの戦い(4)』(後書き)

この章、いつ終わるだろう…。

夏風邪で相当脳細胞がご逝去あそばしましたので、作者自身もわからないのです…。

第31話『諦めざる者たちの戦い(5)』(前書き)

アクセス数4万超え…。

うーむ、我ながら予想外の事態であります。

ともあれ、地球の残党たちの戦いはひと山越します…。

第31話『諦めざる者たちの戦い(5)』

『相模』艦橋

「あいつら、正気か!？」

敵艦隊の突然の変貌に、目の当たりにした地球艦隊クルーは皆こんな感想と戸惑いを持った。

それまではのらりくらりと、相手にじわじわ出血を強いるような戦術をとっていたのが、突然、陣形を三角形に変えつつあるのだ。

明らかに突撃を前提としたものだが、今突撃すれば双方相撃ちになることくらい理解できるだろうに……。

無論、それが素人に近い高官からの命令だと、地球側は知る由もなかった。

しかし、1隻にでも突破されれば、今の『ヤマト』では分が悪い。

「来るぞ!全砲門、発射管スタンバイ!…大村、敵戦艦の向きに気をつける!」

「了解!」

その時、通信席のパクが弾んだ声を上げた。

「味方です!後方から戦艦『テキサス』、巡洋艦『白根』、『来遠』、パトロール艦『あかつき』、駆逐艦『ハンマン』、『フレッチャー』
『アウン・サン』、『みねぐも』!」

恐らく突貫で修理を済ませ、慌ただしく出てきたのだろうが、心強

い援軍には違いない。

しかし、敵にすればこれは大きな脅威だった。突破口を塞がれると受け取るのが当然だろう。

「敵艦隊、突っ込んで来ますっ！」

まだ突撃隊形が完成していないのに、敵艦隊は突破を図ってきた。しかも、こちらはまだ『テキサス』等が合流できていない。

敵艦隊は戦艦を中央に据え、駆逐艦の中で損傷が軽い艦を前衛にして遮二無二突撃をかけてきた。

「敵の先頭艦に火線を集中しろ！…撃てっ！！」

迎撃隊形が完成していなかったのは、地球側も同じだった。たちまち中々近距離での砲雷撃戦になってしまった。

敵戦艦が放った衝撃砲をまともに喰らった『エムデン』が爆沈。

「くっ！…撃てっ！」

『エムデン』を沈めた敵戦艦と『相模』がすれ違いさまに激しく撃ち合う。

『相模』の左舷装甲に無数の破口が穿たれ、小爆発の炎と煙が噴き出し始めたが、敵戦艦も『相模』からの主砲弾が機関部を直撃。艦体後部が大爆発し、続いて艦体前部も爆発して轟沈した。

旗艦『レナウン』は敵駆逐艦3隻と撃ち合った。

最終的には3隻とも沈めたが、回転速射砲で両舷と艦橋増設に無数の穴を開けられた。

重要部分への直撃はなかったが、各部で火災が発生し、全艦火煙に包まれていった。

駆逐艦同士や護衛艦では相撃ちや、敵艦と衝突して爆沈するものが続出した。

『相模』の前に敵駆逐艦が踊り出てきた。

「艦橋砲、撃て！」

艦橋に閃光が入り、震動が走る。

6本のエネルギー弾は狙い変わらず駆逐艦を串刺しにしてこの世から消滅させたが、飛散した大きな残骸が第1主砲を直撃し、バーベツトがずれてしまったため使用不能になった。

他の艦も状況は似たようなもので、地球側の増援隊もふくめて無傷の艦は1隻もなくなっていた。

特に白色彗星軍側は半ば死兵と化して何度も突破を図り、この戦術的には意味をなさない突撃で、白色彗星軍の残存艦隊は全滅した。

地球側も、『テキサス』以下の増援艦は中小破で終わったが、先発部隊は『相模』と駆逐艦『うらなみ』、護衛艦『さくら』、『ボーグ』が辛うじて戦闘可能の中破。他は大破または沈没だったが、沈没艦の中には旗艦『レナウン』もあつた。

『レナウン』は敵駆逐艦の至近距離からの砲撃が艦橋を直撃し、テナント艦長以下のブリッジスタッフは物言わぬ肉片に変わり果てていたのだ。

そのまま直進した『レナウン』は生き残っていた敵戦艦の艦橋衝撃砲で撃沈されたが、その敵戦艦も程なく、怒りに燃える『トンブリ』、『うらなみ』の雷撃で後を追わされた。

『相模』艦橋

『相模』は応急修理を行いながら都市帝国に向けて前進を始めた。
『テキサス』『白根』ら、損傷が軽かった増援隊が先行する。
『相模』艦橋では、大村が冴子に被害報告を行っていた。

「…主なもので使えるのは、第2・第3主砲と艦橋砲、波動砲、後部発射管です」

「…皆の方は？」

大村は少し躊躇ってから口を開いた。

「死亡確認は19名、トリアージブラックは6名。重傷10名です」

「…」

「…わかった…」

言い終わるや、大村は戦死者と容態絶望者の名簿を冴子に渡した。

「……………」

全員の名に目を通してから一瞬瞑目した。

艦を預かる者として、私は彼らの死に責任がある。遺族には謝っても謝り足りる事はないし、罵声も甘んじて受けるが、それも勝ち残り、生きて帰ればこそだ。

そう。我々宇宙戦士は、絶対牙を折ることはない。

…都市帝国が停止したとの報せが入ったのはそのすぐ後であった。

第31話 『諦めざる者たちの戦い(5)』 (後書き)

どうやら、白色彗星編の最終章はこのタイトルで乗り切りそうです。
暑さで蒸し脳なもので、タイトル考えるのが面倒臭くなっています…。

リリカル勢は、白色彗星編ではもう出せる幕ないですね…。

第32話『諦めざる者たちの戦い(6)』(前書き)

某年、某機関本部

嶋津冴子

「…今話は半分番外編です。なお、文章のところどころに皆様を不快にする可能性がある表現が出てきますことを、事前にお断り申し上げます」

島 次郎

「副本部長、誰に向けてお話を？」

『宇宙戦艦ヤマト復活篇DVD、発売開始です』

冴子、島

「誰？」

第32話 『諦めざる者たちの戦い(6)』

「貴様ら地球人が邪魔さえしなければ、私は…！」

「…それ以上喋るなよ。分厚いメイクが剥げるぜ。クソババア」

「な…!?!」

ディスプレイの向こうで呪詛の語句を並べ立てる女に、冴子は言葉の刃を突き付けた。

『ヤマト』支援のため、先刻の死闘の損傷を応急修理しながら都市帝国に向かう途中、唐突に雷撃を受けた。

この雷撃で『トンブリ』が大破し戦闘不能。

『相模』も左舷に1発受けてガトリングパルスレーザーがお釈迦になったが、すぐさま大光量照明弾を打ち上げて下手人を突き止めた。雷撃を仕掛けてきたのは2隻の潜水艦ならぬ潜空艦。

すぐに数隻がかりで1隻を袋叩き。

逃走を図ったもう1隻はひと回り大きく、ひよつとしたら高官でも乗っているかと考え、数隻の生き残っていたパルスレーザーで掃射し、盛大に煙を噴かせた上で降伏を呼びかけたところ、映像通信が返ってきたため繋いだら、見るからに高慢ちきな女が現れ、実際、想像を裏切らなかつた。

『大ガトランチス帝国総参謀長・サーベラー』と名乗った彼女は、冴子の降伏勧告を遮り、地球への呪詛と侮蔑を並べ立て始めたのだ。

ダメだこの女。自分たちなりの正義を語ると思いきや、自分の無念を地球人のせいにするにすり替えているだけだ。おまけに人の話を聞きやしない。

ましてや、こんな女に同胞を侮辱されるいわれはない

相手が敵方の、多分序列一桁台の人物だったから、冴子は一応敬称で降伏を呼びかけたが、とても話ができる相手ではないと判断。大村に目配せして主砲を準備させている間、冴子はサーベラーをからかい、罵倒した。主から見捨てられたんだろ。ざまあ見ろ、等々…。

『ヤマト』から、ガトランチス人は地球人とほとんど変わらないとの情報があったから、サーベラーはどう見ても自分より年長と判断し、ババアと決めつけて揶揄しまくったが、もちろん半分以上は憤怒。

土方さんやテナント艦長、多くの宇宙戦士たちはこんな奴を相手に戦って死んでいったのか、という怒りが込み上げていた。大村が指で丸を作った。

冴子は頷くと、パクに回線切断を指示。

ディスプレイからサーベラーが消えたきっかり5秒後、『相模』の第2主砲をはじめ、何隻もの主砲から光の矢がほとばしった。

大型潜空艦・艦橋

「こんな」

艦に迫る無数の光の矢を、サーベラーは信じられない思いで見ている。

大帝からの絶縁宣告。僅かな取り巻きと共に必死の思いでこの大型潜空艦に乗り込んで脱出に成功したが、煙を噴きながら航行する地球艦を目にした途端、自分をこんな目に遭わせた地球人への憎しみが再燃。艦長の反対を押し切って攻撃させた。しかし、小賢しい地球人はすぐ反撃してきた。

随伴していた1隻はすぐ撃沈され、我が艦も無数の小口径砲で撃たれて火災が起きた。

「早く何とかしなさい！」

艦長を罵倒しきらないうちに、敵の戦艦から降伏せよとの通信。

生意気な。敗者ごときが勝者に降伏勧告とは無礼千万。

どちらが勝者が再認識させてやろうと映像通信を敵戦艦に繋いだら出てきたのは、艦長と名乗る、見るからに生意気そうな若い女。

慇懃に降伏を勧めてきたあの女に、高貴なる者への礼儀を教えてやっていたら、突然態度を変え、無礼千万にも私を侮辱してきた。

生まれてこの方、一度も他人から、かの大帝からも投げつけられなかった、私を侮辱する言葉の数々。

怒りの余り絶句してしまっただが、気を取り直して反撃しようとする女を睨み返そうとしたら、あの女は、先程までとは明らかに違う、鋭い目で私を睨み据えていた。

今まで見た事がないその眼光に、私は戦慄した。

先刻、大帝から向けられたものとも異なる鋭く冷たい、何かの意思を込めた光。

あの目はどこかで。

唐突に映像が切れた。

思い出した。デスラーが私を人質にした時、私に向けた目に込められたのと似た光。

殺される！

「は、反転しなさい！この場を離脱するのです」
「ダメです！エンジン出力が上がりません！」
「砲撃、来ますっ！！」

観測員の絶叫が響いた。

「こんな所で、大帝　！」

無数のビームに身体と意識を焼き尽くされる直前、サーベラーが発したのはそれだけだった。

第32話 『諦めざる者たちの戦い』(6) 『(後書き)』

あと1回……。

ダメだ、まだこの章終わらない……。

第33話 『諦めざる者たちの戦い(7)』 (前書き)

白色彗星帝国との戦闘も、いよいよ最終局面に近づきました。

アクセス50000突破！

日頃からご愛読いただき、ありがとうございます！

第33話 『諦めざる者たちの戦い（7）』

「くそつ、奴はマトリヨールシカか!？」

スクリーンの向こうに現れたそれは、想像を遥かに超える、最凶最悪なマトリヨールシカだった。

都市帝国を止めるために払った犠牲は多大なものだった。

こちらの艦艇と人命。そして『ヤマト』もコスモタイガー隊と空間騎兵隊の全員戦死を含め、半数近い乗組員が戦死またはMIA。

『ヤマト』と『テキサス』ら応援隊の砲雷撃で都市帝国は崩壊した、と思われたが、爆発と崩壊の光の中から現れたのは、漆黒の要塞を思わせる、超がつく巨大な戦艦。

全長は軽く100?超え。排水量は推定するのモアホらしい。

「……………」

「……………」

『相模』艦橋は皆言葉を失ったが、他の艦や地球全体もそうだろう。皆、脳裏にぬか喜びと絶望が渦巻いているはずだ。

でも、まだ諦めるわけにはいかない。冴子は己の心に喝を入れ、闘志の炎に風を送る。

使える火器は？ 戦闘可能な乗組員数は？ 艦の状態は？

あんな規格外の化け物相手では波動砲しか通じないだろうが、拡散波動砲ではあの化け物の心臓部まで貫徹できるか心許ない。

『ヤマト』の波動砲なら貫徹できるだろうが、今まで受けたダメージが大き過ぎる。

どうすればいい？ 何か手はないか？
しかし、冴子の思考は観測員に遮られた。

「敵巨大戦艦、砲塔を回転させています！…こちらにも向けられていますっ！！」

「っ！？？」

冴子の背を冷たい刃が走った。久しぶりに感じる、死の予感。

「艦首下げ60！全速前進！急げっ！」

『相模』が艦首を下に向け、続いて前進を始めた時、頭上に凄まじいばかりの閃光と衝撃が走った。

巨大戦艦からの砲撃は熾烈を極めた。

咄嗟に回避行動をとった『相模』と駆逐艦『ゆうぐも』、護衛艦『ボীগ』、そして『ヤマト』は更なる深手を負いながらも辛うじて撃沈を免れたが、回避が遅れた『テキサス』らは、ものの一撃で爆沈した。

また、『白根』は第1撃をかわしたが、第2撃で艦橋をもぎ取られて制御不能となり、漂流し始めた。

そして。

「『白根』接近！衝突コースですっ！」

1時半の方向から『白根』が急速に接近してきた。それも艦橋をもぎ取られて。

ダメだ、速度が速過ぎる。かわせないかも知れない。だが…！

「面舵15!」

「了解!」

もはや復唱なんてしてられない。大村はすぐ舵を右に切った。

『相模』は艦首を右に振り始めたが、振り切れないうちに、ダツチロール状態の『白根』が右舷に衝突した……。

凄まじい衝撃と金属が激しくたわみ、破壊される音が響いた。

「うわあっ!」

「きゃあっ!」

「ぐうっ!」

艦内各所で多くの乗組員が転倒したり吹き飛ばされた。

それは艦橋も同じで、シートベルトをしていたため、席に踏み止まることができたが、コンソールに叩きつけられる者が続出した。

「く…っ!」

顔面に走った激痛と衝撃で一瞬意識が遠退いた冴子だったが、何とか踏み止まる。

「痛う…!」

右眼の下、頬のあたりにざっくり裂けたような痛みが走った。

手をやると、右頬が深々と切り裂かれ、鮮血が噴き出していた。

衝突の衝撃で剥がれた金属片が艦橋内を飛び回り、冴子の顔面を襲ったようだ。

落ち着いて自身の現状を把握する。

傷は致命傷の心配はない。内臓器官にも異常はないようだ。

当たった所が頬だったのは幸運だった。これが頭部や眼、首筋だったら大事になっていただろうから。

「艦長！」

「うるたえるな！！」

艦長が負傷したことに驚き、駆け寄ろうとするブリッジクルーを一喝する。

「顔を切っただけだ！指揮には何の支障もない！…被害把握を急げ！」

座り直すとメデイカルキットを出し、傷口を消毒してパッドを貼る。艦橋スタッフも皆負傷したが、幸い軽傷どまりで済んだ。

しかし、他の部署ではそううまくはいかなかった。

「……………」

「……………」

各部からの被害報告が入るにつれ、艦橋の空気は重くなっていく。射撃可能な主砲は第3砲塔だけで、それも中央の1門だけ。艦橋砲、ミサイルランチャー、パルスレーザー砲もほとんどが逝去遊ばした。

まだ使えそうなのは拡散波動砲だけ。

そして人的被害は、戦死者とトリアージブラックが全体の3割を越え、重傷者を含めると半数近くが戦闘継続不能になっていた。

一方、無傷・軽傷者は総出で消火と応急修理作業に当たっていた。

「巨大戦艦、地球に向かいます！」

何とか息を吹き返したレーダーで確認したのは、あの凶悪マトリョーシカが地球に艦首を向けたこと。
そして、艦低部から迫ってきた巨大砲が火を吹いた。これは肉眼で直接確認できたほどだ。
その着弾先は、シベリア……。

第34話『諦めざる者たちの戦い(8)』(前書き)

VS巨大戦艦です。

あと1話続きます。多分。

第34話『諦めざる者たちの戦い(8)』

「その服じゃダメだ。船外作業服をすぐ着ろ！」

「重傷者は脱出カプセルに収容！」

何本もの白煙の尾を引き、ボロボロになった戦艦『相模』の艦内は慌ただしさを取り戻していた。

10分前

「…あの化け物との位置関係と距離は？」

頬に貼り付けたメデイカルパッドに、早くも血が滲み始めた戦艦『相模』艦長・嶋津冴子は、観測員に彼我の相対位置を質した。

「本艦から見て、水平位置は11時46分、上下位置は上15度、距離820キロ。敵戦艦の艦尾、メインノズル中央部基点の数値です」

冴子はしばし瞑目してから、艦長席から立ち上がった。

「…これより敵巨大戦艦に波動砲攻撃を行う」

その一言にブリッジクルーは顔を上げた。

「幸い、メインエンジンと拡散波動砲は無事だ。波動エネルギーの拡散開始点を敵戦艦の内部に設定し、奴を内側から破壊する」

その意味を理解したクルーの表情に血色が戻ってきた。

そつだ、まだ波動砲は生きている。まだ望みは残っている。

「しかし艦長、この距離では、命中した時に敵艦の爆発に巻き込まれる可能性が低くありません」

観測員の疑問に、冴子はすぐ応える。

「そのとおりだ…しかし、解決策は『ヤマト』のルーキーが提案し、実証済みだろうか？」

皆があつ、という表情をした。

テレザート星に向かう途中、空洞惑星に閉じ込められた『ヤマト』がデスラー砲の直撃を回避するために使った大技は、一新人技術班員の単なる思い付きの独り言から採用された、まさに灯台もと暗しのもの。

波動砲発射の際に発生する凄まじい反動エネルギーは、通常、連動する重力アンカーで吸収・相殺されるが、重力アンカーを切れば、反動エネルギーにより艦は後退する。

これを使えば、目標崩壊の爆発からも逃れられる。

「ただし、あまり派手に準備すれば敵に発覚する恐れもある…。そこで、艦内動力は波動砲の急速チャージと最低限の生命維持、姿勢制御のみに限定する。各員、現有装備を確認しろ。戦闘服の損傷が大きい者は船外作業服を着用！…まだ希望はある！奴のでっかいケツに、特大の逸物をぶち込んでやろうじゃないか！」

おう！という声がブリッジに響いた。

重傷者は緊急脱出用カプセルに移し、軽傷者でも戦闘服の損傷

が大きい者は船外作業服を着用させた。

艦内は医療エリアを除いて非常灯以外の照明が落とされ、時たま行われる姿勢制御の噴射音がごく短時間響くだけだ。

「発射予定ポイントまであと8分…」

「イギリス本島、ウエールズ地域に着弾！…続いて北アイルランドにも着弾っ！」

「外道が！好き放題撃ちまくりやがって！」

観測員と通信長の声、クルーの怒りの声が響く。

艦長席では、コンソールから拡散波動砲の発射トリガーとターゲットスコープが迫り出ていた。

冴子はコンピュータが弾き出した数値を確認し調整している。

本来の射手である砲術士の怪我が予想以上に深刻だったため、艦長自らが拡散波動砲を撃つことになったわけだ。

集束波動砲の『ヤマト』ほどの照準精度は必要ないが、逆に拡散開始ポイントの調整はシビアだ。何しろ、拡散波動砲の運用マニュアルにこんな使い方は記載されていないのだ。

調整作業はそれだけではない。拡散の範囲や地上に与える被害も考えなければならぬ。

民間人の、地下への避難はほぼ完了していたが、万一、拡散した波動エネルギーが地上に着弾すれば、広範囲で火災や爆発が起きるからだ。

地上の被害拡大に無力感と憤怒を覚えつつ、冴子の作業は続いていた。その時だった。

「『ヤマト』が敵巨大戦艦に向けて前進を始めましたっ！」

「何!?!」

冴子だけでなく、皆が我が耳を疑った。

「突っ込む気か!？」

「あの…馬鹿野郎がつ!」

冴子は思わず口に出して毒づいていた。乗っているのはあいつに決まっている。そして雪の奴も。早まりやがって!

「か、艦長…?」

「…このまま発射シークエンスを続ける。発射位置までの残り時間は?」

「…あと4分10秒です…」

今『ヤマト』に通信を繋げばこちらのことと敵に露見する。情に流されて大義を、地球と同胞を守るといふ地球防衛軍軍人の任務を捨てるわけにはいかない。

ブリッジクルーが皆一様に痛ましい表情になった。

「あと1分です!」

「艦長、『ヤマト』が停止しましたっ!」

「…エネルギー充填スタンバイ」

どういうことだ? 機関トラブルか?

しかし、こちらのやることは変わらない。

冴子はトリガーに指をかけ、ターゲットスコープを睨み続ける。

その時、『相模』の右舷側前方に黄色がかった光が出現した。

第34話『諦めざる者たちの戦い(8)』(後書き)

人の運命って、何が起きるかわかりませんねえ……。 (物語とは何
の関係もないんですが、個人的にちよいとありまして)

第35話『諦めざる者たちの戦い（終）』（前書き）

…無性に書きたい気分になり、えいとばかりに書きました。
対白色彗星戦もこれでひと区切りです。

まだ後始末が残っていますけどね。

相変わらず、「第2〜3次戦時標準船」並みの出来栄ですが、こ
笑覧下さい。

第35話 『諦めざる者たちの戦い（終）』

光の中に現れた人影に、『相模』のブリッジクルーは皆言葉を失った。

あの人影は『ヤマト』からの最重要情報にあつた人物、『テレサ』本人。

「そんな。テレサは白色彗星を止めようとして亡くなったはずじゃ

」

次席操舵士の町田が信じられない思いで呟く。

それにしても、今になって、何故ここに現れたのか？
まさか…。

冴子は心がざわつくのを感じた。

彼女の祈りの力は、かつてテレザートを壊滅させ、白色彗星の軌道をも逸らすほどのものだ。

その彼女が現れた理由が、まさかそういう事なのか？

……えてして、そういう予感は的中するものだ。

光の中でテレサは『相模』の方を見て微笑を浮かべると、『相模』を制するかのように左の掌をかざし、光に包まれたまま敵巨大戦艦に向かって行った。

「敵巨大戦艦、攻撃を中止して急反転します！」

観測員が叫ぶように報告する。

スクリーンに映る巨大戦艦は、誰が見ても慌てふためいて見えた。待てよ、あれだけの艦が爆発したら、こちらも無事では済むまい。

「波動砲発射中止！大村、面舵110！…総員対シヨック、対閃光防御！」

「了解！面舵110！離脱します！」

「総員、対シヨック、対閃光防御！」

パク通信長が艦内に命令を伝達する。

「全速離脱！」

「全速離脱！よーそろー！」

艦内の照明が回復する。

ブリッジクルーはシートベルトを締め直し、閃光防御ゴーグルを着用した。

『相模』はフル加速で巨大戦艦とテレサから離れていく。

そして、凄まじい閃光が空域いっぱいに広がった。しかし、来るはずの衝撃波がいつまで経っても来ない。

「…敵巨大戦艦、反応消失しました」

観測員が目標の消失を報告する。

「ワイプイン反応はあるか！？」

「ありません！」

「ならば、映像を再生するんだ」

観測員が記録した一連の映像をスロー再生した。映像の中で、あの化け物が溶けるように崩壊していた。ワープで逃げる暇もなかったらしい。

「……………」
「……………」
「……………」

誰も言葉が出なかった。

「…撃沈と判断していいな…」
「そう…ですね…」

冴子たちブリッジクルーは、立ち上がると、テレサが消えた空間に向かって感謝を込めた黙祷を捧げた。

『ヤマト』を呼びつけて古代弟を軽く叱り付けてから、防衛軍本部に通信を繋ぐ。本部も被害を受けたらしく、少し時間がかかったが、藤堂長官は無事だった。

冴子はテレサの特攻による敵巨大戦艦の沈没と、艦隊の被害状況を報告した。

『ヤマト』は大破、乗組員の8割が戦死・MIA。
戦死者の中には徳川機関長や空洞惑星脱出の功労者、新米俵太あいらめの名もあった。

『相模』も波動砲以外は使用不能。乗組員の半数近くが戦死かMIA。
A。

『ゆうぐも』 『ボーグ』 も、航行は可能だが大同小異。

その一方で吉報もあった。『ヤマト』航海長・島大介の生還。デスラー艦での白兵戦で行方不明になっていたが、あのテレサによって保護され、テレサが直接輸血した上で古代たちに返したのだと言っ。

まだ意識は戻っていないが、危険な状態は乗り越えたらしい。

藤堂はひとしきり報告を受けた後、

「…皆、ご苦労だった。詳しい報告は帰還してから受ける。それだけの被害で大気圏再突入は無理だろう。病院船と工作艦をそちらに向かわせた。応急修理を受けて帰還したまえ」

「ありがとうございます」

『ゆうぐも』 『ボーグ』 と、その前の戦闘で大破した『トンブリ』等、10隻にも満たなかったが の集結指示を出した。

戦艦艦長とはいえ、年少の自分では指揮系統的にどうよ？というためらいもあったが、状況は今だ混乱しているのに加え、最先任である『トンブリ』のタナリット艦長が重傷を負っていたため、残存艦中最大クラスの『相模』艦長である自分が緊急指揮をとるのもやむなしと判断した。

ひと区切りついた冴子はブリッジを大村に任せ、臨時救護所に変わった食堂と医務室を回って、負傷者を労った。

重傷者は間もなく到着する病院船に移されて一足先に地球に戻る予定だ。

負傷者を労った後、冴子は遺体安置室に入り、しばらく出て来なかった。

第35話『諦めざる者たちの戦い（終）』（後書き）

「2」のエンディングから「新たななる」までの1ヶ月間には、色んなすったもんだがあつたはずですよ。

こついつ幕間話は書いた者勝ちなんですよね（笑）

第36話『凱旋に非ず』（前書き）

しばらく「2」と「新た」のインターミッションの話が続きます。

第36話 『凱旋に非ず』

工作艦に横付けして応急修理を受けた『相模』『ヤマト』が三浦半島の新横須賀基地に帰還したのは、敵巨大戦艦の沈没から27時間後だった。

『ヤマト』に至っては乗組員の8割を失っており、臨時の回航要員が乗り込んでの帰還だった。

タグボートに曳かれて地下ドックにむかう『ヤマト』『相模』を迎えようと、陸地には多くの市民が詰めかけていた。

声こそ聞こえないが、スクリーンに映る市民は皆明るい表情をしていた。

あの笑顔を守ることができただけでも、生還した価値はある。

一連の戦闘に参加し、生還した日本籍の艦は『ヤマト』『相模』『ゆうぐも』の3隻に過ぎなかった。後から何隻かは戻ってくるだろうが、それを含めても10隻には届かない。

市民は歓呼で迎えてくれているが、これは凱旋ではない。敗者の列だ。

たった2隻、それも航行するのがやっとの満身創痍。最後はテレサの命懸けの特攻で終わった。

これを負け戦と言わずして何と言うのか。

『ヤマト』が命令違反を犯してまでテレザートに赴き、白色彗星帝国の情報を仕入れてもなお、これだけの被害だ。

もし何もしないでいたら、地球人類は絶滅か奴隷化されていたはずだ。

我々は、何が誤っていたのかを真剣に省みて改善しないと、次はもうないかも知れない。

埠頭に着いてから最初に下艦したのは宇宙葬用棺に納められた戦死者の遺体。冴子と大村は身じろぎせず、敬礼で見送った。

ついで一般乗組員が下艦し、冴子ら幹部乗組員は艦を基地側に引き渡してからなので、一番最後だ。

フェンスの先に家族や恋人、友人を見つけて再会を喜ぶ者がいる。

地球防衛艦隊は一連の戦闘で9割近くの戦力を失った。遺体すら還らない者が大部分なのだから喜びもひとしおだろう。

一方で遺体の確認と引き取りに来た家族もいる。

冴子は、艦長への面会を求めてきた遺族と面会した。

「…息子連れ帰っていただき、本当にありがとうございました…」

ガミラス戦で夫を亡くし、今回の戦いでひとり息子にも先立たれた母親は、気丈にもそう言った。

息子を戦死させた事を謝罪した冴子は、詰め寄られるどころか感謝の言葉を返されたことに、胸が裂ける思いがした。

面罵されても当然なのに。

棺に寄り添う母親の後ろ姿に、冴子はずっと頭を下げていることしかできなかつた。

様々な思いが込み上げてくるが、それを露わにすることは出来ない。帰還初日、冴子は3組の遺族の求めに応じて面会した。

誰も冴子を面罵するどころか、遺体を連れ帰ってくれたことに感謝の言葉を述べてきた。

自分と同じ年頃の母親に抱かれ、まだ物心つかない幼子に笑顔を見られたり、両親から手を取られ、精進して、もっと多くの笑顔を守って欲しいと懇願されたりもした。

その都度、冴子の心は串刺しだが、受容するしかない。

1 艦を預かるとはそういうことなのだ。

冴子はずっと遺族の後ろ姿に頭を下げ続けた。

最後の遺族を見送ってから、冴子は自宅を守っている、被保護者である高町雪菜に帰還報告のメールを送り、自分の留守中、奥方ともども雪菜の後見人である、軍務局第2課長の中島龍平にも、帰還報告と感謝の電話を入れた。

「…お疲れさん。今日はまっすぐウチに来い。カミさんがな、米沢牛を用意してるとさ」

「…すみません。では雪菜共々、遠慮なくたかりに行きますとお伝え下さい（笑）」

ようやく冴子に笑顔が戻った。

第36話『凱旋に非ず』（後書き）

いつまで続くかインターミッション…

第37話『地上にて(1)』(前書き)

作者

「大変申し訳ございません。ご感想受付を暫くお休みさせていただきます」

冴子

「典型的な自爆だな」

しばらくは陸おかでの話になります

第37話『地上にて(1)』

ピリリリ…

窓から朝の陽光が差し込んでいる。

アラームが鳴り始めてから約30秒、ようやくこの家の主がのそのそと起き出した……と思いきや、ドサツとばかりに床に落ちた。

「……………ん……………」

ようやく起き出した、三十路間近の嶋津冴子である。

「艦長、おはようございます」

「…あ…うおはよ……………」

ドアが開き、声をかけたのは戦艦『相模』のクルー…ではなく、冴子が保護者を務めている右サイドポニーの少女、高町雪菜だ。

「朝ごはん、お粥でいいですか？」

「…それで頼む……………」

手を振って応え、冴子はよろよろと浴室に向かった。

まぶたはまだ半開き、髪もボサボサ。

そのだらしなさは、艦に乗っている時とは真逆の風景だ。

シャワーを浴び、汗が引くのを待って食卓につく。

「…いただきます」

合掌し、農業従事者と動植物たちに感謝してからおもむろに食べ始めた。

嶋津家にとっては、およそ2ヶ月ぶりの家長がいる朝食風景だ。

朝粥に昆布佃煮を加え、ふうふう冷ましながらかき込んでいくうちに、少しずつ身体が目覚めていくのがわかる。

粥を口にしながら、今日の予定を確認し合った。

とは言え、雪菜は中学生だから、部活も含めて帰宅は夕方。

冴子は、軍本部への報告や『相模』修復作業の確認等があるから、22時前に帰る保証はない。

「生き残ったは生き残ったで、大変なんですな」

雪菜にとっても、白色彗星帝国との戦闘で軍人だった家族親戚を失った友人が少なからずおり、他人事ではないようだ。

それ以前に、雪菜自身もガミラス戦災孤児なのだ。

2193年に海鳴市に着弾した遊星爆弾で、海鳴市は約60万人の市民もろとも消滅。

死者、行方不明者の中には冴子の養父母と、喫茶店『翠屋』の6〜8代目にあたる高町家3世代一同もいた。

高町家は、当時実家に帰省していた7代目店主の妻と雪菜、それに地球防衛軍の宇宙戦士になっていた長男は難を逃れたが、その後の艱難辛苦で母親は病に倒れ、2199年末に他界。

長男も2198年末、海王星軌道付近の戦闘で戦死していた。

行き場を失った雪菜に着目し、冴子に彼女の保護者になることを勧めたのが、冴子たちが訓練生当時、宇宙戦士訓練学校で副事務長をしていた中島龍平だった。

「お前さんを身軽にしておいたら、それこそ何やらかすかわかったものじゃないからな…それにあの子も、知っている奴の方がいいだろう」

とのたまいながら話を進め、2200年初めに、当時小学5年生の高町雪菜は嶋津冴子の被保護者になった。それから1年と10ヶ月が経過した。

「また仕切り直し。問題山積といったところだ。いずれ発表があるだろうが、宇宙艦隊は潰滅。8割以上の宇宙戦士が還らなかったのは事実さ。私も、よくこの程度で済んだのか不思議だよ」

微苦笑しながら、絆創膏が貼られた右頬を指差した。

幸い化膿の心配はなかったが、皮下組織まで傷ついていたため、痕をなくすには何度か通院しなければならぬのだが、冴子は軍務多忙を理由に必要な最低限の処置だけで済ませたため、頬傷は良くも悪くも生涯にわたって嶋津冴子という人物のトレードマークになった。後年、顔の傷痕を消さない理由を問われた時、

「消す必要があるのかね？」

と聞き返し、相手に二の句を継がせなかった事が何度かあった。

雪菜より少し先に家を後にし、冴子は軍本部に出頭した。

本部には既に古代進も来ている。

「嶋津艦長、古代艦長代理、どうぞ」

長官付秘書に呼ばれ、古代と共に長官室に入り、一連の戦闘の報告を行った。

白色彗星帝国との戦闘で、地球防衛軍は宇宙戦力の8割、艦艇だけなら9割近くを失った。

宇宙戦士たちも8割近くが戦没かMIAだ。ガミラス戦ほどではないが、短期決戦でもこれだけの犠牲が出たことは、軍関係者に大きな衝撃を与えた。

「『ヤマト』も『相模』もゆっくり休ませてやりたいのだが、再建が急務なのでな。修理が完了し次第、また出てもらうことになりそうなのだ」

2人は無言で頷いた。

「実は、もう一つ話があるのだ。特に古代、君にだ」

藤堂は話題を変え、いくらか声を低くした。

「無許可発進のことですね？」

藤堂は頷く。

「…あれは間違いなく私が主導しました。査問委員会でも軍法会議でも逃げるつもりはありません。ですから、早急な開催と厳正な処分をお願い致します」

「…それについては、『ヤマト』追跡時に虚偽の報告に関係した私にも責任があります。土方司令亡き今、私も相応の責任を負う義務があります」

藤堂はしばし沈黙してから、

「…わかった。早急に会議を持とう」

と回答した。

本部への用件はひとまず終わった。

第37話『地上にて』(1) (後書き)

いかん、自己嫌悪じゃあ…

第38話 『地上にて』(2) 『(前書き)』

今回は修復作業のお話です。
松本キャラが出てきます。

第38話『地上にて(2)』

地球防衛軍・新横須賀工廠

『ヤマト』『相模』は並んで修復作業を受けていた。作業員や車両がひっきりなしに行き交う。

見た限りでは、やはり『相模』の方が進捗率がいいようだ。

『相模』等、主力戦艦の場合、当然ながら生産性を考慮したブロック/モジュール構造を採用しており、損傷がひどい個所はそっくり交換した方が工数や費用上有利なケースもある。

また、敵巨大戦艦の無差別砲撃で建造中の艦船が少なからず破壊されており、それらの艦装予定品や部材等が余剰になってしまったため、取り急ぎ修復中の艦に流用されることになり、『相模』もその例外ではない。

中・小型艦では、破壊を免れた前半部と後半部を再接合した「ニコイチ艦」も完成しつつあった。

また、土星圏に無数に存在する敵味方の残骸も回収されて順次再利用する他、損傷が軽いまま遺棄された旧白色彗星軍艦は接收して、詳しく調査が行われるという。

事実、既に戦艦、駆逐艦、中型空母らに加え、デスラー艦も回収されていた。

「じゃ、俺は『ヤマト』に…」

「ああ」

ここで同行してきた古代と分かれ、それぞれの乗艦に向かう。

『相模』では、既に損傷した箇所はあらかじめ撤去され、修理用の部材やモジュール、ユニットの搬入が始まっていた。

南部重工から出向しているという工事責任者と挨拶を交わし、進捗状況を確認する。

「着手してそれ程日が経っていないので何とも言えませんが、今のところは順調です。半月とは言いませんが、ひと月はかからないでしょうね…。」

何よりメインエンジンと波動砲のダメージが僅かだったのが幸いしています」

「そうでしたか。それはありがたい」

思わず顔が綻ぶ。白色彗星は退けたが、残党の蠢動も予想されるため、早急な復帰が待たれるのは、何も『ヤマト』『相模』だけでは無いのだ。

工事責任者に礼を言って、隣の『ヤマト』に向かう。

こちらはやつと傷ついた装甲が取り外されたところだ。

スペシャルメイドだけに色々手間もかかるようだ。特にこちらは機関室にまで被害が及んでおり、突貫工事で進めているという。

と、古代と話していた小柄な男が冴子に気づき、手を振った。

防衛軍艦政本部所属の技師で、冴子や真田、古代守らの同期である

大山歳郎 通称トチロー だ。

「お前が『ヤマト』の担当かよ？」

「…何だ、その不安そうなツラは？」

「いや、どさくさに紛れて、波動砲照準装置あたりにアレ ドイツ空軍制式照準機・Revi-C12D を着けやしないかと疑

ってるんだよ」

短身ガニ股という体格からは想像つかないが、この男の先祖には第2次世界大戦時のドイツ空軍エースパイロットがおり、『アルカデア』という愛機の照準機を代々継承しているのだ。

冴子も一度見たことがある。写真に映っていた3代目トチローと、伴侶らしいドイツ人女性に、祖父とおぼしき車椅子の隻眼老爺。確か、ファントム・F・ハーロック2世と言ったか…。

代々優れた技術者を輩出した家系で、当代トチローも、かの真田に負けず劣らずの技術者なのだが、周囲の評価は「変人」だった。

「…ばれた？」

古代と冴子にジト目で睨まれて、トチローは苦笑し、形勢不利を挽回しようと、強引に話題を振った。

「そうそう！お前が遭遇した、時空何とかの難破船、ありやなかなか面白い船だな！」

「時空管理局な…。で、どんな事がわかってるんだ？」

「時空管理局？何です？それ」

古代も話に加わってきた。

そういえば、『ヤマト』クルーはこの事をまだ知らなかった。

冴子はいっつまんで遭難艦との遭遇から艦内調査、回収した資料からわかった時空管理局という組織と、その世界で用いられているという「魔法」について説明した。

次いで、トチローが、曳航された遭難艦の調査について話した。

白色彗星帝国との決戦直前だったこともあり、本格的な調査はこれ

かららしいが、トチローはかなり張り切っているようだ。船に関しては。

「雪菜ちゃんや、それ以下の年頃にしか見えない子供が多く死んだのは不愉快だったな」

「…ああ、正直、信頼に値する組織なのか、眉唾ものだな」

年長者2人はため息をついた。

重くなった空気を察した古代は2人に質問する。

「…それで、その船の遭難原因は、事故だったんですか？」

「いや、かなり被弾していたな」

「艦内の放射能を解析したんだが、ガミラスでも白色彗星でもなかった」

「…新たな危険勢力が存在するということですか…」

いずれにせよ、1日でも早く艦を復旧させなくては…。

第38話『地上にて(2)』(後書き)

次回は査問委員会か、なのはサイドの番外話を予定しております。

番外話1 『ふたつの翼』 (前書き)

一部改訂しました。

番外話1 『ふたつの翼』

…あたりは真つ暗。
頭上は満天の星空。微かに漂う潮風。私が飛んでいたのは海の上だった。

「レイジングハート、ここはどこなのかな？」
「私にもすぐには解りかねます…マスター！」

我が愛機、レイジングハートが突然緊張した声を上げ、私に注意を促す。

「どうしたの？何か見つけた？」
「右前方に夥しい光の筋が！」

声に導かれて前を向くと、海上から無数の光の筋が空に向かって打ち上げられていた。

近づくにつれ、その光の正体がわかる。

「こ、これって…」

質量兵器特有の、連続した発射音に合わせて撃ち出されていた無数の機関銃、いえ、対空機関砲の弾丸と、時折発射される対空砲が炸裂する光。

「マスター、英語のアナログ音声通信が飛び交っています…ジャッブとか、ジルという単語も」
「ジャッブ!？」

それが、英語圏の人が日本人に対する蔑称として用いる単語であることは私にも理解できた。

一瞬間に血が昇りかけたが、深呼吸して抑える。落ち着け、なのは…。

でも、この対空砲火は何なんだろう…？

その時、一際強い閃光と爆発音が海面で輝いた。

「レイジングハート、今の光は？」

「…対空砲火で航空機が撃墜されたようです。マスター」

「撃墜？…一体、ここはどこなの？何が起きているの！？」

ややあつて、レイジングハートから返ってきた答は、私の耳を疑うものだった。

「…真に信じ難い事ですが、ここは、マスターの世界。日本の沖縄。そして、今は太平洋戦争末期。対空砲火を放っているのはアメリカ海軍の艦船である可能性が高いです」

「…何を言ってるの、レイジングハート？」

私は、レイジングハートが質の悪いジョークを飛ばしているのかとさえ思ってしまったが、愛機は至つてまともな口調のままだった。

「…現実を受け入れるべきです、マスター。」

あの夥しい対空砲火が何よりの証拠です。…21世紀の地球ならば対空ミサイルがありますし、より高精度の対空迎撃システムがあるでしょう？」

「…それはそうだけど、だとすれば、この対空砲火の目標は…？まさか…」

込み上げてくる冷たい感覚を抑えて愛機に尋ねた。

「対空砲火の目標は旧日本軍…海軍の航空機の可能性が高いです」
「海軍の飛行機！？…まさか、特攻隊なの！？」

背中を氷が滑り落ちるような感じがした。

「その可能性もありますが、むしろ通常攻撃の可能性の方が高いでしょう」

「どうして？」

「夜間の体当たり攻撃は技量が低いパイロットには無理です。太平洋戦争末期、沖縄がアメリカ軍に占領された後も、敗戦する直前まで、地上のアメリカ軍や艦船に対して、少数機によるゲリラ的攻撃が行われたと記録されています。…夜間攻撃ができる位の技量のパイロットは通常攻撃でも戦果を望めますから」

レイジングハートの博識に私は思わず賛辞を贈ったのだが…。

「…お言葉ですが、マスターは武装隊士官なのに、ご自分の故郷の現代戦史についてあまりに不勉強です。もっと積極的に勉強なさるべきでしょう。」

ましてや、マスターのお祖父様は旧海軍でパイロットをなさっておられたと、お母上から伺っておりますよ」

「ふええん。レイジングハートの意地悪う（泣）」

愛機から痛烈にダメ出しされちゃった…。

確かにその通りなので言い返せないよお…。（号泣）

その時、閃光と共に大きな火柱が一本立ち上がり、ややあって重い

爆発音が響いた。

「今の爆発は何!?!」

「今のは水中爆発です。日本軍機が投下した魚雷が、アメリカの艦船に命中したと思われます」

「……」

私は呆然と、爆発が起きた方向を見つめていた。

「…一般の輸送船や小型の艦艇では1発の魚雷でも沈没することがしばしばですが、命中したのは大型の艦船…巡洋艦か戦艦のようですね」

私はレイジングハートのコメントが耳に入っていなかった。

爆発が起きたところからさらに向こうの空間に、キラリと光る物体を見つけてしまったのだ。

一瞬ではあるが、胴体に赤い丸がついた飛行機を…。

私の脳裏に、さっきのレイジングハートの一言がフラッシュバックした。

そして、私が物心つく前に亡くなってしまった母方の祖父のことを思い出した。

父が生まれた時、祖父は既に四十代だったが、若い頃、海軍のパイロットだったと聞いていた。

もう一つ、私の名付け親もその祖父だったことも。

私は、何故かあの飛行機が気にかかった。

「レイジングハート、あの飛行機を追うよ！」

「了解しました。しかしパイロットにはれないようご注意を…あと、アメリカ軍の夜間戦闘機にも」

「夜間戦闘機!？」

「はい。優秀なレーダーを備えた夜間戦闘機を、この時期、アメリカは沖縄に配備しています」

「わかった。ありがとう」

いつの間にこんな知識をつけたのだろうか？我が愛機は。

その飛行機は、排気管から微かに洩れる青白い炎で所在がわかった。

傷ついた機体はあちこちに穴が開いているように見えた。心なしかヨタヨタしている。

注意深く近づき、レイジングハートの助けも借りて、機体の状態を探る。

「3名乗っているようです。前からパイロット、ナビゲーター兼ガンナー、通信オペレーター兼ガンナーですが、パイロット以外は動きが見られません」

「レイジングハート、一番後ろの席には機関銃が見えるけど、ナビゲーターはこのガンナーなの？」

「…この機体は『天山』。アメリカ側コードネーム『ジル』という太平洋戦争の終盤、旧日本海軍の主力攻撃機だった航空機なのですが、機体下部に、リトラクタブルタイプの機関銃座を持っているです」

「…そ、そおなの…」

そんな細かな事まで知っている愛機に呆れかけたが、

「そんなことより、パイロットさん達だよ。ここからあの人たちの様子はわかる？」

「マスター、大変残念ですが、ナビゲーターとオペレーターは既に死亡しています。パイロットも負傷しているようです」

「そんな…」

私はたまたまらず前進した。

その時、こちらを振り向いたパイロットさんと目が合ってしまった。

そのパイロットさんはしばらく呆気に取られた表情でこちらを見ていたが、やがてキャノピーを後ろにスライドさせて直接私を見詰めてきた。

真夜中のはずなのに、パイロットの顔は判別できた。

(お父さんに似ている…もしかして…！)

「マスター！」

まさかという思いにかられた私は、レイジングハートの忠告を聞き流して目一杯機体に近づいた。

「……………れだ？」

パイロットさんが私に向けて何か言っているのがわかる。

魔法陣を展開し、顔を近づけた。

「お前… 一体誰なんだ!？」

パイロットさんは私にそう言っていた。

どう答えればいいのか迷ったが、正直に答えよう。

「高町なのはと言います…」

私の言葉が理解できたのか、パイロットさんは目を丸くしていた。そして、こう答えた。

「それは奇遇だな…。俺も高町だ。帝国海軍上等飛行兵曹、高町順士だ…」

私は反射的に声に出していた。『…お祖父ちゃん』と…。

「…お祖父ちゃん? 誰のことだ?」

パイロットさんは冗談と受け取ったようだが、その表情に嘲笑や軽蔑はなかった。

「…こんな状況で変な事を言う奴だと思われるでしょうが、私はあなたの孫です」

思い切り顔を寄せて言ってあげた。

さすがにパイロットさん、もとい、若き日の祖父は啞然としていたが、やがて表情を変え、じっと私の顔を睨むように見た。

「……………」

「……………」

さすがに軍人だけあって目つきは鋭いが、この人の命を受け継いだ者として、一歩たりとも退くことはできない。

祖父　高町上飛曹　はしばらく私を睨み据えていたが、やがて表情を緩めた。

周囲は強い風と騒音で物凄い音がするはずだが、魔法陣の効果で大分軽減されている。

「信じて…くれるんですか？」

私の問いに、祖父は無言で微笑しながら頷いた。

「何と言つのか、お前からは懐かしい雰囲気伝わってくるんだ。こういう雰囲気はお袋にしか感じないんだがな。でも、お前からはそれに近い雰囲気を感じるんだ…。それにその服装もな。この時代では有り得んだろうが、孫の時代なら有り得るだろうしな」

「お祖父、ちゃん…」

目に熱いものが溢れてくる。

写真でしか見たことがないお祖父ちゃんに、会えた…。

「ぐ…、傷が…」

その時、祖父の顔が苦痛に歪んだ。

「どうしたの？お祖父ちゃん!？」

見ると、操縦桿を握っている右腕の二の腕から血が滲み出ている。

「そのままじっとしてて！今、治してあげるから」

タイムスリップ者の鉄則として、過去の歴史に干渉することは許されない。

でも、祖父が生涯を閉じるのはさらに半世紀も先のこと。最小限の傷の治療なら問題はないはずだ。

私は治療魔法で祖父の出血を止め、傷を塞いでいく。祖父は治療魔法に目を丸くしていた。

「だいぶ痛みが軽くなってきたよ…。」

お前の時代には、こんな技術も存在するのか？」

「にはは…」

私はたまたまなんだけどね…。

その時だった。

「マスター、後方からアメリカの夜間戦闘機が接近しています！」

レイジングハートが鋭い声で警告した。

「相手は『ノースロップP-61・ブラックウィドウ』！お祖父様の『天山』より高速です！」

いけない、お祖父ちゃんの飛行機は傷ついている。万一命中したら…。

「く…、なのは、敵の目標はこの『天山』だ。お前まで巻き込まれ

るぞ。離れる」

ダメ、このままではお祖父ちゃんが…。

反射的に身を翻して後方に向かう。

撃墜しないまでも、お祖父ちゃんの飛行機への攻撃を諦めさせればいい。

「レイジングハート、夜間戦闘機の位置は？」

「マスター基準で1時の方向、約100°です…向こうは現在（21世紀）にも使われている12・7ミリ重機関銃を装備しています。アンチ・マテリアルライフル並の威力がありますから、障壁も短時間しか保ちませんし、当たれば身体がちぎれ飛びます。十分ご注意を！」

「…わかった」

後ろを見ると、お祖父ちゃんの『天山』は高度を下げながら遠ざかっていた。

「とにかく、今はアメリカ機を追い払うことが最優先事項だよ」

「…了解しました、マスター」

撃墜ではなく、相手を怯ませればいいので、スターライト・ブレイカーは使わない。

「間もなく、夜間戦闘機の射程内に入ります」

こちらは生身に近い人間だし、魔法障壁を張っているので、向こうのレーダーには映らないはずだが、油断はできない。

その時、前方で発射炎が煌めいた。

え…？ 撃ってきた！？

「マスター！来ます！回避を！」

回避行動をとろうとした時、凄まじい衝撃と身体に痛みが走った。

「きゃあああっ…！」

何度も身体に走る衝撃と殴りつけられたような痛み、私は意識を手離した。

「…のは、なのは！？」

「…マ、ママ！なのはママ！？」

遠くから声が聞こえてくる。

その声は急速に近づいて来た。

聞き覚えがあるこの声の主は……。

フェイトちゃんと…ヴィヴィオ？

意識が浮上し、目をゆっくりと開いた。

「ママ！ママあ…！」

「なのは、大丈夫？何かあったの？」

心配そうな表情のフェイトちゃんと、両眼に涙をいっぱい溜めたヴィヴィオが私の傍にいた…。

大丈夫だからね、と頭を撫でてあげると、ホッとした表情になった。

「はい、ママ……」

ヴィヴィオが差し出したミネラルウォーターのボトルを受け取り、一気に飲み干す。

「……お祖父さんの夢でも見てたの？なのほは」

え？ ひよっとして、私、寝言でお祖父ちゃんのこと言ってたの？……まあ、フェイトちゃんに隠す事じゃないからいいよね。

「うん。夢の中でね、父方のお祖父ちゃんと会ってお話した……」
「桃子さんのお父さんか……。確か、なのはの名付け親で、なのはが物心づく前に亡くなったって聞いたけど」

「うん。若い頃は海軍のパイロットさんだったの」
「なのはママ、おじいちゃんて、だあれ？」

ヴィヴィオが質問してきた。

「……えーとね、ママのお母さんのお父さん言うんだよ」

……。

洗面所で一人になった時、突然レイジングハートが尋ねてきた。

「……マスター、あの光景は一体、何だったのでしょうか……？」
「……私にもよくわからないの。夢にしてはリアル過ぎる気がしたけど」

「そうでしたね……。しかし、科学や魔法でも解明できない事があっ

てもいいのではないでしょうか」「
「うん、そうだよ。そうだよね……」

(了)

…1945年8月12日夜、沖縄・中城湾に停泊していたアメリカ戦艦『ペンシルヴェニア』に、鹿児島県串良基地から発進した4機の『天山』が雷撃を敢行。魚雷の命中が確認されている。

翌年、

『ペンシルヴェニア』は、ビキニ環礁で行われた原爆実験に使用されて沈没。その生涯を閉じた

ハワイ・真珠湾に眠る戦艦『アリゾナ』は同型艦である。

第39話『地上にて』(3) (前書き)

PV60000を超えていました。ご笑覧ありがとうございますm
——) m

第39話『地上にて(3)』

「結局、お約束ということだな(笑)」

「…艦長、せめて予定調和と言って下さいよ」

「お前の言い方のほうがよっぽど胡散臭いぞ。大村」

「部下は上官の背を見て育ちますから」

実際のところ、『ヤマト』クルーを処断したくてもできなかった。

これが真相だろう。

対白色彗星戦役に先立つ『ヤマト』の脱走行為は、無論軍規に照らせば終身禁固刑 死刑は既に廃止されていたから に相当する重罪である。

しかし、その前から白色彗星帝国が太陽系を侵略する意思を示していたことは物証とともに明らかにされており、さらにメッセージの送り主たるテレサとも接触して白色彗星の情報を入手したこと。

白色彗星帝国軍艦隊と数回交戦していずれも完勝して、その意図を阻止したこと。

そして都市帝国との戦闘でも、友軍の側面支援こそあれ、大半をただ1隻で戦い抜いた。

この様子は同時生中継で多くの連邦市民も目にしている。

さらに、本来は地球のために殉じる必要などなかったはずのテレサが、敵の巨大戦艦と刺し違えたのも、『ヤマト』クルーの志をよしとしたからであろう。

また、軍内部の職員や生き残った宇宙戦士からも『ヤマト』クルー

の減刑嘆願書が数多く提出されたこともあり、『ヤマト』を疎ましく思う高官たちも、古代たちを処断するわけにはいかなかったのである。

そもそも、テレサのメッセージを確認した時の、軍高官や政治家の大半は、これを取るに足らぬ与太話と切り捨てた。

これが古代ら旧『ヤマト』クルーを刺激した一因と言えるのだ。

今となつては、当時の防衛会議の判断が致命的な過誤だった事は明白で、『ヤマト』側の罪だけを問えば返り血を浴びることは確実なため、軽い処分とせざるを得なかったわけだ。

とは言え、不問に処することもできず、生還した少数の『ヤマト』クルーは、古代を除いて嚴重注意と向こう半年間、3〜10%の減俸処分になった。

また、自ら首謀者であると主張した古代 進に対しては、減俸処分を1年間に延長した。

一方、白色彗星を過少評価する発言をした参謀総長も、己の軽率な発言のけじめを取らされる形で退任に追い込まれ、彼の派閥に属する軍高官も更迭や退任を余儀なくされた。

生存者への信賞必罰が進められる一方、加藤三郎ら、自発的に『ヤマト』に参加し戦死した者については正規の戦死扱いとされ、遺族年金や一時金は資格等級を2階級特進した上で支給されることになった。

途中で合流した斎藤始以下の空間騎兵隊についても同様とされた。

処分や更迭が早く進められたのは、壊滅状態の地球防衛軍、特に宇宙戦力の再建を急がなければならない切実な内部事情も あつた。

『ヤマト』関係者への処分が軽かった理由もそこにある。

軍法会議にかけるより、軍の再建に協力させる方がより大きな効果が見込めるということだ。

そして、それは『相模』も同じだった。

過日、『アンドロメダ』と『相模』は、脱走した『ヤマト』阻止の命令を受け、実際に捕捉しながら、司令部に『発見せず』と虚偽の報告をしたことが問題になった。

この時の指揮官は土方総司令だったが、彼は『アンドロメダ』と運命を共にしたため、生存者の中で最高位にあつた『相模』艦長の嶋津冴子が出席したのだ。

…経過の確認の後、質疑応答が行われた。

嶋津艦長ご自身は、『ヤマト』と交戦する意図はありましたか？

「命令に従うのが軍人の本分ですから、やれと言われればやりますが、勝ち目は薄いと思っていました。

…カタログスペックだけなら『ドレッドノート』級の方が『ヤマト』を上回っているでしょうが、戦闘はコンピューターではなく、人間がやるものです。

『ヤマト』自体の堅牢さもさりながら、クルーの大半はあの大航海の経験者。イレギュラーな事態への対応力は防衛軍一優秀といえましょう。

翻って我が『相模』クルーの大半は実戦未経験者で、計画していた訓練カリキュラムの半分にも満たない状態でした。

『相模』と相前後して就役した『アンドロメダ』の大半のクルーのスキルも似たようなレベルでした。

そんな状態でまともに戦っても勝てる見込みなんかありませんから、『ヤマト』の下腹に回り込んで、コスモタイガーの発進阻止とメインスラスターの破壊による足止めしか考えていませんでした」

土方総司令は『ヤマト』と戦う意思はなかったと思いますか？

「全くないと言えば嘘になりますが、『ヤマト』を撃沈する意図はなかったと思います。」

「ご存じのとおり、土方総司令は最近まで宇宙戦士訓練学校の教官と校長を勤められ、古代 進やこの私も薫陶を受けた1人です。」

課する訓練、教練には一切妥協を許さない人でしたが、厳しいカリキュラムを通じて、教え子ひとりひとりを実に事細かに見ておられました。

土方総司令は、古代たち『ヤマト』第1艦橋スタッフの性格を知っているがゆえに、彼らの覚悟の度合いを量っていたのではと私は推察しています…。それが当を得ているかどうかはわかりませんが…」

思ったより短時間で終わった。

自分の主張すべき事は言った。後は軍がどう結論を出すか、だな…。

… 嶋津冴子に、3ヶ月減俸3%と嚴重注意の処分が下されたのは翌々日のことだった…

『……やべーよ、皆ドン引きしてるよ』

嶋津冴子は、頬に絆創膏を貼って来なかったことを、ほんの少しだけ後悔していた。

処分の通達を受けたその足で、冴子は被保護者である高町雪菜の学校で行われている保護者参観と3者面談のために顔を出したのだが、学校に入るや、警備員が顔を強張らせながら誰何してきた。受付に向かう途中、教室を移動する生徒の一団とすれ違った時、冴

子の顔を目にした生徒からは、引きつった表情と涙目を向けられた。そして、雪菜のクラスで参観していると、自分の周囲50?には誰もいなかった。

『私、泣いていいよな…』

冴子は心の中で慨嘆していた。

第40話『地上にて』(4)『(前書き)』

…やはり、眠い時の更新はするものではありませんね。
『ヤマト』 『相模』 はゆっくりと再起動します。

第40話『地上にて(4)』

2201年11月 地球防衛軍・新横須賀基地本部

嶋津冴子と古代 進は本部庁舎内の『内惑星艦隊臨時司令部』に出頭していた。

応接室で待っていると、左腕を吊った壮年の男が入ってくる。

「遅くなって済まない。嶋津艦長、古代艦長代理」

入って来た浅黒い顔の男に、2人は立ち上がり敬礼した。

「いえ。お久しぶりです。タナリット司令」

男は先日の対都市帝国戦で『相模』とともに戦った巡洋艦『トンブリ』を指揮していたタナリットであった。

前任者は土星圏での決戦で戦死したため、負傷治療が一段落したタナリットが後任司令官として赴任してきたのだ。

「お怪我は、もう大丈夫なのですか？」

「ああ、幸い骨折だけで済んだからな…。君こそどうなんだ？」

顔の傷のことだと察した冴子は苦笑した。

「私もこれだけで済みましたし。暇ができれば消しますよ」

「…そうか」

互いに苦笑し合った後、本題に入った。

「君達、独立第13戦隊（以後、13TFと称する）には、艦の修理が完了し次第、練習任務に当たってもらいたいのだ」
「…訓練生の卒業が早まるのですか？」

古代の問いに、タナリットは頷いた。

「時期が時期なのでな。日本をはじめ、東アジアと東南アジアの各訓練学校からの繰り上げ卒業生を乗せて訓練航海に出てほしい」

白色彗星との戦闘で被った最大の被害は人材。

まだ再建途上だった地球防衛軍は、宇宙戦士の8割を失ってしまった。

艦艇は造り直せば済むが、宇宙戦士の養成はそうはいかない。

ガミラス戦で絶対人口が減ったところに追い打ちをかけたこの戦いで戦力を擦り減らした地球防衛軍は、当面の戦力を艦艇を含めた無人兵器主体に転換し、並行して人材育成をやり直すことにしたのだが、練習にあてる艦船も不足していた。

各国、各地域の艦艇も甚大な損失、損害を被っており、たとえば戦艦で復帰や新就役のメドが立っているのは、日本地区の『ヤマト』『相模』。ヨーロッパ地区の『リシユリユール』と新造艦『アイル・オブ・スカイ』。北米地区の新造艦『メリーランド』くらいであった。

10隻が建造予定だった『アンドロメダ』級は、最も進捗していた2番艦『ネメシス』が40%でドックごと被災。そのまま建造は凍結されてしまった。

3番艦『シリウス』は35%で、やはり建造凍結。この両艦の建造再開と就役は『ヤマト』自沈の後になる。

4番艦以降はドックごと全壊したり、そもそも起工すらされておら

ず、廃棄・キャンセルとされ、代わりに無人戦闘艦が発注された。

「工事の進捗状況はどうかね？」

「『相模』はあと1週間余りで終わります」

「『ヤマト』は2週間は必要ですね……」

「そうか。では練習航海は半月後の出発で大丈夫だな？」

「はい」

タナリット司令からの命令を受領した冴子と古代は昼食を共にしながら今後の予定をすり合わせた。

「入院組は予定どおり出られるのか？」

「ええ。来週に揃って退院だそうです」

やや置いて、気掛かりなことを尋ねてみる。

「……島は？」

「ふっ切れたわけではないようですが、気持ちはもう立ち上がったと言っていました」

「そうか……」

島も、あの戦いでは色々なものを背負ってしまったようだ。

「『相模』の方はどうなんですか？」

「入院組は来週早々までに復帰できる。艦の方は、主砲等は建造中にドックごと殺られた艦に載せる予定だった新型に替えた。

量産型だからな。そのあたりの融通は簡単なものさ」

「……冴子さん自身はどうなんですか？」

「……ツラの傷消しのためだけに何度も通院するわけにはいかんさ。」

それに、嫁入り先もないしな（笑）
「……………」

複雑な表情になる古代に、もうひとつ気掛かりな事を聞く。

「私の事より、お前たちはどうなんだよ？ いい加減年貢を納めたらどうだ？」

古代と雪は婚約してとうに半年を過ぎた。白色彗星の事がなければダダ甘な新婚生活を送っていただろうに…。

9月に予定されていた式は無期限延期になっているのだ。

「…俺たちは、会おうと思えばいつでも会えますから」

「それはそうだがなあ…」

納得したとは言えない表情の冴子は、あることを思い出した。

「そういえば、お前の兄貴とカミさんは、これからどうするんだろ
うな？」

「兄と、スターシアさんですか？」

「そうさ。他のイスカンドル人は皆死に絶えてしまった。

お前の甥っ子なり姪っ子なりが生まれていても、その子は、このま
まではいずれ独りきりになる。

それに、イスカンドルが地球みたいな目に遭わないと断言できまい？
良し悪しは別として、睨みをきかせていたガミラス帝国はもうない
んだ」

「…確かにそうですが、彼女がイスカンドルを離れるとは思えませ
ん…」

古代も、それは気にかかっていたようだが、如何ともし難いという

表情だ。

「そこだよ。せめて有事の時に使うホットラインくらいは敷設できないものかな…？」
「タキオン通信なら難しくはないだろう？」

スターシアは地球の大恩人だ。向こうが受けるかどうかは別にしても、何か変事があれば手を差し延べるのは当然の事。検討する値はあるはずだ。

「…そうですね。真田さんが退院したら相談してみましよう」

…それから半月余り後に、『ヤマト』『相模』でイスカンダルに赴き、様々なイレギュラーに遭遇することになるとは、神でも仏でもない2人には予想もつかなかった。

第40話『地上にて』(4)『(後書き)』

『ヤマト』世界となのは達の次元世界とでは、時の進み方は同一ペースとは限りません。

第41話『地上にて』(5)『(前書き)

相変わらず閃きだけに頼った文章です…。

今日だけで何万個の脳細胞がご逝去あそばしたのやら(苦笑)

『相模』は一足早くチーフクルー集合です。

第41話『地上にて(5)』

来たるべき練習航海任務の打ち合わせを終えた冴子は、古代と分かれて早めに帰宅した。

「お帰りなさい、艦長」

既に雪菜は帰宅しており、キッチンからクリームシチューの匂いが漂っている。

雪菜には、勉強が本分なのだから、疲れている時は出来合いの物でもいいと言っているのだが、

「私のやりたいようにやっているだけです(笑)」

と返されている。

『…それって、私が雪菜くらいの頃にほざいてたのと同じじゃんか！?』

宇宙戦士訓練学校に入る前の自分は、

『私がやりたいからやる！周りの評価なんか知ったこっちゃねえよ』

と言い、文字通り傍若無人だった。

…まあ、軍人になり、何度も死にそうな目に遭い、目の前で仲間になれたりしたため、多少は『丸く』なった。

とは言え、あの頃の自分よりは雪菜の方がかなり出来はよろしいのだが。

留守中の事を頼んでいる中島夫人に聞いても、あまり出来合いのデ

リ力などは買っていないようで、むしろ、よくアドバイスを求めてくるという。

雪菜は、父や姉達もろとも消滅した『翠屋』の再興を夢見ており、将来に向けての布石もあるのだろうが、冴子は、色々な可能性に挑戦してほしいと考えており、『翠屋』再興にしても、雪菜なりの味を創ってほしいと思っている。

…そのためにも、雪菜たちの世代が戦争に出ないで済む世界にした
いものだ。

自分は『星の海』に出たくて宇宙戦士を志した。
宇宙戦士になって早々にガミラスとの戦争が始まってしまったが、
覚悟の上だから夢破れたと言いつもりはない。

が、夢破れ、命を落とした若者や子供も大勢いる。

両親や友人、仲間など、失ってしまったものを取り戻すことはできないが、雪菜達、これから夢に向かう者たちの道を、戦争というクソッタレな事で壊したくはない。

クリームシチューの肉が口の中で崩れていくのを楽しみながら、冴子はしみじみ思う。

翌日、修理中の『相模』に行くと、大村をはじめ数人の休暇明け組チーフクルーが来ていた。

早速、作業事務所の一角を借りてミーティングを実施。訓練メニューの協議を行った。

これから新人クルーの乗り組みまでの間にメニューを作り、『ヤマト』側とのすり合わせも行わなければならない。

基本的なことは古代と確認済みだが、訓練は実戦同様に行うことで一致している。

時節柄、1日でも早く一人前の宇宙戦士になってもらいたいし、白色彗星軍の残党と戦うことだってあり得る。

もしそうなくても打ち勝ち、生きて帰ってもらわなければならないとなれば、自ずと、身体で覚えてもらうことになる。

しかも1人も脱落させずにだ。

今度の新卒者は2199年の入学者で、日本校は亡き土方校長最後の教え子だ。

他地区校も含め、地球が一番厳しい時期に宇宙戦士を志した連中だから、根性面は余り心配はしていない。

我々先輩世代がすべきは、彼らが一人前になる前に死なせないことだ。

「…ルーキーもそうだが、前ルーキーにはより厳しく接して欲しい。あの白色彗星軍を相手にして生き延びた者は、ヒヨコではなく巣立った若鳥だ。中堅としてのスキルを身につけてもらう」

冴子は、今度の練習航海が無事に済んだら、就役時に乗り込んで来た、町田ら若手クルーの何割かは転出させるつもりであることを明かした。

今の防衛軍にとって、実戦を経験した若き宇宙戦士はどこでも喉から手が出るほど欲しい人材だ。いつまでも一つ所で独占しては総合的な底上げにならない。

大村がしみじみと言う。

「しばらくはこの繰り返しでしょうね」

「…何事もなく進展してくれればいいんですが」

通信長のパクが相槌を打つが、すぐ平穩は破られることになる。

第41話『地上にて(5)』(後書き)

次回かその次で『新たなる旅立ち』編スタートです。

……た、多分(滝汗)

第42話『ともあれ復活』（前書き）

「新たなるゝ」編に入ります。

時系列では、『ヤマト』第1艦橋メンバーが退院する前日にあたります。

文中、オリジナル設定や実在の神社の名前が出てきますが、他意はありません。

発進シークエンスも『ヤマト』と主力戦艦では若干異なっているものをご解釈下さいませ。

第42話『ともあれ復活』

地球防衛軍・新横須賀基地、修繕ドック内、戦艦『相模』艦橋

「畏み、畏み……」

艦橋の一番奥、神棚の下にしつらえられた祭壇の前で、「寒川神社」の宮司が祝詞を述べている。

寒川神社はこの『相模』の艦名の由来である、旧相模国を代表する神社であるため、修復工事完了の祭事を執り行っているのだ。

ちなみに、進宙式にはもつと仰々しい神事があった。

宮司の後ろに、艦長の嶋津冴子以下の幹部乗組員とブリッジクルー、工事責任者らが畏まった表情で立っていた。

…式自体は、時節柄簡素にしたため30分程度で終わり、神社関係者を見送ると、ドック関係者を同乗させて試験航海に出発だ。

「エネルギー充填100%」

「艦内システム、最終チェック」

「通信システム、艦内外とも異常なし」

「火器管制システム、オールグリーン」

「生活ブロックシステム、異常なし」

「全リーダー異常なし」

「重力制御システム異常なし」

「全システム異常なし。機関長、補助エンジン始動！」

「了解。補助エンジン、始動！」

「『相模』出港します」

大村が告げ、冴子が頷く。

「微速前進、速力12（ノット）」

「了解、微速前進。速力12！」

操舵桿を握る町田が復唱した。

地下基地の出入口を出て相模灘に出ると、途端に艦がゆっくりとピッチングを始めた。

「取り舵30。半速、速力25」

「了解、取り舵30。半速、速力25！」

『相模』は増速しながら発進ポイントに艦首を向ける。

「発進3分前。メインエンジン始動用意！」

「了解、メインエンジン始動用意！」

ここで冴子が発進用意命令を出し、機関長が復唱してメインエンジンの回路を開いた。

機関長の指示は、機関室の一角にある機関集中制御室に伝えられ、機関員が操作盤の各スイッチや調整ハンドルを操作する。

主力戦艦としては後期型にあたる『相模』は『アンドロメダ』級同様、基本的に機関員の常駐を必要としないフルタイム・マシナリーゼロ仕様なのだが、前期型と合わせるためと、実戦における不測の事態に対応するため、他艦と同様に機関員も配置している。

特に、白色彗星との戦闘で、自動化の行き過ぎが指摘されたことも

あり、今後の新造艦は有人管制もより考慮されることになりそうだとはいえ、それでも『ヤマト』に比べれば少数の配置なのだろうが……。

「発進10秒前、フライホイール、始動！」

カウントダウンが続き、

「接続、点火！」

「メインエンジン始動！」

久しぶりに波動エンジンに火が入った。

「『相模』発進！」

「『相模』、発進します！」

冴子の指示に、町田が復唱しながらスロットルハンドルを大気圏内発進位置まで押し込んだ。

メインの波動エンジンに後部両舷の補助エンジン、前部艦底部、波動砲強制冷却装置の後部にある加速バーニアと垂直離昇バーニアにも火が入り、轟音と水柱を立てながら『相模』は離水し、上昇し始めた。

対流圏から成層圏に入り、高度35？に達したところでエンジンを地球大気圏突破モードに切り換え、秒速9？に増速する。

やがて、艦は重力圏を抜けた。

「地球重力圏を抜けました」

「全機関、空間出力に切り換えます」

町田と機関長の長尾が報告した。

「波動砲口カバー解除。直ちに艦体の損傷状況を確認せよ」

冴子の指示で、海上航行時に造波抵抗を抑えるため、波動砲口を覆っていた整流カバーが切り離された。

さらに、大気圏突破時の空気抵抗と高熱で、艦体やレーダー、主砲などに損傷が生じていないかを確認する。

…約10秒程度で結果が出た。

「損傷、ありません」

大村が報告した。

艦橋にホツとした空気が流れる。

ドックはいい仕事をしてくれたようだ。

何事もなく帰ったら、関係者にお礼を言わなければ。

『相模』は更に火星への小ワープと各火器の動作試験を行い、夕方、新横須賀基地に帰投した。

基地の大型艦係留台座に艦が固定され、艦が地上待機当直体制に移るのに先立ち、艦長訓示が行われた。

「…艦長の嶋津だ。皆、今日はお疲れ様。

試験航海は無事終了した。予定どおり、明後日に新人乗組員を迎え、『ヤマト』とともに訓練航海に出る。

…本来なら白色彗星との戦いで疲れを、今少しゆっくり癒してほしいところなのだが、大半の仲間と戦力を失った現状では、それも叶わないことを申し訳なく思う。

…生き残った我々にかかる期待は大きく重いものがあるが、白色彗星との戦いを生き延びた諸君ならば、必ず応えられると確信している。

明日を信じて、皆一丸になって力を尽くそう！」

「…はいっ！」

最終チエックの後、艦内は入港当直態勢に移り、少数の当直者を残して消灯になったが、艦長以下の幹部乗組員ミーティングは夜が更けるまで続いた。

第42話『ともあれ復活』（後書き）

仕事中なのにネタが閃いてしまう。

しかし大抵すぐ忘れてしまう。

オッサンになりましたな…。

第43話『第2の船出。イスカントル…じゃなくて訓練だ！』(1)『(前書き)

うだる…。

今回は『新たなる』の冒頭部分と重なったり違ったりしています

第43話 『第2の船出。イスカンダル…じゃなくて訓練だ！(1)』

11月某日、0815時。英雄の丘

艦を大村に任せた冴子は、一人、英雄の丘に足を運んだ。

沖田十三像の周囲には、また新たな名前が刻まれた墓碑が立ち並ぶ。この中には『相模』の乗組員、『ヤマト』の乗組員、土方をはじめとする地球艦隊や破壊された各基地の宇宙戦士たち。そして、テレサ。

彼らの多くは遺体すら還らなかった。

『土方さん、皆…』

恩師と仰いだ数少ない人々の一人、生きて家族に会わせる事が叶わなかった『相模』の若いクルー達…。

込み上げてくるものがあるが、嘆いたところで彼・彼女たちは還ってこない。

宇宙の平和なくして地球の平和も成立しないことは、白色彗星の一件ではからずも証明された。

再建にはかなりの期間を要するだろうが、どんなに厳しい前途が待っているようと、必ず地球防衛軍を、地球のみならず、宇宙の平和の護り手に足るようにする。それが戦い倒れた者に対する手向けだ。

『……………』

携えてきた花を供え、敬礼してから踵を返してその場を離れた。

戦士の墓前に長居は無用。それが冴子の主義で、良し悪しは別にし

て『ヤマト』クルーとは考えが異なる。
ま、別に古代や真田たちを否定する気は毛頭ないのだが。

内惑星防衛艦隊司令部に顔を出してから、地下ドックの『ヤマト』に足を運んだ。曲がりなりにも13TFの司令官代理なのだ。指揮下の艦の状態を把握するのも指揮官の義務である。

古代、雪と戦死した徳川以外の第1艦橋メンバーは今日退院で、機関室を守っているのは、先任機関士から昇格した山崎奨のはずだ。

「これは嶋津艦長、わざわざ済みません」

冴子に気付くや、山崎は作業の手を休めて挨拶してくる。

「いえ。お忙しい所にお邪魔してしまつたようで、こちらこそ申し訳ないです」

司令官代理に気づいた他の機関員が敬礼しようとするが、冴子は手ぶりで制し、作業を続けるよう促した。
艦内通信装置の前に立つ。

「ここで、徳川さんが…?」

「はい…」

まさにここで、徳川は息絶えていたという。

彼らが最期まで持ち場を守り通した結果、『ヤマト』は息絶えずに地球に戻れたのだ。

沖田が指揮していた艦には、大抵徳川も機関長として乗り組んでおり、冴子や古代守もよく知っており、沖田や土方とはまた違う親しみを持っていた。

ま、やんちゃが過ぎて叱られたこともあるのだが…。
約40年にわたり、機関一筋に生きた宇宙戦士に敬意を表し、しばし瞑目した。

山崎や生き残った機関員たちが中心になって復旧にとりかかったがいあって、『ヤマト』はほぼ再び完成したようだ。

「そう言えば、（徳川さんの）次男坊が今度乗り組みになりますね」

「ええ。親父から受けた教えをバッチリ叩き込んでやりますよ（笑）」

「お願いします。…あ、これは古代が言う事でしたね（笑）」

…長居して『ヤマト』クルーに気を遣わせるのも何なので、艦内を歩き回るのはせず退散することにした。

地上の『相模』に戻ると、必要物資を積み込むトラックやトレーラ、タンクローリが行き来している。
改めて乗艦を見遣った。

ポロポロだった外部装甲板は新品に交換。近接防御火器たる小型パルスレーザーは増設され、大型ガトリングパルスレーザーは取付基部から改装され、格納式から据付式に変わった。

レーダーシステムや主砲等一部の装備品は、建造中にあの化け物の砲撃でドックごと潰された戦艦『蝦夷』に搭載予定だった物が転用されている。

レーダーアンテナはいくらか大型化され、装置自体も新型に変わったため、カタログ上では能力が2〜3割増しだという。

主砲は、エネルギー集束率は前に搭載されていた物と変わらないが、追加した放射モードで対空・対小型艦戦闘を容易にした。

この仕様は、現在竣工間近の『メリーランド』、『アイル・オブ・スカイ』等にも採用されているが、既存艦の換装は、アビオニクスが同等能力の『相模』が始めてだ。

それ以前に建造された同型艦に搭載する場合はアビオニクスの更新が必須なのだ。

これは『ヤマト』にもない機能で、使いこなせば防御力向上に貢献するだろう。

艦の舷門へ向かっていると、基地のミニバンが停まったところだった。

「ようー」

車から降りてきたのは古代や真田ら、『ヤマト』第1艦橋の連中だ。

そういえば、『ヤマト』『相模』の幹部乗組員の打ち合わせが予定されていたが、午後いちからはずだ。

「早いな、ちゃんと退院できたのか」

「お前同様、死神からも嫌われたよ」

はっはっはと、真田と人の悪い笑顔を向け合う。

古代たちは冷汗まじりの苦笑を浮かべている。

当人同士は挨拶以外の何物でもないのだが、元から強面の真田と、女海賊面になった冴子とでは、どう見ても悪党同士の会談にしか見えない。

「堅気」の人が目にしたらドン引きすること請け合いだ。

「両艦首脳陣会議」は少し予定を早めて行うことにして、『相模』艦内食堂で早めの昼食をとることにした。

『ヤマト』からは古代、島、真田、南部、相原、太田、雪で、機関長の山崎は後程合流。

『相模』からは冴子、大村、機関長の長尾、通信長のパク（朴）、工作班長の大泉、生活班長のヤン（揚）だ。

そのまま、1時から山崎も参加しての会議になり、訓練のメニューとスケジュール等について最後の詰めが行われた。抜き打ちのスクランブル訓練や16時間訓練等も行われることになった。

もつとも、相当部分が予想外の事態で変更を余儀なくされた事は、周知の事実なのだが……。

第43話『第2の船出。イスカンダル…じゃなくて訓練だ！』(1)『(後書き)

次回、『ヤマト』『相模』発進です。

……多分……。

第44話『第2の船出。イスカンダル…じゃなくて訓練だ！(2)』(前書き)

いよいよ発進です。

アニメ『新たなる旅立ち』とは色々異なっているかも知れません。

第44話 『第2の船出。イスカンダル…じゃなくて訓練だ！(2)』

明けて、訓練航海の出発日。

ひんやりとした晩秋の青空の下、新横須賀基地に宇宙戦士訓練学校卒業生たちが、それぞれの乗艦に向かおうとしていた。

『ヤマト』に乗り組むのは、飛行科を除く、北野哲・徳川太助以下の野郎ばかり59名。

彼らは2隻の内火艇に分乗し、沖合に錨泊している艦に乗り組み、飛行科卒業生は嘉手納基地から合流することになっている。

一方、『相模』には三沢亜里沙以下の男女混合42名で、こちらは徒歩乗艦だ。

『相模』艦橋

「申告します！三沢亜里沙以下、砲術科、航海科、機関科、技術科、生活科卒業生42名、『相模』乗り組みを命ぜられました！」

代表である三沢の申告と敬礼に、冴子と大村は答礼し、大村が指示する。

「わかった。指定の居住区に荷物を置き、今から15分以内に各配属先で着任を申告しろ。…三沢は艦橋で観測任務に就け」

「はいっ！」

緊張した面持ちで三沢は駆け出して行った。

その背中を一瞥した冴子の後ろで、あっ、という声が上がった。町

田の声だ。

「どうした？」

「『ヤマト』組が……」

町田が指差したマルチスクリーンでは、『ヤマト』左舷で新人たちのランチが転覆し、海に投げ出されて新人たちが泳いで艦に向かっているところだった。

艦から何人かが慌ててタラップを駆け降りている。

「……」

「……」

「……」

「……あれは機関科か？」

「はい……」

呆然とする者、額を抑える者、反応は様々だ。

冴子も長嘆息をつく。

……山崎機関長も就任早々ご苦労なことだ。

ま、こちらも『ヤマト』の心配をする余裕はないのだが。

10分後から各部署から新人の着任報告が届き始め、13分30秒で全新人の着任が終わった。

「遅いな。せめて12分で揃わないと」

冴子は呟く。最初は命じた時間の8割以内で揃わなければならないのだが。

「明日からは5分前集合だ。ルーキー全員に徹底しろ」

「わかりました。昼飯時までに各科リーダーに徹底します」

大村が応じた。

「『ヤマト』も新乗組員の着任を完了しました」

「わかった。30分後出航と伝えてくれ」

パク通信長に指示すると、マイクを手にして艦長席から立ち上がった。

「…新乗組員諸君。艦長の嶋津だ。」

『相模』と『ヤマト』はこれより訓練航海に出発する。

今航海の目的はただ一つ。君たちに1日も早く一人前の宇宙戦士になってもらうことだ。

故に、訓練は全て実戦同様に行く。各リーダーの指示に従い、注意して訓練に臨んでほしい。

発進は30分後だ。総員配置につけ！」

「おらあつ！ばやばやしてんじゃねえぞ、お前ら！」

「は、はいっつ！」

各部署で、新人たちがリーダーに尻を叩かれ蹴飛ばされながら、わらわらと配置についた…。

地上基地から出発の『相模』はどうか発進し、幾分ヨタヨタしながらも上昇したが、海上から発進の『ヤマト』は、ガチガチになった新人がポ力を連発し、離水に四苦八苦していた。

徳川太助が誤って非常制動弁を開いたため急減速したり、発進指揮を任された北野がガチガチになってなかなか離水せず、制限区域ギリギリになってようやく発進した。

高度20000?でいったん水平飛行に移り、嘉手納基地から発進する『ヤマト』乗組の飛行科新人たちを迎えに、合流ポイントの与論島沖合上空へ向かう。

「前方11時30分の方角に編隊。友軍機です」

「味方識別確認はどうした!？」

観測員席についた新人の三沢が飛行編隊接近を報告したが、肝心の味方識別確認報告を忘れ、大村が指摘する。

「も、申し訳ありません…。味方識別信号、確認しました。『ヤマト』乗組のコスモタイガーです」

たちまち大村の怒声が艦橋に響いた。

「識別信号を確認せずに味方だと言う馬鹿がどこにいる!? これが実戦で、あれが敵編隊だったら本艦も『ヤマト』も撃沈だぞ! わかっているのか!？」

「申し訳ありません…。以後、気をつけます」

「実戦でやり直しはきかんぞ。いいな!？」

「は、はいっ!」

叱る時は厳しく。しかしいつまでもネチネチと言わない。これが宇宙戦士流だ。

通信が入り、飛行科卒業生の坂本茂が編隊長のコスモタイガーが

ヤマト』に接近する。

坂本茂は、飛行科を抜群の成績でトップ卒業したと聞く。果たしてどれ程のものかな…？

と思っていると、先頭の坂本機だけが『ヤマト』『相模』の脇をすり抜けて前に出るや、いきなり急上昇し始めた。ご丁寧に白いスモークまで引きながら。

坂本機はそのまま、両艦の前でアクロバット飛行を始めた。

「…大村、主砲1番2番、あの馬鹿にロックオンだ」
「わかりました」

1・2番主砲の砲身が迫り上がり、砲塔が回転して坂本機に向けられ、ピツタリ追尾する。

坂本機のコクピットではロックオン警報が鳴り響いているだろう。

狙われていることに驚いたか、古代に叱られたか、坂本機はアクロバットを中断して『ヤマト』に着艦した。

第44話『第2の船出。イスカントル…じゃなくて訓練だ！(2)』(後書き)

突然ながら、嶋津冴子の高町なのは評予告

「彼女は『青色巨星』だ。明るく輝いているが、燃え尽きるのも早い…」

だいぶ後になりますが、こう言うことになります。

登場人物設定3 (前書き)

頭が飛んでおりますので、今さらながら、『ヤマト』『クルーを含めた人物設定をば。

『ヤマト』『クルーにも一部オリジナル設定がついております。

登場人物設定3

『ヤマト』クルー

(一部オリジナル設定含む鴨)

第1艦橋常勤メンバー

真田・山崎・北野を除き、皆2181年生まれの20歳で宇宙戦士訓練学校の同期生(2199年卒業)

藤堂や故土方竜ら、年長者からは『沖田の子供達/最後の教え子達』と言われる。

古代 進

艦長代理兼戦闘班長。(少佐/三佐相当)

誰もが認める沖田十三の後継者。

以前ほどではないが、基本的には直情・熱血漢。

森 雪とのバカップルぶりは相も変わらず。

CV:富山 敬(故人)

島 大介

航海長(大尉/一尉相当)

言わずと知れた若手トップの操舵士。

古代とは対照的に冷静沈着だが激情家の一面も持ち、かつてはしょっちゅう古代と衝突し、殴り合いの喧嘩を演じていた。

テレサとの事をふっ切ったわけではないが、再び前向きになっている。

CV:仲村秀生

真田 志郎

工作班長（通称技師長。中佐／二佐相当）

2171年生まれ、30歳。

アニメ史上に残る名言「こんなこともあるつかと」の元祖。

技術士官のはずだが、戦闘機の操縦や白兵戦もこなすマルチプレイヤー。

少年時代に負った怪我が元で両肘両膝から先は義手義足だが、それを逆手に取って、爆弾や仕込み刀、ハンドガン等を組み込んだ各種義手義足を所持しているらしい。（爆弾は本当）

周囲からは「ヤマト一最強で謎の人」と言われている。

古代 守、嶋津 冴子とは同期で親友／腐れ縁。

CV：青野武

南部 康夫

砲術長兼戦闘班副班長（大尉／一尉相当）

一大コンツェルン、南部ホールディングス総帥家の御曹司だが、家業には興味がなく、砲術畑を歩んでいる。

古代がコスモゼロで出撃する時は戦闘指揮を代行する。

CV：林 一夫

太田健二郎

観測主任担当（大尉／一尉相当）

第1艦橋メンバー1の大食漢…。（汗）

CV：安原義人

相原 義一

通信長（大尉／一尉相当）

第1艦橋一胃腸が弱い男（汗）

CV：野村信次

森 雪

生活班長兼リーダー主任兼看護師（中尉／二尉相当）

バカッパルの片割れ。恋人を苗字で呼ぶ女。アナライザーの被害者。スターシャの亡き妹、サーシャによく似ているらしい。

両親（実親である）はれっきとした日本人なのに、なぜか本人は金髪家事全般は得意なのだが、なぜかコーヒーをいれるのは上達せず、

「雪コーヒー」は『ヤマト』クルーが恐怖する一品。

CV：麻上洋子

山崎 奨

機関長（少佐／三佐相当）

初航海以来、徳川彦左衛門の片腕で、機関部No.2として機関室を預かってきたが、徳川が戦死したため後任に昇格した。言動を見る限り、今のところ常識人である。

CV：寺島幹夫

北野 哲

次席操舵士兼戦闘指揮補佐。

2183年生まれ 18歳（准尉相当）

2201年、宇宙戦士訓練学校を首席で繰り上げ卒業。

第1艦橋勤務になり、操舵、戦闘指揮とも担当。

CV：井上真樹夫

徳川太助

機関員（三曹相当）

2183年生まれ 18歳

一言でいえばおつちよこちよいで、彼に限らず機関班の新人は何故かおつちよこちよいが多いため、山崎機関長の頭痛の種。

裏の顔は連邦軍の白い奴（嘘）

CV：古谷 徹

坂本 茂

コスモタイガー隊員（少尉/三尉相当）

2182年生まれ 19歳

飛行科を抜群の成績で卒業したエリート候補生だが、自信過剰気味で、いきなり『相模』の主砲にロックオンされた。

亡き加藤三郎を人生の師と仰いでいるらしい。

CV：古川登志夫

佐渡酒造

艦医（少佐/三佐相当）

酒が入ると腕が冴えるという凄腕の医師だが、本職はなせか獣医。メスを握りながらも酒を手離さない筋金入りの酒豪。

CV：永井一郎

アナライザー

分析用ロボット。

既に旧式らしいが、副操舵士や佐渡のアシスタント、雪限定のセクハラなど、マルチプレイヤーぶりを発揮。

CV：緒方賢一

『相模』クルー他

オリジナルキャラ

三沢亜里沙

『相模』観測員（二曹相当）

2183年生まれ 18歳

宇宙戦士訓練学校を総合4位、女子では首席で卒業。

冷静だが、不慣れゆえ失敗も多く、大村副長によく怒鳴られる。

イメージCV：大本真基子

高町 雪菜

横須賀市立中学1年生

2188年4月7日生まれ。13歳。

ガミラスとの戦争で孤児になり、亡き両親の知人であった地球防衛軍の中島龍平によって、亡姉の幼なじみだった嶋津冴子の被保護者になった。（中島龍平は後見人）

容貌は「高町なのは（中3時）」と瓜二つに近いが、髪と瞳は漆黒で、右利き。

髪形も右サイドポニー。

幼少期に過酷な思いをしたため、年齢よりやや大人びた雰囲気を持つ。

現保護者が私生活ではダメ人間ゆえか、家事は万能。

料理は後見人の中島夫人が師匠である。

また、「ピュア・ハート」という正体不明の石を亡き母から受け継いでいる。

目下の夢は亡き両親が営んでいた喫茶店『翠屋』の復興。

イメージＣＶ：南央美

中島 龍平

地球防衛軍軍務局第2課長（准将相当）

2162年生まれ 39歳。

所謂背広組の軍官僚だが、制服組とも親しく付き合っている。

顔立ちは、リリカルなのはのゲンヤ・ナカジマ三佐をいくらか若くした感じ。

イメージＣＶ：キートン山田

第45話『帰途に』（前書き）

…もうグダグダです。

冴子ノフェイト

「それは最初からだろう（）でしょう（）が」

第45話『帰途に』

新暦76年8月某日 第27管理世界

時空管理局XV級次元航行艦『レオニダス』

「ようこそ、『レオニダス』へ。艦長のエルス・ラビンです」

「執務官のフェイト・T・ハラウンです。道中、お世話になります」

「執務官補のシャリオ・フィリーニです。よろしくお願い致します」

「同じく、ティアナ・ランスターです。お世話になります。艦長」

艦長と、執務官・執務官補の3人は互いに名乗り合い、敬礼を交わす。

次元の海の中心世界・ミッドチルダと時空管理局を激震させた都市型テロ「JS事件」がひとまず解決を見、この4月に機動6課が解散した直後、執務官のフェイトには、早速次元連続殺人事件が持ち込まれ、執務官補に復帰したシャリオと、新たに執務官補になったティアナを伴って操作に乗り出した。

時空管理局の士官、それも魔力ランクAAA以上の者ばかりを狙った襲撃で3人が死亡、2人が後遺症を伴う重傷で、魔導士としては再起不能という被害だった。

容疑者は元管理局員の男で、魔力ランクはBだった。

被害者の1人は容疑者の元上司で、捜査したところ、経理上の不正操作を行っていたことがわかり、容疑者はそれを指摘したところ、辺境世界へ左遷されたようだ。

被害者周囲の者から事情を聴いた限り、特に元部下たちからの評判は皆揃って悪く、憎しみすら抱いている者もいた。

被害者はさして抵抗できないまま倒されており、どんなやり方で格上の相手を叩きのめしたのか等、皆目見当がつかなかった。

捜査は長期化すると思われたが、彼女たちが容疑者の潜伏先と特定した第22管理世界に赴いたところ、逃走を図る容疑者を所轄の警防隊員が発見。

まる一昼夜に及ぶ追跡劇の末、警防隊員5名が重軽傷を負ったが、一警防隊員の機転もあって、容疑者は逮捕された。

で、護送も兼ね、寄港した『レオニダス』に便乗して本局に帰ることになった次第だ。

因みに、本局までは3日の予定だ。

「なかなか強情な男ですね」

「うん、そうだね…」

『レオニダス』が巡航に移ったのを確認し、フェイトたちは早速、容疑者の男に対する取り調べを始めたのだが、男は冒頭、

『自分は不逞にして兇悪な管理局士官殺害犯だ。さつさと吊るすがいい』

と発言しただけで、あとはどんなに厳しく追及しても、一言も発さなかった。

供述がなければ調書が作れず、裁判が開けない。

気分をほぐそうと雑談を試みたら、

『警察と裁判所がべつたりな管理局だから、どのみちシナリオは完
成済みなんだろう？』

と返ってきただけで、また貝に戻ってしまった。

頑として口を割らない男がフエイトたちに向けていた目には、気後
れも怯みもなく、単に冷笑と憎悪だけがあった。

どうしたものか…。

フエイトたちにとっては、男のしでかした事は許せないが、公正な
裁判を受けさせたいと思っている。

過去に管理局が彼にした仕打ちが許されないものならば、謝罪すべ
きは謝罪すべきだと思うのだが、それは極めて困難のようだ……。

夕食後、また新たな問題が発生した。

容疑者が食事をとらないのだ。

水やお茶は飲むのだが、食事には一切手をつけないのだ。

これでは夜間（ミッドチルダ首都クラナガン標準時）の取り調べが
できない。

フエイトたちは内心頭を抱えたい思いだったが、真の災厄というも
のは、音もなく訪れるものなのだ。

第45話『帰途に』（後書き）

あゝ、ヤマトサイドと初めに絡むのはこの三人になりますた。
もう後には退けん…。

第46話『第2の船出…イスカンダルじゃなくて訓練だ!』(3)(前書き)

お知らせしましたとおり、終戦(と言うより敗戦だよね)の日に更新します。

それと、後半は完全にネタに走りました。怒ったりツッコミはなしでお願いします。

ネタありと予告してありますから。

第46話『第2の船出…イスカンダルじゃなくて訓練だ!』(3)

小惑星帯・訓練指定空域

「全機、続けっ!」

「了解!」

古代自ら操縦するコスモゼロを先頭に、坂本率いるコスモタイガーの編隊が小惑星に突入していった。

「主砲、スタンバイ!」

「はいっ!主砲、スタンバイ!」

「目標まで、30宇宙?」

それを見た冴子が砲戦準備を命じ、新人の砲術員が操作パネルに向かい、観測席の三沢が目標までの数値を読み上げる。

13TFはこの小惑星帯で最大の星「ケレス」の第1基地を拠点に、火星から土星にかけての空域で新乗組員の訓練を行っていた。

「各小隊、フォーメーションを崩すな!」

古代とは別の男の声が、新人パイロットに注意を促す。少し離れた空域で、別のコスモタイガーが編隊を見下ろしていた。新人達に注意を促したのは、第901飛行隊、通称アグレッサーと呼ばれる教導飛行隊の第1中隊長を務める黒沢照彦だ。

彼らはいずれもガミラス戦役以来のエース。

技量では古代や亡き加藤、山本に勝るとも劣らない。

そして隊長の黒沢は、古代や加藤、山本らの元教官なのだ。

ケレス基地で彼らが13TFに合流したのは、偏に藤堂司令長官の計らいである。

一連の訓練の総指揮は嶋津冴子がとるとして、古代ひとりに『ヤマト』の指揮と新人乗組員、さらに新人パイロットの教導まで行わせるのは、いくら何でも負担をかけ過ぎだというのであろう。

新人たちもだが、古代たちのような、2度にわたる厳しい宇宙戦争を生き延びた者たちには、今後数年間にも及ぶであろう地球防衛軍の再建を現場で果たすしてもらおう役割がある。

そのためには、教導する側の負担も軽減しなければならない。

黒沢たちの派遣はそのためだ。

彼らは、『ヤマト』は新人達の機体で格納庫に余裕がないため、搭載機が少なく、まだ格納庫に余裕がある『相模』に間借りする形で訓練支援に当たっていた。

訓練は、初日こそ新人たちのポカが続発したが、坂本と北野のパンツ一丁艦内マラソンが効いたのか、黒沢たちが合流して以降、日を追うごとに、少しずつ形になってきた。

黒沢が冴子と古代に提案したのは、一撃離脱をはじめとする集団戦だった。

「残念ながら、個人の高い技量で敵機と渡り合えるパイロットは極少数になってしまいました。」

この上は、個人技主体から全面的に集団戦に転換して、ヒヨコ達の生存率を上げ、経験を積みさせて全体を底上げするべきです」

冴子、古代にも異議はなく、黒沢の案を採用して、1小队4機による集団戦を教え込むことにした。

その黒沢は三座型コスモタイガーの操縦桿を握っているのだが、これは黒沢の愛機ではなく『相模』の搭載機で、操縦席キャノピーには『S・S』

と冴子のイニシャルが書き込まれ、大規模編隊指揮官用の装備がついた、いわば冴子の専用機だった。

彼女自身、『ヤマト』就役以前はパイロットとしても出撃経験があり、ガミラス戦闘機を11機撃墜したため、曲がりなりにもエースの称号を持つ。

が、冴子は駆逐艦の戦闘指揮官 艦長になったため、パイロットとして活動する必要性が薄れた。

さらに、『ヤマト』帰還後の地球防衛軍の再建と再編で、戦闘機隊は各惑星基地や戦闘空母への配置になったのに加え、冴子自身も戦艦『長門』の艦長代理や、『相模』の艦長就任。さらに13TFの司令官代行を兼ねることになった結果、極めて強力な戦闘機隊を有する『ヤマト』

を僚艦としたため、冴子自身が操縦桿を握る必要性はなくなっていた。

てなわけで、格納庫で無聊をかこっていた冴子の指揮官機に目をつけた黒沢が、教導指揮官機として借り受けた次第だ。

古代はともかく、新人達には甘さが残るが、集団戦闘に馴染み始めているのがわかる。

曲がりなりにもトップクラスの成績を修めた連中ではある。
嶋津艦長や古代次第だが、明日からはステージレベルを上げてみよう。

黒沢はスロットルを開き、編隊の上に向かった。

とある異次元空間内、時空管理局・次元航行艦『レオニダス』

ミーティングルームで今後の取り調べについて打ち合わせていたフ
ェイト、シャリオ、
ティアナは、護送中の容疑者がハンガーストライキを始めたため、
取り調べが捗らないことに困惑していた。

容疑者は犯行を認めはしたが、動機については一切口を割らない。

執務官の中には『実績』作りのため、昼夜問わず取り調べをしたり、
暴言を浴びせる、甘言を弄して「自白」させる者等もいて、無実の
人が数十年の刑の判決で収監されるという事件も起きていた。

それらが明らかになったのは、JS事件の処理と並行して行われて
いる管理局内部の改革で、違法捜査に手を染めた執務官や捜査官が
次々と逮捕されていた。

フェイトはそういう腐敗とは無縁だったため、あくまで内部規則に
沿った取り調べを行っていたが、それが災いしてか、容疑者はなか
なか口を割らなかつた。

容疑者のした事は許せないが、それでも公正な裁判を受けてもらい

たいと思っている。

その時、フェイトが突然顔を上げた。

舷窓の向こうの空間に、チカツと光が明滅していたのだ。

『……………?』

あれは何だろうと思ったが、続いて、室内にまで本来あり得ない音が鳴り響いた。

『ボエ ……ン』

これにはティアナ達も気がついた。

「今の音は何でしょうか？」

「さあ……」

ティアナがシャリオに尋ねるが、もちろんわからない。

『ボオツ!』

再び音が響いた。

「この音は……。でも、そんなはずは……」

フェイトはその音に心当たりがある。

しかし、ここで聞こえるはずはないのだ。

だが、追い撃ちをかけるように別の音が飛び込んできた。

” シュシュシュシュシュ……”
” タタン、タタン、タタン……”

それも、次第に接近して来る。

前者はともかく、後者は、地球では、線路沿いで何度となく聞いた音戸惑うフェイトは、先程目にした光と関係あるのかと思い、舷窓から外を見た。

そして、己が目を疑った。

光を放つ1つのライトと、その少し下に「999」と描かれた赤い円盤が並走するように迫っていた。

ライトのすぐ下には『C62』と光を反射するプレートらしいもの。

「フェイトさん、あれは一体…？」

「SL?…でも、こんな所を走れるはずは…?!？」

フェイトも、海鳴に住んでいた頃、各地で運行されているSLをテレビ等で目にした記憶があり、ハラウン家・高町家・月村家・バニングス家の合同家族旅行で、静岡県で運行されているSL観光列車に乗ったこともある。

しかし、目の前のそれは観光列車というより、れっきとした特急列車の雰囲気をもっていた。

呆然とするフェイト達の前を、件のSLは何事もないように並走し、追い抜いていく。

『ボオツ!…!』

追い抜き様にまた野太い汽笛を一発鳴らす。

運転室らしい部分の窓下に、『C62 23』のプレートが光る。

「C62…?」

”ダダッダダッ、ダダッダダッ……”

「ブルートレイン…?」

SLの後ろは茶色…ではなく、濃い青らしいカラーリングに、窓の上には1本、下に2本の白っぽい線が入った列車。ブルートレインとすれば、寝台車だろうか。

窓にはカーテンがかかっていて、車内の様子はわからない。

最後尾の車両に、野球のホームベース形の光るバックサイン。

これにも『999』と描かれていた。

「
「
「
……」

しばらく呆然としていたフェイト達だったが、我に帰ったティアナがブリッジを呼び出して確認すると、やはりブリッジクルーも確認したと言う。

むろん、原因はわからない。

「次元空間に異常が起きているんでしょうか…?」

「断言はできないけど、あり得るね……」

フェイトにもわからないが、何かが起きつつある予感を持った。
そして、それはほどなく的中する。最悪の形で。

第46話『第2の船出…イスカンダルじゃなくて訓練だ!』(3)(後書き)

前半、教導指揮官で登場した「黒沢照彦」は、JAL123便墜落事故当時、群馬県上野村の村長だった黒沢丈夫氏(旧海軍戦闘機指揮官を務めていた)と、先の戦争末期、B29に対する迎撃戦で奮戦した旧陸軍戦闘機指揮官の故・小林照彦氏から名前を頂戴しました。

後半のブルートレイン版『999』は、C62最後の特急『ゆうづる』をモチーフにしました。

映画版のC62 48も、『ゆうづる』牽引の機会が多かったので(笑)。

でも映画版とダブるのは嫌だったので、機関車は『ゆうづる』専用機といわれ、写真も数多く残っている23号機にしてしまいました(笑)

次は18〜19日頃をめどに更新したいです。

第47話 『予定変更…特別遠洋訓練航海つーことでもいいですよね?』(1)『

予定より少し早いですが、投下します。

今回も、アニメ「新たなる旅立ち」とはだいぶ異なりますので、
注意下さい。

この調子では、『ヤマト』自沈を見届けるまでに、200話位にな
ってしまいそう。

そんなに精神力続くかなあ…。

第47話『予定変更…特別遠洋訓練航海つーことでもいいですよ？』(1)『

凶報というものは、さあこれからという時に限って、前触れもなく押しかけて来るものだ。

日本時間〓艦内標準時間の『ヤマト』、『相模』が夜間当直体制にあつた0145時頃、両艦艦橋の通信コンソールは、ほぼ同時に臨時着信を告げるアラーム音を鳴らした。

「……………」

艦橋当直員は何事かと言う表情で通信席に移動し、受信した内容を確認し始めたが、すぐに緊張と困惑の表情に変わった。

5分後には両艦の首脳陣が艦橋に集まり、受信内容について合同協議が始まった。

件の通信の発信者はガミラスのデスラー総統。

そして宛先は、地球防衛軍司令長官と『ヤマト』艦長代理。

『ガミラス星が爆発・消滅したことで暴走したため、イスカンドル星に住んでいるスターシャと古代 守を共に救って欲しい』

…要約すればそういうことだ。

「…お前たちは(この通信を)どう思う?」

嶋津冴子は、スクリーンの先の古代と雪に問うた。

固有名詞こそないが、宛先の1人は古代だと言うことは明白。

現在、地球とガミラスは事実上の休戦状態。地球防衛軍は再建が端緒にいたばかり。

古代は、デスラー総統はもう地球や『ヤマト』に戦争を仕掛けてくるとは考え難いと言うが、最悪、畏という可能性だってゼロではない。

しかし、一方で、イスカンドルがデスラーの言うとおりの状態なら、地球としても到底見過ごす訳にはいかない。まずはこの通信の信憑性を確かめる必要がある。

このメンバーの中というより、地球人でデスラー総統と直接対したのは古代と雪だけ。

信憑性を判断できるとすればこの2人しかいない。しかし、古代は躊躇しなかった。

「この内容は信用できると思います」

雪も頷く。

「何故、そうと言い切れる？」

「方法の是非はともかく、デスラーはガミラス民族の存続を最優先に考える人物です。」

地球に対して行った事は明らかに誤りで許されない事ですが、先日の戦闘で、デスラーは、敵だった俺の前で、白色彗星に身を寄せていたことを含めて、自ら過ちを認めました。

地球の歴史を振り返っても、一国のリーダーが自ら過ちを認めるということは、簡単なようではなかなかできるものではありません。ましてや敵対していた相手の前で。

…デスラーは確かに独裁者であり絶対君主ですが、同時に誇り高い
武人であり、自らを省みる度量も兼ね備えています。
ですから、俺はこの通信を信じます」

「…そうか。わかった」

他の艦橋スタッフも頷き、通信の信憑性の議論は決着した。
議題は、イスカンドル救援の不可に移る。

「真田、ここからデスラーが知らせてきたイスカンドルのワープア
ウト位置まではどの位かかる？」

冴子の質問に、コンソールを操作してから真田が応える。

「ワープを重ねて、1週間から10日というところだな」

「技術的には問題なしか」

『ヤマト』や、その改良量産型である主力戦艦の性能なら、イスカ
ンドルまで十分往復できる。

そして、是非を問われれば、当然救援に赴くべきだろう。

何といつても、スターシャは地球人類全体の大恩人であり大切な友
人。助けられるものなら助けたい。たとえ今、地球が困難な状況で
あっても、だ。

冴子をはじめ、両艦艦橋の空気も救援すべきに傾いているが、問題
は、新人の訓練航海中ということだ。

ルーキー達が、果たして実戦もあり得る航海に耐えられるか…。

しかし、考えてみれば、『ヤマト』初航海時の主力クルーは、古代
や島ら、宇宙戦士訓練学校を卒業したばかりの新人ではなかったか？

しかし、当の古代は慎重だった。

新人のこともあろうが、自分の兄が絡んでいるため、公私混同に繋

がりがかねないと考えているようだ。

が、

「古代。お前、兄貴が絡むから公私混同を懸念してるのか？」

と冴子は問うてみた。

そんな事は…と言う古代だが、表情を見る限り凶星のようだ。

「それを言うなら、真田や私、幕之内もあいつの同期生だ。公私混同ここに極まれりさ。

けど、これはスターシャの救援も兼ねているんだ。

れっきとした救援任務だろう？」

それに、2人に子供が生まれている可能性もある。だとすればなおの事さ。違うか？」

『ヤマト』『相模』のメインクルーは、そのとおりといわんばかりに頷く。

その時、

「艦長！」

「艦長代理！」

両艦のルーキーや一般クルー、それぞれ10人ばかりが艦橋に入ってきた。

そして、『ヤマト』では北野、『相模』では三沢が新人を代表する形で、古代と冴子に向き直った。

「艦長（代理）。新人とはいえ私達も『相模』（『ヤマト』）の乗

組員です。艦に命を預けております…。足を引つ張るようなことは
しません！イスカンドルに行きましょう。お願いします！」

「……………」
「……………」

冴子と三沢、古代と北野は互いに強い視線を交わし合う。

ややあつて、

「「わかった。大言したからには行動で証明してみせる。いいな？」
」
「「「はいつ！」「」「」

冴子と古代が異口同音に告げ、皆は敬礼で応えた。
事が事だけに、新人は希望者だけ連れて行こうとも思ったが、取り
越し苦勞のようだ。

「嶋津艦長！」

今度は教導隊の黒沢だ。

「我々も同行させて下さい。イスカンドル救援もありますが、ルー
キーたちに教えるべきことが、まだ沢山ありますので」
「…わかった。よろしく頼むよ。黒沢隊長」
「はっ！」

艦側の意思は固まった。

さて、次は上層部をどう説得したものかと考え始めたところ、

「藤堂司令長官から通信です！」

相原・パク両通信長が告げると同時に、スクリーンに藤堂が現れた。背景からして、司令長官公邸からのようだ。

答礼もそこそこに、藤堂は切り出す。

「デスラーからの通信はこちらでも確認した。通信の信憑性はどうか？古代」

「長官。私は、この通信は信じられるものと考えます」

「そうか…。それで、君達の中で結論は出たか？」

…さすがは藤堂長官。

我々の考えている事など皆お見通しか。内心で舌を巻きながら冴子が答えた。

「はい。地球を取り巻く状況は今なお予断を許しませんが、それを考慮に入れても、救援に行くべきだ。と結論づけました」

「そうか。現実問題としても、乗組員の練度や現在位置からみて、君達に行ってもらうのがベストだろう。」

後の事は心配するな。ケレス基地で補給を受け次第、至急出発したまえ」

「はっ！」

まさに即答だった。

「よし。総員起床！配置につけ！」

10分後には全員が配置にっていた。

「乗組員諸君。急な話だが、我が第13戦隊は、イスカンダル星への遠征任務につくことになった。

これはガミラスのデスラー総統よりもたらされた情報だが、ガミラス星が突然爆発・消滅した。

その結果、二連星の片割れであるイスカンダル星が本来の軌道を維持できず暴走し、イスカンダル星自体がワープを始めた。

諸君らも知つてのとおり、イスカンダル星・ガミラス星ともに、星としての寿命は尽きかけており、星自体がいつ崩壊するか予断を許さない状況だ。

このまま暴走を続ければ、イスカンダル星の崩壊はそれだけ早まると考えなければならない。

…今さら言うまでもないが、イスカンダルのスターシャは地球に生きるもの全ての恩人であり大切な友人だ。

また、古代守は我々の同胞であり大切な戦友だ。

…かの『アンドロメダ』の完成披露式にて、連邦大統領は、

『地球は宇宙の平和を守るリーダーである』

とおっしゃった。

しかし、目の前で命の危険に曝されている恩人と友人を見捨てるようでは、平和を守るリーダーを名乗る事すらおこがましい。

故に、我々はイスカンダルを救援し、必要とあらばスターシャと古代守を地球に連れ帰るつもりだ。

…なお、先に申し渡しておくが、今回はガミラス軍と共闘はしても、敵として刃を向けることはあり得ない。

ガミラスとデスラー総統に対しては、これまでの宿縁から、絶対に許せないと思う者が多いだろう」

話す冴子の脳裏にも、遊星爆弾で命を落とした年老いた養父母や高町家、月村家、バニングス家ら海鳴の人達、先に逝ってしまった上官や戦友たちの顔が次々と浮かんでくる。

「…しかし、今回の任務はイスカンドルの救援であることを忘れるな。

ガミラスは、イスカンドルを決して侵略せず、対等の隣人であり続けた。

このことから、イスカンドル救援については、我々と変わるものではないはずだ。

だからこそ敢えて言う。

ガミラスを許せとは言わないが、恨みや憎しみを表に出すな。

ガミラス人もまた、祖国を焼野原にし、同胞を沢山殺した『ヤマト』や我々地球人を憎み恨んでいて当然なんだ。

しかし、今回の任務は、そんな負の感情を表に出しては間違いない。失敗する。

辛いかも知れないが、イスカンドルを救うためと割り切ってくれ。

最優先事項は、スターシヤと古代守を救う事だ。

それを肝に銘じて任務にあたり、2人を救おう。

…少し長くなってしまったが、以上だ」

…今更ガミラスを憎んだとて、失ったものが還るわけではない。

それよりも、今幼い子供達や、これから生まれて来る子供らには、我々が引きずる、この負の鎖を受け継がせてはならない。それこそが、先に逝った者たちへの手向けだろう。

艦長席に座った冴子に代わり、今度は大村がマイクを取った。

「副長の大村だ。」

これより『相模』は『ヤマト』と共に、一旦ケレス基地に戻って整備と補給を受け、完了し次第、イスカンダルに向けて出発する。この航海は訓練ではなく実戦だ。

白色彗星の残党軍との交戦もあり得る。

従って、体調が特に悪い者には下艦を命じる。

また、精神的に、遠征に耐える自信がない者も申し出る。

…己の状態を客観的に把握するのも宇宙戦士の能力だ。

無理をした拳句に潰れ、仲間迷惑をかけることは絶対に許さないが、事前に申し出て下艦した者を殊更低く評価するようなことはない。

下艦を希望する者は、後で通知する、ケレス基地出発時刻の30分前までに艦長か俺に申告し、下艦後はケレス基地司令部の指示に従え。

また、これより各部署のリーダーが全員の顔色を見て回るが、診察を命じられた者は直ちに受診しろ。

その結果、下艦を命じられた者もケレス基地司令部の指示に従うように。

命令に対する反問は一切受け付けない。以上だ」

『ヤマト』でも、古代と真田が同様の通知放送を行っており、両艦は艦首を転じてケレス基地に針路をとった。

第47話『予定変更…特別遠洋訓練航海つーことでもいいですよね?』(1)『

次回でやっと出発です。

第48話『予定変更…特別遠洋訓練航海つーことでもいいですよね?』(2)

酷暑お見舞い申し上げます。

第48話です。

相も変わらぬグダグダ感満載ですか、どうぞご笑覧下さいませ。

第48話『予定変更…特別遠洋訓練航海つーことでもいいですよ？』(2)『

…ケレス基地での補給と整備は最優先で行われた。

予定では往復と現地滞在で1ヶ月前後の航海だが、非常事態でもあるため、物資は3ヶ月分が用意された。

しかし、数時間で積み込むには基地人員だけでは到底足りず、『相模』『ヤマト』の手空きの乗組員たちも駆り出された。

また、連続ワープを行うため、真田の指揮で両艦のレーダーや各アンテナには補強が加えられた。

以上の作業を突貫で済ませた両艦は、デスラーからの緊急電を受けた約14時間後の1615時、ケレス基地スタッフと、新たに駐留してきた巡洋艦『デ・ロイテル』等に見送られながら、第13戦隊(13TF)は基地を後にした。

イスカンドルまではワープを重ねて約1週間から10日の道のりだ。とはいえ、『ヤマト』『相模』の首脳陣に手を抜くという思想は毛頭なく、ワープの合間をぬって訓練を行うつもりだ。

まあ、外宇宙ではより一層の注意が必要だろうが。

海王星軌道に達した時、再び藤堂から通信が入った。

「君達をイスカンドル救援に差し向けたことを大統領に報告し、快諾をいただいた。

そして、

『地球の生きとし生ける者の一人として、大恩あるスターシャ陛下の来訪と、勇敢なる宇宙戦士・古代守君の帰還を心より歓迎する』

との言伝を預かった。

こちらも、修復を終えた艦が順次再就役している。

地球のことは心配せず、2人の救援に当たってくれたまえ」

「ありがとうございます。必ず2人に伝えます」

冴子が答え、続いて訓練の進捗状況を報告し、通信を終えた。

太陽系外航行。即ち外宇宙あるいは深宇宙域に入ると、地球との通信状況は著しく悪化する。

しかし、両艦の工作班と通信班は、真田の指揮の元でガミラスや白色彗星軍が設置したであろう、遠距離通信システムを探索していた。

『ヤマト』が、先の大航海中にガミラスの通信人工惑星をハッキングして地球との通信を行った実績があるため、今回は旧ガミラス軍に加え、白色彗星軍が通信用に設置したであろう施設や人工惑星をサーチ&ハッキングしようというのだ。

既に、小惑星帯にガミラス軍が設置した銀河系間通信システム『デスラーズネット』や、太陽系外惑星空域に白色彗星軍が設置した監視・通信用人工惑星の幾つを地球防衛軍が発見し、接收していた。

『転んでもただでは起きるなかれ！』

2度の宇宙戦争の当事者にさせられた地球は、敵国の技術も貪欲に吸収し、応用して自分たちのものにしつつあった。

太陽系内で沈んだ敵味方艦の残骸は大量にのぼるが、地球防衛軍は民間サルベージ業者の力も借りて片っぱしから回収を始めていた。

また、比較的損傷が軽いまま放棄された白色彗星帝国軍の中型空母や戦艦、駆逐艦等十数隻を接收して修復作業を始めていたが、最大の収穫は『ヤマト』との白兵戦で大破し放棄されたデスラー艦で、

艦首両舷の瞬間物質移送装置はほぼ無傷で確保された他、『ヤマト』の波動砲以上に高い収束率を持つデスラー砲も、大した損傷がなく手に入った。

特に瞬間物質移送装置は『ヤマト』にとつての鬼門で、これを無傷で入手できたことに、技術部門では祝杯をあげたとすら噂された。さらに、土星の環付近では、反則としか言えないワープ砲撃を行った白色彗星艦隊旗艦の残骸を探しているという。

瞬間物質移送装置は様々な用途に応用できる。もしも、波動砲をワープ発射できたら、問答無用の最強決戦兵器になるだろう。

また、これとは別に地球側が回収した残骸の中には、決戦以前に『相模』が遭遇した「時空管理局」とやらの難破宇宙船（L級次元航行艦『レム』）も入っていたのだが、まさかその船を攻撃した艦隊と戦うことになるうとは、その時の冴子、古代とも予想出来なくても仕方なかっただろう。

時空管理局・XV級次元航行艦『レオニダス』

フェイト達による取り調べは遅々として進まなかった。容疑者は、さつさと裁いて死刑にすればいいだろうと言わんばかりで、何も答えない。

客観的には容疑者にも幾許かの同情できる点はあるから、きちんとした弁護人をつければ死刑は免れそうだが、当の容疑者は嘲笑の表情しか浮かべていなかった。

「この分ではミッドに戻ってからでないと言えないと難しいでしょうね」
「やはり、逮捕した当事者からの事情聴取は嫌だと言っただけでしょう
か……」

この点は、かつて住んでいた日本のように、警察と検察、裁判所が
明確に分離していた方がいいのだろうか。

時空管理局で執務官として勤める以上、この矛盾からは逃れられな
い。

フェイトはしばし沈黙考していたが、突然、艦内に声が響き渡っ
た。

「中規模次元震の発生を感じました。これに伴い、本艦は一時通
常空間に待避します。繰り返します……」

一同は微かに眉を潜めた。

中規模次元震ともなると、航行可能になるまで数日かかることもあ
るのだ。

「愚痴っても仕方ないよ。この数日間をプラス思考で解釈して、彼
の心を開かせよう」

「はい」「はい」

自分たちが腐ってては、公正な取り調べなど夢のまた夢だ。
ほどなく、『レオニダス』は通常空間に転移した。

その『レオニダス』の転移終了点から約250宇宙？離れた空
域

白色彗星帝国軍の戦艦5隻と駆逐艦20隻、補給艦や工作艦等補助

艦艇6隻からなる艦隊が、天の川銀河辺境部を航行していた。

旗艦には白色彗星帝国軍の遊動艦隊司令長官を務めていたゲーニッツが座乗していた。

しかし、ゲーニッツははげ上がった頭に汗と血管を浮かべ、苦り切った表情になっていた。

サーベラーやレーザー共々、ズオーダーから絶縁を宣告された彼は、サーベラーとは別の戦艦でかろうじて都市帝国を脱出した。また別の戦艦で脱出したレーザーは、生き残っていた地球軍の戦闘衛星からの砲撃で、艦ごと爆散させられていた。

ゲーニッツは、残存艦を集め、帝国が実効支配しているアンドロメダ銀河に戻り、まず態勢を立て直そうと考えていた。

地球防衛軍は潰滅寸前とはいえ、『ヤマト』をはじめ、残存した艦艇の復帰が始まったとの情報がある。

単なる復讐心で地球軍に挑戦しても、すり潰されるのは確実なのだ。スクリーンの向こうにいる若い提督にはそれが解っていない。

「ゲーニッツ閣下は弱腰過ぎる！勝ち誇る地球人どもに、今一度我が帝国の力を思い知らせてからアンドロメダに戻るべきです！」

貴族出身である彼の主張は、アンドロメダ銀河で態勢を立て直すのには賛成だが、地球軍の体制が整わない今のうちにもう一度、地球本星を叩くべきだと言うのだ。

「太陽系内外に敷設した我々の監視・通信惑星が次々と通信を絶っているのだ。地球軍の立ち直りは我々の予想以上に早い。」

一時的に混乱させることはできても、退路を塞がればそれまでな

のだぞ！」

「閣下の対応が遅すぎるからそうなったのですぞ！」

「……………」

『お前は地球人のしぶとさを知らないからそんな事が言えるのだ！』

ゲーニッツはそう怒鳴りつけてやりたい衝動を何とか抑え込んだ。

彼は太陽系進攻艦隊に籍はあったが、プロキオン星系に留まっていたため、地球軍や『ヤマト』の頑強な戦いぶりを知らないのだ。

恥ずかしながら、自分も初めは地球軍を侮っていたが、地球艦隊は巧みな戦術で、数で勝る我がバルゼー・ゲルン両艦隊を葬り、『ヤマト』をはじめとする残存戦力は頑強に抵抗して都市帝国を崩壊させ、我が残存艦隊を潰滅させた。

明らかにデスラーが正しかった。我々は気付くのが遅すぎたのだ。

この失敗を糧にして、もう一度出直そうとしているのに、この苦勞知らずは。。

その時だった。

「閣下、前方に艦船らしき反応があります。1隻のようですが」

「所属等はわかるか？」

問い質すゲーニッツに、

「…判明しました。テレザート付近でゴーランド艦隊が撃沈した『ジクウカンリキヨク』なる組織の艦と同型艦です」

放っておけ、と言おうとしたゲーニッツに被せるように、件の若い提督が叫ぶように言った。

「面白い！仇討ちの前哨戦に、血祭りに挙げてやる！」

馬鹿な。

ゲーニッツは絶句したが、すぐに彼を止めなるべく通信を繋げと命じた。

「通信に応じません！」

「艦隊の一部が離脱、例の艦に向かっていきます！」

「何だと！？馬鹿なっ！」

艦隊から、戦艦2、駆逐艦4が離脱し、独航艦に向かっていった。

「すぐに呼び戻せ！近くに奴らの味方がいるかも知れんのだぞ！」

この愚か者が！

ゲーニッツが恐れていた事態が静かに幕を開けた。

それは、彼の予想を上回る、まさに藪から蛇どころか、虎が出てくる事態になろうとしていた。

第48話『予定変更…特別遠洋訓練航海つーことでもいいですよ？』(2)『

次回、フェイトさんは『ヤマト』と対面？します。
た、多分……………。

第49話『あの船を救え(1)』(前書き)

暑さのため作者は鳥頭になっているため、忘れてしまわないうちに連続投下します。

10万PV過ぎておりました。

脳みそが蒸し雲丹な作者にお付き合いいただいて下さる皆様に感謝申し上げます。

第49話『あの船を救え(1)』

次元航行艦『レオニダス』ブリッジ

観測員が緊迫した声を上げた。

「後方に複数の艦船反応！高速で接近してきます！」

艦長の表情が強張った。

友好施設にしては速過ぎる。

「全速力で前進しろ！接近してくる艦船に所属と目的を質せ！総員警戒配置だ。急げっ！」

「はっ！」

操舵士と通信士が艦長の指示をすぐさま実行した。

「艦長！」

警報を聞いたフェイト、シャリオ、ティアナがブリッジに入ってきた。

「何があつたのですか!？」

「所属不明の複数の宇宙船がこちらに急速に接近しつつあります…。間もなく映像が出ます」

「呼びかけに応じません！」

通信士が悪い報告をする。続いて観測員が、映像データが取れたことを知らせ、ディスプレイに映し出した。

「これは……」

「宇宙戦艦!？」

ブリッジの全員が愕然とした。

観測員が推定データを読み上げる。

「大型艦は推定で全長300?以上。中型艦も約130?以上。いずれも巡航速度が速く、追いつかれます!」

艦長は苦渋の表情を浮かべながら、今出来ることを指示する。

「総員戦闘配置に切り換える。全砲門スタンバイ!本部に緊急電を送れ!」

「はい!」

「……………」

フェイトは無言でディスプレイに映る艦船を睨みつけていた。以前見た艦船と形は全く違うが、艦全体の造りや、醸し出す雰囲気には既視感があるのだ。

やがて、フェイトはある結論に達した。

「艦長、あの艦船ですが、私がかつて第146管理外世界で遭遇した、ミサイル艦隊と同じ勢力のものだと思います」

艦長がフェイトを振り返り、質問する。

「その話は私も聞いています。執務官、だとすれば、あの世界でXV級を沈めた奴らだということですか?」

「その可能性は十分考えられます」

フエイトの話を聞き、艦長はしばし考えた後、決断した。

「反転だ。艦首を接近してくる艦船に向けよ！アルカンシエルを準備しろ」

接近する艦船が敵対行動をとる可能性が高いならば、相応の対応をとるしかない。

次元震で緊急転移は使えない。

何としても自力で活路を切り開くしかないのだ。しかし、その決断は、結果として遅きに失した。

「大型艦、発砲しました！」

「障壁展開！皆、何かに掴まれ！」

フエイト達も手近な物をしっかりと掴んだが、一瞬後に襲ってきた衝撃は皆の予想を上回るものだった。

直撃らしく、全員が吹き飛ばされた。

「被害状況を報告しろ！」

頭から血を流しながら席に戻った艦長が被害状況を把握しようとした。

「アルカンシエル全壊！艦の前半部、大破しました」

もたらされた報告は悲観的なものだった。

防御障壁を簡単に破られて直撃弾を浴び、最大の武装だった魔導砲

『アルカンシエル』は敵の先制攻撃で破壊され、艦の前半分は機能を失っていた。

「中型艦4隻、左右に展開しつつ接近！包囲されますっ！」

観測員が最悪の報告をもたらした。

次元航行艦は本来、それぞれの次元世界に赴いて次元犯罪の取り締まりやロストログリア探索の司令部機能や輸送等のために建造されたもので、艦船同士の砲撃戦をするために建造されてはいない。

別に設計が悪いわけではない。

時空管理局の歴史上、宇宙空間での艦船同士の戦闘がないわけではないが、敵方の艦船も管理局のそれと大差ない武装だったから、殊更戦闘に特化した艦船を建造する必要がなかったのだ。

しかし、先日、3隻の次元航行艦が撃沈されたり行方不明になったこと。特に最新鋭で武装も強力だと言われているXV級2隻が第146管理外世界『テレザート』付近で撃沈されたことは管理局に深刻な衝撃を与えた。

調査に赴いたハラオウン兄妹からもたらされた所属不明の戦闘艦同士の戦闘光景も、見た者に危機感を与えた。

フェイトをはじめ、対艦戦闘に特化した艦艇の必要性を訴える者も出始めていたが、JS事件に伴う時空管理局内部の混乱で、具体化する気配はない。

結局、この手の艦船の研究が始まるのは新暦80年代になるが、時空管理局には宇宙戦闘艦建造のノウハウが乏しかったのに加え、それを持った勢力の大半は敵対的・好戦的である事が多かった。

また、新暦76年に偶然接触した「地球防衛軍」同じく「地球」と称する第97管理外世界とは別世界の宇宙国防軍と判断　は、

恒星系間及び近隣小宇宙間航行能力を持つ宇宙戦闘艦艇を保有しながら、基本的には専守防衛を指向した稀有な勢力で、後には現場レベルで時空管理局の部隊と協力し合う事もあったが、当初は宇宙戦争の真つ只中にあつた事に加え、時空管理局の組織に懐疑的な見解を持つていたこともあつて、情勢が安定してからも、指揮権を有する「地球連邦政府」共々、

「時空管理局は直接外交権を有しない治安維持組織」

等と解釈して直接交渉を渋つた事もあり、さらに紆余曲折を経ることになるが、それはまた後の話。

艦体前半部を大破した『レオニダス』は火煙を噴き出しながらも、左右に障壁を展開して被害拡大を防ごうとした。

「障壁展開しました！」

「敵艦発砲！」

先程ほどの破壊力はないが、艦が多いため着弾数は先程の比ではない。

そして、距離が近い分、貫通力は十分以上にあつた。

「！」

先程とは比較にならない凄まじい衝撃と爆発がブリッジを襲い、クルーは全員が吹き飛ばされ、薙ぎ倒された。

「ぐ……」

一時の失神からフェイトは回復した。

「意識……よし。視聴覚……よし。身体の痛みも大丈夫みたいだ……」

着弾の直前にバリアジャケットを展開していたため、打撲以上の怪我は免れたようだ。

「大丈夫？バルディッシュ」

『問題ありません』

自分にも愛機にも問題はなかった。
身を起こして周囲を見渡す。

「これは……！」

ブリッジは原形を留めぬまでに破壊され、あちこちから煙や火花が飛び散っている。

「フェイトさん！」

背後からの声に振り向くと、やはりバリアジャケットを展開したティアナが煤まみれで立ち上がるうとしていた。

「大丈夫？ティアナ」

「大した怪我はありません」

と、クロスミラージユを掲げてみせた。

「ここで動けるのは私達だけのようですね…」
「そうだね。……っ！、シャーリーは!?!」

一緒にブリッジにいるはずの、もう1人の相棒の姿が見えない。
ティアナの顔色も変わり、反射的に周囲を見渡し始めた。

「シャーリーさんっ!!」

少しして、ティアナが絶叫に近い声を上げた。
フェイトもすぐティアナが屈んでいる所に急いだ。

ティアナの足元にシャーリー　　シャリオ・フィニーノ　　が倒れ
ていた。

その身体の下は血の海と化していた。
彼女の腹部に金属片が深々と突き刺さっており、血はそこから流れ
出ている。

内臓を損傷している。2人にはシャリオの容態がすぐ解った。
腹部の損傷は、ともすれば胸部のそれよりも死亡率が高い。
特に大動脈と大静脈の損傷はまず助からない。
9年前のなのはの負傷も、大動脈を外れていたから一命をとりとめ
たのだ。

外傷なら治癒魔法で応急措置できるが、内臓の損傷は外科手術しか
助ける手立てはない。

このままではシャリオは間違いなく死んでしまう。
しかし、今はシャリオだけではない。
フェイトは半泣きのティアナに喝を入れるように言う。

「ティアナ、他に生存者がいないか、すぐ確かめて。ここは私が引

き受けるから」

「……はいつ！」

ティアナは涙を拭いて生存者を探しに出た。

へたり込みたいのはフェイトも同じだった。

こんなところで、こんなことでシャリオを失ってしまうのか。
膝をつき、ハンカチで次第に血色を失っていくシャリオの、血と煤
に塗れた顔を拭いた。

彼女の顔が、涙で滲んで曇っていく。

何が、管理局の将来を担うエースだ。目の前で死を迎えようとして
いる、片腕ともたのむ存在すら救えない。

私は何もできない。

また着弾したか、突き上げるような衝撃に襲われる。

相棒どころか自らの命の危機なのだが、フェイトには何もかもが他
人事のように思えた。

「フェイトさん！」

ティアナの叫ぶような声に、フェイトは我に返った。

「ティアナ、生存者がいたの？」

「違います。本艦が発信した自動救難信号に対する応答です！」

まさか、こんなところを航行している宇宙艦船が他にいるというの
か？

フェイトは床の残骸を避けながら通信席に向かった。

ブリッジが破壊されたにも関わらず、通信装置は奇跡的に動作していた。

しかし、通信士の女性クルーはティアナによって床に仰向けに横たえられ、両手を胸の上で組んでいた。

フェイトはしばし瞑目して頭を垂れてから、通信機に向かった。

通信機からは多少のノイズがあるが、明瞭な男の声が聞こえてくる。

『こちら、地球防衛軍所属、宇宙戦艦『相模』及び『ヤマト』。貴艦からの救難信号を受けた。応答は可能か？可能なら返答されたい。繰り返す』

第49話『あの船を救え(1)』(後書き)

やっと、ヤマトサイドとなのはサイドが接触です……。

第50話『あの船を救え(2)』(前書き)

え、携帯を替えて早々にぬっ壊れていることが判明しまして、現在入院中&レンタル機使用中です。

残酷暑お見舞い申し上げます。

レンタル機の操作を覚える練習目的でこれを書いてたら出来てしまいましたので、臨時に投稿します。ご笑覧下さいませ。

第50話『あの船を救え(2)』

『レオニダス』が白色彗星帝国残党に捕捉された頃。

「第3小隊、隊形を崩すなっ！」

教導隊長の黒沢の叱声が飛ぶ。

「面舵30、上げ舵15!……パルスレーザー仰角40……撃てっ
!!!」

『相模』艦橋では、冴子の回避機動と対空戦闘指揮の音が響く。

少し離れた空間では、『ヤマト』が同様にコスモタイガー隊の標的になり、回避機動を行っていた。

「…だいぶ良くなっているが、まだまだだな」

冴子は新人パイロット達の機動をそう評する。

「坂本!リーダーがそんな動きじゃ、小隊全機撃墜だぞ!」

こちらはコスモゼロの操縦桿を握る古代。

決して坂本たちが下手なわけではない。

むしろよく頑張っているといえよう。

しかし、パイロットに限らず、上手くなりかかった頃が一番大失敗

を冒しやすい。

この場合、それは事故と言い換えてもいいだろう。そもそも一連の訓練は、どんな厳しい戦闘からでも生還させるために行っている。訓練で死なせるわけにはいかないのだ。勢い、彼らに厳しくダメ出しはしても、そうそう簡単に褒めるわけにはいかない。

その時、『ヤマト』『相模』の通信装置が緊急通信受信のアラーム音を発した。

「「!!」」

相原・パク両通信長が緊張した面持ちに変わった。両艦のブリッジクルーも緊迫した表情になる。

こんな辺境空域で沈没の危機にある宇宙船がいるのか？

冴子は即座に訓練中止を決めた。

「訓練中止、コスモタイガー全機帰還！」

「了解！新人たちは直ちに帰還せよ！古代艦長代理も戻れ！」

冴子の命令を受け、教導隊指揮官の黒沢は、古代以下の『ヤマト』勢に帰還指示を出した。

「救難通信の発信位置は特定できるか？」

「お待ち下さい…判明しました。本艦基準で8時の位置、距離は約100〜120宇宙？です！」

『ヤマト』の相原からもほぼ同じ数値が報告された。

「全機着艦後、通信の推定発信位置に向かう。宇宙海難救助態勢につけ！」

「はいっ！」

地球防衛艦隊では、宇宙空間における艦船の遭難も、「宇宙」を付け足しているが海難と称している。

「艦長、この救難信号ですが、先日の『時空管理局』の難破船と全く同一パターンです。モールス形のSOSが混じっています！」

「…わかった。こちらからも呼びかけるんだ！」

まさか、また時空管理局とやらなのか……？

疑問と興味がわくが、まずは現場を確認するのが先だ。

しかし、イスカンドル救援が最重要だから、あまり時間をさくわけにはいかない。

返答がなかったり、船の状態が酷ければ、気の毒だが救助作業はしない。冴子はそう決めていた。

教導隊も帰還したようだ。隊長の黒沢から艦内通信が入っている。

「嶋津艦長、我々が先行して発信源を確認してきます」

「わかった。しかし無理はしなさんなよ」

「心得ています。万が一がありますので、対空・対艦戦闘装備の許可を願います」

冴子は頷く。

「教導隊は準備でき次第発進！…『ヤマト』の新人たちも出撃準備で待機させる。」

取り舵120度。最大戦速で発信源に向かう！」

『相模』 『ヤマト』 は艦首を転じて発信源と思われる空域に向かった。

パクは発信源に向けて呼びかけ続けている。

「…こちら地球防衛軍所属、宇宙戦艦『相模』『ヤマト』。貴艦からの救難信号を受信した。可能ならば応答されたし。繰り返す…」

数分後、

「発信源から応答がありました。音声信号です！」

「…こちら、時空管理局所属、次元航行艦『レオニダス』。所属不明の数隻の艦船の攻撃を受け、本艦は大破し、航行不能状態です…救助をお願いします」

意外に若い女性の声だった。

「了解。現在そちらに最大戦闘速力で急行中。…こちらは戦艦『相模』。私は通信長のパク。可能なら貴官の氏名を知りたい」

「時空管理局・次元航行本部所属執務官のフェイト・T・ハラオウンです…フェイトで構いません」

「了解しました。フェイト執務官。そちらの乗組員の状況を教えてください」

ややおいて、回答が来た。

「私はブリッジにいますが、現在生存が確認できているのは、私を含めて女性3名のみです…うち1名は腹部を負傷して意識不明です」
声を聞く限り、緊迫してはいるが、まだ落ち着いていられるようだ。

「相原通信長より連絡です！…発信源付近で別の通信を感知。…白色彗星帝国軍のものと同一波形です！」

白色彗星帝国軍だと？では、時空管理局の船を攻撃しているのか？

「全艦戦闘配置！全砲門、発射管スタンバイ！…これは演習ではない、実戦だ！心してかれ！」

立ち上がった冴子が指示を出した直後、先行した教導隊の黒沢から連絡が入る。

「こちらアグレッサー1。発信源付近に艦船6隻を確認。…うち5隻は白色彗星帝国軍と確認。戦艦1に駆逐艦4。直衛機の姿は確認できず。包囲され炎上中の1隻が発信源と思われる。これより白色彗星帝国艦に警告を行う」

「了解、十分注意して下さい」

その直後、古代からも通信が入った。

「嶋津艦長、こちら全機、対艦戦闘準備完了しました。発進します！」

「よし、行け！」

「はいっ！」

『ヤマト』からも古代が駆るコスモゼロを先頭に、坂本ら新人のコスモタイガーが爆装して次々と発進していった。

パクは引き続き、時空管理局のフェイト執務官との交信を続けている。

「通信長、『ヤマト』に戦闘管制を行うよう通達しろ。本艦は被害艦乗組員の救助を中心とする！」
「はいっ！」

今回は、対艦戦闘と救助活動をほぼ同時に行わなければならない。そうなれば、場数を踏んでいる『ヤマト』第1艦橋の南部を中心に戦闘管制をさせ、『相模』は救助活動の管制に徹した方が良い。無論、戦闘管制も含めた結果についての最終責任者は冴子である。

「アグレッサー1（黒沢機）より連絡、白色彗星軍艦は警告を無視、発砲してきました！」

「やむを得ん。攻撃しろ！」

やはり、あちらさんはまだ戦うつつもりなのか…。

命じた後、冴子は密かに溜息をついた。

第50話『あの船を救え(2)』(後書き)

次回はフェイト側からのお話がメインです。

……ええ。多分ね。

第51話『あの船を救え(3)』(前書き)

「暑いっス…」(ウエンディ・ナカジマ)

「漢なら、炎天下の秩父鉄道デハ1100形が大井川鉄道のオハフ
33 215に乗れ。但し涼しげな服装は禁止」(阿呆作者)

…「ごめんなさい色々と暴走してごめんなさい。」

暴走はともかく、ようやくフェイトさんご一行と『相模』『ヤマト』
ご一行がコンタクトします。

第51話『あの船を救え(3)』

次元航行艦『レオニダス』ブリッジ

通信機の向こうから聞こえてきた声の内容に、フェイトは耳を疑った。

『地球防衛軍』？

どういうことなのか？

そもそも、第97管理外世界こと「地球」に、宇宙戦艦を運用する組織など存在しないはず。

そして、『ヤマト』という艦。

テレザート付近で、仲間たちを大勢殺したミサイル艦隊を一瞬の間に葬り去った、凄まじい戦闘力を持ち、私が直接話したいと思った、あの『ヤマト』なのか？

「フェイトさん？」

一瞬思考が停止したフェイトを、ティアナが現実に戻した。気を取り直したフェイトは通信装置に向き直り、応答を始めた。

応答してくれた艦が本当に地球の船なのかはともかく、私達を救助しようとしているのは事実だ。

このままここにいても、待っているのは確実な死しかない。

生き延びるためには、あの艦達 地球防衛軍 に賭けてみるしかない。

フェイトが通信している最中、ティアナはシャリオの周囲に防御障壁を張り、他の生存者を探し求めているが、ことごとく息絶えてい

るか、心肺停止状態になっている。

「どうして、こんな…っ！」

蘇生措置を施しながら、ティアナは涙を流す。

つい先刻まで談笑していたクルーが、もう物言わぬ骸と化している。これ程大量の死に直面したのは初めてだ。

できるなら全員助けたかった。

しかし、最早叶わない。

せめて、まだ生きていると思われる者だけでもと蘇生措置を施すが、息を吹き返す様子はない。

「ダメ、ダメ！生きて、生きてよ…っ！」

ティアナは泣きながら蘇生措置を続けた。

「こちらの搭載機が、貴艦と貴艦を攻撃している艦を確認した。これより該当の艦に即時攻撃中止を要求し、従わなければ攻撃し、貴女方を救助しますので、今しばらく待って下さい」

しばらくして、

「例の艦はこちらの通告を拒否し、攻撃してきたため、攻撃指示を出しました。衝撃が伝わるかも知れないので、念のため、何かに掴まっついて下さい」

と連絡があったかと思うと、一際強く強い衝撃を感じた。

この『レオニダス』ではない、別の艦が大きな損傷を受けたか、大爆発した衝撃波だろう。

何度か、艦を揺さぶるような衝撃に見舞われたが、この艦でないとだけは確かだ。

少しして、一際重い衝撃による振動が走り、それきり衝撃波は絶えた。

やがて、

「…貴艦を攻撃していた敵艦は全て排除しました。本艦も貴艦を直接視認していません。

これから救助に向かいますが、ブリッジの生存者数は変わりませんか？」

フェイトはティアナとシャリオを一瞥すると、肯定の回答を伝えた。

『相模』ブリッジ

「敵駆逐艦2、撃沈！」

「古代隊、戦闘空域に到達。続いて攻撃態勢に入ります！」

即座に冴子は艦砲による撃滅を決意する。

「よし、最大戦速で前進する！」

「了解！」

「敵本隊らしき艦隊の動きは？」

少し離れた空域にいる白色彗星艦隊が本隊らしいが、こちらには目立った動きがない。

「こちらに接近する動きは見られません！」

観測士席の三沢が報告する。

「わかった。引き続き監視を続ける」

(逆転する自信があるのか、或いは仲間割れでも起こしたか…?)

黒沢率いる教導隊は『レオニダス』の左舷にいる駆逐艦の1隻に集中攻撃をかけた。

艦底部とブリッジに対艦ミサイルが命中。

ブリッジへの1発が艦首脳部を全滅させたのか、その駆逐艦は突然左に転舵するや、進路上にいた僚艦に斜めに衝突。2隻とも爆発して四散した。

「全機、かかれっ！」

古代機が先頭を切って戦艦に向かって行く。

教導隊は偵察・索敵も兼ねており、対戦闘機戦も予想していたため、対艦ミサイルと空対空ミサイルを1機に2発ずつ搭載していたが、古代達は初めから対艦ミサイルを4発搭載して出撃していたため、攻撃時の威力は大きかった。

駆逐艦は薄い装甲を食い破られ、炎上する。

戦艦は、さすがに艦主要部の装甲は頑丈だったが、コスモタイガーの攻撃は艦橋構造物に集中。

最も脅威な艦橋砲の大半を破壊し、早くも戦闘力の過半を喪失させた。

地球軍の戦艦、殊に『ヤマト』の出現に驚愕したのはフェイトだけではなかった。

むしろ、この人物 元・白色彗星帝国軍遊動艦隊司令長官・ゲートツツ の受けた衝撃の方が大きく深刻だったといえよう。

「間違いなく『ヤマト』なのか？」

「間違いありません。『ヤマト』と、地球軍標準型戦艦の2隻です！」

何度も確認を求めたとしても不思議ではなかった。

我が帝国の攻撃で廃艦同然のダメージを受けたはずなのに、映像で見る『ヤマト』は完全に復旧している。

地球人の執念深さを見せられた思いだ。

大帝も我々も、地球人を見くびっていたというのか。

「早く呼び戻せっ！あの者達が敵う相手ではない！」

「はっ！」

旗艦や、自分についてきている艦の乗組員は地球艦隊や『ヤマト』と激戦を繰り広げた生き残りで、手負いというか、半ば死兵と化した地球軍の頑強な抵抗を知っているのです。たった2隻でも、『ヤマト』を含む地球艦とやり合えば、ただでは済まないとわかっていた。しかし。

「艦載機との間で戦闘が始まりました！」

モニターには、地球軍の主力戦闘機『コスモタイガー』の攻撃で操舵不能になり、僚艦と衝突して爆散する駆逐艦が映っていた。

「繰り返し呼び続ける！あのザマでは全滅するぞ！」

ゲーニッツは焦っていた。

半ば奇襲の航空攻撃で、もはやなぶり殺しに遭っているのは『ジクウカンリキヨク』ではなく我が方だ。

モニターには、艦橋砲を破壊され火煙を噴く戦艦と、やはり艦体に穴を穿たれたた打つ駆逐艦が映っている。

「早く呼び戻せ、『ヤマト』の射程に捉えられたら逃げられんぞっ
！」

『ヤマト』をはじめとする地球艦、特に戦艦の主砲の射程は予想以上に長く、破壊力で対抗し得たのは戦艦の艦橋に固定装備されている衝撃砲だけで、回転速射砲では十分接近しないと装甲を撃ち抜けない。

そして、艦橋砲をやられ、駆逐艦も手酷くやられた以上、砲撃戦に持ち込まれたら、一方的に殴り殺されるしかない。

あの者らも自分達の愚行が身にしてみてわかっただろう。叱り付けてでも呼び戻す。

そして、件の若い提督がようやく通信に応じた。

「申し訳ありません。閣下……」

「……今回は不問にする。すぐに合流しろ」

「はっ！」

ゲーニッツは、怒鳴りつきたい自分を抑え、努めて穏やかに諭した。そして、艦隊に前進を命じたが。

「……………」

モニターの向こうで兵士の叫び声が上がったと思うと、映像が乱れて消えた。

別の画面には、『ヤマト』と地球軍標準型戦艦の砲撃を浴びて大爆発を起こした戦艦が映し出されていた。回頭中を狙い撃たれたのだ。そして、炎上しながら脱出を図る駆逐艦も程なく血祭りに挙げられた。

「……………」

「……………」

「……この空域を離脱せよ……………」

「……はっ……………」

ゲーニッツは肩を落としながら命じ、残りの艦は全速で空域を離脱していった。

白色彗星帝国軍残党と地球防衛軍との小規模な戦闘は、その後も太陽系外周部で散発的に発生したが、2202年4月には終息宣言が出された。

『相模』艦橋

「残りの敵艦隊、撤退していきます」

「よし、時空管理局艦の救助に入れ。所要時間はこれより1時間とする。」

コスモタイガーは引き続き警戒を続ける」

「はっ！」

大村が艦橋を飛び出しに行く。
程なく救命艇が発進。『ヤマト』からも救命艇が発進していった。

『レオニダス』ブリッジ

半泣きで蘇生措置を続けるティアナの肩にフェイトの手が置かれた。
振り返ったティアナに、フェイトは無言で首を横に振った。

「敵艦は排除されたみたい…。これから助けに来るって」

目を真つ赤にしたティアナも頷き、蘇生措置を諦め、若い女性操舵士の手を胸の上で組ませた。

そこで初めてティアナも気付いた。自分達を助けようとする者の身元をまだ知らないことを。

その質問にフェイトは、

「正直、私も混乱してる。『地球防衛軍』と名乗ってるんだ。
…ひよっとしたら、私達が知っている地球とは別世界なのかも知れない…」

とだけ答えた。

数分して、

「誰かいないか！？生きてたら応答してくれ！」

男の声が聞こえてきた。ブリッジへの通路からだ。

ティアナはフェイトと視線を合わせて頷き合つと、

「こちらです！早く来て下さい！」

と叫んだ。

すぐ応答があった。

ブリッジに入ってきたのは、白地に青のラインが入った制服を着た男、青地に縦の赤ラインが入った制服を着た男、黄色に黒っぽいラインが入った制服を着た女の3人で、皆、赤いヘルメットを着けていた。

まず、青服の男がヘルメットのバイザーを上げ、拳手礼をして名乗った。

「地球防衛軍所属、戦艦『相模』副長の大村です。貴女がフェイト・T・ハラオウン執務官ですか？」

「はい。私がハラオウンです。危険な中の救助活動に感謝します」

フェイトも敬礼してから、頭を下げた。

相手が拳手の礼をしたことに、双方とも驚いていたが、表には出さなかった。

「同じく、宇宙戦艦『ヤマト』技師長の真田です」

「同じく、『ヤマト』生活班長兼看護師長の森です…。細かいお話は後にして、まずは皆さんを私達の艦にお迎えします。よろしいですね？」

「はい。お世話になります」

森という女性を見て、フェイトは少し驚いていた。

見たところ、自分とほとんど変わらない年頃ではないか。しかし、そのあたりの話は、彼女の言うとおり後だ。

その後、ティアナが名乗り、重体であるシャリオの搬送準備が始まった。

「ティアナ、私は彼を護送するから、シャリーに付き添ってて」「はい」

彼というのは、護送中の例の容疑者だ。

護送中の事故でも、容疑者が生存しているならば任務は続行される。訳を話すと、

「では、私が同行しましょう」

と大村が応じた。

途中で『相模』クルーと合流し、万が一の事態に備えて、フェイトはバルディッシュを両手に持ち、大村達はコスモガン抜き、フェイトの先導で護送室に向かったが、護送室があるエリアに向かう通路にはエアロックシャッターが降りていた。

これは余程の危急時でない限り降りて来ない。つまり、この先は真空状態ということ。フェイトは肩を落として、

「無駄足を踏ませてしまい、申し訳ありませんでした…」

と大村達に謝罪したが、大村は、

「我々のことはお気になさらず。それより早く脱出しましょう…」。

事態は予断を許しませんから」

と手を振って応じた。

ブリッジに戻る途中、大村の元へ、艦内の人命検索に散っていた者たちから次々と報告が入ってきたが、いずれも生存者はなし。その報告を聞きながら、フェイトは表情を暗転させ、力なく項垂れていく。

それを痛ましげに見ながら、大村達はブリッジに戻った。

ブリッジには真田ら数人が残っている。

「大村、どうだ？」

真田の問いに、大村は無言で頭を横に振った。

「そうか……。ここの空気が抜けるのも時間の問題だ。艦に戻る…その前に、だ」

そう言うや、真田は壁にマジックインキで何かを書き込んだ。

「??？」

「真田技師長、何を？」

それを見て怪訝な表情になる一同だったが、真田が二言三言説明すると納得した表情になり、大村、フェイトも代わる代わるマジックを手にして壁に書き込んだ。

真田、大村らはそれぞれの艦に戻り、フェイトは真田らと共に『ヤマト』に収容された。

その『ヤマト』では、佐渡の執刀による、重体のシャリオ・フィニーノの緊急開腹手術準備が進められていた。

第51話『あの船を救え(3)』(後書き)

駅のホームで携帯見ながら歩くのは、マジでやめて下さいね。
電車に接触したら意識どころか命持って逝かれます。

…というか、動物が本来持っているはずの危険回避本能が極端に衰えてますな。私ら人間は。

関係ない話で申し訳ありません。

ちよいと見過ごせない事態がありましたもので。

それはさておき、物語はいよいよ加速(又は迷走)していきます、
。
フェイトINヤマトとか、事故を知った白い悪魔&狸さん達とか…。

え？　なのはさん達のガン飛ばしが怖い？

冴子艦長や真田さん達のそれの方が数段おっかないですよ。

どだい、くぐってきた修羅場が違うんですから。

第52話『ヤマトでの第一夜』（前書き）

一度投稿しましたが、細部を調整しました。

フェイトさんご一行、『ヤマト』に乗艦です。

第52話『ヤマトでの第一夜』

無限の星の海で、近隣恒星からの光を受けておぼろげに浮かび上がった艦を見た時、私はこの艦が、紛うことなき『ヤマト』であることを理解した。

水上艦船に近いフォルムの船体に拳骨のような2つの巨大な砲塔。タワー状の艦橋、後ろに傾斜した煙突状の構造物。

高々と突き出たアンテナ、後ろを睨むもう1つの巨大な砲塔。

その姿は、地球に住んでいた時、映画等で何度か見たことがある戦艦『大和』が、徳之島沖の海底から蘇ったかのようにだった。

『ヤマト』に收容されたフェイト・T・ハラオウンは即座に医務室に搬送され、外傷、内臓損傷の有無等の検査を受けた。

フェイトが驚いたのは、医療部門が大幅に機械化・省力化されていたことと、彼ら乗組員の同胞ではないはずの自分達の検査が、あまりにも迅速に進められていったことだ。

設備面では、明らかにミッドチルダの大病院や、時空管理局本局付属の総合病院をも凌いでいる。

さらに驚いたのは、まるで自分達が地球人であるも同然の治療だったのだ。

検査の結果、打撲傷の治療のみを受けたフェイトは、先に検査と軽い火傷の治療を受けたティアナ・ランスターが休息している部屋に通された。

どうやら士官乗組員用の予備室らしい。

内装には全て不燃・難燃材を使用しているらしく、時空管理局の次元航行艦に比べるとシンプルさは否めないが、贅沢はいえない。

ベッド横のツールにはさりげなくミネラルウォーターのボトルと

タオルが置かれていた。

「…シャーリーの事、何か聞いた？」

「私が検査を受けている時に手術が始まったようです。何かあればすぐ知らせると、森さんが…」

ならばまだ始まってからそう時間は経っていない。まだまだ予断を許さない状態だ。

ふと、

「私達、どうなるんでしょう…」

ティアナが不安げに呟いた。

『ヤマト』 『相模』 は既に戦闘空域を離れ、航行態勢に移っていた。

「我々は特別かつ緊急の任務を帯びての行動中だ。申し訳ないが、君達の仲間が到着するのを待っているわけにはいかない。

任務が終わり次第、帰路にここを経由する旨、部隊指揮官からも確約を得ている」

フェイトは救命艇に同乗した『ヤマト』 技師長の真田から説明されていた。

『ヤマト』 側からすればもっともなことで、自分達が彼らの立場ならそうするだろう。

次元震が発生して足止めされていたから、ミッドからの搜索・救援が来るにしてもそれなりの時間がかかる。

「ティアナ、地球の船乗り達に、古くから伝わる話があるんだ…」
フエイトはベッド脇に置かれたミネラルウォーターのボトルを両手に持って話す。

「ひとたび海難事故が起きたら、全ての仕事を中断して、いかなる困難を冒してでも遭難者を助けに行くのが、海に生きる者の仁義なんだって…」

打算だけなら、『レオニダス』を見捨てて先を急いでもおかしくないのに、時間を割いて自分達を助けた。
彼らの世界観がどうなっているかは知らないが、この宇宙を海と定義づけているなら十分頷ける行動だ。
フエイトはそう結論づけた。

その時、艦内通信装置の呼出音が鳴った。
回線を開くと、炊事班だという若い男性クルーが出て、夕食の準備をするので、注文をお願いしたいという。
正直、喉を通らない気分なのだが、これからの事態に立ち向かうには、腹が減っては戦にならないともいう。
メニューを見ると、七分粥があつたのでそれを頼む。
ティアナはハムサンドを注文した。

『相模』第一艦橋

13TFは戦闘配備から警戒態勢に移行し、当直者以外は自室待機になっていたが、両艦首脳陣は先程の戦闘と救助作業についての総括と問題点の抽出を行っていた。

戦闘については、幸いにも人的被害や艦の損害はなく、新人のコスモタイガー3機が被弾したが、破損部位の部品交換で済んだ。

問題はむしろ、沈没に瀕した時空管理局艦船から救助し、『ヤマト』に収容した3名の女性だった。

2名は軽傷だが、1名は腹部を負傷し、現在佐渡の執刀で緊急手術中。

しかも、初めに名乗り合った限りでは、3名ともあの艦船固有の乗組員ではなく、犯罪捜査任務で逮捕した容疑者を護送するため便乗していたらしい。

最先任者のフェイト・T・ハラオウンを含め、どう見ても20歳過ぎには見えない。

ティアナ・ランスターという補佐官に至っては、恐らく10代後半位ではないか。

先日『相模』が遭遇した別の時空管理局艦船で発見した子供の遺体といい、時空管理局とやらは子供まで危険な任務に就かしているのか、と不信感をあらわにする者もいた。

「まあ、組織と彼女たち個々人は切り離して考えよう。向こうもこちらを信用していいか考えあぐねているだろうし、全ては手術が終わってからだ」

と真田がとりなすように言った。

シヤリオ・フィニーノの緊急手術が終わったのは1時間余り後だった。

「幸い、急所は外れとったよ。命には別状なからう」

「ただ、意識が戻るには一昼夜かかりますし、しばらく安静が必要です」

執刀した艦医の佐渡と森看護師長がフェイトとティアナに説明し、

フェイト達もようやく安堵の表情を浮かべた。

そこに、古代が顔を見せ、自分が艦長代理として『ヤマト』指揮をとっていることと自己紹介した。

当然ながら、フェイトもティアナも一瞬驚いた。

仮にも戦艦を預かる身であるから、技師長の真田より年上なのかと思っただが、どう見てもフェイトと同年輩なのだ。

もともと、クロノ・ハラウンも彼くらい年頃で『アースラ』艦長になったのだから、余り驚くようなことでもないだろう。ただ、艦の責任者が艦長代理というのは解せないのだが…。

「…今日はもう遅い時間なので、お互いの説明は明日ということにしましょう。それでよろしいですね？艦長代理」

「あ、ああ、わかった…」

森 雪がこの場を締めるように言い、古代が同意したことで、この場は収まった。

雪は軍支給品の着替えと艦内制服、白いジャケットを持ってきていた。

「私達の今回の任務は、今日以上に激しい戦闘もあり得ます。

この制服は簡易宇宙服の機能もあって、ヘルメットを着用すれば、ある程度宇宙空間でも活動できますから、危機管理のためにも是非着て下さい」

と言う。

そう聞かされ、フェイトとティアナは、この艦が紛れもなく戦闘艦であることを実感させられた。

シャワーを浴び、ベッドに入ると、程なく眠気に襲われた

第52話『ヤマトでの第一夜』（後書き）

次回は、大騒ぎの時空管理局です。多分……。

第53話 『悪事と希望、せつぱり悪事です…』 (前書き)

酷暑お見舞い申し上げます。

以下、前書きはしよります

第53話 『悪夢と希望？やっぱり悪夢です…』

…これは一体、何の冗談だ？

クロノ・ハラオウンはモニターに映る光景を見ながら、自分の気が遠くなる思いだった。

自分の指揮下にある次元航行艦『レオニダス』が、義妹のフェイト達を乗せたまま行方不明と断定されたのは10日前。

管理局全体が大騒ぎになる中、クロノは『レオニダス』の航跡と座標の検証の一方で捜索隊の編成を進め、次元震の鎮静化で大まかな座標が算出できた段階で、自らが指揮をとり、旗艦『クラウディア』を含むXV級次元航行艦3隻で慌ただしく出発。それから実に3昼夜をかけてようやく到着したのだ。

クロノ自身は、妻エイミーから、フェイトの使い魔であるアルフの健康状態には何ら変わりないと聞いていたため、フェイトが生きている可能性が高いと確信していたが、船骸となって空間に漂う『レオニダス』を目の当たりにした時は、さすがに意気消沈したものだ。

それだけに、艦内捜索隊からの報告と、それを目にした時は、到底現実の出来事とは思えなかった。

そこには、

『この艦が一方的に攻撃を受けていたため、攻撃していた艦艇を排除し、乗組員の救助活動を実施しましたが、艦の破損が激しく、残念ながら下記の3名しか救助できませんでした』

フェイト・T・ハラオウン

ティアナ・ランスター

シヤリオ・フィニーノ（意識不明）

『以上の3名を救出し収容しますが、我々は極秘任務従事につき直ちに出發します。悪しからずご了承下さい』

A・D・2201・11・29

地球防衛軍・独立第13戦隊司令官代理・嶋津冴子

宇宙戦艦相模・副長、大村耕作

宇宙戦艦ヤマト技師長・真田志郎

と、ブリッジの壁にマジックインキで大書きされている。

しかもフェイト達3人の名前は、どう見てもフェイトの自筆で書かれていた。

それにも驚いたが、もっと驚いたのは、フェイト達を救助した『地球防衛軍』と『宇宙戦艦ヤマト』、それにA・D・で始まる年月日らしき数字。

自宅が地球にあるクロノには、それが地球の暦であることが理解できたが、2201年、23世紀に入っているとはどういうことだ？ 自分達が知っている地球は21世紀に入っただけまだ10数年しか経っていない。

それから約190年も経過している地球とは？

時空管理局が存在を把握している第97管理外世界『地球』には、宇宙戦艦を建造する技術力や軍組織は存在していない。

しかし、こちらで存在をアピールしている「地球」は統合した宇宙軍を持ち、宇宙戦艦を複数保有しているのは確実だ。

さらに、『ヤマト』という宇宙戦艦。
まだ機動六課が活動していた頃に調査任務で訪れた第146管理外
世界『テレザート』

付近で目の当たりにした『ヤマト』という艦の恐るべき超高エネルギー砲撃は凄まじく、時空管理局自慢の魔導砲『アルカンシエル』すら軽く凌ぐ破壊力に、フェイト共々戦慄を覚えたものだ。

それほどの技術を有している「地球」は、我々が知っている地球とは別次元の存在なのだろうか。

ともかく、それらの解析は本部に戻ってからだ。今は、『レオニダス』の搜索が最優先なのだ。

クロノは、搜索班員に書き込みの撮影を命じた。

「それを撮影しておいてくれ。できるだけ精密にな…。それと、乗組員の確認と搬出は進んでいるか？」

「現在、死亡確認が32名、搬出済みなのは内20名です。何分艦内部の破壊が進んでいまして」

「わかった。無理しないように頼む」

クロノは通信を切ると、モニターを切り換えた。

そこには、完全にデブリと化した艦船の残骸が漂い、少し先には2つに折れた形で漂う大型艦。

『レオニダス』を攻撃したのはこれらの艦達なのだろう。

しかし、『地球防衛軍』の2隻はあっさり片付けてしまったようだ。そちらの残骸回収には僚艦が当たっている。

「提督！搜索班がブラックボックスを発見しました」

「わかった。慎重に取り外すように徹底しろ」

目的の1つはこれで達成できるかも知れない。『レオニダス』に何
が起きたのか。

乗組員の安否確認も進んでいる。内実は「否」しか出て来ないのだ
が…。

そしてフェイト達3人は地球防衛軍とやらの救助された可能性が高
くなった。

拉致された可能性もなくはないが、フェイト達はそう簡単に拘束さ
れるようなことはないはずだ。

そのあたりの経過は、ブラックボックスの音声記録でわかるだろう。

むしろ問題は、『地球防衛軍』サイドとどうやってコンタクトを取
るかだ。

『ヤマト』らは別任務の途中だという。ならばその任務を果たすの
を優先するのが当然だ。

今考えられる唯一の方法は、彼らが帰路にここを通るのを信じて、
何らかの通信端末を残していくか、この艦がここに留まるしかない。
前者は通信を受けてからここに来るまでの時間がかかり過ぎる。

後者も現実的ではない。残骸になっている艦の仲間達が来たら、我
々には勝ち目がない。

「…次元通信ポッドを用意しろ」

消去法で前者をとるしかない。

連絡さえ取れば、身柄返還交渉もできる。現状ではこれが最善だ。

第1管理世界・ミッドチルダ首都、クラナガン市内

「ふう……」

時空管理局の「エースオブエース」「管理局の白い悪魔」と、対照的な二つ名を持つ航空空戦技教導官・高町なのは一等空尉は、家路を辿りながら、これからの事に思いを馳せていた。

今晚、時空管理局は緊急記者会見を行い、次元航行艦『レオニダス』の遭難を発表するのだ。

クロノ直率の搜索隊からの第一報は、『レオニダス』は正体不明の艦隊に襲撃され、大きな被害を受けたとのことだった。

「フェイトちゃん、ティアナ、シャーリー……」

地球のハラオウン家にいるアルフは、ひどく落ち込んでいるものの、特に変わらないと聞いているので、フェイトは何とか脱出できたかも知れない。

しかし、ティアナ達はどうなったのか……。

敵対魔導士相手ならば、フェイトはもちろん、ティアナもそう簡単に負けるようなことはない。

しかし、宇宙空間で、以前フェイトに見せられた映像のような戦闘艦艇に襲撃されたら……。

XV級次元航行艦を簡単に撃沈する艦艇が存在することは、あの映像で証明済だ。

まさか、フェイトが乗った艦がそんな目に遭うとは……。

なのは自身もくじけそうな状態で、一人きりの時は涙が滲んでしま

いそうになる。

しかし、今日はもっと辛い役割を果たさなければならぬ。

一人娘　養女だが　のヴィヴィオに、フェイト達が遭難したことを伝えなければならぬ。

フェイトをもう1人のママと慕っている彼女には余りにも酷だろう。でも、たとえ娘が泣きじゃくっても伝えなければならぬ。私は母親なのだから。

第53話 『悪夢と希望、やっぱり悪夢です…』 (後書き)

次回はフェイトたちのお話メインです

第54話 『宇宙の閃光と地上の星』 (前書き)

もっばらフェイトさんご一行となのはさん母娘の話です。

ちなみに、『ヤマト』艦内でのフェイトさんとティアナさんのコスチュームは、『ヤマト完結編』の森 雪のそれとほぼ同じです。

第54話 『宇宙の閃光と地上の星』

『相模』艦橋

「…ワープを再開する」

『相模』 『ヤマト』 からなる独立第13戦隊指揮官を兼ねる 『相模』艦長・嶋津冴子は 『ヤマト』 の古代に告げた。

昨日の午前中、白色彗星軍残党の攻撃で大破した時空管理局所属艦『レオニダス』 から3名を救出したのと、それに先立つ戦闘で5隻の敵艦を沈めたまではよかったが、重体の1名に緊急手術を行ったこともあり、その間は巡航を余儀なくされた。

それだけイスカンドル到着が遅れるわけで、イスカンドル星自体の寿命が尽きかけている現状ではいつ地殻崩壊が起きても不思議ではないのだ。

佐渡からの報告では、重体で收容されたシャリオ・フィニーノの手術は無事終了し、容態は安定しているという。

大動脈と大静脈の損傷はなかったのが幸いしたようだ。ならば、これ以上巡航だけというわけにはいかない。

「雪、あの2人にワープを説明しておいてくれ」

古代が2人の艦内生活を担当する雪に指示する。

「ワープは1時間後。その後患者に異状がなければ、お嬢さん方の説明会をやるう」

「わかりました」

いい加減、彼女らを放つたらかしにするわけにもいかないし、彼女らも聞きたい事が山ほどあるだろう。

『ヤマト』 医務室

「ワープ、ですか？」

女性患者の入院ということで、急遽間仕切りを設けた病室で、フェイトとティアナは森 雪からワープの説明を受けていた。

「要約すれば、超光速航行による空間転移と考えて下さい」

光より速く航行する。

時空管理局艦船の次元航行とも異なる空間転移航行技術。

隣のティアナが息を飲んだ。

危険はないが、身体には若干の負担がかかるという。

フェイトが疑問を口にする。

「私たちは大丈夫だと思いますが、このシャリオのような病人は大丈夫なのでしょうか？助けていただいた立場を弁えなくて申し訳ありませんが…」

雪は微笑みながら答えた。

「それはご心配なく。今のままでも大丈夫ですし、もっとひどい怪我の状態でも耐えられましたから。」

それに、より重篤な容態の場合は冷凍睡眠カプセルに収容します」

「わかりました…」

2人とも納得したようだ。
それを見た雪は続ける。

「ワープの後、シャリオさんの容態が安定していれば、皆さんと私達、お互いのことを話し合いましょう。」

尋問ではありませんから、あまり硬くならないで下さいね」

「はい。ありがとうございます」

戦闘からシャリオの手当てまで、艦の側も忙しかったのだろう。
ひと晩過ぎてしまったが、ようやく落ち着いて話ができそうだ。

ちなみにフェイトたちの服装は、雪が着ている女性乗組員用の簡易宇宙服兼用制服だが、雪の服が黄地＋黒ラインなのに対し、フェイトとティアナが着用しているのは白地に黒ラインの制服で、2人ともその上に士官用ジャケットを羽織っていた。

身体のラインがまともに出てしまうため、雪が配慮したのだ。当然ながら銃はないが、2人ともそれぞれバルディッシュとクロスミラージユは待機状態のまま携行していた。

では後ほどと、雪が出て行ったのと入れ替わりに入って来たのは、『ヤマト』艦医の佐渡酒造だ。

「心配しないでええ。気分が悪くなるのは1回目だけじゃ。すぐ慣れる」

「ありがとうございます…」

2人が目を丸くしていたのは、佐渡が中身が十分入った一升瓶を抱えていたからだ。

昨日、雪から、

「先生は適度にお酒が入ってる時の方がより腕が冴えるんですよ」と聞かされ、事実そうだったため、フェイト達はツツコむ気が失せていた。

それにしても…。

やはりこの艦は地球の船としか思えないことだらけだ。

言葉がスムーズに通じているのもさりながら、食事や飲料は地球、それも日本のものだ。

第一乗組員も、知る限りではアジア系　日本人だ。

森　雪のような金髪もいるにはいるが。

何か問いたげなティアナに念話で、

『ティアナ、郷に入っては郷に従え…悩んだら負けだよ』

『は、はい……』

今のところ待遇は悪くない。むしろ良好と言えよう。

ワープという空間転移航行が済んだら、色々尋ねてみよう。

むろん、こちらでも色々質問されるだろうが…。

ミッドチルダ、首都クラナガン郊外、高町ノハラタウン家

早朝、目を覚ました高町なのはは、隣にヴィヴィオが寝ているのを見て、軽く息をついだ。

すやすやと寝息を立てているヴィヴィオだが、寝顔にも悲しみが表

れていた。

目元は泣き腫らし、涙の跡もついている。

昨夜、管理局の記者会見の直前に、なのはは愛娘に事実を伝えしたが、案の定ヴィヴィオは大泣きだった。

泣きじゃくるヴィヴィオを抱き締めているうちに、なのは自身も涙を抑えきれずに泣き出してしまった。

今日明日は母娘一緒にいてあげなくては、と思っていると、胸元のレイジングハートがチカチカ点滅している。

「おはよう、レイジングハート。何かあったの？」

『おはようございます、マスター！ スバルさんから伝言が入っております。…ともかくご覧になることをお勧めします』

スバル…。あの子も私と同じような心境なんだよね。

そう思いつつ、再生してみる。

「おはようございます、なのはさん。ヴィヴィオの様子はどうでしょうか？」

早速ですが、クロノ提督からの最新情報です。

…事が事だけに、クロノ提督から伝えられた内容だけ言いますね。

フェイトさん、ティア、シャーリーさんの3人は、近くを通りかかった第3者の艦船に救出された可能性が高くなりました。それで、フェイトさん達を助けた艦船なんですが…。

『地球防衛軍』所属の宇宙戦艦『ヤマト』、『相模』です。

色々思うところがありでしょうが、まずは取り急ぎお伝えしましたっ！」

「……………ふえ？」

フェイトちゃん達が救出されたらしいのは確かに希望を抱かせる事
なんだけど、救出したのが、『地球防衛軍』？ 『宇宙戦艦ヤマト』
???

「…ふええええっ!？」

娘が寝ていることを忘れてしまったのはだった。

第54話 『宇宙の閃光と地上の星』 (後書き)

次回はフェイトさん達と『ヤマト』、『相模』とのお話の予定です

第55話『お話、しませう』(1)『(前書き)

ども携帯の調子が悪うござんす。
また入院かなあ…。

第55話『お話、しませう(1)』

『ヤマト』土官用ミーティングルーム

テーブルを囲むように2人の男と3人の女が座り、壁にしつらえたモニターには右頬に傷がある女が映っている。その画面の女が話し始めた。

『それでは始めようか。』

これは、あくまで互いの立場などを理解し合うことが目的で、取り調べや尋問の類いではないことを予め宣言する。

…共通の約束事項だが、相手の話を途中で遮ってはならない。質問や反論は相手の話が終わってからだ。

また、それぞれの組織の機密事項については答える義務はない。

ということでもいいかな?』

皆が頷いた。すぐに、画面の女が名乗る。

「では、最初に自己紹介からだな…。」

私は嶋津冴子。宇宙戦艦『相模』艦長と、この部隊『独立第13戦隊』の司令官代理をしています」

続いて『ヤマト』の3人が名乗る。

「私は古代 進。『ヤマト』艦長代理です」

「2度目になるかな…?真田志郎。同じく『ヤマト』技師長です」

「森 雪です。同じく『ヤマト』の生活班長を務めています」

地球防衛軍側の顔ぶれに、フェイトとティアナは少なからず驚いていた。

時空管理局の次元航行艦の艦長にも若者が少なからずいるし、一艦隊を率いるクロノもまだ20代前半だが、目の前にいる艦長代理や部隊長も予想以上に若かった。

『ヤマト』技師長だという真田は見たところ30前後だからまだ納得できる。

しかし、部隊長兼任の嶋津という艦長は、見たところでは20代後半位。同性から見てもかなりの美人なのだが、右頬に走る傷が威圧感を放っており、軍人というより女海賊という風体だ。

そして、『ヤマト』艦長代理の古代と生活班長の森に至っては、どう見てもフェイトと同年代にしか見えない。

ただ、全体的に言えるのは、それぞれ同年代の管理局員と比べるとこちらの顔ぶれの方が精悍な面構えをしていたこと。

自分達には想像がつかない修羅場、あるいは死線をかい潜った経験があるのかも知れないと、フェイトは想像していた。

一方、ティアナは、

『管理局もそうだけど、地球防衛軍も、こんな若い人達を指揮官や艦長代理にするほど人材不足なのかしら…?』

と思っていたが、ある面、それは的中していた。

地球防衛軍はガミラスとの8年間の戦いで人材の大半を失ったのに加え、再建途中で白色彗星帝国が押しかけてきたため、またも1からやり直しなのだ。

続いて、フェイト達が自己紹介する。

「フェイト・テストロツサ・ハラオウンです。時空管理局次元航行本部所属執務官をしております」

「ティアナ・ランスターです。ハラウン執務官付の補佐官を務めております」

「それと、今こちらでお世話になっているシャリオ・フィニーも私の補佐官です」

フェイトがシャリオの紹介をして、まず自己紹介が終わった。

「早速ですが、執務官とはどういう職務を？」

真田が口火を切った。

「簡単に申しますと、時空管理局が管理する世界で発生した犯罪のうち、特に凶悪だったり、規模が大きい事件の捜査を担当するものです」

地球防衛軍側が頷く。例の難破船から回収した資料で調べはしたが、彼女の言っていることはそれと合致している。

まあ、時空管理局や地球防衛軍そのものについての話は後なのだが……。

古代は、

『執務官は多分俺や雪と同一年くらいだろうが、補佐官はどう見ても17・8くらいだなあ……』

冴子は、

『この年頃で犯罪捜査官とはな。魔導士としても優秀なんだろうな。けど、時空管理局は魔導士でないと出世できないのかねえ？』

と、内心で長嘆息をついていた。それもある面当たっているのだが……。今度はフェイトが質問してきた。

「素朴過ぎる疑問で申し訳ありませんが、この部隊の司令官と、『ヤマト』の艦長は空席なのでしょうか？」

まず冴子が応えた。

『職制上、この部隊の司令官は、地球防衛艦隊の『内惑星防衛艦隊司令官』なんだが、実はつい先日、異星人の侵略国家との全面戦争があつたんだ。

…辛うじて相手を退けはしたものの、こちらも大きな損害を被つて、その後始末や再建に軍全体が専念しなければならなくなったので、この部隊については、私が指揮を代行しているんだ。軍の再建中にも関わらず、我々が本星を遠く離れた任務についている理由は、後ほど説明しよう」

続いて古代が説明する。

「『ヤマト』艦長代理の件ですが、2年前の任務航海中に初代艦長が病に倒れられ、当時戦闘班長をしていた私が艦長から指揮権を委譲されました。

艦長はその後亡くなりましたが、以来、兼任を解かれていないからです」

フェイト達は納得したが、後を受けた真田の言った内容に愕然とした。

「我々の地球は、9年前から異星人に攻められて、総人口が半分以下に激減してしまっただ。」

「当然、防衛軍も例外じゃない。10年前なら艦長は30代、司令官は若くても40代が普通だったんだがね。」

「こつも人材が少なくなつては年齢にこだわつてはいられないんだよ。…例えば、この嶋津と俺は訓練学校の同期だが、宇宙勤務になつた同期の連中の7割は戦死したり後遺症を伴つ重傷で、二度と宇宙勤務はできないんだ。」

「……………」

そういうことなら、目の前の光景も納得できる。

若年でも使える者はほとんど抜擢するということなのだろうが、目の前の彼らはそんな悲惨な戦争をくぐり抜けてきたのかと知り、フイト達は沈黙してしまつた。

(ふむ、座が湿っぽくなつてしまつたかな?)

そう感じた冴子は、話題を本題へと変える。

「それでは、お互い、なぜこんな辺境宇宙で偶然にも邂逅したのか、そのあたりの事情を話し合おうか?」

時空管理局・次元航行本部

一室には高町なのは・ヴィヴィオ母娘、スバル、シグナム、ザフィラにグリフィス・ロウランの6人が詰めていた。いずれも非番だったためである。

生存が絶望視されている『レオニダス』の他の乗組員の家族と別フロアの部屋なのは仕方ないところだ。

さらに、展開されている通信ウィンドウにはフェイトの被保護者のエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ、八神はやての顔が映っていた。

『…フェイトちゃん達が生きている可能性が高いのは嬉しいんやけど、よりによって、助けてくれたらしいのが「地球防衛軍」で、しかも1隻が「ヤマト」とはなあ…』

「でも、私達の故郷以外にも『地球』が存在するなんて、信じられないよ…」

「まあ、そろそろクロノから連絡があるだろう。ある程度状況証拠も揃っていれば有り難いが…」

『……………』

エリオとキャロは涙ぐんでいるが、フェイト生存の可能性が高くなったことに一縷の希望を掴んでいるようだ。

それはここに顔を見せている者に限ったことではない。

皆が顔を合わせてから正味30分位経っただろうか、新たな通信ウィンドウが開き、緊張した面持ちのクロノが現れた。

「……『クロノ（君）（提督）！！』……」

いきなり大勢から詰め寄られ、一瞬驚いたクロノだが、すぐ気を取り直し、皆を諭す。

『皆の気持ちはわかるが、少し落ち着け。現在わかっている事は全て話すから』

そう言うや、『レオニダス』ブリッジの壁の書き込みの映像を見せた。

『内容もさることだが、フェイト達3人の名前の書き込みを見てください』

と、フェイト・ティアナ・シャリオ3人の名前の部分を拡大して見せた。

『…僕は、これはフェイトの筆跡だと思うが、なのは、君はどう思う?』

と、なのはにも確認を促した。

しばらく画面を注視していたなのはだったが、

「私も、これはフェイトちゃんが自ら書いたものだと思うよ。

特に乱れも見当たらないし、フェイトちゃんは大した怪我はしていないと思うし、脅迫されて書いたとも思えない。

私は、フェイトちゃん達が、地球防衛軍という人達に救出されたと信じるよ。クロノ君」

『そうか…。なのはが言うなら、きっとその通りだろう』

クロノの表情も僅かに緩む。

「じゃあ、フェイトママ達は助かったの?なのはママ」

元気を取り戻したヴィヴィオに、なのはは、

「まだはつきりとは言えないけどね。フェイトママもティアナもシヤリーも、きつと助かってるよ」

よかったーと声を上げたヴィヴィオに、なのはは、表情を改めて言い聞かせる。

「でもね、ヴィヴィオ。フェイトママ達は良かったけど、他の人達は助からなかったの…。」

皆悲しい思いをしているんだから、喜ぶのはこのお部屋だけにしようね」

「うん…」

そう、『ヤマト』に收容されたのは僅か3人。

他の乗組員は收容すらできなかった。

家族達の悲嘆を思うと、安心を表情に出すことは憚られる。

第55話『お話、しませう(1)』(後書き)

今回はイスカンドル行きの原因と、フェイト達に白色彗星帝国のことが知らされます。多分。

第56話『お話しませう』(2)『(前書き)』

『ヤマト』『ご一行+冴子艦長とフェイト&ティアナのお話は続きま
す...。』

グダグダだなあ...。

第56話『お話、しませう(2)』

時空管理局・次元航行本部

「で、『レオニダス』を襲った犯人の目星はついているのか？」

下手人の正体を質すシグナムに、クロノは、これを見てくれと別の映像を出した。

そこには大小無数の金属片と、艦体をへし折られて漂う大型艦が映し出されていた。

『まだ断言はできないが、これは、以前『テレザート』で見たミサイル艦隊と同じ勢力の艦だと思っている』

『じゃ、フェイトちゃん達を助けた『ヤマト』っちゅう船は、ミサイル艦隊を消滅させた『ヤマト』と同一の船なんか？』

『可能性はある。幸い、ブラックボックスも回収できたから、解析すればかなりの部分が判明するだろう』

と、画面を見ていたなのはが、両手でヴィヴィオの目を塞いだ。

画面には、『レオニダス』を襲撃したらしい敵艦の乗組員らしい死体が漂っていた。それも身体が変な方向に曲がり、身体が裂けて内臓がはみ出ている状態で。

大人達ですら顔を歪める有様で、さすがにこれは子供の教育上よろしくなく、なのははヴィヴィオと共に部屋を後にした。

クロノはしまったという表情になり、映像を切る。

『……一番考えられるのは、この艦隊が『レオニダス』を襲撃しているところに『ヤマト』と『相模』が通りかかり、戦闘の結果撃破された。』というところだろう。』

クロノの仮説に、在室の一同は無言で頷いた。

「信じる信じられないは別として、この謎の敵艦を保有する勢力と『地球防衛軍』は、我々より格段に進んだ科学力と軍事力を持っていることは間違いないですね……」

グリフィスがクロノに問うように言う。

『うん。本局や「海」の上層部には信じようとしないうちもまだいるが、いい加減現実を認識してもらわないとな……』

『……私ら、いつの間にか「井の中の蛙」になっただけと違っやるか……？』

クロノに続いてはやてが一人こちる。

「主……」

「日本の義務教育で宇宙のことも一応は学んだはずなのに、宇宙は無限の空間やということ、管理局の仕事をしている間に、すっかり忘れとった……」

『耳が痛い、はやての言うとおりでな……』

でも、差し当たっての最優先事項は、敵艦隊のことを知ることと、何とかフェイト達とコンタクトを取ることだ。』

「手立てはあるんですか？提督」

エリオが質問する。

『前者については、今、敵艦の残骸を回収しているところだ。ブラックボックス共々、戻り次第解析する。』

後者は、ここを離れる時に次元通信ポッドを置いていくつもりだ。

『ヤマト』『相模』が任務を終えた帰りにここを通る可能性も考えられる。』

…打てる手は可能な限り打っておかなければ、な』

その頃、別フロアにある大会議室には『レオニダス』の他の乗組員の家族が集まり、管理局からの説明を受けていた。

こちらは生存がほぼ絶望的であるため、あちこちで怒号や泣き声が上がっていた。

『ヤマト』 士官ミーティング室

「君達の艦を襲った艦艇は、『大ガトランチス帝国軍』の残党だ」

真田が、『レオニダス』を襲った艦船の所属を話し始める。

「大ガトランチス帝国、ですか？」

『そうだ。我々は『白色彗星帝国』と称しているが、我々といくヶ月前に血みどろの戦いを繰り広げた、本星が移動する極めて侵略的な宇宙国家だった』

「あの…、だった。とおっしゃいますと…？」

ティアナの問いに古代が応える。

「本星というか、国家の王が乗った巨大要塞戦艦が、俺達の目の前で破壊されてしまったんだ」

「…古代、映像資料を見てもらった方がいいだろう」

『そうだな。多少の準備もあるから、一旦休憩にしよう』

話すと長くなり過ぎる上に、異世界から来たフェイト達に理解してもらえるか疑わしいので、ダイジェスト化した記録映像を見せることにした。

それも、ガミラス戦当時のからだ。

最初は2192年に始まるガミラスの遊星爆弾攻撃の映像からだった。

ニューヨーク、パリ、モスクワ等、世界の主要都市が被爆していく。声を失ったフェイト達だったが、さらに驚愕する事実を告げられた。

『2193年5月5日、日本に最初の遊星爆弾が落ちた。爆心地は当時の神奈川県海鳴市。

この1発で、海鳴市は約60万の市民もろともけし飛んだんだが、それも無数の悲劇の一つでしかないんだ』

「！」

（そんな……！）

冴子が静かに言うが、「海鳴市」という固有名詞と、そこが全滅したという内容は、フェイト達に十分過ぎる衝撃を与えていた。

映像は地球が徐々に荒れていき、人類が地下に追い詰められていく光景に変わる。

地球防衛軍も懸命に迎撃するが、科学力の差はいかんともしがたく、戦力を失っていく。

そして、2199年には地球防衛艦隊は事実上潰滅。

しかし、局面を大きく変えたのが、約15万光年離れた『イスカンドル星』からの使者、サーシャ。

彼女の宇宙船は途中でガミラスの攻撃で破壊され、火星に不時着する時に命を落としてしまったが、彼女が携えてきたメッセーヅカプセルは回収され、当時、沈没した戦艦『大和』の残骸でカムフラージュして建造されていた移民艦『ヤマト』を本格的な宇宙戦艦に改造し、イスカンドルに『コスモクリーナー』を取りに赴いた。

中略

『ヤマト』の航海は10ヶ月を越え、114名中47名を失いながらも、『コスモクリーナー』を持って帰還を果たした。

一方、『ヤマト』の航海中の留守を守る地球防衛軍は新型艦を建造しながらも在来艦より格段に強力な武装を持つ新型艦は、太陽系に居座り続けるガミラス軍を駆逐・掃討する一方、土星圏までの輸送路を確保した。

それを率いていたのは、今は亡き土方。2番艦の艦長は、まだ顔に傷がない嶋津冴子。

場面は変わって2201年。つまり今年。

つい2ヶ月前、第3外周艦隊の一員として太陽系外縁部の警備についていた『ヤマト』は、地球への帰路に謎の敵からの襲撃を受ける。相前後して確認された謎の警告通信と、地球に近づくクエーサー。

それこそが白色彗星帝国こと大ガトランチス帝国の本体。

たった1年でしかない平和にとっぴり漬かり、事の重大さを理解し

ない政・軍の上層部に業を煮やし、古代たちは自動化改装工事中の『ヤマト』を奪取して飛び出した。

これにはフェイトもティアナも驚く。

自分の組織に疑念や不信を抱いても、大抵は我慢したり妥協してしまうもの。

しかし、目の前の彼らは反乱行為を冒してまで飛び出していった。組織人としては許されない行為だ。しかし、彼らはそこまで思い詰めていたのか。

組織人としては彼らを認めることはできないが、人として、彼らを全否定することができなのか？

時空管理局やミッドチルダと、この世界の地球と地球防衛軍は違うのだ。

別の世界で生きる私達の定規で彼らを測ることができるのか…？

しかし、藤堂司令長官や土方司令等、『ヤマト』を理解する上官も少なからずおり、大した追撃を受けることなく太陽系を離れ、一路『テレザート星』に向かう。

(え…？『テレザート』？)

その名はフェイトにとっても馴染み深い、第146管理外世界だった惑星。

デスラー率いるガミラス艦隊の攻撃を堪え、白色彗星の前衛ミサイル艦隊を叩き潰し、『ヤマト』はテレザートに迫る。

いつの間にか、フェイトは身を乗り出していた。

『ヤマト』は、ミサイル艦隊主力の熾烈な攻撃をやり過ごし、波動

砲で掃滅してしまった。

やはり、あそこでクロノと私が見た『ヤマト』はこの艦だったのか……。

フェイトは自分の予感が当たっていたことに、安堵とも驚きともつかない長い溜め息をそっとつけた。

第56話『お話しませう』(2)『(後書き)』

次回も『OHANASHI』に非ず、『お話し』です

艦船設定3 (地球の戦艦) (前書き)

全て作者の設定であります。
悪しからずご了承下さいませ。

艦船設定3 (地球の戦艦)

1、『ヤマト』（登録名は『大和』）級宇宙戦艦

主要諸元：数値が意味を為さない艦ゆえ、書く必要性を認めず！

ネームシップ『ヤマト』のみ建造。

言わずもがなの地球の守護神。

元々は超長距離移民艦として計画・着工されたため、タキオン機関搭載の本格的宇宙戦艦に変更されても大幅な手直しなく竣工した。

オーバースペックとも言える抗堪性を持ち、かつ

1年間無補給で単独行動が可能。

幹部乗組員を中心に、地球防衛軍でも屈指のスキルと士気の高さでいかなる絶望的難局をも克服するネ申の艦。

反面、ワンオフ艦ゆえ、後に量産された艦とはかなり性能面が異なり、大艦隊に組み込むのが困難である上、古代 進を初めとした幹部乗組員を中心に剛直な者が多く、なおかつ功績が絶大であるため、軍上層部や政治家の一部にとっては疎ましい存在であり続けている。
(2202年末時点)

2、『ドレッドノート』級宇宙戦艦

2201 - 2202年に48隻が建造された地球防衛軍の主力戦艦。

基本諸元 (第3 - 38番艦)

基準排水量：54900?

全長242? 全幅45.8?

艦首拡散波動砲×1

主砲 40.6?3連装砲塔×3

副砲 20.3?5連装固定艦橋砲×1

同4連装舷側砲×両舷

パルスレーザー×10

他、ミサイル発射管、コスモタイガー搭載可能

『ヤマト』をベースとしたと言われているが、真のタイプシップはガミラス戦役中にアメリカ合衆国が超長距離移民艦として設計し、『ヤマト』より一足早く起工した『アイオワ』級である。

同級は建造中にガミラス軍に存在が露見し、2199年に相次いで攻撃されて破損。1番艦『アイオワ』と3番艦『アーカンソー』は全壊したため廃棄。

2番艦『アリゾナ』は中破で済んだが、建造施設や人員に潰滅的被害を受けたため、工事は凍結されてしまった。(後年、大幅に改良され就役)

しかし、設計自体は優秀で、『ヤマト』とは異なり量産を考慮した構造だったため、本級のベースに採用された。

これに『ヤマト』の設計・運用データを盛り込み、人材不足に対応するため大幅な自動化・省力化を導入し、量産を容易にするためモジュール・ブロック構造を採用した。

主砲は『ヤマト』より小口径だが、射程はほぼ同等で発射間隔を短縮。

装甲板も精錬技術の改善が進んだため『ヤマト』より良質で、抗堪性も『ヤマト』と比べてさほど劣らない。

波動機関も新設計で、『ヤマト』より高速を実現した。

2201年1月に試作艦として1番艦『ドレッドノート』と2番艦『ワシントン』が竣工し、収集されたデータを元に3番艦以降を建造した。

10番艦までは各艦隊旗艦として運用するための司令部機能を持ち、5番艦『長門』は『アンドロメダ』就役まで防衛艦隊総旗艦を務めていた。

本グループは初期型、或いは旗艦型と位置づけられ、白色彗星戦役では多くが各艦隊旗艦として活躍したが、全艦戦没した。

2番艦『ワシントン』も月面基地もろとも敵巨大戦艦の砲撃で破壊され、1番艦『ドレッドノート』のみ、各種新装備のテストベッドシップとして引き続き運用されている。

11番艦『鎮遠』以降は分艦隊旗艦や純粋な打撃戦力として運用するために司令部機能はオプション化されたが、第1次改良型主砲を搭載し、攻撃力を強化した。

第39番艦以降が第2次改良型主砲、新型アビオニクスやより高出力の主機関に切り換えたため、第38番艦『ウォースパイト』までが前期型と称される。

白色彗星帝国戦役では地球防衛艦隊の主力として奮戦したが、28隻中22隻が戦没又は全損判定。

残存艦も全て中破以上の損傷を受けた。

残存6隻は修復・改装され、2202年2月までに再就役したが、修復期間と工程を省略するため、全損艦のモジュールを流用した「ニコイチ」艦も存在する。

第39番艦『相模』以降は、演算速度や容量を大幅に拡大した揚羽電機製メインコンピュータを初めとしたアビオニクスの大改良と、主機関や各バーニアの出力アップによる高加速・高機動化、主砲を第2次改良型に変更したり、舷側砲を対空射撃可能な小口径・速射砲に変更したのに加え、艦橋基部に対空ガトリングパルスレーザー砲を増設する等の近接防御火力強化を実施したため、後期型に分けられた。

前期型は数を揃えることに主眼を置いたため、加速力や対空戦闘力に不満が残ったが、後期型では質的向上が図られ、所定の加速力と機動力を実現し、対空戦闘力もある程度改善されたため、この後期型を以って『ドレットノート』級は一応の完成形になった。

しかし、『アンドロメダ』級の増備が優先されたため、白色彗星帝国の来襲前に就役したのは『相模』のみだった。

その『相模』も、乗組員の練成が済む前に白色彗星帝国の来襲が決定的になったため艦隊に編入できず、テレザート星探査任務から帰還した『ヤマト』と急遽「独立第13戦隊」を編成して参戦するという泥縄ぶりだった。

結局『相模』は大破しながらも残存。『ヤマト』共々戦後いち早く復帰。

練習航海任務中にイスカンダル星の危機を知り、急遽救援に赴いている。

第40・41番艦『メリーランド』『アイル・オブ・スカイ』は戦闘終結直後の竣工・就役となった。

第42番艦『蝦夷』は建造中に敵巨大戦艦の砲撃でドックごと破壊

されたため、第3次改良型主砲や主機関等、搭載予定の各装備品は、既存同型艦の修復に流用された。

第43 - 49番艦は艦首波動砲を『ヤマト』の強化バージョンである集束式に変更した。

うち、第47番艦『アレクサンドロス』は地球防衛艦隊旗艦として運用するために第3主砲塔を搭載せず、『アンドロメダ』並の旗艦能力を有し、無人艦運用機能も持たせた。

本級は試作艦を含む62隻を2202年までに竣工・就役させる予定だったが、白色彗星帝国戦役の結果生じた人的資源の一時的な払底で、乗組員の手当がつかなくなったあおりで第50番艦以降の建造はキャンセル。以降は無人艦の建造に切り換えられた。

【補足と余談】

2203年以降、各種新型戦闘艦の就役が進められた後も、ディンギル戦役（地球水没防止作戦）で再び地球防衛艦隊が潰滅状態になったこともあり、度重なる戦闘で数を減らしながらも、近代化改装を受けて第一線に留まり続けた。

23世紀、『ヤマト』を主役にした映画やテレビアニメ等が上。放映され始めると、地球防衛軍の艦船は『ヤマト』『アンドロメダ』を除いてあつさり撃沈されてしまう描写が多用されたため、防衛軍サイドからクレームが寄せられたというエピソードがある。

地球と対峙した各星間国家や勢力では『ヤマト』が最も有名だったようだが、数少ない例外の一つが『時空管理局』で、遭難したL級次元航行艦『レム』やXV級『レオニダス』を救援した一方、一触即発状態で対峙することもあった本級『相模』の方が有名であるらしい。

本級は量産性と戦闘力のバランスに優れ、後年の度重なる近代化改装にも対応できた余裕ある設計で、使いやすい艦と好評を得た。

また、艦体後半部を飛行甲板と格納庫に変更した『レキシントン』級戦闘空母や全通アングルドデッキ化した『インコンパブル』級戦闘空母も本級をベースとしており、基本設計は優秀であった。

反面、就役当初に近距離防御能力の低さを指摘され、白色彗星帝国戦役以後にパルスレーザーや拡散モード対応主砲への換装を余儀なくされた。

デザイン的にも『ヤマト』や『アンドロメダ』、『アリゾナ』に次いで評価が高い。

3、『アンドロメダ』級戦略指揮戦艦

『ドレッドノート級』と相前後して設計された艦隊旗艦用大型戦艦。2・3番艦は大幅に設計変更したため『改アンドロメダ』級とされる。

【諸元】（アンドロメダ）

全長275？、全幅66.2？

基準排水量98000？

艦首拡散波動砲×2

50.8？3連装主砲塔×4

20・3?6連装固定艦橋砲×1
パルスレーザー砲×12他

再建された地球防衛艦隊の象徴的存在だった。

長期間航行能力以外のカタログデータでは『ヤマト』を凌いでおり、乗組員のスキルが同じなら『ヤマト』を圧倒すると言われ、洗練されたデザインも相俟って、23世紀初頭で最も美しい戦艦と称される。

反面、歴戦の宇宙戦士達からは一律な自動化・省力化の行き過ぎを指摘され、設計に関与した元『ヤマト』技師長の真田志郎は、

『戦艦に非ず。血の通わぬ戦闘マシン』

と自嘲混じりに酷評したと言う。

事実、白色彗星本星の都市帝国との攻防戦初頭に本艦があえなく撃沈された原因は、被弾によるオート/セミオート操舵機能の麻痺とマニュアル操舵機能に迅速に変更できないまま操舵士が倒れたことが原因で、せめて『ドレッドノート』級並のマニュアル操舵機能があれば、より抗堪性が高い『アンドロメダ』は、どうにかタイタニ基地に帰還できたと言われる。

本級は『アンドロメダ』以後も9隻の建造が計画され、主要な艦隊旗艦を置き換える予定だったが、白色彗星帝国軍の攻撃で、2番艦『ネメシス』と3番艦『シリウス』は建造途中で破損したのと、その後の無人艦や新型有人戦艦の建造が優先されたため、長らく工事が凍結されてしまった。

4番艦以降は建造途中に白色彗星帝国軍の攻撃で大破したり、着工以前だったため建造はキャンセル。

【余談】

『ネメシス』『シリウス』はディンギル戦役終結後、自沈した『ヤマト』に代わる地球の守護神になるべく、大幅に設計を改めて工事を再開し、全長310?、排水量13万?、と大型化され、拡大波動砲2門搭載、無人突撃艦隊運用やマニュアルオペレーションにも十分対応した『改アンドロメダ』級戦艦として就役した。

4、接收戦艦（旧白色彗星帝国軍戦艦）

【諸元】

全長310?

推定排水量14万?

大口径固定艦橋砲（衝撃波砲）×11

10連装回転速射砲×3

7連装回転速射砲×4

艦首部翼内固定砲7連装×両舷他

乗組員数：推定300 - 450人

土星圏艦隊戦や都市帝国攻防戦で放棄され、地球防衛軍が接收した白色彗星帝国軍の大型戦艦のうち、比較的損傷が軽かった4隻を地球防衛軍籍に編入し、各種実験に使用。

主機関は地球・ガミラス同様のタキオン機関だが、メンテナンスフリー化が進み、かなり頑丈。

波動砲のような決戦兵器はなく、射程距離も地球戦艦より短いが、艦橋衝撃波砲の威力は絶大で、回転速射砲を多数有するため、中・近距離戦では危険な存在と判明した。

居住性は、地球人の水準では、高級士官はともかく、下級士官や一般兵はやや劣悪と判定された。

実験終了後は無人大型突撃艦に改造された。

固有の艦名はなく、単に『901 - 904』号戦艦とされた。

第57話『お話 しませう』(3)『(前書き)

ご指摘いただき、一部訂正しました

第57話『お話、しませう(3)』

『ヤマト』土官用予備居室

フェイトとティアナは所定の部屋に戻っていた。

『我が隊は15分後にワープに入る。各員、部署にて待機せよ。繰り返す…』

ワープ準備を知らせる相原通信長の声が流れる。

イスカンドル目指しての定期ワープが行われるのだ。

地球防衛軍側との交換説明会は、地球側の資料映像を見終わったところだ。

休憩を挟んで見せられた映像は、『ヤマト』のテレザート星上陸から、テレサが敵巨大戦艦もろとも消滅するところまでだ。

「……………」

2人とも言葉が出なかった。

彼らがわざわざあの映像を創作したとは思えない。

念のためバルディッシュに確認しても、彼らは嘘を言っていないと回答した。

「この人達は、とても厳しく悲しい戦いをしてきたんですね…」

ティアナがぼつりと呟いた。

「そうだね…」

座を締める時、あの海鳴に落とされた遊星爆弾で、古代と嶋津は両親と地元の友人をほとんど失ったと真田から聞かされた。

その時、ティアナが

「…お2人は、大切な人達を根こそぎ奪っていったガミラス帝国を憎んだことはありますか？」

と尋ねたが、それに対し、古代は、

「『ヤマト』に乗り組んでも暫くは憎んでいたよ。でも、ガミラスのパイロットの捕虜と相対したら、それじゃダメなんだと思ったのさ…」

嶋津冴子は、

『「憎しみがなかったとは言わないがね。」

海王星軌道上の艦隊戦で、やっとの思いでガミラスの巡洋艦を仕留めた時だったか、通信機から敵艦クルーの絶叫が聞こえてきたんだ…。

言葉自体はわからなかったが、あれは母親の事を言っていると直感したんだ。

それでわかったよ。連中も私達に近いメンタリテイを持っている人間なんだ、とね。

…それに、海鳴市がやられた時、私はもう軍人だったからな。軍人に求められるのは結果で、弁解は許されない。

ガミラスを憎む以前に、私は故郷の人達を守れなかつたんだ」と答えたものだ。

「この世界の地球の人達は、皆、あの戦争で、何かしら大切な人を失ったんだろうね。そして今回の白色彗星帝国との戦争でも……」
フェイトがぼつりと言った。

「この人達は、決して敵にいたくないですね……色々な意味で」
ティアナの言葉に、フェイトも無言で頷いた。

ハード面でもソフト面でも、だ。

ハード面では、この世界では、艦載砲は元より拳銃に至るまで、光学兵器が普及している。

管理局の言う「質量兵器禁止」自体が意味をなしておらず、彼らからすればお笑い草でしかないだろう。

それに、この部隊の戦闘力の高さは自分達も目の当たりにしている。さっきの映像で見た「波動砲」に至っては言葉が出ない。

その波動砲は、地球防衛軍では戦艦は元より、フリゲート艦にまで搭載されているという。今この2隻だけで、XV級の1個艦隊位は瞬殺されてしまうのではないか。

ソフト面でも、地球防衛艦隊の生き残りになった『ヤマト』『相模』らは、圧倒的に優勢な都市帝国相手に一歩も退くことなく戦い、夥しい犠牲を出しながらも、ついには逆転してみせた。

『相模』では98名中43名が戦死又はMIA、『ヤマト』に至っては142名中123名が戦死かMIAだという。

翻って自分達はどうか。

常に管理局の手厚いサポートがあり、相手方より劣勢な状況で戦闘を続けたことはないし、人員の3割が戦闘続行不能になれば部隊壊滅と判断される。

第一、自分達は故郷が滅ぶという心配をすることがない。

しかし、地球防衛軍が全滅すれば地球の人達は間違いなく命脈を絶たれていた。だからこそ、彼らは大部分の戦力を失っても、死兵と化してでも戦ったのだ。

いい悪いは別にして、彼らと自分達では戦闘の質も覚悟も違う。

彼らは殺し殺される覚悟で戦っている。到底自分達の及ぶところではない。

「でも、こちらにも収穫がありましたね」

「うん、そうだね」

テレザートで、自分達が見た事を打ち明けたら、嶋津達4人は驚いていた。しかし、すぐに、

「それならば、君達を帰すためのコンタクトを取る選択肢が増えるな……」

と言うような事を真田が呟いていた。

ここの人達は私達を元の世界に帰そうとする意思がある。彼らを信じる理由が増えた。

しかし、その前にやらねばならないことがある。

明日は自分達、時空管理局の話をしなければならぬのだが、管理局法で、魔法文化がない世界の住民に魔法の事を教えることは、原則として禁止されている。

フェイト達の知っている地球 第97管理外世界 にいるフェイトの親友やその家族は、管理局公認の現地協力者であるため、例外中の例外だ。

この世界の地球にも魔法文化はないようだから、同じように扱わねばならない。
しかし

「…フェイトさん。私達、あの時確かバリアジャケットを展開したままでしたよね…？」

「……………あ…」

そう。『レオニダス』のブリッジが被弾した時、フェイトとティアナは反射的にバリアジャケットを展開しており、その状態で彼らと会話した。

さらにフェイトは、バルディッシュを持った状態で容疑者を拘束室から出そうとし、『相模』副長の大村達も同行している。

そういえば、いつ解除したのだろうか。

『ヤマト』に収容された時は執務官制服に戻っていたはずだ。

「あちゃあ…」

「あ…」

フェイト達は頭を抱えた。

考えてみれば思い切り不審だろう。

彼らはここまで何も言ってこないが、見落としたということとは考えにくい。

（要救助者ということで見ても見ぬふりをしてたのかも知れないけど
…）

質問されたらどう回答したらいいのか。

回答次第では拘束されてしまうかも知れない。

…フェイト達はまる一晩中悩んだ。

艦船設定4 『地球防衛軍巡洋艦2200-2202』 (前書き)

例によってやりたい放題です…

艦船設定4 『地球防衛軍巡洋艦2200-2202』

当然ながら、オリジナル（ねつぞうノでっちあげとも読む）設定でんこ盛り。

巡洋艦（Aタイプ）

【標準諸元】

全長180？、全幅22？

基準排水量 12000？

艦首拡散波動砲×1

主砲：20・3？連装砲塔×3

副砲：15・2？3連装砲塔×2、同艦首固定砲×6

（艦首周りの武装は艦により変更あり）

中型ミサイルランチャー×8

大型パルスレーザー砲×8

小型パルスレーザー砲×4

太陽系内でのガミラス軍の行動が鎮静化した2200年6月以降、世界各地で細々ながら建造が始まり、アメリカの『インディアナポリス』、日本の『古鷹』、中国の『来遠』が8月に入ってほぼ同時に初竣工した。

本格的な増備は2200年末頃からで、2202年3月までに125隻が竣工・就役した。

既に建造が進められていた護衛駆逐艦（護衛艦）をタイプシップとした紡錘形艦体を採用。

汎用性に重きを置き、長期間航海以外のあらゆる任務に対応できる艦として計画・設計された。

（とはいえ、3ヶ月間の無補給航行が可能）

主砲は、戦艦のそれに比べれば威力・射程とも劣るが、速射性で上回り、単独でもガミラスのデストロイヤー艦1個戦隊を撃退できた他、仰角を80度まで確保し、ある程度の対空戦闘を可能としている。

舷側の副砲は仰角90度を確保。360度回転と相俟って死角を大幅に解消し、対空戦闘力も高い。

白色彗星戦役には延べ112隻が参戦し、うち86隻が戦没・全損判定された。

人材払底による乗組員手配困難で、2202年3月に竣工した『アーレイ・バーク』を最後に建造打ち切りとなった。

2202年5月現在、39隻が金星アステロイドベルト圏の内惑星各基地に配備されており、これらの基地にはいつ行っても必ず巡洋艦が1隻以上停泊待機している。

巡洋艦（Bタイプ）

全長・全幅はAタイプ巡洋艦と同じ。

基準排水量10000?

艦首拡散波動砲×1

主砲：20・3?連装砲塔×3

同15・2?艦首固定砲×6

中型ミサイルランチャー×6

巡洋艦Aタイプと同時に計画された警備巡洋艦。

俗にパトロール艦と呼称される。

武装と装甲を減らし、大型レーダーや各種センサーを搭載し、居住性を向上させてある程度長期間の警備任務や強行偵察に用いる。

2200年8月から2202年1月までに64隻が建造・就役。

白色彗星戦役勃発時には56隻が就役しており、哨戒・索敵任務に当たったが、47番艦『あかつき』はシリウス・プロキオン方面にまで進出してバルゼー率いる太陽系進攻艦隊の偵察に成功し、無事生還を果たしている。

戦闘終結時は過半数以上の32隻が残存し、その後竣工した8隻とともに、外惑星方面の哨戒や輸送船団護衛任務についている。

【余談】

このクラスは非常に汎用性が高く、地球防衛艦隊の何でも屋とも言うべき存在だった。

2203年以降就役した新型巡洋艦は、実質巡洋戦艦というべきもので、攻撃力は絶大だったが、火星圏でのディングル帝国軍との戦

闘で機動力不足を露呈し大打撃を受けたのに対し、旧型とされた紡錘形巡洋艦群は高い機動力を活かして健闘し、敵艦隊の地球圏侵入阻止に成功した上、損耗率も新型巡洋艦より低かったため、巡洋艦以下の中小型艦については、改めて紡錘形艦が見直されている。

第58話『お話しませう』4(『前書き』)

いつ終わるんだろ。この章…。

最後に『ヤマト』『クルー』(予定)がチヨイと出ます。

第58話『お話、しませう(4)』

フェイト達のヤマト生活も3日目に入った。

シャリオ・フィニーノの容態は安定し、ワープも問題ないが、未だ意識は戻らず、絶対安静の状態が続いている。

前日は地球防衛軍側の説明がなされ、今回の彼らの任務の意味も概ね理解した。

そして、今回はフェイト達時空管理局側の説明である。

フェイト達は、自分達が魔導師であることを彼らに明かしていない。それも当然。管理局法で、非魔法文化世界の住民に魔法の事を教えるのは禁じられている。

ましてや自分達は執務官である。法を司る立場の者が法を破るのは許されないのだが、救出される時にバリアジャケットとデバイスを展開させたままという初歩的なミスを冒していた。

フェイト達は前夜から、この問題をツッコまれたらどうしたものか悩んだ拳句、一睡もしていなかったのだ。

ゆえに前日と同じ士官ミーティング室で、真田に、

「何があつたかは知らんが、若いとはいえ、寝不足と無理が過ぎると、折角の美貌が褪せるぞ」

と真顔で言われ赤面する羽目になり、

「……と、真田がジョークを口にするという椿事があったので、早速始めようか」

等と、当事者以外を反応に困る表情にした嶋津冴子の一言で始まる事に相成った。

その冒頭、冴子はフェイト達を驚愕させる事を口にした。

「早速だが、フェイト、ティアナ。君達に重要な事実を告げなければならぬ。

……我々地球防衛軍、というか、『相模』は、2ヶ月前に時空管理局と一度接触しているんだ」

え、と驚いた表情になるフェイト達に構わず、冴子の説明が続く。

2ヶ月前、新造間もない『相模』が火星付近で乗組員の訓練中、突然至近距離に満身創痕の宇宙船がワープアウト。

すぐに人命救助作業にとりかかったが、移乗した時には、残念ながら確認できた38名は既に死亡していた。

彼らが所持していたネームプレート等から、遭難船は時空管理局所属の次元航行艦で『レム』という名だと確認した。

冴子がひと通り話すと、船骸となって漂う宇宙船の映像を示し、

「この船が、君達時空管理局の船で間違いないかな？」

「…はい、間違いありません」

フェイトは俯いたまま答えた。

ティアナも悲痛な表情になっている。

「『レム』には、艦長以下65名が乗り組んでいました…」

「我々が簡単に調べた限り、『レム』は戦闘で致命傷を受けたと断定している。

どこから来たのかはわからないが、艦内に残留した放射能を調べた限り、『レム』を攻撃した勢力は、我々が戦ったガミラスでも白色彗星帝国でもない、未知の武装勢力と判断した」

「そうでしたか…」

ティアナが頷いた。その時、フェイトが

「嶋津艦長、申し訳ありませんが、その遺体収容者リストを私にも見せていただけないでしょうか？」

と身を乗り出すようにして懇願した。

「わかった、今日中に送信する…。古代、相原に話しておいてくれ」
「わかりました」

『レム』の船体は地球防衛軍の工作艦によって曳航された後、月の軍工廠で解体されたが、機関部やアビオニクス等重要部分は、白色彗星帝国軍との激突前に地球の技術本部に搬入されていた。

トチローこと大山歳郎の話では、白色彗星帝国との戦闘の余波で調査はスローペースだと聞いているが、落ち着けば、ブラックボックスの解析も含めて進むだろう。

次に、フェイト達による時空管理局についての説明が行われる。

実際のところ、地球防衛軍側は『レム』から回収した資料である程度の事は把握しているのだが、フェイト達の説明は事前に得た情報と概ね合っていたので、冴子達が質問攻めにする事はなかった。

彼我の世界観の違いは大きく、一言で言えば、時空管理局側の世界観は、差し詰め折詰重箱のようなもの。地球防衛軍側の世界観は一つの宇宙空間というもの。

まあ、どちらが正しいとか誤っているとかの問題ではないだろう。

「…そういえば、君達の出身を聞いていなかったが、2人とも『ミッドチルダ』の出身かな？」

「はい、共にミッドチルダ出身です」

真田の質問にフェイトが肯定の返事を返した。

「そのミッドチルダが第1管理世界で、次元の海を中心というわけか」

口にしながら、冴子は内心で反発と冷笑を覚えていた。フェイト達にはなく、彼女達に命令しているであろう上層部に。

『ミッドチルダが次元世界とやらの「中心世界」とはな。神にでもなったつもりか?』

たとえ住む世界が違い、魔法が使えるようが、人間とて数多の動物の一つに過ぎず、自然や宇宙の力に比べれば、人間の力など微々たるものでしかない。

目の前のフェイト達はともかく、彼女達の属する組織に対して好意的になるのは正直困難だ。

『レム』の搜索で、管理局の制服を着たの子供達の遺体が複数確認され、しかも彼らの身分証に『空（陸）戦魔導師』とあったことも

冴子の反発心に油を注いでいた。

本人から志願したとしても、物事を多面的に見ることができない年頃の子供を、危険が多い前線任務に投入した時空管理局の大人達の思考は理解に苦しむ。

洗脳すら疑ってしまうのだ。

世界が異なるというが、フェイト達と話してみた限り、彼女達のメソタリテイは自分達とさほど変わらない。

そのあたりの事も聞きたいが、シャリオの意識が戻らない現状ではまだ難しいだろう。

「一つ確認したいが、管理世界と管理外世界の分け方には、魔法文化の有無が基準なのかな？」

フェイトとティアナはぎくりとし、思わず冴子の顔を見た。

「確か、管理局の規則では、魔法文化がない世界の住民に魔法の存在を教えるはいけないことになっていたな？」

しかし、我々は『レム』で回収した資料や、一昨日の君達の服装を見て、君達の住む世界では魔法が文化として定着していることを改めて認識した。

これは君達の過失ではなく不可抗力だから、管理局規則に反したことはなるまい？

あの時君達が身に付けていたのが『バリアジャケット』という防護服で、手にしていたのが『デバイス』と判断していいのかな？」

ダメを押すように尋ねる冴子に、フェイトは

「…おっしやるとおりです」

と肯定した。

ティアナは黙したままだが、フェイトに異議を唱える様子はなかった。

「君達が魔導師だとしても、それで我々の君達への態度や待遇が変わることはないし、君達の仲間とコンタクトする手段も探すから安心してほしい」

冴子が言い、『ヤマト』の面々も同意する。

時空管理局への好感度は今ひとつだが、組織は組織、個人は個人だし、大勢の仲間の死を目の当たりにした上、未知の組織の中に放り込まれた彼女達の心細さは想像に余りある。

自分達と違う能力を持っているとはいえ、それ以外は自分達と何ら変わらない1人の人間に過ぎないのだから。

茨城県、地球防衛軍百里基地・宇宙戦士訓練学校飛行科

昼休み。飛行科の3年次訓練生達は、朝礼時に告げられた内容に騒然としていた。

卒業生の一部が配属され訓練航海中の『ヤマト』が、僚艦『相模』とともに、暴走したイスカンダル星を救援せよという藤堂司令長官の特命を受け、数日前に出発したというのだ。

午後1時には市民向けのプレス発表が行われるという。

「すげえな、坂本先輩達！」

「ちくしょう！俺達も行きたかったなあ…」

訓練生の一人は、亡き兄より2歳下である我が身を呪っていた。彼のすぐ上の兄も宇宙戦闘機乗りで、『ヤマト』とともに戦い、つい先日戦死していた。

『俺が兄貴と年子だったら、自分もあの中に混じってイスカンドルに向かっていただろうに……』

しかし、すぐに思い直す。

柔軟かつ頑丈な身体に育ててくれた両親を責めるような考えになつた事を恥じた。

早く一人前の戦闘機乗りになつて『ヤマト』と共に戦いたいのはやまやまだが、今から焦っても仕方ないことだ。

その訓練生は空を見上げ、一人呟く。

「見ててくれ、兄貴。必ず追いつくからな……」

加藤四郎、数年後、地球防衛軍のエース・オブ・エースと謳われる男。

第58話『お話、しませう』(4)『(後書き)

またまたグダグダ化の予感…。

第59話『お話しませう』(5)『(前書き)』

フェイト達と森雪専用セクハラロボットの初対面です。

第59話『お話、しませう(5)』

ヤマト艦内、生活区画

『ヤマト』に收容されたフェイト達には、通常航行中は医務室や展望室を含む生活区画内での自由行動が認められていた。

ちなみに、フェイト達は、平時に限り時空管理局執務官制服の着用が許されている。但し、警戒体制時にはすぐ自室に戻り、発令から10分以内に制服に着替えなければならない。

バリアジャケットを展開すればいいように思えるが、『ヤマト』乗組員の多くはフェイト達が魔導師であることを知らない上、これまでの戦闘とは違い、宇宙空間戦闘ではバリアジャケットは意味を成さないからだ。

フェイト、ティアナとも、2日目夕食以降の食事は艦内大食堂『ヤマト亭』で乗組員と一緒にとるようになり、同席した乗組員とも会話するようになる程、少しずつだが打ち解けつつある。

ま、食事の時は古代、真田ら幹部乗組員が同席して、それとなく目を光らせているのだが…。

管理局の艦船もそうだが、『ヤマト』クルーも若者が多く、40代以上は艦医の佐渡と機関長の山崎だけだ。

大部分はフェイトと同年代で、年下の18歳という者も少なからず乗り組んでいた。

前日聞いた話では、古代ら初航海時からの乗組員の多くも、当時は18 - 20歳前後で実戦経験もなかったという。

その状態で往復約30万光年の航海を成功させたのだから、彼らの

スキルやメンタル、当時の艦長の統率力は称賛に値するとフェイトは思った。

フェイトとティアナは安静中のシャリオの様子見のため医務室を訪れたのだが、そこで見た光景に2人は目を点にし、しばし呼吸を忘れた。

医務室の奥にはカーテンで仕切られた畳敷きの空間があるのだが、そこで佐渡が日本酒の入ったグラスを傾けており、傍らには虎模様の猫が寛いでいる。

ここが佐渡の私室らしい。

和風空間はフェイトのかつての乗艦『アースラ』にも、当時の艦長リンデイ・ハラオウンの趣味で設けられていたが、ここはいかにも生活感があった。

ただ、フェイト達にとっての問題はその畳部屋ではなかった。

猫がいるのはまだ良いのだが、その場にいるもう1人、佐渡と差し向かいになって一升瓶を手に行っているのは、どこから見ても人間ではなかったからだ。

「コンニチハ、ハジメマシテ。」

ワタシハ、『ヤマト』生活班所属ノ探査及ビ汎用ロボット『アナライザー』ト申シマス。

ふえいとサン、ていあなサン、ヨロシクヲ願イシマス」

「「こ、こちらこそ。よろしく……」」

電子音と作動音混じりでフェイト達に丁寧に挨拶する赤い物体は、どこから見てもロボット。

一応5本指がついた両手両腕と無限軌道付きの両脚があり、辛うじて人型をしている。

しかも抑揚に乏しいが、人間とのコミュニケーションも全く問題な

い。非常に優秀な自律AIを搭載しているようなのだが、何故、ロボットが酒の相手をしているのか？

（フェイトさん、これは一体何なんでしょう…??）

（聞かないで、ティアナ。

私も軽くパニックってるんだから…）

「ああ、驚かせちゃったみたいね。

『ヤマト』では日常的な光景なの。だから悩むことないわ、というか、悩んだら負けよ」

と言いながら森 雪が入ってきた。

「「は、はい…」」

（悩んだら負けって、…ここは軍艦で、乗っているのはれっきとした職業軍人さん達よね!?)

心の中でツツコむティアナ。

フリーズするフェイト達の前で、雪は手慣れた手つきで酢烏賊を佐渡とアナライザーが差し向かっているテーブルに置いた。

しかし、次の瞬間、さらに目を疑う光景が2人を待っていた。

肴を置いてから手に消毒液を噴霧している雪の背後に近づいたアナライザーが、ひょいと雪のナース服の裾をめくったのである……。

「…!!」

「…!!」

「「……………」」

遁走するアナライザーとそれを追いかける雪の叫び声が遠ざかっていく中、まだフリーズしているフェイト達に別の声がかけられた。

「…あれも『ヤマト』初航海以来の日常茶飯事なんだ。

でも、アナライザーは雪にしかセクハラしないから、君達は安心していいぞ」

振り向くと、『ヤマト』乗組員と同じデザインで黒ラインが入った戦闘服に、左胸に錨がついた青いジャケットを着た女性が立っている。

右頬の傷で、フェイト達はその人物が部隊長兼僚艦艦長の嶋津冴子だと気づき、敬礼しようとしたが、当の冴子に制された。

「おー、嶋津。ミーティング終わったんか？」

佐渡の声がかかる。どうやら嶋津は古代達と直接会ってミーティングをしていたようだ。

「ええ、さつき終わりましたよ。

ルーキー達の様子を見ながら来たんですけど、彼女の容態はどうです？」

本来なら部隊旗艦である『相模』でミーティングを行うのだろうが、どうやら新人帰り際にシヤリオ・フィニーノの容態を確認しに来たらしい。

「大丈夫じゃ。若いだけあってもう安定してるよ。2〜3日中に目

が覚めるじゃろ」
「それは良かった」

佐渡の回答に、フェイト達も表情を明るくした。

「ありがとうございます。佐渡先生、嶋津艦長」

「いやいや、あの子の生きようとする意思の賜物じゃよ。わしらはちよっと手伝っただけじゃて」

「我々は軍人であると同時に船乗りだからな。」

難破している船を見つけたら、助けに行くのは当然のことさ」

その後2、3言葉を交わす。

フェイト達は、雪が艦長代理の古代と婚約していると知って驚いた。職場恋愛は構わないが、軍艦という特殊な環境でのそれはどうなのかと思っただが、乗組員や前艦長、果ては軍司令長官も公認の仲なので、誰も問題にしないのだという。

、フェイトは先程のアナライザーのスカートめくりについて佐渡と冴子に質問した。

「あいつはいつちよ前に雪に恋愛感情を持っておつての。」

まあ、雪には古代という意中の男がおつたから、あえなく失恋してしまつたんじゃが、今も古代以外の男が雪に接近しようとするのを妨害するんじゃ。

スカートめくりもあいつなりの親愛の情の表れなんじゃ」

「元々アナライザーは『ヤマト』乗り組みの予定はなかつたんだが、出発直前に押しかけて、当時の沖田艦長に直訴したのさ」

「……………」

佐渡と冴子のアナライザー論に耳を傾けるフェイトとティアナ。

「許可されたのですか？当時の艦長は」

「ああ、その場で許可なされたよ。」

並の艦長なら規則を縦にノーと言っただろうがの。沖田艦長という人は実に度量の広いお人じゃったからな。

だからこそ、29万6千光年という、前人未踏の大航海を成功させたんじゃないよ。

残念ながら地球帰還の数時間前に亡くなられたが、沖田艦長の教えと心は、古代ら『ヤマト』の乗組員や、この嶋津といった、直々に薫陶を受けた者達が引き継いでる。皆、沖田さんの子供達なんじゃないよ」

「……」

冴子は黙したまま語らなかつたが、穏やかな表情で佐渡の話を聞いていた。

フェイト達も何となくだが納得した。

前代未聞の大事業を手探りで成し遂げようとするのだから、杓子定規に規則を振りかざすだけではダメで、人間として懐が大きい人でなければ『ヤマト』の艦長は務まらなかったのだろう…。

と、そこに

『嶋津艦長、間もなく機体の準備が終わります。黒沢隊長がお待ちですので、格納庫へお越し下さい』

相原からの呼び出しが入った。

「おっと。ではお嬢さんの様子見をして失礼するか」

冴子は立ち上がると、奥の病室でシャリオの様子を確認してから医務室を後にした。

医務室を出る時、フェイト達に、

「明日の夜半には大マゼラン雲に入る。しばらくは警戒体制が続くから、常時戦闘服を着ていてくれ」

と言い残していった。

「……………」

フェイト、ティアナは、艦が新たな危険域に近づきつつあることを知り、緊張を隠せなかった。

第59話『お話しませう』(5)『(後書き)

次回から、イスカンダル救援作戦が始まります。
すが(汗)

もちろん多分で

第60話『最悪な裏目』（前書き）

予告と違ってしまいました。今回は管理局サイドの話です。

……こちらのクロノ君はKYではなく、苦労と苦悩の中間管理職と化しています。

第60話『最悪な裏目』

おことわり

『ヤマト』と時空管理局の時系列進行速度は必ずしも一致しません。

時空管理局・次元航行本部

一室にクロノ・ハラオウン、高町なのは、シグナム、ヴィータ、スバル・ナカジマの5名が集まった。

「では、再生するぞ」

クロノが端末の再生スイッチを入れた。

再生されたのは、先日遭難したXV級次元航行艦『レオニダス』が所属不明の艦船に襲撃された時の艦内外の映像とブリッジの音声信号だ。

前半、『レオニダス』が攻撃を受ける場面では、皆表情を憤怒と苦痛に歪めていた。

しかし中盤、「地球防衛軍」の宇宙戦闘機が敵艦に攻撃を始めると、一同は画面に釘付けになる。

そして、炎上してのた打つ敵艦が高エネルギーの束に串刺しにされ、次々と爆発していった時は、皆一様に声を失った。

「『レオニダス』を蹴り殺しにした艦隊を、ろくに反撃させないまま撃破するとは……」

シグナムが呻くように呟いた。

やがて、闇の中から2隻の艦船が姿を現す。

共にタワー状の艦橋、3連装の大型砲塔が前に2基、後ろに1基あり、1隻は水上艦に近いフォルムをしているのに対し、もう1隻は箱と円筒を組み合わせたような、相対的にシンプルな艦形をしていた。

「この艦が『ヤマト』と『相模』…。どっちがどっちなんでしょう？」

スバルが首を捻るが、シグナムが即答した。

「恐らく、水上艦に近い形をしているのが『ヤマト』、シンプルな方が『相模』だろう。

海鳴で暮らしていた頃、映像や写真で見た戦艦『大和』と共通のフォルムをしている」

「…私もそう思う」

なのはも同意した。

『レオニダス』はブリッジに直撃弾を受けたため、ブリッジ内の様子はサウンドオンリーになってしまい、フェイトとティアナは軽傷で、シャリオは意識不明のまま「地球防衛軍」に救出され、彼らの艦に収容されたのはほぼ確実に変わった。

「フェイト達が救出されたのは確実だし、救出した「地球防衛軍」も、戦闘力はともかく、思想的に危険なところはなさそうだ」

「しかし、早期に『ヤマト』『相模』や「地球防衛軍」と連絡をとり、テストロツサ達の身柄返還要請をしないと……」

シグナムがクロノを見たが、クロノは厳しい表情を崩さない。

「……彼らの地球の位置すら判らない現時点では、すぐに連絡をとるのは不可能に近い。

しかし、彼らが帰路にあの現場を経由する可能性は十分あるので、次元通信ブイを残しておいた。

フェイトならわかるパスワードを入力したから、回収されれば連絡がとれるだろう」

「……でも、『レオニダス』が襲われた世界へはまる2日かかるんですよね。

連絡がとれたとしても、『ヤマト』と『相模』が待つてくれるでしょうか？

本国へ至急戻れと命令されていたら、当然そちらを優先すると思うんですが……」

そう。『ヤマト』『相模』は地球防衛軍の所属であり、時空管理局に指示・命令する権利はない。

こちらの要請より地球防衛軍の指示・命令が優先されるのは至極当然だ。

「それは当然だろう。立場が逆であれば我々もそうする。

でも、連絡手段があれば、フェイト達や地球防衛軍とも話ができるし、座標がわかれば迎えに行ける。

しかし、話ができないければ何も始まらないんだ」

クロノの言葉に、全員が頷いた。

「フェイト達が助かっているのはいいけどよ。一連の事件についてお偉いさん達はどうか考えてんだ？」

ヴィータが質問する。

昨年から今年にかけて次元航行艦が4隻も L級1・XV級3

消息を絶ち、いずれも所属不明の敵性勢力に襲撃されたと断定された。

うち、XV級3隻については同一の勢力に襲撃されたことが判明している。

「さすがに皆、青くなっていたよ。

XV級がこつも簡単にやられたかと思うと、襲撃した連中も「地球防衛軍」にろくな抵抗も出来ずに全滅した。

彼らの艦船は管理局の艦船とさほど変わらないサイズなのに、加速力、機動力とも段違いに優れており、武装も極めて高熱量の光学兵器が主体だ。

しかも短時間で連射している。

我が管理局の艦船はおろか、聖王のゆりかごすら短時間で穴だらけにされてしまうだろう。

さらに困ったのは、次元航行艦艦長の中に、遠くの世界や探査任務を済る者が出始めていることだ。

次元世界探査はともかく、遠くの管理世界に行かないというのは現地の治安維持上も良くない。

こちらの方は影響甚大だよ。

どんなに強い魔導師でも、宇宙空間で次元航行艦をやられてしまつてはどうしようもないからね」

(……次元世界の法と正義の守護者などと気取っているうちに、底無し沼に踏み込んでしまったのかも知れないな……)

クロノは暗然と呟いた。

『ヤマト』士官予備居室

「うっ……う……ぐすっ……うっ……」

フェイトは居室のベッドに突っ伏して、噤り泣いている。

「……………」

ティアナはかける言葉が思いつかず、悲しげに見守ることしかできずにいた。

フェイトが泣いている原因は、『相模』艦長の嶋津冴子から提供されたファイルにある。

それは、正体不明の敵性勢力に襲撃された次元航行艦『レム』の死亡確認者38名のリストだった。

同じ時空管理局員が遭難したのだから、当然自分達には仲間の身元を知る権利があり、嶋津もそれを理解したからリストを渡してくれたのだが、死亡、否、殉職者の中に、エリオやキャロと同年輩の者が少なからず含まれていたのには、ティアナも大きなショックを受けた。

自分達ですら愕然としたのだから、これを見た嶋津ら地球防衛軍側は、時空管理局に拭い難い不信感を抱いたのではないか？

ティアナは暗澹たる気分に陥ったが、すぐにそれどころではなくな
った。

リストを見ていたフェイトが、1人の少女のところで凍りついたか
と思うと、その場に泣き伏したのだ。

床に落ちたリストを拾い、目を通したティアナはフェイトが泣き出
した訳を理解した。

その少女は、3年前にフェイトが違法研究所を強制捜査した折に救
出・保護した子供の1人だった。

子供達は保護された後、管理局の養護施設で暮らしていたのだが、
あの少女は、機動六課の正式設立と同じ頃に管理局入りしたらしい。
彼女は魔力ランクがAAAと、フェイトやなのはが同い年だった頃
に匹敵する天才的資質を有していたため、管理局がスカウトしたの
だろう。

うまく育てて、フェイトやなのは達の後を担うエースにと目論んで
いたのかも知れない。

彼女の管理局入りに、フェイトは賛成ではなかった。

しかし、本人の強い意思 『フェイトさんみたいな、優しくて強
い執務官になりたい』 を尊重して、強いて反対はしなかったの
だ。

（結果として、それが最悪な形で裏目に出ってしまったのね……）

どんなに優秀な魔導師でも、宇宙空間では戦えない。

よしんば宇宙用バリアジャケットがあつたとしても、スピードが秒
速キョク亜光速レベルで、大出力の光学兵器に極超音速で飛ぶ質量
兵器と機動兵器が飛び交う宇宙空間では、魔導師はお呼びでないの
だ。

（私も肝に銘じなくては…）

泣き続けるフエイトを見ながら、ティアナは思った。

執務官になれば、犯罪に巻き込まれた子供を保護する機会はずるし、後事の手配をすることもある。

しかし、良かれと思ってした事が、必ずしも本人の為になる訳でない事は、今回の件でも明らかなのだから。

医務室のアナライザーから、シャリオ・フィニーノの意識が戻ったと連絡があったのは、それから間もなくのことだった。

第60話『最悪な裏目』（後書き）

次回こそ、イスカンドル救援作戦開始です。

第61話『いざイスカンダル(1)』(前書き)

シャーリーさんが目覚めました…

第61話『いざイスカンドル(1)』

『相模』艦橋

「今晚2200時を以って、我々は大マゼラン雲に進入する。イスカンドル星は既に大マゼラン雲から脱出してしまったが、追いつくにはここを突っ切るのが早道だ。」

途中でガミラス星のマグマを盗掘した連中や、デスラーと合流しようとするガミラス軍と遭遇する可能性がある。故に、今夜2000時に全艦警戒当直体制に入る。以上だ」

隊内通信回線で、冴子は『相模』『ヤマト』乗組員に告げた。

『ヤマト』医務室

ようやく目を覚ましたシャリオ・フィニーノは、フェイトとティアナから自分がここにいる経緯を聞かされ、さすがに驚きと不安の色を隠せなかったが、

「……この人達はとても親切にしてくれてるから、安心して怪我を直すことに専念して。シャーリー」

と、フェイトから告げられてひと安心した。

「管理局や魔法のこととか、色々バレちゃったんですけど、ここの人達は『あつ、そう』くらいの反応なんですよ」

苦笑しながら言うティアナ。

「……て、ここの人達って非魔法文化圏の人なの？それなのに、どうしてバレちゃったの？」

驚くシヤリオに、

「行方不明になっていた『レム』は、ボロボロの状態でこの世界の地球の近くに来たところを発見されたそうなんです。

残念ながら、生存者なしだったようですが…。

で、一緒に回収された資料で、管理局や魔法の事も地球防衛軍に筒抜けになったみたいなんです」

ティアナが苦笑した。

「そ、そんなことって…」

シヤリオは啞然としたが、そこへ別の声がかかり、出入口から初老？の男がひょいと顔を出した。

「事实は小説より奇なり、というじゃろう？」

言わずと知れた『ヤマト』艦医の佐渡だ。

「ふむ。その様子なら、大丈夫じゃな？…ワシが艦医の佐渡じゃ。よろしくな、嬢ちゃん」

わははと大笑する。

その佐渡が退室し、入れ代わりに入室してきたのはアナライザーだが、初対面のシヤリオはもちろん、何度も顔を合わせているフェイ

トとティアナも、今のアナライザーの姿に声を失った。

シャリオに自己紹介したアナライザーは、言葉の節々に「ヒック」としゃっくりのような声を挟み、なおかつ頭部を赤く点滅させながら、千鳥足で出て行った。

「ま、まるで酔っ払ってるみたいね……」

「いえ、本当に酔っ払ってるんだそうです。あれは……」
「…へ？」

ティアナの答えに、シャリオは開いた口が塞がらない。

「シャリー、ティアナの言うとおりなんだよ。

彼は、頭部にエチルアルコールを浴びるとああなる癖があるんだって……」

「は、はあ……」

(宇宙戦艦というんだから、れっきとした正規の軍艦の筈だよな？
一体どんな人達なの？このフネは……)

『ヤマト』のクルーは変人揃いなのかと思ったシャリオは軽いパニックに陥ってしまった。

「…シャリーさん。色々とツッコミたい気持ちはわかりますけど、この艦に乗っている間は余り悩まない方がいいですよ」

ととりなしたティアナに、内心で

(悩んだら負けて、どういふフネなのよ？『ヤマト』って……。
それにティアナ、あなた本来ツッコミキャラでしょ？あなたまでボ

ケてどうするのよ?)

とツツコんだが、絶対安静の現状ではそこまでが精一杯。たちまち眠気に見舞われた。

「…済みません、色々疲れたので、もう一眠りします…」

とだけ話し、間もなく再び寝息を立て始めた。

『相模』艦内食堂「早雲峡」

当直外の乗組員達は思い思いに夕食をとっている。

数時間後に大マゼラン雲進入を控え、さすがに口数が少なくなっていた。表情にも緊張感が出ている。

その隣、士官用小食堂を転用したミーティングルームに、艦長以下の各部門責任者と飛行教導隊長の黒沢が集まり、夕食をとりながら今後の行動方針のすり合わせを行っていた。

モニターには、同様に集まっている『ヤマト』の第1艦橋メンバーが映り、意見交換を行っている。

白色彗星帝国軍残党との戦闘とそれに続くフェイト達の作業や緊急手術等で、一時は38時間の遅れを出していたが、この時点では9時間遅れにまで短縮していた。

しかし、大マゼラン雲に進入すれば、これ以上の大幅な時間短縮はできない。

『相模』の乗組員は、艦長を含めて初のイスカンダル行だが、『ヤマト』にしても「あの」大航海を経験した者は14名しか残っておらず、状況は似たようなものだ。

しかし、一番気掛かりだった乗組員、特に新人達のメンタル面は、最初の数日間は神経性胃炎で医務室に来る者はいたようだが、今は改善したようで、士気に関わるものではなさそうだ。

「お嬢さん達の様子は？」

「シャリオさんも意識が戻って、短時間ですがフェイトさん達と話せたようです」

雪がフェイト達の現状を説明する。

「それはひと安心だが、問題は、彼女達が我々の戦闘のプレッシャーに耐えられるか、だな……」

遭難した管理局の次元航行艦『レム』から回収した資料で見た限り、時空管理局の魔導師達の戦闘の多くは非殺傷設定で行われており、戦闘での死亡例は、相対的には少ない。

治安維持が目的なら犠牲者ゼロは喜ばしいことで、それを否定する気はないが、我々地球防衛軍の戦闘は、敵の意図を挫くためには、敵にはもちろん、時には味方にも非情にならなければならない。

フェイトやティアナと直に会った冴子や古代ら地球防衛軍側は、彼女達が意識して人を殺めた経験はないと見ており、流血や死を伴うこの世界の戦闘に耐えられるかと一抹の危惧を抱いていた。

「余りにもしんどそうなら、状況が落ち着くまで冷凍睡眠カプセルに入ってもらうしかないな。」

それとなく様子を見てほしいと佐渡先生に伝えてくれ」

「わかりました」

時空管理局・次元航行本部

度重なる次元航行艦の喪失と多数の乗組員の殉職・行方不明は管理局の「海」に深刻な打撃を与えていた。

また、管理局屈指のエースであるフェイト・T・ハラウン執務官も遭難し、管理外世界の宇宙船に救助されたいが、現在も連絡不能であることは、ミッドチルダの住民も驚愕した。

一般には、地球防衛軍等の事は伏せられ、単に管理外世界とだけ発表されていた。

時空管理局が最新最強と喧伝しているXV級次元航行艦をあつさり撃破できる強力な宇宙戦闘艦と、それを運用できる軍事組織が管理局のコントロールを受けずに存在する事が明らかになれば、管理世界全体に衝撃と不安をもたらし、管理局への不信感を募らせるだけでなく、反管理局組織や次元犯罪者に要らぬ勢いを与えかねないからだ。

「正直、信じたくない気持ちですが、現実から逃避して対応を誤れば、我々も同じ運命に見舞われることになりましょう…」

上座にいたミゼット・クローベルが静かに言う。

「『レオニダス』を沈めた連中は危険だが、奴らを片付けてしまった、『地球防衛軍』とやらの艦はもつと危険だ！しかも、更に強力な大量破壊兵器もあるというではないか！」

そう主張する強硬派の壮年の提督にレティ・ロウランが反論する。

「些か早計に過ぎませんか？」

『地球防衛軍』が好戦的ただけならば、戦闘はともかく、『レオニダス』の救助作業まではしないでしよう。しかも自分達の身元も明かしているんです。フェイト執務官らの身柄を我々に返す気があるのでは？」

会合は、次第に喧々囂々としていった。

第61話『いざイスカandal(1)』(後書き)

次回、いよいよ(?) 戦闘配備です。

第62話『いざイスカンダル(2)』(前書き)

ふと思いついたので、忘れてしまう前に書き込んで投稿します。

今回はPS版オリジナルキャラクターが登場します。

設定は私のやりたい放題です。

悪しからずご了承下さい。

第62話 『いざイスカンダル(2)』

2年前は数ヶ月かけて来た14万8千光年を、僅か1週間強でやってきた。

技術的には格段に進歩したのだろう。

しかし、我ら人類にとって、果たしてこれは進歩といえるのだろうか？

退歩していないと誰が断言できるのか？

大マゼラン雲・サンザー恒星系内、『相模』艦橋

「……………」
「……………」
「……………」

そこに星はなく、星だったもののかけらが漂っただけだった。

「古代、ここがガミラス星とイスカンダル星の位置で間違いないのか…？」

『はい、間違いありません』

(話で聞いたのと、実際に見るのでは大違いだな……………)

これが強制された星の死というものなのか。

寿命が尽きかけていたとはいえ、そっとしておけば、人間より遥かに長生きできただろうに……………。

「艦長、黙祷しましょう。かつての敵の本星とはいえ、こんな最期

を強いられる事はなかったはずです……」

「…そうだな……」

大村の進言を受け、冴子は立ち上がる。

他の乗組員、『ヤマト』乗組員も做って、しばし頭を垂れた。

それは、『ヤマト』医務室にいたフェイト達も例外ではなかった。

黙祷を終え、イスカンドル追跡に戻ろうとした時だった。

「左舷、9時半の方向から艦隊接近！」

「艦種は特定できるか？」

質す冴子に、三沢がややあつてから答える。

「お待ち下さい……」。

わかりました。

ガミラス艦です！ デストロイヤー艦：20、戦艦1！距離、50
宇宙?!」

「総員戦闘配備！」

すかさず大村が戦闘配備指示を出した。

とはいえ、既に警戒体制に入っており、休憩中の者も3分で全員が
配置についた。

戦闘配備についたとはいえ、ガミラスとは休戦状態だ。こちらから
攻撃するわけにはいかない。

ガミラス艦隊は速度を変えず、隊形も変えずに接近してくる。

(この距離でも攻撃隊形に移らない……。デスラーの命令が届いてい

るのか…?)

冴子がそう感じた時、

「ガミラス戦艦から通信が入っています！」

通信長のパクが声を上げた。

「ん。繋いでくれ」

ビジュアルスクリーンが切り替わり、1人の男が映し出された。見るからに歴戦の老兵然とした人物で、頭部には大きな傷痕、左眼には義眼と思しき大きなレンズがはめ込まれていた。後ろに控える部下達も老兵ばかりだ。

「私は大ガミラス帝国軍、ダブス駐留艦隊司令官、コルサック。…
…貴官が指揮官か？」

「いかにも。地球防衛艦隊所属、独立第13戦隊司令官代行の嶋津冴子だ」

冴子に睨むような視線を送りながら、コルサックが問う。

「……貴官らが我が母星の墓所にいる理由を聞かせて欲しい」

下らぬ事をぬかしたら、この場で討ち果たしてやるぞというところか。

まあ、当然だろう。

「コルサック司令、我々はデスラー総統からの緊急電を受けた軍司令部の命令を受け、暴走したイスカンドルの救援に最短ルートで赴

く途中、ここに通りかかった。

我々はかつての敵手の母なる星に哀悼の意を捧げただけだ。すぐにこの場を立ち去り、イスカンドルに向かう。これ以上の意思は一切ない」

『……………』

両者はしばらくメンチを切り合うように互いから視線を離さなかったが、コルサツクは僅かに表情を緩めた。

「……………そうか。それはデスラー総統に代わって礼を言う。

我々も総統のご命令を受け、イスカンドルを追跡する途中に立ち寄ったところだ。

総統から、『ヤマト』とその友軍との戦闘は禁じられているので、我々も貴官らと戦うつもりはない。

……………それはそうと、『ヤマト』の艦長と話がしたい。繋いでもらえるか？」

「了解した。今『ヤマト』に繋げるので、しばしお待ち願いたい。コルサツク司令」

彼らも我々と戦う意思はないようだ。艦橋にホツとした空気が流れた。

すぐに『ヤマト』に回線が繋がり、『相模』艦橋のビジュアルスクリーンにはコルサツクと古代が映し出された。

『私が「ヤマト」艦長代理の古代 進だ。

艦長はあの航海中に病に倒れ、地球帰還直前に亡くなられた。

病気療養中、私が職務代行を命じられたので、それ以来、指揮を引き継いでいる』

『……………そうか。貴艦の艦長も別の宇宙へ旅立たれたか。

我が弟を打ち破った艦長に、ひと目会って話をしてみたかった……」
「『弟?』」

瞑目するコルサツクの一言を地球側が聞き咎めた。

やや置いて、コルサツクが答える。

『貴官らが言う冥王星にあった我が軍の基地を預かり、「ヤマト」に敗れたのは、我が弟のシウルツだ』

「『!?!?』」

こんな偶然があるのか……?」

ガミラスの地球侵攻作戦で、最前線の指揮をとっていたのが、目の前の人物の血縁者だとは。

『ヤマト』 医務室

シヤリオ・フィニーノが軽い睡眠状態で、フェイト達は佐渡、アナライザーと共にいたのだが、冴子・古代らとコルサツクのやりとりは医務室にも流されていたのだ。

「ほう、人の縁とは奇妙なもんじゃなあ」

「宇宙八広イヨウデ狭ク、狭イヨウデ広インデスネ」

緊張が解け、いつものやり取りを始めた佐渡とアナライザーの傍らで、フェイトとティアナは声を失っていた。

かつて敵対した者と和解するのは、かつてのフェイト自身と高町なのはやヴォルケンリッター。

最近ではJS事件後のナンバース（一部を除く）やルーテシア達と

で経験済みだが、この世界の地球はガミラスによって滅亡寸前まで追い込まれたという。

一方、『ヤマト』はイスカンドルへ行く為、結果としてガミラス首都を破壊し尽くしたという。

互いの母なる星を破壊したのだから、自分達よりも遥かに重苦しい話だ。

「驚いたかね？嬢ちゃん達」

佐渡がフェイト達に尋ねた。

「はい…、互いに同胞の仇同士だったわけですよね」

復讐戦が勃発しても何ら不思議ではないのに、緊張状態ではあるが、爆発する様子はない。

ティアナの問いに、佐渡は

「もちろん、共に相手に言いたい事は山ほどあるじゃろつ。

しかし、自分の言い分ばかり主張しても何も始まらない。

『ヤマト』も彼らも、自らの故郷の存亡を賭けて戦い、ひとまず決着はついたのじゃ。

敵対した者を全否定し続けたら、いつまで経っても平和は来ないからのお」

その後も両者の話が進み、イスカンドルまで同航することになった。

「それ、本当なの？クロノ君……」

教導官・高町なのはは、クロノ・ハラオウンがもたらした内容に絶句した。

「事実だ。向こうを含めたいくつかの世界との転送ポートが使えなくなっている。」

今のところ次元通信は支障なく使えるが、人や荷物は昔どおり、次元航行艦で数日かけないと行き来できないんだ」

「そんな……いつ頃からなの？」

「母から『転送ポートが使えない』と本部に連絡があったのが1週間前だ。」

迂闊にも『レオニダス』の搜索とかで、僕もそちらまで気が回らなかった……」

クロノは唇を噛んだ。

「それで、原因はわかったのかよ？」

質すヴィータに、クロノは

「残念ながら原因がわからない。転送ポート自体にも故障は見当たらない」

「まさか、フェイトちゃん達の遭難と関係があるのかな……？」

「……！」

なのはの呟きにヴィータが反応した。

「フェイト達を助けた連中は『地球防衛軍』だよな？」

もう1つの地球の連中とフェイト達が接触した事も何らかの関係があるんじゃないかねえのか？」

「……そういう視点もあるか。この際あらゆる可能性を考えて分析してみるか。」

僕も、いつまでも実質的単身赴任はごめんだからな」

クロノは苦笑しながら通信を切った。

通信を終えた後、なのはとヴィータは自らのオフィスに戻った。教導プログラムを確認しながら、なのはは呟いた。

『管理局の力を簡単にはね退ける勢力が実在した……。単なる犯罪組織だけではなく、正規の宇宙軍隊も。

魔法文化がない以外は、ミッドや管理局より科学力も軍事力も上回っている。

そういう相手と、私達はどう向き合っていけばいいんだろう……』

『レオニダス』を簡単に捻った謎の艦隊と、それを全滅させた『地球防衛軍』の2隻の宇宙戦艦。

彼らの戦いぶりは、時空管理局の世界運営に強い疑問符、あるいはノーを突き付けているかのように映った……。

第62話『いざイスカンダル(2)』(後書き)

物語とは関係ありませんが、一言。

この世にローリスク・ハイリターンは存在しません。
ハイリスク・ローリターンは存在するのにな…。

第63話『いざイスカンダル(3)』(前書き)

暗黒星団帝国軍・デーダー艦隊との対決が迫っています。

第63話『いざイスカンドル(3)』

嶋津冴子率いる地球防衛艦隊13TFとガミラス軍コルサック艦隊は、つい1ヶ月余り前までは敵対していた者同士という、何とも奇妙な呉越同舟で、共にイスカンドルへの合流を目指していた。

『相模』艦橋

「何とも妙な気分ですねえ……。まあ、あちらさんも同じなんでしょうが」

副長の大村耕作が、玄米茶を口にしながらしみじみと言う。

「そつだなあ……。散々、あの艦形は敵だと教わってきたからな」

焙じ茶が入った断熱紙コップを手にながら冴子も首肯し、続ける。

「それにしても、随分と貫禄ある艦ばかりだな」

冴子が指摘したとおり、コルサック艦隊の各艦は装甲のここかしこに補修の痕が見られたり、各艦の武装が微妙に異なっていたりと、良く言えば歴戦、悪く言えば使い古した老朽艦ばかりだ。

(老兵ばかりなのか……)

恐らく、全ての艦がコルサックのような老兵主体の構成なのだろう。

地球防衛艦隊では、彼らのような老戦士達はとうに引退か、輸送艦、

護衛艦等に乗換えており、戦闘を伴う最前線に出てくるのは極少ない。

もつとも、先日の白色彗星帝国との戦闘では、土星圏決戦から護衛艦も戦闘に投入され、戦闘終結時には6割の護衛艦と老戦士達が失われていたが。

『相模』 『ヤマト』 からコスモタイガーが1機ずつ発進する。

『相模』の教導隊と『ヤマト』の新人が組になって、前方の針路哨戒をするためだ。

奇妙な艦隊（？）は、間もなくイスカンダルに追いつくと思われるところまで来ている。

近くに恒星系がない空域なのに、地球形惑星の重力反応があり、なおかつ少しずつ強くなっていることも、イスカンダル星である可能性を高くしていた。

しかし、先日ガミラス星のマグマを盗掘しようとした連中も同様にイスカンダル星を追跡している可能性が高い。

コルサククによれば、ガミラスとイスカンダル両星のマントル（外核にはそれぞれ「ガミラシウム」、「イスカンダリウム」という高放射性物質が豊富に含まれ、長距離宇宙航海や戦闘用のエネルギー源になるという）。

これまではガミラスが周辺に睨みをきかせていたが、今ではいつ穴掘り場になってもおかしくなく、現にガミラス星には盗掘屋が来た。盗掘屋にしてみれば、ガミラス星が消滅した今、イスカンダリウムだけでも確実に採掘しようと考えてもおかしくはないだろう。

また、既にイスカンダルに到達して盗掘を始めている可能性もある。住人が2人しかいないあの星では、盗掘屋どもに取り付かれたら阻止するのは不可能だ。

まあ、デスラーがそんなことを許すとも思えないが…。

(さて、どうしたものかな……?)

冴子は焙じ茶を口にしながら物思いに耽る。

問題なのはその「盗掘屋」だ。

地殻を貫ける設備と作業用艦船を持ち込むだけの力があるのだから、国家、またはかなり大規模な事業体であろうと推測される。

特に前者の場合、星間戦争の当事者になる可能性を秘めており、戦力再建途上の地球防衛軍としては戦闘は避けたいところだが、盗掘屋どもがスターシャと古代 守の身に危害を加えようとするなら、実力で排除してでも2人を救出するしかない。

(とはいえ、スターシャが素直にイスカンダルを離れるだろうか……)

実際にスターシャと面識がある古代と雪の話から推察するに、彼女は自分の命を落とすことになっても、イスカンダルを離れるようなことはないように思える。

なにより、スターシャはイスカンダルの王だ。

星を捨てることを潔しとはしないだろう。

(しかし、2人に子供が生まれていれば、別の道があるかも知れないな……)

親は子より先に逝く。その後、子供だけイスカンダルに残すのは余りにも忍びない。

子供が生まれていれば、その子は地球人でもあるし、スターシャに

は母親としての責務もあるはずだ。

（いつそ腹ボテになってくれないものかな。そうなりゃ心おきなく悪党になれるんだが……）

親の都合で子供まで死に追いやられるなど、断じて認めない。

最悪、人道的措置との名目で、家族全員拉致してでも連れ出してやる。

些か不埒な考えが冴子の頭に浮かんでいたが、哨戒機からの連絡がそれを中断させた。

『こちらアグレッサー3。前方に艦隊らしき反応を感知！艦隊又は船団と思われる！』

艦橋に緊張感が走った。

通信はコルサツク艦隊にも伝わっているはずだ。

「総員配置につけ！」

「ハタ坊（旗艦）よりアグレッサー3。十分注意の上、艦隊編成を確認されたし」

大村が当直外の乗組員にも配置命令が出し、パク通信長が哨戒機に呼びかける。

ガミラス艦隊ならコルサツクから合流を呼びかけてもらうが、そうでなければ件の艦隊の目的を探らなければならない。

もし例の盗掘屋なら警告・威嚇してご退散願うが、素直に聞かずに挑戦してくるなら攻撃するしかない。

もっともコルサツク艦隊が逃がさない可能性が高いのだが……。

「艦長、前方に地球形惑星の存在を確認。不鮮明ですが投影できま

す

冴子が無言で促すと、観測席の三沢がスクリーンを開いた。

「おお……」

「ああ……」

艦橋に嘆声が漏れる。

彼我の距離があり、恒星からも遠いため暗く、解像度も良くないが、青い海の中に南北に走る陸地は、映像で見たイスカンドル星に他ならないだろう。

「艦長、アグレッサー3より入電です！」

「艦隊は、護衛艦らしき中小型の艦艇が約10隻と、作業船、輸送船らしき大型船が6隻。形状はガミラス・白色彗星帝国いずれにも該当せずです！」

「わかった。哨戒機はイスカンドル本星に向かえ。我々は増速して件の船団を追い抜く！コルサック艦隊にも伝える」

コルサック艦隊からも了解の回答が来た。

あちらさんがどう出てくるかでこちらの出方も決まるだろう。

第1管理世界ミッドチルダ、更正教育施設

J5事件において、時空管理局と敵対した者のうち、罪状を認め、捜査に協力的な者は海上隔離施設に収容されていたが、捜査が一段落したことで、被収容者は陸上の施設に移され、社会復帰のためのプログラムを課されていた。

一部は既に別の場所に移送される等したため、ここでは戦闘機人と

いわれる7人の少女達が社会復帰教育を受けているところである。

昼休み、彼女達は指導官であるギンガ・ナカジマと共に中庭でランチボックスを開いていた。

「ギンガ、聞きたいことがあるんだが……」

一同の中で最も小柄で隻眼の少女・チンクが、ギンガに質問する。外見こそ一番幼く見えるが、収容されている少女達の中では一番早い「誕生」で、落ち着いた面倒見のいい性格と相まって、名実ともに7人のリーダー格である。

「何かしら？チンク」

聞き返すギンガに、チンクは少し間を置いて質し始めた。

「最近、マリエル技官やこの職員の様子が確実におかしいんだ。……ハラオウン執務官やランスター執務官補の事をしきりに話しているのを聞いてしまつてな……。」
彼女達が行方不明というのは本当なのか？
「え……？」

いきなり核心を突いた質問にギンガは口ごもり、凶星であることをチンク達は悟った。

ギンガはどうしたものかと考え込んだ。

答える義務はないと突き放すのは簡単だが、目の前の7人と同じ出自であるギンガには到底できなかつた。

何より、父親のゲンヤが、彼女達を養女として引き取る意向を示し

ており、ギンガ自身や妹のスバルも賛成している。いわば自分の妹になるであろう存在に、そこまで非情に徹することはできなかった。

意を決してフェイト達が遭難し、「地球防衛軍」の艦船に救助された可能性が極めて高い事を打ち明けた。

「地球って、確かギンさんのパパさんのご先祖さんや高町教導官、八神二佐の出身地っすよね？…そんな強力な艦船を持つてるんスか？」

特徴的な口調で聞いてくるのはウェンディだ。

「ううん。私達が知っている地球 第97管理外世界 には、そんな技術も勢力もないわ。

どうやら別世界の地球みたいなのよ。時代も2000年近く後だとい
うし…」

「もう一つの地球ねえ…。XV級より段違いに強い戦闘艦とそれを運用できる新たな世界と軍事組織が存在してたってことか…。管理局はどうするつもりなのかね？」

砕けた口調でギンガの説明にコメントしたのはセインだ。

彼女とデイド、オットーに対しては聖王教会が身元引受と後見を申し出ている。

「管理局としては、ともかく「地球防衛軍」にコンタクトをとる方針らしいけど、私もここまでしか知らされてないの…」

それだけ言うと、ギンガは俯いた。

5年前の空港火災で危ないところをフェイトに救われたギンガも、

彼女の遭難を知った当初は取り乱す一歩手前で、スバルも同様だった。

「そうか。3人とも元気で帰って来て欲しいものだな……」

チンクがぼつりと言い、一同が頷いた時、午後の課程開始5分前の予鈴が鳴った。

第63話『いざイスカンダル(3)』(後書き)

ぼつぼつ「永遠に」編の粗筋を考え始めましたが、『ヤマト』の出番が…。

第64話『いざイスカンダル(4)』(前書き)

臨時投稿です。

第64話『いざイスカンドル(4)』

『相模』『ヤマト』とコルサック艦隊は増速して一路イスカンドルを目指す。

件の船団の針路もイスカンドルのようだ。やはり盗掘屋か……。しかし、敢えて誰何せず、船団の左舷から追い抜くコースをとる。誰何されれば答えるが、挑戦してくるなら相応の対応をしなければならぬ。そして……。

「船団から護衛艦がこちらに向かっています。大型艦1、中型艦6！……向こうから通信！所属国家とあの星に近づく目的を説明せよ『です」

やっぱり盗掘屋か。

即座に『ヤマト』が応じる。

2〜3回応酬したが、向こうはどこまでも高圧的で、自分達の正体を明かさず、こちらの所属を聞き出そうとする。

無論、そんな要求に応じる必要はない。ましてや自分達の所属を明かさないと……。

「あの船団を海賊と認識して対処する！」

冴子は語気を強める。

「敵艦隊、こちらに高速接近！」

「よし、主砲照準。右47度、上7度！」

あちらさんは殺る気満々のようだ。

「発砲してきました！」

「よし、まず中型艦を仕留める！」

「『ヤマト』、本艦とも主砲発射準備完了！」

「コルサツク艦隊、本艦の真下を抜けて敵船団に向かいます！」

「撃てっ！！」

『相模』 『ヤマト』 の前部主砲12門の火線は、狙い過たず敵中型戦闘艦を貫いた。

やはりあれが旗艦だったのか、中型艦が爆沈するや、残る小型艦艇の隊列が乱れ始めた。

コルサツク艦隊旗艦から通信が入る。

スクリーンの向こうからでも、老将が全身から憤怒の炎を噴き上げているのがわかった。

「奴らは我々が始末する。貴官らは一刻も早くイスカンドルへ行けっ！」

「了解した！」

算を乱す敵船団にコルサツク艦隊が襲いかかった。

残った護衛艦では到底、餓狼のごときコルサツク艦隊を防げまい。

凄惨な殺戮劇を横目に見ながら、13TFは一路イスカンドルに向かう。

「アグレッサー3より入電！」

『マザータウン上空500？付近に艦隊を確認。円盤形の超大型艦

1、大型艦1、先程の旗艦と同型の中型艦12、同じく小型艦が20乃至30』、マザータウン方向に向け降下中です！」

「コスモタイガー隊、対艦攻撃準備！」

デスラー達はマザータウンを死守しているようだ。
まずあの艦隊、特に小型艦を出来るだけ片付ける必要がある。

「コルサック艦隊、敵船団を撃滅しました！すぐにこちらに向かうと！」

思ったより早かった。

(伊達に歳を食ってはいないということか…)

思わず微苦笑する。

「コスモタイガー、全機装備完了しました！」

パクが航空攻撃準備完了を伝える。

「よし、全機発進！！」

『相模』から黒沢率いる教導隊と、『ヤマト』から古代率いる新人達が次々と発進。編隊を組んだ者達から古代機を先頭に、最後尾を黒沢の小隊が受け持ってマザータウンに向かっていった。

『ヤマト』 医務室

コスモタイガーを見送った13TFは直ちに対空警戒体制に入った。

『ヤマト』が戦闘配備になった時点で、フェイトとティアナは自室から医務室に移動していた。

2人は先程から言葉が出せずにいた。

虚空に浮かぶイスカンダル星、急接近してくる円盤形戦闘艦と、それに対する『ヤマト』『相模』の砲撃、一撃で爆散する円盤形艦艇、逃げ惑う羊に襲いかかる狼のごときガミラス艦隊。

(これが、この世界の戦闘……)

『ヤマト』の戦闘を直に見るのは初めてだが、自分達の世界の戦闘とは次元が違う。

飛び交う光学兵器や質量兵器と艦載航空機。

閃光とともに艦船が砕け散る度、あの光の中で数十から数百の人命が消えていくのだ。

自分達の価値観が根底から覆されていく。

戦闘には死が伴う。こんな簡単な事すら自分達は忘れていた。

機動六課で経験してきた戦闘が甘っちょろいとは思わない。

しかし、これらは地上での事。ここは宇宙空間。

地上での常識は通用しない。

続けざまに放たれる光学兵器はミッド式の砲撃魔法を遙かに上回る速度。今目の当たりにした『ヤマト』『相模』の砲撃も、たった1門でも高町なのはのスターライト・ブレイカーを大きく凌いでいる。

(ワープエンジンというのはこれほどまでに強力なの……?)

時空管理局の次元航行艦はレーザー核融合と魔法のハイブリッド機関だが、地球防衛軍やガミラス軍の艦船は、魔法に頼らない同系列の、少なくとも管理局の艦船より数世代先行した推進機関を使用し

ているのは間違いない。

そして、地球にその宇宙用推進機関をもたらしたのは目の前のイスカンドル星だという。

また、地球上から致死量の放射能を短時間で一掃したという「コスモクリーナーD」もイスカンドル製だ。

（第一、『ヤマト』や『相模』自体が動くロストロギアもいいところじゃない……）

ロストロギアならば、本来は時空管理局員として放置しておけないが、地球防衛軍にもガミラス軍にも広く普及しているのでは、回収なんか不可能だ。

第一、自分達は地球防衛軍に助けられ、世話になっている身だ。

（いくらロストロギア回収とはいえ、正規の手続きを踏まずに干渉したら、管理局は侵略者と見做されてしまうわね……）

地球防衛軍の宇宙戦士は、普段は気のいい兄ちゃんやおじさん（一部、お姉ちゃん）でも、侵略者には決して容赦しない。

古代をはじめ、ここの乗組員を見てもよくわかる。

ティアナは、『ヤマト』『相模』ら地球防衛艦隊に、管理局の次元航行艦隊が一方的に撃ち沈められる様を想像して慄然とし、頭を強く横に振った。

（この世界では、ガトランチスやガミラスより、地球の人達の方がきちんと話し合いの場を持てるはず……）

時空管理局がこの世界の星間国家と対立したり従属させようとした

ら、間違いなく大量の血の代償を支払わされる。

実際、既に4隻の次元航行艦が失われて200名近い犠牲者を出し、自分達も危うく名を連ねそうになった。

そんな危険なこの世界で、味方というか、友誼を結べる存在がある
とすれば、地球防衛軍と地球連邦くらいしかないのでは……？

フェイトもまた、ティアナと同じ事を考えていた。

第64話『いざイスカンダル(4)』(後書き)

次回、対デーダー艦隊戦開始です。

艦船設定5 『地球防衛軍駆逐艦・護衛艦2194-2202』 (前書き)

『永遠に』で、古代兄は出てきた意味あったのかなあ…。

艦船設定5 『地球防衛軍駆逐艦・護衛艦2194 - 2202』

いつもながらご都合主義と独自設定しまくりです。悪しからず。

? M - 21881式宇宙突撃駆逐艦

全長101?、全幅18?

基準排水量2300?

3連装15.2?無砲身レーザー砲塔×2

中型宇宙魚雷発射管×3

(艦底部に大型魚雷×2吊下可)

ガミラス戦役において地球防衛艦隊の中核をなした小型快速艦である。

太陽系に所属不明の宇宙船(後にガミラス軍と判明)の侵入が始まった2188年末に開発が始まり、対ガミラス戦が始まった2192年に試作1〜3番艦が竣工。

建造は2193年末に始まり、地球上各国や月面基地で、2199年までに148隻が竣工した。

対ガミラス艦隊戦で最も活躍したクラスだが、損耗も顕著で、2199年10月時点で航行可能なのは10隻に過ぎなかった。

2199年11月、日本所属の『ありあけ』に新型タキオン機関(波動機関)を取り付け、地球〜金星・火星間で試験航海を行った結果、より高い巡航速度と主砲の威力向上、プロペラントスペース省

略による居住性向上を実現。

さらに7隻が波動機関に換装・改装されて再就役し、地球防衛艦隊再建初期を支えたが、新型艦就役が進んだ結果、2201年8月までに全艦が一旦予備役に編入された。

しかし、白色彗星帝国来襲で地球防衛艦隊が壊滅したため、2201年末に現役復帰。内惑星防衛艦隊に再配属され、金星と地球間の警備や標的艦として訓練任務に従事中。

？新・突撃駆逐艦

全長112？、全幅14？

基準排水量 3200？

艦首大型魚雷発射管×4

3連装艦首中型魚雷発射管×4

12・7？連装ショックカノン砲塔×2

連装中型パルスレーザー砲塔×4

連装小型パルスレーザー砲塔×4

2200年末から2202年2月までに247隻が竣工。

コンセプトはM-21881式突撃駆逐艦と同じ雷撃戦向けの小型快速艦。

設計、建造期間短縮のため、先に就役していた「松」（欧米では「プランツ」）級護衛駆逐艦（護衛艦）をタイプシップとし、波動砲をオミットする一方、大出力機関と宇宙魚雷主体の武装を採用。地球防衛艦隊中最も高加速・高機動力を誇った。

反面、相対的な防御力の低さで損耗率も高く、白色彗星戦役では2

31隻中184隻が失われた。

2022年4月現在、63隻が就役しているが、修復時にさらなる自動化改装を受けたり、雷撃装備を一部省略し、対空パルスレーザ砲に換装する艦も就役しつつある。

？ 『松』^{フランチ} 級護衛駆逐艦 護衛艦

全長112？、全幅14？

基準排水量 3600？

艦首波動砲（集束／拡散）又は46？連装艦首内装ショックカノン砲×1（初期竣工10隻のみ）

12.7？連装ショックカノン砲塔×3

連装中型パルスレーザ砲塔×4

大型艦首魚雷発射管×2

3連装中型魚雷発射管×4

突撃駆逐艦『ありあけ』の波動エンジン換装成功を受け、2000年2月から2011年10月までに220隻が竣工した。

日本・中国・韓国で竣工した最初の10隻は、波動砲ではなく、ヤマト主砲を2本並べたショックカノン砲を装備した。（後に拡散波動砲に換装）

11-40番艦は集束波動砲、41番艦以降は拡散波動砲を装備した。

当初、運用範囲を太陽系内に限定したため、主機関はワープ機能を

省略したが、2202年以降、一部が新型機関に換装され、近隣恒星系への航海が可能になっている。

前方投影面積が小さい紡錘型艦体を採用し、過剰ともいえる程の武装を施された。

特筆すべきは、2200年3月に最初期竣工艦で構成された日中韓合同の第1特務戦隊（同年4月、戦力増強により第1特務艦隊に改称）で、宇宙戦士訓練学校本地区校長から転じた土方 竜指揮のもと、アメリカ、ヨーロッパ地区で同型艦による部隊が編成されるまでの約2ヶ月余りの間、土星圏までの空域回復と再侵攻を図るガミラス軍の撃退にあたった。

実績は、各惑星・衛星からの資源鉱石・氷等約20万？の還送成功、デストロイヤー艦10隻撃沈した一方で喪失艦はなく、『ヤマト』のイスカンダル航海成功と相まって、地球防衛軍内における日中韓とりわけ日本の主導的地位を確立したと評価されている。

（嶋津冴子は2番艦『若竹』艦長として出撃）

2200年末以降、地球防衛艦隊の再編が本格化すると、輸送船団の護衛任務が主体になったが、2201年の白色彗星帝国来襲時には本級の大半も決戦に投入され、127隻が戦没した。

残存艦は引き続き輸送船団護衛に従事している他、近隣恒星系開発任務につく艦もある。

第65話『V.S.デーダー艦隊(1)』(前書き)

短くて、後半は半ば番外編化しております。

第65話『V S デーダー艦隊（1）』

マザータウン上空、暗黒星団帝国第1機動艦隊旗艦『プレアデス』

艦隊司令官のデーダーは身じろぎもせず、戦況を見守っていた。ガミラス星のガミラシウム採掘を邪魔した艦隊は、小癩にもイスカンドルにもやってきて我々の前に立ちはだかっているが、我が攻撃機の攻撃で次々と炎上し沈黙している。

「司令官、艦隊前進可能です」

幕僚が、艦隊の進路を阻んでいた機雷原の除去の進捗を告げた。

「よし、前進！邪魔者どもを一掃するぞ！」

指揮官席から立ち上がり、幕僚を鼓舞するように声に力を込めた。

その時だ。

「司令官、採掘船団より、新たな敵艦隊を発見したとの連絡が入りました！」

方面軍司令官のメルダースが急派した採掘船団と護衛艦隊が、新たな敵艦と接近しつつあるという。

「あそこ（海上）にいる連中の一味か？」

「報告では、大部分の艦艇はあの敵艦隊と同型艦ですが、うち2隻は全く異なる形状とのことですよ！」

「蹴散らせと伝えよ！」

20隻ばかりの敵艦が加わったとて戦況は変わらない。

デーダーは目の前の敵艦隊の始末に専念しようとしたが、

「護衛艦隊旗艦からの通信が途絶しました！」

「護衛艦隊旗艦、轟沈！」

「敵は二手に分かれ、2隻がこちらに接近中！残りは我が船団と交戦中！」

「何だと？」

いきなり護衛艦隊の旗艦が殺られただと？

デーダーは思わず舌打ちした。

その後の船団の状況も、短時間のうちに急速に悪化の一途。

「採掘船団、護衛艦隊ともに全滅しました……」

「小賢しい真似を……！」

護衛艦隊の司令官は決して無能ではなかったはず。油断したとは考えにくい。

それとも新たな敵の手際が鮮やかだったというのか？

「分派した敵艦から艦載機が発進しました。こちらに向かってきます！」

「後衛艦隊を密集させる、対空砲火を濃密にするのだ！」

ここで浮足立っては元も子もなくなる。まずは海上に居座る敵艦の処理が先だ。

デーダーは、後衛の被害にはある程度目をつぶる事にした。

『相模』艦橋

「コスモタイガー隊、敵艦隊後衛に接触。攻撃を開始しました！」
「ん…」

冴子は無言で頷いた。

第1関門は無難にくぐり抜けたようだ。

…とは言え、コスモタイガー隊の目標はあの艦隊ではなく、マザータウンとガミラス艦隊に取り付いている敵編隊の排除なのだ。

コスモタイガー隊は敵艦隊後衛に対艦ミサイルを撃ち込むとそのままフライパスし、マザータウンに向かった。

『プレアデス』艦橋

「護衛艦5隻爆沈！6隻大破炎上中！」

「つくづく小賢しい奴らめ！」

デーダーは毒づいた。

海上の連中とは異なるシルエットの敵艦から発進した戦闘攻撃機は、こちらの後衛艦隊に向けて対艦ミサイルを全弾発射し、そのまま我が艦隊の対空砲の射程外を通り過ぎ、海上の敵艦隊に向けて飛び去った。

後衛艦隊を密集させていたのが結果として裏目に出ってしまった。

敵編隊が放ったミサイルは、忌ま忌ましくも、密集した後衛艦隊を左右に分断するかのようにはぼ一直線に着弾し、被害を与えてくれ

ただ。

小勢がならなかなかどうして、こちらの神経を逆撫でてくれる。

「通信参謀、あの2隻の通信を傍受分析し、所属を探れ！」
「はっ！」

海上にいる艦隊は、どうやらガミラス星に元々住んでいた連中らしいが、あの2隻は、敵艦隊と同盟こそしているが、かなり異なる勢力なり国家なりに属しているようだ。

データーは通信参謀に件の敵艦の分析を命じた。

どんな小勢でも、ひよっとしたらとんでもない強力な勢力がバックについているかも知れない。

過大評価以上に避けなければならないのは過少評価だ。

『ヤマト』 医務室

入院中のシャリオ・フィニーノは、戦闘のストレスを避けるため、安定剤と睡眠導入剤を投与されていた。

フェイトとティアナにも、艦医の佐渡から安定剤の錠剤とミネラルウォーターが手渡され、しんどい時には飲むように言われていたが、今のところは必要なさそうに見える。

が、やはり、未経験の宇宙艦隊戦を前に、2人はかなりの緊張状態にあった。

それでも、執務官としての仕事があれば良かったのだが、その時の彼女達はお客様状態。やる事がない。

得てしてそういう場合、しょもない事を考えてしまうものだ。

「あの…フェイトさん？」

「何？ティアナ…」

2人とも、心なしか声に抑揚が乏しくなっている。

「…『ヤマト』に来てからずっと気になってた事があるんです」

「そう…。何が気になってるのかな？」

少し置いてから、ティアナが打ち明ける。

「この部隊長…、『相模』の嶋津艦長のことなんですが」

「？…嶋津艦長がどうかしたの？」

「…髪や瞳の色は違いますが…顔立ちが聖王モードの時のヴィヴィオに似ていませんか？かなり…」

「え…？嶋津艦長と？聖王化した時のヴィヴィオが…？」

2人は、「ゆりかご」艦内で聖王化したヴィヴィオを直接見てはいないが、後日、なのはに映像を見せてもらった事がある。

あの時のヴィヴィオは印象年齢が16〜17歳位だったが、嶋津は確か29歳と聞いた。

脳裏に聖王状態のヴィヴィオの顔を思い浮かべ、髪と瞳を日本人らしい漆黒に変換してサイドポニーを解いて、年齢を進めていき、最後に右頬に一文字傷を入れる…。

”…ポク・ポク・ポク・ポク…チーン…”

「……………」
「……………」

2人の顔にじつとりと汗が滲んできた。

フェイト達の脳裏に浮かんだヴィジョン……。

『野郎ども、行くよッ!』

『『応!』!』』

聖王教会騎士団の先頭に立ち、騎士達を猛々しく鼓舞する、聖王甲冑に身を固めた、高町ヴィヴィオ29歳……。

(そ、そんな未来はイヤァッ……!)

嶋津艦長には申し訳ないが、どう考えても全然嬉しくない未来絵図なのだ。

特に過保護気味なフェイトには……。

第66話『VSデータ艦隊(2)』

「敵艦載機、接近します！」

「主砲、対空放射モードに切り替わったか確認しろ！全対空火器、照準追尾始め！」

「了解！」

「コルサツク艦隊合流まで、あと2分です！」

冴子が対空戦闘準備を指示。

主砲、パルスレーザー砲が仰角をかけ、ミサイル発射管の蓋が開放された。

この時点で『相模』は『ヤマト』の真下に位置していた。

理由は簡単。『ヤマト』『相模』両艦の近接防御火器の数の差を埋めるためである。

『相模』を以降に建造された『ドレッドノート』級主力戦艦の後期型は、固定式舷側砲を廃止してガトリングパルスレーザー砲を設置したため、同型艦前期型や『アンドロメダ』級に比べると近接防御火器は充実しているが、単艦行動が前提の『ヤマト』に比べればやはり少ない。

そこで、上下に並走する隊形をとることで『ヤマト』の対空火器で『相模』も可能な限りカバーしようというものだ。

古代、黒沢に率いられたコスモタイガーが『ヤマト』『相模』をフライパスする。

何機かは煙の尾を引いているが、1機も欠けることなく戻ってきた。損傷機には教導隊機が随伴しているが、パイロットは負傷しておらず、どうやら大丈夫のようだ。

「主砲、撃てっ！」

冴子の号令一下、『ヤマト』の前部主砲6門が火を噴いた。放たれたプラズマビームは緩く放射しながら敵編隊を覆った。

エネルギー密度が薄いため、宇宙戦艦の分厚い装甲には通じないが、艦載機程度の装甲ならば熔融し爆発させたり、パイロットやアビオニクスを熱殺して機能を奪ってしまう。

それを突破できた敵機には、続いて『ヤマト』『相模』からの対空ミサイルが襲い掛かる。

最初から命中は狙っていない。近接信管で炸裂し、極超音速でばら撒かれた榴散弾が目標を襲う。

但し、理論的には障害物に当たったりしない限りは速度を保ったまま無限に直進し続けるので、味方を下がらせなければならぬのだが。

ミサイルの洗礼を免れた敵機には『ヤマト』『相模』のパルスレーザー砲の掃射が降り注ぎ、死角を突こうとした敵機には再反転したコスモタイガーが襲いかかった。

意外に強い対空砲火と要撃機に鼻白んだ敵機の一部は、いったん後方に離脱して体制を立て直そうとしたが、そこへ別の砲火が襲った。採掘船団を葬り去ったコルサック艦隊がようやく追いつき、主砲と対空ミサイルを撃ってきたのだ。

「母なるガミラスの仇に情けは無用！

1機たりとも生かして帰すな！」

『ヤマト』『相模』より短射程ながら、復仇に燃える約20隻が続け様に放つ怒りの砲火は、雨のごとく敵機に降り注いだ。

『プレアデス』艦橋

「海上の連中は放っておけ！
全艦上昇、あの艦隊を叩く！」

これ以上放置してはうるさく背後を突かれる。

海上の敵を一旦無視してでも、あの艦隊を潰すべきだ。

デーダーはそう判断し、戦力の大半を背後を衝こうとする艦隊の排除に振り向けた。

マザータウン前海上、ガミラス軍旗艦・戦闘空母艦橋

「敵艦隊、反転上昇していきます！」

幕僚の報告に、デスラーは額の汗を拭った。

やはり『ヤマト』は来た。

艦影こそまだ確認できないが、コスモタイガー編隊の先頭を切るコスモゼロを駆っているのは、間違いなく古代 進だ。

一瞬緩んだ緊張をすぐに引き締め、デスラーはすぐさま指示を飛ばす。

「戦闘可能な艦は集結せよ！」

航行不能な艦は放棄し、将兵達は他の艦に移乗！

艦長も必ず退艦・移乗するよう徹底しろ！」

「はっ！」

敵艦隊は『ヤマト』に向かったようだが、こちらを忘れては困る。我々にとどめを刺さず、背中を見せたことを必ず後悔させてやる。

「各艦、応急修理を急げ！」

タランが幕僚に指示を飛ばした。

損傷しているとはいえ、旗艦の戦闘空母の他、三段空母2隻、同型の第2戦闘空母とデストロイヤー艦30隻が今なお戦闘可能だ。何より、この旗艦のデスラー砲は無傷だ。

『ヤマト』と我々で奴らを挟撃すれば勝てる。

しかし、さすがのデスラーも、『ヤマト』に多数の「連れ」がいるところまでは予想がいかなかった。

『相模』艦橋

「敵編隊撤退！入れ代わりに艦隊が接近してきます！」

「対艦戦闘用意！」

敵戦力の内訳はわかるか？」

大村の問いに三沢がやや置いて答える。

「大型艦2、中型艦15、小型艦47！」

大型艦は『アンドロメダ』以上のサイズです！」

すかさず冴子が指示を飛ばす。

「コスモタイガーを全機戻せ！隔壁閉鎖確認！」
敵将は本気で我々を潰しに来たようだが、どっこい、そんな思惑に乗せられてたまるか。

デスラー艦隊がどのくらい生き残っているかはわからないが、数ではこちらの方が少ない。

しかし、敵より数的劣勢で戦うのは日常茶飯事だ。

コルサク艦隊もかなりの強者揃いだし、そろそろ敵さんの思うようにはさせない。

『ヤマト』 医務室

佐渡、アナライザーとも待機中だが、いつもと変わらず酒を酌み交わしている。

「……………」
「……………」

先程艦内放送で「対艦戦闘用意」が告げられた。
間もなく宇宙戦艦同士の殴り合いが始まるのだ。

艦船の数では明らかにこちらが不利なのだが、目の前の2人（？）は全く動じる様子はない。

勤務中に飲酒などあり得ないはずだが、フェイトもティアアナもツツコまない。

ここの乗組員が日常茶飯事と受け止めている以上、部外者の自分達が目くじら立てても仕方ないと割り切ることにしたのだが、

実際のところ、2人ともかなり『ヤマト』の空気に感染していたのだろう。

「嬢ちゃんたちは大丈夫かね？」

佐渡がフェイト達に尋ねてきた。

「…予想より悪くありません。今のところ大丈夫です」
「…私事です」

緊張している事には変わらないのだが、先程、この部隊の指揮官
管理局風に言えば部長 嶋津冴子が、髪と瞳の色以外は、
フェイトにとつては娘同然である親友の養女、高町ヴィヴィオが成
長した姿とイメージがダブリ、悪夢に近い想像をしてしまったこと
が、かえってそれ以上の緊張を抑えてしまったのだが。

「あの、佐渡先生？」

「ん？何かな？」

ティアナが佐渡に質問する。

「この『ヤマト』や『相模』を含めた地球防衛軍の艦船は、敵方よ
り少ない数で戦ってきたのですか？」

やや置いて佐渡が肯定の回答をよこす。

「そうじゃなあ…」

『ヤマト』は単独行動が多かったし、地球防衛艦隊も、敵の艦隊よ
り多数で戦い始めた事はないのう。

地球防衛艦隊が最も数が多かったのはついひと月余り前だったが、

それでも敵艦隊の方が数は多かった。

地球艦隊は、地の利を活かし、敵の意表をついた作戦で相手の優位を崩したんじゃないよ。

……それでも、あの都市帝国によって全滅寸前までに撃ち減らされ、死兵同然で戦って、ようやく崩壊させたんじゃないかな」

「そうですか……」

敵より多数の戦力で臨むのが戦術の基本であり、少数で多勢に挑むのは下の下だ。管理局ではそう学んできた。

しかし、戦力が整わないうちに敵が来ては仕方ないだろう。

ただ、目の前の2人は泰然自若としており、気負った様子は見られない。

ちやぶ台の脚元で丸くなっている佐渡の愛猫「ミーくん」も騒ぎ立てる様子はない。

（映像に出てこない過去に、もっと辛く悲しい思いをしてきたのかも……）

先日見せてもらった映像はダイジェストだ。

実際にはもっと血生臭い修羅場も存在したはずだ。

（正直、想像がつかないな……）

しかし、この『ヤマト』は何度となく絶望的な状況に立ち向かい、奇跡的な逆転勝ちをおさめてきたという。

（『ヤマト』の戦いぶりを見れば、奇跡を起こしてきた所以がわかるかも知れない……）

そう思うフエイトの背後の薄型スクリーンに映った宇宙空間が、光
芒で満たされた。

第67話『VSデータ艦隊(3)』(前書き)

気づいたら、20万PV行っていました。

ご覧ありがとうございます。

何か企画やろうかなあ…。

脳味噌のシワが少ないから、大層なものは思いつかないなあ…。

第67話『V S デーダー艦隊(3)』

イスカンダリウム採掘のため、マザータウンに着水したガミラス艦隊相手に優位な戦闘を展開していた暗黒星団帝国軍・第1機動艦隊であつたが、敵の新手（ガミラス・コルサック艦隊&『ヤマト』『相模』）に採掘船団を撃滅され、さらに本隊後衛にまで被害が及んだことを看過できず、艦隊司令官のデーダーは、反転して新たな敵艦隊を叩くことを決断した。

『相模』艦橋

「敵艦隊前衛との距離、16000!」

「主砲1番2番、スタンバイ!」

敵の中型艦 巡洋艦 と小型艦が高速で距離を詰めてくる。

こちらはコルサック艦隊旗艦主砲の射程9000まで引き付けてから殴りかかり、

ガミラスのデストロイヤー艦が得意とする中・近距離の砲雷撃戦に持ち込む作戦だ。

ちなみに主砲戦の管制は『ヤマト』が担当。指揮は新人の北野にとらせている。（冴子承認済）

「距離、12000!」

『相模』主砲の有効射程に入った。

「距離、10000!」

「北野、敵先頭集団の中央を叩け!」

『はいっ!』

敵の巡洋艦が撃ち始めるが、まだ至近弾はない。

「9500!」

至近弾が始める。

『ヤマト』『相模』はともかく、老朽艦ばかりのコルサック艦隊にはぼつぼつきつくなる頃合いだ。

「9000!」

「『ヤマト』より発射指示!」

「よし、撃てッ!」

『ヤマト』『相模』とコルサック艦から放たれた光の束は、敵艦隊の先頭に突き刺さる。

先頭集団で幾つもの爆発の閃光がきらめいた。

3戦艦の砲撃は敵艦隊の先頭集団を切り裂いたようだ。

先頭を潰されて動揺したか、戦術を転換したかはわからないが、敵艦隊両翼に動きが見られる。

「包囲に転換したか…。だが遅い!」

不敵に笑うコルサックの号令一下、DESTROYヤー艦が突撃を始めた。

「盗掘者と地球の小僧共に、艦隊機動の真髄を見せてやれ!」

老いたりとはいえ、やはり快速艦だ。さらに自分達の艦を自在に操っている。

コルサツク艦隊は敵艦隊左翼の包囲攻撃隊形が完成しないうちに襲いかかった。

たちまち敵艦が続けざまに火を噴き、爆発する。

「見事な手綱捌きですねえ」

大村が感嘆の声を漏らす。

「ああ、あの時の連中（シュルツ艦隊）よりも、さらに手強いな……」

冴子も同意し、笑みを浮かべる。

服装が軍服でなければ、男心を蕩かすような艶っぽい笑みなのだが、右頬の傷が触媒になり、凶悪な笑みに変容していた。

「オッサン達が意地を見せてるんだ。若者も頑張らなくてはな……」。

敵艦隊右翼に攻撃を集中しろ！」

「はいっ！」

ガミラスの老兵達に負けじと、『ヤマト』『相模』が主砲（ヤマトは副砲も）、空間魚雷を発射した。

ビームの奔流は複数の艦を串刺しにして爆散させる。

魚雷は薄い装甲を食い破って炸裂し、艦を内側から食い破った。

ふた回りばかり大型の巡洋艦も同様の運命を辿っていた。

沈没を免れても、主機関が損傷して隊列から脱落したり、艦橋への直撃弾で首脳陣が壊滅し、有効な指揮がないまま僚艦と衝突して共に轟沈する艦も続出する。

しかし、一方的な殺戮劇はそう長く続くものではない。敵艦隊の後方から太い光芒が走り、デストロイヤー艦が次々と炎上・爆発する。

「「!!」」

これは戦艦の主砲だ。さすがに業を煮やしたらしい。

「敵艦隊後方から大型艦1、接近！」

「敵の旗艦か!？」

すわ、敵の御大将のお出ましか？

「いえ、敵の本隊の中にもっと大きな戦艦がいます！」

「副将がおいでなすったか…」

大将に尻を叩かれたか、焦れて自ら出てきたか。

「コルサツク艦隊、後退します！」

戦艦の砲撃で数を減らしてはいるが、潰走にはならず、反撃して追いつめる小型艦を沈めながら撤退してみせる辺りは、なかなかの手腕だ。

（見事な撤退戦だ。戦術実技の生きた教材そのものだな）

「敵戦艦、有効射程距離まであと1分30秒です！」

「三沢、敵艦の形状をサーチしろ」

「はい」

観測席の三沢に、敵戦艦をサーチさせる。

人間の造ったものなら、どこかに攻め所があるはずだ。

「これまでの敵艦同様、円盤状の艦体ですが、艦体中央部に開放式の艦載機発着口らしき空間があります」

三沢が分析結果を告げる。

「『ヤマト』の太田観測士からも同様の報告です！」

パク通信長が『ヤマト』からの観測結果を伝える。

「バラバラに撃つてもダメだ。全ての火線を発進口に叩き込むんだ。照準急げ！。南部にも伝えろ」

「はいっ！」

ま、南部のことだから、既に照準を絞り込んでいるかも知れないが……。

敵戦艦がこちらに目標を変えたようだ。何本かの火線が『ヤマト』と『相模』の間を抜ける。

「あと20秒です！」

「『ヤマト』から照準データが来ました。入力します！」
「確認も忘れるなよ」

『ヤマト』からのデータは艦長席にも表示される。

こちらが出したデータも表示されるが、ほぼ一致している。

「有効射程距離です！」

「狙点固定！」

「よし、斉射3連。撃てっ！！！」

冴子の号令とともに、『ヤマト』『相模』両艦の前部主砲12門が轟然と火を噴く。

両艦が放ったビーム弾の大半は、狙い過たず敵戦艦の艦載機発進口に吸い込まれていった。

一方、敵戦艦の砲撃の1発がヤマトに命中したが、角度が浅かったか、装甲に弾かれた。敵戦艦が与えた有効弾はそれだけで終わった。

『ヤマト』『相模』が放ったビーム弾は艦首の艦載機発進口から艦内に飛び込み、艦載機の格納庫と弾薬庫を撃ち抜き、艦内で大爆発が発生した。

3斉射、36発の大口径艦砲を直接艦内に撃ち込まれた敵大型戦艦は、まるで内側から破裂するように大爆発して果てた。

喜びに沸く乗組員だが、

「浮かれるな！敵旗艦はまだ健在なんだぞ！」

と大村に窘められた。

『ヤマト』 医務室

診察室の一角にしつらえられたAVディスプレイに、フェイトとテ

イアナは見入っていた。

「……………」

「凄い……………」

初めて目の当たりにした宇宙空間での艦隊戦に、2人とも言葉を失っていた。

先程より敵艦船の数が多く、大型の戦艦まで登場してきたにも関わらず、『ヤマト』『相模』と同航しているガミラス艦隊は浮足立つことなく迎撃して蹴散らし、大型戦艦に至っては対戦早々、一点集中砲火であつと言う間に沈めてしまった。

「あの戦艦は艦載機発進口が前に向いていたからの。中に撃ち込めば艦載機の格納庫や弾薬庫に火が入り易いんじゃない？」

佐渡が解説する。

「それじゃ、そこを弱点と見て狙い撃ちしたというわけですか？」

「そうじゃ。いかに早く確実に相手の弱点をつかみ、攻撃を集中させて無力化するかがポイントじゃからな。」

地球防衛艦隊はそうやって戦ってきたんじゃないよ……………」
「なるほど……………」

フェイト達は大きく頷いた。

（相手のウィークポイントを素早く見抜いて、正確に多くの弾丸を撃ち込む、か…）

射撃型魔導師のティアナは思うところが多々あるようだ。

『プレアデス』艦橋

ここまでの戦況に、デーダーは怒りを隠しきれなかった。

不甲斐ない部下達と、敵を侮っていた自分に。

メルダースは既に第3陣の採掘船団を差し向けたようだが、これ以上の失態は許されまい。

こうなつては『プレアデス』を先頭に立てて奴らを叩き潰す。

ガミラスではない敵艦の身元もわかつてきた。

「天の川銀河」辺境の一恒星系から来た艦だが、よりによって、あの目障りなガトランチスを返り討ちにした「地球」で、かつ最強だという『ヤマト』だとは…。

「敵を侮っていたが、もう同じ手は喰わんぞ。イスカンドルを背に奴らを攻める！」

デーダーは立ち上がり、幕僚を鼓舞するように語気を強めた。

第67話『V.S.デーダー艦隊(3)』(後書き)

次回で決着つく…かな？

第68話『Vシッター艦隊(4)』(前書き)

咆哮！拡散波動砲

艦隊戦はひとまずおしまいです

第68話『V S データ艦隊(4)』

『プレアデス』艦橋

「艦載機発進！海上の連中を押さえ込め！」

『プレアデス』と残存している巡洋艦、護衛艦の大半は衛星軌道に上昇、『ヤマト』『相模』とコルサック艦隊に向かう。

マザータウン沖のデスラー艦隊には円盤型戦闘機と芋虫型戦闘攻撃機が向かい、押さえ込みにかかった。

「前部主砲発射用意！まず『ヤマト』を叩く！」

巡洋艦と護衛艦は他の艦を押さえ込め！」

『相模』艦橋

「敵旗艦接近！中型艦10、小型艦23！」

「有効射程まであと3分！」

「艦体の直径、350乃至400？、司令塔高さ150？！」

「艦載機発着口は確認できるか？」

「確認できません！」

使わない時はカバーされるか、別の場所にあるのか…。

その時、三沢が叫ぶように報告した。

「敵旗艦、撃つてきましたっ！ 中型艦と護衛艦も接近してきますっ！」

「アウトレンジされたか……」

『ヤマト』の有効射程まであと1分余りだが、主砲の有効射程では、図体の分、あちらの方が有利のようだ。

橙色をしたビームの束は『ヤマト』の脇を通り過ぎた。そして、3射目で『ヤマト』を捉えた。

「『ヤマト』右舷に被弾！

敵中型艦、接近してきます！」

「砲雷撃戦用意！波動砲もスタンバイしておけ」

「了解！」

『ヤマト』 医務室

”ズシン！ドーン！”

いきなり凄まじい震動が艦を襲い、フェイト達はイスに座ったまま前後左右に揉みくちやにされた。

（直撃された！）

『レオニダス』の時より距離があるのに、衝撃がさほど変わらないのは敵艦の攻撃エネルギーが強いからだろう。

「右舷、前の方じゃな」

思わず顔を見合わせるが、その向こうでは、いつの間にか手術着に着替えた佐渡とアナライザーに看護担当の男性クルーがスタンバイ

していた。
しかも焦っている様子は全くない。

(この位の被弾は慣れっ子だということ…?)

フェイト達は啞然としたが、同時に僅かながら緊張を緩めた。

『相模』艦橋

「右、1時34分に中型艦1と小型艦2、接近！」 「主砲1番2番、撃っっ！！！」

「続いて0時25分に小型艦1！」

「艦首ミサイル1番から6番、撃っっ！！！」

命中・炸裂の閃光が監視窓から飛び込むが、自動光量調整機能によりスモークが入り、乗組員の眼を保護する。

これにより、波動砲発射の時にもゴーグルを着ける必要はない。

敵旗艦は『ヤマト』を目標とし、他の艦が総出で『相模』とコルサック艦隊を押しさえ込む肚だろう。

「一歩たりとも退くなっ！臆病風に吹かれた者は儂が撃つ！」

被弾に揺れる旗艦の艦橋に仁王立ちになったコルサックが、味方を鼓舞するように号令する。

既に少なからぬ被害を受けていたが、コルサック艦隊は敵艦隊の突撃をはね返し、20隻近い敵艦を葬り去り、あるいは戦闘不能に追い込んでいた。

『相模』も既に10隻の敵中小型艦を撃沈または落伍させていた。むろん無傷では済まず、小口径砲の被弾でここかしこから煙を噴いているが、曲がりなりに戦艦。主砲等の重要部分は傷一つなく、戦闘力は落ちていない。

「敵旗艦は!？」

「『ヤマト』の有効射程外に留まり、アウトレンジしています!」

冴子の問いに三沢が答える。

スクリーンで見ると、艦体のあちこちから盛大に煙を噴いている。波動砲や主砲は無傷のようだが、このままではジリ貧だ。

「ちつ、考えたな」

大村が苦々しく吐き捨てる。

波動砲を警戒しているのか、イスカンダルを背にしたままだ。

このままでは一方的に撃たれるままだ。いくら『ヤマト』が堅牢でも中の人間が持たない。

「地上の様子は!？」

「デスラー艦隊は戦闘空母を中心に集結しています……あ、あれは!？」

突然、三沢が驚いた声になる。

「どつした?」

ただならぬ様子に問い質す冴子に三沢が応えた。

「マザータウンから小型艇が発進しました。噴火地割れに向かって
います！」

「何！？」だと

これには冴子、大村も驚いた。

そもそもあそこにいるのは古代 守とスターシャしかない。

その小型艇は決して直線には飛んでいない。あれは戦闘機の飛び方
だ。

そして、冴子はその飛び方に心当たりがあった。

「あいつ……」

「古代艦長……」

あの地割れを爆撃して再噴火させ、イスカンドルをこの場から動か
すつもりか……。

（あの、バカが……っ！）

こっちの心配より自分達の心配をしやがれ！

冴子はコンソールの下で拳を強く握り締めた。

できるなら自らコスモタイガーを駆って援護に行きたい。

しかし、自分は13TFの指揮官であり、『相模』98名、『ヤマ
ト』118名の乗組員とフェイト達3名の命に責任がある。

この時ばかりは心底、自分をこのポストにつけた亡き土方を本気で
呪いたくなった。

むろん、古代も身を引き裂かれる思いでいるのだろう。

「敵戦闘機2、小型艇に向かっていきます！……あつ、『ヤマト』か

らコスモタイガー1機、発進しました！」

三沢が緊迫した声を上げる。

パクに呼び出させようとした時、

「艦長、教導隊が出撃許可を求めています！」

隊長の黒沢は、かつて冴子や古代 守と翼を並べた事がある。彼もいても立つてもいられないのだろう。

「よし、全機出せ」

敵戦闘機が追跡している以上、古代を見捨てることはできない。ほどなく黒沢以下の教導隊8機も出撃していった。

イスカンダル地上、地割れ噴火口付近

反応爆弾を搭載した古代 守の攻撃艇は敵戦闘機2機に追撃されていた。

艇に装備されている対空火器は艇首の小口径レーザー砲2門だけで、後ろから来る敵を牽制・迎撃する火器はない。

それでも艇を左右に滑らせて敵の攻撃を回避し続けるあたりはさすが古代だったが、一瞬の隙をつかれて右舷に被弾した。

煙の尾を引きながら古代艇は噴火口に向かうが、敵戦闘機はゆうゆうと背後に接近した。

しかし、次の瞬間、さらに後ろから放たれたパルスレーザーが1機の戦闘機に突き刺さった。

撃たれた戦闘機は横転しながら地面に叩きつけられる。
もう1機は慌てて離脱を図ったが、新手的戦闘機の餌食になって爆散した。

古代 守は驚いて、右側についた戦闘機　コスモタイガー　を見た。

「真田！」

コクピットで手を振るのは紛れもなく親友の真田だ。
そして左側にもコスモタイガーがついたのを見て、また驚いた。

「あれは…黒沢か!？」

ヘルメットのバイザーを上げて敬礼しているのは、かつて同じ隊で翼を並べた1歳下の黒沢輝彦だった。

真田は右手で噴火口を指差して、先導すると言っているようだ。
一方、黒沢達は翼を翻すと、数を増やしてきた敵戦闘機の迎撃に向かったが、デスラー艦隊空母の艦上戦闘機も敵戦闘機を追って噴火口近くまでやって来ており、既にドッグファイトが起きていた。

それを後にした古代艇は真田の先導を受け、噴火口に全弾を投下した。

ほどなく、腹に響く轟音とともに、地割れから大噴火が始まる。

「成功だ、引き上げるぞ！」

「了解！」

「艦長、古代艦長は全弾投下成功。宮殿に帰還しました！」

真田技師長機、教導隊全機も帰投します！」

パクの報告に冴子は少し表情を緩めて頷き、すぐ引き締めてイスカ
ンダルの状態を質そうとしたが、一瞬早く、

「艦長、イスカンダルが動き始めました！」

よし、一気にカタをつけてやる！

「『ヤマト』に波動砲発射命令！

大村、拡散波動砲スタンバイ！

三沢、拡散波動砲のカバー範囲を計測しろ！」

「はいっ！」

「わかりました！」

『ヤマト』が集束波動砲で敵旗艦を潰し、残った艦がなおも反攻を
試みるなら『相模』の拡散波動砲で一網打尽にするのだ。
やがて、

「『ヤマト』波動砲発射しますっ！」

パクの報告の直後、『ヤマト』の艦首から光の柱が放たれ、敵旗艦
を飲み込んだ。

「敵旗艦の沈没を確認！」

三沢が報告する。

冴子は頷き、

「通信長、敵残存艦に通告。

『これ以上の戦闘は望まぬ。追跡しないから、即刻ここから立ち去

れ
とな

敵の残存艦に向けて戦闘停止を勧告した。
しかし、残存敵艦には通じなかったようだ。

「敵残存艦、散開してこちらに突撃してきます！」

さっきの波動砲が集束型だったから、散開して反撃しようというの
だろう。

しかし……。

「掃討する！拡散波動砲、発射用意！」

「了解！エネルギー充填開始！」

『ヤマト』より新しいだけあって、チャージ時間が格段に短い。

「敵艦、拡散範囲内に捕捉：拡散計測完了！」

「カウントダウン、10、9……」

「…撃てっ！！」

冴子の命令一下、艦首から放たれた光の柱は、敵残存艦群の手前で
無数の波動エネルギー弾に分離。突撃してくる敵中・小型艦群を襲
った。

殆どの艦は回避し切れず、波動エネルギー弾に襲われて大火球と化
した。

辛うじて難を逃れた艦は尚も突撃をかけてきたが、手ぐすね引いて
いたコルサック艦隊により全て討ち取られてしまった。

「敵艦全て撃沈しました！」

「よし…イスカンドルの位置を確認しろ」

敵艦隊は一掃したが、次の問題はあの2人（3人？）の救出だ。

これは敵艦隊より手強いだろうな…。

第68話『V.S.テーター艦隊(4)』(後書き)

次回はメルダースさん + 登場？

第69話『自動惑星じゃねーよ、要塞だろ?』(前書き)

【おことわり】

こちらではゴルバを「自動惑星」ではなく、「機動要塞」とします。ガトランチスの巨大戦艦の1/10にも満たないのに「惑星」はねーべよ。という理由です

今週の週刊ヤマトで完結編時の戦艦と巡洋艦の特集がありました。

近隣恒星系への進出が本格化しているのだから、艦艇も大型化するの当然で、戦艦の全長が約300?なのは納得できるとして、巡洋艦の全長が、駆逐艦『冬月』とほとんど同じというのは釈然としませんな。

やはり220?は必要かなと思いますけど…。

それ以上に、復活篇の主力戦艦やスーパーアンドロメダ級が250?280?級というのはもっと納得できません。Vガダム化かな?

さて、今回は短いです。

第69話 『自動惑星じゃねーよ、要塞だろ?』

『相模』

イスカンドルの漂流ルートを監視する傍ら、艦の損傷修理作業が行われている。

『相模』の被害は被弾箇所付近で食い止められていたため大した事はなかったが、『ヤマト』は敵旗艦の砲撃を一身に受けた結果、一部は地球で本格的修繕が必要なものもあり、『相模』工作班メンバーも助っ人として加わっていた。

しかし、両艦とも死者や後遺障害を伴う重傷者等の大きな人的損害がなかったことは幸運だった。

一方、コルサツク艦隊は、敵戦艦との交戦でデストロイヤー艦20隻中6隻が撃沈または大破後自沈。4隻が中破した。

『ヤマト』 医務室

「2人ともありがとう、手伝ってもらっちゃって」

医療班メンバーに混じって負傷者の手当てを行うフェイトとティアナに、雪が礼を言った。

「いえ。助けていただいた上、寝食の面倒まで見ていただいているんですから、この位の事は当然です」

フェイトが返し、ティアナが頷いた。

戦闘中、『ヤマト』が何度となく被弾した時は顔色をなくしていたが、すぐ落ち着きを取り戻し、ティアナをシャリオの付き添いに残したフェイトが負傷者の手当での助力を申し出、戦闘終了後ティアナも合流したのだ。

地球防衛軍艦船の艦内は地球連邦の領土。つまり時空管理局の権限外なので、魔法は使えないのだが、執務官やその補佐官は、仕事柄魔法以外の蘇生術や救命救急術もマスターしているので、問題なく負傷者の介抱を手伝えるのだ。

フェイトとティアナに傷の手当てをしてもらっている乗組員は、あからさまに嬉しそうな表情を浮かべていた。

2人とも、容貌や話す言葉は地球人そのものなので全く違和感がなく、しかも容姿端麗だから、クルーの3割が女性の『相模』とは異なり、これまで「売約済」の雪しか女性クルーがいなかった『ヤマト』に新たな花を添える恰好になった。

暗黒星団帝国軍・機動要塞『ゴルバ』・作戦司令室

マゼラン方面軍司令官・メルダースは気が重かった。

ガミラス星消滅によるガミラシウム採掘の失敗に続き、突然介入してきた小艦隊により、イスカンダリウム採掘に急派した第2次採掘船団と、ついにはデーダー率いる第1機動艦隊まで全滅させられたというのだ。

「お待ち致しました。聖総統がお成りです」

若い女の声が国家元首の到着を告げる。

「……至急の用件とは何だね？メルダース」

女の声からしばらくして聞こえてきたのは、彼らの最高指導者にして国家元首の「聖總統」だ。

「はっ、イスカンダリウム採掘遅延の報告とお詫びです」

「お詫びとは穏やかではないな。何が起きたのかね？」

最高指導者たる聖總統の方針として、良い知らせは後でも良いが、悪い知らせは速やかに報告を求められる。

「はい。イスカンダリウムの採掘であります、予想外の邪魔がはいりまして、第2船団、第1機動艦隊ともに全滅しました」

「デーダーが斃されたのか？」

第1艦隊全滅までは予想していなかったか、聖總統も驚いているようだ。

「はっ。交戦したのはガミラス人の艦隊と、地球の戦艦2隻であります」

「ふむ、デーダー程の者が討たれるとはな…。」

して、地球とは、あのガトランチスを返り討ちにした星かね？」

「はっ、間違いないかと。」

イスカンドルには女王スターシャとその夫が暮らしていますが、その夫とやらが地球人なので、恐らくは彼の者の救出に来たかと思われ
ます」

「ふむ…」

聖總統は何やら思索したようだったが、

「メルダース、君はイスカンダリウムの採掘を最優先したまえ。可能な限り平和的にな」

と勅命を下す。

「はっ、私が直接赴きます！」

臣下の礼を取り、通信が切れた後、メルダースは振り返って幕僚に命じた。

「ご命令が下った。『ゴルバ』は速やかにイスカンダルに赴き、イスカンリウム採掘の条件を整える。機関最大、全速力でイスカンダルに向かう！」

「はっ！」

特異な（地球人視点）形状をした機動要塞が加速してイスカンダルを目指す。

そう、イスカンダルをめぐる争乱はまだ終わっていないかった。

番外話2 『独立第13戦隊設立裏事情』（前書き）

こちらは土方総司令が中心で、冴子艦長は後年バージョンでチラとだけ出ます。

番外話2 『独立第13戦隊設立裏事情』

23世紀初頭の数年間、地球防衛艦隊に存在した独立第13戦隊（13TF）は、全期間を通じて旗艦だった戦艦『相模』の艦首両舷に描かれた、魔法陣を背にした魔法少女（公式側：金髪ツインテール、非公式側：オレンジツインテール）のイラストエンブレムがとみに有名だが、内惑星防衛艦隊所属ながら、他の恒星系や遠くイスカンドルまで赴く等、練習・護衛・調査・戦闘等様々な任務に従事し、かの『ヤマト』同様、『地球防衛艦隊の便利屋』『万事屋』などと称された。

しかし、13TFは、元は正せば白色彗星帝国の来襲を目前に、地球防衛艦隊における戦力の理想と現実の乖離が生んだ、偶然の産物に他ならなかった。

2201年9月某日、地球防衛軍連合艦隊旗艦『アンドロメダ』
艦長室

艦隊司令官の仕事は、単に全艦隊の指揮だけに留まらない。

指揮下の艦隊や艦船の訓練と練度の把握、時には直接指導も役目の一つだ。

殊に、第3外周艦隊襲撃事件に端を発する一連の事件は、第11番惑星襲撃により、新たな敵対勢力の存在を確かなものにし、地球防衛軍全体が危機感を持たざるを得なくなった。

（結局、古代達が正しかった……）

古代達の提案をろくに審議せずに一蹴した参謀総長や防衛会議メンバーの顔ぶれを思い出すにつれ、ハリセンでしばき倒したい気分させられる。

(戦力が足りない。あと半年、いや、せめてあと3ヶ月は欲しかったが……)

艦隊の陣容は、『ヤマト』就役以前の地球防衛艦隊とは比べものにならない。

戦闘艦では最小の護衛艦ですら、かつての戦艦を凌ぐ戦闘力を持っているのだ。

30隻を超える主力戦艦は総合性能で『ヤマト』を凌駕し、『アンドロメダ』ではさらに上に行く。

カタログデータ上では、だ。

しかし、艦の性能は乗っている者の技量も含めて決まるものだ。

先日の『ヤマト』の脱走騒ぎでその事が如実に示された。

『アンドロメダ』『ヤマト』『相模』の3戦艦によるアステロイドベルトを挟んだ追跡劇で、最も高性能であるはずの『アンドロメダ』は『ヤマト』『相模』の後塵を拝した。

『相模』から提出された航行記録で、舵を預かっていた航海長の大村が、アステロイドベルト内を全手動で操舵していたことが明らかになった時、技術本部は真っ青になり、参謀本部や防衛会議のメンバーの大半は不愉快な顔になり、それを知った土方は、内心でしてやったりとすら思った。

参謀本部や防衛会議が出した、

「『ヤマト』の成功は機械力の勝利!」

という結論に、真っ向から喧嘩を売るようなものだからだ。

土方も内心で共感したが、今から人間教育をし直す暇はない。最優先事項は艦隊を戦える態勢にすることなのだ。

彼がまず目をつけたのは輸送護衛艦隊だ。

太陽系各惑星と地球・月を結ぶ資源・物資輸送船の護衛と航路帯の警備にあたる護衛艦とパトロール艦は高速軽快、かつ波動砲も装備しており、使い方によっては強力な伏兵になる上、これらに乗り組むクルーの中には大ベテランの宇宙戦士も少なくない。

次に『ヤマト』。

跳ねっ返り揃いだ、沖田が最後に育て上げた倅（娘1名＋ロボット1機含む）達だけの事はある。

とはいえ、『ヤマト』が例のメッセージの発信源から帰ってくるのは早くても1ヶ月先だから、艦隊に組み込むことは不可能。

不測の事態への対処能力と打たれ強さが格段に優れているから、単艦あるいは少数艦での遊動部隊が相応しいだろう。

あと、最近竣工した艦で習熟訓練中の艦が何隻かあるが、例の『相模』が一番習熟度が高いようだ。

『相模』は新型の高推力機関とアビオニクスを搭載した高速戦艦だが、部隊を組む『蝦夷』等の後続艦は白色彗星の太陽系到達には間に合わないだろう。

かといって、『相模』も艦隊行動訓練をしている暇はない。

「いつそ、組ませるか……」

土方は一人呟いた。

本格的な艦隊行動は無理だが、2隻なら打撃力のある遊動部隊になる。

『相模』艦長に抜擢した嶋津は、戦艦艦長としては最年少かつ女性の身であるが、指揮官としての能力は、同期生である、かの古代守と比較しても遜色ない。

跳ねっ返り揃いの『ヤマト』クルー、特に古代ら第1艦橋の連中も、嶋津の言うことは比較的素直に聞くだろう。

だからこそ、俺の元に呼び寄せて半年間鍛え直したのだ。

まあ、戦艦艦長になってすぐ、小部隊とはいえ代将旗を掲げることになるため、無用の軋轢を避けるために、『相模』『ヤマト』は俺直属とし、嶋津の肩書は「司令官代理」にするのがベターだろう。無論、実際には「司令官」と同然の内容を要求するがな。

土方は副官を呼び、藤堂司令長官宛の人事作成を指示した。

参謀本部からは強硬な反対意見が出たが、

「我が軍はただでさえ長期的な人材難に喘いでいるところに、新たな敵が来襲しようとしているんだぞ！

この非常時に、前例など考慮する価値もない！」

と、こちらも喧嘩腰で押し通した結果、藤堂長官の決裁も下り、正式に人事発令になった。

かくして、設立当初、

「地球防衛艦隊で最も胡散臭い部隊」

と言われ、後年には

「土方司令の置き土産」

とも言われた独立第13戦隊は『相模』『ヤマト』の2隻体制。司令官代理は『相模』艦長の嶋津冴子でスタートした。

後年、肩書から「代理」が外された嶋津は、

「白色彗星戦だけの時限措置のはずだったんだがなあ。何でこんなに長持ちするんかねえ」

とぼやいていた。

番外話2 『独立第13戦隊設立裏事情』 (後書き)

次回、あの方を出す予定です

第70話 『色々な再会(1)』 (前書き)

イスカンダル追跡中のひとこまと、八神家の皆様です。

……アギト忘れた……。

第70話 『色々な再会（1）』

『相模』艦橋

古代守の爆撃噴火で戦闘空域から離脱したイスカンドルは、そのまま重力星雲からも脱出した。

「イスカンドル星、重力星雲から離脱しました。スピードも落ちていきます！」

噴火が鎮静化し、重力星雲の引力がブレーキになる形でイスカンドル星のスピードが落ちてきた。

「追跡する！取り舵120！最大戦速！！」

「はいっ、取り舵120！最大戦速に加速します！」

冴子の指示に舵を握る町田が復唱し、スロットルを開いた。

『ヤマト』とコルサック艦隊も同様に転舵・加速してイスカンドル星を追走する。

『ヤマト』医務室

機関の音と振動が僅かながら高くなり、艦が加速していることがわかる。

負傷者の手当てが一段落したフェイトとティアナは病室のシャリオの元に戻っていたが、真田に呼ばれ、新人乗組員に案内されて士官ミーティング室に足を運んだ。

「すみません、遅くなりまして」
「いや。こちらこそ急に呼び出してすまなかった」

部屋には既に真田と古代があり、モニターには『相模』艦長の嶋津冴子が映っていた。

まず真田が口火を切った。

「早速だが始めよう。
君達にわざわざ来てもらったのは、先程戦った敵艦隊が、君達の仲間が乗っていた『レム』を沈めた下手人である疑いが強いからなんだ」

えっ、という表情になったフェイト達を前に真田が続ける。

「『ヤマト』『相模』の被弾箇所から検出された残留放射能と、『相模』で保管していた『レム』の残骸から検出した放射能の特性値がほぼ同一なんだ」

と、残留放射能成分比較表をフェイト達に向けて表示した。

「……………」

脳裏に、先程の円盤艦隊から集中砲火を浴びせられ、脆くも火を噴く『レム』と、助けを呼びながら倒れていく若い乗組員達の姿が浮かび、フェイト達は苦しい表情で俯いた。

古代達はそんな彼女達を痛ましげに見ていたが、

「…それで、あの艦隊の所属等は判明したんでしょうか？」

ティアナの質問に表情を改め、画面の中の冴子が応える。

『残念ながら、現時点ではわかっていない。しかし、敵の目的はガミラス星とイスカンドル星のマグマに含まれる放射性化合物らしいことがわかっている。そいつらもイスカンドル星を追跡している可能性が高いから、案外早く連中の所属がわかるかも知れないな』

2時間後、『相模』艦橋

「イスカンドル到達まで約1時間です」

「被弾箇所の応急修理、完了しました」

「『ヤマト』の応急修理、あと15分で終了する見込です」

「コルサツク艦隊、落伍艦ありません」

『相模』『ヤマト』とコルサツク艦隊で互いに現状を報告して、情報を共有する。

ちなみに速度は、コルサツク艦隊の旗艦に合わせている。

老朽艦揃いのコルサツク艦隊でも、旗艦はその図体ゆえ、一番巡航速度が低いのだ。

それでも速度が安定しているのは、偏に乗組員の老練した技量の賜物だろう。

「敵の反応はないか？」

おかかおにぎりを手にしながら問う冴子に、

「今のところありません」

ツナマヨおにぎりを手元に置いた三沢が応える。

食堂は臨時医務室になっているため、乗組員は炊事班が配達したおにぎりで遅い昼食をとっているのだ。

敵があれで諦めたとは考えにくい。

イスカンドルを巡ってもう一悶着は避けられまい。

コルサツク艦隊、そしてデスラー率いるガミラス本隊と協力して敵を退け、古代 守とスターシャを救出しなければならない。

事は一刻を争う事態だ。状況は極めて切迫している。

ただでさえ星としての寿命が尽きかけているイスカンドルは、宇宙空間での亜光速漂流とワープで地殻に大きな負担がかかっており、いつ破局爆発を起こしても何ら不思議ではないのだ。

敵艦隊を撃滅できても、2人（+ ?）を救出できなければ、ここまで来た意味がない。

冴子ら『相模』『ヤマト』の首脳陣はそれを思い、表面は平然としながらも、内心は焦慮を募らせていた。

ミッドチルダ郊外・八神邸

八神家では久しぶりに全員が揃った夕食。狼姿がデフォルトのザフィーラは床に座って を囲んでいた。

とはいえ、皆の話題はどうしても「あれ」になる。

「…クロノ君の元にも、フェイトちゃん達の情報はあれからは全然

入つたらんそうや」

「そうなの……」

「…なのはの奴も大分堪えてるみたいだ。ヴィヴィオも夜泣きする事が増えたって……」

はやて、シャマル、ヴィータだ。

「次元航行艦の乗組員から直に聞きましたが、相次ぐ航行艦の喪失で、乗組員達の士気に悪影響が出ており、本局や地上本部へ転属を志願する者も出てきています」

出張任務から帰ったばかりのシグナムが言う。

「無理もないやろ。艦船がああも一方的に撃破された事例は、管理局史上初めてやからな。」

しかも、どこで襲われるか皆目わからん。

フェイトちゃん達を助けた『ヤマト』『相模』だって、恐らくは任務中でたまたま通りかかっただけやろな。

どんなに優秀な魔導師でも、宇宙空間では生身では戦えへんし、一連の事件で、次元航行艦の戦闘能力が思った程でないことが明るみに出てしもたんや。航行本部は真っ青やで」

はやてが長嘆息をついた。

「そつえば、フェイトさん達を助けたのが『地球防衛軍』の宇宙戦艦だというのは発表されていないですね？」

等身大モードのリンフォース・ツヴァイ（リン）が疑問を口にした。

一般向けプレスリリースでは、『地球防衛軍』等については一切触

れられておらず、管理外世界の宇宙船とだけ発表されているからだ。それにはシグナムが答える。

「『レオニダス』を沈めた奴らにせよ、テストロツサ達を助けた『ヤマト』『相模』にせよ、今の管理局の手に負える相手ではないからな。」

そんなことが明るみに出たら、管理局への信頼が揺らいだり、反管理局勢力や次元犯罪者達を勢いづかせかねん。

対応を誤れば、管理局の『海』が壊滅する可能性すら出てきたんだからな」

「「「……………（冷汗）「「「

一同の脳裏に、いつか見た、『ヤマト』の超高エネルギー砲によって消し飛ぶ次元航行艦隊が浮かんでいた。

第71話『色々な再会』(2)『(前書き)』

今回も短いですが、いよいよあの方が登場します。

第71話 『色々な再会(2)』

『相模』艦橋

「イスカンドルまで60万？。映像、出します！」

スクリーンにイスカンドル星が映し出された。

恒星から遠いので解像度を上げているが、大半を占める海洋部分の中に浮かぶように存在する南北 暴走漂流で地軸がずれているが に伸びた陸地。『ヤマト』が持ち帰った映像そのものだ。

「……………」

しばし無言で見上げ続けた。

映像は艦内各所に流され、乗組員もそれぞれの持ち場で見入っている。

『ヤマト』でも同様の光景があった。

病室にも映像が流され、フェイト、ティアナと、意識が戻ったシャリオ・フィニーノが見入っていた。

「綺麗な星ですね……………」

「うん。寿命が尽きかけているというのが信じられないね……………」

「……………」『ヤマト』のエンジンや放射能除去装置もここからもたらされたんですよ……………」

「うん……………」

十分ロストロギアの宝庫だ。これまで知られていなかったのがおかしいくらいだ。

管理局員としてはこのまま放置してはおけないのだが……。
イスカンドルの女王であるスターシャは、外見とは裏腹に大変意思が強靱だと森 雪は話していた。
そういう人が唯々諾々と管理局に従うとは思えないし、そんなことをすれば『ヤマト』や地球防衛軍をも敵に回してしまうだろう。

管理世界でさえ、管理局に反感を抱く人が少なくないのに、基本的にまだ管理局にとって未知な部分が多く、かつ危険極まりない軍事勢力が複数存在するこの世界で敵を増やすことは愚の骨頂ではないのか？

(…そもそも、この世界にはこの世界のルールがあるはず。管理局がそれを無視して踏み込む権利があるのかしら…?)

ティアナはふと思う。

敬愛する兄の殉職に際し、管理局側が示した反応に失望と反発を覚えた事がある彼女は、口にもこそ出さないが、目の前の直属の上司や、かつての直属上官ほどは管理局に心酔していない。

『ヤマト』の乗組員や『相模』の嶋津艦長は基本的に親切だし、こちらの話にも最後まで耳を傾けてくれる。ひよっとしたら時空管理局の高官以上に。

とはいえ、耳を傾けてくれるのと賛同を得るのは全く別問題で、しっかり反論されたり、バツサリ斬られてしまうこともあるのだが、こちらの考えや思いを一旦は受け止めてくれる事は率直に嬉しい。

ともすると管理局の士官局員、殊にミッドチルダ出身の高ランク魔導師の中には、自分の意見や考えを相手に押し付ける者が少なからず存在し、周囲を省みない言動が周囲の反発を招いた挙げ句、事件

解決に手間取ったり冤罪事件になった事例は1件や2件ではないのだ。

(同年代の管理局士官には勘違いしてる人が結構いるのに…。やはり何度も死線をくぐり抜けた人は違うのかな…?)

ティアナは、フェイトら元機動六課の隊長達と同年代の管理局士官を思い浮かべて考え込んだ。

『相模』艦橋

「前方から艦隊接近。

…デスラー総統の艦隊です！」

スクリーンに、デスラー総統の旗艦と思しき真紅の戦闘空母を中心に、ガミラス機動部隊の象徴である三段空母、お馴染みの各種デストロイヤー艦、コルサック艦と同型の戦艦等が映し出されていた。

「コルサック艦隊とデスラー総統との間で通信が行われているようです」

到着の挨拶を終えたのか、コルサック艦隊はデスラー艦隊に合流し始めた。

「艦長、『ヤマト』とデスラー艦隊の間に回線が繋がりました。こちらにも接続要請です！」

冴子が頷くと映像が繋がり、スクリーンには『ヤマト』の古代と、これまでは写真でしか見なかったデスラー総統が映し出された。

艦橋の空気がピンと張り詰め、息を呑む者もいる。

つい最近までの敵国の指導者がそこにいるのだから、平静を保つのは至難の業だ。

『デスラー、紹介する。』

俺の先輩で、兄の戦友の嶋津艦長だ』

古代がデスラーに冴子を紹介した。

「…お初にお目にかかる、デスラー総統。

戦艦『相模』艦長、嶋津冴子です」

挙手して軽く自己紹介した。

デスラーは応えるかのように右手を挙げて軽く頷く。

『…大ガミラス帝国総統のデスラーだ。』

コルサツクから聞いたが、我らが母なる星を吊ってくれた事に感謝する。嶋津艦長』

挨拶もそこそこに、古代とデスラーとの間で情報交換がなされる。

デスラーはスターシャ達に対し、何度となく脱出し、こちらに移乗するよう説得しているのだが、2人ともイスカンドルを離れようとならないという。

「…私からも呼びかけてみよう」

冴子は2人に切り出し、パク通信長にスターシャとの回線接続を指示した。

しばらくして、

「イスカンドルと回線が繋がりました。『ヤマト』にも接続します！」

冴子が頷くや否や、スクリーンの画面が3分割され、古代 守とスターシャが加わった。

「いよっ！」

『お前、ひよっとして嶋津か?』

「別にひよっとしなくても私だ。驚いたか?」

『ああ、お前が戦艦の艦長という事実が驚天動地なんだが…』
「即答かよ！」

2人のやり取りを、各艦のブリッジクルーに、スターシャとデスラー総統が見ており、啞然としたり、呆れた表情を見せている。

(こんな時に何やってんだ、こいつらは…)

対ガミラス戦当時から、この2人は戦場でもこんな調子だ。

相も変わらず緊迫感のない会話をする2人に、真田はほとほと呆れ返った。

「…ま、理由は言い出しつぺの土方さんに聞いてくれと言いたいが、それは取り敢えず置いて、だ…」

「兄さん、スターシャさん！」

「古代、なぜ脱出しないんだ!?!」

(…………orz)

冴子が話す前に、我慢できなくなった古代進と真田が古代 守とス
ターシャに脱出を勧め始めた。

第72話『色々な再会』(3)『(前書き)』

来週の週刊ヤマトには『アリゾナ』が出るようです。

この週末は都合により更新できないか、すごく短い更新かも知れませんが、

第72話『色々な再会(3)』

古代(弟)や真田の説得にも関わらず、守とスターシャは首を縦に振らない。

古代守曰く

「自分はもうイスカンダルの人間であり、この星と運命をともにする」

と。

その心情はよしとしよう。夫婦は運命共同体なのだから。しかし。

冴子は、最大の疑問を口にした。

「古代、太郎か花子は生まれたのか？」

スターシャは頭上に？をいくつも浮かべていたが、古代(兄)の表情がみるみるうちに曇った。
凶星のようだ。

「……サーシャだ」

愛娘の名を告げる。

「「「!?!?!」」」

その名を聞いた冴子、『ヤマト』のブリックジクルー、そしてデスラ

「は驚きより納得した表情になり、同時に攻め手を見つけた顔つきになった。」

「ならばなおの事、娘が巣立つまで、親として果たすべき事があるだろう？古代！」

「そうだよ、まさかサーシャまで一緒に死なせる気なのか！？兄さん」

「…私がこのような事を言う資格はないかも知れぬが、君達は未来を託する者として、サーシャを産んだのではなかったのかね？」

デスラーも加勢する。

「古代、帰って来い！スターシャとサーシャと一緒に！」

「スターシャさん、貴女は地球のために十二分の好意を示して下さいました。」

地球は、貴女と娘さんを歓迎します！ ですから……」

真田に続き、雪も涙ぐみながら説得に加わる。

「……………」

2人ともさすがに苦しげな表情になる。

まだ乳飲み子であろうサーシャを人質にする形なのは心苦しいが、3人の命には変えられないし、サーシャを孤児にするわけにもいかないのだ。

守もスターシャも、弟や友人達の気持ちは痛い程解っているから、冴子達を責めない。

「守、私はどうしたら……………」

スターシャが苦しい胸中を吐露する。

『ヤマト』 医務室

シャリオがまた眠りに入ったため、フェイトとティアナは医務室に戻り、畳に座り、佐渡とちやぶ台を囲みながらブリッジから流れてくる映像を見ていた。

（いいのかな、部外者の私達までブリッジの映像を見ちゃって…）
まだ警戒体制なのに、ブリッジの映像が映し出されたため、2人は慌てて退出しようとしたが、

「ああ、構わん構わん。ちゃんと古代から許可が出てるからの…それに、百聞は一見に如かずじゃよ」

確かにそのとおり。初遭遇の世界の姿を見て知るのも管理局員の仕事だ。

ティアナは、古代兄弟から目を離せなかった。

佐渡から聞いた古代艦長代理の身の上。
両親はガミラスとの戦争で亡くなり、肉親は兄一人しかいないのは、かつての自分達みたいではないか。

（お兄さん、か……）

フェイトは義兄のクロノ一家を思い浮かべていた。

そして、当のクロノは、眉間にシワを刻みながら記者会見用の資料を確認していた。

義妹の遭難に加え、自宅がある地球を含むいくつかの世界との転送ポートが原因不明の使用不能で家族に会えずにいるストレスも疲れに拍車をかけている。

記者会見を開く事になったのは、XV級次元航行艦『レオニダス』襲撃とハラウン執務官ら救出の詳細が新聞にすっぱ抜かれたからだ。

たちまちテレビ局等が走り回り、高町なのはや八神はやて、スバルナカジマら、フェイトの友人や旧機動六課隊員らにまで取材申し込みが殺到したり、フェイトが後見人になっている高町ヴィヴィオまでマークされる事態に波及したため、遂に管理局も記者会見を開かざるを得なくなったのだが、一連の対応に当たってきたクロノ・ハラウンが記者会見に出る代わりに、それ以外の管理局員や家族への取材を自粛させることになった次第だ。

2時間前、クロノは上司に声を荒げていた。

「あれもダメ、これもダメじゃ、会見の意味がないでしょう！」

J5事件で管理局への信頼が揺らいでいるのに、世界の不信をさらに募らせるだけです！」

普段は穏やかなクロノの豹変ぶりに、幹部達も譲歩を余儀なくされた。

時空管理局・ミッドチルダ地上本部

同じ時空管理局でも、地上本部の反応は「海」「空」とは微妙に違っていた。

「だから言わんこつちやない。こういう事態は予測できていたのに」
「まともに戦えない次元航行艦なんか、何十隻造っても金を便所に流すようなものだ！」

J S事件で前防衛長官の故レジアス・ゲイズと、主犯とされるジェイル・スカリエッティの関係が暴露されて面子を失った体の地上本部にすれば、ある面敵失で、内心でいい気味だと思える者も少なくなかった。

レジアス・ゲイズの後を受けてミッド防衛長官に就任したりヒヤルト・アッテンボロー中将は、陸戦魔導師ながら航空武装隊に出向した経歴の持ち主で、紳士然とした見た目とは裏腹に、本局からのヘッドハンティングに対し、完全移籍を断固拒み通した硬骨漢として知られていた。

彼も、秘密主義の本局には腹を立てていたが、まずは記者会見を見てから対応を決めることにしていた。

アッテンボロー自身もかつてのエース魔導師だが、本局局員ほど魔法を信奉してはいなかった。

「魔法なしでも強力な軍事勢力は、今まで遭遇しなかったのがむしろ不思議なんだがな。」

対応を誤れば、管理局自体が減ぶという事を、本局の連中は解っているのかな…？」

アッテンボローは暗然と一人呟いた。

イスカンドル

冴子らによる古代 守とスターシャへの説得は粘り強く続けられていた。

しかし、それも唐突に中断することになった。

「艦長！」

「艦長代理！」

「総統！」

「司令！」

各艦の観測士は、後方にワープアウトした巨大な反応に驚愕の声を上げた。

「全長：約1？強！要塞クラス1！こちらに接近してきます！」

「うるたえるな！ 都市帝国に比べりゃ大した大きさじゃない！」

動揺しかかる若いクルーを大村が一喝した。

敵要塞？がどの位の戦闘力を持つかはわからないが、戦う前から呑まれていては負けたも同然だ。

三沢以外のブリッジクルーは都市帝国との戦闘から生還しているため、大村の喝は一定の効果をもたらしたようだ。

先輩クルーが落ち着いたことで、新人の三沢も落ち着きを取り戻し

た。
その間にも、要塞 機動要塞ゴルバ は悠然と頭上を通過し、
やがて姿勢制御バーニアを吹かし、その特異なフォームを露わにし
た。

第73話『ちやぶ台の執務官と補佐官』（前書き）

予告？どおり短いです。

前話と場面が一部重複しますが、佐渡先生とちやぶ台を囲む執務官と執務官補サイドの話です。

第73話『ちやぶ台の執務官と補佐官』

時間は少し遡る。

医務室のモニターにデスラー総統と古代 守&スターシャ夫婦が同時に現れた時、フェイトとティアナは息を呑んだ。

この世界で初めて目にする地球人以外の人間。

まず、肌の色が違うガミラスのデスラー総統の第1印象は、全身から闘気が溢れ出ている人物。

(名前からして、アドルフ・ヒトラーのような人物かと思ったけど、むしろ織田信長に近いかも知れない……)

2度、彼と対峙した古代 進から聞いた印象が正しいことを悟った。

武力による、天下ならぬ宇宙制覇を夢見る野望家。

本来ならば、古代や嶋津達とは今なお不倶戴天の仇敵同士なのだろうが……。

自分となのはのように、何度もぶつかり合い、互いの思いを理解したからこそ、対等の相手として認め合い、敵対関係を解消したのだろうか？

管理局的には、デスラーのような武断主義かつ独裁的な人物は言うまでもなく危険人物だ。スカリエツティなど問題にならない位に。しかし、古代達に、デスラーは管理局にとって危険だから付き合うな、とは言えない。

そんな事を言う資格など、自分達にはない。

彼らは命懸けで、デスラーに対等の存在だと認めさせたのだ。
デスラーをよく知らない自分達が介入できるはずもない。

もう1人、古代 守と寄り添うスターシャに対しては、

（嶋津艦長が真夏の野薔薇なら、この人は高山に咲く山百合そのものだ…）

という印象を持った。

イスカンドルの女王だというが、古代達の接し方を見る限り、彼女の肩書にはではなく、1人の人間に対して敬意を払っていると思えた。

デスラー総統でさえ、スターシャには一目も二目も置き、イスカンドルには手を出さなかったという。

（フェイトさん、この人は……）

（うん、この人はとても強い……）

ティアナも同じ印象を持ったようだ。

彼女も、力には絶対屈しないだろう。

スターシャは、『ヤマト』のメインエンジンの設計資料を地球に届けるために、唯一の肉親だった妹のサーシャを失ったという。

もちろんそれだけではないのだろうが、白色彗星帝国との戦いの傷がまだ癒えないにも関わらず、片道約15万光年をもともせず、彼女達を救いに来た古代や嶋津達。

国家再建を一休みし、命懸けで彼女達を正体不明の敵から守ろうとしたデスラーの気持ちは十分理解できた。

(この人達は、単なるメリット・デメリットでは動かない)

愚か者の一言で片付けられてしまうかも知れないが、いざという時に踏ん張れるのは大抵こういう人達。

さっきまでの戦いも正にそうではないか。数の劣勢を意に介さず、敵を殲滅してしまった。

(つくづく、この人達は敵に回せない……)

対等の友人としてなら、これほど心強い存在はないが、管理局の論理を押し付けようものなら、どんな目に遭うかわかったものではない。

と思ったのだが、

『……古代、太郎か花子は生まれたのか?』

(……………)

嶋津冴子のこの一言が全てをぶち壊した。

佐渡艦医は慣れっ子らしく肩を竦めたただけだが、脱力感に襲われたフェイトは、思わずちゃぶ台に突っ伏してしまった。

ちなみにティアナは冴子の言葉の意味を知らないのです、フェイトが脱力した理由が全くわからなかった。

(……嶋津艦長、貴女は本当に22世紀生まれなんですか!?)

フェイトは画面の嶋津冴子に本気でツッコミたくなっただが、古代

守は意味を察したらしく、サーシャという名を口にした。

(…流石は親友同士。でも、サーシャは、確か彼女の亡くなった妹さんの名前だったはず。それだけ思い入れのある名前だったんだ…)
心理的外傷からの回復を図りながら、フェイトは古代 守とスターシャの一人娘のネーミングに納得した。

2人に娘が生まれていた事を知った古代達の説得は、デスラーまで加わり、俄然激しさを増した。
流石に、娘まで巻き込む事にはスターシャも葛藤していたようで、思わず弱音を口にした。

「ようし、もうひと押しじゃぞ、古代！」

「そうですね…」

佐渡が思わず立ち上がる。

フェイト達も固唾を呑んで画面に見入っていたが、その時、艦内に緊急警報が流れた。

『後方より巨大戦闘艦、または要塞1接近！総員戦闘配備につけ！
繰り返す…』

「ちいつ、こんな時に何たる無粋な連中じゃ！」

佐渡が舌打ちしながら、治療着を手にする

(全くだよ！)

(全くよ！)

フェイト達も心の中で毒づきながら立ち上がり、医務室に入ってきた生活班員と共に包帯等のチェックを始めた。

第73話『ちやぶ台の執務官と補佐官』（後書き）

次回、どこかで聞いた名前の人が登場します。

趣味の本を買いましたです。

……仙台のC59、生で見てみたかったなあ……。

（晩年は臨時列車牽いて盛岡まで乗り入れとっただしですが……）

第74話『どこかで聞いた名』（前書き）

短くて早いですが、投稿します。

活動報告内で裏小説も始めました……。

第74話『どこかで聞いた名』

一難去つてもつときつい難局というのは白色彗星帝国がそうだったが、今度もまたそのようだ。

全長1?以上あるそれ、敢えて言うなら逆立ちした壺に近い形状をした要塞は、『ヤマト』『相模』、ガミラス艦隊とイスカンダルの間に割って入るように停止した。

程なく、司令塔らしき頂部が競り上がってくる。

『地球とガミラスの戦士達よ、実に見事な戦いぶりだった』

通信回線を繋げてきたか、比較的落ち着いた男の声が響いたかと思うと、映像が開かれ、1人の人物が姿を現した。

「「!.....」」

現れたのはこれまで見たことがない顔立ちの男らしき人物。

一応人の形をしており、両の眼、鼻、口もある。

しかし、スキンヘッドとやたら白っぽい肌の色はまだしも、まるで悪魔系ビジュアルバンドみたいな眼元の色合いは何だろうか……？

「私は暗黒星団帝国・マゼラン方面軍総司令官のメルダースだ」

……確か、昔のルフトヴァッフエ（ドイツ空軍）に似たような名のエースパイロットがいたな……。

「…我々の目的はイスカンダルの地下物質に含まれるイスカンダリ

ウムの採掘だ。

邪魔さえしなければ、我が方に戦闘の意思はない。

貴公らはイスカンドルに住む2人を収容して即刻立ち去るがよからう」

…んだと？この似非ブオーマン。

内心の反発を隠して、冴子がメルダースを直視しながら口を開いた。

何分、古代弟はだいぶ丸くはなつたものの、まだ20歳になつたばかりで、本質は瞬間湯沸かし器のままだ。

しかも肉親が絡んでいて、平静ではいられまい。

ガミラス側も同じだ。母星消滅の原因の一端があるのだ。懸命に爆発を抑えているのだろうが、相手の本音を聞かないまま早々に決裂するのは甚だまずい。ここは私が彼の相手をするしかない。

「私は地球防衛軍・第13戦隊司令官代行の嶋津だ。

メルダース司令、イスカンドルの地下資源はイスカンドルに住む者がまず使うなり管理する権利があるだろう。

採掘にあたり、貴官はイスカンドル住民代表者の同意は取り付けたのか？」

メルダースは小馬鹿にした表情を浮かべ答えた。

「住民といつても、もはやスターシャ女王夫妻の2名ではないか。

そんな事に何の意味があると言うのだ？」

「人数の多少の問題ではない。

たとえ1人だろうが、そこで生活している者がいるのなら、使用目的を説明し、十分議論して、互いにメリットがある形で同意した上で採掘すべきだと言っている。

それとも、使用目的を言ったら拒否されるから無断で採掘しようとするのか!？」

冴子もすかさず反論する。

その様をモニターで見っていたフェイト達は表情を変えた。

(…フェイトさん、何か管理局のロストログア収集の事を言われているみたいですね…)

(うん…、私もそう思ったところ。凄く耳が痛いよ…)

時空管理局のロストログア収集にあたっては、所有者に対しては誠意を尽くし、金銭的補償を含めた説得や、現場周辺の住民とのトラブルを避ける事が義務づけられているが、誤解や説明不足等からトラブルになり、反管理局の感情を持たれてしまったケースも少なからずある。

管理外世界の場合、強奪同然に持ち出されるケースもあつた。

フェイトもその現場に居合わせ、住民から怨嗟の目を向けられ、いたたまれなくなった記憶を思い出した。

「本来は貴公らに説明する義務はないのだが…。まあ、我が艦隊を撃破した手際に敬意を表そう」

ああ、そりゃどーも……。

「…イスカンダリウムとガミラシウムは極めて良質の放射性物質を含有していて、宇宙艦艇の航行や戦闘に必要なエネルギーになるのだ」

冴子はすかさず切り込んだ。

「…ほう、ガミラス星でマグマを採掘していたのも貴官の部下達だったか。」

…して、貴官らの行っている戦争とは？

よそから攻められてやむにやまれず戦争をしているのか？

それとも、敵対する星間国家を攻め滅ぼすためか？」

「滅ぼすつもりはない。我が帝国の傘下に入ってもらったためだ」

メルダースは、何当たり前の事を言ってるんだお前は、という表情をする。

「ふざけるな！侵略戦争のためのエネルギーになど認められるか！」

古代（弟）が憤りの声を上げた。

まあ、あの直情家なら当然か。

しかし、デスラー達の憤怒はいかばかりか。

暴発しなければいいが……。

メルダースが語気を強める。

「あくまで邪魔立てするというなら、我々も実力をもって貴公らを排除しなければならない。」

それでもなお、このゴルバと戦うのならば、好きにするがいい。

…10分だけ待つ。それまでに退去しなければ、貴公らはもとより、スターシャ女王達の安全も一切考慮しない」

通信が切られた。

差し当たっての懸念は…。

「ガミラス艦隊が動き始めました！ゴルバに突撃します！」

しまった！やはりデスラーの怒りは限界点を超えていたか…。
冴子はほぞを噛んだ。

「『ヤマト』からデスラー総統に制止の通信を入れていますが……」

「……ダメか？」

「はい……」

やはり無理か…。

ともかく我々はやることをするだけだ。

「…：宮殿をもう一度呼び出せ」

こうなつては最悪の事態すら考えなければならない。スターシャ達の説得を続けなくては。

第75話『問題艦長とせいおうへいか』（前書き）

瞳と髪以外はよく似た2人の、あまりに対照的な光景です。

週刊ヤマトに掲載された『アリゾナ』は、側面は堂々たるものですが、正面から見ると「うらなり」に見えたのは私だけでしょうか？

第75話 『問題艦長とせいおうへいか』

ガミラス空母の艦載機と『ゴルバ』から発進した芋虫型や円盤型の戦闘機が入り乱れてのドッグファイトに入った。

「空中戦は戦闘機の数でゴルバ側が優勢のようですね……」

大村が分析する。

ガミラス側は艦上爆撃機や雷撃機も出撃しているため、戦闘機はそちらの護衛もしなければならぬが、迎撃するゴルバ側は全てが戦闘機。

円盤型戦闘機がガミラスファイターを押さえている間に、芋虫型戦闘攻撃機がガミラスの攻撃機を撃墜していく。

それでも何割かの攻撃機が迎撃機を突破してゴルバに肉薄するのだが、次に彼らを見舞ったのは驟雨の如き対空砲火とミサイルの洗礼。一連の迎撃でガミラスの航空攻撃隊は8割以上が失われ、命中弾もゴルバの分厚い装甲で無効化されてしまった。

「艦長、『ゴルバ』の装甲は砲座やミサイルランチャー部分を除いて、接合部分が見当たりません」

『ゴルバ』の装甲表面をサーチしていた三沢が結果を報告した。

あんな巨大構造物を一体成型する技術があるのか、よほど高度な接合技術を有しているのか解らないが、直線部分がほとんど見当たらない装甲ゆえ、命中しても弾かれてしまう。

形は変だが、確かに防御に適した形状をしている。

「宮殿とはまだ繋がらないか!？」
「申し訳ありません、ジャミングを無効化できません」
思わず舌打ちが出てしまい、すぐ反省する。

(おっと、艦長たる者、部下の前で感情を露わにはいかんのだ
った)

深呼吸を一つし、ボトルのミネラルウォーターを少し飲んで気分を
鎮める。

とにかくマザータウンと連絡をとらなければならない。
その時、一つのアイデアが浮かぶ。

「通信長、長距離通信レーザー用意だ。和文モールスでな。
それと、古代(弟)を呼んでくれ」

ほどなく、『ヤマト』に繋がり、早速質問した。
但し、第一声は相原に向けて。

「相原、『ヤマト』に(21)99年A形の暗号表はあるか？」

ややあつて、あるとの回答が帰ってきた。

「それを使って、長距離通信レーザーを宮殿に向けて撃つんだ。内
容は脱出勧告。」

ガミラスは解読するかも知れんが、今は問題なからう」
『わかりました、やりましょう』

古代と相原が頷いた。

あいつならわかるだろう。それに『ゴルバ』を出し抜けるかも知れ

ない。

さんざん殺り合ったガミラス側は解読するかも知れないが、今は共闘しているのだから、それはそれで構わない。

問題は……やはりスターシャの気骨だ。

軍備を持たないからといって、元首が弱腰とは限らない。

自国の地下資源が他国の侵略戦争に用いられることを、あの気高いスターシャが肯んじるとも思えない。

冴子が懸念するのは、スターシャがイスカンドルもろとも自爆してしまうこと。

彼女の意思はできるだけ尊重するつもりだが、死ぬ事だけは絶対許さない。

母親になった以上、サーシャが一人前になるまでは責任がある。

ここで星と運命をとにもするよりも、ずっと長く難しい戦いになるだろうが、私なんぞよりずっと強いスターシャなら、守とサーシャと一緒に十分乗り越えられるはずだ……。

『ゴルバ』の攻撃はガミラス艦隊にまで及び、雨霰と降り注ぐ砲撃とミサイルでデストロイヤー艦が次々と爆発炎上し、コルサクの戦艦も煙を噴いている。

(くっ、まずいな……)

このままでは時間切れで、我々だけでなくスターシャ達にも攻撃が向けられてしまう。

『ゴルバ』の火力はあの程度ではあるまい。

格納されているであろう主砲の砲撃が始まったら万事休すだ。

「スターシャ達からの返事はないか？」
「まだありません……」

さすがに焦慮が表情に出てしまいそうだ。
こんな時、沖田さんや土方さんならどう説得するのだろうか？
……。

よし、やはり私らしいやり方でやるか……。

「通信長、こちらからもレーザーを撃て。
古代守宛の和文モールスで、内容は……」

『シニニゲルンジャネエゾ、テメエラ』

だ」

「……は、はいっ！」

あいつらが、これで怒ってすつ飛んできたなら上出来だ。口喧嘩ならいくらでも買ってやる。

他国元首への侮辱？

上等だ。私への怒りがスターシャの生きる原動力になるなら、この首なんか安いものさ。

引き立ててくれた土方さんには悪いが、こんなに早く戦艦の艦長になるつもりなんかなかったからな。

ミッドチルダ首都・クラナガン郊外、高町家

今日もなのはとヴィヴィオ、2人だけの夕食だ。

「ねえ、ママ」

「なあに？ヴィヴィオ」

「フェイトママを助けてくれた『ちきゅうぼうえいぐん』って、管理局より強いのかなあ？」

『地球防衛軍』と、宇宙戦艦『ヤマト』、『相模』の存在は、もはやミッドチルダ全体に知れ渡っていたのだ。

管理局は、第97管理外世界とは別世界の「地球」の宇宙軍事組織に所属する「スペース・バトルシップ」と説明し、通常空間における戦闘力は、魔法なしに関わらず、時空管理局のあらゆる次元航行艦船を大きく上回っていることを認めた。

『レオニダス』を襲った謎の大小宇宙戦闘艦と併せて映像が一般公開された時、ミッドチルダの市民からは、次元世界探査を一時休止せよとの声が上がったほどで、第97管理外世界（地球）出身の八神はやて二等陸佐（当時）は、後日、

「当時の時空管理局は、黒船ショックに激震したであろう徳川幕府と似たような状態だった」

と述懐したが、さらに、

「でも、帰還したハラオウン執務官達の証言で、向こうの人達も私らと同じメンタリテイを持っていることがわかり、早い時期に誼を持てるはずだった。

一部のアホ共が余計な事をしくさらなければな……」

とも証言した。

……閑話休題……

「あのね、学校では怖がってる子もいるんだけど、きっと『やまと』と『さがみ』の人は、とつてもつよくてやさしい人たちだと思っただ。

ヴィヴィオ、おともだちになりたいなあ……」

「……そうだね、なれるといいね……」

『ヤマト』ら未知の宇宙戦闘艦については、管理局員でも二つの見方に分かれた。

戦闘艦自体もさりながら、地球防衛軍の戦闘艦から発進した宇宙戦闘艦は主翼と尾翼を持ち、光学兵器と質量兵器を併用し、ミッドチルダをはじめとする管理世界の大気圏内でも使用可能と推察できた。

そんな戦闘艦がこの世界に姿を現したら、管理局の航空魔導師は、低空域での格闘戦以外ではまず対抗できない。

それに、戦闘艦にせよ宇宙戦闘艦にせよ、魔導師でなくても、訓練された者が扱えば十分な性能を発揮できるから、魔導師は要らなくなる。

そうなつては、魔導師の優位性が根底から覆され、時空管理局そのものが根底から揺さ振られてしまう。

魔導師、特に高ランク魔導師の一部からは不安の声が上がり始めていた。

一方、非魔導師の管理局員は、内心、ああいう戦闘機のような高い性能のハードウェアを使いこなせば、魔導師に頼る事なく、慢性的

な人材不足も改善されるのではないか、と考える者が出始めていた。

なのは自身は戸惑っていた。

今の仕事に誇りを持って従事しているが、管理局のみならず、少数の魔導師と大多数の非魔導師との間に横たわる見えざる壁を、最近とみに感じるようになっていたからだ。

管理局に入った9歳当時には感じなかったが、年齢を経、娘を持つ身になってひしひしと感じるようになった。

つい先日は、子供から

「あ、かんりきよくのしろいあくまさんだ〜」

と指差されたのだ。

取り敢えず笑って見過ごしてみせたが、内心はその場に座り込みた
い程のショックを受けた。

犯罪者からそう言われ罵られるのは良い。しかし、普通の子供から
言われたのは流石に堪えた。

その子供が非魔導師だったのかも知れないが、将来を担う子供達の
中にも、管理局の魔導師をそういう目で見ている者がいる現実に、
なのははショックと同時に不安を覚えたのだ。

将来、管理世界で魔導師と非魔導師に分かれて憎しみ合い、戦うよ
うな事態になったら……。

ヴィヴィオには、今通うザンクト・ヒルデ魔法学院のクラスメ
イトに仲良しがいるが、自分やフェイト、はやてと同様、非魔導師
の友人もつくってほしいと願っている。

娘がどんな道を歩むにせよ、一部の魔導師に見られるような、魔力
ランク万能主義者にはなってほしくない

自分だって完成には程遠い人間だ。
魔力のランクと、人間としての出来不出来は全く関係ないのだから。

第75話 『問題艦長とせいおっへいか』 (後書き)

風邪は快方に向かって…いるようです

第76話 『ファイナル・カウントダウン（1）』 （前書き）

『ヤマト』でアルフォン少尉の声をあてた、野沢那智さんも逝ってしまわれました。

大きな星がまた消えた…？

こちらでは、イスカンダル星最期の時が刻々と近づいています。

第76話『ファイナル・カウントダウン（1）』

禿渡瓶……じゃなく、メルダースの通告から7分が経過。

ガミラス艦隊は約4割の艦を失い、艦載機は約9割が撃墜された。その代わり『ゴルバ』側の戦闘機も半分近くが消え、対空砲座やミサイルランチャーの一部が使用不能になり、煙を噴いていた。しかし『ゴルバ』にとっては蚊に刺された程度の事らしく、対艦砲は激しく火を吹き、ガミラス艦が火球と化した。

「ガミラス艦隊、後退します！」

『ゴルバ』に向かっていたデストロイヤー艦や艦載機が一斉に後退する。

代わって前進してきたのはデスラー座乗の赤い戦闘空母だった。空母の飛行甲板の一部が下降したかと思うと、横になった円筒状の物体が迫り出してきた。

「ガミラス艦隊から、デスラー砲発射の注意勧告です！」

パク通信長が告げる。

デスラー艦のよりは小型だが、集束率は『ヤマト』の波動砲を上回っているから、あるいは……。

「カウントダウンシグナルです！10、9、8、7……発射ッ！」

デスラー砲の砲口に閃光が煌めき、光の剣が暗黒の要塞に真っ直ぐ伸びていく。

と、『ゴルバ』全体がほの白く光ったかと思うと、デスラー砲のエネルギー弾を中和するように鈍く発光し、やがて、何事もなかった

かのように佇む『ゴルバ』がそこにあった。

『ハハハ……。愚か者め、そんな石ころのような攻撃がゴルバに通じると思っているのか？』

予告したとおり、2分後に総攻撃を始める。逃げるのなら今の内だ。さあ、どうする？ 地球の戦艦よ」

高笑い混じりなメルダースの最後通告がなされた。

今のは波動エネルギーを中和する特殊フィールドかバリアのようだ。恐らく『ヤマト』の波動砲でも通じまい。

どうする？ どこかにウィークポイントはないのか……？

その時だった。

「艦長、マザータウンからロケット1機発射されました！」

「何！？…方向は？」

あまりに唐突な出来事に冴子も驚き、三沢とパクに質す。

「『ゴルバ』をかすめるように、1分余りでこちらの空域に到達します！」

「ロケットから『ヤマト』と本艦に通信！古代艦長名で受け入れ要請です！」

「そうか……」

ブリッジに少し安堵感が漂う。

「艦長、『ヤマト』が迎えを出すとの事です！」

「わかった。こちらは教導隊を護衛に出そう。」

……それと、スターシャが乗っているかをすぐ報告させるんだ」

「わかりました！」

黒沢機を先頭に、8機のコスモタイガーが前方に飛んでいく。あのロケットに古代とサーシャが乗っているのは間違いないだろう。大きな問題は、スターシャがイスカンドルに残っていないか、だ。古代が進んでスターシャを残すことはありえないが、スターシャが先に2人を乗せた後、支度をしてくるとか言つて、いきなりロケットを発射してしまう可能性は大ありなんだが……。

あまりに唐突だったか、『ゴルバ』も呆気にとられているのか、ガミラス艦隊への攻撃も止まっている。

その間にも、『ヤマト』の上陸艇がロケットを曳航してきた。そのまま格納庫まで入れるようだ。

(3人とも乗つてくれよ…)

「艦長、ゴルバがイスカンドルに降下します！」

「『ヤマト』から映像通信です、繋がります！」

三沢とパクが同時に、叫ぶように報告してきた。

「三沢、監視を続ける。…通信長、繋いでくれ」

『ヤマト』 医務室

いざ戦闘かと思つたが、『ヤマト』と『相模』は『ゴルバ』に突撃しなかったため、戦闘態勢のまま後方待機状態だった。

佐渡やフェイト達も手持ち無沙汰で推移を見守っていたが、第1艦橋に詰めていた森班長から、

「イスカンドルから、守さん達が乗ったロケットが出ました。古代君と坂本君が迎えに出ますから、そちらも準備をお願いしますね」

との連絡が入った。

「緊張しますね…」

「うん…」

スターシャ達の受け入れは全て『ヤマト』側で行うため、フェイト達の出番はないが、スターシャはれっきとしたイスカンドルの女王であり、サーシャは地球人とのハーフながら、こちらもプリンセスだ。

管理世界では君主制を敷いている世界（国家）はないため、地球に住んでいたフェイトはともかく、ティアナは、本物の女王を目の当たりにするのは始めてだ。

そのティアナにしても、映像で見たスターシャに強い印象を受けていた。

（確かに、内面から気品が醸し出されてくる人だった。

管理世界にはああいうオーラを纏った人はいなかったわ…）

『聖王陛下』こと高町ヴィヴィオは一市井人としての人生を歩み始めたが、スターシャは生まれながらの王なのだろう。

そして何事もなければ、妹のサーシャと2人、イスカンドル王家の幕を下ろすつもりだったのが、様々な悲劇混じりの出来事が重なり、サーシャの名はスターシャと古代守の一人娘に受け継がれて、今日

に至った…。

(ここの人達が彼女を救いたい気持ちはよくわかる…)

自分達はイスカンドルと直接の関わりはないが、目の前で人の命が消えるのは絶対容認できない。

あのロケットに、一家3人が乗っていてほしいと願うのは、フェイトとティアナも、『ヤマト』『相模』の乗組員と同じだった。

『ロケット収容完了。エアロック閉鎖、空気注入開始します。各員は配置にて戦闘体制を維持せよ』

相原通信長の声が艦内に響いた。
いよいよ降りてくるようだ。

第76話『ファイナル・カウントダウン(1)』(後書き)

はて、スターシャはどーなる？

第77話『ファイナル・カウントダウン(2)』(前書き)

今週末分更新はこれでラストです。

キーワードは「女王陛下に敬礼！」

第77話『ファイナル・カウントダウン(2)』

『ヤマト』格納庫

エアロックが閉じられて艦内空気が流入し、コンディション・グリーンに変わったところで、曳航してきたランチから降りた古代 進と坂本 茂、護衛したまま一緒に着艦した教導隊の黒沢が脱出口ケツトの搭乗カプセルの前に駆け寄る。

待機していた工作班員とパイロット達は曳航ロープを外し、ランチと黒沢機を整備区画へ移動し始めた。

新たな足音が近づいてくる。

真田と雪、アナライザーに抱き抱えられた佐渡だ。

プシュ、という音と共にロケットの側面ドアが下がってきた。

その奥から、地球防衛艦隊の旧艦長服姿の古代 守と、サーシヤが入っているらしいカプセルを大事そうに抱きかかえたスターシヤが姿を現わした。

「古代…！」

「兄さん、スターシヤさん…！」

歩み寄る弟と親友に、古代 守も一步前に出、

「進、真田、頼みがある！」

2人の肩に手を置き、頭を下げる。

「進さん、真田さん、私からもお願い致します…」

守の後ろでスターシャも頭を下げた。

古代 進は当惑した表情を浮かべたが、

「とにかく、場所を変えよう」

と、真田の提案に従うことにした。

雪はスターシャと二言三言話してから、ロケットから3人の荷物を運び出すよう、生活班員に指示を出した。

『相模』 艦橋

「映像回線、繋がります！」

一瞬の間を置いて光が入ったスクリーンに映し出されたのは、古代守とスターシャ、スターシャに抱かれたサーシャ、さらに別画面でデスラーがいた。

スターシャの姿を確認し、立ち上がった冴子は内心で胸を撫で下ろした。

スターシャは友好国の女王なので、副長・大村耕作以下の『相模』ブリッジクルーも改めて起立する。

『嶋津、頼みがある…』

開口一番、古代 守が話し始めた。

守が口にした内容に、冴子以下の『相模』ブリッジクルーは息を飲んだ。

デスラーも顔を強張らせた。

既に知っているらしい古代進と真田も表情を強張らせている。

一通り内容を聞いた冴子はしばし瞑目してから、スターシャに目を向けた。

「……古代の話で趣旨は解りました。現時点では確かにそれが最善の方策でしょう。」

……しかし、貴女自身は、本当にそれで良いのですか？」

冴子の視線がスターシャに真っ直ぐ向けられる。

それを受け止めたかのように、スターシャは静かに話し始めた。

『故郷であり、国民が眠るイスカンドルを消滅させることは、我が身を引き裂かれるよりも辛く悲しい事です。』

……ですが、それ以上に優先されるべきはこの宇宙の平和です。

イスカンドルの物が侵略戦争に利用される事は絶対に許容できません。

その為には、この方法しかありません…。

この責めは、全て王たるこの私にあります。

ですから、冴子さん……。いえ、嶋津艦長。イスカンドル王国国王として、お力添えをお願い致します。』

『波動砲は俺が撃つ。だから、頼む、嶋津！』

『スターシャ……』

『兄さん……』

『古代……』

(古代……、スターシャ……)

しばし沈黙考の後、冴子はゆつくりと目を開く。

「わかりました。ご要請を引き受けましょう、スターシャ陛下。
…デスラー総統もそれでよろしいですね？」

『私はスターシャの意思を尊重する……』

デスラーの回答を聞いた冴子は姿勢を正し、スターシャに拳手の礼をとる。

間髪入れず、大村耕作の声が響く。

「総員、スターシャ陛下に敬礼っ！」

『相模』のブリッジクルーと、画面の向こうで古代 進と真田も敬礼した。

『ありがとうございます。皆さん……』

『皆、済まん……』

スターシャと守も頭を下げた。

「波動砲発射のシークエンスは弟が教えるとして、一つ問題をクリアしないとな。古代」

冴子はニヤリと笑みを浮かべる。

『……何だ？』

親友の悪戯げな笑みに、守と真田は嫌な予感を隠せない。

冴子がこんな表情をすると、大抵ろくでもない結果が待っていた。訓練生時代は、風紀委員との抗争に巻き込まれたり、土方教官の正座お説教5時間とか、土方教官から1000?ダツシュ1000回を命じられたりとか、任官後は沖田艦長から拳骨を貰い、おまけに艦の全ての便所掃除を言い渡されたりとか。数々の悪夢を思い出した2人に、当の元凶は全く反省していないように告げた。

「お前は予備役だからな。そのままでは『ヤマト』の武装を扱わせるわけにはいかん。そこで、だ……」

冴子は一旦言葉を切り、表情を軍人のそれに戻すと、

「地球防衛艦隊・独立第13戦隊司令官代行として、古代 守の予備役を解き、現役復帰を命じる。異存はないな?古代」

守もさすがに「スペース・イーグル」の二つ名を持つ超一流の宇宙戦士だ。すぐに表情と姿勢を正す。

冴子は続ける。

「古代 守、戦艦『ヤマト』戦闘班長補佐として、同艦第1艦橋勤務を命じる!」

『はっ!』

画面の古代 守も敬礼を返した。

「あまり時間は残っていない。あちら(ゴルバ)さんに悟られんうちに準備を済ませるぞ!」

「『はっ!』」

医務室で、フェイト達も一連のやり取りを見ていた。

宇宙の災いの根を根本から断つために、自分の星を消滅させる。

フェイト達には途方もない話だ。

国民がほとんど死に絶えたとはいえ、それでも故郷は故郷。

その命脈を断ち切る決断をしたのだ。どれほどの葛藤があったのか、想像がつかない。

それほどの決断をしたイスカンドルの女王が『ヤマト』に乗ってきた。

(∵時空管理局員としてではなく、1人の人間として、あの人と直接話してみたい!)

フェイトとティアナは同じ思いを抱いた。

第78話 『ファイナル・カウントダウン(3)』 (前書き)

炸裂！ダブル波動砲&デスラー砲！
暗黒星団帝国の理不尽を打ち砕け！

第78話『ファイナル・カウントダウン(3)』

『ヤマト』第1艦橋

戦闘指揮席に座った古代 守に進が付き添い、波動砲の発射手順をレクチャーしている。

技師席の真田と観測席の太田は、スターシャから提供された起爆装置の位置と構造をチェックしていた。

「雪、『ゴルバ』に動きはあるか？」

「宮殿の北20？、高度10000？付近で停止中よ」

「採掘船団の到着を待っているのか……」

雪の回答に、島が唸るが、すかさず守が言う。

「その前にケリをつけるさ……。進、スターシャを呼んでくれ」

「スターシャさんを？どうするんだい」

「イスカンドルを破壊する前に、『ゴルバ』に退去勧告をしたいと言ってたんだ」

敵対している『ゴルバ』だが、イスカンドルの消滅爆発に巻き込まれれば、いかな堅固な要塞でも到底もつまい。

これ以上犠牲者を出したくないというスターシャの意思には、誰も異議を唱えようがない。

「それじゃ、私が迎えに行ってきます」

雪が席を立ち、スターシャとサーシャがいる高級士官室に向かった。

『相模』艦橋

『相模』でも、スターシャからのデータに基づいて、拡散波動砲の調整を行っていた。

「艦長、波動砲調整、完了しました！」

砲術士の中村正樹が報告する。

「『ヤマト』から通信：スターシャ陛下からです！…繋ぎます！」

中村の報告が終わるや、間髪入れずパクがスターシャからの入電を告げた。

映像が『ヤマト』艦橋のスターシャに切り替わる。

『嶋津艦長、作戦実行に先立ち、『ゴルバ』のメルダース司令官に退去勧告を行いたいのですが、許可いただけるでしょうか？

…敵対しているとはいえ、イスカンドルの為にこれ以上犠牲者を出すのは私の本意ではありません』

…彼女の主張は正しいのだが、あちらさんが素直に従ってくれるとは思えないな。

ま、あちらさんが逃げる選択しかできないよう、迅速に事を進めればいいのか…。

「御意に」

賛同の一言だけを返した。

『ヤマト』第1艦橋

艦長席の前に立つスターシャはしばらく瞑目していたが、
ゆっくりと瞼を開くや、静かに告げた。

「……………各艦、始めて下さい」

「了解。波動砲にエネルギー充填開始！」

『……………デスラー砲、発射準備』

『拡散波動砲、エネルギー充填開始！』

古代進、デスラー、嶋津冴子が波動砲（デスラー砲）の発射準備を
命令した。

『ヤマト』のトリガーを握るのは古代守だ。

「相原、周波帯A・最大出力で通信回路を開け」

「了解！……………相模」も周波帯B回路開きました……………接続確認……………どうぞ、
お話し下さい」

「ありがとうございます」

相原に一礼したスターシャが一步踏み出し、話し始めた。

「私はイスカンダルのスターシャ。

暗黒星団帝国軍のメルダース司令官、並びに近隣宙域を航行中の艦
船に勧告します。

……………我がイスカンダルは間もなく自爆・消滅します。

要塞『ゴルバ』並びに近隣を航行中の艦船は、大至急宙域を離脱して下さい。

…繰り返します、我がイスカンダルは間もなく自爆・消滅します。近隣を航行中の艦船は、直ちに宙域を離脱して下さい」

「全艦攻撃用意、目標イスカンダル！」

カウントダウン60開始！」

スターシャのメッセージが終わるや否や、冴子が攻撃開始1分前を告げた。

「艦長、『ゴルバ』から入電です！」

すぐに『ゴルバ』が反応してきた。

『貴様ら…どういうつもりだ！』

うわぁ…怒ってる怒ってる。

さすがにメルダースも怒り心頭のように、額に青筋を浮かべているが、血色の悪さだけは変わらないようだ。

「どういうつもりだ、だと？」

そもそも、スターシャ女王夫妻は宮殿から避難しただけで、イスカンダリウムを渡すとは一言も言っていない！

我々は友好国元首からの要請に基づき、イスカンダリウムの起爆シークエンスを実行するまでだ。

貴官こそ、『ゴルバ』を安全な宙域に待避させるがよからう」

「おのれ…」

『…黙れ。盗掘屋風情が』

こちらを睨みつけるメルダースに、初めてデスラーが噛み付いた。

デスラー砲のトリガーに指をかけたまま。

『早々に失せろ、盗掘者よ。』

今すぐここから退去するなら、我が母なる星を傷つけ、イスカンドルをこのような事態に追い込んだ罪、取りあえずは見逃そう』

『笑わせる…放浪者風情が聞いた風な口を』

嘲笑混じりにメルダースが言えたのはそこまでだった。

冴子が、残り時間が残り僅かな事を告げたからだ。

「メルダース司令、カウントダウンは続いているんだが……」

『5、4、3、2……』

『…何だと！？しまった！』

（くっ！連中に乗せられたか……！）

「今だ、兄さん！」

「発射！！」

「撃てっ！！」

『…発射！』

『ヤマト』『相模』とデスラーの戦闘空母から、波動砲とデスラー砲がイスカンドルの地表めがけて放たれた。

「機関全速！急速離脱っ！！」

『ゴルバ』も流星に危険を察知し、急速離脱を図る。

『ヤマト』の波動砲とデスラー砲は、宮殿の基部に狙い過たず突き刺さった。

一方『相模』が放った拡散波動砲は、拡散点に達する前に地割れ火

口周辺の溶岩を破砕しながら、火口内に突き刺さる。ほぼ同時に、スターシャは掌に握っていた何かを強く握り締めた。

「総員、対閃光防御！ガラスが間に合わない者は目を覆え！失明するぞ！！」

数瞬の後、マザータウンから凄まじい光芒が広がり、地割れ火口からは、今までにない激しい爆煙と火柱が天に冲した。

さらに、イスカンダルの裏側　西半球　からも凄まじい光芒が広がり始め、マザータウンを覆い、拡大した光芒と一体化し、星そのものが大光球と化した。

『ヤマト』 医務室

「イケナイ！皆サン、モニターカラ離レテ下サイ！」

モニターの画面が光に満たされようとした時、アナライザーが画面を塞ぐように立ち塞がった。

「画面を見るな！伏せるんじゃ、お嬢ちゃん達！」

佐渡が向こう側を向いて畳に伏せる。

「は、はいっ！」

フェイトとティアナは顔を両手で覆い、ちゃぶ台に突っ伏した。

各艦で似たような光景が繰り広げられる中、イスカンダル星があっ

た空間は光で満たされた。

第78話『ファイナル・カウントダウン(3)』(後書き)

やべーよ、早くも原作からダッチロールしちゃいました……。

第79話『ある日の帝国執事長』（前書き）

2日連続となります。

久しぶりにご家老……じゃなくてタラン將軍中心のお話です。

第79話『ある日の帝国執事長』

《チュド　　ンー！》

地球、特に『ヤマト』を建造した「ニッポン」で数多く制作されてきた「アニメーション」や「マンガ」なる絵画コンテンツで表現するならば、こういう文字が適当だろうか、あれだけ我々を苦しめた『ゴルバ』の最期は、何とも呆気ないものだった。

「…発射！」

我らが旗艦から放たれたデスラー砲と『ヤマト』の波動砲は、スターシャ陛下が指定なさった起爆ポイントに過たず命中。
『サガミ』の拡散波動砲はイスカンドルを一時暴走させた地割れ噴火口に命中。恐らくはマントル層で炸裂するのだろう。

「ああ……！？」

眩しさに耐えつつ幕僚が指差す方向を見ると、マザータウンを中心に広がる光芒と同じ光が、イスカンドルの裏側でも発生し、その光が広がって、イスカンドルは光に包まれた。

「…イスカンドル、完全消滅しました」

幕僚の声に、旗艦艦橋は一樣に重苦しい空気に包まれた。

永年、ガミラス星の外殻空洞から望めるイスカンドルの蒼き姿は、

我々がミラス人の心を鎮めてくれたものだ。

そのイスカンドルが消えてしまった。母なる星ガミラスの後を追うように……。

周りを見渡すと、うなだれたり、目に涙を浮かべている者も数人いたが、私には彼らを女々しいとは言えなかった。

ふと、我らがデスラー総統を見遣ると、身じろぎ一つなならず、無言でイスカンドルが消えた宙域をご覧になっていた。

その時だ。

「『ヤマト』より緊急信！右斜め前より『ゴルバ』が接近してきます。」

「迎撃用意！」

すぐさま迎撃隊形を指令。『ゴルバ』を待ち受けたが、どうも様子がおかしい。

スクリーンに映してみると、さしも堅固な要塞も、流石に無事ではなかった。

……というより、よく沈まなかったと、呆れてしまった。

完全に猛火に包まれ、今にも大爆発を起こすかに思えたが、我々と刺し違えなければ死んでも死に切れないのdarou。長い煙の尾を引きながらこちらに向かってきた。但し、とても高速とは言えない速度で。

『ゴルバ』には大口径砲もあるはずだが、大損傷で使えないのか、砲口が現れる気配はない。

『ヤマト』『サガミ』も主砲を上げ、迎撃態勢を整えた。

些か悔しいことだが、我が軍の戦艦よりも『ヤマト』『サガミ』の方が主砲の射程・威力とも上回っている。

イスカンドルが提供したタキオン機関の基本設計が優秀だったこともあるが、それを改良して自分達のものにした地球人の研究意欲も大したものだと思う。

それは突然起きた。

『ヤマト』『サガミ』の有効射程までもうすぐというところで、『ゴルバ』はついに大爆発を起こし四散した。

「脱出者の形跡はあるか!？」

「ありません!」

『ゴルバ』から人員の脱出は確認されなかった。

「彼らはそもそも何をしに来たのだろうか……?」

と総統がおっしゃったが、正しくそのとおりだ。

暗黒星団帝国とやらにすれば、こんな無駄だらけの事業はないはずだ。

これだけ甚大な人的・物的被害を受けながら、イスカンドリウムもガミラシウムも採掘できなかった。

我々にすれば自業自得以外の何事でもないのだが、こんな無駄な作戦はないだろう。願わくば、暗黒星団帝国とやらが、このような愚行を繰り返さない事を。

無論、我が母なる星を傷つけ、崩壊に追い込んだ代償は、いつか必ず取り立ててやるつもりなのだが。

「タラン、この宙域を離れるのだ。地球側にも伝えよ」

「はっ!」

それだけおっしゃると、総統はお部屋に戻ってゆく。

私は地球側の指揮官である『サガミ』のシマーズ（嶋津）艦長に総統のご意向を伝えたとこころ、シマーズ艦長も同意してくれた。

そこで私ははたと気がついた。

『ヤマト』『サガミ』ともニッポンの管轄という。

ならば、我々もよく知っているあのデータも保有しているのではないか？

私は早速、シマーズ艦長に、『シヨーテン』と『サザエサン』のデータの譲渡を申し入れた。

理由は

『もはや敵ではなくなった地球人との共存のために、地球の文化を将兵達に紹介したい』

である。

まさか総統のお楽しみというわけにはいくまいが、これまで総統がご覧になったあの映像データは、最近になって我々の閲覧をお許しになったから、決して間違いではないのだ。

私の申し入れに、シマーズ艦長は少し驚いたようだが、趣旨は理解してくれたのか、圧縮データにして送信してくれた。しかも最新のデータだという。

しかし、通信を切る直前、シマーズ艦長の口元が緩みかかっていたのはどんな意味があったのだろうか……？

第80話『帰るじ』(前書き)

調子くれてる話目です。

こちらは地球サイドからの話です

第80話『帰るじ』

『ちゅど ん!』

ヨタヨタになりながらもこちらに向かつて来た『ゴルバ』に主砲を向けた直後、当の『ゴルバ』は呆気ないほど大爆発して果てた。

「…だから早く逃げろとあれほど言ったのに……」

「そもそも、あいつら、大マゼランくんだりまで来た意味あったんでしょつかねえ……」

「無意味にした我々が言う事ではないかもなあ……」。

いやいやいや、他人の家に土足で上がり込んだ、あいつらが自分で招いた災厄だ」

冴子と大村は『ゴルバ』の最期に、台詞を棒読みするように言うと溜息をついた。

『皆さん、私の我が儘にお付き合いさせてしまい、申し訳ありませんでした……』

そして、ありがとうございました。

争乱の芽を未然に摘み取るためとはいえ、星を破壊することには、皆さんの中にも葛藤があったことでしょう。

しかし、その責任と罪は全てこの私にあります。

皆さんはお気になさらず、引き続き任務について下さるようお願い申し上げます……』

『ヤマト』第1艦橋に留まっていたスターシャは、そう言うと深々と頭を垂れた。

「スターシャ陛下、貴女の今回のご決断には深く敬意を表します。イスカンドルという星は無くなってしまいました。我々、直に目にした者は今日の事を心に刻み、決して風化させないことをお約束します。」

そして、まだ早いかも知れませんが、もう一言……。

『地球へようこそ^^』

話し終えた冴子が敬礼すると同時に、『相模』『ヤマト』『ブリッジクルーもそれに倣った。』

スターシャはもう一度頭を下げると、古代 守と、サーシャを抱いた森 雪に付き添われて第1艦橋を後にした。

続いて、ガミラスのタラン將軍から通信が入った。

用件は2つ。

1件目は特に問題はない。この空域を離れようというもの。敵の新手が来ることはあり得るし、デスラー総統としては、イスカンドル星の墓場になったこの宙域に留まるのは辛いだろう。その思いは地球側も同じだから何ら異存はなかった。

しかし、2件目の用件を聞いた時は思わず席からずり落ちそうになった。

将兵達に、地球文化の勉強のため、地球の映像文化を知らせたいという趣旨は尤もだが、提供要請があった映像ソフトが『笑点』と『サザエさん』というのは一体何のジョークだ？

……しかし、内容そのものに問題はないので、出発前に用意したプログラムを圧縮データにして送るよう、パク通信長に指示した。

「……この手は使えるな」
『ああ、使えるな』

通信を終えた後、冴子と、やり取りを聞いていた真田はニヤリとした。

「それにしても、何でガミラスが日本のアニメや大喜利を知っていたのかな？」

『先の戦争の時に連中が太陽系内に敷設した長距離通信網のせいだろうなあ……』

「……ま、きっかけはともかく、地球の文化に興味を持ってもらうのはいいことさ」

『ああ、そうだな……』

この時の冴子と真田の頭には、デスラーがグラス片手に『笑点』『サザエさん』に見入る光景が浮かんでいた。

……シュールだ。実にシュールな光景だ。
サーシャが成長したら

「總統、カワイイ」

とか言いそうな気もするが、泣く子も黙るデスラーに、そんな命知らずな事を言っても許されるのは、多分あの娘っ子位だろう……。

「全艦、取り舵80。全速前進だ」
「了解、取り舵80。全速前進！」

『ヤマト』 『相模』 はガミラス艦隊に雁行して赤色巨星目指して進み出した。

赤色巨星

老いた星の光を浴びる『ヤマト』 『相模』 とガミラス艦隊はここで分かれ、ガミラス艦隊は第2の母星探しに、『ヤマト』 『相模』 は地球に向かう。

『ヤマト』 はデスラーの旗艦と通信回線を繋げている。古代とデスラー、あるいはスターシャが話をしているのだろう。

『相模』 はコルサツク艦隊旗艦と回線を繋いでいた。

『ここも僕の死に場所ではなかったようだ。 嶋津艦長』

「…この世界でなすべき事がまだまだ残っているという事でしょう。コルサツク司令」

『そうだな…祖国再興を見届けるまでは死ねなくなってしまうた…』
「それは私もですよ」

敬礼を交わして通信を閉じる。

程なく、ガミラス艦隊は旗艦を先頭に、どこへとも知れない旅に付いた。

そして……。

「本隊もこれより地球に帰る。地球に戻った時が我々の任務完了であり、ようやく目的の半分をこなしたに過ぎない。」

暗黒星団帝国の追撃や白色彗星帝国の残党と遭遇する可能性も十分残っているから、気を抜かず、各々の為すべき事を果たしてほしい。

「全艦、地球に向けて発進する！」

「了解！面舵130、全速前進！」

『相模』『ヤマト』は艦首を右に向け、加速して赤色巨星から離れていった。

第80話『帰るじ』(後書き)

当然、帰りにも色々あります。

第81話『家路(1)』(前書き)

しばらくはイスカンダルからの帰路が舞台です。

勿論、何事もなく終わるわけありません…。

第81話『家路（1）』

『相模』艦橋

「艦長、大マゼラン雲域を完全に抜けました」

観測席の三沢亜利沙が外洋宙域に出た事を告げた。
冴子は頷き、増速を命じる。

「銀河間巡航速度へ」

「了解、銀河間巡航に入ります」

並走する『相模』『ヤマト』両艦の主機関の回転が上がり、速度は光速の9割を超えた。

『ヤマト』病室

フェイトとティアナはシャリオと話していた。
容態はまだ安静を要するが、人工呼吸器は外されていた。

「凄い事になりましたね…」

「うん、未だに現実とは思えないんだけどね」

「でも、現実に女王陛下と同じ船に乗り合わせてるんですよ…」

古代 守とスターシャの事は佐渡と雪から聞いていたのだが、昨日から『ヤマト』艦内の空気が明らかに変わっていることで、同じ艦に乗り合わせていることを改めて実感した。

シャリオとの話を終えて医務室に戻ったフェイトとティアナだが、

入ってきた人物を見て硬直した。

森 雪に付き添われて入ってきたのは、先程話題にのぼっていた当のスターシャ本人だったからだ。

一瞬どうしようかと迷ったが、相手は仮にも一国の女王。自分達から名乗るのが礼儀だ。

「お初に御意を得ます、女王陛下。

時空管理局所属執務官のフェイト・テストロッサ・ハラウンと申します」

「同じく、ハラウン執務官の補佐をしております、ティアナ・ランスターと申します」

直立不動で挙手する2人に、スターシャは、

「初めまして、フェイトさん、ティアナさん。スターシャです。

私はもう、単なる亡命者ですから、単にスターシャと呼んで下されば結構ですよ」

柔らかく微笑みかけられてしまった。

(いえいえいえ。単なる政治亡命者にそんなオーラは出せません…)

ティアナは心の中でスターシャにツッコんだ。

メディカルチェックを受けるといっているので、一旦話を切り上げ、フェイト達は自室に引き上げた。

『マスター』

自室に戻るや、フェイトのデバイスであるバルディッシュがフェイトに話しかけた。

「何？バルディッシュ」

『先程お目にかかったスターシャ陛下ですが、魔力反応がありました…。ランクはS乃至オーバーS。リンカーコアは全く損耗しておりません』

「そう、やっぱり…」

フェイトも、スターシャから発せられていたオーラに違和感を感じていたのだが、それが裏付けられたことを認識した。

「……ティアナはどう思う？スターシャ陛下が魔力保有者であることを管理局に報告すべきだと思う？」

フェイト達が関係した、11年前のPT事件や闇の書事件で、管理外世界にも天才的魔導師資質を持つ者が少なからず存在することが判明した結果、時空管理局は管理外世界からも魔導師を積極的にスカウトする方針をとっていたのだが…。

「フェイトさん…。私は、スターシャ陛下については報告すべきではないと思います」

「うん。続けて、ティアナ」

「はい…。率直に言いますと、管理外世界出身の魔導師の時空管理局入りは自由意思ということになっていますが、実際にはかなり強引・執拗な勧誘が行われており、少なからず顰蹙を買っていると聞いています。

それに、私達では思いもよらないほど苦しい決断をしたばかりのあの人を、これ以上傷つけるのは忍びない事ですし、ここの人達から

受けた恩を仇で返すことにもなります。

私は、時空管理局員である前に、ティアナ・ランスターでありたいんです」

それをじつと聞いていたフェイトは微笑を浮かべた。

「うん。私もティアナと同じ考え。

…スターシャ陛下には、このまま静かに、ご主人や王女様、お友達と地球で過ごしていただくのが一番だと思う。

だから、バルディツシュ。スターシャ陛下と、恐らくはサーシャ王女も持っているであろう魔力データは記憶しないで置いてね」

『それがよろしいかと。マスター』

バルディツシュも積極的に同意したため、フェイトとティアナはこの件を封印した。

『ヤマト』高級士官居室

すやすやと寝息を立てるサーシャを横目に、部屋を訪れていた真田は守にコスモガンを手渡した。

「おい、これは……？」

「お前の銃に決まっているだろうが」

真田は、さも当然という表情だ。

「何だ。聞いてなかったのか？」

一昨年の航海でタイタンに降りた時、お前の弟が『ゆきかぜ』の残骸の近くで拾ったのさ。

そのままあいつが持っていたんだが、今回の出撃が決まった時、俺

が預かって整備しておいたんだ。

こんなこともあるのかと思ってな」

「まったく、お前は……」

苦笑を浮かべてそれを受け取った。

暫定的とはいえ、現役軍人に戻った以上、作戦行動中は銃携行が義務付けられているからだ。

「それより、地球に戻ったらどうするんだ？正式に軍に復帰するか？」

守は少し間を置いて答える。

「……ああ。現実問題として、スターシャとサーシャの事で、軍に色々と便宜を図ってもらうことになるだろうしな。

俺みたいになくたばり損ないを引き取ってくれるならどこにも行くさ」

「……言うておくな。出撃が決まった時、あちこちの部隊にいる同期の連中から、お前が帰ってきたらウチに寄越せとガンガン言われたんだぞ。

生き残りの艦隊勤務組には、嶋津をはじめとして、艦長や部隊指揮官になつた奴がいるからな。

弟からも聞いただろうが、防衛軍はつい先日、白色彗星帝国と戦い、壊滅的打撃を受けた。

フネなんかの損失はまだいいが、土方さんをはじめ、艦隊勤務の連中の8割が死んでしまったんだ。

そこへお前みたいな経験豊富な中堅が戻ってくれば、軍としては両手を挙げて歓迎するさ。特に藤堂長官はな。

沖田さん亡き後、一番信頼してた土方さんにまで逝かれてしまった

からな。

おっさん組ですぐ総司令が務まりそうなのは、訓練校の山南さんが、第6艦隊のラングスドルフ司令。

それに続くのが内惑星艦隊のタナリット司令だろうしな…。

それ以上に問題なのは長官の周囲さ。

参謀本部は白色彗星の1件で無能の烙印を押され、大半が更迭さ。

長官はそこにお前を入れるつもりじゃないかと思っぞ」

同じ頃、『ヤマト』第1艦橋

真田は古代守の部屋で何か相談中。機関長の山崎は機関室で徳川達の指導中で、艦橋には古代ら同期組と北野だけがいた。

森 雪は監視員席を立ち、古代と島の間立った。

「ね、皆に提案があるんだけど…」

「提案？」

「何の？」

古代、島はもちろん、南部や相原らも雪の提案とやらの意味を測りかねていたが、提案の「内容」を聞き、始めは驚いたものの、北野を含めて嬉々とした表情になった。

「やりましょう、是非！」

「ああ、是非やるべきだ！」

賛同の声が続々と上がった。

古代進がそれを締めくくる。

「となれば、やはり真田さんと嶋津さんにも関わってもらわないとな」

フェイト達をも巻き込むことになる「お祭り」が深く静かに胎動を始めた。

第82話『家路(2)』(前書き)

「お祭り」の準備が本格的に始まります。
閉鎖空間で気分転換は必須ですからね。

第82話『家路(2)』

大マゼラン雲を離脱後は概ね順調な外洋航海が続いていたが、スターシャが体調を崩した。

その知らせは復路航海2日目に『ヤマト』からもたらされた。

幸いにも、軽い発熱程度でワープには影響はないとの診断だが、念のためワープ距離を若干短く設定した。

あれだけの事があったのだ。心労が重なったとしても仕方なからう。

『相模』艦長室

冴子は固まっていた。

モニターの向こうには真田がいる。

「……………マジか？」

『ああ、大マジだ。これにはお前も1枚噛まんとなしなない』

「う……ん……………」

真田から私信が入っていたので、昼休みを利用して真田と連絡をとったところ、用件を聞いて言葉を失った。

しかし、悪……もとい友人としては真田達の思いは至極当然であり、賛成である。

腕を組んでしばし考え、結論を出す。

「わかった、私も噛もう。

ただ、先に当事者以外全員一致の賛成と、オヤジ（藤堂司令長官）殿には話を通しておく必要があるだろうな。

例のサーチ&ハッキングはどうだ？」

今回の出撃の往路、13TFは、針路付近でガミラスや白色彗星軍が遺棄していった軍用通信施設のサーチ&ハッキングによる接收を図っていた。

地球サイドでもシリウス・プロキオン方面の白色彗星帝国軍通信施設のハッキングに成功し、情勢が落ち着き次第、調査部隊を派遣する予定だという。

『……ああ、残り3万光年のところにまで戻れば使えるだろう』
「わかった。くれぐれもあいつらには気取られないようにな」

そこまで言ったところで冴子ははたと気づいた。

「……ところで、アレは一体誰がやるんだ？」

『お前以外に誰がいるんだ？』

部隊指揮官だし、れっきとした艦長だろう？』

「……やっぱし？」

冴子は頭痛を覚え、おもわず眉間を押さえた。

通信を切ると、思わずぼやきが口から出てしまう。

「それこそ柄じゃないぜ。こつこつ役は沖田さんにこそやってもらいたかったよ……」

「艦長」を「船長」に置き換えればそう珍しい事ではない。職務権限として認められているからだ。

自分はその資格には程遠いとは思えないが、引き受けた以上、後に退くつもりはない。

否、お祭り屋の血が騒ぎ始めていた。

「…まずはあいつらを共犯にしよう」

まず自らの片腕と同期生を巻き込む事を決意したのだが……。

「やりましょう！是非！！」

「やろう！あれは俺がやるからな。真田に念押ししといてくれ！！」
「…おい……」

皆まで言わせず食いついてきたので、ツッコまずにはいられない。さらにその晩、幹部ミーティングの最後にこの話題を持ち出したところ、既に話が伝わっていたらしく、誰ひとり反対・慎重論を唱えず、全員一致で賛成した。

(あいつ、相変わらず人望あるなあ……。それはいいけど、即答でいいのか？皆)

感心するやら呆れるやら……。

ただ、その前に、時空管理局の艦船『レオニダス』襲撃現場に赴かなければならない。

往路で拾った3人のお嬢さん方の仲間と連絡がとれるかも知れないからだ。

うち1人、重体で収容したシャリオ・フィニーノが、回復しつつあるものとはいえ、まだ動かせる状態でないのが気掛かりだが…。

タイミング良く「お迎え」が来ていればいいが、そうでなければ地球まで連れていくしかない。

地球には、確かもう1隻遭難した時空管理局艦船『レム』から取り

外した通信装置がある。

これがうまく動作すれば連絡がとれる可能性があるし、当方の遠距離宇宙通信のレベルアップにも貢献する。何だかんだ言っても、彼女達も早くミッドチルダとやりに帰りたいだろう。

……ま、地球に連れて行く必要が生じたのならはその時に考えればいいし、気分転換のためにも「お祭り」に参加させよう。

『ヤマト』士官サロン

「はい、終わりました」

サーシャのおむつを替えていたのはフェイトだった。

疲労が溜まったスターシャが発熱したため、サーシャの面倒は守が見ているが、やはり男手では母親のようにはいかなかった。

本来は生活班長たる森 雪の出番だが、雪は第1艦橋勤務でもあるため、サーシャにつききりというわけにもいかない。

そんな状況を知ったフェイトが子守りの手伝いを申し出たのである。

「うまいもんだなあ、君……」

「いえ。姪達で多少経験があるだけですから……」

フェイトが頬を染めて応える。

（め、珍しい……。なのはさんLOVEのフェイトさんが、男の人相手に頬を染めるなんて……）

上司の珍しい姿に、ティアナは微妙に間違った感想を持ちながらも

興味津々の表情になる。

サーシャは人懐っこい性格なのか、あるいは母親と共通である金髪ロングの容貌が幸いしたか、雪とフェイトにはすぐ懐いたのだが、おむつ替えなどの実際面をやってみると、身近に幼な子がいる分、フェイトに一日の長があつた。

雪は、フェイトがいる分、リーダー監視や生活班長の仕事に集中できるのだが、サーシャの叔母になる身としては複雑で、同い年のフェイトに負けていられないとばかりに競争を挑んだ。わけではなく、率直にフェイトに教えを乞うた。

優れた宇宙戦士は、自分より高い力量を持つ者は率直に称賛を贈り、教えて貰うか盗み取って、自分のものにするものだ。

この点、雪は紛れもなく優秀な宇宙戦士だった。

そして、守やフェイト達が知らないところで、雪の提案は『ヤマト』『相模』のクルーを巻き込み、深く静かに進められていった。

例によって、作者の自分勝手な設定です。

アニメやゲームとは異なる部分がありますが。いつものとおり生温かくご覧下さいませ。

艦船設定6 『地球防衛軍の航空母艦・計画艦2201-2202』

? 『レキシントン』級戦闘空母

全長272?、全幅54.1?

基準排水量 64000?

搭載機数

戦闘攻撃機32機（露天繫止+15機）

艦首拡散波動砲×1

主砲 40.6?3連装シヨックカノン砲塔×2

20.3?艦橋砲×6

パルスレーザー×30→42

ミサイルランチャー×20

地球防衛艦隊に機動戦力を付加するために計画され、2201年6月から12月までに7隻が竣工・就役した。

短期間に数を揃える事と空母の宿命である脆弱性をカバーするため、『ドレッドノート』級主力戦艦の設計を流用。艦後半部に飛行甲板と格納庫等を設けたが、前半分は戦艦そのものである。

主機関は巡洋艦用を並列に配置し、その外側に補助機関を設置した。

当初は斜め全通式飛行甲板アングルド・デッキで設計されたが、建造期間の短縮が優先

されたため、中途半端ながらもこの形態が採用された。

対白色彗星帝国戦には就役済の5番艦までが第1・第2航空戦隊として出撃。

土星圏における艦隊決戦に際しては、土方司令の特命で、本級5隻に第14水雷戦隊と独立第13戦隊を加えて編成した第201任務部隊が、フェーベ空域で白色彗星帝国軍機動部隊への奇襲に成功。空母を全て撃沈・撃破したのに加え、敵本隊後尾への攻撃にも参加、敵本隊撃滅に貢献したが、戦闘集結直後に出現した白色彗星に5隻とも吸い込まれて行方不明になり、全艦喪失と判定された。

白色彗星帝国戦に間に合わなかった2隻(『キエフ』『グラーフ・ツェッペリン』)は再編された第1航空戦隊所属として、現在訓練任務についている。

? 『コメット(ファースト・コマールシャルジェット)』級航空母艦

全長261?、全幅85?

基準排水量 59500?

搭載機数^{コスマイガー}64機(露天繫止+24機)

15・2?3連装対空両用速射砲塔×2

同連装砲塔×2

パルスレーザー×50

対空ミサイルランチャー×16

本級は白色彗星帝国軍が遺棄した高速中型空母を鹵獲・接收して調査した後、経年が低く、状態良好と判定された2隻を地球防衛軍仕様に改修した。

当初は白色彗星に因んで『コメット』級と、彗星の名をつける予定だったのが、1番艦の割り当てを受けたイギリス連邦が、

「『コメット』は我が国が世界に先がけて開発した商業ジェット旅客機の名称でもあるから、設計メーカーの名前をつける！」

とばかりに『デ・ハビランド』と命名してしまったため、2番艦を割り当てられたアメリカもジョーク混じりに、『ボーイング』と命名した。

このため、一般には『初の商業ジェット機』級として知られるようになった。

主機関は白色彗星帝国の巨大戦艦の砲撃でドックごと全壊し、建造が中止された『アンドロメダ』級4・5番艦『オリオン』『イプシロン』用に製造済だったものに換装した。

このため巡洋艦と同等の加速力と高い航行能力を獲得した。

また、元が長距離侵攻作戦用の艦であったため、居住性（下士官以上）も意外に高く、設備面は以後の新規計画艦や既存艦の近代化改装にフィードバックされた。

（但し、一般兵クラスの居住性は地球艦が上回ると判定）

？『インコンパラブル』級戦闘空母

全長330？、全幅76？。

基準排水量 91500?

搭載機数 48機（露天繫止+20）機

艦首拡散波動砲×1

40・6?3連装主砲塔×2

20・3?固定艦橋砲×6

パルスレーザー砲×40

対空ミサイルランチャー×20

『ドレッドノート』級後期形主力戦艦をベースに艦体を延長し、全通アングルドデッキを採用した戦闘空母。

地球防衛軍の当初計画では、『レキシントン』級は全てこの形態で建造する予定だったが、建造期間を省略するため、第7番艦までは前半部が戦艦そのものの『レキシントン』級として竣工。

2201年のクリスマススイブに竣工した第8番艦『インコンパラブル』が当初どおりの形態で建造された。

但し、旧白色彗星帝国軍空母の編入や運用人員不足のため、『天城』『赤城』までの計3隻で建造は打ち切られる予定。

?改『ドレッドノート』級自動戦艦

全長・全幅は『ドレッドノート』級主力戦艦と同じ。

基準排水量 47000?

主武装も『ドレッドノート』級後期形主力戦艦と同じ。

（一部に『アンドロメダ』級と同じ50・8?主砲を2連装×3搭載した砲戦型も建造予定）

白色彗星帝国との戦闘で宇宙戦士の大半を失ったため、人材不足を補うため急遽計画された無人艦の第1陣。2202年1月に第1陣が竣工。計32隻が建造予定。

無人艦のため艦橋がなくなり、人工知能等の枢要部は強固な装甲内に収められるとともに、機動性も大幅に向上した。

うち8隻は、主砲を建造キャンセルされた『アンドロメダ』級4番艦以降に搭載予定だった50・8?主砲を流用。2連装×3に改めた重砲戦形として建造される。

しかし、ベースが有人艦のため中途半端な感が否めず、2202年後半からは新型自動戦艦に建造が切り替わる予定。

?自動突撃駆逐艦

全長・全幅・主武装は新・突撃駆逐艦と同じ。

白色彗星帝国戦後の人材難に対応し、2201年末に建造が始まった。

無人艦ゆえの急機動が可能。

これら自動制御艦は地上施設あるいは制御設備を有する戦艦からの制御で運用される。

?『アリゾナ』級宇宙戦艦

数値・諸元は予定値

全長300?、全幅40?

基準排水量 80000?

改良形40・6?3連装主砲塔×4

改良形20・3?3連装速射砲塔×2

パルスレーザー×20以上

ミサイルランチャー×未定

元々は前世紀末、地球脱出用宇宙戦艦『アイオワ』級として計画され着工したが、ガミラス軍の攻撃で『アリゾナ』以外は大破し全壊。『アリゾナ』もモスボールされていたが、白色彗星帝国戦後、地球防衛軍が連邦各州に防衛艦隊再建への協力を依頼し、『アンドロメダ』級以下の設計を公開し、設計の自由度を大幅に認めたため、北米、ヨーロッパ、ロシア、中国が呼応して、独自設計による大型戦艦を計画した。

そのトップを切って2201年11月に凍結していた『アリゾナ』の工事を再開。

さらに2番艦『モンタナ』も12月に起工。

主砲は40・6?のままだが、大幅な改良を加えて射程と装甲貫徹力を増大し、発射速度も上がった新型砲を採用。これを12門搭載して、『ヤマト』の46?主砲9門と拮抗するとしている。

元が『ヤマト』同様の移民艦のため、長期間の単独航行を念頭に
した設計である。

なお、イギリス連邦とドイツ、ロシア、中国もかつて計画していた
移民艦をベースにした同様の戦艦の建造を発表しており、イギリス
分が『プリンス・オブ・ウェールズ』。

ドイツ分が『ビスマルク』。

ロシアが『ガガーリン』（旧ノーウィック）

中国は『長江』と発表。

これらの戦艦群は2202年11月までに就役予定。

？実験艦、超『アンドロメダ』級戦艦

基準排水量15〜16万？級という事以外、現時点では不明。

第83話『お元気ですか？(1)』(前書き)

西崎さんは最期まで西崎さんでした……。

来週の週刊ヤマトには主力戦艦(「さらばノ2」のようです)の記
事がまた掲載されます。

どうぞ期待!?

第83話『お元気ですか？（1）』

（天の川銀河と大マゼラン雲の間の、とある空間）

一帯には白色彗星帝国軍の戦艦と駆逐艦の残骸、船骸と化した時空管理局の次元航行艦『レオニダス』が漂っている。

それを横目に見る空間に『ヤマト』『相模』は遊弋^{ゆうよく}し、周囲を警戒のコスモタイガーが旋回している。

「よし、いいぞ。相原」

促す真田に頷いた相原がしばらくコンソールを操作していたが、回線が繋がったらしく、話し始めた。

「こちら、地球防衛軍所属、宇宙戦艦『ヤマト』。時空管理局次元航行本部、聞こえますか？ 繰り返しします……」

モニターの画面が明滅し、画面にオペレーターらしい緊張した面持ちの若い女性が映った。

『こちら、時空管理局・次元航行本部。受信感度良好です』

「こちら『ヤマト』。私は通信長の相原です。

……早速で申し訳ありませんが、フェイト・T・ハラオウン執務官に代わります」

相原がモニターの向こうのフェイトに合図を送った。

「ハラオウン執務官です。フィニーノ、ランスター両補佐官と

ともに、襲撃された『レオニダス』から救出され、現在『ヤマト』に乗艦中です。

突然で申し訳ありませんが、クロノ・ハラウン提督に取り次いでもらえますか？」

『……………！？は、はいっ！少々お待ち下さいっ！』

オペレーターはさすがに驚いていたようだが、我に返り、クロノを呼ぶ。

ややあつて画面が切り替わった。

『 本当に、フェイトなのか…？』

クロノも目をパチクリさせている。

「うん、私だよ……………ごめんね、心配かけて」

『 ……いや、元気な様子で安心したよ、フェイト。』

シャリオとティアナはどうだ？』

目を真つ赤にしたフェイトが横にずれ、ティアナがカメラの前に出る。

「ご無沙汰しております、クロノ提督。

幸い私も大した怪我はなく、問題なく過ごしていると、皆に伝えて下さい。

それでは、シャリーさんに代わりますから、少しお待ち下さい」

そう言うや、カメラを手にしてシャリオのベッドサイドに移動した。

「…お久しぶりです、クロノ提督。ご心配をおかけして申し訳ありません」

『 ……いや、こうして君達の声が聞けたから、僕もひと安心したよ。』

「このことは皆にも伝えておくから、安心してほしい」

『ヤマト』『相模』のブリッジクルーもこのやり取りを見ていた。フェイトの義兄だというクロノ・ハラオウンが、提督という階級とは裏腹なほど若いことに、古代も冴子も内心で些か驚いていたが、まあ、組織が違うのだから仕方ないか、と割り切った。

フェイトから『レオニダス』を襲撃した勢力（白色彗星帝国）の事を聞かされたクロノはさすがに息を飲んだが、その白色彗星帝国が地球侵略を図り、地球防衛軍を壊滅寸前に追い込んだが、地球側の激しい抗戦の末、国家元首を始めとする首脳陣の多くが斃れて中枢は壊滅したと聞かされ、より驚くことになった。

しばらくフェイトとクロノは白色彗星帝国や現在の状況について話し合っていたが、それもひと区切りついたらしく、クロノが、艦長と部隊長と話がしたいというので、まず古代が出た。

「『ヤマト』艦長代理の古代 進です」

『時空管理局次元航行本部所属、クロノ・ハラオウンです。』

妹と友人達を助けていただいた事、心から感謝します』

「……当たり前的事をしただけですから、どうぞお気になさらず」
さらに、フェイト達の現状やシャリオの体調等について話していたが、それも済んだようで、冴子の番になった。

「戦艦『相模』艦長の嶋津冴子です。第13戦隊司令官を代行しています」

『時空管理局次元航行本部所属、クロノ・ハラオウンです。』

危険な中にも関わらず、部下を助けていただきました事、心から感

謝します』

「…先程古代も申しましたが、船乗りとして当然のことをしたまでですから、どうぞ気にしないで下さい。

……それよりも、今後の事を相談しましょうか」

『そうですね……』

そう、問題はやっと半分が解決したただけなのだ。

フェイト達を時空管理局側に返した時、この問題は終結するのだ。

「……私達は軍の命令を受けての作戦行動中で、一刻も早く目的地に到着するよう命じられていますから、この空間に長く留まる事はできません。

ざっくばらんにお聞きしますが、そちらからこの空間までの所要時間はどの位ですか？」

その問いに、クロノは

『……率直に言って、最短で50時間。2昼夜を要します』

言いにくそうに答えた。

それはかなりかかりそうだ。

「そこまでかかるとなると、無情な言い方で申し訳ありませんが、そちらのお迎えを待つのは無理ですね。

フィニーノ補佐官の容態もありますし、一度我々の本部に戻り、補佐官の回復を見ながら具体的な話をするのが現実的だと思いますが、どうでしょう？」

『……………』

冴子の回答は向こうも予想していたのだろう。内心はともかく、表

情に不平不満の色はなかった。

『おっしゃるとおりです。』

我々がそちらの立場でもそうするでしょう。

それで、今回のような通信ポッドを設置しました。

これはそのまま、そちらの任意の場所までお持ちになって下さい。

フィニーノ補佐官が回復しましたら、それに接続してこちらをお呼び下さい。具体的な事を詰めましょう。』

「そう言っていただけとありがたい。なるべく早く帰せるよう、こちらでも努力します」

冴子がそこまで話したところで、クロノに通信が入ったようだ。

少しやり取りがあつてから、冴子に向き直った。

『嶋津艦長、古代艦長代理、大変申し訳ありませんが、もう少しだけ時間をいただけるでしょうか。』

3人の元同僚が、どうしても一言話したがっております…』

済まなそうに言うクロノに、冴子・古代とも苦笑しながらも快諾した。

『ティア!?!』

画面に映ったのは青みがかつた髪の毛のボーイッシュな16・7歳位の娘。

感情豊かなのだろう。既に顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっていた。

「スバル!?!」

即座にティアナが反応した。

『ディア〜、よがっだよお〜』

もう大号泣である。

「ちょ、ちよつと、バカスバルッ！やめなさい、もっつ！！……恥
ずかしいじゃ、ないよお……」

始めは元気よくスバルを咎めていたように見えたティアナも感極ま
ったのか、一緒に泣き出してしまった。

ひとしきり泣いた後、フェイト、シャリオと話しているうちに
いくらか落ち着きを取り戻したように見えたスバルだが、ポケット
からティッシュを取り出すや、派手な音を立てて鼻をかんだ。

「……………(^ - ^ ; ;」

「……………(^ - ^ ; ;」

「スバル、あんたね……。思いつつ切り恥ずかしくて痛過ぎるわよ！
何やってんのよっ！」

(ふむ、見事なポケットコミだ)

ティアナが執務官補になる直前にいたという「機動六課」時代の同
僚あるいはコンピパートナーらしい。

「ティアナ、落ち着いて。……スバルもお礼を言いなさい」

際限なく続きそうな漫才を未然に止めたのはフェイトだった。

「す、すみませんっ！」

『し、失礼しましたっ。』

……ミッドチルダ港湾特別救助隊所属、スバル・ナカジマ一等防災士でありますっ！』

艦長というからには、管理局では間違いなく佐官か提督だ。

ガチガチで敬礼するスバルに、冴子と古代も答礼した。

『地球防衛軍、戦艦『相模』艦長の嶋津冴子だ。よろしくな、ナカジマ一士』

『同じく、宇宙戦艦『ヤマト』艦長代理、古代 進だ。こちらこそよろしく、ナカジマ一士』

『あ、あのっ！私の友人と先輩を助けていただき、ありがとうございます！』

『……いや、申し訳ないことに、まだそちらに帰れる段階じゃないんだ。』

一旦我々の本国に戻ってから、改めてハラOWN提督と相談することになるが、必ず君達の元に帰すから、もう少し待ってほしい……』
『私も組織の一員ですから、事情は理解しているつもりです……』

いつの間にか、スバルの表情が真剣なものに変わっていた。

第84話『お元気ですか?』(2)『(前書き)

後編です

第84話 『お元気ですか？（2）』

スバル・ナカジマの鼻かみというハプニングがあったものの、地球防衛軍と時空管理局の初コンタクトはつつが虫…じゃなくてつつがなく終了しようとしていた。

『それでは失礼致します。……先程は大変見苦しい事をしてしまい、申し訳ありませんでした！』

先程の醜態を詫びるスバルだが、

「謝ることはないさ。我々にも覚えがあるしな。気持ちには十分わかるつもりだ」

と嶋津冴子にフォローされ、ティアナ共々ますます恐縮してしまつたスバルである。

その後、連絡先等についての詰めを行い、管理局側の窓口はフェイトの所属先である次元航行本部のクロノ・ハラウンが担当。

地球側は、防衛軍司令長官秘書を兼ねている森 雪が担当する事で決まった。

古代や嶋津は艦隊勤務なので、連絡がとれた時に地球にいない事があり得るからだ。

「それと、ハラウン提督。

妹さん達が我々の地球にいる間の身元保証人ですが……」

一時的とはいえ、フェイト達は地球（2201年の）で生活することになるわけだが、こちらの地球でも成人（満18歳以上）として

認められるフェイトとシャリオはまだしも、ティアナはまだ17歳であり、誰かしら後見する者が必要である。また、シャリオは絶対安静なのだ。

「 私が引き受けます」

至って平静に冴子が言った。

((えゝ!?))

冴子以外の『ヤマト』『相模』のブリッジクルーは我が耳を疑ったが、クロノ達の手前、ツツコミは避けた。

一方、クロノとスバルも驚き、クロノが冴子の真意を確かめようとしたところ、事もなげに

「既に私は、亡き親友の妹の保護責任者でもありますから、大丈夫ですよ」

と宣った。

その後、いくつかの意見交換を終えて通信を終えたが、早速真田達からツツコミが来た。

「いいのか、嶋津？ 雪菜ちゃんだっているんだろうか？」

「だからこそさ。雪菜にもいい経験になる」

と切り返したが、次の瞬間、軍人の表情に戻った。

「それはそうと、真田。あの通信ポッドを調べてくれ。」

通信を切つても、妙ちくりんな電波やエネルギー波みたいなのが出ていないとも限らんしな。

ロストロギアとやら絡みで、管理局の連中にこそこそ動かれてはうざったくてかなわん」

「ああ、わかった」

個人と組織は全く別個に扱う。

フェイト達3人や、先程話したクロノ・ハラウンとスバル・ナカジマには悪い印象はないが、先日救援した時空管理局の次元航行艦『レオニダス』乗組員の遺体の中に、制服姿の10代前半にしか見えない子供達が少なからず含まれていたことは、『ヤマト』『相模』乗組員に、管理局に対する不信感を植え付けるには十分だった。

故に、管理局との接触はあくまで人道上必要だからであり、それ以上でも以下でもないのだ。冴子のロストロギア云々発言も、『レオニダス』や『レム』から回収した資料で、魔法文化がない世界（有人惑星）にもこっそり入り込んで活動しては、現地住民を巻き込んだ記録を見たからだ。

フェイト達には悪いが、現時点において、時空管理局に好感を持つ事は極めて困難。

それが冴子、古代、真田ら13TF幹部の共通認識だった。

「まあ、管理局の事はさておき、フェイトとティアナにもアレを手伝ってもらうことが決まったわけだが、あいつらには気取られてないな？」

「ああ、問題ない」

冴子、古代、真田、雪の首謀者カルテットがニンマリとした表情になる。

それを目にした大村や島達は、微かに引き攣った苦笑を浮かべた。

ミッドチルダ郊外・高町家

「スバル（さん）……」

『あ、あははは……（涙）』

画面のスバルは、元上官とその娘の

『スバル（さん）だけフェイトちゃん（ママ）達とお話したなんて
ずるい！！』

視線に冷汗たらたらであった。

スバルに過失があったわけではない。

『ヤマト』と連絡がとれた時、クロノを除けばすぐ連絡をとれたのはスバルしかいなかった。

なのはは教導中、ヴィヴィオは授業中だったからだ。

なのはもそんな事は百も承知で、フェイトと話せなかった八つ当たり
りに過ぎないことは十分解っている。

要は、

『解っちゃいるけど割り切れない』

これだけなのだ。

「と、とにかく。フェイトちゃん達と何を話したか、詳しく言ってくれれば許してあげるよ」

と、なのはが態度を軟化させたため、スバルはフェイト達や地球防衛軍の士官と話した事を改めて報告し、一緒に送られてきた、フェイト達と『ヤマト』クルーと一緒に写った写真を見せたところ、なのは達は安心したのか、涙目になっていた。

一升瓶を手にした赤いロボットと一緒に写真を見た時はさすがに度胆を抜かれたようだったが……。

「よかった、フェイトちゃん、ティアナ、シャーリー……」

「うん、よかったね、なのはママ……」

ひと通り話し終えてから、スバルはなのはに言った。

『なのはさん、も一つ報告することがありました』

「何？スバル……」

スバルも、1年間なのは達に鍛えられた甲斐あって、魔導師としての強さだけではなく、人間としてのしたたかさも身につけていた。

『地球防衛軍の戦艦『ヤマト』と『相模』の艦長さん達も結構若かつたんですよ』

「そうなの？」

『ええ、まず、『ヤマト』の艦長代理さんはクロノ提督より若かつたですね。』

なのはさん達と同年位だと見ました』

と、まず古代 進の画像を見せた。

「そ、そうだね……」

なのはは同年輩の青年の画像をまじまじと見た。

「カツコイイお兄さんだね」

誰の古代評か、言うまでもなからう。

『でしょでしょ！？ 同年輩の男性局員には、これだけキリツとした人いないよ！』

スバル・ナカジマは確かに男を見る目があった。惜しむらくは、古代 進当人に許婚者がいるのを見通せなかった事だ。

「あはは……」

なのはは、ミーハー化したスバルに苦笑いするしかできない。そのスバルが、追加情報を提示してくる。

『それと、戦艦『相模』の艦長さんが部隊長なんですけど、女性なんですよ。』

八神部隊長ほどではありませんが、結構若い人でした』
「そうなんだ、どういう人？」

なのははも驚いた。映像で見た『ヤマト』『相模』の戦闘力は凄まじいばかりだったが、2戦艦を率いていたのがはやてよりは年上らしいが、若い女性だとは。

スバルはニンマリとした表情になった。

『ズバリ言います。』

20年後のヴィヴィオです!』

「え!？」

スバルが開いた画像には、黒主体のジャケットを着、制帽を被った20代半ば過ぎと思しき女性士官が立ち上がり、拳手の礼をとる姿が写っていた。

制帽の下の顔立ちを見る。

瞳を紅と翠のオッドアイにし、髪を金髪・サイドポニーに結わえると、確かに、聖王モードになった時のヴィヴィオに似ている。

あの時のヴィヴィオは17歳前後に見えたが、画像の嶋津という女艦長は、多分20代後半から30歳位だろう。

そう言われれば、20年後のヴィヴィオに見えなくもない。かなりの美人だ。

そう、右頬に走る大きな傷がなければ……。

「わあ、海賊さんみたいだ」

ヴィヴィオが正直な印象を語るが、なのはは、

(ヴィヴィオ、お願いだから、海賊だけはやめて)

奇しくも、無二の親友と同じような感想と妄想を抱くのだった。

『相模』艦長室

「へぶしっ!……いきしっ!……!」

航海日誌を書いていた冴子は不意のくしゃみ2連発に見舞われた。

「これは相当…、悪意を持った噂を流してやがるな…」

他に誰もいない艦長室で、ひとり懽然として呟いた。

第85話 『結婚式を挙げよう』(1) (前書き)

短いです。

第85話 『結婚式を挙げよう(1)』

時空管理局本局

フエイト達との通信が回復した事を受け、次元航行艦『レオニダス』遭難対策会議が再度開かれた。

上座にはラルゴ・キール、ミゼット・クローベル、レオーネ・フィリスの三重鎮が並び、本局、次元航行本部、地上本部の幹部連も着席している。

説明役は地球防衛軍側と直接会談したクロノ・ハラオウンだが、オプザーバーとして、地球(第97管理外世界)出身の八神はやて二等陸佐と高町なのは一等空尉も末席にいた。

「 それでは再生します。

一部お見苦しい場面もありますが、先方のご理解をいただき、当人には嚴重に注意しておきましたので、予めご了承をお願い致します」

映像は約40分に及び、フエイトが、XV級『レオニダス』等、一連の次元航行艦襲撃の下手人が「ガトランチス帝国軍」の艦艇であることを報告すると驚きの声が上がったが、そのガトランチス帝国が地球侵略を行ったものの、『ヤマト』をはじめとする地球防衛軍が死兵同然で抵抗した結果、ガトランチスの国家指導者達がほぼ全滅した事を知るや、驚きの声が一層大きくなった。

さらに、L級艦『レム』が大破状態で火星付近に空間転移して『相模』と遭遇したものの、生存者ゼロだった事実を知らされた時は、一同静まり返った。

画面の中でフェイトは

『……地球で彼らの遺骨と遺品を返還していただくよう交渉し、
遺族にお返しします』

と結んだ。

映像は続く。

『ヤマト』から提供された地球の映像は第97管理外世界のそれと
変わりなかったが、「ガミラス帝国」との8年に及んだという絶滅
戦争で地形が変わった所もここかしこで見られた。

さらに、クロノと古代進、嶋津冴子の話の中で、嶋津が「海鳴市」
出身で、「聖祥大付属小・中学校」卒であること、近所に21世紀
初めから7代続く「翠屋」という高町一家が営む喫茶店があった等
と発言した時、八神はやてと高町なのはは驚きの声を上げた。

しかし、8年前のガミラスの攻撃で海鳴市は消滅。
翠屋の高町一家も、末娘以外は2年前までに全員死亡したと嶋津が
補足した時は、はやて、なのはとも顔色を失った。

「そ、んな……」

なのはが絞り出すように言えたのはそれだけで、はたから見ても気
の毒なほど意気消沈してしまった。

その後スバルが泣き崩した顔で登場。ティアナとボケツッコミを展
開し、さらに鼻をかんた時は、皆が唾然とし、はやてとなのはは、
余りの恥ずかしさといたたまれなさに俯くことしかできなかった

。

『ヤマト』

13TFは天の川銀河から約5万光年の所まで近づいていた。

外洋宇宙を地球に向けてひた走る『相模』『ヤマト』の2戦艦。
しかし『ヤマト』で、遂に真田と古代進が動いた。

「……………今何て言った？真田、進？」

「結婚式だ。ケ・ツ・コ・ン・シ・キ」

「だから、誰の！？」

「誰のって、兄さんとスターシャさんのに決まってるだろう？」

兄の問いに弟はさも当然のように答える。

「馬鹿言つな、俺達はとうに夫婦だぞ。今さら式を開く意味あるのか？」

「意味は大ありだぞ、古代。」

お前達、人前で結婚式を挙げてないだろう。

それに、地球に帰ればあちこちに引つ張り回されて、スターシャやサーシャと思うようにいらなくなるし、パーティーじゃ、会いたくない連中とも会わなきゃならないんだぞ」

「それに、スターシャさんも地球に住むんだから、地球の文化に触れてもらついい機会じゃないか」

「……………」

弟と親友の言うことはもつともなのだが……………。

その時、予想外かつ決め手となる言動をとった者がいた。

「守、皆さんのお気持ち、お受けしましょう……」

「スターシャ……」

もう一方の当事者たるスターシャ本人だ。

真田と進は会心の笑顔を浮かべた。

『相模』 艦橋

メインスクリーンの真田が親指を立てる。

『スターシャがOKしてくれたぞ』

「よし、決まったな。アレの方はどうだ？」

アレは式に欠かせない。真田の腕の見せどころだ。

『問題ない。明日中に仕上げてやるよ』

「頼む。それとフェイトとティアナには？」

『今日中に、雪が話すと言ってたな』

フェイトとティアナには重要な役どころを受け持ってもらいつつもりなのだ。

『ヤマト』 医務室

「結婚式…ですか？」

「スターシャ陛下と古代守さんの…?」

フェイトとティアナは森 雪から齎された話に絶句した。
スターシャと古代 守の結婚式を『ヤマト』で執り行う。

船上結婚式は地球はもとよりミッドチルダでも行われるが、宇宙戦艦での結婚式は初めてだ。

まあ、古代 守は地球防衛軍の士官だから、不自然ではないのだが。
驚いたことに、式に出席するどころか、手伝ってほしいと言っただ。

「でも、私達でよろしいんですか?」

「ええ、貴女方をお願いしたいの」

具体的な内容を聞くと、結婚式には欠かせないあの役回り。

どうしたものかと思っただが、女性に生まれてきたからにはこれもある一つの経験。

ましてや、ささやかながら女王陛下の結婚式の手伝い等、そうそうできるものではない。

否、望むところだ。

時空管理局員ではなく、フェイト・T・ハラウン／ティアナ・ラ
ンスターとして全力で取り組もう。

第86話 『結婚式を挙げよう』(2) (前書き)

今週末の更新はこれでおしまいです。

前半は管理局(特に本局)サイドにかなり辛口、後半は真田クオリティ全開?です。

第86話『結婚式を挙げよう(2)』

時空管理局本局会議室

地球防衛軍『ヤマト』『相模』の指揮官及び収容されているフェイト達3人とクロノ・ハラOWN提督で行われた会談映像の再生が終了した。

次元航行本部の一提督が発言した。

「『ヤマト』にせよ『相模』にせよ、あまりに戦闘力が高すぎる！ロストロギア認定して接收すべきだ！」

何人かの高官が賛意を示すかのように頷く。

これに対して反論する者もいる。

「お言葉ですが、接收できるのですか！？ 今の我々に？」
「何ですと！？」

人事統括のレティ・ロウランだ。

「XV級を簡単に撃破した『ガトランチス帝国』の戦闘艦を、数で劣勢だった『ヤマト』『相模』は難なく全滅させたんですよ。あの2隻を接收するのに何隻の艦船と、何百人の乗組員を犠牲にするつもりですか？

……それに『ヤマト』はともかく、『相模』は明らかに量産を意識した形状です。

当然、彼らの本国には同型艦や準同型艦が複数配備されているもの

と考えるのが普通でしょう？」

レティの指摘は正しかった。

地球防衛軍は無人艦も含めた艦艇の新造と改修を急ピッチで進めていたが、その中には鹵獲した旧白色彗星帝国軍の艦艇に加え、『アンドロメダ』に匹敵する北米州独自枠の大型戦艦『アリゾナ』『モントナ』、実験艦扱いの通称『超・アンドロメダ』級戦艦1隻が含まれていた。

反論を試みようとした提督の機先を制するように、地上本部のアツテンボロー中將が発言した。

「あれだけの戦闘艦を複数保有・運用するだけの科学力や軍事力があるのなら、本国防衛の戦力も相当なものでしょうし、我々魔導師が忌み嫌う質量兵器を使うことも躊躇しないでしよう。

ましてや、何度も侵略されていたのなら、一般市民も含めて侵略者への敵愾心は強いはずですよ。

一般市民から向けられる敵意と憎悪に、若年者が多い本局の武装隊員が耐えられますか？

…それに、地の利は向こうにあるんです。

例えば、地下都市に誘い込まれて逃げ道を塞がれ、毒ガスなり海水なりを流し込まれたら、いかな魔導師とてもちませんよ。

もし彼らの地球を侵略なさるなら、本局だけでやっていただきたい。私は、そんな馬鹿げた茶番に大事な部下を貸し出す気は毛頭ありませんな」

「我々を侵略者呼ばわりするおつもりかっ!？」

「管理局の都合だけでロストロギア認定して、ろくすっぽ説得もせず対価も支払わず、強奪同然に収集するやり方を、侵略以外に何と表現するのかな？」

「な……!？」

「海」「空」の高官の中にはアッテンボローの言い草に激昂しかか
る者もいたが、「陸」の出席者は、凶星かとばかりに、彼らに冷め
た視線を送っていた。

因みにクロノ、はやて、なのはは本局の良からぬ噂をいくつか耳に
していたこともあり、俯いていた。

「そこまでにしたまえ」

沸騰しかかった雰囲気を制したのはキール元帥だった。

「まだ、地球防衛軍の我々に対する態度が全くわからない以上、こ
ちらから不用意に動く事は挑発になりかねん。

ましてや、向こうの戦力の方が上ならなおさらだ。

それに、彼らはハラオウン執務官達の身柄を必ず返すと言って
いるのだから、こちらはその言葉を信じようではないか？

誠意には誠意で応えるのが礼儀というものだろう」

大部分の出席者は頷き、納得していない者も、伝説の三提督に噛み
付く度胸はないため、渋々ながら同意した。

クロノ、はやて、なのはは積極的に頷いていた。

『ヤマト』医務室

「……………」
「……………」

ちやぶ台に置かれた2つのリングに、フェイトとティアナは目を奪
われ絶句していた。

「ほお、なかなかのもんじゃのう！」

「真田サンデスカラ、驚ク程ノコトハアリマセン」

さも当然のように言う佐渡とアナライザーに、フェイトは恐る恐る尋ねる。

「あの…これ、ダイヤですよね？」

「ああ、これはイスカンダル産のダイヤだ」

答えたのは真田だ。

「リングは…ハイコスモナイトか？」

スターシャへの表敬訪問のため『ヤマト』に来ている冴子が聞いた。

「ああ、タイタン南極から初採掘した分だ」

「リングはいいとして、ダイヤは5カラットというところか？」

「ああ、藪の一件の時、ヘリに落ちてきた原石を保管しておいたんだ」

『ヤマト』唯一の汚点なので、真田も冴子も渋面になったが、

「ま、石に罪はないからな」

冴子が割り切るように言った。

「ああ、品質では地球産の10カラット以上に相当するな」

「「そんなに!?!」」

フエイトとティアナも驚きの声を上げたが、見てみると、真田からケースごと手渡され、まじまじと見てみると、確かに今まで目にしたダイヤとは根本的な何かが違うように思えた。

(こんなダイヤ、地球でもミッドでも見た事ないよ…)

(……私事です)

心が躍るといふより、癒される輝きといふべきか。

「驚くべき原石だよ。どの部分を調べても組成と品質がほぼ一定してるんだ」

「何その反則品質!？」

イスカンダルの地殻とマントルの組成はどうなってたんだろうな。

……ま、今となっては永遠の謎になってしまったがね」

(ホントに反則だよ、このダイヤ。今まで見た宝石が石ころ同然じゃない…)

真田と冴子の会話を聞きながら、フエイトも賛同した。

「あ…。このリング、どこで加工したんですか？」

ティアナが真田に尋ねた。

リングにせよダイヤにせよ、加工と研磨の精度が半端ではない。

宝石にはまだ縁薄いティアナでもわかるほどの代物、否、業物だからだ。

「ああ、それは『ヤマト』の艦内ファクトリーで加工したのさ」

冴子が答えた。

「この艦ですか!？」

ティアナが信じられない表情をしたが、真田と冴子の説明でなるほどという表情になる。

「『ヤマト』は単独で長距離長期間の行動をするための艦だからなある程度の生産設備は不可欠なのさ」

「『相模』のような量産艦は基本的に『ヤマト』のような使い方はしないから、『ヤマト』ほどの規模の作業スペースは設けていないんだ。」

(……) けど、オリジナルの戦闘機まで造る工場が『ある程度』かよ?」

最後は口に出さずに真田にツッコんだ。

「そついや、仮縫いは済んだのか？」

もう一つ重要なアイテムについて尋ねる冴子に、真田は

「ああ、雪がモデルを買って出てくれるからな。今はデータ再入力中だ」

「なるほど(笑)」

「あの…、もしかして、ウェディングドレスの縫製も『ヤマト』で?」

半ば呆然としながら尋ねるフェイトに、アナライザーが無言のまま頭部を青く明滅させた。

(何なの!?!この艦は!)(

思わずツッコミそうになるフェイト達に、冴子は

「言いたい事はよくわかるが、反則なのは『ヤマト』よりあいっ
だよ。」

……大抵の事は『こんなこともあるのかと』の一言で片付ける奴だ
から」

と真田を指差した。

(……確かこの人、両肘膝から先が義手義足でしたよね？

それで設計製造から戦闘機の操縦や白兵戦までこなしたり、義手義
足に爆弾を仕込むなんて……、スカリエツティを上回るマッ○……もと
い、スーパーサイエンティストじゃないですか!?)

(ティアナ、もうツッコむ気が失せたよ、私……)

フェイトとティアナは、真田志郎を歩くロストログアと認定したの
である。

第87話 『結婚式を挙げよう』(3) 『(前書き)』

予定外投稿です。

短くて、最後は物悲しいかも…。

第87話『結婚式を挙げよう』(3)『

時空管理局・次元航行本部

とある一室……。

「ぶ、部長!」

モニターを見ていた技術員が首を傾げ、しばらくキーボードを操作してから、困惑の声を上げる。

「どうした?」

部下に呼ばれた上司は面倒臭そうに顔を上げた。

「『ヤマト』に積み込まれた次元通信ポッドからの信号が突然異常に……」

部下が指し示したモニターを見た上司は顔色を変えた。

「何だ、これはっ!」

モニターには、正常ならばポッドの位置座標軸、つまり地球防衛軍の『ヤマト』『相模』の現在位置を示しており、計画では第97管理外世界とは異なる、A・D・2201年の地球を突き止められるはずだった。

ところが、座標軸信号が突然不規則な動きを始めたかと思うと、デフォルメされた後ろ向き豚が画面を埋め尽くした。

「こ、これは一体……？」

苦り切った表情の「部長」はしばらく自らキーボードを操作していたが、

「やられたな……」

惘然とした表情で呟いた。

「我々が思っていた程、甘くはなかったか……」

溜め息をつく部長は、画面を指差して言う。

「地球出身の八神二佐が言ってたな。『アホが見る豚のケツ』と。……騙すつもりが逆におちよくられたというわけだ。我々は」

クロノ・ハラオウンには内緒で次元通信ポッドを改造しると命じた上官の、だぶついた顔を思い浮かべ、

（だから言わんこっちゃない。下らん小細工をするからさ）

と毒づいた後、ウイルスの有無を確認したが、特に異常はないとの回答だった。

先日の対策会議で見た、地球防衛軍の2人の若い指揮官の顔を思い出した。

（なかなか辛辣な返し技をしてくれる。舐めてかかると大火傷どころか焼死しかねんぞ。「海」は……）

『相模』艦橋

「ハッキング状況、良好……セキュリティ、異常なし……回線接続確認……繋がりましたっ！」

メインモニターに藤堂司令長官が映り、『相模』『ヤマト』のブリッジクルーは起立し敬礼した。

「長官、我々は現在、太陽系まで2万500光年の位置にあります。この通信は白色彗星軍が遺棄した通信惑星をハッキングして行っています」

『うむ……』

「現在までの行動結果を報告します」

冴子と古代 進から、遭難した時空管理局次元航行艦と、襲撃した白色彗星軍残党との接触と戦闘、生存者の救出。
ガミラス艦隊との合流、暗黒星団帝国軍との戦闘、古代 守とスターシャ、サーシャの救出等を順に報告し、まず古代 守とサーシャを抱いたスターシャがモニターに映った。

「長官、またお世話になります」

『ん。よく決心してくれたな。帰還を心より歓迎する』

2、3会話してから、スターシャに代わった。

「初めてお目にかかります。スターシャと申します」

『こちらこそ、お初にお目にかかります、スターシャ陛下。』

私どもは貴女方を心より歓迎致します』

藤堂もスターシャに一礼し、しばらく歓談した後、スターシャに代わって前に出たのは、フェイト・Ｔ・ハラオウンとティアナ・ランスターだ。

地球軍の実戦部隊の最高指揮官が相手ということ、2人とも緊張は隠せないようだ。
踵を揃え、敬礼した。

「時空管理局・次元航行本部所属執務官、フェイト・Ｔ・ハラオウンと申します。

この度は危ない所を助けていただきましたこと、心より感謝致します、藤堂長官」

「ハラオウンの補佐官を務めております、ティアナ・ランスターです。

こちらの皆さんには大変良くしていただいております」

藤堂もフェイト達に答礼する。

『地球防衛軍司令長官の藤堂平九郎です。

この度は災難だったね。亡くなった方々には、心からお悔やみを申し上げます……』

「……ありがとうございます」

表情を曇らせた2人に労るような視線を向け、

『君達にも不便と不安をかけてしまつが、嶋津艦長の言つとおり、故郷に帰すよう手段を尽くすから、今暫く待つてほしい……』

と締めた。

スターシャとフェイト達が退出してから、報告と情報交換を続ける。流石に暗黒星団帝国軍の事は軽々には扱えないため、詳細は後日行うことで合意したが、まだ懸案が残っていた。

冴子はひと呼吸して切り出した。

「長官、実はお願いがあるのですが…」

冴子と古代（弟）、真田が「懸案」の趣旨を説明し、許可を願い出した。

藤堂は瞑目して聞いていたが、開口一番、力強い声で宣った。

『よろしい、やりたまえ！』

「ありがとうございますっ！」「」

総員敬礼。

通信を終えた後、冴子が隊内通信を開く。

「嶋津だ。たつた今、藤堂長官より『ミッションW』の実施許可をいただいた。

予定どおり、我が独立第13戦隊は、明後日1030時、カイパーベルト内にて『ミッションW』を執行する。

なお、前日までの訓練予定に変更はない。各員、気を抜かずにあたるように。

……以上だ」

直後、『相模』全艦長に振動が走ったように思えた、と書き込まれた革表紙の手帳が、2220年5月、地球に帰還した『ヤマト』の主な副長室で発見された。

第88話『話すか食へるかどちらかにしようよ』(前書き)

『ヤマト』『相模』総出の結婚式準備が進む中、ミッドチルダの一角でのお話です。

近日中に管理局側の人物設定を載せます。

第88話『話すか食べるかどちらかにしようよ』

ミッドチルダ首都クラナガン郊外、ナカジマ家

スバル・ナカジマ、アルト・クラエッタ、ルキノ・リリエの3人が旧交を温めていた。

3人揃うのは機動六課解散式以来なので5ヶ月近くになるうか。

それぞれの近況報告が行われたが、ルキノとアルトの関心事は、何と言っても生存が確認されたフェイト達の事だ。

マツハキヤリバーに保存しておいた映像を見せる。

但し、クロノの指示で、あくまでスバル自身がフェイト達や地球防衛軍側と話をした部分だけだ。

冒頭の鼻垂れ大泣きスバルにアルト達は大笑したが、ティアナがもらい泣きしたところでは、2人とも目を赤くした。

『ヤマト』『相模』の艦長、艦長代理と話す場面では、2人とも一言も発さずに見ていたが、終了後、アルトは『相模』艦長の嶋津冴子について、

「嶋津艦長って、瞳と髪の色以外は20年後のヴィヴィオだよね…」と評し、ルキノも賛意を示す。

「うん、私もそう思ってたのはさんに話したんだけど、ヴィヴィオが目を輝かせちゃって、なのはさん、だいぶ慌ててたみたい」

苦笑いしながらスバルが答える。

「ヴィヴィオにすれば、将来の自分を見る思いなのかなあ？」

「だろうね。でも頬つぺたのあの傷を見たら、事情を知らない人が見たら驚くよ」

「結構美人さんなのにね。」

あれだけの宇宙戦艦を造るほど科学力があるんだから、よほど重傷でなければ傷は綺麗に消せると思うんだけどね。何でかなあ？」

その時、昼食のデリバリーサービスが来た。3人前なら使わないはずの多人数用カートを押して。

「そう言えばさ、フェイトさん達、これからどうするんだっけ？」

「ふん(うん)。」ハマト(ヤマト)とひつしよ(一緒)に、向こうのちくう(地球)にひく(行く)っへ(て)」

「…スバル、気持ちはわかるけど、口に物入れたまま喋るのやめようよ…」

スバルの前にありえないほど積み上がっていたピザが、もう半分を切っていた。

「んぐ…。管理局の船はまる2日かかるし、向こうは作戦行動中みたいだからね。」

それに、シャーリーさんはまだ要安静みたいだから」

「そっか…。じゃ、しばらくは向こうの地球に滞在するんだね」

「ティアナ、向こうで『ヤマト』とか、地球防衛軍の艦船のプラモデル買って来てくれないかなあ。」

管理局の艦船の模型は作り飽きちゃったよ…」

「ルキノ…(^ - ^)…」

……艦船マニア、ここに極まれり……。

「でもさ、本局は大騒ぎだろうね」

アルトが少し声を低める。

「うん……。グリフィス君の話だと、特に「海」は喧々囂々みたい」「そうなんだ？」

「艦船襲撃事件が相次いでいるところに、フェイトさん達まで遭難しちゃったからね。転属願を出す局員や、遠くの世界への任務を済る艦長さんも少なくないみたい」

「うん。いくらフェイトさんでも、宇宙空間で乗っている艦がやられてはどうしようもないもんね」

「……まるで「黒船」だね」

ピザを全て平らげたスバルがぼつりと言う。

「「黒船？」」

「うちの父さんの遠いご先祖様からの言い伝えんだけど、異国の軍艦だった黒船は、当時の人の目には凄く大きくて不気味に映ったそうなんだけど、それを皮切りに激動の時代を迎えて、250年以上続いていた体制は対応できずに、僅か15年足らずで崩壊したんだって……」

「それって……、時空管理局も同じ運命を辿るかも知れないってこと？」

「地球防衛艦隊と管理局の次元航行艦隊が戦うような事が今すぐ起きると思わないけどね。」

対応を誤れば、管理局の『終わりの始まり』になることだってあるんじゃないかなあ……」

「でも、脅威が地球防衛軍とは限らないんじゃないかな……」

ルキノも話に加わる。

「『ヤマト』『相模』とはきちんと話ができただけど、同時にもっと好戦的、支配的な世界があることも明らかになったしね」

「うん、だとすれば、一番話を通じそうな地球防衛軍とは仲良くし
といた方がいいんだよね……」

3人は同時に頷いた。

登場人物設定4（リリカルなのは側）（前書き）

細かいところはお気になさらず。

というか、気にされても答えようがありません……（脂汗）

登場人物設定4（リリカルなのは側）

データは新暦76年9月現在

オリキャラ以外のCVはアニメやドラマCDと同じです

？時空管理局

フエイト・テストロッサ・ハラオウン

戸籍上年齢20歳（出自があれなので）

次元航行本部所属執務官（但し休職中）

一等空尉待遇。

『金色の閃光』『金色の死神』の二つ名を持つ管理局きつての若手捜査官でありエース魔導師のだが、とある次元世界犯罪者を護送中、便乗していた次元航行艦が襲撃・撃破され、命の危険にさらされていたところを地球防衛軍の宇宙戦艦『ヤマト』『相模』に救助され、以後『ヤマト』に乗艦中。

義兄のクロノと共に、管理局員としては最も早く『ヤマト』の戦闘を目の当たりにして衝撃を受けた。

また、最初に地球防衛軍と接触した1人で、以後、執務官任務の傍ら、クロノ共々、地球防衛軍との交渉に駆り出されるようになる。

（余談）

無二の親友である高町なのはがヴィヴィオを養女に迎えるにあたり、後見人になっているが、『相模』艦長の嶋津冴子が、大人モードのヴィヴィオとよく似た顔立ちであるため、ヴィヴィオの前途に不安

を抱いている。

ティアナ・ランスター

ハラオウン執務官付き補佐官（休職中）

武装隊員としては一等陸士待遇。

満17歳

志半ばで殉職した兄の遺志を継いで執務官への一步を踏み出したが、フェイト、シャリオとともに遭難。『ヤマト』に収容されたため、共に行動中。

時空管理局以上に強烈な個性派揃いの『ヤマト』乗組員や嶋津冨子らを相手に、毎日戸惑い振り回される傍ら、懸命にツッコミを図っている。

シャリオ・フィニーノ

ハラオウン執務官付先任補佐官（陸士長待遇）

機動六課解散と同時に、フェイト共々次元航行本部に復帰し、事務面でフェイトをサポートしているが、とある任務中に遭難し瀕死の重傷を負った。

フェイト、ティアナ共々『ヤマト』に収容され、佐渡酒造の緊急手術で命を取り留めて、現在は『ヤマト』にて入院療養中。

高町なのは

航空戦技教導隊所属教導官 一等空尉
満20歳

『エースオブエース』の二つ名を持つ一流の空戦魔導師で、面倒見の良さから後輩魔導師からも慕われているが、反管理局勢力からは『白い悪魔』『魔王』と呼ばれており、最近の子供達からも『しろいあくまさん』『まおうさま』と呼ばれるようになったため、少なからず心理的ダメージを受けている。

自分のアイデンティティーに魔法が占める割合が高いため、地球防衛軍等、魔法が通用しない武装・軍事勢力の存在に対する戸惑いと不安感が人一倍高いようだ。

(余談)

言うまでもなくリリカルなのはシリーズの中心的存在なのだが、本作においては、まだ地球防衛軍サイドと接触していないこともあり、やや精彩を欠く。

クロノ・ハラオウン

次元航行本部所属
XV級次元航行艦『クラウディア』艦長
階級は提督。

25歳

最も早く地球防衛軍と接触。

その戦闘力に戦慄する反面、嶋津や古代らと直に話す機会を持ち、

魔法を使わない以外は自分達と変わらないメンタリテイであることに安堵。平和的共存を模索するが、地球防衛軍艦艇やその技術の接収を叫ぶ一部の高官や、相次ぐ艦船の遭難で動揺するスタッフの扱い、さらには母と妻子が住む第97管理外世界（地球）との連絡が困難になっていることへのストレスで、早くも若白髪が生えつつある。

（余談）

他の二次創作ではKYキャラとして扱われがちだが、本作ではまともな思考の持ち主で、常識人の範疇に入る。
が、それゆえ、中間管理職の悲哀をも背負い込んだキャラとして扱われる。

本作で彼の若白髪が増える事はあっても、その逆は多分ない……。

八神はやて

特別捜査官、二等陸佐

20歳。

奇跡の部隊と謳われた機動六課の解散後は再びフリーの捜査官に戻り活動中。

クロノ同様、地球防衛軍・地球連邦とは平和共存し、有用な技術は導入すべきとの主張の持ち主。

シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ

以上、はやての守護騎士。（扱い雑っ！）

スバル・ナカジマ

ミッドチルダ港湾救助隊所属特別救助隊員

一等防災士（原作では一等陸士）

満16歳。

転属後、早くも特別救助隊のエースとして活躍中。食欲も比例して増加中。

『ヤマト』艦長代理、古代進の熱烈なファン。

ギンガ・ナカジマ

陸士108部隊所属捜査官

陸曹

満18歳

スバルの姉。ナンバーズ更生組の教育にも携わる。

アルト・クラエッタ

一等陸士

地上本部所属 ヘリコプターパイロット

ルキノ・リリエ

次元航行本部所属事務官補兼操舵士補

機動六課きつての艦船ヲタだった。

最近持った野望は、一度でいいから『ヤマト』の舵を握ること……。

2人ともスバルの影響を受け、古代 進のファンである……。

リヒャルト・アッテンボロー（オリジナルキャラ）

ミッドチルダ防衛長官

中将

満45歳

イメージCV：大塚明夫

不慮の死を遂げたレジアス・ゲイズの後任。

かつては陸・空両方でオーバーSランクを保持したエース魔導師だが、本局からの勧誘を断り通した硬骨漢。

魔導師嫌いのレジアスとの関係も悪くはなかったらしい。

JS事件で権威を失墜した「陸」の切り札的存在で、一部高ランク魔導師の「魔法貴族化」に危機感を抱いており、当然ながら人材不足を慢性化させている「海」の拡大方針には反対。

地球防衛軍とは平和共存のみならず、将来的には一部技術を導入しての非魔導師戦力強化や人事交流も視野に入れているらしい。

ミゼット・クローベル、ラルゴ・キール、レオーネ・フィルス

所謂「伝説の三提督」。

かつての自分達の志とずれつつある最近の管理局には危惧を抱き、

クロノやはやて、アツテンボローらに期待しているが、果たして…。

？ミッドチルダ在住者

高町ヴィヴィオ

ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科1年生

満7歳

言うまでもなく、高町なのはの養女で、後見人はフェイト。
なのはと約束した『強くなる』の誓いを守るべく、格闘技の練習を始めた。

なのはの意向で、魔法基礎をしつかり身につけるまでは、なのはのデバイスのレイジングハートによる魔法管制を受けている。

魔法の基本様式はベルカ式だが、身近にいるなのはやフェイトから取り入れたミッド式も使用可能な、所謂『次世代型魔法少女』である。

自分が大人になった時のような顔立ちの嶋津冴子に興味津々で、母のなのはは不安だらけである。

チンク、セイン、デイエチ、ノーヴェ、ウエンデイ、オットー、デ
イード

所謂旧ナンバーズのうち、JS事件捜査に比較的協力的だったため、隔離施設で更生プログラムを受講中。

陸士108部隊長のゲンヤ・ナカジマや聖王教会が身元引受を希望しており、そちらの話も進行中。

第89話 『結婚式を挙げよう』(4) 『(前書き)』

なんかgdgdです

一応、太陽系外縁まで戻ってきているんですけど、年内に挙式まで書けるんだろうか…。

第89話『結婚式を挙げよう(4)』

『相模』『ヤマト』の13TFは太陽系最外縁の準惑星『エリス』に接近しつつあった。

『ヤマト』第1艦橋

「艦長代理、第8外周警備隊『てしお』の香村艦長から古代(守)さん宛に入電です。」

「トツテオキノ酒ガアルカラ、ジカンガアツタラ飲モウゼです」

古代(進)が相原からメッセージシートを受けとった。

「サンキュー。後で俺が持つて行く」

「気が早い奴だ」

真田が、苦笑しながらパトロール艦の艦長として警備任務についている同期生の名を挙げた。

亡き土方竜が訓練生から「鬼竜」と言われるほど徹底的に鍛え上げた2190年卒業組は「華の90年組」と言われるほど優秀な人材を輩出し、対ガミラス戦の終盤には古代守を皮切りに駆逐艦艦長や隊長に抜擢される者が相次ぎ、生き残った者は白色彗星戦の頃には嶋津冴子が戦艦『相模』艦長になっていたのをはじめ、巡洋艦やパトロール艦の艦長、駆逐隊司令、基地司令になるものも出ていた。

白色彗星戦でもかなりの者が戦没し、宇宙艦隊や基地勤務者の生存者は、任官時の3割強にまで減ってしまったが、生き残った者はよ

り重要なポストを任されるようになっていた。

「これから同じような電文がどんどん入って来るからな、覚悟しておけよ。相原」

「はい（苦笑）」

「華の90年組」。その中でも「スペース・イーグル」の異名を持つ古代守の存在は一際輝いていた。

その古代守が、カミさんと娘を連れて帰って来る。同期生はもちろん、彼の指揮下で戦ったことがある元部下達は、揃って快哉を叫んだという。

『ヤマト』士官居室

予てから地球防衛軍の宇宙戦士達の身体能力の高さに驚いていたフェイトとティアナは、彼らに追いつきたいとばかりにトレーニングルームに行くことが増えていた。

トレーニングルームは生活エリアにあるため、フェイト達も自由に使えるのだ。

シヤリオとの話を終え、トレーニングルームに向かったティアナと分かれて部屋に戻ってきたフェイトは執務官制服を着ていたが、ハンガーに掛かっている女性用戦闘服 森 雪の服の色違い仕様を見ていたが、

「……これをベースに、真ソニックフォームのジャケットを組み直してみようか。バルディッシュ」

『畏まりました、マスター』

この服はボディラインがもろに出てしまうのがフェイト達にとっては玉に傷で、ジャケットが欠かせないのだが、パイロットスーツや簡易宇宙服の機能も兼ね備えているだけあって、極めて軽量かつ丈夫で、結構激しい運動にも対応できる等、実用性が高い感心な一品だった。

しかも腕や脚はフルカバーされているので、これをモデルにすることで、真・ソニックフォームの特色である高機動性を維持しながら腕・脚部の防御力を上げるにはうってつけだ。

フェイトは戦闘服をベッドに広げ、バルディッシュをサーチモードにして採寸を始めた。

『相模』艦内食堂『早雲峡』及び厨房

チーフである幕之内勉が指揮をとり、町田や三沢らの女性クルーが総出でアイデアを持ち寄りデザインを固めたウェディングケーキはその姿を現しつつあった。

主役たる夫婦の意向で、ウェディングケーキ自体のサイズは抑え、全乗組員の口に入るよう、同じ材料で配布用のケーキも作られていた。

「お、ちょうどいい。おーい、艦長！」

「ん？ どした。幕？」

コーヒーを貰いに、ポットを手に食堂に入った冴子は、厨房から顔を出した炊事班主任の幕之内勉に呼び止められた。

数分後、冴子は白衣にキャップを着せられて厨房に立っていた。

厨房では夕食の仕込みの傍らで、ウェディングケーキの基礎になるスポンジ部分を焼いていた。

本体の方は、焼き上がったら『ヤマト』に移し、デコレートするという。

そのために3人の女性クルーを『ヤマト』に派遣することになっていた。

男所帯の『ヤマト』で、森雪に何役も兼ねさせるのは余りに何なので、『ヤマト』に同乗しているフェイト達や、『相模』から派遣したクルーも手伝って最終準備を行う手筈だ。

ケーキだけではなく、式場の飾り付けの一部も、真田からの図面を元に『相模』の艦内作業場で製作していた。

冴子の前にロールケーキがひと皿出た。

「幕、私に味見をしろと言うのか…?」

冴子は辛党だった。

地球防衛艦隊の日本籍艦船は、旧帝国海軍や海上自衛隊の伝統を受け継ぎ、金曜日には海軍式のカレーライスを出すことになっており、各艦独自のレシピがあるのも昔と同じだが、戦艦『相模』のカレーは旨いと同時に一際辛いカレーと言われるようになったのは、偏に初代艦長の嶋津冴子と、炊事主任だった幕之内勉のせいだ。

「カレーは辛く、旨く!」

冴子が、竣工間もない『相模』に着任した幕之内に出したカレーのリクエストがこれである。

(但し、辛いものが苦手なクルー向けに、別の寸胴ではリンゴや蜂蜜等で辛味を和らげたルーが用意されていた)

因みに翌々年、この大辛カレーはアレンジされて『ヤマト』にも姿を現すことになるが、それはまた後の事。

閑話休題。

ロールケーキを前に渋面を見せていた冴子に幕之内は

「お前さんが辛党だからだよ。甘いだけの物は駄目でも、『旨くて甘い物』なら、それなりに食ってただらう?」

とからかうように言った。

「艦長、お願いします」

まだ幼い顔立ちの女子班員の声に内心で嘆息しながらスプーンを手にし、一口食べた後、残りも口にする。

「…バニラを心持ち、もう少し効かせてみたらどうだ? 他はこのままでいいと思うが?」

ともかく、自分なりの感想を言いながら、皿を女子班員に返した。

「了解だ」

「ありがとうございます!」

長居して炊事班の手を煩わせるわけにはいかないので、幕之内と女子炊事班員に手を振りながら厨房を後にした。

『ヤマト』高官用ゲストルーム

古代 守一家3人はこの部屋で起居していた。
進は艦長室を提供しようとしたが、

「あそこは沖田艦長の部屋だから」

と守が辞退し、空いていた高官用ゲストルームを使っていたのだ。

スターシャとサーシャは在室していることが多かったが、時折展望室に母娘揃って姿を見せており、サーシャは早くもクルー達に愛嬌を振りまき、すっかり『ヤマト』の小さなプリンセスになった。

2人の身辺の世話は森 雪がしていたが、雪は第1艦橋スタッフでもあるので、子守はフェイト・T・ハラオウンも手伝っていた。

一度ティアナ・ランスターもチャレンジしてみたが、サーシャに大泣きされ、気の毒なくらいしよげ返ってしまった。

第90話 『結婚式を挙げよう』(5) 『(前書き)』

まだ挙式始まりそうにない…(滝汗)

今回は冴子撃沈。お約束です。

今月最後の更新かも知れません。

第90話『結婚式を挙げよう(5)』

『ヤマト』高官ゲストルーム

「ごめん、スターシャ。悪乗りする連中ばかりで…」

守は、艦上結婚式にかこつけてお祭り屋と化した同期生や弟、後輩達のことをスターシャに謝るが、愛妻は黙って顔を横に振った。

「私は大丈夫よ、守。」

…それに、進さん達はい先日、多くの仲間を亡くされたのでしよう。

お祭り気分になりたい気持ちは十分理解できるわ。

それに、この人達が私達の結婚を心からお祝いしてくれているのは本当なんだし、こういう賑やかな雰囲気は、生まれてこの方知らなかったから…」

そうなのだ。スターシャが生まれた時、イスカンドルの住民は、両親を除けば年老いた数人だけになっていた。

「スターシャ…」

そのまま身を寄せ合う仲睦まじい夫婦だが、守は突然顔をしかめて、テーブルにあるドア開閉リモコンのスイッチを押した。

スーッとドアが開く。

そこにいたのは顔を真っ赤にしたフェイトとティアナ、紙を筒にして耳とドアに当てていた嶋津冴子。その後ろで呆れ切った表情を浮かべている真田だった。

「フツ、相変わらず勘のいい奴……」

恐縮し切った表情でペコペコと頭を下げるフェイトとティアナ。

冴子は悪戯が失敗した子供のよ様な表情だが、全く悪びれた様子はない。

真田の表情は『処置なし』だった。

はあ、と守は長嘆息した。

どのみち、嶋津の奴が彼女らを巻き込んだというところだろう。

考えてみれば、こいつとは男同士みたいな付き合いだった。

自分と真田、嶋津の3人でつるんではバカをやったが、痛飲した後、同じ部屋で川の字になって寝ても「何も」起きなかった。

……まあ、こいつの日頃の言動に全然女っぽさがなくてオヤジ成分が濃厚だったり、寝相が半端なく悪いこともあるのだが。

「皆さん、少しお話しませんか……？」

どんよりしかかった空気を破ったのはスターシャだった。

ミッドチルダ首都・クラナガン、時空管理局・航空戦技教導
隊本部

昼食時。教導官・高町なのはは、特別な事がない限り、受講生に混じって食事をとるようにしている。

武装隊員の間でも、話題は専ら、先日その存在が公表された「地球防衛軍」の宇宙戦艦『ヤマト』と『相模』、それに搭載されていた戦闘機の事だった。

「XV級とあまり変わらない大きさなのに、1隻でアインヘリアルを上回る火力なんて、正気の沙汰じゃないわよ……」

「高町教導官の『スターライト・ブレイカー』ならダメージを与えられるんじゃないか？」

などと主張する受講生を横目に、なのはは黙々と食事を続けていた。時空管理局は魔法をベースにした戦闘を行っており、これまでは管理局を明らかに上回る武力や魔法が通じない組織等の存在を想定していなかったため、時空管理局、特に「海」は対応に苦慮しているのだ。

大半の管理局員には知らされていないが、『ヤマト』の艦首にはアルカンシエルを上回る戦略砲（＝波動砲）があり、量産艦らしい『相模』の艦首にも同じような開口部がある。

つまり、地球防衛軍の、少なくとも戦艦クラスにはあれが標準装備されているということだ。

そして、なのはは『戦艦』の意味を知っていた。自らの主砲弾の直撃に耐える防御力を持ってこそ、『戦艦』を名乗れるのだと。

つまり、自分の『スターライト・ブレイカー』も地球防衛軍の戦艦には通用しない。そもそも宇宙空間に出られたら、魔導師ではどうにもならないのだ。

「高町教導官？」

「え……？は、はい。何かな？」

受講生の1人が質問してきた。

「地球防衛軍は、教導官の出身世界とは違う世界の地球の組織なんですよね？」

「うん。そうだよ」

「管理局と『地球防衛軍』は仲良くやれるんでしょうか……」

それはなのは自身の疑問でもあるのだが、教え子を不安にさせるわけにはいかない。

「少なくとも、地球防衛軍はフェイト：ハラウン執務官達を救出して厚遇してくれてる。

少なくとも、今は地球防衛軍を信じるしかないよ。

機動六課時代の教え子が『ヤマト』『相模』の艦長さん達と直接お話ししたんだけど、魔法を使わならしい事以外は、私達と変わらない人達だったって。

…だから、こちらが構えたら、向こうも疑心暗鬼になるよ。相手を信頼することが平和の第一歩なんだから

「はい……」

しかし、時空管理局と地球防衛軍の関係は、なのは達が願うとおりにはなかなか進展しなかった。

『ヤマト』高官ゲストルーム

部屋では古代 守、スターシャ、サーシャ、冴子、真田、フェイト、ティアナの7人でしばし談笑していた。

サーシャも皆に愛嬌をふりまき、今回はティアナにも笑顔を見せたため、ティアナは思わず感動の涙を流した。

さて、サーシャは地球人とイスカンドルのハーフ。
つまり、サーシャの成長速度は、純粹イスカンドル人並かどうかはわからないが、それでも地球人より格段に速いというわけで…。

両親である守とスターシャに、覚束ない口調で

「…っと」(お父様)

「…っか」(お母様)

と話しかけ、皆を微笑ませていたのだが、次に無邪気な波動砲をぶつ放した。

「…っば」(おばちゃん)

冴子を見て、天使の如き可愛い笑顔で宣ったのである。

ピシッ!

冴子の笑顔が石化した。

「……』おばちゃんか……。ぶっ、くくく…あーっはははっ!」

真田が吹き出し、バンバンと膝を叩くと腹を抱えて大笑いし始めた。

「ど、どうなさったの?真田さんと冴子さんは」

真っ白く石化した冴子と、腹を抱えて大爆笑する真田に、スターシヤはわけがわからずにいた。

「……………(^ - ^)」

「……………（^ - ^）」

フェイトとティアナは大方の事情を察したらしいが、口に出す「虎の尾を踏むような気がして、あまりの恐ろしさ（？）」に何も言えずにいた。

「ほつといていいんだよ、スターシャ。

いい加減、あいつにも自分の歳を自覚してもらわないと」

嶋津冴子、20代最後の3ヶ月が始まっていた。

第91話『結婚式を挙げよう』(6)『(前書き)』

? 12月1日、実写版『ヤマト』封切りです!
前売券買ったけど、見に行けるかなあ…。

? なのは映画も2作目制作決定!

? 1週間ぶりの更新です。

相変わらずのグダグダぶりですが…。どうぞご笑読下さい。

第91話『結婚式を挙げよう(6)』

太陽系外縁部・カイパーベルト

カイパーベルトを形成する小惑星の一つ近くに『ヤマト』『相模』は停泊した。

暫くすると『ヤマト』の艦載機発着口が開き、武装上陸艇と数機のコスモタイガーが発進する。上陸艇は小惑星に着陸するや、中から数人の乗組員が、丸みを帯びた多角形の物体を押し出し始めた。

彼らはしばらく何やら作業していたが、やがて、リーダーらしき1人がトランシーバーを手にした。

『ヤマト』第1艦橋

『技師長、通信ポッドの固定、終わりました。チェックをお願いします』

「わかった。そこで待機していてくれ」

工作班員から報告を受けた真田は、振り返って相原に合図を送った。相原は頷くと通信コンソールを操作し始める。

その様子を見ていた真田は、席につくと、自らもキーボードを操作して微調整を始めた。

30分程経った頃、

「よし、これで細工は済んだ。皆、戻って来い！」

うつすらと笑みを浮かべた真田が作業メンバーとコスモタイガー隊に帰還を促した。

『相模』艦橋

「作業班、コスモタイガーとも『ヤマト』に戻りました！」

「ん。……微速前進、10宇宙ノットだ」

作業終了を確認した冴子は前進再開を指示した。

カイパーベルト帯域に進入するため、『ヤマト』『相模』の順に一列縦隊で前進する。

『ヤマト』は勿論、『相模』も全自動操舵である。

『相模』の舵を握るのは大村ではなく町田だ。

『相模』竣工時に乗り組んできたルーキー達も、白色彗星帝国との死闘を生き延び、今回の戦闘をも経験した者達は、冴子や大村曰く『お情けで及第点だな』というレベルになっていた。

因みに、今航海からのルーキー達はと言うと、『どうにか半人前』らしい。

とは言え、これはガミラス戦初期～中期の宇宙戦士達を基準にしたもので、現状では1度でも実戦をぐり抜けた者は、帰還すればもう中堅扱いなのだ。

『しかし、お前ら相変わらずの悪党ぶりだな』

『ヤマト』のブリッジに上がってきていた古代 守が苦笑しながら真田と冴子に言う。

『褒め言葉と受けとっておくぜ、古代』

「ま、フェイト達はいい娘だろうさ。

しかし、優秀な魔導師だか知らんが、年端もいかない子供達を危険極まりない任務につかせて、あんなに惨く死なせるような組織に好感なんか持てるかよ」

『それに、先に姑息な手を打ってきたのはあっち（時空管理局）の方さ。

ならば、こっちはせいぜいバカバカしくあしらうまでさ』

「『……………（^_^）』」

古代 守をはじめとする両艦のブリッジクルーは、親友（先輩／上官）達の悪戯に冷や汗混じりの苦笑を浮かべるしかなかった。

「ま、ともあれ、あとは本番だけさ…。お嫁様の方はどうよ？」

『ああ、試着はバッチリだ。お嬢さん達は見とれてたよ』

「……………そうか。ではぼちぼち始めるかね」

『ああ……………』

真田の返事を聞き、冴子は艦長席から立ち上がると最終準備を指示する。

「嶋津だ。…これより『ミッションW』を開始する。

総員配置につけー！」

いよいよ『ミッションW』の幕が開こうとしていた。

時空管理局・本局

次元航行本部の一角、クロノ・ハラオウンのオフィスにはクロノと高町なのは、シグナムとヴェロツサ・アコース査察官がいた。

話題は、無論、管理局、特に本局を揺るがしている地球防衛軍を含む未知の軍事勢力についてだ。

「それにしても、クロノは頭痛が絶えないねえ……」

飄々とした口調で話すヴェロツサにクロノは苦い表情になったが、否定はしなかった。

「お歴々の中には『ヤマト』をロストロギア指定しろとおっしゃる御仁もいらつしやるのか？」

「無茶苦茶な話さ。」

艦船は運用する人間次第で敵にも味方にも変わり得るというのに。しかも、下らない小細工をした拳句、見抜かれて逆にからかわれるんだからな。情けない話さ」

クロノが言う「小細工」は、「海」の一高官が、『ヤマト』『相模』の位置と、さらに「地球」の位置座標を探ろうと、クロノが用意した次元通信ポッドに、内緒で小細工をしたら、逆に『ヤマト』『相模』側からおちよくられた事を指していた。

それが明るみになった時、次元世界積極拡大派の高官達は不機嫌になったが、慎重派に属するクロノやレティは内心で舌打ちした。

まだ対立するかもわからない相手にちよっかいを出して、本当に敵

に回したらどうするつもりなのか。

相手はとんでもない戦闘力を持つ艦船を複数保有する、れっきとした宇宙軍なのだ。

しかも、向こうにはまだフェイト達がいるのを知っててやっているのか？

「彼らはきつと、『ヤマト』『相模』級の桁外れの破壊力が欲しいのだろう。1隻でインヘリアル3基分の火力にアルカンシエルを軽く凌ぐ破壊力の戦略砲（波動砲）を持つんだからな。

反管理局勢力に睨みをきかせるには持つてこいだろうな」

シグナムが言う。

「案外、あちらさんも管理局に疑念を抱いてて、ああいう対応に出たのかも知れないね」

「!...どうして？ ヴェロツサ君」

自分の組織に対しシビアな事を口にするヴェロツサに、なのはが驚いた表情を浮かべた。

「なのは。君の出身世界では、子供が表向き、軍や警察組織で働く事は禁じられてるんだろう？

彼らが君の世界の人達と同じメンタリティを持っていて、『レオニダス』の艦内を搜索したのなら、時空管理局に強い疑念、あるいは不信感を抱いたとしても不思議ではないさ。

ましてや職業軍人なら、ね」

「!.....」

ヴェロツサが言ったのは、『レオニダス』の殉職者に十代前半の少女が武装隊員として含まれていたことだ。

『ヤマト』『相模』のクルーが『レオニダス』艦内を搜索した際、子供達の亡骸を見た可能性は高い。

10年に及ぶ管理局勤めで、地球人が持ち合わせている、子供に対する基本的な倫理感を忘れていたことに、なのはは愕然とした。

「彼らは、既に魔法の事も掴んでいるかも知れないな……」

クロノが言う。

「どういう事だ？」

「『レオニダス』搜索の時に、魔法関連の資料も回収された可能性があるということさ。案外、管理局の影の部分の情報も知られたかもね」

シグナムに答えたのはヴェロツサだ。

「ま、あくまで可能性だけどさ。侵略者を返り討ちにした軍隊なら、相応のずる賢さも持ち合わせているだろうね」

なのはは何も言えなかった。

もしも彼らの地球や太陽系の惑星・衛星にロストログアが発見されたら、容易に回収はできまい。それどころか、けんもほろろに追い返されてしまうのでないか……？

なのはは、ヴィヴィオを大人にした顔立ちの、あの艦長に睨み据えられた自分達の姿が脳裏に浮かび、思わず戦慄した。

第92話 『結婚式を挙げよう』(7) (前書き)

挙式直前です。

第92話『結婚式を挙げよう(7)』

カイパーベルト内某空域

『相模』艦橋

「アステロイド・シップ、吸着完了しました！」

観測席の三沢が報告したとおり、『ヤマト』『相模』の艦体や上部構造物には岩塊がびっしり貼りついていていた。

敢えて艦を岩塊でカムフラージュしたのは、白色彗星帝国軍残党の蠢動を警戒してのことだ。

ブリッジクルーは興味津々で窓を覆った岩塊を見る。

それは『ヤマト』のフェイト達も同じだった。

「これが『アステロイド・シップ』……」

「単に、艦を小惑星にカムフラージュするだけじゃないんでしょうね……」

「「名答じゃ、鋭いの。嬢ちゃん」

展望室で窓を見ていたフェイトとティアナに佐渡が言う。

「と、言いますと……、攻撃に応用したりもするんでしょうか？」

「そうじゃ。岩塊自体が装甲になって敵の攻撃を吸収するんじやが、吸着を解く事で岩塊をミサイル代わりに敵に向けるんじや」

「そうなんですか……」

(岩塊の下では修理もできるわよね)

感心しながら、ティアナはアステロイドシップの可能性を想像していた。

岩塊の制御方法は教えてもらえないだろうが、そこは管理局の十八番たる魔法で代用できるかも知れない。

もつとも、何も無い宇宙空間ではかえって怪しさ満載なのだが…。

「ティアナ、そろそろ行こうか…」

フェイトに促され、展望室を後にした。

そう、2人は拳式で重要な役を務めることになっているのだ。

2人はある1室のドアをノックした。

「失礼します。フェイト・T・ハラウンとティアナ・ランスターです」

「いいですよ、どうぞ」

中から森 雪の声が聞こえた。

「お邪魔します……」

一礼して入室した2人は顔を上げて部屋の主がいる方を見た。

「……………!!?」

極めてシンプルな白いドレスに身を包んだスターシャに、2人は息を飲み込んだ。

『確かに、豪華にする必要なんか何一つないよ（わ）ね……………』

スターシャを見たフェイトとティアナは全く同じ感想を抱いた。スターシャと守の意向を汲んだ真田と雪が用意したのは、これ以上はない程簡素なデザインのミルクィホワイトのドレスだったが、かえって良く着映えした。

純白ではなくミルクィホワイトにしたのは、スターシャが母親であることの証だ。

（内から醸し出す雰囲気が違うから、シンプルなドレスがよく映えるんだ……）

スターシャのオーラに圧倒されながらも、フェイトは分析した。

「とても良くお似合いです。スターシャ陛下」

と心からの賛辞を口にするフェイトだが、スターシャは、

「私はもう一亡命者に過ぎません。だから、スターシャだけで結構ですよ。フェイトさん、ティアナさん……」

と気負いなく語った。

（とは言っても、内に秘めた誇りとカリスマは全く色褪せないのよね、この方は）

ティアナは同意しつつも、内心で舌を巻いていた。

こういうタイプの人物は、ミッドはもちろん、自分達が赴いた世界にはいなかった。

（この部隊の人達といい、スターシャさんといい、色々な意味です

「ごい人達の集まりだ…」

管理局員で、この人達と色々な意味で（魔法抜きで）渡り合える人はかなり少ないのではないか？

バックボーンの根底が全く違うから、比較する事自体がおかしいのだろうか。

フェイトとティアナは同じことを考えていた。

そこにドアがノックされる。

「たのもう」

場違いなかけ声と共に入ってきたのは嶋津冴子だが、すぐに姿勢を正し、スターシャに向けて拳手の礼をとった。

（『ヤマト』に来てから感じてたけど、地球防衛軍の敬礼や拳動に比べると、管理局のそれは、いかにも緩くて遅い（わ）ね…）

敬礼一つにしても、治安維持組織と正規軍ではこつも違うのか。フェイトとティアナは率直にそう思った。

冴子はいつもの戦闘服＋士官ジャケットではなく、正式な艦長制服姿で、通常の軍務ではパイロットの証であるウィングマークしか付けていない左胸には、数々の略章や参戦章も付けていた。

もっとも、右頬の傷はそのままだったが。

「冴子さん、今日はよろしくお願いします」

「こちらこそ。我が身に余る大役ですが、全力で務めましょう」

スターシャの挨拶に、軍人らしい口調で応えた冴子だが、挨拶を交

わし終えると、もうタメ口になった。

「冴子さん、緊張してませんか？」

森 雪の問いに冴子は思わず、

「ああ。まさか結婚式の司式までするとは予想外だったよ。

こういうのは沖田さんや土方さんにこそやって欲しかったんだけどなあ。

……あの親父達、絶対三途の対岸で笑ってやがるぞ」

とぼやいて見せたが、すかさず雪がツッコむ。

「いいじゃないですか。非公式とはいえ、地球防衛艦隊正式発足後、初めて結婚式を取り仕切った艦長になるんですから」

「あの…、地球では軍艦の艦長が結婚式の司式をする機会が多いのですか？」

質問したのはティアナだった。

「……客船やレストランシップの船長ならそういう機会が多いし、軍艦の艦長が部下の結婚式の司式をした事例もあることはあるけど、非公式とはいえ、女王陛下の結婚式の司式というのは前代未聞にして空前絶後だろうなあ」

と肩を竦め、ティアナ達も苦笑しながら頷いた。

ま、二十代最後の忘れ難い経験にはなるわな。と冴子は苦笑してみたが、懐中時計を取り出し、時間を確認すると、

「あと1時間半だ。先に参るとしますか」

と言い、花嫁控室から立ち去った。

『ヤマト』厨房

「よし、問題なし。完成だ！」

『相模』から出張ってきた幕之内がケーキの最終チェックを終えてサムアップすると、ケーキ作りを手伝っていた『ヤマト』『相模』両艦のスタッフが沸いた。

枕形をしたそれは、切り分ければ全て食べられるように作られていたが、これとは別に、シフトにつく両艦乗組員分のケーキも『ヤマト』『相模』の厨房で作られていた。

式場である作戦室も、真田の指揮で床、壁、天井に飾り付けがなされ、急拵えには見えない祭壇も設置された。

「ノリノリだな、皆」

「まあな」

手持ち無沙汰の新郎と真田がその一角にいた。

「お祭りはお祭りとして楽しまなければな。生き残った者達は……」

一瞬、真田の顔が曇った。

その意味するところを知っているから、守も無言で頷く。

地球防衛軍は再建半ばで白色彗星帝国との、短期間だが激烈を極めた戦闘で、人的・物的に多大な損失を被った。

特に人的損害は、有人艦の増備を削って無人艦に切り換えざるを得ないところにまで深刻化していた。

弟達は弱冠20歳そこそこで最早中堅として扱われ、真田や冴子ら同年代の生き残りは、本来ならベテランが座るポストに就かざるを得ない。

そういう中で復隊するのだから、自分も相応のポストに就かなければならないだろう。

『ヤマト』乗艦中が、実は自分にとっての休暇の締め括りなのかも知れない。

その予感、不幸にも程的中することになる。

時空管理局本局大会議室

この日の議題の一つが、『仮称・第177管理外世界』として、位置座標未定のまま仮登録されることになった『第2地球』の扱いである。

これまでの管理外世界は、知的生命体がいなくても、魔法文化がなく、次元世界に進出する手段も持っていない、いわば、管理世界より技術水準が下回っている世界だった。

しかし、(仮)第177管理外世界は魔法文化こそないものの、管理世界とはかなり異なる技術により恒星系間及び近隣銀河系への移動手段と、極めて強力な宇宙軍事力を有するため、これまでの管理

外世界の範疇には合わず、時空管理局、特に「海」はその扱いに苦慮していた。

「海」の、次元世界拡大派の本音は、干渉し、管理局体制に組み込またいのだが、座標がわからない上に、今の管理局の次元航行艦船では、戦闘すればあつという間に壊滅するのが目に見えているので、如何ともし難いのが本音だった。

それに冷ややかなのは、同じ「海」でも、レティ・ロウランやクロノ・ハラオウンら「慎重派」と「陸」だった。

「第97管理外世界における世界観は『次元世界』ではなく、『宇宙』です。恐らくは第177管理外世界の世界観も『宇宙』と考えるべきではありませんか。

いきなりよそ者である我々が次元世界観を押し付けても、それは精神への侵略と解釈されかねません」「次元世界観を受け入れないと言うのか！」

声を張り上げる拡大派の高官に、陸の一高官は

「世界観の自由は管理局憲章で保障されているでしょう。

我々の価値観を押し付けた拳句、敵に回したらどんな事になるか想像してみればよろしい。

かの世界が2度、外宇宙からの侵略にさらされたのならなおさらでしょう。侵略者として憎しみを買いたたいのですか？」

そう言われては、流石の拡大派の高官もぐうの音が出なかった。

第93話『結婚式を挙げよう』(8)『(前書き)』

? イスカンダル人の妊娠・出産のオリジナル設定に矛盾があるため、一部修正しました。

? スターシャ姉妹を二卵性双生児としました。無論、オリジナル設定です。

第93話 『結婚式を挙げよう(8)』

式場となった作戦室に、司式たる嶋津冴子の声が響く。

「…汝、古代 守よ。」

健やかなる時も病める時も、妻スターシャと一子サーシャを、命尽きる時まで愛し慈しむ事を誓うか？

(てか、誓えコノヤロー)」

「誓います…」

古代の誓約に頷き、次いでスターシャに向き直る。

「汝、スターシャ・ファム・イスカンドルよ。」

健やかなる時も健やかならざる時も、夫・守と一子サーシャを、命尽きる時まで愛し慈しむ事を誓うか？

「はい、誓います…」

冴子が「一子」と口にしたのは根拠がある。

イスカンドル人の女性は生涯に1度しか妊娠・出産できない。

双子児が生まれることがあるが、それは極僅かで、二卵性双子児のスターシャと故サーシャ(俗に妹サーシャと言われる)姉妹という例はあるが、純粋なイスカンドル人が事実上絶滅した理由の一つがこれだ。

2人の背後にはサーシャを抱いた森 雪が立ち、後ろに置かれた急造席には『ヤマト』

から古代 進、真田、太田、山崎ら第1艦橋クルーに佐渡とミークン、それにじゃんけんんで各班から選ばれた数人が、『相模』からは機関長の長尾正毅と航海士の町田順子、炊事チーフの幕之内勉と、

各班からあみだくじで選ばれた数人が座っている他、執務官服のフ
ェイト・Ｔ・ハラオウンとティアナ・ランスターも顔を見せていた。

（スターシャさん、本当に綺麗ですね…）

（うん、本当…）

ティアナ、フェイトの時空管理局組も感じ入ったようだ。

ちなみに２人は念話だが、『ヤマト』に来てからは、何故か至近距
離でないと念話が使えなくなっていた。

夫婦の誓約が終わったのを見て、ティアナが席を立ち、前に進んだ。
両手で持つ飾り箱にはペアのリングが光っていた。

この役、日本では男児が受け持つ事があるのだが、当然ながら作戦
行動中の宇宙戦艦に子供が乗っているわけもなく、最年少のティ
アナに白羽の矢が立った次第だ。

ちなみにフェイトは新郎の介添で守と共に入場。

「ドキドキしちゃって、スターシャさんと顔を合わせられなかった
よ……」

ミッド帰還後、極親しい者だけに語った。

スターシャの介添を務めたは友人代表の真田だった。

「では、指輪の交換を」

まず、守が指輪を手に取り、スターシャの左手薬指にはめる。

次いで、スターシャが些か慣れぬ手つきで指輪を手にし、守の左手
薬指に通した。

その様を、ティアナは間近で網膜に焼き付けるように見入っていた。

指輪交換が終わり、ティアナが下がると、式場の雰囲気微妙に変わる。

心なしか、参列者の目つきが変わり、緊張感が漂い始めた。

（… ったく、こいつらは……）

冴子はそんな参列者に些か呆れながらも式を進めるが、かくいう彼女も腋の下は汗まみれになっていた。

「… それでは、新郎新婦よ。誓いのキスを」

地球の習慣・風俗に初めて触れるスターシャはともかく、守は皆から注がれる

『キゝス、キゝス……』

と訴える視線に当惑した。

フェイトとティアナは、周囲が目を血走らせ、鼻息を荒くしている様に啞然とした。

が、ここで、雪に抱かれていたサーシャが、無邪気な拡散波動砲を放った。

「… チツチュ、チツチュ……」

この一言で、緊迫しかかっていた式場の雰囲気は解けた。

（未恐ろしい娘だ。嶋津を轟沈させた次は、拡散波動砲で場の雰囲気をほぐした……）

真田は早くもサーシャの小煩いおじさん化し、

「ほれ、娘も早くやれってよ」

冴子『おばちゃま』は、苦笑しながら、2人にキスを促した。

「…ああ」

スターシャは訳がわからずパチクリしていたが、守がベールを上げると状況を悟ったのか、眼を閉じた。

第93話『結婚式を挙げよう』(8)『(後書き)』

あと1〜3話で地球帰還。イスカンドル救援行とデザリアム戦のインターミッションになります。

第94話『結婚式を挙げよう』(9)(前書き)

キムタクヤマト、好調ですね。

復活篇の時とはかなり違います。

こちらではやっと艦上結婚式が終わります。

本日は色々な事があった日でした。

ジョン・レノンの命日、真珠湾攻撃…。

第94話 『結婚式を挙げよう(9)』

挙式はつつがなく終わり、今は写真撮影に移っていた。

守とスターシャ2人、次いでサーシャを交えた一家。

それが終わると、親しい者達との撮影が始まった。

古代 進、森 雪、真田、冴子、幕之内らが一緒に写真に収まる。

「公式写真」は『相模』乗組員の1人がフォトスタジオの息子で、自らも写真を趣味としていることから、彼が担当したが、それとは別に、カメラを持っている者が思い思いに撮影したが、ティアナもクロスミラージユをカメラモードにして盛んにシャッターを切っていた。

「おーい、フェイト、ティアナ」

自分達を呼ぶ声に、ティアナがクロスミラージユから顔を外すと、スターシャと一緒に写真に収まっていた冴子の手招きしている。スターシャ達と一緒に写れという事らしい。

「よ、よろしいんですか？」

「ああ、遠慮無用さ」

緊張を隠せないまま、フェイトとティアナも夫婦と一緒に写真に収まった。

「よし。ブーケトスやるぞ〜！」

雪をはじめ、参列していた両艦の女性クルーが集められ、さらにフェイトとティアナも手招きされて参加したのだが……。

「……私も参加しなきゃいかんのか？」

困惑した声を上げたのは、無論、女性陣中最高位かつ最年長の嶋津冴子だ。

「当たり前だ。階級と年齢なら、間もなく三十路のお前がトップだろうが」

心底楽しみに真田が言った。

「結婚に階級や年齢順なんか関係なかるーがよ……」

（野郎、殊更三十路を強調しやがる……）

嘆息し、内心で毒づきながら、制帽を幕之内に預けて冴子も輪の中に入った。

向こうでは、スターシャに守と真田がブーケトスを説明していたが、どうやらスターシャも意味を解したようだ。

「よし、やるぞ女性陣！心して受け取れ！」

真田の声が響く、そして

「3、2、1……、よしっ！」

守のカウントダウンと合図に合わせ、スターシャは背後の女性陣に向けてブーケを投げ放った……。

「じゃ、撮りまーすっ……」

撮影担当クルーのかけ声に合わせてシャッターが切られる。

ブーケトスを終え、出席者全員による集合写真だ。
ブーケトスに参加した女性陣は全員、ブーケの花を1本ずつ手にしていた。

スターシャが投げたブーケは、短い滞空の間にバラバラになり、結果として参加した女性陣全員が1本ずつブーケの花を手にするというオチで決着していた。

写真に写った者は皆、自分なりの笑顔を浮かべていた。
この写真は当日の参加者、さらに藤堂長官らにも配布され、一同の記念の品となったのだが、やがて、見る度に痛みと切なさを伴うことになる。

フェイトとティアナも写真を受け取り、時空管理局に復帰した後も、彼女達にとっても生涯忘れ得ない思い出になったが、彼女達もまた、痛みと共に写真を目にすることになる。
しかし、それはまた後年の事。
この時この場にいた者は、1人の例外もなく心からの笑顔を浮かべていた。

部
ミッドチルダ極北地区・ベルカ自治領『聖王教会』本

時空管理局理事官（少将待遇）を兼ねる騎士、カリム・グラシアは、いつものとおり、午後のティータイムであった。

紅茶の香りを愛でていたその時、突如、彼女の稀少能力「プロフェ

「ティン・シユリフテン」が発動した。

「これは一体……どういう事……？」

カリムは急いで机上のペンを手に取り、預言を書き記していった。

発動が終わり、ペンを置いたカリムは、紙に書いた走り書きを公文書用便箋に清書していく。

清書し終え、書かれた内容を一読した。

『正義を謳いし法の番人、星海航く戦船と出逢った。

驕れるまま船出する番人の船、自ら招きし業火にて焼け沈む……』

「……ダメだわ。これ以上は解らない。

それにしてもこれは……」

正義を謳いし法の番人とは時空管理局。

星海航く戦船とは、フェイト達を助けた「地球防衛軍」の宇宙戦艦『ヤマト』と僚艦『相模』の事だろう。

地球防衛軍といえば、先日、フェイトが自分達の無事を報告してきた時、クロノ・ハラオウンやスバル・ナカジマとも直接会話した『ヤマト』艦長代理の古代進と、部隊長を兼任しているという『相模』艦長の嶋津冴子は、現在の管理局にはいないタイプの士官だということもあり、若い管理局員の一部で人気だという。

古代進は、同年代の男性局員よりキリツとしててカツコイ、と女性局員の人気上昇中だが、嶋津冴子は、一部の男性局員から、元機動六課のシグナム一尉とともに

「叱られてみたい上官」

と言われているとか。

閑話休題。

預言の前半はいいだろう。

しかし、後半のそれは穏やかではない。

管理局の「海」が暴走した拳句、自業自得で壊滅的な打撃を受ける
ということか？

「早急にクロノと話し合う必要があるわね……」

いずれにせよ捨て置く事はできない。カリムは手元の鐘を鳴らし、
秘書にして信頼する僚友のシャツハ・ヌエラを呼んだ。

第95話『結婚式を挙げよう』(終)『(前書き)

結婚式編はこれでおしまいです。

第95話『結婚式を挙げよう(終)』

『ヤマト』左舷展望室

写真撮影を終えた一行は、左舷展望室に設えたティーパーティーコーナーに場を移した。

簡素だが飾り付けをした展望室にテーブルが並び、夫婦がつく「上座」には、燭台とともに、大きな枕形のケーキが鎮座していた。

言うまでもなく、幕之内勉ら『相模』クルーが中心になって作った一品だ。

展望室には挙式の参列者はもとより、当直外の『ヤマト』クルーも詰めかけ、入りきれない者は食堂のモニターで様子を見ている他、『相模』の艦内食堂、更には周辺空域の警戒に駆けつけたパトロール艦『しまんと』と『あやせ』にも中継されていた。

ケーキカットが終わると同時に、『ヤマト』『相模』の食堂には乗組員分のケーキが用意され、当直が明けた者が順々に食べられるようになっていたが、やはり、この時当直だった者は嬉しげな表情をしていた。

「乾杯！」

「かんぱーい！」

音頭をとったのは「実行委員長」の真田だ。(冴子は実行責任者)

作戦行動中であるのと、夫婦の意向で、披露宴代わりのティーパーティーは1時間半とし、出されたのもノンアルコールビールやソフトドリンクと、カット直後に切り分けて配られたウエディングケー

キだけだが、あちこちで笑い声が響いていた。

スターシャは、雪、フェイト、ティアナと談笑し、サーシャはとうと…。

「なかなか板についてるぞ。艦長代理！」

クルーに冷やかされ、戸惑った表情の古代 進におぶわれていたその様を、冴子と真田はおかしそうに眺めている。

「この喧騒でぐっすりお眠とは、随分図太い娘だ（笑）」

「その位の方がいいさ。このろくでなしの世界を生き抜くにはな…」

「ああ。だが、サーシャ達の世代は戦争を知らずに育ってほしいものだが……」

「……同感だ」

が、「真田のおじちやま」「冴子おばちやま」の願いは1年も満たずに泡と消えてしまうのだが。

「真田、嶋津。ちょっといいか？」

そこへ、古代 守とスターシャが歩み寄ってきた。

「構わんぜ。しかし、夫婦お揃いで何の話だ？」

守は少し置いてから口を開いた。

「スターシャと相談したんだが、地球に帰って少し落ち着いたら、『ゆきかぜ』の乗組員の家族を訪ねようと思うんだ…」

「……そうか」

「……」

守は続ける。

「よりによつて、艦長の俺が生き残ってしまったからな。

それをやり残したままじゃ、いつまでも俺の中のある戦争が終わらないんだ。

たとえ遺族から罵倒されたとしても、これだけはやっておきたいんだ」

「守……」

スターシャが気遣う表情を浮かべる。

「古代。お前がそうしたいなら、俺達は何も言わん。

…だが、お前達一家が笑顔でいる事。これが死んでいった部下達への何よりの手向けなんだ。それを忘れるなよ」

真田が守の目を真っ直ぐ見て言う。

その周りには冴子に加え、サーシャをおぶったままの古代 進と森雪、幕之内も来ていたが、皆も同感とばかりに頷いた。

「……」

「……」

その様を、フェイトとティアナは少し離れた所で見ている。

「大切な人を失った悲しみは、世界共通だよ……」

「ええ……」

(それに、信頼できる仲間達がいる事も……)

唯一の肉親だった兄ティードを失ったティアナにすれば、コンビパイトナーだったスバルを筆頭に、師匠格のなのはやフェイト、チームメイトのエリオやキャロラ、機動六課のメンバーは紛れもなく大切な仲間で、その思いは今も変わらない。

しかし、失ったものの多さでは、ここにいるメンバー達はその比ではないだろう。

ガミラスとの戦争では、遊星爆弾は貧富、老若男女、人種を問わずに降り注ぎ、人類を含む地球の生物の過半が消え、生き残った者も、家族や友人等、大切な存在を全く失わなかった者はいないのだ。

(この世界に比べれば、私達の世界はだいぶ平和よね…)

フェイトとティアナは平和の概念の違いを痛感した。

やがて、

「よし、これでお開きだ。

1時間で発進、火星に向かう!

総員、後片付けと発進準備にかかれっ!!

「はいつ!!!!」

冴子がパーティーの終了と発進を告げ、皆が応じた。

聖王教会本部

一室にはカリムとシャツハに加え、カリムの呼び出しに応じたクロノ・ハラオウンと八神はやて、それに高町なのはもいた。

その席で、カリムが自分のレアスキルが発動してしまった事を告げると、一同は表情を引き締め、「預言」の内容に聴き入った。

「星海航く戦船で考えられるんは、やっぱ『ヤマト』と『相模』やるなあ……。」

現にフェイトちゃん達は『ヤマト』に乗っとる。まさに預言どおりや」

「でも、『驕れるまま船出する法の番人』って……」

なのはが戸惑った声を上げるが、はやてがすかさず応えた。

「なのはちゃん。残念やけど、管理局、特に本局の一部が傲慢になつとるのは事実や。」

機動六課は地上部隊とはいえ本局主導やったし、それも含めて、本局万歳、地上本部はバカばっかと思うアホどもが増殖しとるんよ……」

「……」
「そんな……」

信じられない表情のなのはにクロノが言う。

「自戒も込めて言うが、管理局は、管理外世界やそこに住まう人達を下に見ているんだろうな」

「……そんな！」

なのはが絶句する。自分やはやてはその管理外世界の生まれだ。到底看過できるものではない。

「無論、魔法文化がない事以外では、管理世界の住民と何ら変わらない人間同士ということを知っている者もいるが、魔法を使えない

という一点だけにこだわって、未だに管理外世界や、管理世界の住民でも、非魔導師や低ランクの魔導師を格下に見る者も少なくないんだ。情けない事にね」

「けど、そういうアホ共にしてみれば、『ヤマト』と『相模』、白色彗星帝国とやらの艦は、管理局の迷惑をひっくり返した艦やね。あれらの存在が明らかになって、XV級はおるか、XX級も1番艦の就役前で役立たずの烙印を押されたんやから……」

新型次元航行艦『XX級』は、XV級の拡大改良型で、より長期間の行動を可能とした艦船だが、通常空間での航行性能と抗堪性はXV級よりいくらか増した程度で、到底『ヤマト』等と渡り合えるものではなかった。

このため、既に資材が集められていた4番艦までは起工が決まったが、5番艦以降の発注はキャンセルされてしまった。

より高出力の魔力炉を開発し、『ヤマト』や白色彗星帝国の艦に負けない艦船の開発が待ち望まれていたが、これらの宇宙戦闘艦の航行性能は、管理局の艦船より数世代先を進んでいる上、『レオニダス』を襲撃した後、『ヤマト』『相模』と交戦した白色彗星帝国軍の艦船は徹底的に破壊されており、一番知りたかった動力部の詳細は全く解らなかった。

「でも、いくら情報が欲しいといっても、クロノ君や向こう（地球防衛軍）の人達を騙してたなんて、やっぱりダメだよ、そんなやり方……」

「それで逆にコケにされとるんやから、ホンマにアホばっかやで。フェイトちゃん達を助けたんは誰やと思てけっかんねん」

海の一部がクロノに無断で、通信ポッドに細工をした拳句、逆におちよくられたニュースはたちまち局員に広まり、「陸」では笑いの

ネタになったり、

「地球防衛軍よくやった！」

と言つ者さえおり、反管理局の立場にある者はもつと露骨に喜んだ。

はやてやなのはは本局所属とはいえ、上層部のこの小細工には苛立ちを隠せなかった。

フェイト達の事もさりながら、未知の強敵と互角以上に戦い、味方になってくれるかも知れない勢力にまで難癖をつけるような真似をして、一体何がしたいのか！？

小細工をした高官と是非共OHANASHIしたい。なのはとはやては心底そう思っていた。

「とはいえ、増長している者は、自分が増長しているなんて考えもしないしな……」

「ええ……」

クロノの懨然とした呟きに、カリムも同調した。

果たせるかな、クロノの懸念は的中してしまう。

第95話『結婚式を挙げよう』(終)(後書き)

次回は火星でのヒトコマをば...

第96話『真参』（前書き）

『始まりの地』でのユアタイムです

第96話『墓参』

海王星軌道付近・『相模』艦橋

「軍本部より、火星へのワープ許可が出ました！」

「よし、15分後にワープを行う」

「わかりました。……最終チェックを行い、速やかに報告しろ」

冴子の指示を受け、大村が艦のチェックを命じる。

『ヤマト』でも同様のチェックが行われており、また、フェイトとティアナは病室で、慣れた手つきでベッド上のシャリオの身体を布団ごと固定した後、自らも固定椅子に座り、ベルトを締めた。

「…それにしても、月軌道ならわかりますが、何故火星に行くんでしょうか？」

ベッド上のシャリオが疑問を口にした。

『ヤマト』『相模』の性能なら、太陽系はもはや庭のようなもの。

一気に地球圏に戻ってもおかしくないのだが、火星に何の用があるのか、疑問に思うのは当然だ。

「ソレハ、デスネ……」

シャリオの疑問に答えたのは、頭部だけが病室に飛んで来たアナライザーだった。

初めの頃はその存在や、あまりにロボット離れした言動に度肝を抜かれていたフェイト達だが、いつの間にか、日常風景として受け入れていた。

「すたーしゃサンノ妹サンガ、火星デオ亡クナリニナツタカラデス
遙力いすかんだるカラ、文字ドオリ命懸ケデ、何ノ打算モナク、波
動えんじん等ノ設計図ヲ、地球ニモタラシテ下サイマシタ。
……ソノ方ノオ名前モ、さーしゃトオツシャルノデス」

流石に、最後はアナライザーも声を落とした。

「！……そうだったんだ……」

ならば、わざわざ火星に立ち寄る理由も十分理解できる。

『ワープ5分前……』

その時、相原の声が流れ、彼女達は無言になった。

15分後、『ヤマト』『相模』の前方には火星の赤茶けた大地
が接近していた。

『相模』艦橋

「目標上空まで、あと5分です」

観測席の三沢が告げる。

それを聞いて、大村が立ち上がった。

「では、行ってきます。艦長」

「頼む」

冴子自身があの場合に行きたいところなのだが、総指揮官という立場上それもままならず、大村に任せ次第だ。

「コスモタイガー、発進せよ」

大村が艦橋から出ていったのを見送ると、上空警戒のため、両艦からコスモタイガーの発進指示を出す。

ほどなく、両艦から上陸艇が1機ずつ発進し、コスモタイガーを従えるように地表に向かう。

『相模』艇には大村と黒沢が乗っているが、『ヤマト』艇には古代兄弟と森 雪が乗っているはずだ。

「映像、出ます」

パク通信長がメインスクリーンに、地上からの画像データを展開した。

赤茶けた大地にやや傾いてそそり立つ脱出カプセルと、遠くには宇宙船の残骸。

そして、カプセルの傍らに2?程の盛り土と墓石が建てられ、墓石には、

『地球の全ての命の恩人ここに眠る。 土方 竜・揮毫』

と刻まれていた。

『ヤマト』 『相模』 の殆どの乗組員がその場に起立する。

『ヤマト』 の右舷展望室にはスターシャ・サーシャ母娘と佐渡、フエイト、ティアナが立ち、メインモニターに見入っていた。

墓前に雪が花を供えると、一同は頭を垂れる。

同時に『ヤマト』『相模』両艦のクルーも一斉に黙禱。
艦長席から起立した冴子は、脱いだ制帽を手にして黙禱した。

『ヤマト』右舷展望室でも同様の光景があつた。

スターシヤは一言も発さず瞑目し、その後ろで佐渡やフェイト達も
肅然と頭を垂れている。

そして、いつもは無邪気なサーシヤも、母や周囲のただならぬ雰囲気
を察したか否か、神妙な表情で、モニターに映る、同じ名前の叔
母の墓に見入っていた。

「サーシヤ、いつか皆でご挨拶に来ましよう……」

スターシヤは腕の中の、妹の名を継いだ愛娘に語りかけ、サーシヤ
は笑顔を返した。

（こつこつという人達が本当にいたんだ……）

何のメリットもないだろう事に命懸けで取り組んだ姉妹。

（英雄はこつこつという人達にこそ相応しい称号よね）

自分達、旧機動六課のメンバーはミッドチルダを守った英雄達と賞
賛されているが、この姉妹の壮絶な「実績」はスケールが違い過ぎ
てとても比べようがない。

フェイト達は心底そう思った。

第96話『墓参』（後書き）

次回、ようやく帰還…かな？

番外話2 『継承と再会、そして別れ』（前書き）

著作権上問題が生ずる疑いがあるため、一部を削除しました。申し訳ございません。

『復活篇』ベースのIFです。

上条 了の階級ですが、映画の「一等空佐」は年齢と釣り合わない
と判断し、「一等空尉」としました。

某赤い方は例外です。

番外話2 『継承と再会、そして別れ』

2220年3月、人類移民局本部

本部最上階に位置する『本部長執務室』。

今この部屋にいるのはこの部屋の主、27歳の若さで本部長を務める島 次郎と、その片腕たる副本部長の嶋津冴子・地球防衛軍中将（48）だ。

冴子は一見、宝塚の元トップスターと見紛う美貌の持ち主なのだが、右頬に走る十字傷と、対ガミラス戦当時、まだ20代で地球防衛軍隊初の女性艦長になり、男共に互して戦い抜いた程の猛々しい言動が災い（？）してか、生涯独身で終わりそうな気配だ。

年齢や経験から見れば立場が逆としか思えないのだが、防衛軍司令長官たる同期の古代 守（大将）から、

「済まん、あの馬鹿（進）が戻るまで、次郎を助けてやってくれ…」

と頼み込まれた時、冴子は、

「わかった。壁になればいいんだな」

とだけ言って引き受けたのだ。

まだ青年期の次郎では、年長者揃いの軍高官や提督連中に軽く見られがちだ。

その対策として、守は『ミッドチルダ駐在武官』のポストにあった冴子を呼び戻したのだ。

数日前の第1次アモール移民船団壊滅の報せに、部屋には沈鬱な空気が漂っていたが、今となっては後には引けない。第2次船団は予定通り出発していった。

そして、次郎と冴子の仕事は第3次船団の準備に移っている。護衛艦の手配と艦隊の編成、移民船の手配に、あの艦の準備。そんな中、

「失礼します。上条一尉をお連れしました」

秘書が来客の到着を告げる。

「わかった。通してくれ」

次郎が入室させるよう促した。ほどなく、腕を吊った1人の青年が入り、次郎と冴子の前で姿勢を正し敬礼する。

「第1次船団護衛艦隊旗艦『ブルーノア』戦闘班長、上条 了一等空尉であります！」

「嶋津だ。宜しくな、上条」

「島です。さ、掛けて下さい……」

冴子は拳手で答礼し、次郎は頷いて着席するよう促す。

「怪我の方はどうだ？」

「幸い、火傷と捻挫で済みました。1週間余りで包帯は取れます」

上条の怪我の様子を確認した後、会敵から深宇宙貨物船『ゆき』に救出され、船長の古代 進と共に敵戦艦と戦い、一糸報いるまでの状況報告を受ける。

上条の報告の間、次郎と冴子は一言も発さず聞き入っていた。

報告を終えた後、上条はしばし俯いていたが、次顔を上げた時、両眼は真っ赤になっていた。

「護衛の任を全うなかった事、亡き司令官に代わりお詫びします。

…申し訳ありませんでした！」

「……………」

「……………」

謝罪する上条に、2人はしばらく無言でいたが、

冴子が口を開く。

「上条、多くは言わない。だが、これだけは忘れるな。

明日のために今日の屈辱を耐え忍べる者。それが宇宙戦士だ。いいな？」

「！……………ハイツ！」

冴子の視線を真っ直ぐ受けた上条の眼に光が戻り始めた。

(いつの間にか、諭す立場になってしまいましたよ。沖田艦長……………)

冴子は内心で苦笑しながら、次郎に言う。

「本部長、あの件は上条に任せてよろしいですね？」

「結構です。上条君ならやれるでしょう」

「……………??？」

会話の内容が解らず、目を白黒させている上条に冴子は、机上にあったファイルを手渡す。

「副本部長、これは…?？」

「お前への辞令に決まってるだろう?…確認してみろ」

疑問を口にする上条に、冴子は、お前は何当たり前の事を聞くのだ?と言わんばかりの口調で返した。

上条は訳がわからないという表情のまま、封筒から辞令用紙を取り出して目を通したが、すぐに驚愕の表情になる。

「これは …? ヤマト』って…?まさか…」

次郎と冴子はしてやったりという表情になった。

「そのまさかだよ、上条君」

「復元修復ということになっているが、中身は最新型で、『ブルーノア』にも引けはとらないぞ。

包帯が取れたら、直ちにアクエリアスのドックに行き、乗り組んでもらうが…、不服か?上条」

「い、いえ。不服だなんて滅相ありません!

むしろ、望むところです」

『ヤマト』が動く時、即ち人類存亡の瀬戸際ということ。

記録映像でしか『ヤマト』を知らない上条も、宇宙戦士訓練学校ではあの頃を知る教官達から聞かされていた。

先日、その伝説に深く関わった1人の男と偶然にも出逢い、その実力を垣間見せられ、自分もいつか、あんな戦いができるようになり

たいと思ったばかりで、今度はその伝説の艦自体が、遙かに強くなつて蘇るうとしてゐる。

その「伝説」と共にもう一度戦えと言つのだ。

敗残兵の自分には過ぎた任かも知れないが、やってやる。今度は必ず成功させてやる。

上条の瞳にはすっかり生氣が戻つていた。

「有難う…。頼むよ、上条君」

次郎が微笑みながら、上条に握手を求める。

「はい！」

そう言えば、ディンギル帝国との戦いで亡くなった旧『ヤマト』の航海長は、本部長の兄さんだったな。握手しながら、上条は思い出していた。

その時、冴子の電話が鳴る。出てみると、

「大村一佐と桜井三尉がいらっしやいました」

と秘書の声。通すように告げて電話を切った。数分後、

「『ヤマト』副長を命じられました。大村耕作一等空佐であります！」

「同じく『ヤマト』航海班勤務を命ぜられました。桜井洋一三等空尉です！」

新たに2名が加わった。

「お久しぶりです、嶋津司令！

……いや、副本部長でしたね（笑）」

「ああ。直に会うのはかれこれ5年ぶりだな」

握手する大村と冴子に、上条と桜井は驚きの色を浮かべる。

「大村航海長、嶋津副本部長とお知り合いだったんですか!？」

尋ねる桜井に応えたのは冴子だ。

「ああ。大村はガミラス戦以来、何度か航海長や副長として私を補佐してくれてたんだ」

道理で、スクラップ同然の『ブルーノア』であの敵戦艦とやり合った時も、この人は古代船長と同様に冷静でいられたのか？

上条も納得した表情になった。

間もなくお昼時だったため、5人連れ立って本部内の食堂で昼食をとった後、玄関で大村達を見送る。

「大村、上条、桜井。

皆、死ぬなよ。特に大村、お前だ」

冴子に名指しされた大村は一瞬驚いた表情になったが、すぐ軍人のそれに戻ったかと思うとニヤリとし、

「ご心配なく。ここまで来たらあいつらの分まで、黒光りする憎いあん畜生みたいに生き抜いてみせますよ（笑）」

と切り返した。

3人を見送った後、次郎が尋ねる。

「嶋津さん、大村さんに言った、あいつらって？」

公的な場では次郎が冴子の上司になり、年長の冴子も次郎を立てているが、私的な会話は

「嶋津さん」「次郎」

である。

「カミさんと倅だよ。7年前に2人とも事故で逝っちまった…。前に会ったのは三回忌さ」

「そうですか…」

「あいつ、無茶しなきゃいいんだが……」

果たせるかな、冴子の懸念は的中してしまう。

第97話『帰還(1)』(前書き)

以下の小話は、本編とは多分関係ありません。

西暦221X年・新暦9X年、地球防衛軍中将・嶋津冴子と同一等空佐・古代サーシャは、ミッドチルダ首都クラナガンに駐在する特別高級武官及び武官として降り立った。

開口一番……。

「ここが『魔都』クラナガンなのね、おばさま」

「……サーシャ、そりゃ私が言う台詞だ」

「「サーシャ……」」

出迎えに立った時空管理局提督・統括管理官のフェイト・T・ハラオウンと、同執務官長・二等陸佐のティアナ・ランスターは、幼い頃の愛らしいサーシャを思い出し、ホロリと涙した……。

第97話『帰還(1)』

観測席の三沢が艦の位置を告げる。

「…あと2時間で月軌道です」

「ん。通信長、司令部に連絡だ。」

横須賀到着は2230時で宜しいか、とな」

「わかりました」

冴子の指示を受け、パク通信長は司令部と到着時刻を調整する。

通常の任務とは異なり、『ヤマト』にはVIP スターシャとサ
ーシャ母娘 が乗っており、到着に際しては藤堂司令長官ら軍高
官のみならず、連邦大統領をはじめとする政府高官も出迎えに立ち
会うため、彼らのスケジュール調整も不可欠なのだ。

それだけではなく、まだ入院中のシャリオ・フィニーノの入院と、
フェイトとティアナの当面の滞在先の手配も必要なのだ。

スターシャ達はともかく、フェイトら時空管理局組については、魔
法や次元世界等デリケートな問題も抱えているため、冴子や古代、
真田ら独立第13戦隊(13TF)首脳陣は、古代守・スターシャ
と相談して、彼女達を、

『イスカンドルに不時着し、保護されていた遭難者』

とし、スターシャ達の陰に隠す形で公表しない事になっていた。

13TFは『相模』『ヤマト』の2隻体制だが、火星からは、
訓練任務から帰還する途中の駆逐艦『ゆうぐも』『みねぐも』『き
よしも』『のかぜ』からなる第12駆逐隊が護衛として随伴してい

た。

しばらくして、パクが報告する。

「司令部より回答。港内整理のため、横須賀到着は2330時とされたし、との事です」

「わかった。…2130時を以つて当直解除。総員配置とする」

『ヤマト』

『総員に通達。日本時間2130時を以つて総員配置とする。横須賀到着は2330時。繰り返す…』

相原の声で地球帰還時刻が告げられ、艦内の空気が変わった。

1ヶ月余りの重大任務もようやく終わるためか、緊張の中にも高揚感が漂う。

フェイトとティアナは宛がわれた部屋で荷物の整理をしていた。

荷物と言つても、『レオニダス』から着の身着のまま脱出したため、携行してきたのは身分証明書を兼ねた執務官手帳とそれぞれの愛機^{デバイス}だけで、あとは『ヤマト』『相模』が融通した官給品だ。

特に女性特有の物品は、雪1人しか正規の女性クルーがいない『ヤマト』ではストックに余裕がないため、クルーの3割が女性である『相模』のストックから融通したものだ。

「いよいよこちらの世界の地球なんだね…」

「ええ。宇宙戦争で地上の様相が激変してると言われてますけど、どんな状況なんでしょうね」

フエイト達も、第97管理外世界とは異なる「地球」への到着を控え、緊張は隠せないようだ。

「私達、地球ではどう扱われるんでしょう…」

ティアナが少し不安げに言う。

こちらの地球にも魔法文化はないようだが、『レム』の一件で、地球防衛軍サイドは管理局の機密事項を含めた資料も回収して調査しているだろう。

「『レム』の犠牲者にも子供が少なからずいたからね。

それに、この世界は15歳未満の子供が軍や警察等の仕事について、関係した教育を受けるのを禁止している。

管理局に好印象を持つとは思えないね。

『ヤマト』『相模』の人はともかく、他の地球防衛軍の軍人さんや地球連邦政府の政治家達がどう出るのか。正直わからない…」

ガミラスや白色彗星帝国との戦争をくぐり抜けてきたこの世界の地球の「実績」を考えると、ここの地球が時空管理局の保護や干渉を受け入れるとは到底思えない。

古代から聞いた地球連邦の基本方針は

『地球連邦は他の星の人類を支配しない。そして支配されない』

と、あくまで対等の関係を保つというものだ。

また、管理世界での世界観、「次元世界」についても嶋津や古代、真田達に説明する機会があった。

彼らは耳を傾けてくれ、少なからず質問も受けたこともあり、一定

の理解は得られたようだが、地球連邦がその世界観を導入する見込みは薄そうだ。

「君達の世界観は理解できるし、考え方も尊重する。
：しかし、我々がそれに同調することは全く別問題だし、ましてや従属する義務はない」

というものだった。

予想していた答なので、別に失望はしなかったが、対等に付き合う事を、果たして管理局が承知するだろうか、という懸念が残った。

しかし、管理局が無理に地球を従属させようとするれば、地球側は管理局を侵略者と見なし、頑強に抵抗されよう。

少なくとも、艦船の戦闘力は段違いで、管理局の艦船ではあつという間に潰滅してしまうだろう。

白兵戦でも、白色彗星帝国の都市要塞内部の戦闘のように、地球防衛軍の兵士が死兵化して突っ込んで来たら、魔法頼みの管理局武装隊員では抑えきれず、たちまち屍山血河が築かれよう。

それに個人装備の銃火器も、ライフルはおろか、拳銃までパルスレーザーという高エネルギー光学兵器が主力だという。

しかも驚いたことに、彼らが装備しているハンドガンは90年近く前に制式採用されたものだということ。

もちろん改良が重ねられているだろうが、これは純粹にこの世界の地球の技術によるもの。

イスカンドルからのオーバーテクノロジーに目が奪われがちだが、図面の形で提供された波動エンジン等を短期間で実体化し、使いこなしてみせたのは、この世界の地球の科学・工業力に裏打ちされた

ものだ。

（進歩した科学は魔法と同じだと言っけど、管理局は、『ヤマト』が登場する前の地球防衛軍にも敵わなかったんじゃないかな…）
（喧嘩しても勝てない相手なら、関わらないようにするか、仲良くするしかないわよねえ……）

フェイトとティアナはしみじみと思うのだった。

その時、部屋のドアがノックされる。

「森です。少し時間を貰えるかしら？」

森 雪の話の内容は、自分達時空管理局員の扱いについての提案だった。

時空管理局という組織形態や、魔法という力の存在は、現在の地球連邦や地球防衛軍にとってもデリケートな問題で、市民に公表できるものではないため、表向き、遭難してイスカンドルに不時着し、スターシャに保護されていたことにするのはどうか、というものだ。これはスターシャから持ち掛けられた事で、夫の古代 守や嶋津冨子らも賛成したという。

スターシャ絡みの人物なら、肩身が狭い思いをすることもないだろうという事らしい。

少し考えて、その申し入れを受けたフェイトとティアナは、お礼を言うべく、その足でスターシャ達の部屋に向かった。

第98話『帰還(2)』(前書き)

「新たな旅立ち」相当編も終わりが見えてきました。
問題はデザリアム編までのインターミッションですね…。

第98話『帰還(2)』

『ヤマト』 『相模』 は月軌道を通過し、地球圏に戻った。

『相模』 艦橋

「町田、三沢、デブリに注意しろ」

大村が操舵士と観測士に注意を促す。

月軌道から内側は、過日の都市帝国との死闘の結果、両軍艦艇や都市帝国自体の残骸が大量に散らばり、艦船の往来に支障をきたす程だった。

戦闘終結後、いち早くこれら残骸の回収が始まったのだが、指定航路帯以外でのサルベージはまだ半分にも満たなかった。

そして。

「あれは？」

『ヤマト』の病室で、シャリオに付き添っていたフェイトとティアナ、そしてシャリオ自身も、スクリーンに映し出された光景に我が目を疑ったが、それに答えたのは佐渡だ。

「ああ、あれは白色彗星帝国の本拠地、都市帝国の下半分がそのまま残ったんじゃないよ」

フェイト達が見たのは、虚空に浮かぶ直径十数？のお椀状の物体

都市帝国の基礎を成していた小惑星だった。

『ヤマト』決死隊の突入で動力炉を破壊され、巨大戦艦が離脱した後も、この小惑星は破壊されることなく、大量の艦船等の残骸や兵士の遺骸と共に、地球から約9万5000?の円軌道を、約1週間周期で公転し始めていた。

岩盤は極めて堅固で、破壊するにも手間がかかるため、地球防衛軍は巨体を応用した防御要塞やドック等への改築を模索している。

「あれが、白色彗星帝国の本拠地だったんだ……」

「……………」

ティアナとシャリオは言葉を失っていた。

(古代さんや真田さん達は、本当にあの中に突っ込んでいったんだ(のね)…………)

突入した30人余りの『ヤマト』クルーのうち、生還したのは古代と真田だけ。『ヤマト』戦闘機隊と空間騎兵隊は全滅という、凄惨極まる死闘にも関わらず、白色彗星帝国を止められなかったという。

残党とはいえ、白色彗星帝国軍の攻撃を肌身で体験したフェイト達は全身が総毛立つのを覚えた。

私達と同じ立場になった時、『ヤマト』等、地球防衛軍の宇宙戦士達のように、膝を屈する事なく戦えるのか？

……無理だ。時空管理局はここまでの事態は全く想定していない。

格上の敵相手に戦った事がない管理局が、殺し殺される覚悟なんか、

持っているわけがない。

時空管理局。特に『海』は、次元世界の法と秩序の守護者と自ら誇ってきたが、この世界に関わるのなら、自分達は新参の弱小勢力に過ぎないと自覚し、学ぶことから始めないと、いずれは数多の管理世界を巻き込んで崩壊してしまう。

フェイト達は肝が冷えていくのをはつきりと感じていた。

地上・新横須賀市、地球防衛軍高級士官官舎

マンション形式の官舎の一角、嶋津家では、仕事柄不在が多いマダ才当主に代わって家を守っている少女、高町雪菜（13）が、パジヤマの上にカーディガンを羽織ってテレビに見入っていた。

昼間は右サイドポニーに結っている髪は当然下ろされている。

隣人で、彼女の保証人でもある軍務局勤め 所謂背広組 の中
島龍平から、今夜遅くに『相模』『ヤマト』が帰還すると知らされ、
特別番組を組んだテレビを見ているのだ。

とはいえ、冴子らクルーが艦から離れられるのは早くても明日だから、適当なところで寝るつもりなのだが……。

それにしても、艦長（冴子）は本当に破天荒な人だ、と雪菜は思う。

ガミラスとの戦争で孤児になった自分の保護責任者を引き受けたのは、亡き長姉の幼なじみだった彼女だが、長姉とは対照的に、女性らしくない言動が多く、地球防衛軍初の女性艦長と聞いていたが、白色彗星との戦争が近づくや、唐突に、小規模で代理扱いとはいえ、

あの『ヤマト』をも従えた部隊指揮官に就任した。

そして、地球防衛艦隊が潰滅状態になってもなお戦い続け、顔に傷を作りながらも、いつもと変わらない表情で帰宅した。

そして今回も『ヤマト』共々、初めは新人達の訓練航海の予定が、なし崩しのイスカランダル救援任務。

そこで、何とガミラス軍と共闘して未知の敵艦隊を破り、スターシヤ母娘と古代 守を救出したというのだ。

世論調査では、ガミラスとの共闘には、賛否両論というよりも否定的な見方が多く、雪菜自身も、ガミラスを許す事はまだできていないが、ガミラスを憎んでも家族が還ってくるわけではなく、イスカランダル救援という目的は同じなのだから、個人的感情とは切り離そうと努力している。

当の冴子は、在宅時の『たれ』つぶりや、我が家や中島家で、同期の真田志郎らと飲みながらヨタ話ばかりしている姿からは想像し難いのだが、男社会の最たる宇宙戦士の中で初の女性艦長になり、最年少の戦艦艦長に抜擢されたりと、何だかんだで軍からは高く評価されているようだ。

だが一方で、雪菜は、冴子達の行動の結果、これから自分の周囲が俄かに忙しくなるという予感を覚えていた。

胸元に下がるネックレスの先にある、亡き母から守り石として受け継いだサファイア様の石を握りながら1人呟く。

「これから忙しくなりそうだね。『ピュアハート』……」

地球に近づくとつれ、モニターに夜の地表の様子が、無数の明かりの数となって見えるのだが、

「地上はあんなに暗いの……？」

フェイトがかつて何度も『アースラ』から見た、第97管理外世界の夜の地上はもっともっと明るかった。

それなのに、同じく地球を名乗るこの星は、地球連邦の首都だという東京地区こそ一目でわかるが、他の地区の明かりは比べものにならないほど少ない。

『ヤマト』乗組員によれば、緑は回復しつつあるものの、まだ遊星爆弾によるクレーターやクレーター湖沼が方々に見られるという。初の核被爆国で、地震大国でもある日本は対策をとるのが早く、他の地域より相対的に人的損耗率が少なかったとはいえ、第97管理外世界と比べ、ここまで人口が少なくなってしまったのか？

フェイト達は、もう一言も発することができなかった。

そこに、

『本艦は30分後に大気圏に突入する。総員、最終チェックにかかれ』

艦長代理・古代の声が響いた。

第99話『帰還(終)』(前書き)

グダグダながらも、ともかくここまで来ました……。。

第99話『帰還(終)』

伊豆諸島・青ヶ島上空50?、『相模』艦橋

「誘導信号受信。データ転送。町田、いいか?」

「了解、確認しました、異常ありません」

「周辺空域、異常なし」

照明を落とした艦橋内に確認の音が響く。

ここからは横須賀司令部管制の誘導で基地に降りるのだ。

百里基地から発進した航空自衛隊の気圏内仕様コスモタイガーが周辺空域の警戒にあたっており、三浦半島から伊豆諸島の上空とその周辺空域は臨時閉鎖空域になり、地球防衛軍、それも限られた部隊の航空機と艦船以外の進入は禁じられ、無断で侵入した航空機などは無警告撃墜可になっていた。

それは海も同様で、海上自衛隊の護衛艦と潜水艦に警戒のヘリが海上、海中を監視していた。

三浦半島沖、『ヤマト』

『着水3分前。総員、対ショック防御』

相原の声が流れる中、乗組員はそれぞれの席やジャンプシートに腰掛け、フルハーネスのシートベルトを装着する。

病室ではフェイト、ティアナがジャンプシートに腰掛け、ベッド上

のシャリオは布団の上からベルトが掛けられ、頭上と足元にはエアバッグが展開されていた。

古代 守一家の部屋では、守とスターシャはジャンプシートに腰掛け、サーシャはスターシャの傍らに設えたセーフティベビーベッド（真田志郎謹製）で可愛い寝顔を見せていた。

『着水する』

舵を握る島の声が響いて数秒の後、『ヤマト』の巨体にズシン、ズシンと衝撃が走り、ほどなく止む。

『着水完了。浸水の有無を確認せよ』

古代 進の声が響いた。

「案外やるじゃないか。島は」

「彼も、弟さん達も沖田さんと土方さんの教え子ですものね、兄弟子さん？（笑）」

守が弟の親友の腕前に感心したように言うと、すかさずスターシャがツッコむ。

「ふ、ふん。予想よりは上手かったというだけさ／＼」

「まあ（笑）」

口を尖らせてそっぽを向く夫に、スターシャは呆れたように苦笑した。

三浦半島沖は薄雲ながら風は弱く、波浪注意報も出ておらず、『ヤ

マト』は順調に地下軍港の入口に向け、約15ノットで北上した。病室、フェイトの前にあるモニターには、『ヤマト』の上空を、地上港に降下していく『相模』と随伴の駆逐艦が映っていた。

「『ヤマト』や『相模』みたいな大型艦船が、直接地上から宇宙へ発着するんですね、この世界は……」

シヤリオが感じ入ったように言う。

ミッドや管理世界でも地上から宇宙空間に直接出る手段はあるが、せいぜいシャトル位で、この世界のような全長200?超、数万?もある艦船が直接大気圏突破・突入する能力はない。

先日、デビューから僅か2ヶ月で戦没した地球防衛艦隊旗艦『アンドロメダ』に至っては、ほぼ10万?に達したという。

かの『ゆりかご』はあくまでイレギュラーで、それを稼動状態にしたスカリエッティは、そのノウハウを未だに頑として明かしていない。

一連の次元航行艦撃沈事件続発で焦る時空管理局、特に「海」は、スカリエッティと共に軌道刑務所に収監されているウーノ、トーレ、クアットロら早々初期に稼動開始したナンバーズ（クアットロと同期に稼動開始したチンクヤ、セイン以降の中々後期稼動開始組は『ゆりかご』整備に全く関わっていない）に、『ゆりかご』のノウハウを提供すれば刑期を大幅に短縮する等の司法取引を持ち掛けているが、彼女達も嘲笑するだけで、管理局は何も得られずにいる。

フェイトは、『ゆりかご』はこの世界の艦船に比べて巨大だが、防

御力があまりに低く、『ヤマト』や『相模』クラスの艦の火力で容易に破壊されてしまつたらうと読んでいた。

（『ゆりかご』がどんなに強力でも、結局のところ、私達の世界で大昔に設計された艦。老いた鯨は若い鯨から逃げ延びることはできない……）

（先々を考えるなら、地球防衛軍から技術供与してもらつのがベターよね。

でも、子供を危険な任務に投入する組織だと警戒されてるだらうから、難しいかな……）

ティアナは、『ゆりかご』技術を得ようと奔走している「海」の上層部を思い浮かべ、内心で冷笑しながらも、地球防衛軍も容易にタキオン機関技術を管理局に提供してはくれないだらうと、溜息をついた。

『相模』艦橋

ズシンと軽く突き上げるような衝撃の後、艦は静止した。

「着陸確認！」

「艦体に異状なし！」

「艦内電源、地上出力に切換確認。機関室、メインエンジン停止作業に移れ」

町田の報告を皮切りに、ブリッジクルーが各々の作業に入り、副長の大村がそれを統括する。

本来なら艦長の役目なのだが。

左舷搭乗口下からボーディンググラップが迫り出し、地上に達するや、行き交う作業用車両に混じって、黒塗りのミニバンがグラップ下に着く。

ミニバンの後部席にいた人物が降りると、冴子がグラップから地上に降り立つのはほぼ同時だった。

冴子は出迎えた人物　内惑星防衛艦隊司令・タナリット提督と敬礼を交わす。

「司令、ただいま戻りました」

「ご苦労さん。ともかく急ごう」

「はっ！」

短い会話を交わし、2人は車上の人となって一路地下港に急ぐ。

着陸後の艦上作業の総指揮を大村に任せ、艦長の冴子が一時離艦したのは、地下港に到着した『ヤマト』からスターシャ達が降りるのを、部隊指揮官として見届けるためであった。

地下軍港

既に『ヤマト』は接岸しており、乗降タラップが地上に伸びている。その下では既に連邦大統領以下の政府要人と、藤堂以下の軍幹部が勢揃いしている。

少し離れた場所で車を降り、冴子とタナリットは駆け足で出迎える列に向かった。

大統領と藤堂長官は隣り合っていたため、冴子達はその前に立ち止まって敬礼する。

大統領は重々しく頷き、藤堂は

「ご苦労だった。報告は後だ」

とだけ言い、並ぶよう促す。

タナリットは少し後ろの列に並び、冴子は再びダッシュしてタラップの先端で立ち止まった。

『ヤマト』の上甲板や主砲塔上には、作業中以外の乗組員達が登艦礼式のため並び、港内に停泊している他の艦艇にも、登艦礼式のため「総員上甲板」がかけられていた。

やがて。

搭乗口に古代 守が立ち、挙手の礼をする。
次いでスターシャが立った。

古代守はともかく、スターシャはフラッシュの閃光に免疫がなく、サーシャもいるため、軍からの強い要請でストロボ使用は制限されたため、電子シャッターの音こそ響くが、フラッシュ攻勢はない。

スターシャの手をとってタラップを降りる守に続き、カプセルに入って眠るサーシャを抱いた森 雪が続いた。

古代 進や真田達は搭乗口で守達を見送り、タラップ下では冴子、藤堂ら軍の者が待っている。

守は大統領と藤堂の前に立ち、改めて敬礼する。

「古代 守、只今帰還しました」

「うむ。待っていたよ、古代…」

「よく決心してくれたね。私は君の決断を賞賛します…」

続いてスターシャが挨拶する。

「スターシャです。この度は私共を受け入れて下さり、ありがとうございます」

「いえ、地球のあらゆる生命を代表して、大恩人たる貴女を歓迎致します」

大統領が笑顔で応じ、

「長旅でお疲れでしょう。お休みの場所を用意しましたのでご案内します」

藤堂が自ら先導し、迎えの車両に守とスターシャ、サーシャを案内した。

同じ頃、『ヤマト』艦内から1台の救急車とワゴン車がランプウェイから埠頭に出て、そのまま走り出す。

救急車にはシャリオと佐渡が乗り、ワゴン車にはフェイトとティアナが乗っていたが、埠頭内で森 雪も乗り込み、救急車の後を追った。

第99・7話『新造艦』（前書き）

今週末最後の投稿です。

年内更新はあと2〜3回の予定です。

第99・7話『新造艦』

時空管理局本局・次元港第1埠頭

埠頭にはピカピカの新造艦が係留されていた。

全体のシルエットはXV級次元航行艦に似ているが一際シャープになり、ふた回りは大型だ。

XX級次元航行艦第1番艦、『エル・グランド』

魔導砲『アルカンシエル』を並列2門装備した、時空管理局最大最強の次元航行艦である。

本日は三提督をはじめとする管理局各部門の高級士官や近隣管理世界のVIPを招待した就役式典である。

管理局員の出席は原則として一佐以上の者に限られており、クロノやレティはもちろん、ミッド地上本部のアッテンボロー中将も出席していたが、特例で「最後の夜天の主」こと八神はやて二等陸佐と、「エースオブエース」高町なのは一等空尉も出席していた。

本来なら出席資格がない彼女達がなぜこの場にいるのかと言えば、下世話な話、プロパガンダだ。

JS事件をミッドチルダを巻き込む大規模都市型テロ事件になるのを抑えた「機動六課」の余光はまだ健在なのだ。

XX級は「アルカンシエル」以外にも、「スターライト・ブレイカー」級の中口径魔導砲、「デイバイン・バスター」級の小口径速射魔導砲を多数持ち、時空管理局の威信を体現する艦だった。

しかし、管理局の若きエース、ハラオウン執務官まで遭難する程、

度重なる次元航行艦襲撃事件の結果、「地球防衛軍」に救出されたハラオウン執務官からの報告がもたらした、管理局を遙かに上回る軍事勢力　ガトランチス帝国軍、暗黒星団帝国軍、地球防衛軍の存在は時空管理局、特に「海」こと次元航行本部に深刻な打撃を与えていた。

これらの勢力の大型戦闘艦には、XV級では全く歯が立たず、最新鋭のXX級ですら、正面对決では到底ダメだろうというのが、次元航行本部艦政課の冷徹な結論。
つまり、XX級はデビュー以前から、戦闘艦としての評価は二流、ないし三流というものだった。

故に、華やかであるべき『エル・グランド』の就役式典は、どこか白けた空気が漂っていた。

「これだけの立派な艦船でも、彼らには敵わないのかな……」

ビュフェパーティーで料理をつまみながら、高町なのははポツリと呟いた。

「艦の差もやけど……、ガトランチスにせよ、暗黒星団にせよ、地球防衛軍にせよ、艦に乗っているのは本物の軍人さんや。当然殺し殺される覚悟は持ってるやろ。」

『相模』の、大人ヴィヴィオみたいな艦長さんや『ヤマト』の古代つちゆう艦長代理も笑顔やったけど、同年輩の管理局員とは面構えが全然違ってたもんな。
必要とあらば、手を血で染めることも厭わん人達、私らも含めて管理局にはいてへんやろ……」

先日、クロノが見せてくれた映像を思い出したようだ。

「……管理局は、半端な覚悟であの世界に手出したら焼け死ぬで……」
「はやてちゃん、でも、次元世界の正義と安全を守るのが私達の仕事でしょう!？」

異議を唱えるのはだが、はやては構わず

「なのはちゃん、今の時空管理局が地球防衛軍に代わって、ガトランチスや暗黒星団みたいな、人食い鮫みたいな連中と魔法で戦って、あの地球に住まう人達を守る力と覚悟があると思うんか？」

「……………」

さすがに「ある」と答える程、なのはは脳天気ではない。

「あの世界では、管理局は弱小勢力だと自覚せんと死ぬで。あの人達は分かつとんのかな……？」

ワインを舐めるはやての視線の先には、次元世界拡大派の提督達が談笑していた。

今『ヤマト』と共に行動していれフェイト達が戻ってくれば、彼らが何を思っで戦っているのかわかるかも知れない。

(でも、「海」の人達が独走しないといいんだけど……………)

不幸にも、なのはの懸念は的中してしまう。

『ヤマト』帰還の数日前、地球・日本地区北海道

渡島半島某所にある地下軍工廠内の大型艦船建造ドックで1隻の艦船の外殻が姿を現しつつあった。

艦首の形状はかの『アンドロメダ』と同系列艦であることを証明する、並列2門の波動砲砲口が存在しているのだが、艦首下部にもう1門、波動砲口らしき開口部が存在していた。

それ以上にこの艦の特異ぶりを主張しているのが艦自体のサイズだ。全長は350?を超え、艦幅もアンドロメダより広い。竣工すれば間違いなく、地球防衛軍最大最強の戦艦になると予想された。

その艦の艦首直下、居並ぶ軍高官を背に、地球防衛軍司令長官・藤堂平九郎は厳かに宣言した。

「…本艦を『マルス(MARS)』と命名する！」

火星と戦神、2つの意味を持つ名を冠した超アンドロメダ級、非公式には凶・アンドロメダ級とも称される戦艦が、密かに息づき始めた……。

第100話『一夜明けて』（前書き）

一夜明けた光景です。

冴子達は、さすがに帰還即解散とはいかないようです

第100話『一夜明けて』

13TFの帰還から約7時間後、地球防衛軍・新横須賀基地内・士官用宿泊所

フェイト・T・ハラウンは、宛われた1人部屋で目を覚ました。ティアナは隣の部屋、古代 守・スターシャ一家は同じフロアの貴賓室に滞在し、シャリオ・フィニーノは隣接する軍病院に移送されている。

「……寒……」

部屋の空気は冷えていた。

浴衣の上から丹前を羽織り、部屋の空調を入れ、枕元の時計に表示されている日付を見る。

「そっか。こっちの地球は冬だったんだ……」

ミッドは新暦76年8月で夏たけなわだったが、こちらの地球は2011年12月も半ばになっていた。

カーテンの向こうは既に明るくなっている。

フェイトは窓際に歩み寄り、カーテンを開けた。

第97管理外世界はもちろん、管理世界の大都市でも見たことのないデザインの高層建築物が林立している。
中には最上部にクレーンが据え付けられた建設中の高層ビルも見られる。

そして、そのビルの狭間から、フェイトも第97管理外世界で見慣れた、雪を被ったコニーデ型の山、富士山が望めた。ただ、向こうの富士山とは些か趣を異としている。フェイトはすぐその理由に思い到った。

(ガミラスの遊星爆弾が着弾した影響で噴火したんだよね……)

富士吉田市(当時)に着弾した遊星爆弾の爆発による振動は富士山直下のマグマを刺激し、山頂や宝永山で噴火を起こした。

噴火は1年余り続き、永年の風雨による侵食の影響で、主峰たる剣が峰の標高が3769? になっていたが、コスモクリーナーによるリテラフォーミング後に再計測したところ、3776? に戻っていたのに加え、大沢崩れも溶岩によって埋め尽くされていた。

ただ、宝永山付近は今も亜硫酸ガス噴出が続き、立ち入り禁止が続いているという。

「世界は違えど、ここは紛れもなく地球で、日本なんだ……」

シャワーを浴び、執務官服 Yシャツ等は地球側の支給品 に着替えると、内線電話が鳴った。

10分後、フェイトは同じフロアのサロンを臨時に模様変えた小食堂で、古代守、スターシャ、ティアナと朝食を共にしていた。

その時の朝食について、

『和食で、美味しかったはずんだけど、どんな献立だったか、緊張してて全く覚えていない』

ミッドチルダに帰還した後、ティアナ共々、親しい者のみに異口同

音に語った。

地球防衛軍・新横須賀基地

帰還から一夜経った『ヤマト』『相模』は午後の総員下艦を前に、全員で艦内清掃を行った。

それぞれの持ち場と自分の部屋、班別に分けられたパブリックスペースを清掃していくのだ。

艦長によっては、自室の清掃も生活班員にさせる者もいるが、就役以来定員割れが続いている『相模』は、冴子自らが艦長室を清掃していた。

艦長室といっても『ヤマト』のような艦橋直上のワンルームタイプではない。

一般的な地球防衛軍の艦船では、艦長室は基本的に士官居住エリアに併設されており、スペースに余裕があつて、尚且つ旗艦任務にも用いられることが多い戦艦や空母の場合は、艦長が寝起きする居室と、打ち合わせや会談等に用いられる公室とに分けられている。

艦隊旗艦用の『アンドロメダ』や『ドレッドノート』級主力戦艦の初期竣工艦、あるいは竣工間近の『アレクサンドロス』の場合、公室は広くとられているが、『相模』を含む『ドレッドノート』級の中後期竣工艦は、純粋な打撃戦力か分艦隊旗艦用なので、艦長公室も若干狭くなっている。

それでも『相模』の艦長室は、『ヤマト』のそれより広いのだが。

艦長居室にはバスルームも併設されているため、ひと通り掃除する

とそれなりの運動になる。

「おっしや、ここは終いだ！」

冴子はメイクアップセットも含めて私物の持ち込みが少なく 鬼
○犯科帳シリーズを含む文庫本に童話本（『かわいそうなぞう』）
1冊、師父と仰ぐ人物の影響を受けた大吟醸の一升瓶が1本、
居室には寝に帰るだけに等しいため、居室の清掃も思ったより早く
終わり、大村と生活班員が掃除している公室掃除に加わった。

が、就役してから3ヶ月しか経過しておらず、VIPが乗艦し
たこともない『相模』の艦長公室は今のところ使う機会もなく、冴
子が加わった時にはあらかた終わっていた。

「しかし、半ば開かずの間と化してますね。ここは」

「調節柄というやつだな。」

……ま、生臭いお歴々をお迎えするよりはなんぼかましだがね」

「そうですね（笑）」

途中に昼食を挟み、14時過ぎには全艦の掃除が完了。

総員下艦の前に艦長訓示を行う。

「……今次航海は、新人諸君の練習を目的としていたが、のつびき
ならない事情でイスカンドル救援に変わり、大マゼラン雲まで往復
30万光年に及ぶ遠征と、未知の敵・暗黒星団帝国軍との交戦やガ
ミラス軍との共闘という、極めて異例で厳しい任務の中、イスカン
ダル星を消滅させざるを得なかったのは極めて残念だったが、スタ
ーシャ女王陛下、サーシャ王女殿下、我らが戦友・古代 守を救出
し、尚かつ本艦、『ヤマト』ともに全員が生還したことは最大の成
果だ。」

本艦はこれより修繕作業に入り、諸君はしばしの休暇となるが、新たな脅威の存在が明らかになった以上、有事となればすぐ出撃できるよう、心身を整えておいてほしい。

……以上だ！」

乗組員は順次下艦したが、艦長以下の高級士官は工廠側に艦を引き渡すためもう暫く留まり、冴子が『相模』を下艦し、艦隊司令部への報告を終えて庁舎を後にした時には18時を回っていたが、玄関を後にした途端、携帯電話が鳴った。発信者は中島龍平だ。

『任務お疲れさん。雪菜も来てるから、ウチで飯食ってけよな』

「……でかい面して3杯以上おかわりしますからね。中島さん」

『今に始まったことじゃないだろうがよ（笑）』

苦笑しながら電話を切った冴子は、ようやく軍人の顔から一人の顔に戻った。

事情を知らずに見る者を引かせる右頬の傷は相変わらずだったが。

第101話『この世界にも…?』(前書き)

短いですが、今週最後の更新です。

第101話『この世界にも…?』

「バルディッシュ、今、何て言ったの…?」

『ヤマト』を降りて2日目、シャリオの見舞いから宿舎へ帰った時、愛機からの報告に、フェイトは耳を疑った。

『はい、もう一度申し上げます、マスター。』

大気中に広くAMFが含まれています。

この星に降り立った時から感知していたのですが、AMFの濃度が室内外とも大差ありません。

つまり、この地球の大気全体にAMFが分布している可能性が高いのです。』

「……クロスミラージュ、あんたも同じ結論?」

ティアナもカード状態である自らの愛機に尋ねる。

『……私も同じ結論です、マスター。』

マスターの魔力ランクはAAからDに、フェイト執務官はS+からBにダウンしています。』

そこにバルディッシュが補足した。

『……』ヤマト『艦内にいる時から違和感を感じていました。』

地上ほどではありませんが、艦内の循環空気中にもAMFがそれなりに含まれていましたから。

しかし、ここの大気自体にAMFが含まれていたとは予想外でした……。』

「……この世界も魔法文化はないようだね。生活に支障がなければ

全く問題ないからね。

それにしても、元からこういう空気だったのかな？」

AMF自体に毒性はなく、魔導師も、魔法が使えないか制限される事以外は何の支障もない。

ましてや、ここは管理世界でもないから、クレームなんかつけられないし、つけてもすげなく無視されるだけだ。

「そうだ！」

ティアナが何かに気づいたように顔を上げた。

「……ひよつとしたら、ガミラスとの戦争の影響ではないでしょうか？」

「戦争って、遊星爆弾？」

「はい。偶然にも放射能と一緒に散布されたか、あるいは『ヤマト』がイスカンドルから持ち帰った放射能除去装置にAMFを散布する機能があったのかも知れません」

『私はマスターに同意します』

『マスター、私もランスター補佐官の意見に賛成です』

それぞれの愛機もティアナを支持する。

フェイトも、ティアナの意見が一番可能性が高いことを認めざるを得ない。

「そうだね、ティアナの言うとおりかも知れない。

それに、ここは管理世界ではないんだから、AMFがあるうと、ここに住まう人達には何の問題もないし、管理局がケチをつける権利

はないよね……」

まあ、この世界では時空管理局執務官の肩書に何の意味もなく、自分達は何の権力もない異邦人なのだ。魔法が使えなくても致し方ない。

自分達にとつての最優先事項はシャリオの回復と、3人でミッドに帰ることなのだ。

その時、バルディッシュが信じられない内容を報告する。

『極めて微弱ですが、魔力反応を確認。接近してきます』

「「え？」」

2人は啞然とする。

「まさか、この世界にも魔導師が！？ AMFがあるのに？」

ティアナがサーチモードにしたクロスミラージュを手に、窓際から下を覗き込む。

「誰なのか解る？クロスミラージュ……」

『……やってみます』

レースのカーテンを引いているので、外から見られる心配はない。約20秒後、

『特定できました。下の歩道です』

とクロスミラージュが言い、カシャ、カシャとシャッター音が鳴る。

直後、クロスミラージュの背面に展開された画像を見た2人は驚愕の表情になった。

「な、なのは(さん)!?」

画像に映っていたのは、2人にとって親友/師匠の数年前と瓜二つとっていい少女だった。

セーラー服を着てクラスメイトらしいもう1人と歩く少女は中学生くらいか。

髪は艶やかな程の黒だが、ヘアスタイルは、なのはと鏡合わせのような右のサイドポニー。

「確認してきますっ!」

クロスミラージュを手にしたティアナは、脱兎の如く部屋を飛び出していった。

第102話『なのはと言菜(?)』(前書き)

ティアナの尾行劇です。

第102話 『なのはと雪菜(?)』

脱兎の勢いで部屋を飛び出したティアナだったが、フロントがある1階に降りた時には走るのを止めた。

ここは地球防衛軍の施設。異邦人である自分が泡を喰って飛び出していけば不審がられ、フェイトやスターシャに迷惑がかかる。

フロントに散歩をしてくると伝え、外に出る。

歩道に出て周囲を見回すと、左手の方向にセーラー服姿の2人の少女の後ろ姿が見えた。

早足なら追いつけそうだ。

ティアナは深呼吸をすると、少女達の後を追い始めた。

(髪と瞳の色が少し違うけど、顔立ちとサイドポニーは、それこそなのはさんの鏡映しなのよね、あの子。

それより何より、魔法文化がないこの世界で魔力を持っているだけでも驚きなのに、それこそなのはさんによく似た子が魔力持ちだなんて、偶然でもものすごい一致よね…)

ティアナはさりげなくも、確実に少女達との間隔を詰めていく。

この一帯は軍人の官舎街でもあるから、あの少女も軍人の子女である可能性が高い。

となれば、執拗な尾行は怪しまれ、憲兵隊を呼ばれる恐れがある。

それに、宿舎の前の歩道が通学ルートなら、明日以降も見かけることもあるだろう。

魔力レベルか名前を掴むことができれば上々だろう。

ちなみにティアナは『相模』から支給されたキャップとジャケットを着用していた。

ティアナと同じような色の髪の女性は、地球では極めて少ないため、

何かと目立ってしまうのだ。

少女の背後、10?余りの所まで接近する。

その時、クロスミラージユが反応し、念話でティアナに報告した。

『マスター、あの少女の魔力ですが、現状でCないしBです…』

『AMFで魔力が削がれているこの世界でC以上つて、ミッドならAAAからS。六課の分隊長・副隊長クラス並みなんて、とんでもない資質の持ち主よ!?!』

ここが管理世界ならスカウトの声をかけているかも知れない。

「慢性人手不足」な時空管理局としては喉から手が出る程欲しい人材ということなのだが……。

(…でも、ここは管理外世界も同然だし、私達が干渉する権利はな
いわよね…)

管理局員の人事評価には、本来の職務での業績に加え、有望な人材獲得の実績も含まれる。

例えばリンディ・ハラオウン。

クロノの母であり、数々の次元世界で難事件を解決した伝説の次元航行艦『アースラ』艦長で、自らも優秀な魔導師。

そして、第一線を退いた今でも発言力は失われていないが、その理由には、フェイト、なのは、はやてと守護騎士達という極めて優秀な魔導師を入局させたという実績も含まれているのだ。

その基準に従うのなら、目の前にいる少女はまさに金の卵。

管理世界なら、あの位の年頃の管理局員は少なくない。

が、ここは管理世界に非ず。聞き及ぶところでは、満15歳に満たない者は軍や警察組織やそれらの教育機関に入ることも禁じられて

いる。

『郷に入れば郷に従え』

地球での諺だ。ここで時空管理局の規則は通用しない。

ティアナにはあの少女を管理局にスカウトするつもりは毛頭なかったが、魔導師としての純粋な興味で、彼女の事を知りたいという好奇心が沸き上がっていた。

(せめて、あの子の名前だけでもわからないかな…)

容姿だけでなく、豊富な魔力資質もあの人と同じ。単なる偶然とは思えなかった。

「じゃあね、『ゆきな』」

クラスメイトが手を振って少女から離れていく。

(『ゆきな』っていうんだ、あの子…)

しかし、ティアナはここで尾行を中断せざるを得なくなった。

『ゆきな』が道路を渡り始めた時に信号が変わったのに加え、渡り終えた先に『相模』の炊事責任者である幕之内勉がおり、彼女と言葉を交わすのを見たからだ。

幕之内は例の結婚式の折、ケーキの仕上げのため『ヤマト』に来ていたため、ティアナも顔見知りになっていたのだ。

(あの子、『相模』のクルーと知り合いなの!?)

AMFの影響で、距離があるフェイトとの念話は使えず、しかも顔

見知りの幕之内と顔を合わせては色々とまずい事になると判断。踵を返して宿舎に戻った。

?????

ふむ、引き返したか。

悪意は感じなかったが、余りしつこいならレディ（主〓雪菜）に注意を促すところだった。

この世界で魔力を持つ者はマイノリティなのだがな。レディに魔力があると知って尾行したのか、誰かと間違えたのか。

いずれにせよ、初めて見る顔だ。

注意しておくに越した事はない。

私は、レディの守り石として、彼女の魔力管制と守護を、今は亡きレディ 雪菜の母親 から仰せつかったのだからな。

宿舎

「そうなの、『ゆきな』というんだ。あの子……」

戻ってきたティアナから報告を聞いたフェイトは静かに言った。

「容姿だけじゃなくて、魔力保持量もか……」。

それで、デバイスらしき物は持ってた？彼女は」

「すみません、そこまでは解りませんでした。」

彼女、『相模』の幕之内シェフに挨拶してたので、これ以上はまずいと思つたもので……」

「そっか……。確かに、見つかったら面倒な事になってただろうから

ね。

それに、ここの歩道が通学路なら、また会う可能性は十分あるよ、名前がわかっただけでも十分だよ、ティアナ」

ティアナを労ったフェイトは、心の中で続けた。

(『ゆきな』は、漢字だどう書くんだろっ。

まさか『雪菜』というのでは…?)

なのはを漢字に変換すると『菜の花』とも出てくる。

菜の花はいかにも親友が醸し出す雰囲気と同様、暖かな春を連想させる花なのだが、翻って『雪菜』は文字通り、雪が積もっても枯れる事なく、より風味を増すアブラナ科の葉菜を意味する。

(そう言えば、この地球では、彼女位の年頃の子達は、ガミラスとの戦争のさ中に幼少期を送ったんだよね…)

だとすれば、『雪菜』という漢字名である可能性は十分だ。

苛酷な環境でも萎れる事なく力強く生きているであろう彼女には、『雪菜』という名がよく似合っているのではないか。

フェイトの予感はずしく的中することになるが、それを知るには今少しの時間を要する。

第103話『報告と意見交換(1)』(前書き)

年末年始、しばしの休日が始まりますた…。

文中の自動戦艦・自動駆逐艦のクラス名称はPSS2版に沿ったものです。

設定は色々変えるでしょうが…。

第103話 『報告と意見交換(1)』

13TF帰還の3日後、冴子・古代(進)・真田と古代 守、更にフェイト・T・ハラオウンとティアナ・ランスターは地球防衛軍本部に出頭した。

無論、イスカンドル救援作戦及び、時空管理局艦船遭難事故についての報告と情報交換のためである。

フェイトとティアナは別室で待つことになり、冴子達4人が先に長官室に通された。

部屋には藤堂と、冴子達の所属長のタナリット内惑星防衛艦隊司令、数人の司令部幕僚、さらにトチローこと大山敏郎もいた。

また、司令長官秘書である森雪も当事者の一人として同席を命じられた。

互いに敬礼を交わし、報告と質疑応答が始まる。

一連の経過は航海日誌と任務詳細、戦闘詳細が帰還翌日に提出されており、それを元に進められた。

ガミラス軍との共闘や、スターシャからの要請によるイスカンドル星への波動砲撃についてはある程度予想されていたり、当時としては最善の方策だったとしてさほど問題にはされなかったが、「暗黒星団帝国軍」や白色彗星帝国軍残党との交戦、さらに「時空管理局」なる組織との本格的な接触については司令部としても放置できないのか、幕僚からの質問が相次いだ。

まず、暗黒星団帝国関連では、放置すればスターシャ達の命が危なかったこともあり、交戦はやむを得なかったことと判断されたが、問題は、今後、彼らの報復あるいは太陽系への侵攻の可能性は否定

できないと予想された。

「君達なら嫌というほどわかっているだろうが、ガミラスとの戦争で、全ての分野で君達くらいに、働き盛りの世代の数が一番少ないのだ。

この人口難があと20年は続くと言われている現状では、有人艦船の増備もままならない。

しばらくは無人艦艇も併用していくことになるだろう」

参謀長の説明が終わるとともに、いくつかの艦艇の三面図がスクリーンに投影された。

「今は主力戦艦や駆逐艦をベースにした無人艦の建造を進めているが、来年には全く新しい無人艦艇の建造が始まる。

上から『クレイモア』級自動戦艦、『ダガー』級自動駆逐艦。

有人艦では、各自治州独自設計による艦を建造し、次世代主力艦開発の参考としているが、その第一陣として、北アメリカ州が建造を再開した大型長距離戦艦『アリゾナ』が来年4月に竣工し、同型艦『モンタナ』も6月に竣工する。

ヨーロッパではイギリスの『プリンス・オブ・ウェールズ』、ドイツの『ビスマルク』。

ロシアの『ガガーリン』、中国の『長江』が、いずれも来年後半に竣工する予定だ。

いずれも7〜8万?級で、『ヤマト』同様、長期間の行動を想定した大型戦艦だ」

「それは私も耳にしましたが、日本は？」

「これはまだ正式決定ではないが、日本は『ヤマト』の近代化改装と、大型長距離巡洋艦を試作する予定だ」

ふむ、と一同は頷いたが、冴子が代表して尋ねる。

「参謀、試作の大型巡洋艦とは？」

「月村・バニングス重工の提案をベースとした、長距離長期間行動を可能とした巡洋艦だ。」

主砲は16インチだから、スペース・バトルクルーザーと言った方がいいかも知れん。」

……さらに、白色彗星帝国軍が遺棄した艦艇の一部も我が軍の規格に改修して艦籍に加える。」

たとえ敵の艦船でも、使えるものは使うべきだろう。」

特に空母はフル規格で、現在の我が軍にはないものだけに、意外に使えるかも知れない。」

「さらに、アンドロメダ系列の特殊戦術戦艦も来年9月の竣工を目標にしている。」

「……と言いますと??？」

『アンドロメダ』級は2番艦『ネメシス』と3番艦『シリウス』が建造計画見直しで工事がストップし、他はキャンセルされたと聞くが、同系列の特殊戦術戦艦とは何なのか？

スクリーンに、『アンドロメダ』を倍にしたような超大型艦の三面図が映る。

「排水量16万？級の、いわば超・アンドロメダ級戦艦『マルス』だ。」

「……それはまた破格な艦ですが、白色彗星帝国との戦訓は導入されるのでしょうか？」

真田が懸念を口にする。

新生・地球防衛軍の象徴たる『アンドロメダ』が呆気なく失われた原因の一つが、過剰なまでの自動化だったからだ。

「……完璧ということはありえないが、一層の自動化を進める一方、マニュアルオペレーターの余地を大幅に拡大した。

いざとなれば『ヤマト』に匹敵するレベルのマニュアルオペレーターを可能にするつもりだ。

……今後の新型艦船もそれに準じた設計とするが、『ドレッドノート』級の残存艦についても、来たるべき近代化改装の折には同じ対策をとる予定だ」

一同は頷く。『相模』もいずれば近代化改装を受けることになるう。

「これらの艦は、君達も耳にしている、検討中の宇宙移民計画に備えたものでもある。

……しかし、いかなカタログデータが優れていても、それを動かす者の技量が低ければ張り子の虎だ。

その意味では、済まないが、君達を休ませる暇はない。

人材育成や白色彗星帝国軍残党の掃討等、君達の世代が中心になって進めてもらわねばならないことが山積しているのだ。頼んだぞ」

藤堂長官が締め、一同は直立して敬礼した。

中休みを挟み、次は、新たに接触した『時空管理局』について意見交換が行われる。

「彼女達と話す前に、君達が戻ってくるまでに、火星付近で『相模』が接触した『レム』という難破船を解体調査した結果わかったことを君達に知ってもらい、情報と意見交換を行った上で、我々の認識

を共通なものにしておきたいのだ」

「わかりました」

話が進むにつれ、冴子達の表情は厳しく、
懔然としたものにな
っていった。

第103話『報告と意見交換』(1) (後書き)

年末年始は不定期更新です。

第104話『報告と意見交換(2)』(前書き)

ここに載っている時空管理局は『リリカルなのは』シリーズの公式設定とは何ら関係ありません。

第104話 『報告と意見交換(2)』

2度目の中休み。雪がフェイト達を呼びに行っている間、冴子達は仏頂面を解す事に少なからず精神力を費やした。

(つたく、知らない方がいいこともあるとはよく言ったものだな……)

過日、暗黒星団帝国艦隊と交戦し、大破した状態で太陽系内に空間転移してきた、時空管理局次元航行本部所属し級航行艦『レム』の船体と乗組員の遺体を検視した最新状況が冴子達に知らされたのだが、内容は皆を汎面化するのに十分過ぎる程、ツッコミどころテンコ盛りだった。

『相模』の現地調査とも重複するが、収容された遺体の中に、満15歳に満たない者が6人含まれていた。

うち1人は、身分証明書と艦内のカレンダーを照会したところ満8歳。魔導師ランクとやらではAAAクラスという。

回収された資料では、その位の年頃でAAAランクは天才の範疇に入ると言うが。

真田

「天才なればこそ、きちんとした人間教育を施してから任務に当たらせるべきなんだがな……」

古代(弟)

「一体、時空管理局は何がしたいのか全然わかりませんよ……」

古代(兄)

「理解したいが、年端もいかない子供を危険な任務に就かせている時点でまともにつき合うなんて無理だろう、この組織」

冴子

「理解不要だな」

子供が含まれていたことは皆知っていたため覚悟はできていたが、一同が精神を摩耗するのはこれからだった。

解析に当たっていたトチローが言う。

「……この艦はしばしばダーティミッションにもついていたようだ」「汚い仕事？」

古代 守が問い返す。

まあ見てくれ、とトチローがモニターに資料を投影する。

それを見た一同の顔に程度の差こそあれ、憤怒の色が浮かぶ。

反管理局勢力の殲滅任務。それだけならまだしも、無関係の住民もろとも魔導砲『アルカンシエル』で無警告砲撃し、消滅させたこと。

ロストロギアとやらの回収では強奪同然の回収も少なくない。

魔導師資質が高い子供を強引に入局させる。

拒む保護者に対しては職場に圧力をかけて自己退職せざるを得ない状況を作り出し、経済的に追い詰める。

組織には必ず暗部があるというが、これは……。

時空管理局は次元世界の法と正義の守護者？

それ絶対ブラックジョークだよな？嘲笑っていいだろ？
要は高ランク魔導師が支配する『魔法貴族』社会を作りたいだけなのと違うか？

直に話した限り、フェイト達は純粹に住みやすい社会づくりに貢献したいようだが、組織の裏の本音を知ったら、果たしてどうするつもりだろうか…？

そんな事を考えていた冴子だが、次の資料を見た途端、口にしたコーヒー（森雪がいれました）を嘔いてしまった。

他の者も顔をしかめたりむせているが、日本茶の藤堂は何事もない表情だ。

（雪、コーヒーだけは全然上達しないなあ……）

（進、先が思いやられるぞ…）

（まさか、他の来客にはいれてないだろうな、雪のやつ…）

（いたよ！長官の身近にコーヒー魔女がいたよ！）

一同の心の悲鳴は別にして、モニターに映し出された10歳前後と思しき3人の少女に一同は啞然とする。

「フェイト、さん…？」

「雪菜…？いや、違う…」

「金髪の少女はフェイト・テストアツサ、雪菜ちゃんに似た栗髪の少女は高町なのは、ポプカットの少女は八神はやてといい、フェイト以外は、時空管理局が第97管理外世界と呼称している『地球』の生まれで、しかも海鳴市に住んでいた、とある…」

「高町って、おい…」

驚きの声を上げる一同にトチローが続ける。

「んでもって、この3人の最近の写真がこれだ」

映し出された画像は20歳前後の女性。顔立ちからみてもあの3人の現在の姿だろう。

「フェイトについては今さら言うまでもないな…。

高町なのはは、航空戦技教導隊所属のアグレッサーで一等空尉。

八神はやては特別捜査官職にある二等陸佐で、3人とも魔導師ランクはオーバースクラスという…」

「麻生…。もとい、あつ、そう…」

「艦から回収した記録では、3人は満8〜9歳の時から時空管理局に所属し、魔導師として様々な事件を解決した、とある。

そして、この3人は時空管理局の若きエースとして、マスコミに取り上げられることも多いようだが…」

「言っちゃ何だが、多分に広告塔、あるいはプロパガンダの意味合いもあるんだろうな……」

冴子は眉間を押さえていた。

あんな娘っ子達に幼い頃から危ない橋を渡らせないと平和を維持できんのかね。時空管理局は……。

フェイト達にとって、『レム』に機動六課の資料がなかったのは幸いだったろう。

まだ10歳にしかならず、それも自ら保護責任者を務めている子供を危険を伴う任務に就かせていたと知ろうものなら、冴子達も怒気が寛容を上回っていたかも知れないのだ。

ひと通り資料に目を通した。

重苦しい空気が漂う中、藤堂長官が口を開いた。

「時空管理局への対応について、君達の意見を聴きたい」

まず冴子が応える。

「フエイト達の事は別にして、こちらからアクションを起こす必要はないと思います。」

向こうがコンタクトを求めてきた場合、緊急を要しないものは管理世界政府と地球連邦政府との協議にすべきであり、時空管理局と我が軍が直接コンタクトを持つ事は、可能な限り避けるべきでしょう」
「なるほど。しかし、時空管理局は魔法によらない武装を質量兵器と称して禁じている。」

彼らが我々に武装解除を要求してきた時はどうする？」

それには古代 守が一言だけ答えた。

「ひと通り主張させた後、『馬鹿め』と回答してやればいいんです。第一、彼らが主張する次元世界とやらに我々が従う必要は全くないんですから。」

友達付き合いしたいというならともかく、高飛車に來たのなら、それに相応しい対応をすればいいだけです」

第105話『報告と意見交換(3)』(前書き)

3日連続の投稿で、今年最終の更新です。

半年間ご笑読ありがとうございました。来年もよろしくお願い申し上げます。

今話は後書きも是非ご覧下さいませ。

第105話『報告と意見交換(3)』

フェイト達が想像していたような事態　地球防衛軍高官による尋問同様の説明　にはならなかった。会議はどこか後ろめたさを含む重苦しい雰囲気のまま散会になった。

吊し上げのような事にならなかったのは、13TF側が

「惻隠の情を持って接してほしい。彼女達は第一義にテロの被害者である」

と司令部側に申し立てたのもその要因の一つだ。

時空管理局に対する認識は認識として、先方にもそうならざるを得ない事情があるだろうし、波動砲クラスの大量破壊兵器を時空管理局は保有しておらず、イスカンドル救援作戦時の波動砲の威力に、彼女達はかなりの衝撃を受け、脅威に感じて不思議ではなく、魔法文化に対する我々の印象とこの世界の軍事力に対する時空管理局の印象には何の違もない、等と説明。いささかヒートアップした議論になったが、藤堂長官の口添えもあり、13TF側の意向に沿ったものとなった。

しかし、フェイト達との質疑応答の間、嶋津冴子は自分からは一切発言しなかった。

というのも、フェイト達が入室する少し前に、一幕僚の発言に冴子が激昂し、相手が訓練生時代の1期先輩にも関わらず、

「貴様、もう一度言ってみろ!？」

と胸倉を掴み、あわや乱闘という事態だったのだ。
その場で藤堂が一喝したため事なきを得たのだが、廊下に来ていた
フェイトとティアナは立ち竦んでしまった。

『レム』から回収された資料に「プロジェクトF」関連の資料
があり、フェイト・T・ハラウンがその計画の一環で生み出され
たクローンである、と皆の前で暴露し、人間でない者まで使う組織
など信用できないと発言したからである。

管理局自体はともかく、クローン人間は人間に非ずというくだりに
冴子は憤激したのだ。

真田や古代兄弟は冴子を止めに入っただが、彼らも発言を非難・糾弾
する表情を隠さなかった。

……まあ、発言した本人と冴子は訓練生時代から反りが合わなかつ
たという事実はあるのだが、この手の発言を冴子が心底嫌悪・軽蔑
する真の理由を知っている真田と守もまた、押し黙ったままだった
。

まだ年端もいかない魔導師まで危険な任務に投入する理由を説明し
た時は、流石にフェイト達も苦しげだった。

もう一つの地球 第97管理外世界 で6年間暮らしたフェイ
トはその地でのルールも知っていたから、エリオとキャロが幼いう
ちに管理局に入ることを必ずしも望まなかったから、自分達を見る
目が厳しいものだろうとは覚悟していたが、冴子の暴走で色々とグ
ダグダになってしまった。

「驚かせて悪かったね」

「い、いえ……」

帰りの車中で冴子はフェイト達に謝った。

「　　ったく、部隊を預かる身なんだから、もう少し自重しなきゃいかんだろっが？」

守はにべもない。

「へいへい。日本海溝より深く反省してますよ」

「つまり、マリアナ海溝ほどは反省してないってことだな…？」

軽口で返す冴子に、守は処置なしとばかりに天を仰ぐ。

とは言え、フェイトを侮辱するような発言をした先輩に対する憤りは同じだったため、それ以上のツッコミはなく、フェイトが騒ぎの理由を知ったのはずっと後になってからだった。

本部から40分程走って、車は軍高級士官宿舎の前に到着する。

守やフェイト達は無論、冴子も今日は何も予定がなく、珍しくも17時台の帰宅だ。

一同が車から降り立つと、冴子は右側から近づいてくる少女に気がつき、手招きした。

気がついた少女は右サイドポニーを揺らしながら小走りで近づいてくる。

(え…？この子…！?)

少女の顔立ちがはっきり見えた時、フェイトとティアナは眼を見開

いた。

「お久しぶりです、お帰りなさい。守さん」

「……雪菜ちゃんか、久しぶりだね」

守と再会の挨拶を交わす雪菜に冴子が耳打ちすると、彼女はフェイトとティアナに向き直った。

「2人とは初めてだな。私の家族の」

「……高町雪菜です。よろしくお願いします」

雪菜はフェイト達に名乗り、頭を下げる。

（た、高町！？ この子の苗字が？）
ファミリーネーム

フェイト達は気が遠くなりそうになりながらも、内心の動揺を辛うじて抑え込み、自己紹介を返した。

「フェイト・テストロツサ・ハラオウンです。こちらこそよろしくね」

「ティアナ・ランスターです。よろしくね」

（思い出した。では、この子が嶋津艦長の親友の末の妹で、「翠屋」の8代目で、嶋津艦長の家族って……被保護者！？）

名乗りながら、フェイトは冴子から聞いた話を思い出していた。

「はい。ハラオウンさん、ランスターさん」

「フェイトでいいよ、雪菜」

「私もティアナでいいわよ、雪菜」

「わかりました。フェイトさん、ティアナさん……」

?????

ふむ、魔導師の1人は昨日尾行していた者、もう1人はその先輩か上官といったところか。

レディを見て、随分驚いているようだが、誰かと似ているのだろうか？

魔導師としてのスキルもかなり高いな。特に年長の金髪の方は、レディをも上回る魔力量だ。

それに、2人とも自律型魔力運用媒体デバイスを持っているな。

悪意は感じないが、取り敢えず留意しておこう…。

翌日、冴子はタナリット司令から嚴重注意と当日中の始末書提出を命じられ、件の幕僚も人権侵害の疑いのある発言をしたとして嚴重注意と始末書提出、さらに1月支給の俸給から5%カットの処分を言い渡された。

第105話『報告と意見交換(3)』(後書き)

唐突ですが、オリジナルキャラクターと艦名を下記のとおり募集致します。

1. 艦船名

大改装入りする『ヤマト』に代わる第13戦隊の僚艦として、巡洋艦2隻とパトロール艦1隻が配備される予定です。
については、この3隻の艦名を募集します。

条件

巡洋艦は日本国内の山の名前

パトロール艦は一級河川の名前とします。

旧日本海軍や海上自衛隊の艦と重複しても可です。

武装は当面標準装備としますが、巡洋艦2隻は集束波動砲装備とします。

2. オリジナルキャラクター

上記僚艦のうち、巡洋艦1隻とパトロール艦の艦長及び副長を募集します。

(巡洋艦1隻の艦長・副長はこちらで設定しました)

共通条件

男女・国籍は問わず(長年の在日外国人や帰化も可)

性格等、簡単なキャラ設定とイメージCVを添えて下さい。

? 艦長

年齢27〜29歳(冴子より1〜3期後輩)

? 副長

年齢は24～40歳位まで。航海長又は戦闘班長兼任。

必ず、巡洋艦かパトロール艦どちらの艦長・副長かを決めて下さい。

期間

2011年1月10日頃まで。

疑問も含め、メッセージボックスにお寄せ下さい。

感想欄に記入されたものについては選考対象外です。

選考結果は当ページ内でお知らせします。

なお、選考結果についての理由説明等はありません。

また、選考結果や、作中で戦死や転属等による退場等に対するクレームは一切お受けしませんので、予めご了承下さい。

第106話『再始動』(前書き)

いつまでもお客様状態でいられませんよね……。

第106話『再始動』

地球防衛軍新横須賀基地・高級士官住宅

(……………)

リビングでテレビのニュースを見ながら、嶋津冴子は画面に向かって百面相をしていた。

冴子の眼は画面に向けられているが、視神経と脳は遮断されていたも同然だった。

(あのスピッツ野郎。些細な事に目くじら立ててキャンキャン騒ぎ立てやがって。

…おっと、こういう言い方はスピッツに失礼だよな)

嫡出子であろうがクローンだろうが、五体満足で生まれたのなら大した問題ではないだろう。

こちらの地球では皮膚や一部臓器のクローニング技術は完成しているが、クローン人間の開発は禁止されている。

だとしても、それによって生み出されてしまった人間に一体何の罪があるというのか？

これは不愉快以外の何物でない想像だが、ミッドチルダでは、不妊症とか子供が死んでしまったとかの事情があればクローン人間が認められているということだってあるだろう。

まあ、実際のところはミッドチルダでもクローン人間は禁止されているのだが。

《レディ、カピタン（艦長）に何かあったのか？》
《久しぶりに全面衝突したみたいよ。上官か先輩と……》

普通の人ならドン引きしそうな不機嫌オーラを発散しながら、怪しげな素振りを繰り返す自らの保護責任者を尻目に、高町雪菜とその守り石デバイスは思い思いの念話を交わしている。

あいつ（嶋津）は、どんなに不機嫌でも部下に当たり散らすよ
うな理不尽な事はしないから、触らぬ神に祟りなしということはないが、気が済むまでやらせておけ。

どのみち1時間以内に顔面神経を擦り減らして気が済むから。
同居するに当たり、中島龍平と真田志郎から聞いた『冴子対処法』
の一つだ。

果たせるかな、保護責任者の動向は雪菜の調理に全く影響を与えず、
30分後にはテーブルを囲む2人の姿があった。

翌日、地球防衛軍本部・司令長官執務室

「 前任参謀、ですか……？」

「 そうだ、古代。」

今この場では言わんが、なるべく早く返事をしてほしいのだ」

「 はい………」

軍に復帰し、地球に戻ってきた以上、いずれは何らかの役目が
回ってくるとは予想がついていたが、後方に勤務した経験がない俺
が幕僚とは。

だが、引き受けるしかないだろうな。

戸惑いながらも、守は冷静に自分や軍、地球が置かれている状況を分析すると、この話は断れないと結論づけていた。

それに、スターシャとサーシャの事を考えれば、宇宙勤務はまだ時期尚早だろう。

それに。

『……白色彗星帝国との戦いで土方さんを始め、信頼できるベテランがかなり斃れてしまったもので、流石に長官も弱気になりかけてるんだ……』

真田と嶋津が異口同音にそう言ってたな。

しかも、暗黒星団帝国という新たな敵性国家や、時空管理局というあまり信用できない軍とも治安維持機関ともつかない大勢力……。前者は明らかに敵。後者は、宇宙戦力は大したことではないが、ワープとも異なる長距離航行能力を持つ宇宙船を保有し、相当数の惑星国家にまたがる軍事・警察・司法を司る存在だ。

地球人から見ると些か信用ならない組織ではあるが、暗黒星団帝国の懸念がある現状では、時空管理局とまで敵対するのは避けたい。向こうに付け込ませないためにも、今こちらで預かっている3人のお嬢さん達の身辺の事も考えねばなるまい。

昨日、某先輩が余計な事を言ってくれたおかげで、フェイト・T・ハラオウンがクローン人間だった事実まで耳に入ってしまった。

嶋津の奴が暴走したのをきっかけに、喧嘩腰でかけ合ったので、彼女達を吊るし上げるような事態は免れ、長官も箝口令を敷いてくれたが、どこから情報が漏れるかわかったものではない。彼女達の扱

いもきちんとしなければならぬ……。

それともう一つ、重要な事があるんだったな。

「長官、いつまでも宿舎住まいというのも、スターシャ達にも、何より横須賀に出張してくる者達にも不便です。」

それに、スターシャも一日も早く地球の一員になることを希望していますし、もちろんサーシャも、地球人として生きていってもらうつもりです。」

そのためにも、一般の官舎なり住宅なりに引っ越す必要があります」「……その件については私に腹案がある。軍務局の中島に任せてあるので、相談して進めてもらいたい」

「わかりました。」

それと長官、今回のお話、承りました」

藤堂の表情が綻んだ。

「そうか。引き受けてくれるか、古代!？」

「はい。微力を尽くします」

「うむ、頼んだぞ!」

13TF預かりの身だった古代 守が、2202年元日付で防衛軍司令部付先任参謀職に就任する人事が発表されたのは、それから3日後の事だった。

第107話『近況報告』（前書き）

今回はクロノサイド？からの話です。

平板だ……

第107話『近況報告』

時空管理局・次元航行本部

コンソールに着信を知らせるシグナルが点灯し、アラーム代わりの着信メロディが流れる。

着信メロディは艦船毎に設定されていて、少し慣れたオペレーターならディスプレイを見なくても、どの艦船から着信したのかわかるのだ。

ところが、この時の着信メロディーは聞き覚えがないものだった。

勇壮なその曲は、クロノ・ハラオウンなら『ワルキューレの騎行』と答えたのだろうが、地球の音楽に触れた経験がない彼女には、当然ちんぷんかんぷんだった。

(?????!?)

戸惑いながらも発信相手を確認した彼女の表情が驚きの表情になる。すぐに回線を繋ぐと、画面にはフェイト・T・ハラオウン執務官とティアナ・ランスター補佐官が映っている。

『……フェイト・T・ハラオウン執務官及びティアナ・ランスター執務官補です。』

クロノ・ハラオウン提督は在室中でしょうか？』

2人の後ろには、先日の通信の時にも同席していた女性艦長らしき人物もいて、こちらをガン見して……いるわけではなかった。

(……次は『ダース・オイダーのテーマ』か『〇ってきたヨッパライ』にするかなあ)

件の女艦長はそんな事を考えていた。

「い、今お繋ぎしますっ?」

オペレーターはアワアワしながらも通信をクロノに繋ぐ。

ハラオウン提督執務室

「2人とも、元気そうだな……。もう地上に降りたのか?」

『うん……。3日前にね。すぐシャリーも検査してもらったよ』

「そうか、で、容態はどうだ?」

『うん……。確実に良くなっているけど、内臓の傷が癒えて艦に乗れるようになるには、あと2ヶ月は療養とリハビリが必要だっ……』

「そうか……」

転送ポートがない以上、次元航行艦で迎えに行かなければならないが、早くても再来月か……。

内臓まで傷ついていたのなら、2ヶ月で治れば儲けものだな。

しばらく双方の情報を交換してから、冴子も話に加わった。

「重ね重ね有難うございます、嶋津艦長」

『何の。船乗りの務めというだけですから、お気になさらず。』

……それよりも、今後の話をしましょうか』

冴子が持ちかけたのは、シャリオの回復状況報告を兼ね、定期的にこういふ通信のやりとりをする必要があるということ。

フェイトもティアナも、シヤリオを残したままでミッドに帰りたくないと言っているので、回復状況を知らせておけば、帰還の準備もスムーズになるという。

「……そうですね、おっしゃるとおりです」

高官の中には、エースたるフェイトだけでも先に帰還させろ、と言う者もいるが、フェイトは部下を異郷に置きざりにして自分だけに帰ることを潔しとしない。

それに、今後はあの世界 第197管理外世界「第2地球」

との関係が管理世界や時空管理局の動向に大きく関わってくるかも知れないのだ。もう一つの地球を見ておくのも決して無駄ではあるまい。

とは言え、常に連絡を取り合う事は大事だ。

クロノは冴子の提案を受けることにした。

「ところで、嶋津艦長、差し支えなければお聞きしたいのですが」「私に答えられるものならば構いませんが……」

クロノは、『ヤマト』と遭遇してから、ずっと持ち続けていた疑問を口にする。

「『ヤマト』をはじめとして、地球防衛軍の艦船はどのような動力源を採用しているのですか？」

ふむ、やはりそう来たか。

しかし、知りたいと思うのは当然だろう。

こっちでは、詳細はともかく、波動機関やタキオン粒子の存在は子供だって知っているし、中学では物理の授業でタキオン理論も教え

ているから、特に秘密にすることではない。

『……ハラOWN提督は、タキオン粒子をこ存じですか？』

「無限に加速する物質という概念は知っていますか…。」

まさか、そのタキオン粒子は実在するのですか！？」

『基本技術はイスカンドルから齎されたものですが、現在は我が軍の宇宙艦艇の大部分や一部の宇宙船舶に搭載されています』

「そうですね…。しかし、そんな事を我々に話してもよろしいのですか？」

『タキオン粒子は子供も知っていますし、基本理論は義務教育課程で教えています。』

それに、もっと進んだ技術を持っている軍事勢力も存在しますからね』

……それに続いて白色彗星帝国軍の兵器データを一部提供し、更に週に1度 何と、ミッドチルダの時間概念は地球と殆ど変わらないらしい、シャリオ・フィニーノの回復状況とフェイト、ティアナの現状報告を兼ねて定時連絡をすることで合意し、通信を終えた。

通信を閉じた後、クロノはふうと溜息をついた。

フェイト達の顔色は良さそうだ。

向こうの待遇は真つ当なようだし、シャリオ・フィニーノも着実に回復している。

3人については取り敢えず大丈夫だ。

しかし、地球防衛軍艦船の動力源が、まさかタキオン粒子とは。

どこの管理世界でも、実用化どころか、理論すら確立されていない。それもそうだ。医学等の一部の分野以外では、科学技術はさほど進

歩していないのだ。

(管理世界の平和のための質量兵器禁止が、科学技術の進歩の芽を積んでしまっているというのか…?)

あの白色彗星帝国軍のような軍事的脅威に対抗するには、現行の艦船が全く役立たずなのはいやというほど思い知らされた。

それに、地球側から提供された白色彗星帝国軍の兵器情報には宇宙戦闘機や大型攻撃機も含まれていて、これらは大気圏内でも行動可能という。恐らくは超音速、極超音速で飛行できるだろう。

スカリエツティの航空ガジェットドローンとは訳が違う。

とてもじゃないが、あんな兵器が相手では、なのはやシグナムといったエース級の空戦魔導師でも対抗できない。

「上にどう説明したのか……」

クロノは、今の映像を記録したメディアを手にすると、一つ溜息を吐いて立ち上がった。

地球防衛軍司令部

「……引越し?」「」

古代 守から本部付先任参謀に就くことと、今の宿舍を引き払う予定である旨を、冴子と真田、大山に話した時、3人は異口同音に言った。

3人とも、守が先任参謀になる事には全く驚かなかったが、宿舍を引き払うことには疑問を呈した。

そもそも、適当な引越し先がすぐ見つかるのか?

スターシャとサーシャの身边を考えれば、セキュリティがしっかりした防衛軍施設内に限られるし、地球の暮らしに慣れるまでの間は、誰か指南役が必要だろう。

と、冴子も気づく。

「と言うことは、フェイト達の寝床も考えなければな……」

スターシャ達が宿舎を引き払う以上、フェイトとティアナがあの宿舎に留まるのは難しがる。

かと言って、軍の施設に入居させるのも今イチだ。

(あのクソ野郎みたいな輩もいるしなあ……)

フェイトの出自が軍の一部に知れ渡っている以上、箝口令があっても隠し通せるものではない。

せめて、向こうに帰るまでの間はなるべく平穏に過ごさせてやりたい。

「中島さんに相談してみっかな……」

冴子は1人ごちながら洪茶を啜った。

第108話『お引越(1)』(前書き)

また少なくて平板です……。

映画版なのは見た雪菜と17歳版サーシャ。

「2人とも凄いですね。」

……ただ、その都度詠唱する必要があるのかな……?」

「そうだね。雪菜ちゃん、無言でいきなり『転移直撃砲』撃つもんね」

「思念リンクだからね。」

サーシャも、デザ○アム」では相当暴れたと聞いてるけど?」

第108話 『お引越(1)』

地球防衛軍本部・軍務局第2課

「……………今、何と?」「」
「俺達と同じフロアだ」

軍務局第2課長のポストにある中島龍平の回答に、古代 守・嶋津
冴子・真田志郎は目を点にした。

藤堂司令長官から、守達の新居の手配を任されているという中
島の元に行き、仔細を尋ねたところ、開口一番で答が戻ってきた。
ということとは……………。

「よりによって、お前とご近所さんかよっ!!??」(x2)

守と冴子は顔を見合わせ、嫌そうな顔つきに変わる。

「雪菜ちゃんはともかく、世帯主がマダオだからなあ」
「カミさんと娘はいいがよ、亭主がアレだから……………」
「……………お前ら、自分に嫌気がささないか?」

憎まれ口を叩き合う守と冴子に真田がツッコんだ。

「……………お前達、ほんとに呼吸が合うな」
「誰が!?!」(x3)

20代にして宇宙戦士訓練学校の事務長代理を務めた経歴を持つ中島は片頬を持ち上げる。

彼が訓練学校の副事務長、事務長代理だった頃、守・冴子・真田・大山ら「華の90年組」が在籍し、「鬼方」こと土方 竜を中心とした教官達の一際厳しい訓練と、負けじとばかりに訓練生達が引き起こした騒動は数々の伝説として、今なお語り草になっているのだ。

彼らの期は、目の前にいる3人を初めとして、訓練・座学とも平均成績はかなり良かったのだが、どこか変な連中が多かった。

そして目の前にいるこの3人がリーダー格だったため、教官から『バカラス3馬烏』と言われたほどだ。

「スターシャ陛下が地球の生活に慣れるまでの間、指南役が必要だろっ？」

それをウチのカミさんにやらせようと思っただが。

……お前ら、随分力強く頷くな」

「そりゃもう。

先輩はともかく、真理亜さんは最高の指南役ですから」

「そうそう」(x2)

真理亜さんこと中島夫人は、日仏混血で夫より4つ下の35歳。

9歳と6歳の一姫二太郎の母親だが、冴子曰く

『オーベルジュ・ド・マリア』

真田曰く

「ソイグルテンミート（大豆蛋白製の代用肉）をイベリコ豚に変えてしまう」

と言わしめるほどの料理上手で、雪菜も弟子入りしているのだが、冴子や真田も、何だかんだとご相伴たかりに与っては、全く遠慮せずおかわりしている。

「指南役はいいとしても、セキュリティはどうするんですか？」

冴子が疑問を口にする。

仮にも高級士官の集合住宅だ。セキュリティは普通のマンションを遙かに上回るが、スターシャとサーシャも住むとなれば、一層厳重にしなければならぬ。

しかし、今の住人達に負担をかけるのもよろしくない。

「それは俺に任せてもらえますか？」

今の入居者の負担を増やすことなくセキュリティを強化してみます」

と、誰がのたもつたのか、今更であろう…。

時空管理局本局・次元航行本部

クロノ・ハラオウンはフェイト達からの連絡映像データを高官達に見せていたのだが。

「タキオン粒子だと？」

馬鹿な。管理世界のどこも実証はおろか理論すら確立されていないのだぞ！」

「ブラフに決まっている！」

(……これだ。これだから嫌だったんだ……)

次元世界積極拡大派の高官の反応は予想どおり

「しかし、現実には彼らの艦船の方が遥かに強い。タキオン粒子云々は別にして、かの世界の探査は慎重に行うべきです。」

無理をすれば『レオニダス』の二の舞ですぞ！」

以前に比べると慎重な意見が増えてきている。

これだけ次元航行艦がやられれば、嫌でも現実的にならざるを得ない。

(……まあ、ブラフというのは当たっているな。

今の我々の艦船ではお話にならないからな。下手にちよっかい出したら死ぬよ、と言下に警告したんだろう)

うんざりする一方で、クロノは冷静に分析もしていた。

以前よりは現実的な意見が増え、この映像を三提督にも見せるべきだという意見が出、過半数が賛成したため、途中で握り潰されることはなくなった。

また、第197管理外世界方面への探査 「第2地球」の座標は

未だ不明のため についても、安全度が低く時期尚早の意見が多く、当面は見送りとなったため、クロノは胸を撫で下ろした。

強行して先方に発見されれば拿捕抑留。最悪撃沈されても仕方ないのだ。

「ハラオウン提督、ちよっといいだろうか？」

会議室を出たクロノに、数人の提督が声をかける。

皆、次元世界拡大には慎重な意見を持つ者ばかりだ。

「さっきの映像、もう一度見せてほしいのだが……」

クロノは僅かに顔を綻ばせて頷いた。

第109話『お引越(2)』(前書き)

タイトルお引越なのに、まだ荷物運び出してない……。

第109話 『お引越(2)』

2001年12月21日

地球防衛軍新横須賀基地内・高級士官用宿舎

クリスマスを数日後に控えたこの日、フェイト・T・ハラオウンとティアナ・ランスターは、自分達に宛がわれていた部屋の片付けをしていた。

同じフロアで起居していた古代 守一家が新居に引っ越すことになり、この宿舎を引き払うことになったのだが、合わせてフェイト達も引っ越す事になった。

そして、フェイト達の引っ越し先は身元引受人の1人である嶋津家。聞けば、古代一家とは同じフロアだという。

因みに、シャリオ・フィニーノが入院している軍病院からも徒歩数分である。

「嶋津艦長達に感謝すべきなんでしょうね、私達……」

荷物をまとめながらティアナが言う。

先日の防衛軍本部での会談は、2人にとって居心地がいいものではなかった。

本来なら庇護下にあるべき10歳そこそこの少年・少女を武装隊員にし、危険な任務に投入することもある時空管理局に対し、地球防

衛軍本部の軍人達の目は厳しく冷淡で、中には露骨な嫌悪の目を向けてくる者もいた。

こちらにはこちらなりの事情があるのだが、地球防衛軍側の認識を改めさせるほどの説得力はなく、フェイト達はいたたまれない思いをしたが、それがこの世界の常識なら受け入れるしかないのだ。

とはいえ、それで自分達の待遇が悪くなることはなく、行動が規制されることもなかった。

むしろ、撮影・録音禁止の場所等はあるが、それは自分達に限ったことではなかった。

それに週1とはいえ、本局と交信もさせてくれるのだから、寛大といえば寛大だ。

どうやって次元通信装置を運用しているのか等、知りたい事は山ほどあるが。

あの後古代 守から聞いたが、冴子と真田は自分達の事で、本部と喧嘩腰でやり合ったらしい。

『ヤマト』『相模』のクルー達だって、恐らく時空管理局には不快感を持っているだろうに、それをおくびにも出さず、個人攻撃はしないでいた。

自分達にとつてはありがたい事には違わないが、そんな事をして睨まれないのだろうか？

守に聞いてみたが、

「あいつらはもう十分睨まれてるからなあ……」

と笑って言ったものだ。

先の白色彗星帝国との戦闘に先立ち、真田達は『ヤマト』で軍命令に反逆してまで発進し、冴子は『ヤマト』の反逆を知りつつ阻止行動をとらず見逃した。

問題にならないはずがないのだが、結果として『ヤマト』の強行発進がなければあっさり地球は敗れていたことが証明されたのと、地球防衛軍の壊滅的人手不足のため、上も粗略には扱えないのだとか。

まあ、あいつらは、良く効くが副作用も強い劇薬なのさ。ともつけ加えたが。

もう一つ、スターシャが後見についていることも、彼女達の身分の安定に寄与していたのも確かだ。

地球の恩人がバックについている以上、地球防衛軍や政府内部で妙な事を考える者がいても、フェイト達には手を出せないのだ。

「確かにあの人達には感謝しても足りないけど、それで変に意識することは無いと思うし、それはあの人達も望んでないと思うな。

それよりも、今後の事の方が大事だよ。ティアナ」

「そうですね…」

フェイトとティアナは、シャリオ・フィニーノが回復するまでの間、嶋津家に滞在するのだ。

「あの」嶋津冴子の私生活が全く想像できない2人は興味半分、不安半分だが、もう一つ、魔導師として無関心でいられないのが、冴子が保護責任者を務めているという少女「高町雪菜」の存在。

この世界の地球を覆うAMFならぬ『アンチ・マギング・エアAMMA』でも、なのはやフェイトに匹敵する魔力資質を持つのだ。

しかも高町姓で名前の意味も近く、容姿まで似ており、「もう1人のなのは」と言ってもいい存在だ。

1〜2ヶ月の間嶋津家に同居するため、その間は彼女の世話になる。仲良くなるに越した事はないし、何より彼女には魔導師資質がある。放置してはおけない。

本人は自分にその資質があるのを知っているのか？ 術式は？ デバイスは？

ひよつとしたら管理局が存在を把握していない魔法なのかも知れないのだ。

「でも、あの子が魔導師だったとしても、周囲にその事を知られていなければ何のことはないんですけどね」

「そうなんだけどね……」

嶋津冴子や友人と一緒にの様子を見ているも特段の問題はない。魔導師であることを知られていないか、そもそも本人が知らないままなのかはわからないが……。

管理局規則では管理外世界で魔導師資質がある者の存在を把握した場合、管理世界からの不法渡航者でない、つまりその世界で生まれ育ち、魔法の事を知らないでいる者に対しては、基本的には干渉しないことになっている。

但し、魔法を悪用したり、その恐れがある者については、たとえ管理外世界の住民であっても、一時的に身柄を拘束した上で、記憶の一部と魔力を永久封印する魔法医学的措置を施す事がある。

まあ、雪菜についてはそういう懸念は限りなく低そうだが。

「まずは、彼女と馴染む事が肝心だよ。管理局員としてではなく、1人の人間として、ね」
「はい」

時空管理局本局

クロノから、フェイト達からの近況報告通信が届いたとの連絡を受け、高町なのは、シグナム、ヴィータ、グリフィス・ロウラン、ルキノ・リリエの5人が本局の1室に集まった。

「済まないな、皆それぞれ忙しい身なのに」

入室するやクロノが詫びるが、皆、顔を横に振る。

「全然、フェイトちゃん達の事だもん」

「私は長期任務でミッドを離れていたからな。」

遭難後のテストロッサの通信を見るのは初めてだ」

「フェイト達、ちゃんと飯食ってるのか、よく確認しねーとな」

「この前の通信では元気そうでしたから、多分大丈夫だと思いますけど……」

「……まあ、とにかく見てくれ」

映像の再生が終わった。

なのはとルキノは目を潤ませ、シグナム達もとりあえず安心した様子だ。

「…予想以上に明るい表情だったな」

「ああ、向こうの待遇も悪くねーみたいだ」

ここでルキノが率直な疑問を口にした。

「……ところで、この通信はどうやって行われたんでしょう？」

捜索隊が置いていった通信ポッドが細工されていることがバレて、逆におちよくられたんですよね？」

「ああ……」

クロノが苦い顔つきになる。

「その話は私も聞いた。

つまらん小細工をする奴らも奴らだが、向こう（ヤマト）の方が一枚上手だったようだな……」

「ああ。向こうにはかなりできるエンジニアが乗っていたようだ。

……頭に來てるだろうに、おくびにも出さず、ちゃんと通信させてくれているんだからな。

全く、とんだ失礼なことをしてくれたよ」

クロノが思わずばやきを口にした。

「…それにしても、嶋津という女艦長、確かにヴィヴィオを大人にしたようなツラだな。」

右の頬つぺたの傷がなければ結構いい女なのにな」

「そうですね。同じ女性艦長でも、リンディ統括官ともまた違う雰囲気……戦闘的な人でしたね」

ヴィヴィオと似た顔つきではあるが、まだ新しい右頬の傷と鋭い眼つきが最前線の死闘を想像させる。

「管理局では想像できねーけど、宇宙戦艦同士の殴り合いって、一体どんな戦いなんだろうな……」

「これまでは生存者がいなかったが、テストロツサ達が戻れば、その一端だけでもわかるだろう。」

……それにしてもタキオン粒子とはな。

あの艦長が嘘を言っているとは思えないが、事実とすれば、管理局の艦船と向こうの世界の艦船では、少なくとも通常空間では絶望的な性能差があるな……」

「しかも『レム』の残骸を調査されたようですから、相当なところまで調べられたかも知れませぬ……」

ルキノの発言が増える。

管理局きつての艦船マニアとしての興味……だけではなかった。

「まあ、あの時は互いの存在を認識していなかったからな。不審な遭難船として調査されても文句は言えないさ。我々が向こう（地球防衛軍）の立場ならそうしているからな」

「でも……、純粹な軍事技術は向こうの方が上なんですよね。」

次元航行能力を持った『ヤマト』や『相模』クラスの戦艦を建造されて、万一向こうと戦闘状態になったら……。

艦隊単位であの戦略砲（波動砲）を撃たれたら、ミッド自体が消滅しますよ……」

「極論すればそうなるな。戦艦1隻のあの戦略砲で、本局は簡単に焼け落ちるだろうな。」

だからこそ、向こうとは事を構えたくないんだが、全次元世界管理に意欲を燃やすお偉方もいるんでね……」

「世界が違うとはいえ、地球の人がそんな事をするとは思えないけど……」

希望、否、願望を口にするのはにクロノは、

「それは僕も同じさ。

でも、戦争はちよつとした行き違いからでも始まるからな。

ましてや管理局は、向こうの地球の座標を掴むためとはいえ、挑発するような事をしているからな…。ホント、困った事をしてくれたよ」

クロノの苦悩が止むのは、果たしていつになるのやら……。

第110話 『お引越(3)』 (前書き)

3連休最終投稿です！

第110話『お引越(3)』

新横須賀市・地球防衛軍高級士官官舎

A105棟2階。

このフロアに嶋津冴子と中島龍平の世帯があるが、挟まれていた1区画が空き部屋になったため、ここに古代 守、スターシャ、サーシャの3人が急遽移転することになり、フロアには軍指定の業者が出入りして工事にかかっている。

セキュリティ装置に至っては、真田志郎と彼が率いる『ヤマト』工作班が設置に来るといって徹底ぶりだ。

その喧騒を横目に、嶋津家では留守宅を預かる高町雪菜が部屋の片付けにかかっている。

冴子と雪菜が1室ずつ使い、半ば物置と化しているもう1室 1番広い部屋 を客間にするこゝになり、置かれていた荷物を自分と冴子の部屋に運び込み、ホコリを払わなくてはならないのだ。

荷物といつても、この部屋にある冴子の荷物は、3月に入居した時に運び込んだまま、箱詰めされたまま置かれていたため、移送するのにはさほど手間はかからないのだが。

フェイト・T・ハラOWNとティアナ・ランスターという異邦人をしばらく住まわせたいという考えを冴子から打ち明けられたのは、『相模』がイスタンダルから帰還した3日後、入浴後、ソファ1でぐだらぐだとしてゐる冴子の肩を、ヒーリング魔法を付加しながらマッサージしている時だった。

驚かなかつたと言えは嘘になる。

期間限定とはいえ我が家に住まわせる2人が、ミッドチルダという、

正確な場所すらわからない惑星の住民で、容姿・言語体系等は、自分達地球人と見分けがつかない程共通に近いこと。確かに、写真を見た限りは、肌の色や顔立ち、姓名等、自分達と全くといっていい程変わりない。

敢えて言うなら、フェイトという年長の女性の瞳が紅いことと、ティアナという年少の方の女性の髪がオレンジ色ということくらいか。そして何より、

「この2人は、雪菜と同じく魔法が使えるんだ」

と言われた事。

「まだ詳しくは言えないが、とある治安組織に属している。

組織の事はよくわからんがね。一個人としては信用できると思う。

……それに、「一度、直接会わせてもらえますか?」「雪菜?」

その時の冴子は鳩が豆鉄砲を受けた時のような表情だった。

「百聞は一見に如かず、と言うでしょう?」

直接会ってみないことには何とも言えませんから……」

「わかった、明日の夕方でもいいか?善は急げだ。

…ピユア・ハートもそれでいいな?」

「はい」

『……承知した。カピタン（艦長）』

で、翌日の夕方、軍司令部での会談を終えたフェイト達と宿舎の前で対面して直に話した結果、

「艦長、フェイトさんとティアナさんの件、私はOKです」

『私はレディの決定を尊重する』

雪菜とその相棒の賛同も出、非公式ながら、地球人と地球外惑星人類との同居生活が決まった。

（ガミラスとの戦争で皆亡くなっちゃって、中島さんの紹介で冴子さんつ暮らす様になってからも色々あったけど、こういう事になるなんてね…）

冴子の部屋に荷物を置いた雪菜は、彼女の机上にあった写真立てを手にしていた。

写真に写っているのは、まだ2歳に満たない自分を抱いている父と母に姉、兄と祖父母。

それに家族ぐるみの付き合いだった嶋津家の初老の夫婦と、まだ宇宙戦士訓練生だった冴子の計10人。

あれから11年余り。

現世にいるのは自分と冴子だけになってしまったのが……。

「こつちの世界は、まるでジェットコースターみたいに退屈しないよ。皆……」

雪菜は苦笑するように、もう物言わぬ家族に語りかけると、再び片付けにとりかかった。

同じ頃、地球防衛軍新横須賀基地・大型艦船発着場。

発着台座には1隻の戦艦が載せられていた。

『ドレッドノート』級の艦体に『アンドロメダ』級の艦橋構造物。

主砲塔は艦橋前の2基だけで、後ろには主砲塔とは異なる構造物が設置されている。

『ドレッドノート』級改指揮戦艦『アレクサンドロス』

人類史上屈指の霸王の名を与えられたこの艦の役割は、地球防衛艦隊の総旗艦。

今日はその竣工式で、藤堂長官をはじめとする軍高官が出席。また、新横須賀基地に停泊している戦艦・巡洋艦艦長クラス以上の士官にも出席指示が出ていた。

連邦大統領ら政・財界人が多数が出席した『アンドロメダ』の時と違い、政・財界人の出席は最小限に抑えられていたのは時節柄というものだ。

『アンドロメダ』は余りにはかない生涯ながらも良好な運用実績を収めたが、建造コストが『ドレッドノート』級主力戦艦の2隻分に達し、白色彗星帝国との戦争で、ネームシップ『アンドロメダ』以下多数の艦船と宇宙戦士を失った地球防衛軍は、今は艦艇の数を揃えることが先決で、金食い虫である本級の2・3番艦『ネメシス』・『シリウス』の建造は、キャンセルこそされなかったが、実験艦名目の『マルス』の着工との引き換えで凍結されてしまった。そのため、当面の急場に対応するべく、『ドレッドノート』級第47番艦『アレクサンドロス』の設計を一部変更し、『ネメシス』用の艦橋部とアビオニクスを組み込み、さらに自動艦艇の制御施設も増設したのだ。

但し、『アンドロメダ』級の規格で設計されていた司令部施設を運用するためには、『ドレッドノート』級の機関出力ではエネルギー

供給能力不足になるため、第3主砲塔をオミットして対処した。他の同型艦と比べると攻撃力がやや劣るが、それは他の艦艇が共同して補えばいい。そのコンセプトの元に『アレクサンドロス』は竣工したのだ。

とはいえ、『ネメシス』・『シリウス』等、正規の指揮戦艦が竣工するまでの話なのだが。

冴子はその式典を横目に、ドックに収まり修繕作業を受ける『相模』の工事事務所に詰めていた。暗黒星団帝国艦隊との戦闘で受けた損傷は艦内部に達するものではなかったが、被弾範囲が意外に広く、両舷装甲板の半分強は交換しなければならなかった。

敵旗艦と殴り合った『ヤマト』ほどではないが、中小規模の被弾数は『相模』の方が多かった。

左隣の修繕ドックでは『ヤマト』が同じく修理作業中だったが、右隣の建造ドックでは、見た事がない艦体のモジュールが鎮座している。

「あれは、何でしょう?」

隣にいる南部重工から出向している工事監督に尋ねてみる。

「私も正確な事は聞いていませんが、新型の大型自動戦艦らしいですね」

「そうですね……」

モジュールを見る限りでは『相模』はもちろん『アンドロメダ』を

も上回る大型艦らしい。

それが『クレイモア』級大型自動戦艦のネームシップだと知ったのは、約2ヶ月を経過した後だった

第111話 『お引越(蕎麦) (前書き)』

お引越の話は今回でおしまいです。

第111話『お引越（蕎麦）』

地球時間 2201年12月22日・古代家

リビングには古代 守一家3人、フェイト、ティアナを含む嶋津家の4人と中島家の一家4人の計11人が顔を揃えていた。

壁には、

『おかえり&ようこそ&クリスマスパーティー』

と、雪菜&中島家ジュニア達の手で書かれた紙が貼られている。

この日、半日以上を要して守一家とフェイト達の引越しと家具搬入作業、セキュリティ装置のセッティングを行った。

作業要員は山崎を除く『ヤマト』第1艦橋メンバーと『相模』の大村・幕之内だが、真田と冴子が半ば強制的に徴発した。宇宙戦士訓練学校の先輩特権で有無を言わず。

南部に至っては、ガールフレンド(?)達の目の前で冴子と太田に捕捉され、半ば拉致同然に連れ去られた。

同伴していたガールフレンド(?)達は、冴子と目が合った途端にガタガタ震え始め、それを見た冴子は、右頬にカムフラージュパッドを貼り忘れた事を思い出して後悔する羽目になった。

「……相変わらず無茶やるなあ。嶋津さんは」

「いきなり間近で見たら、普通の人達はビビりまくるだろうなあ。

あの傷がなきゃ、文句なしの美人なのに」

「あ、あははは……」

徴発の一部始終を見ていた古代進と島は呆れた表情を浮かべ、フェイトとティアナは引き気味に乾いた笑顔を浮かべるしかなかった。

「持つべきは良き後輩達だな」

とうそぶいたのは、真田でも冴子でもなく、最年長の中島龍平だった。

もつとも、昼食は中島家の真理亜夫人＋雪菜謹製のカレーライスで、これを楽しみにしていた『ヤマト』の若者達は、半ば奪い合うように食べて大鍋を空にし、冴子ら年長組を呆れさせ、フェイトとティアナは再び啞然としていたのだが。

そして夜、サーシャ以外の面々の前には「かけ蕎麦」が盛られた丼が鎮座し、テーブルの中央に薬味と各種天ぷらが盛られた大皿が置かれていた。

本来ならクリスマスケーキとローストチキンなのだろうが、今回は古代一家とフェイト・ティアナのお引越終了を優先し、まずは「引越蕎麦」にしたわけだ。

何もかもが初めてのスターシャは興味津々で目の前の丼と大皿を見比べ、守に質問している。

また、蕎麦を知っているフェイトとティアナもやはり興味深そうに見ていた。

「では」

冴子が口を開く。

「様々な偶然と巡り合わせで、地球・イスカンドル・ミッドチルダ。3つの星の面々がこうして一堂に会することになりました。直接のきっかけは凶事でしたが、何事も命あつての物种です。我々生き延びた者は、不幸にも命を落としてしまった人達の分まで、たとえ無様でも、前を向いて生きていきましょう。皆さん、かなりお腹空いていると思うので、以上！」

続いてホスト役の中島龍平の音頭で乾杯し、一同は箸を取った。

「日本育ち」のフェイトは器用に、ミッドで地球の日本料理を口にしているティアナも支障なく箸を使っている。

そしてスターシャも、守からレクチャーを受けていたからか、幾分覚束ないものの、箸を使えた。

食事が済み、中島家の子供達が雪菜、ティアナと共に別室に移ると、フェイトを含む大人組はリビングでコーヒー／茶を手にしながらしばしの歓談だ。

フェイトへの質問はミッドチルダでの暮らし向きや「執務官」の仕事の事だった。

それが一段落すると、今度は守から冴子に質問が飛ぶ。

「独立第13戦隊（13TF）って何なんだ？」

戦艦の艦長になって間もないお前が総指揮官になるわ、ワンオフの『ヤマト』と量産型戦艦が組むわ、横紙破りもいいところじゃないか？」

「……………それこそ土方さんに聞いてくれと言いたいところなんだがなあ……。」

言っちゃ何だが、結成の経緯からしても、胡散臭さでは地球防衛艦

隊随一さ。

白色彗星の連中が予想以上に早く押しかけて来て、『相模』を艦隊に編入できなくなったから、艦隊行動がとれない問題見同士で組ませたんだろうなあ」

守の疑問に冴子が推測を交えて答える。

「……とは言え、あくまで白色彗星帝国に備えての時限措置だった筈なんだがなあ……」

白色彗星帝国との短くも激しい戦争が終わり、紙一重で地球防衛を果たした時点で、13TFの使命は終わったと冴子は考えていた。

しかし、解隊どころか新人の訓練航海任務を割り振られ、さらには新人達を乗せたままイスカンドルにまで遠征してしまったのだ。

無言で聞いていた中島が口を開く。

「……だがな、ヒヨッコ揃いだった『相模』は、『ヤマト』や僚艦とともに白色彗星帝国との死闘をくぐり抜け、さらにイスカンドルまでの往復30万光年の航海と戦闘を、1人の戦死者も出さずにこなし、古代とスターシャ達を連れ帰って来た。

好むと好まずに関わらず、『ヤマト』は元より、『相模』も今や有力な中核戦力だ。

お前さんや『ヤマト』の連中を厄介払いしたいお偉方だって、これだけの実績を前には何も言えないだろうさ」

「……そもそも、何で私が、よりによって戦艦の艦長になったのか、未だに解らないんですかねえ……」

ぼやくように言う冴子。

宇宙戦闘機と突撃駆逐艦でガミラスと戦ってきた冴子にとっては、駆逐艦や巡洋艦の快速と機動性を活かした中、近距離での砲雷撃戦こそが真骨頂であり、攻防力が高くとも、機動力で駆逐艦や巡洋艦に劣る戦艦に乗るのは、必ずしも本意ではなかった。しかし、中島がさらに追い撃ちをかける。

「そりゃ、土方さんがお前さんを『長門』に呼び寄せた時点で決定事項だったんだろう。大型艦の経験も積み、という事さ」

「そんなものですかね……」。

まあ、任されている間はとことんやりますよ。

こんな不良艦長についてきてくれるクルー達のためにもね」

そこに真理亜夫人がデコレーションケーキを手にキッチンから出てきたので、フェイトが子供達を呼び戻しに行った。

第111話 『お引越（蕎麦）』（後書き）

次回、遂に冴子VSなのは（笑）

第112話『ビフォー アフター』(ヴィヴィオ 冴子) (1) 『(前書き)』

なのはと冴子の初対面その1です

第112話『ピフォーア　アフター（ヴィヴィオ　冴子）（1）』

時空管理局本局

一室に集いたるはクロノ・ハラオウン提督、高町なのは一等空尉とヴィヴィオ、スバル・ナカジマー等防災士、エリオ・モンディアル、キャロル・ルシエ両二等陸士の6人だ。

エリオとキャロルは自然保護隊の休暇で、昨夕から高町家に逗留しているのだが、第197管理外世界　時空管理局名称・第2地球で、現地の軍に保護されているフェイト達からの定期通信日に重なったため、なのは達とともに本局にやってきたのだ。

指定された時刻まであと5分を切ると、クロノ以外は皆緊張を隠せずソワソワし始めた。

その時、スクリーンが明滅して、地球のテレビ局のテストパターンのような画面が映し出された。そして、スピーカーから音楽が流れ始めたのだが。

”　にしからのぼったお○さまが、ひがし〜にしず〜む〜”

「……………あつちの世界にもこの歌が存在するのか……………orz」
「にゃ、にゃははは……………」

「…なのはママとクロノてーとくは、この歌を知ってるの？」

「……………」
「……………」

”　あかでスタート○でダッシュ。そして、じこなの〜だ〜”

全く緊張感がないその歌に覚えがあるクロノとなのはは力ない
笑いを浮かべ、他の面々は啞然とした表情を浮かべた。

「うーん、哲学的な歌詞ですね」

唸るスバルに、皆は引き攣った笑いを浮かべる。

何とも変なその歌がフルコーラス流れ切ると画面が再び切り替わり、
フェイトとティアナ。それに少し後ろに立つ2体の等身大サンタク
ロース人形が映し出された。

「フェイトちゃん！、ティアナ！」

「フェイトママ！ティアナさん！」

「……フェイトさん、ティア（さん）！」「……」

なのは以下のミッドチルダ組はフェイト達の姿を見た途端、もう涙
声になっていた。

『なのは、ヴィヴィオ、エリオ、キャロ、スバル……』

フェイトとティアナも、画面に映る近しい者達の姿を見て、双眸に
涙を溢れさせた。

双方とも泣くのが先に立って、なかなか話にならなかったが、付き
添い役であるクロノと、フェイト達の後ろの等身大サンタクロース
人形 実はサンタに扮した冴子と古代 守 が見守っていた。

（ふむ、この娘達は……）

冴子は画面に映る2人 フェイトがなのはと呼んだ女性と、ヴィ

ヴィオと呼んだ少女の存在に内心驚いていた。

「なのは」は、瞳と髪の色以外は雪菜の数年後と違っていい容貌。一方の「ヴィヴィオ」らしき少女に至っては、髪と瞳の色以外は自分の幼少期。当時の写真等はガミラスとの戦争で全て失われたに酷似している。

(なのはという娘といい、ヴィヴィオという娘といい、髪と瞳以外は雪菜ちゃんや嶋津と鏡写しじゃないか…?)

守も画面の2人を興味津々で見ている。

但し、守も冴子も殆ど身じろぎしておらず、画面の向こうの面々は、まだこちらにまで関心は向いていないようだ。

15分位経つただろうか、双方とも落ち着いたようだ。

「…そういえば、嶋津艦長の姿が見えないが、どうなさったんだ？」

向こうの世界におけるフェイト達の身元引受人である以上、直接話したいこともあるのだが……。
尋ねるクロノに、フェイトは苦笑しながら話す。

『うつん。さつきから私達と一緒だよ』

「一緒って、どこにも……。
……まさか……」

クロノはもしやと思い、視線をフェイト達の後ろに鎮座している2体のサンタクロース人形に移した。

その視線を受けるのを待ち構えていたかのように、突然サンタクロ

「ス人形が動いた。」

帽子を脱ぎ、顔を覆っていた白鬚を外すと、嶋津冴子ともう1人、30歳前後の男が現れた。

帽子を脱ぎ、顔を覆っていた白鬚を外すと、嶋津冴子ともう1人、30歳前後の男が現れた。

「え？ええ！？」

サンタクロース人形が突然動き出したかと思うと帽子を脱ぎ白鬚を剥がし、映像で何度か見た女艦長と、見たことがない同年輩の男に早変わりしたのだ。

なのは達はもとより、クロノも呆気に取られた。

「いや、驚かせて済まないね（笑）」

ものの数秒でサンタクロースから地球防衛軍の艦長服姿になった冴子が破顔一笑する。

隣では同様に、高級士官らしい制服姿に早変わりした男も笑顔を少々呆れた色混じりだが 見せていた。

（てつきりサンタ人形だと思ってたのに、ずっと微動もせず立ち続けてたの？この人達は ！？）

なのはは元より、スバル、エリオ、キャラも驚きを隠せずにいる。

（いや、正規の軍人なら、屋内戦闘等のために自分の気配を消す訓練は当然受けているだろうな）

一時の驚きから真っ先に我に返ったクロノは冷静に分析した。

（しかし、サンタクロースに扮してこの場にいたとは予想外だったが……）

『ハラオウン提督にナカジマー士以外とは初めてだったね。』

地球防衛軍所属、戦艦『相模』艦長、嶋津冴子です』

『同じく地球防衛軍所属、古代 守です』

冴子と守はさつと挙手の礼をしてみせた。

「時空管理局・次元航行本部所属、次元航行艦『クラウドディア』艦長、クロノ・ハラオウンです」

クロノは守に向かい、答礼する。

その様子を見て我に返ったなのは達も居住まいを直し、踵を合わせて直立した。

相手は階級こそ言わなかったが、大型艦の艦長ならば佐官か提督クラスであり、違う組織とはいえ、自分達より上官に相当する人物である。

「時空管理局所属・航空戦技教導官、高町なのは一等空尉です！」

「同じく、自然保護隊所属、エリオ・モンディアル二等陸士です！」

「同じく、自然保護隊所属・キャロ・ルシエ二等陸士です」

「ミッドチルダ港湾特別救助隊所属、スバル・ナカジマー等防災士でありますっ！」

エリオとキャロの自己紹介を受けた守と冴子は内心で嘆息する。

時空管理局には彼らなりの事情があるのだろうか、未来を担わせるべき子供を危険な任務に就かせ、あまつさえあんな惨い最期を遂げ

させた事実には不快感を禁じ得ない。
が、それを表情には出さずに彼らを見遣った。

さらに…。

「さ、貴女もご挨拶なさい」

と、なのはに促されたヴィヴィオも、

「た…高町ヴィヴィオです！

ザンクト・ヒルデ魔法学院初等科1年生です！！」

と、子供らしく元気な声で自己紹介してペコリとお辞儀したが、顔を上げるや、言葉を続けた。

「あ、あの……。フェイトママとティアナさんとシャリオさんを助けてくれて、ありがとうございます！！」

再び頭を下げる。

『どう致しまして、リトル・レディ。』

難破船を助けるのは船乗りの掟だからね』

拙いながらも、懸命に自分なりの礼を言う少女に、冴子もまた言葉と敬礼で応じた。

なのはもまた、画面の向こうに映る嶋津冴子に驚きを隠せなかった。

『ゆりかご』で対峙した聖王モードのヴィヴィオは外見年齢16〜17歳だったが、冴子は、髪と瞳の色が異なり、右頬に走る傷を除

けば、20年後のヴィヴィオを思わせる顔立ちなのだ。

『レオニダス』のブラックボックスに残されていたデータを解析したところ、彼女を部隊長とした『ヤマト』『相模』がガトランチス帝国艦隊を相手にした戦闘は短時間ながらも、苛烈かつ一方的であったことが判明し、なのは達は戦慄を禁じ得なかった。

ただ、実際に相對してみると、ざつくばらんな姐御という雰囲気でも管理局で囁かれている、好戦的な人物という印象は感じられなかった。

何より、年少である自分達を軽んじた様子はなく、ヴィヴィオに対しても對等に應じたあたりは、道理を弁えた人物なのだろう。

ただ、冒頭のあの歌や、サンタクローヌ人形に扮したりと、ファンキーな一面も持ち合わせているようで、案外そちらの方が地なのではないか？

等と思いつつ、なのはは冴子と相對する。

「先程ヴィヴィオも申し上げましたが、私達の同僚を救う手立てを講じて下さったことと、かけがえのない友人達を助けて下さいましたこと、本当に有難うございました……」

と頭を下げると、スバル達もそれに倣った。

冴子は軽く頷くが、

「……しかし、犠牲者の方が圧倒的多数だったのは事実なんだ。当事者として、ご遺族にはお悔やみ申し上げます」

と、なのは達に頭を下げた。

フェイト達も思わず俯いてしまったため、冴子は話題を変える事にし、隣に立つ古代 守を再度紹介する。

『で、改めて紹介しますが、こいつは私の同期で古代 守。職務上、今後ここに顔を出す機会が増えるので紹介します』

それを受けて、守が自己紹介する。

『では改めて。』

…… 嶋津の同期で古代 守です。

私は来週より軍本部勤務になりますが、嶋津は艦隊勤務でこちらに同席できない事があるので、次回からは原則として私がこちらに立ち会うことになりますので、よろしくお願いします』

と言うや否や、ビシッと拳手の礼をする。

つられて、クロノやなのは達も即座に敬礼を返した。

「あ、あの。一つお聞きしてもよろしいでしょうか!？」

『何かな?ナカジマ防災一士』

早速質問してきたのは、案の定(?) スバルだった。

「スバルとお呼び下さい。

それで、『ヤマト』の古代艦長代理と同じファミリーネームですけど、ご兄弟なんでしょうか?」

『ああ。あいつは弟だよ』

「そうだったんですかあ!」

スバルの表情がパアツと輝く。

（表情豊かな娘だなあ…）

守と冴子はスバルに同じ印象を抱いたが、スバルの次の質問には意表をつかれることになった。

「あの…。私、弟さんのファンなんですけど…」

と、胸ポケットから、古代 進の写真を取り出してかざしてみせた。これには一同呆気にとられ、守と冴子は苦笑。
そして。

『バ…、バカッ！』

スバル、あんたね、こんな時に何やってんのよっ！失礼にも程があるわよっ！』

ティアナは恥ずかしさも手伝って、機動六課時代の口調に戻ってしまった。

『いや、別に構わないさ。兄としては光栄に思うよ』

守は苦笑まじりにフォローするが、隣の冴子は真剣な表情を作る。

『……スバル。君の人を見る目は確かだ。それは私達が保証するよ』
「ホントですか!？」

『ただ惜しむらくは、当の本人は所帯持ち予備軍であることだ……』

許婚者の存在を示す冴子の回答に、

スバルは塩をまかれたナメクジ状態になった。

第112話『ピフォー アフター（ヴィヴィオ 冴子）（1）』（後書き）

そろそろ13TFスクランブル話も書かないと…。

ご提案いただいたオリキャラ（艦長・副長）は、今週末以降、順次決定しお知らせ致します。

なお、当初の予定を変更し、新僚艦3隻の艦長・副長は、全員をご提案のオリキャラから選出します。

第113話『ピフォーアフター(2)』(前書き)

タイトルと内容が全然噛み合わない。

そして短い！

1時間半後には仕事なのに、何してるんだ私！

なお、私は決してアンチなのではありません。

熱烈的ファンでもありませんが……。

第113話『ピフォーアフター(2)』

塩漬なめくじ状態になったスバルをよそに話は続くが、時間は容赦なく過ぎ、規定の30分になる。

地球防衛軍本部

「では、次回は8日後でよろしいですね？」

『はい。次回はこちらの上司も立ち会わせたいのですが、よろしいでしょうか？』

次回はこちらでは2202年の1月2日に当たる。

次は門松か鏡餅の扮装でもしてやろうかとも考えたが、次元航行本部の高官殿がお出ましならば、紋付袴と晴れ着にでもするか。

もっとも私(冴子)の場合は、恐ろしくシニールな事態になるだろうが。

「わかりました。では、また次回……」

通信を切り、冴子達は部屋を後にした。

喫茶スペースに向かう途中、フェイト達はパウダールームに寄る。戻りを待っている時、守が話しかけてきた。

「何難しい面してる？嶋津」

「……ああ。さっき少し話した、高町なのはという娘に、何とも言えない違和感を覚えてな……」

「なるほどな。実は俺もだ」

考える事は同じようだ。

『レム』から回収した資料の中でも何度か触れられていた、エースオブエース、魔王ノ白い悪魔、なる別称も奉られているらしい。高町なのは。

雪菜とは正しく鏡合わせのような存在。

しかも、魔法文化が存在しないはずの地球生まれに関わらず、有り余る魔力資質を持っているあたりも雪菜と同様だ。

しかし、満8歳から管理局の魔導師として活動していたという記録を見た時は、もう開いた口が塞がらなかった。

なるほど、彼女の実績は大したものなのだろう。

管理局が言うところの『次元世界』において、数多の事件や次元犯罪の解決に貢献し、さらに航空戦技教導官として後進の戦闘魔導師の育成にもあたってきたという。エースと言われるのも頷ける。

時空管理局、特に主流を占めている本局とやらでは、高町なのはとフェイト・T・ハラオウン。それに、なのはと同じく海鳴市出身という八神はやての3人がいれば、世界の2つや3つは簡単に救えると豪語している向きもあるようだ。

フェイトやティアナ達は、自分の生まれ育った世界を守るのだから良いだろう。

しかし、高町なのはの切り札という、魔力集束砲撃『スターライト・ブレイカー』は、果たして彼女が生まれ育った、あちらの地球の平

和や安定に寄与できているのか？懐疑的にならざるを得ない。

時空管理局は、管理外世界には干渉しないという建前（笑）だ。つまり、向こうの地球で紛争や戦争が起きようと、時空管理局は不干渉。

穿った見方をすれば高見の見物で、高町なのはや八神はやては、管理局員である以上、故郷や同胞に手を差し延べてはいけないということだ。

管理外世界での魔法使用は「原則として」禁止されているからだ。もともと、抜け穴もちゃんと用意されているようだが。

彼女達には彼女達なりの思いがあるはずだ。それは尊重する。

しかし、私（俺）達は、自分達の過去の痛みや失策を加味してこう考える。

自分の世界を守れない、あるいは守ろうとしない者が、他人の世界を守りきれぬわけがなからう。

こちらの地球が、2度の星間戦争で嫌というほど思い知らされた現実と教訓だ。

第113話『ビフォー アフター(2)』(後書き)

次回、緊急待機!? 出動!?

第114話『スクランブルだ！緊急発進』（前書き）

『ねこばん』を見ながらガルマン解放戦争のプロットを練ったりしていました。

今週末の更新はこれでおしまいです。

『鳥海』 『伊吹』 『水無瀬』 のオリキャラを決定せんと…。

第114話『スクランブルだ！緊急発進』

軍本部のヘリポートを発進したヘリには、守にフェイト、ティアナ。さらに冴子ら新横須賀基地かに戻る士官数人が乗っている。

機内は彼らが醸し出す緊張感で張り詰めていた。

（皆、殺気すら感じさせるほど緊張してるわ……）

冴子のような艦艇乗組員や基地幕僚とおぼしき服装の彼らは一様に殺気すら感じさせるほど緊張しているようだ。

守と並んで座っている冴子は、一見したところでは他の士官ほど緊張した様子はないが、いつもヨタ話ばかりしている人物とは思えぬ猛禽類のような 雰囲気をまとい、手にした端末に指を走らせている。

一方、守は時々冴子と二言三言交わす他は、腕を組み無言のままだ。

（やはり、この人達の本質は戦士なんだ ）

約30分前、ミッドとの通信を終え、一休みした冴子ら4人は本部を退出しようとしていたが、唐突に緊急警報のアラームが鳴り響いた。

『緊急連絡。 緊急連絡！』

『エリス』軌道シリウス回廊付近にて、白色彗星帝国軍艦艇複数の反応を確認。太陽系内への侵入を図る模様。

総員、第1級警戒態勢につけ。

繰り返す……」

放送に聞いた休憩中の本部職員が色めき立ち、持ち場にとって返し始めるが、若年者の中には慌てている者もいた。

「うるたえるな！一旦止まって深呼吸してからいけ！」

実戦経験者の高級士官が若年者を叱咤する声が響く。

守と冴子はそんな喧噪を横目にティータイムを続け、カップの中を空にしてからおもむろに立ち上がった。

ヘリの席で冴子が手にしている端末には、彼女の乗艦である『相模』の各種情報 乗組員の帰艦、弾薬や物資の搬入等の状況がリアルタイムで表示されており、画面をタッチして送信し、ブリックジクルーに指示を伝える。

画面の一隅には『ヤマト』の状況も映る。

艦長代理である古代進も同様の端末を持っているが、冴子は『ヤマト』も指揮下に納めているため、そちらの状況も表示されている。ちなみに、艦隊司令官用の端末はより大容量である。

同様の端末を手にしている艦長らしき人物が他にも数人おり、目まぐるしく手を動かしていた。

地球防衛軍・新横須賀基地

地上係留の艦艇の間を人員や作業車両が走り回り、上空を航空自衛隊所属のコスモタイガーが旋回している。

冴子達のヘリが着陸すると、既にワゴン車が待機しており、皆が乗

り込むやすぐに発車した。

「じゃ、フェイト達を頼んだぞ！」

「ああ。彼女達を送ったら、俺も内惑星（防衛艦隊）の司令部に詰める！」

司令部本棟前で一旦全員が下車。

冴子は地下基地への車に乗って『相模』に向かうが、守、フェイト、ティアナはここで下車。

ドドド…と腹に響く轟音がする方向を向くと、紡錘型をした艦が上昇していくところだった。

（やっぱり、直接大気圏を突破できるんだ…）

思わず見てしまうフェイトだが、

「さ、早く帰ろう」

守に促され、本部棟に入っていった。

フェイトとティアナを嶋津家に送り届けたら、守はこの基地にある内惑星防衛艦隊の司令部に詰める。

その前に、スターシャと中島夫人にも一言話しておかなければならないが。

『相模』艦橋

「皆、待たせた」

冴子が艦橋に入るや、大村以下のブリッジクルーが敬礼で迎えた。答礼し、現在の状況を確認する。

「本艦、『ヤマト』とも全乗組員揃っています」

「全機関異常なし、艦内システムオールグリーンです」

「装甲板の交換作業は全て完了。」

内部工事の一部は中断できませんので、作業員8名が同乗中。警戒態勢までは作業を続行します」

大村副長、三沢観測士、長尾機関長らが矢継ぎ早に現状を報告する。

「わかった。現在は発進態勢での待機命令だが、出撃命令が入った場合は10分以内に発進できるようにしておけ」

「はいっ！」

メインスクリーンには太陽系内の艦隊や部隊の展開状況と白色彗星艦隊の予想進路が表示されている。

白色彗星艦隊はカイパーベルトをパスし、冥王星軌道に向かっていく。

こちらの状況では、火星とアステロイドベルト空域で訓練中の第6艦隊が土星圏タイタンに移動。手空きの輸送護衛艦隊も木星圏イオ基地で集結することになっている。

「司令部より入電！」

13TFに対し、タイタン進出命令が出ました！」

第10警戒隊の『あかつき』が、敵艦隊の中に中型空母1を確認し

たとの報告が入っています」

冴子は頷き、

「独立第13戦隊は15分後に発進し、タイタンに向かう。『ヤマト』にも伝える」

今回の白色彗星艦隊は戦艦が3〜5、駆逐艦が15〜20隻と、まとまった規模のようだが、空母まで揃えたとは予想していなかった。

こっちの航空戦力と言えば、基本的にまだ錬成中で、実戦に投入できるレベルではない。

皮肉にも、『ヤマト』の坂本以下のヒヨッコ達が実戦経験というアドバンテージを持つ分精鋭扱いだ。あとは黒沢照彦の教導隊くらいなものだ。

その時、パクが新たな着信を告げる。

「艦長、司令部から緊急親展電です」

と、データを艦長席に転送する。

艦長宛の親展電なので、指定パスワードを入力しないとデータが開けない。

こんな時分に緊急親展とは一体何なのか？

指定パスワードを入力し、データを展開する。

（これは一体……？）

しかし、まさかあいつがなあ。

ま、頼もしいには違いないが……）

火星基地で緊急補充の乗組員が乗り組んでくる。

それもコスモタイガー隊8機8人のパイロットと同数の整備スタッフだが、問題はその指揮官だった。

つい先日の戦闘で未帰還になっていたが、通りかかった駆逐艦に救助されていたとは。

しかし、あいつが率いる部隊なら、小勢でも少しは期待できるだろう……。

『ヤマト』が岸壁を離れた5分後。

「ホーサー（舳い綱）解除！」

「微速前進0.5」

大村が出港指示を出し、操舵席の町田が復唱しながらスロットルを開いた。

相模灘

先に離水した『ヤマト』が増速して上昇していくのが見える。

北西の季節風で波高くうねる海上を、『相模』もピッチングを繰り返しながら増速していく。

機関長の長尾と操舵士の町田の声が交差する。

「離水10秒前! ……8、7、6……」

「メインエンジン内圧、臨界。

フライホイール起動！」

「接続、点火！」

大村、続いて冴子のアルトの声が発進を告げる。

「離水、上昇！」

「『相模』発進！」

波動エンジンの回転が上がり、轟音と振動とともに『相模』の55000?超の巨躯が夥しい飛沫と水柱とともに、夕陽を背にしながら『ヤマト』を追うように飛び立った。

第115話『帰ってきたあいつ』（前書き）

『ヤマト』大改装前最後の出撃です。

第115話『帰ってきたあいつ』

南大東島上空・20000?

南下する『相模』『ヤマト』の後方にコスモタイガーの編隊が接近する。

「後方からコスモタイガー接近、IFF確認しました」

「編隊長から通信。着艦許可を求めています！」

「了解。回線を繋げ」

冴子の指示を受け、パクが回線を開く。

『…こちら戦闘第64飛行隊長・山本明以下28名。』

『相模』『ヤマト』への着任を命ぜられました。』

着艦許可をお願いします！」

「……山本？」

編隊長の名前に大村が反応し、冴子を振り返り見る。

冴子は無言で頷き返すと山本との回線を繋いだ。

「嶋津だ、着艦を許可する、急げよ」

『了解。私の小隊は『相模』に、坂本・森田隊は『ヤマト』に着艦します』

通信回線を閉じると、町田が質問してくる。

「艦長、山本明隊長って、『ヤマト』戦闘機隊の山本副隊長…です

か？」

「ああ。都市帝国へ突入する直前に撃墜されたが、漂流しているところを駆逐艦に救助されたと聞いている」

そこにパクが口を挟む。

「艦長、山本機と『ヤマト』との間で通信回線が開かれています、よろしいのですか？」

「多少は構わんさ。古代達も色々話したい事があるだろうからな」

程なく、編隊がメインスクリーンに映し出された。

先頭を切る編隊長機は、機首先端と垂直尾翼をレモンイエローに塗り、一目で山本機とわかる。

『ヤマト』には坂本 茂以下のイスカンダル遠征組が再び乗り組むのに対し、『相模』に乗り組むのは、亡き加藤三郎と並ぶエースの山本を筆頭に、白色彗星帝国軍との戦闘を生き延びた中堅パイロット達だ。

「…山本隊長といえば、今やエースオブエースとも言っべき名パイロットなのに、何でまた『相模』に着任されたんでしょう？」

「上層部の思惑はわからんがね。『相模』にとっては悪い話ではないさ。」

山本はもちろん、他の連中もそれなりにできるようだしな」

町田と大村が話しているのを耳にしながら、冴子は内心で苦笑していた。

（前科者は問題児と組ませようってか！？）

お偉いさんが考えそうなこったな。ま、こっちとしては好都合だが

……)

全機が着艦したのを見届け、最後に山本機が着艦した。

「山本明以下8名、只今着任しました！」

着艦から数分後、ヘルメットを抱えた山本が艦橋に現れ、冴子と大村が応じた。

「副長の大村だ。着任を了承する」

「……怪我はもういいのか？」

冴子の問いに山本が苦笑した。

「幸い、打撲だけでした。」

「……俺一人生き延びてしまいましたからね。そう簡単には死ねなくなりましたよ」

「ん、お互いにな。」

「当分死ぬ暇はないぞ、山本」

「はい」

「コスモタイガー隊と合流した『相模』『ヤマト』は艦首を上げ、一気に大気圏を突破した。」

「大気圏を抜けました」

「波動エンジン、大気圏外出力に切り換え」

「艦内外とも異常ありません」

クルーが艦の状況を報告する。『相模』『ヤマト』とも異常は認められない。

「月軌道を通過後、アステロイドベルト外まで一気にワープする。通信長、『ヤマト』にも伝える」

「わかりました！」

大気圏を抜けたとはいえ、地球の周囲にはつい先日、都市帝国との戦闘で撃破された双方の艦船等の残骸の大半が未回収のまま漂っており、ブリッジクルーの緊張はまだ解けない。

『相模』と『ヤマト』は慎重に大きなデブリを回避しながら月軌道を目指した。

時空管理局本局

とある一室に数人の士官が集まっていた。服装からみて、提督や佐官クラスの人物だ。

「では、『レクサス』は既に出発したのだな？」

「はい、約44時間で太陽系の外縁部に到着、その後、太陽系内に進入。通信を傍受する等して、第197管理外世界の本星の座標を特定。然る後に工作員を送り込みます」

「うむ。しかし慎重にやるようにな。」

いかな魔力のない蛮人とはいえ、今の管理局の艦隊戦力では、到底奴らの艦隊に勝ち目はないのだからな」

「それは強く言い含めてあります」

「む。まずは己の敵を知らないことにはどうにもならないからな。しばらくは情報収集に徹するようにな」

彼らは時空管理局の「海」でも急進派、あるいは強硬派と言われるグループに属しており、時空管理局の管理こそが平和を実現するも

のと信じて疑わない。

以前は「最高評議会」から密かに、しかし手厚く支援を受けていたのだが、JS事件の混乱の最中に最高評議会が「暗殺」されると逼息を余儀なくされ、更迭・左遷される者も少なくなかった。

その現状を打開するための方策の一つが第197管理外世界 第2地球 の軍事技術の入手だった。

極めて不愉快ながらも、彼らの軍が持つ宇宙戦闘艦船の戦闘力は管理局の艦船のそれを大きく上回っている。

しかし逆に見れば、あれだけの技術は魅力的だ。

あの技術を我が手にし、魔導兵器と組み合わせれば、管理局の戦力は画期的なほど強化できる。

彼らはそう考えていたのだが、それが、自分達の組織を危機に晒す事態になることを予想できるはずもなかった。

ミッドチルダ北部・ベルカ自治区、聖王教会本部

執務室にいるのはこの部屋の主たるカリム・グラシアと秘書官兼護衛のシャツハ・ヌエラ、来訪者は八神はやとヴィータ、リインフオース・ツヴァイ（リイン）、そして高町なのはだ。

用件の一つが、第197管理外世界の現地軍に保護されているフェイト・T・ハラOWN執務官とティアナ・ランスター補佐官となのは達が直接会話した通信映像に関することだ。

彼女達の前に映し出されているのは、フェイトとティアナ、彼女達の後ろに立つ2体のサンタクロース人形だ。

「この人形は、地球の『クリスマス』に因んだものですね？」

「はい、そうなんですが……」

シャツハの問いに対するなのはの答えは些か歯切れが悪かった。何故かと言えば。

「「え!？」」

サンタクロース人形が突然動き出したかと思うと、あっという間に2人の高級士官らしい若い男女に早変わりしたからだ。

「ず、随分砕けた方達ですね……」

「リインもびつくりしたです……」

「それもありますが、それまでは微動だにせず、完全に人形になりきっていました。」

軍隊の訓練を受けていないとあそこまではできません

…管理局員であそこまでできる人はそうそういないでしょうね……」

「厳しい訓練と実践をくぐり抜けてきた、れっきとした軍人ということですね……」

男性士官は「古代 守」、女性士官は「嶋津冴子」と名乗った。

「女性の士官が、フェイトちゃん達を直接救出した宇宙戦艦の艦長で、男性士官は軍本部の参謀。2人は同期生同士ということですよ」

「そうですか、この方達が……」

(2人とも、私と同世代だと思うけど、何度となく死地を通り抜けてきたという顔つきね。)

同年輩の管理局員で、ここまで精悍な顔つきの人はそうそういないわね……)

まじまじと映像に見入るカリムに、はやてが尋ねる。

「……カリム、この艦長さん、誰かに似ると思わん？」

「誰かに……？」

カリムは映像に映る嶋津冴子を見ながら暫く考えていたが、

「……ヴィヴィオが聖王になった時の顔つきに似てるわ。

……というより、瞳と髪の色、それに頬の傷を除けば、20年後のヴィヴィオと言ってもいいわね」

「そやる、やっぱそう思うやる？」

はやてが我が意を得たりとばかりに言うが、そこにヴィータが一石を投じる。

「あの艦長がもう一人のヴィヴィオだとするなら、あっちにも「なのは」がいるんじゃないの？」

確か、あっちにも海鳴という町と「翠屋」があっただろう？」

「そう、そうやった。

ちゆうことは、もう一人なのはちゃんが向こうにいてもおかしくはないやるな。

ヴィヴィオに当たる人があの年頃なら、きっと年少キャラやで……」

はやてとヴィータの脳裏に、スターライト・ブレイカーとも異なる砲撃魔法を放つ、漆黒のなのはが思い浮かぶ。

((黒い悪魔や「だぜ」……))

「……はやてちゃん、ヴィータちゃん。2人とも、今すっごく失礼なこと考えてない？」

地球・日本州、神奈川県横須賀市

”クシユン!!”

「雪菜、風邪ひいた？」

「そんなことはないと思うけど……」

嶋津冴子の被保護者になってからは風邪をひかなくなった高町雪菜
だった。

太陽系内某所、戦艦『相模』艦長室

”…ぶし!!”

「ふむ、私は風邪をひけたのか…？」

対ガミラス戦勃発以来、風邪をひいていない嶋津冴子である。

第116話 『リリカル鼎談(1)』 (前書き)

今回はフェイト・ティアナ・雪菜達の話です

第116話 『リリカル鼎談（1）』

アステロイドベルト外縁、 『相模』 艦橋

「全作業、完了しました」

「『ヤマト』も作業完了しました」

大村とパクの報告を受け、冴子は頷いた。

輸送艦と合流し、コスモタイガーのスペアパーツを積み込み、整備スタッフを合流させた『相模』『ヤマト』は、これからタイタンで第6艦隊に合流するのだ。

「これよりタイタンに向かう。取り舵50、全速前進！」

「了解。取り舵50、全速前進します！」

冴子の命令を町田が復唱し、舵を左に切る。

『相模』『ヤマト』は艦首を土星圏に向け、増速した。

地球・横須賀市、嶋津家

夕食の席を囲むのはフェイト、ティアナと高町雪菜の、「元」を含む魔法少女3人である。

何故「元」をつけたかといえば、フェイトは少女なんて歳じゃないから。

献立は菜浸しと肉じゃが、野菜テンコ盛りの味噌汁等の純和食。

「お口に合うかわかりませんが…」

と雪菜は言っていたが、食してみたフェイトとティアナは、

(何だか敗北感を感じるなあ(わ)……)

との感想を抱いていた。

高町雪菜の料理の腕は、弱冠13歳という年齢を割り引いても十分以上なレベルだった。

ガミラスとの戦争の余波で、まだ肉類は大豆や小麦グルテン等が混じっているが、決して潤沢ではない食材でこれだけのものを作ってみせたのだから、

翻って、フェイトは長期間、あるいは遠隔世界の捜査任務に就くことが多く、自分で調理する機会は少ない。

仕事ゆえ仕方ないのだが、自分達より明らかに年少で、しかも無二の親友/上官及び師にあたる存在と酷似した容姿の少女となると、我が身と照らし合わせないわけにはいかなかった。

「ね、雪菜……」

「何でしょう?」

食後、雪菜が出した焙じ茶を飲みながら歓談していたが、ここでフェイトが核心に突っ込む。

「貴女…魔導師なんでしょう?」

しかし、雪菜に動揺した様子はなく、淡々と答えた。

「そうですね……。魔法を使えるのが魔導師だとするならば、確かに私は魔導師ということになりますね。」

「……お2人もそうなんでしょう？」
「ええ」

雪菜の問い返しにフェイトとティアナも頷く。

「私達は、その魔法で次元世界の治安維持活動をしているのティアナが言う。」

「次元世界…ですか」

フェイトが次元世界の概念、時空管理局のこと、管理世界と管理外世界等を説明し、雪菜は聴き入っていた。

そして、地球と言われる世界（惑星）がもう一つあることも。

「…すると、この星も、もう一つの地球にも魔法文化はないので、時空管理局のカテゴリーでは管理外世界になるわけですね？」
「そういうことになるね」

そう言いながら、フェイトはポケットから金色の三角形をした金属を、ティアナはカード形をした金属を取り出してテーブルに置く。

「私達はこの『デバイス』で魔法を制御しているの」

すると、そのデバイスがチカチカと点滅し、話し始めた。

『初めまして、私はフェイト・T・ハラオウンのインテリジェントデバイス、「バルディッシュ」』
『私はティアナ・ランスターのインテリジェントデバイス、「クロスミラージュ」です』（以上、英語）

雪菜は一瞬瞠目したが、すぐに表情を戻すと、

「私は高町雪菜。宜しくね、バルディッシュ、クロスミラージュ……」
そう言うや、首から提げていたネックレスを外すとテーブル上に置く。
すると、金色の細い鎖に繋がっていた蒼い石がチカチカと明滅し

「お初にお目にかかる。

私は高町雪菜の自律魔法制御媒体、「ピュア・ハート」

渋い中年男性の明瞭な日本語の声でそう言った。

（（え？この声は……））

フェイト達はその声に既視感ならぬ既聴感があった。

『ヤマト』に保護されている時、記録映像で見た人物　大ガトラ
ンチス帝国の国家元首で、後日「ズオーダー四世」と判明した
の声とよく似ていたのだ。

およそ少女チックな名称とはミスマッチな感があるが、ツッコまな
い方がいいのだろうか。
が、目の前の蒼い石はフェイト達が思っていた以上に洞察力が優れ
ているようだ。

「名前と声合わなくて驚いているようだが……」。

私がこの星に来たのは40年以上前で、最初の主は彼女の亡き母親なのだ」

「「え!?!」」

これにはフェイト達が驚く。

彼女達の持っているデバイスは一人限定にカスタマイズされたもので、主が死亡したり、何らかの理由で魔法を使えなくなると、他人には、たとえ実子であっても転用することができず、そのまま廃棄されてしまう。

しかし、目の前の『ピユア・ハート』は違うようだ。

「無論、単に肉親で魔力を持っているからといって、無条件に継承されたわけではない。

私が彼女を新たな主と認めたからこそ、だ」

「そ、そうなの……」

ティアナが気圧されたように呟いた。

そこへ『ピユア・ハート』から質問が飛ぶ。

「貴公らに問うが、お主らは、レディが魔導師とやらだと知って、どうするつもりなのだ？」

これにはフェイトとティアナも一瞬絶句したが、すぐにその意味するところを理解した。

慢性人材難である時空管理局は、若くて優秀な魔導師は喉から手が出るほど欲しい人材だ。

執務官も、捜査等で赴いた任地で金の卵や原石を探し、スカウトしてくることもある。

管理外世界の住民ながら、管理局を代表するエース魔導師になった高町なのはや八神はやてがそのいい例だ。しかし。

「その事なら、ここで約束するよ。私達は彼女を管理局にスカウトしたりはしないから」

フェイトが言い、ティアナも頷く。

「…了解した。失礼な事を聞いたようだ」

時空管理局は、管理外世界の住民でも優秀な魔導師資質がある者はスカウトすることを厭わないが、この世界は管理局より遥かに強い戦力を持っているし、子供が軍隊や警察組織で働く事を法律で禁じている。

（それに、管理世界の揉め事に管理外世界の人を巻き込むのは、やっぱ気が進まないわ…）

ティアナの師たる高町なのはは、自分の意思で管理局に手を貸したのだからまだ良いだろう。

彼女は両親も兄弟も皆健在で、出身世界は様々な問題を抱えているものの、存亡の危機には至っていない。

しかし、同じ姓で容姿も似ている雪菜が生まれ育ったこの地球は一度ならず存亡の崖っぷちに立たされた上、彼女の家族はガミラスとの戦争で全員落命したという。

そういう過酷な環境で生きてきた彼女が、この世界に嫌気がさしているならばまだしも、当の雪菜にそういう様子はない。

嶋津冴子や中島一家ら、雪菜の身近にはいい大人達がいるのだろう。

（兄さんが亡くなった後、私の周囲にはあの人達みたいなお大人はいなかったなあ……）

ティアナには、雪菜を少し羨ましく思える。

“ぶえつくしっ！”

遠く木星圏空域を高速巡航中の某戦艦の艦橋にくしゃみが響き渡った。

第117話『リリカル鼎談(2)』(前書き)

今回はデバイス同士の会話です。

それと、皆様から応募いただいたオリジナルキャラが、今回以降順次登場します。

第117話 『リリカル鼎談(2)』

「……バルディッシュ、お願い」

フェイトが言うや、バルディッシュが点滅し、3人の前にウィンドウを展開する。

ウィンドウに映っているのは2人の若い女性と1人の少女。

雪菜も僅かに瞠目し、その3人、特に左サイドポニーの女性とオッドアイの少女を凝視する。

サイドポニーの女性は、髪と瞳の色を除けば雪菜が成長したらこうなるような容姿。

一方、少女も、髪と瞳以外は冴子の幼少期を彷彿とさせる。

(艦長と、私……?)

「この方達は……?」

「この2人は私の親友の『八神はやて』と『高町なのは』。

女の子は、なのはの養女のヴィヴィオ」

「養女、ですか……」

フェイトが、なのは、はやてとの出会いから先日までの事をかい摘まんで話し、ティアナが補足する。

「……………」

その間、雪菜は一言も発することはなかった。

その頃、デバイス同士も念話形式での会話をしていた。

バルディッシュが尋ねる。

『ピュア・ハート、貴方はどの世界からどのようにしてこの世界に
来たのですか？』

『ノーコメントだ。マイ・レディから問われていない事を、レディ
以外の者に先に話すつもりはない。』

『……一つだけ言わせてもらえば、時空管理局と似たような、魔法に
よる治安維持組織が存在していた世界だな』

『「存在していた」とは？』

過去形のように語るピュア・ハートに、今度はクロスミラージユが
尋ねた。

『最後まで見届けたわけではないが、その組織は瓦解したようだ。』

『……一握りの高ランク魔導師による、普通の魔導師や魔力を持たな
い者への支配の度が過ぎてな。遂に武力反乱を招いたのさ。』

『自己矛盾を曝すようだが、魔法など単なる付属物に過ぎぬのにな。』

『そんなものが人間の価値を決めると考えた愚物共の何と多かつたこ
とか。』

『……仕えるべき主がいなかった私は、その時起きた時空震に巻き込
まれてこの星に来た。それだけの事だ』

『……元の世界に戻りたいと思ったことは？』

『ない』

バルディッシュの問いに即答が返ってくる。

『……では、貴方のレディ共々、時空管理局に来ると言う選択肢は
？』

『ミス雪菜は類い稀なる魔導師資質をお持ちです。』

『管理局に入局すれば十分通用すると思えますが』

物は試しとばかりにバルディッシュとクロスミラージュが持ちかけるが、

『決定権を持つのはレディ自身とカピタン嶋津だ。』

だが、お主らの世界と地球連邦は正式な交流がない。物事の順序を間違えるなよ』

と素っ気ない。

『ところでバルディッシュ。お主のマスターの親友である高町なのはや八神はやても管理外世界出身なのだろう？』

何故、時空管理局に身を置くようになったのだ？』

それに対してバルディッシュがPT事件や闇の書事件をかい摘まんで説明したが、ひととおり聞いたピュア・ハートは、「そうか」と答えるに留まった。

土星圏・衛星タイタン、地球防衛軍土星第1基地司令部

太陽系防衛の要衝であるこの基地に、次々と地球軍の艦船が降下、あるいは上空に停泊している。

大部分は紡錘形をした巡洋艦以下の中・小型艦で、戦艦は『相模』、『ヤマト』を含めても6隻しかなく、先日竣工したばかりの旗艦『アレクサンドロス』は訓練が始まったばかりで、出撃は見送られた。

タイタンを指呼に収めたまでに接近した艦船の1隻、日本籍の巡洋艦『鳥海』。

戦艦と比べてかなり手狭な艦橋には副長兼任の航海長と砲術士、通信長、観測士の4名がそれぞれの任務についている。

「皆、おはよ」

「おはようございます」

彼らの背後から若い女性の声がかげられ、副長以外のクルーは立ち上がり敬礼した。

答礼した声の主はそのまま操舵士席に歩み寄る。

「おはようございます、艦長」

自ら舵をとる副長も女性で、声の質も艦長と呼ばれた女性とよく似ていた。

「タイタン到着まで、あと2時間です」

副長からの報告を聞き終えた艦長は何度か頷いてから、

「OK。じゃあ皆、今日も程々に頑張ろー!」

と、左拳を突き上げた。

因みに、ジャケットの右腕の袖は肩の辺りから折り畳まれており、隻腕であることを無言のうちに語っている。

艦長らしくない彼女　フランベルク・なつめ・シルヴィア（シルヴィア）のその振る舞いに、副長兼航海長　フランベルク・白百合・アリア（アリア）　は溜息をついた。

この2人、同じフランベルク姓なのは実の姉妹であるからだが、更

に一卵性双生児でもあった。

ドイツ人の父と日本人の母を持ち、かつ日本に帰化しているため、アジア式の姓名である。

身長は2人とも155？前後と小柄であるが、姉シルヴィアは銀髪に赤い瞳というアルビノ体質なのに対し、妹アリアは黒髪・漆黒の瞳で、胸元と腰周りはアリアの方が豊かだ。

年齢は27歳で嶋津冴子の2期後輩にあたるが、ドイツ地区の宇宙戦士訓練学校を卒業したため、冴子らと出会ったのは任官後である。

シルヴィアは砲術、アリアは航海を専攻し、共に天才的とさえ言われたセンスを駆使して対ガミラス戦を戦い抜いたが、シルヴィアはこの間に右腕を失った。

戦後、義腕が用意されたが、戦闘の邪魔とばかりに、軍務につく時は外している。

地球防衛艦隊再建に際しては、人材育成支援の名目で父の故郷ドイツに派遣されて共に巡洋艦『プリンツ・オイゲン』の艦長と副長兼航海長に任じられた。

白色彗星帝国との決戦では、バルゼー艦隊旗艦から放たれる火炎直撃砲の特性と弱点をいち早く見抜き、土方司令に意見具申して戦況逆転に大きく貢献した。

さらに、敵艦隊撃滅直後に現れた白色彗星に危うく飲み込まれかけた時は、近くにいた『ヤマト』と衝突して弾き飛ばされたのを逆利用し、フライ・バイ効果で脱出に成功したため、『ヤマトを踏み台にした姉妹』との異名を奉られた。

『プリンツ・オイゲン』は大破しながらも海王星軌道空域で戦闘終

結を迎え、姉妹は地球に帰還後、修復なった巡洋艦『鳥海』を任せられた。

正確に言つと、アリアは『アレクサンドロス』航海長が内定しかかっていたが、

「戦艦で、しかも旗艦じゃ、単に真つ直ぐや左右に曲がるだけじゃない」

と不満を持っていたため、姉からの誘いに乗り、『鳥海』に乗り組む事になった次第だ。

彼女は演習で常に最大戦速でアクロバティックな機動をとることで知られ、土星の環でのバルゼー艦隊殲滅戦では艦隊の先陣を切つて前進し、姉の無茶ぶりにも内心で嘆息しながらよく応えた。

一方、シルヴィアはシルヴィアで、波動砲を撃ちたくてうずうずしていた。

対白色彗星戦では一足先に戦線離脱していたため、拡散波動砲の一斉発射に参加できず、イスカンダル救援に赴いた『相模』『ヤマト』が波動砲を2回発射したと聞いた時は艦長室で

「私も撃ちたい撃ちたい撃ちたいーいー!!」

と駄々をこね、アリアに説教された。

それでも新たな乗艦の『鳥海』が、復旧工事に合わせて波動砲を集束タイプに変えたのには、

「やっぱり、集束式こそ波動砲よネ」

とどろ満悦で、さらに

「波動砲は私に撃たせてね」

と何度も言っつては、アリアと砲術士に頭を抱えさせているのだ。

「艦長、1時の方向約1万？に味方艦反応……」。

『ヤマト』 『相模』 です。速力26宇宙ノット」

観測士が報告する。シルヴィアは頷き、

「合流するわよ、アリア」

「わかりました。面舵30！」

『鳥海』は右に転舵し、30宇宙ノットで『相模』 『ヤマト』に艦首を向けた。

……舞台をマダオ当主不在の嶋津家に戻そう。

「ゆ、雪菜………？」

「何なの、それ………？」

『信じられない………』

目の前の光景にフェイトとティアナは顔を引き攣らせ、彼女達の愛機も目まぐるしく点滅して、共に混乱している事を如実に示していた。

「ピュア・ハートの定期メンテナンスです」

雪菜は何事もなく答えたが、それが2人+2機の混乱を助長する。

「メンテナンスって……それが!？」

ティアナが上擦った声でツッコむ。

それほど、雪菜とピユア・ハートのしている事は、フェイトやティアナら、ミッドチルダの魔導師から見ると「非常識」だった。

湯呑みにチェーンから外されたピユア・ハートが入れられ、そこに雪菜がお銚子で熱燗の酒を注いでいたのだ。

『郷に入っては郷に従えと言うからな。実に心地好いぞ、地球の酒は』

蒼いはずのピユア・ハートが赤く点滅しながら応えた。

(アナライザーといい、ピユア・ハートといい、何なんですか!?)

この世界は。訳がわからないですよ!)

(……ティアナ、悩むのはミッドに帰ってからにしよう……)

((私達も同感です……))

フェイト達はこの世界に来て以来、最大の衝撃にそれ以上の言葉を口に出来なかった。

第118話 『跳んで陽に入る法の舟』 (前書き)

管理局艦船に訪れた意外な出来事……。

第118話 『跳んで陽に入る法の舟』

時空管理局本局、次元航行本部

管制室は俄かに慌ただしさを増していた。

「『レクスス』とはまだ連絡が取れんのか!？」

提督の制服を着た高官が苛立った声を上げる。

「呼び出しに全く答えません!」

オペレーターが困惑した声を上げる。

(いくら何でも、いきなり攻撃を仕掛けてくるとは思えないが……)

『レクスス』から、第197管理外世界の恒星系 太陽系

の外縁部に到達したと連絡があったのはミッドチルダ標準時間で
一昨日の昼前。

既に2昼夜近くになるが、あれから全く連絡がとれていない。

『レクスス』は、先日『ヤマト』がカイパーベルトに置き去りにした次元通信ポッドから発信された信号をキャッチして接近。一旦回収して、ポッド内の通信記録を解析し、第197管理外世界の本星、つまり地球の座標を特定しようとしたのだ。

そして、めでたくも

『座標特定に成功。これより本星付近に向かう』

と連絡してきたのが最後だったのだが。

「まさか、拿捕あるいは撃破されたのか!？」

「そんなはずはない! 『レクサス』には最新の光学障壁魔法システムを搭載していたんだぞ!」

「わからんぞ。そもそも魔法なしであんな強力な艦船を保有してるんだ。」

こっちの魔法を見破る術を持っているかも知れないぞ」

「向こうに確認はできないのか?」

「できるわけないだろう、無断で入ってるんだ。」

下手に文句なんか言ったら、逆につけ込まれるぞ。

向こうにはあのハラオウン執務官達が保護されてるんだ。彼女らの身にも危険が及ぶかも知れないんだぞ」

管制士達の話す声を聞きながら、件の高官は顔から血の気が引いていくのを感じていた。

近

太陽系内、アステロイドベルトと木星圏のほぼ中間点付

『艦長、お忙しいところ申し訳ありませんが……』

「構わんよ、どうした?」

『相模』艦長室で事務処理をしている冴子のデスクに、パク通信長からの艦内通信が入る。

『『ヤマト』の真田技師長から、艦長宛に通信が入っております』

「……わかった。繋いでくれ」

一体何事かと訝しがる冴子の前に真田と古代の顔が映し出された。

「どうした？何かあったか？」

『……例の通信ポッドを誰かが操作したようだ』

「誰かって、あんなのを勝手に弄るのは、次元世界の法と正義の守護者様御一行くらいだろうか」

時空管理局を揶揄してそう言ってみる。

フエイト達を迎えに来たとは考えにくい。

それならばクロノ・ハラオウンが事前に連絡してくるだろうが、その気配はないし、シャリオ・フィニーノはまだベッドから離れられない。

「……連中、正義屋を気取る事にも飽きてきたのかね？」

『それは何とも言えないが、問題は、彼らが『座標』を間に受けたかどうかなんだ』

真田がしかめっ面になる。

「座標を？しかし、確か、太陽の反対側の座標を出すように調整したんじゃないかったか？」

『そうなんだが、どうも、あのポッドの回路図をチェックしていたら、とんでもない事が判明したんだ』

「何だよ、そのとんでもない事って？」

冴子の問いに、真田は少し考え込むようにしていたが、顔を上げてある事実を告げた。

『どうもあのポッドは急いで製造された物みたいでな、安定性が今一つなようだな。』

ログを解析して、その時表示された座標を調べてみたんだが……』
「……どうなった？」

ひと呼吸ついて、真田は告げた。

『……太陽系のだ真ん中だ』

「ど真ん中？……おい、それって、まさか……」
『……』

太陽系のだ真ん中、つまりそれは太陽の、それも中心核付近ということ。

「……マジかよ……」

『……』

無言とはこれ即ち肯定。

飛んで火に入る夏の蟲とは正にこれ也……。

『……』

「……』

冴子と真田の顔には、いつの間にかじつとりと汗が出ていた。

「……だとしても、どうにもなるまいよ。」

あれには、勝手に弄るなと警告文を大書きしてあったんだ。

素直に受け取ってこっちに連絡すればどこかで待ち合わせるなりできたんだからな。

それをしないで勝手な事をしたあちらさんの責任だよ。
船は文字通り、きれいさっぱり燃え尽きちまったんだ。
乗組員やその家族には気の毒な事だがな」

『そう割り切るしかないな……』

時空管理局はこの事でこちらを責める事はできない。

仮に文句をつけてくれば、こちらか時空管理局側が領域侵犯したと
言い返せばいい。

他国の領海に侵入した艦船は拿捕抑留、または撃沈されても文句は
言えないのだ。

「こんな事が表沙汰になったら、フェイト達の立場が一層悪くなる
ことくらい想像できんかねえ……」

冴子と真田は画面を挟んで長嘆息した。

第119話『南極の目』（前書き）

今週末最後の更新です。

新キャラと艦船が登場します

第119話『南極の目』

地球・新横須賀基地司令部

「……………」

司令部の一角に席を与えられた古代 守はスクリーンに投影された味方の艦艇を示す白点と、白色彗星残党艦隊を示す赤点を見比べていた。

(向こうの針路があからさま過ぎる……………)

白色彗星帝国艦隊の戦術は大軍にものを言わせた力攻めが多く、『ヤマト』の波動砲や土方の偽敗走にまんまと嵌められて全滅したりと、地球人の目から見て大雑把過ぎた。数だけを持つことなく、巧みな戦術で『ヤマト』を追い詰めたデスラーやドメルの方が二枚も三枚も上手だったと言えよう。

(いい加減、白色彗星の連中も学んでいるはずだが……………)

向こうには空母がいるとはいえ、たった1隻だ。数が少なくなつたとはいえ、対空火器を強化した地球艦隊を全滅させるには犠牲が大きすぎる。

(陽動、ではないのか……………)

ほぼ同時に同じ考えが浮かんだ者が数人いた。

冴子、古代守

(連中の目的は地球艦隊を誘い出すことで、本命は地球本星への報復攻撃ではないのか…?)

古代 進

(向こうはミサイル艦艇を保有していた。確かあの艦についていた大型ミサイルなら、1発で1都市は壊滅させられる。ましてや艦隊単位で発射されたら……)

「相原、『相模』に繋いでくれ！」

古代 進は相原に通信を繋ぐよう指示を飛ばす。

『相模』『ヤマト』と、途中合流した巡洋艦『鳥海』3艦合同での協議が持たれた。「……本当の馬鹿でなければ、いい加減学ぶわよね」

古代 進の話聞いた『鳥海』艦長のフランベルク・棗・シルヴィアはそういう表現で賛意を示す。

そこに『相模』通信長のパクがタイタンに進出している第6艦隊司令部と通信が繋がった事を告げた。

今次作戦の総指揮官である第6艦隊司令官は、フランス籍の戦艦『リシユリユー』に座乗するP・ペリエールである。

『……同じ事を、先程内惑星艦隊司令部と参謀本部からも聞いた。十分あり得る事態だ。君達はすぐに引き返したまえ。我々はここで引つかかったふりを通す。』

『鳥海』は13TFに臨時編入。共に地球に向かえ』
「はっ！」(x3)

太陽系南極、太陽から約250万？宙域

この宙域を単艦で遊弋するのは、第2警備隊所属のパトロール艦『水無瀬』だ。

その『水無瀬』の艦橋に陣取るのは、艦長のナーシャ・カルチエンコ、副長兼戦闘班長の篠田 巖、航海士の月読伊歩つきよみ いぶら男女5人だ。

彼らを初めとする『水無瀬』乗組員の過半は、先々月まで同型艦『九頭竜』に乗り組んでいた。

『九頭竜』は太陽系北極方面の警備任務に従事していたのだが、白色彗星帝国の来襲に伴い、太陽系外縁のプロキオン回廊に進出。白色彗星軍機動部隊の動向を偵察していたが、カイパーベルト付近で口封じのため反転してきた敵駆逐艦4隻と交戦。

高速と急機動で近接砲雷撃戦を挑んで3隻を撃沈破したが、カイパーベルトに潜んだ4隻目の砲撃で大破したため、そのまま突進して接舷。カルチエンコ艦長自ら陣頭を切った移乗白兵戦の末、生き残った敵乗組員が艦を放棄して脱出したため、この駆逐艦を捕獲した。

分捕った敵艦でスクラップ同然の『九頭竜』を曳航しながら帰還を果たした彼らは、廃艦処分された同艦の代わりに新造艦『水無瀬』に乗り組み、新乗組員の訓練航海を経て再び辺境警備任務に就いた。

「敵は来ますかね……」

「彼らが馬鹿でなければ、垂直方向から来るオプシオンもあるでしょうね……」

副長兼戦闘班長の篠田 巖と艦長のナーシャ・カルチエンコが話を

交わす。

ナーシャは金髪碧眼の典型的なロシア美女。

在日2世の彼女はおっとりした外見とは裏腹にコンバットサンボの使い手で、チキンレーサーと言われる程、戦闘や訓練における過激な操艦と底無し酒豪で知られており、先輩で酒悪友である嶋津冨子共々、新横須賀基地周辺の飲み屋では要警戒客リストの上位に記載されているという噂である。

……何故かと言えば、2人とも一緒に飲んだ者達を皆酔い潰し、後始末を押し付けて次の店に繰り出すから……。

副長の篠田 巖は長身角刈りにいかつい風貌で、入れ墨がない事以外はどこから見ても堅気とは思えない。事実、篠田の亡き父は某「その方面の団体」の若頭として雷名を轟かせた任侠の漢で、彼はその気質を色濃く受け継いでいた。

しかし、父親は自分の後継ぎになることを決して許さなかったため、篠田は地球防衛軍の空間騎兵隊に入隊したが、25歳の時に宇宙戦士訓練学校に入学。艦隊勤務に転じた。

先のカイパーベルトで敵駆逐艦に移乗白兵戦を仕掛けた時は、銃と共に父の形見の長ドスを携えて真っ先に斬り込み、敵兵の屍山血河を作る程の奮戦の末、敵艦長を討ち取った。

舵を握る月読 伊歩は、元々は加藤三郎や山本 明の1期後輩にあたるパイロット候補生で、トップクラスの成績だったが、訓練中の事故で重傷を負ったのを機に航海科に転科。

2200年、松級護衛艦「すみれ董」の航海士を拝命、ガミラス残存艦隊との戦闘ではアクロバティックな操舵で艦の危機を脱したが、あま

りの急機動に他の乗組員が音を上げたため、一旦は地上勤務に回されたものの、新造パトロール艦『九頭竜』の受取責任者（艦長内定）になったナーシャ・カルチエンコが彼女に着目して人事部に直訴。航海士として艦隊勤務に復帰した。

平時の彼女は所謂「天然」な言動が多く、何も無い所で転倒したり、他人とまともに顔を合わせられないほどのオドオド屋なのだが、舵を握ると一転、危険極まりないチキンレーサーに変身するのだ。

とはいえ、訓練で接触事故を起こした事はなく、戦闘での被弾も、駆逐艦4隻を相手にした割には驚くほど少なかった。

ともあれ、そういう個性的な乗組員を乗せた『水無瀬』は今日も太陽系南極方面辺境部の警戒に当たっていた。

突如、狭い艦橋にアラーム音が鳴り響く。

すぐに観測士がコンソールを操作し、艦長席のナーシャを振り返る。

「4号ブイに艦船反応。

……白色彗星軍のミサイル艦が10隻、速力28宇宙ノットで地球に向かっていきます！」

即座に篠田が動く。

「よし、総員戦闘配備！」

軍本部と第6艦隊司令部に連絡！

イヴ（伊歩）、取り舵70。全速だ！」

「了解、取り舵70！全速前進！！」

『水無瀬』は急激な機動で艦首を左に振るや、全速力で敵ミサイル

艦隊に向かった。
。

艦船設定7 『時空管理局の艦船』 (地球防衛軍視点) / 『地球防衛軍の艦船』

リリカルなのはシリーズの公式設定には管理局の艦船の諸元は一切記載されていないため、殆どオリジナル設定です。

なお、『レクサス』はXV級です。

艦船設定7 『時空管理局の艦船』（地球防衛軍視点） / 『地球防衛軍の艦船』

1. 時空管理局の艦船（地球防衛軍艦政本部・編）

時空管理局の次元航行艦は、異次元空間トンネルを利用して直接的惑星まで航行する能力を持つと推定される。

武装は専ら時空管理局に抵抗する組織等への威嚇あるいは攻撃として用いられるものと思われる。

通常空間における航行能力、対艦戦闘能力は2199年以前の地球防衛軍艦船を下回っており、我々の視点ではバランスを欠いた能力である。

但し、大型魔導砲の威力は我が軍巡洋艦の波動砲と概ね同等であると思われる。

基本的に、これらの艦船は時空管理局の移動司令部的な用途に用いるもので、宇宙戦闘艦や機動兵器との戦闘を想定したものではなく、我々の視点で見ると、防御力は貧弱と言わざるを得ない。

推進機関はレーザー核融合炉と「魔力炉」なる、未知の動力源とのハイブリッドである。

？L級次元航行艦

（17番艦『レム』の調査結果）

全長約200？、最大幅115？。

主武装：大口径魔導砲『アルカンシエル』1門

(取り外し可能)

中口径魔導砲×4、小口径速射魔導砲×10

機関：魔力炉×1、核融合炉×1

乗組員60～80名

運用成績が良好だったか、同型艦は20隻以上建造されたと思われるが、後述する『XV級』の就役に伴い、初期就役艦から順次予備役編入や除籍が進んでいるようである。

? XV級次元航行艦

(『レオニダス』から回収した資料による)

全長290?、最大幅 110?。

主武装：改良型『アルカンシエル』×1

中口径魔導砲×8、小口径速射魔導砲×20～30

機関：大出力魔力炉×1、改良型核融合炉×1

乗組員 100名以上。

前述のL級の代替艦として10隻以上が就役しており、なおも建造が進められている模様。

? L S 級次元航行艦

全長170?、最大幅80?。

主武装：魔導砲『アウグストウス』×1、小口径速射魔導砲×8

機関：魔力炉・核融合炉×各1

XV 級を小型化したような艦形で、重力圏内での運用を主としている。

約10隻が就役している模様。

XV 級は白色彗星帝国軍駆逐艦の回転式速射砲でも相当の被害を受けており、L 級同様、通常空間における航行能力・戦闘力は低いと判定せざるを得ない。

しかし、L 級同様、亜空間航行能力は注目するに足るものであり、この能力を地球防衛軍の宇宙艦艇や地球連邦籍の船舶に持たせれば、ワープと組み合わせ、飛躍的な遠距離航行能力を兼ね備えることが可能になる。

2 . 地球防衛軍の艦船（時空管理局次元航行本部・編）

新暦75年は我が次元航行本部の非常事態元年とも言うべき年であった。

第145・146管理外世界付近を中心にした次元航行艦船の遭難、所属不明のミサイル艦隊と宇宙戦艦『ヤマト』が示した戦闘力は我々の艦船を遙かに上回る強力さで、特に『ヤマト』が放った戦略砲は『アルカンシエル』すら軽く凌ぐ破壊力を示し、管理局に激しい衝撃を与えた。

その時点では『ヤマト』の所属等は全く解らなかったが、翌年、『レオニダス』遭難に際して再び現場に姿を現わし、『レオニダス』を襲撃した敵艦を短時間で全滅させる戦闘力を見せつけた。

現時点で我々が存在を把握しているのは戦艦『ヤマト』と、量産型らしい戦艦の2種類である。

かの艦船を保有・運用している「地球防衛軍」は第197管理外世界「第2地球」の宇宙軍で、極めて強力な戦闘艦船を保有している。それを運用する人間自体は、第97管理外世界の原住民に近い人間性を持っているものと思われ、『レオニダス』救援に駆け付けた事実を見るに、徒に武力に訴えることはしないようである。

? 宇宙戦艦『ヤマト』

全長約250〜270?、全幅約40?。

主武装：艦首戦略砲×1

大口径長距離高エネルギー砲×9、中口径高エネルギー砲×6、小口径近接防御火器多数。

その他、ミサイルランチャー、有人宇宙戦闘攻撃機等を搭載。

第97管理外世界にかつて存在した大型水上戦闘艦をモチーフにしたような外観をしており、並行世界と思われる第197管理外世界にも同様の艦船が存在したものと思われる。

同艦には近接防御火器が多数装備されており、単艦での行動を想定しているものと推定される。

艦体は曲線が多く、建造コストがかさむ艦型で、同型艦はないか極めて少数であると思われる。

艦首戦略砲の破壊力は絶大で、XV級のアルカンシエルをも軽く凌ぎ、史上最強の質量兵器の一つといえる。

また、上甲板に3基装備された3連の高エネルギー砲も、各1基の破壊力はかつて地上本部が建設した『アインヘリヤル』とほぼ同程度の破壊力を持つものと推定され、総合的な戦闘力は1隻で管理局のXV級1〜2個艦隊を潰滅させ得るものと推定される。

？『サガミ（相模）』級宇宙戦艦

全長：約230〜250？、全幅約40〜45？

主武装：艦首戦略砲×1〜2

大口径長距離高エネルギー砲×9、

ミサイルランチャー、近接防御火器、艦載戦闘攻撃機搭載。

『ヤマト』と比べ直線的な艦型で、量産を前提とした設計と推定される。

近接防御火器も『ヤマト』より少なく、複数あるいは艦隊での行動を前提していると思われる。

但し、戦闘力自体は『ヤマト』とほぼ同等と思われる、大口径エネルギー砲は『ヤマト』より短時間での連続発射が可能である。

同型艦は複数存在するものと推定される。

クロノ・ハラオウン提督や八神はやて二佐の証言によると、地球における「戦艦」は、艦の主要部は自艦の主砲弾の直撃に耐える装甲強度を持つ艦種であり、その法則がこれら宇宙戦艦にも当てはまるのであれば、極めて強靱な装甲を持つものと思われる。

また、地球の水上艦には戦艦の他にも、小型だが快速の「巡洋艦」と「駆逐艦」も存在するため、地球防衛軍にも同様の戦闘艦艇が存在すると推定される。

艦船設定7 『時空管理局の艦船』 (地球防衛軍視点) / 『地球防衛軍の艦船』

管理局艦船の中口径魔導砲は「スターライト・ブレイカー」、小口径魔導砲は「デイベイン・バスター」(いずれも殺傷設定)と同等の威力を持つものとしています。(当然オリジナル設定)

第120話『迎撃(1)』(前書き)

続々と艦艇が集中中。

巡洋艦『伊吹』と新キヤラも登場します。

第120話『迎撃（1）』

地下都市・横須賀区

白色彗星帝国軍残存艦隊が太陽系に侵入した報せは直ちに全市民に伝えられ、地下都市への避難指示が出された。

異邦人たるフェイト、ティアナ、スターシャとサーシャも例外なく避難させられることになった。

VIPたるスターシャとサーシャには地球防衛軍が差し向けた女性SPが付き添い、中島一家、そして高町雪菜とフェイト、ティアナにも一緒の部屋が宛がわれた。

泣き出す赤子も少なくない中、サーシャはすやすやと寝息を立てていた。

「皆、整然と避難してるんだね…」

続々と地下都市に避難してくる人波を見ながらフェイトがぼつりと言う。

「ガミラスとの戦争以来、避難慣れしているからでしょうか…?」

苦笑混じりに雪菜が答えた。

白色彗星帝国の来襲後、放置され荒れ始めていた地下都市は整備が再開された。

備えあれば憂いなしというわけだが、地球防衛艦隊が壊滅した影響

も多分にある。

（それにしても、いつの間に私達の分まで用意してあったのかしら……）

全ての地球連邦市民には地下都市への避難に備えてエマーゼンシ―セットが支給されていたが、地球に来て数日しか経っていないフエイト達の間も用意されており、その手回しの早さに、ティアナは舌を巻いていた。

一方、フエイトは

（この星の人達は、地下にこんな広大な空間を造っていたのか……）

窓の外の地下都市を見回していた。

ガミラスとの戦争中、放射能に汚染された地上から追われた人類は、放射能から逃げるように地下を掘り進め、深さ10〜15?に及ぶ広大な地下都市を築いていた。

特に日本のそれは強固な耐震対策も施され、度重なる遊星爆弾の着弾や、2197年に発生した、相模灘を震源としたマグニチュード8の地震にもビクともしなかった。

外国の地下都市では、遊星爆弾の着弾で全滅した所もある中、日本の地下都市は一つも崩壊せず、結果として人的損失率は日本が最少だったこともあり、『ヤマト』の成功も相俟って、地球連邦の首都機能が東京に置かれ、日本人の発言力が増したのも無理はない。

（軍人だけじゃない。戦争をくぐり抜けた市井の人達も逞しくなっただんだ……）

避難してくる市民の中には老婆を背負う若者もいるが、それも1人や2人ではなく、明らかに赤の他人の老人を背負ったり、手を引いている者も多かった。

(戦争で、人々の考え方も色々と変わったのかな……?)

フエイトがふと思った事はかなりの中していた。

ガミラスの攻撃は老若男女・貧富の別なく襲いかかった。

その結果、尊敬される基準などが大きく変わり、たとえば、かつてもて囃されていたセレブの「メッキが剥がれた」結果、一転して嘲笑と侮蔑の対象に変わったりしており、自己中心主義の言動をとる者や企業等は軽蔑されるようになっていた。

太陽系の南極方向宙域

太陽系に向かう白色彗星残党のミサイル艦隊を追跡するパトロール艦『水無瀬』は、一定の距離を保ちながら、位置を英文モールスで随時発信していた。

モールスにしたのは、白色彗星帝国軍による傍受を警戒したためだ。トン・ツリーの2パターンだけというローテク通信なら、傍受されても、白色彗星帝国にはその意味まではわかるまいということである。

その通信を受けた防衛軍司令部は、第6艦隊等を土星圏に張り付かせたまま、ミサイル艦隊を迎撃すべく、他の艦艇を月軌道外縁に集結させていた。

この空域に集結を命じられたのは13TFの他、哨戒任務から捻出したパトロール艦や、輸送船団護衛を一時的に切り上げた護衛艦群もあった。

また、新造艦や修復後の訓練航海に出ている艦も、訓練メニューを中止して集結していた。

そういった艦の1隻に、日本籍の巡洋艦『伊吹』があった。

『伊吹』は白色彗星帝国来襲時にはヒペリオン艦隊所属で、敵艦隊との前哨戦で自艦隊が壊滅した中、砲撃で敵駆逐艦2隻を葬り、戦艦1隻に雷撃を加えて脱落させたが、自艦も大破し、当時の艦長が戦死する事態に見舞われ、やっとの事でたどり着いたエウロパ基地で終戦を迎えた。

その後の復旧工事で、艦首波動砲を集束タイプに付け換えた『伊吹』は、半月前から新乗組員を迎え、アステロイドベルト付近で訓練に励んでいたが、今回の事態で中断。

急ぎ月軌道に向かっていた。

その『伊吹』艦長室。

戦艦と比べて手狭な感は否めず、ベッドは格納式で、応接スペースも兼ねているその部屋はコーヒーマシンの香りが充満している。

「……………モカを心持ち少なめにした方が良かったかな？」

事務処理の傍ら、コーヒーマシンの口を口に運ぶのは、この艦を率いる塩江龍一である。

嶋津冴子や古代 守達の1期後輩に当たる彼は、白色彗星戦当時はこの『伊吹』の副長兼戦闘班長だったが、土星圏での戦闘で致命傷

を負った艦長に代わって指揮をとり、半身不随になった艦をエウロパ基地まで回航させることに成功。その功績と前艦長の戦死により、後任の艦長に昇格した。

塩江は、ガミラス戦以来、いかなる激戦においても表情を崩さず、冷静な口調で指揮をとり続けてきたため、『鉄仮面』の異名を持つ。かと言って冷徹なわけではなく、彼は年長者に対しては、たとえ部下であっても丁寧な口調で話し、年少者や後輩に対しても怒鳴りつけたことはない。

そんな塩江を甘いと評する先輩艦長もいるが、彼は自分のスタイルを崩さずにいる。

しばらく事務処理を続けていた塩江のモニターの片隅が明滅し、妙齢の女性が映し出された。

『艦長、司令部からの連絡が入りました。』

艦橋にお願いします』

「わかった、すぐ行く」

モニターから女性が消えると、塩江は立ち上がり、艦長制帽を手にして立ち上がった。

艦橋に戻った塩江に司令部からの電文を手渡したのは、航海長を兼務する副長の綾歌麗奈だ。あやつた・れいな

175?近い長身と、腰近くまで伸ばしたウェーブヘアに茶色がかつた大きな瞳、そして『ボムカップ』と形容される程豊かな胸元が印象的な美女だが、付き合いが深い友人からは「腹黒美人」「毒舌オツパイ」なる異名を献上されている。

とはいえ、誰彼構わず毒舌を振るつわけではなく、基本的に部下や後輩には公正な態度で接するので評判はいいのだが、相手が下心丸出しだったり、地位を乱用するような者、あるいは自らは安全な場所に身を置いて部下を駒扱いするような者に対しては、たとえ高官相手でも理路整然とした毒舌を進呈する。それが彼女の二つ名の由縁だ。

麗奈から受け取った電文を一読した塩江はブリッジクルーを見回して告げる。

「……本艦はこれより地球の静止衛星軌道に進出し、敵ミサイル艦隊に対する防御ラインの一翼を担うことになった。30分後にワープで月軌道外縁に向かう」

それを受け、麗奈が艦内放送のマイクを持ち、

「これより30分後、本艦は月軌道外縁に向けてワープします。総員ワープ準備にかりなさい」

と指示を飛ばした。

月軌道外縁部宙域

つい数分前にワープアウトした『ヤマト』『相模』『鳥海』の3隻はワープ後のチェックを終え、地球に向けて加速し始めた。

同様に集結中の艦が数多の光点になっている。

それらの艦の中には、普段は輸送船団をエスコートしている護衛艦の姿も少なからず見受けられた。

護衛艦とはいっても、小型ながら波動砲を装備しており、集団で発射すればその威力は侮れないし、乗組員には大ベテランの宇宙戦士も含まれているので、戦力としては無視できない。

さらに……、

「あれは…『ありあけ』!？」

町田が驚いた声を上げる。

青系の現行戦闘艦に混じって黄色を主体としたカラーリングの小型艦艇も見える。

M-21881式宇宙突撃駆逐艦改『ありあけ』 『おぼろ』 『カノン』 『スクルド』だ。

同級はガミラス戦で殆ど失われたが、『ヤマト』就役時まで生き延びた数隻は波動機関への換装や艦体の強化等の改装を施され、地球防衛艦隊の再建期を支えた後に一旦予備艦とされたが、艦隊壊滅により再々就役したのだ。

「背に腹は代えられんさ。使える者は親でも使わないとな」

町田に返したのは大村だ。

今の地球防衛軍には、戦力を出し惜しみできるような余裕などないのだ。

「艦長、『アレクサンドロス』も出撃しました!」

「ん…」

パクが本部からの通信を伝える。

(いよいよ総力戦か…)

通常は艦隊行動に参加しない護衛艦やパトロール艦まで出撃する以上、第一線でそれを管制するものがないと統制がとれなくなる。そのために『アンドロメダ』級の指揮統制能力を持つ『アレクサンドロス』を参加させたのだろう。

その『アレクサンドロス』から各艦への命令信号が飛んだ。艦長とは別に、タナリット司令官がこの寄せ集め艦群の手綱をとるようである。

再建途上の月面基地を援護するかのように布陣する。

「敵主力隊、海王星軌道を通過しました。

第6艦隊との接触まで5時間！

ミサイル艦隊は進路を地球に変えました。

接触まで5時間です！」

「各部のチェックを急げよ。いざと言う時に使えませんかじゃ済まなぞ！」

パクの報告を聞いた大村が艦内各部に最終チェックの指示を飛ばした。

時空管理局本局

会議室では、XV級『レクサス』行方不明事件の検証であった。

「地球防衛軍に問いただすべきです。でないと乗組員の家族は納得しません！」

次元世界積極拡大派に属する若い佐官が発言し、同意する声が相次ぐ。

「しかし、そもそも何故『レクサス』をあの世界に派遣したのか？ 同じ名を持つ世界でも、エースオブエースの故郷とは訳が違うんだぞ？」

慎重派の高官が問い質す。

「『レクサス』派遣が誤りだとおっしゃるのですか？

次元世界安定の障害になり得る世界の様子を探るのは当然のことでしょう！」

「かの世界にはXX級でもどうにもならない戦闘艦船が複数存在するんだぞ！無断で接近すれば領域侵犯で拿捕抑留。撃破されることだってある。

ましてや、向こうにはハラオウン執務官達が保護されているんだ。

向こうを刺激すれば、本局はエースと将来のエースを同時に失いかねないんだ！

貴官らは、向こうを信じて待つとおっしゃったキール元帥のご意向にも背いたんだぞ！？」

慎重派の高官は語気を強める。

(はあ、どうしたものか…)

論争を見遣りながら、クロノ・ハラオウンは長嘆息した。

第121話『迎撃(2)』(前書き)

南極上空での戦闘が始まります。

第121話『迎撃(2)』

『相模』艦橋

「ヒペリオン宙域で第6艦隊と敵本隊が戦闘に入りました！」

土星圏で白色彗星残党軍と第6艦隊との戦闘が始まったようだ。

『ヤマト』『相模』『鳥海』は、約290年前に南極点を目指した白瀬陸軍中尉に敬意を表するかのようになり、南極・大和雪原の上空約3万?の宙域に布陣していた。

3隻とも砲門に仰角をつけて、『ヤマト』『相模』の格納庫では、対艦ミサイルを搭載したコスモタイガーが出撃態勢を整えて発進命令を待ち受けていた。

関心を土星圏に向けておいて、地球にあの艦首大型ミサイルを撃ち込もうという腹だろう。

あとは、本命のミサイル艦隊がどこにワープしてくるか、だ…。

パトロール艦『水無瀬』

『水無瀬』はミサイル艦隊の後方につけ、随時モールスを打電し続けていた。

しかし、ミサイル艦隊からこちらに攻撃してくる気配はない。

「敵さんは気がついていないんですかね…」

「モールスなんてローテクを使うとは思っていないんだろうなあ……」

航海士の月読 伊歩と副長の篠田 巖が話しているところに、レーダー、センサーを監視していた観測士が緊迫した声を上げた。

「敵艦隊、ワープに入ります！」

ワープ明けの位置を解析します！」

「急げよ」

艦長のナーシャ・カルチェンコも指示を飛ばす。

「次の通信は平文で打ちなさい。」

敵艦隊のワープ明け位置を打電し次第、本艦もワープします！」

ほどなく、ミサイル艦隊のワープ明け位置の解析が終わった。

「解析できました。」

ワープ明け位置は……、クック諸島の上空約2万？です！」

クック諸島は、南太平洋にある、ラロトンガ島を中心とした島嶼群で、かつてはリゾート地として賑わっていたが、遊星爆弾の直撃で住民は全滅し、主島たるラロトンガ島以外は無人島のままだ。

「打電します！」

「伊歩、ワープだ！」

「了解、緊急ワープしますっ！」

「『水無瀬』から平文通信。

敵艦隊はクック諸島上空約2万？付近に向けてワープした模様です！司令本部、『アレクサンドロス』の分析結果もほぼ同宙域です！」

「よし、コスモタイガー隊全機発進！」

「了解。コスモタイガー全機発進せよ！発着口開け！」

敵艦隊のワープアウト位置を確認した冴子が艦載機発進を命じ、大村が格納庫に伝達する。

『相模』格納庫

『コスモタイガー、全機発進！

繰り返す、コスモタイガー全機発進せよ！』

エアロックが開かれる。

「よし、山本隊行くぞ！」

そう言うや山本はキャノピーを閉じ、チーフメカニックにサムアツプしてみせる。

チーフは頷くや、リニアカタパルトのスイッチを入れた。

瞬間、山本機は勢い良く発進口に消えた。

反対側のリニアカタパルトからもコスモタイガーが撃ち出されていく。

『ヤマト』からは坂本達のコスモタイガーが続々と発進し、後部甲板からは古代のコスモゼロが発進。

小隊ごとに隊列を組むや、南太平洋上空に向かった。

「面舵50、全速前進！」

「了解。面舵50、全速前進！」

13TFもコスモタイガーに続いてクック諸島上空に艦首を向ける。他の各艦も急ぎ南太平洋上空に向かいつつあった。

ほどなく、

「クック諸島上空2万1千？にワープアウト反応。約10ないし20隻です！」

味方艦のワープ情報はない。

「コスモタイガー隊は確認後、直ちに攻撃せよ！」

敵の態勢が整う前に叩け！」

「有効射程まで約4分。」

艦艇では我々が最短距離です！」

『ヤマト』イーグル1・コスモゼロ

前方に大きな光点がいくつもともり、やがて、テレザート星近くで見た形状に変わる。

「敵艦隊確認。全機攻撃開始！ 大型ミサイルを撃たせるなよ！」

山本隊は後方の奴らを頼む！」

『了解っ！！』

古代達は翼を翻し、艦隊の前方中央に、アンテナの数が多いミサイル艦を発見。旗艦と判断して襲いかかった。

『相模』艦橋

「コスモタイガー隊、攻撃開始しました！
旗艦らしいミサイル艦に命中弾3！」

「よし。こちらも砲雷撃戦用意だ！」

古代か山本からの通信が入ったようで、先制攻撃は成功したらしい。
『相模』『ヤマト』『鳥海』もあと1分強の空域にまで接近している。

その時、前方に大きな閃光が広がる。

「山本分隊長が、敵艦同士が衝突・爆発したのを確認しました！」

「ん、こちらも全砲門と発射管を開け。まず戦艦主砲で叩く！」

パクの報告を受けた冴子は即座に砲雷撃戦の指示を出す。

コスモタイガーの攻撃は完全な奇襲になったらしく、ワープ明け直後に突然攻撃された敵艦隊は、早くも隊列を乱し始めた。

この間にも他の艦艇が続々とクック諸島上空に集結していた。

護衛艦は戦闘空域より低高度に位置し、敵艦隊の大型ミサイルを迎撃する構えだ。戦闘空域に急行する艦艇の中には、巡洋艦『伊吹』がいた。

『伊吹』は途中で、やはり訓練を切り上げた駆逐艦『たかなみ』のわけ』と合流し、ミサイル艦隊の背後をつこうとしていた。

「今のところ、こっちのペースのようだな」

「はい…」

艦長席の塩江は、手元のタンブラーのブラックコーヒーをひと口含む。

塩江は『伊吹』艦長就任にあたり、自室に愛用のコーヒーマーカーを持ち込み、また先の戦闘で厨房も被害を受けていたことに注目し、修復工事の際にプロ仕様のコーヒーマシンを導入させたほどのコーヒー通　コーヒーフェチ　なのだ。

そして当の本人は、ブラックでこそコーヒー。クリームやシュガーなど邪道である、とこだわっていた。
無論、それを他者に強制はしないのだが　。

タンブラーを戻しながら、塩江は考えを巡らす。
物事は順調な時ほど、落とし穴に気づくのが遅れるものだ。

「副長、ソナーを打ち出せ。伏兵がいるかも知れない」
「わかりました…。ソナー用意！」

白色彗星軍には潜空艦がある。戦艦はともかく、巡洋艦以下にとつては命取りになりかねない。

ほどなく、『伊吹』『たかなみ』『のわけ』から全方位に大光量照明弾が撃ち出された。

「12時08分、+42度に潜空艦6！」
「副長、砲撃用意だ！」
それと、『相模』に警戒を要請しろ！」
「わかりました！」

こちらを無視して『ヤマト』『相模』を狙おうとしたのは妥当な判断だが、そうは問屋が卸さない。

「砲撃準備完了！」

「撃てっ！！！」

『伊吹』『たかなみ』『のわけ』が主砲を放ち、潜空艦を見舞う。装甲がなきに等しい潜空艦は掠っただけでも穴を穿たれ、火の手が上がった。

たちまち5隻の潜空艦が炎上・爆散したが、残る1隻は炎に包まれながら13TFの方向に艦首を向けた。

「『相模』『ヤマト』に伝えるんだ！」

あの潜空艦はこちらの射程外に脱出してしまった。

あとは向こうに任せるしかないな……。

『ヤマト』第1艦橋

「『伊吹』より緊急！敵潜空艦1が炎上しながらこちらに向かってくる！！」

「5時37分、マイナス5度に反応1！潜空艦の反応だ！」

「距離12宇宙？、真っ直ぐこちらに向かっています！」

「任せろ！3番主砲、2番副砲、発射用意！」

相原が受けた通信の内容と、太田・雪が解析した敵の位置・進行方向データが後部主砲と副砲に伝えられる。

「発射！！！」

南部の号令を受け、後部主砲と副砲が轟然と発射された。大小6本の光弾は狙い過たず潜空艦に吸い込まれ、火球に変えた。

『相模』艦橋

「敵潜空艦、全て撃沈されました！」

……敵艦隊まで、あと30秒です！」

三沢が潜空艦の撃滅とミサイル艦隊が有効射程入りするまでの残り時間を報告した。

「ん。1番2番主砲、艦橋砲発射用意！」

発射管スタンバイ！」

『ヤマト』『相模』『鳥海』は、ミサイル艦隊を指呼の距離に捉えようとしていた。

時空管理局・本局喫茶室

「それ、本当なの？はやてちゃん」

「うん、間違いあらへん。」

『レクサス』は第197管理外世界に向かって…向こうの太陽系の外縁に達して、地球の座標を掴んだとの通信を最後に連絡を絶ったそうや。

……海では、地球防衛軍に拿捕が撃破されたと見とるが」
「そんな……」

なのはもはやても沈痛な表情になっている。

「あれだけの艦船を運用しとるんや。太陽系のあちこちに哨戒網を敷いてても不思議やあらへん。ましてや向こうは管理世界じゃないんや。黙って入り込めば当然捕まるやるな」

「それで、向こう（地球防衛軍）には確かめるの？」

「一部のお偉いさんは問い質せと言ってるけど、無理やるな」

はやては呆れたという口調で返す。

「…どうして？」

「んな事言つたら、管理局はそちらさんの領域を侵犯しましたと認めるようものやん。」

逆にこっちが問い詰められてしまつし、フェイトちゃん達にも悪影響や。

「……つたく、何考えとるんや。海は…」

はやては深く溜息をついた。

「向こうに管理世界の常識を押し付けようとしたってせせら笑われるだけやのにな。何でわからんかなあ…。海のお偉方は」

「でも、私達は次元世界の平和を守るためにいるんだよ。」

話し合えば、向こうだって分かってくれるかも知れないよ」

「……同じ地球でも、あつちは星間絶滅戦争を戦い抜いた人達やからな。」

話し合いはできても、質量兵器全廃なんか絶対応じんやろ。

私ら魔導師に、魔法を捨てると言うような事やからな」

なのはは、手元のミルクティーに視線を落とした。

脳裏に先日画面で言葉を交わした古代 守と嶋津冴子の顔が思い浮

かんだ。

2人とも20代後半から30歳位に見えたが、同年輩の管理局員とは眼の光からして違っていた。
あれは、肉食獣や猛禽類の眼だった。

第122話『迎撃(3)』(前書き)

2001年最後の戦闘、終結です。

第122話『迎撃(3)』

地球・南極上空約13000?

「敵艦より大型ミサイル発射の発射を確認しました。数8!」

三沢が上擦った声を上げる。

俄か仕立てながらも集結した地球艦隊の十字砲火を浴び、急速に数を減らしていた敵ミサイル艦隊のうち数隻が、苦し紛れに艦首大型ミサイル(破滅ミサイル)を放ったのだ。

「慌てるな。大型ミサイルは戦闘機と低高度の部隊に任せて、敵艦隊を潰すことに専念するんだ」

冴子は敵艦隊の殲滅を指示した。

大部分のミサイル艦は地球艦隊の十字砲火で被弾し、行動力を減殺されていたが、針鼠の如く装備した中小型ミサイルを放って抵抗を続ける。

戦艦はともかく、巡洋艦以下の艦船ではこれらのミサイルも脅威だ。ゆえに『ヤマト』『相模』の2戦艦が突出して敵艦隊の注意を引き付け、その間に巡洋艦、駆逐艦、護衛艦が連射と雷撃を加える。無論、『ヤマト』『相模』も撃つ。

破滅ミサイルにまず立ち向かったのは『相模』『ヤマト』から発進した古代、山本が率いるコスモタイガー隊だ。

「エンジンを狙え！」

山本隊がミサイルの推進部にパルスレーザーの掃射を加えた。何本かのミサイルが後部を炎に包まれ、軌道を外れていく。

撃ち漏らしたミサイルには古代・坂本隊がすれ違い様にパルスレーザーの掃射を加えて爆発させた。

それでも2本が被弾を免れて地球に向かうが、低軌道で待ち受けていた護衛艦・パトロール艦群と戦闘衛星からの砲撃で四散した。

旗艦『アレクサンドロス』艦橋

「敵大型ミサイル、全弾破壊しました！」

「残りの敵艦は？」

「ミサイル艦4隻ですが、満身創痍で戦闘継続は困難と思われます」
オペレーターから戦況を聞いたタナリットは即座に命じる。

「よし、敵残存艦に降伏勧告を打電しろ。

回答期限は30秒だ」

「わかりました！」

しかし…。

降伏勧告への回答は、残存艦のミサイル全弾発射だった。

「……撃て！」

ミサイルが到達する前に十字砲火が放たれ、残存ミサイル艦は大火球となって爆発四散した。

『相模』艦橋

「敵艦隊、全滅です……」

「被害状況確認を急げ」

三沢の報告に、大村が艦の被害確認を指示する。

『相模』『ヤマト』が突出して敵の注意を引いたため、巡洋艦以下の僚艦の被害は大したことはなく、ミサイルも戦艦の装甲を破るほどの破壊力はなかったが、アンテナやパルスレーザー砲などの被害は無視できない。

「『アレクサンドロス』から入電！」

本艦と『ヤマト』を中心に集結せよとのことですよ！」

「む、信号弾を撃て。」

引き続き周辺監視を続けるんだ」

『相模』から集結指示の信号弾が打ち上げられ、周囲に展開していた艦船が集まってきた。

近づいてくる艦の中には、煙の尾を引いている艦が数隻見受けられる。

先制攻撃と十字砲火が効いたのか、沈没艦はなかったが、何隻かは被害を受けているようだ。

そして、『相模』『ヤマト』の2戦艦も。

(またドックにとんぼ返りか)

主要部はほぼ無傷だが、アンテナや装甲板等は要交換だ。戦力再建途上での一時戦線離脱はやはり痛い。工廠や造船所には悪いが、休めるのは元日だけになってしまっただ。

『鳥海』艦橋

「ぶーぶー…今回も撃たせてくれなかったあ…」

艦長席コンソールに突っ伏して口を尖らせるのは、艦長のフランベルク・棗・シルヴィアだ。

今回の戦闘では主砲弾を敵旗艦らしきミサイル艦の艦橋に直撃させるなど、砲撃精度の高さを発揮した同艦だが、シルヴィアは波動砲を撃つ機会がなかったことに不満げだった。

「……いい加減にして下さい、艦長。」

静止軌道内での波動砲戦は、インフラを破壊する恐れがあるんですよ」

うんざりした声で抗議するのは、副長兼航海長のフランベルク・白百合・アリアだ。

艦長と副長とはいえ、2人は一卵性双生児姉妹なので容姿は似ている。

シルヴィアはアルビノ体質なので、より色白が目立つのだが…。

シルヴィアが波動砲を撃てなかったと駄々をこね、アリアが窘める光景はもはや日常茶飯事なので、クルーはただ苦笑するだけだ。

巡洋艦『伊吹』

「『ヤマト』と『相模』はだいぶ傷ついてるな……」

スクリーンに映る『ヤマト』を見ながら、艦長の塩江 龍一は一人ごちる。

白色彗星帝国軍にすれば、降伏せず最後まで牙を剥き、首都たる都市帝国を陥とした『ヤマト』は憎んでも余りある相手だろう。それだけに集中攻撃を浴び、外回りはだいぶ傷ついていた。

（まあ、あの2隻が攻撃を吸収してくれたから、我々の被害を抑えられたんだが…）

その時、

「どうぞ、艦長」

副長の綾歌 麗奈がコーヒが入ったタンブラーを差し出す。

「ありがとうございます、副長」

塩江は礼を言ってそれを手にし、口元に運ぶと、また思考の海に飛び込んでいった。

麗奈は一瞬残念そうな表情になるが、すぐそれを改めて、一礼して自席に戻る。

その様を見ていたブリッジクルー達は、心中密かに麗奈に同情するのだった。

パトロール艦『水無瀬』

長時間にわたる緊張から解き放たれた艦橋には、僅かに寛いだ雰囲気は漂っていた。

「艦長、『アレクサンドロス』から入電です。横須賀基地で整備・補給を受けよとの事です」

艦長のナーシャ・カルチエンコと副長の篠田 巖は頷いただけだが、艦橋には明るい空気が漂った。

些か予想外だったが、地上で新年を迎えられるのだ。無論、ナーシャと篠田の心中も同じであった。招かれざる客の白色彗星艦隊に、唯一感謝できることといえばこれだった。

地下都市・新横須賀区

“市民の皆様にお知らせ致します…”

地下の大空間に案内放送が流れ始め、避難した人々は耳を澄ませた。放送は続く。

“月軌道内に侵入した白色彗星帝国の残存艦隊は、先程、地球防衛艦隊が撃滅しました。繰り返します”

人々はどつと湧き返る。
当面、地球への脅威はなくなったのだ。

土星圏に侵入してきた白色彗星軍の別動隊も、第6艦隊の波動砲攻撃で8割方殲滅されたとのことだ。
人々の表情も明るさを取り戻した。

フェイト、ティアナと雪菜は、やはり地下都市病院に移送されたシヤリオ・フィニーノに付き添っている。

シヤリオと雪菜は初対面で、雪菜を見たシヤリオはさすがに驚いた顔になり、しかも雪菜が魔力とデバイス持ちと聞かされた時は二重驚愕の表情になった。

(恐るべき世界だわ。この地球は……)

『ヤマト』のような強力無比の宇宙戦艦があるかと思えば、関係者は飲ん兵衛の軍医にセクハラ酔いどれロボット、海賊紛いな女性艦長、スカリエツティを上回るバトルサイエンティスト。

果ては高町なのはやフェイトに匹敵する魔力持ちまでいるなんて、あまりにもメチャクチャだ。

(第97管理外世界とは別だろうとは思っていたけど、鏡写しみたいな人がいたり規格外な人がいたり、この世界はカオスだわ……)
シヤリオは内心で長嘆息したが、悩んでは負けというティアナの忠告を思い出した。

魔力こそ持たない人が大半だが、それだけである。

（こんな力オスな世界の人達が、管理局の枠に大人しく収まる訳ないわよね……）

上層部にはこの世界を管理下に置くことと考える者がいるのだろうか、そんな事は絶対無理だ。

彼らは、戦闘になれば殺すことをためらわない。

死の恐怖に耐えられる者が、今の管理局にどの位いるだろうか？

強いて言えばヴォルケンリッター位だろうが、彼らだけで勝てるわけがないのだ。

（早く体を治して、1日も早くミッドに帰らないと……）

そしてこの世界のことを伝えなければならない。

強力な宇宙戦艦を保有する世界だけど、そこに住まう人達は自分達と何ら変わらない人間だ。

対等の友人にするならば、これに勝るものはないだろう。

しかし、魔法文化がない蛮族と舐めてかかって支配・管理しようとしたら、間違いなくガミラスやガトランチスと同じ目に遭わされる。

シャリオは意を強くした。

第123話『2201年の幕が下り(1)』(前書き)

時系列では4ヶ月間のことを8ヶ月、120話余りもかかるとる…。

『ヤマト』自沈まであと3年とすると、まともに書いたら単純計算で6年、1000話になってしまう…!!…??

それはさておき、やっと年末のお話です

第123話『2201年の幕が下り(1)』

2201年12月29日夕刻。

戦艦『相模』は新横須賀基地に傷ついた身を横たえていた。

『ヤマト』ほどではないが、敵ミサイル艦の攻撃を引き受けたため、外部装甲板は方々で波打ったり、ひどい凸凹が生じた箇所もある。すでに一部では取り外し作業が始まっていた。

その最中、艦内では全乗組員がそれぞれの持ち場についていた。既に大掃除も終わり、後は艦を工廠側に引き渡すだけだ。

大部分の乗組員は明日から4日間の休日である。

艦長席から立ち上がった嶋津冴子は、艦内一斉放送回線を入れた。

「様々な事があり過ぎたと言っても過言ではない2201年も終わろうとしている。

無事に、と言える状況にないのは、ここにいる全員が肌で感じているだろう。

白色彗星帝国との、短いが激しい戦いで多くの仲間の命が失われたのは悲しむべきことだが、涙する時間はない。

暗黒星団帝国という新たな敵対的星間国家の存在が明らかになり、我々はそれへの備えと軍全体の再建、そして人類社会の再建を続けていかなければならない。

来年も多忙な年になる事は間違いないだろうが、この年末年始は心身を休め、年明けには全員が元気な顔で本艦に揃ってほしい……。

私からは以上だ」

大村以下のブリックルーが敬礼し、冴子が答礼する。

戦艦『相模』の2201年はひとまず終わりを告げた。

工廠の担当者と引き継ぎを済ませ、最後に下艦した冴子は、埠頭で『相模』の艦橋を振り仰ぐ。

（竣工してから3ヶ月しか経ってないのに、もう歴戦艦になっちまったな……）

白色彗星帝国との戦闘で壊滅した地球防衛艦隊の再建が端緒に就いたばかりの今、『相模』は虎の子の宇宙戦艦の1隻なのだ。

既に有人艦は現在建造中の艦艇を除けば、『マルス』や『アリゾナ』等、一部の艦以外の建造は一時打ち切られ、無人艦艇に全面転換されるのが決まっている。

暗黒星団帝国という新たな脅威の存在が明らかになったとはいえ、宇宙戦士の養成が間に合わないのだ。

ましてや人材不足は軍に限らない。ほぼ全ての分野で同様の問題が持ち上がっている。

この人材難が解決するには、少なくとも20年を要すると言われている。

（暗黒星団帝国もさりながら、時空管理局との関係も厄介だな……）

「次元世界」の平和と秩序の維持のために、質量兵器は廃絶しなければならぬ。

次元航行艦『レム』から回収した資料の中に書かれていたこの一節

を見た時は開いた口が塞がらなかった。

質量兵器とは、実弾銃砲やロケット弾みたいなものの事を指すのか
と思いきや、魔法によらない兵器全てを意味するものと知った時は、
管理局の魂胆が見えたも同然だった。

時空管理局が「管理」している世界でも、魔力を持たない住民の方
が遥かに多いようだ。
ということとは……。

（穿った見方をすれば、少数派の魔導師が世界を支配する、という
ことだろうさ）

そんな事は決してない、彼女達は思っているだろうが フエイト。

彼女達には伝えていないが、地球防衛軍は、時空管理局を要注意思
想勢力と位置づけている。

彼らの世界観について正邪を論じるつもりはないが、自分達の価値
観を我々に押し付けようとするならば、突っぱねるだけだ。

フエイト達を救助し、身元を引き受けているのは人道的見地からの
特例措置であり、彼女達の身柄を返還したら、基本的にこちらから
はアプローチしない方針だ。

第一、地球防衛軍は地球連邦政府の一機関に過ぎず、政府の承認な
しに動くことはできない。

地球連邦の基本方針は、あらゆる星間国家と対等な外交関係を結び、
支配は一切しない、そして受容しない。

もし我々の独立を侵そうとする者がいれば、何者であれ断固戦い、その意図を挫く。

（こんな事を考えたくはないが、万一そんな事になったら、フェイト達や子供の魔導師に向けても躊躇なくトリガーを引かなければいかんのかな……）

過日、都市帝国内部への突入に先立ち、『ヤマト』艦長代理の古代進は、

「立ち塞がる者の中に女子供がいても一切ためらうな。鬼になれ」と突入隊メンバーに徹底したと伝え聞く。

守る者のためには鬼にも狼にもなってみせるが、それでも子供を殺すのは強い罪悪感がある。

（もつとも、都市帝国には無差別砲撃を加えたからなあ…）

都市帝国の残骸に混じって、その住民にしか見えない年端もいない子供や妊婦の遺体が漂っているのを目にした時はさすがに堪えた。

彼らの遺体は即座に收容して丁寧に葬ったつもりだが、後味の悪さは残る。

顔も知らなかった都市帝国の住民の遺体でさえ落ち込んだのだから、直に触れ合ったフェイト達と殺し合うのには流石に堪えてしまうだろう。

「ま、こっちも向こうも平和なのが一番なんだがな……」

口に出して言うと、冴子は歩みを早めて『相模』から離れていった。

嶋津家

マダオ当主の帰りを待つ嶋津家では、夕食の準備をしながら、フェイト・ティアナ・雪菜は姦しく話していた。

「カウントダウンパーティー？」

防衛軍の各基地で大晦日深夜から元日未明にかけて行われているという恒例行事の存在を雪菜から聞いたフェイトとティアナは目を丸くした。

現役や予備役軍人のみならず、退役軍人や家族、さらには戦没者・殉職者の遺族も参加できるという。

「ええ。ガミラスとの戦争の最中でも続いていたんです。

私は前回は初参加でしたけど、『ヤマト』の帰還もあって、それはすごいお祭り騒ぎだったんですよ」

「そうなんだ。でも、今年もやるの？」

白色彗星帝国との戦いでは、軍人さんが大勢亡くなったんでしょ？」

ティアナが問う。

時空管理局の常識では、多数の殉職者が出た場合はこの手の行事は自粛するのだが。

「大勢亡くなつたからこそ、盛大にやるんです。

今回も参加できた人は、参加できなくなつた人の分まで精一杯生きる義務がある、という事なんですよ」

「そうなんだ…」

「それに、板子一枚隔てた向こうは死の世界ですから。

宇宙戦士にとっては、この地上にいる時こそが生きていると実感できると、艦長や古代さん達がよく言ってます」

「そっか…」

(帰りたくても帰れなかつた人達が大勢いたんだよね。この世界では……)

管理局の艦船は、ある意味地上の延長みたいなところがあるが、『ヤマト』は明らかに星の海に行く船だった。

『ヤマト』乗組員の制服のデザインは、地球の海上艦船の錨をモチーフにしたものだったし、士官ジャケットや艦長制帽には錨のマークが用いられていた。

(「板子一枚下は地獄」という、船乗り達の言い伝えがあつたっけ……)

フェイトは、昔の地球の船乗りを象徴した諺を思い出していた。

「でも、私達も参加していいの？」

正式な家族でない自分達まで参加してもいいのか、とティアナが尋ねるが、

「お祭りは大勢いた方が楽しいですからね」

雪菜はノープロブレムだと言う。

（（お祭りか……））

フェイトとティアナは、『ヤマト』『相模』共同で行った、古代守とスターシャの結婚式を思い出した。

（何か、すごいお祭りの予感がするんだけど…）

（『ヤマト』『相模』の人達もお祭り好きでしたけど、その倍以上の人達が集まるんでしょうね……）

常に死と隣り合わせた仕事に携わっている人達だから、さぞや派手なお祭り騒ぎになりそうだ。

第124話『201年の幕が下り…』(2)『(前書き)

今週末最後の更新です！

第124話『2201年の幕が下り…(2)』

以下、元時空管理局、ティアナ・ランスター退役元帥の回想録を元とする。

現地時間2201年12月31日

この日から翌日にかけて私の目の前で起き、かつ巻き込まれた一連の出来事は、60余年を経過した現在でも、機動六課の思い出と同様、今なお私の中で光・熱・笑い・涙、そして軽いトラウマになって残っている。

フェイトさんと、参加できずに悔しがっていたシャーリーさんはまだお元気だが、殆どが私達より年長者だった地球防衛軍側の人達は、もう片手にすら満たない人数の方達しか残っていない。

当時、極少数の年少者だった雪菜も、その後の数多の戦乱を全てくぐり抜け、今やミッドチルダやヴァイゼンにも店舗展開する『翠屋』の全ての役職から退き、時たま画面越しにあの話をしては、皺が増えた顔に一層の皺を刻みながら大笑いしている。

この日は朝からそれなりに忙しかった。

日中は中島・古代・嶋津家合同の餅つきがあった。

新年に餅を食べるといふ地球の習慣は、スバルの実家に呼ばれた折に知り、蒸した米を『臼』と『杵』という木製の道具を使い、全て人力で搗くことも、ナカジマ三佐とギンガさんが実演していたから、それ自体には驚かなかった。

搗くのは守さんと真田技師長、こねるのは嶋津艦長だ。

フェイトさんも目にした経験があり、私もその情景の音を『ペッター、ペッター』と記憶していたが、目の前の光景は、『バン！バン！バン！』だった。

私達が啞然とする前で、真田技師長と守さんが交代で物凄い勢いで餅を搗き、嶋津艦長も負けじと物凄いペースで餅をひっくり返す。搗き手が若いからだろうが、それにしても恐ろしくパワフルな餅つきだった。

「早えーよ！」

「お前が遅いんだよ！」

などと言い合いながらだったが。

人力の餅つきはここでも珍しい光景なのか、近所の子供達も集まってきた。中島夫人はその子達に黄粉餅や餡子餅を振る舞っていた。

中島家

新横須賀基地で23時30分から行われるという『カウントダウンパーティー』に先立ち、私達は、中島軍務局課長のお宅にお邪魔した。

言うまでもなく、皆で年内最後の夕食を、という中島課長夫妻のお誘いだ。

嶋津艦長がそのお誘いを辞退する筈などなく、私達はお邪魔することになった。

中島家には、課長のご家族はもちろん、古代守さんとスターシャさんにサーシャ、真田技師長。

さらに、少し遅れて古代艦長代理と雪さんも合流してきた。

テーブルの中央にはローストビーフが鎮座していた。

中島課長の奥様は、私達のような魔導師ではなかったが、ごちそうになる度に、一体どんな魔法をかけているのか、と違ってしまっう程に美味しいものだった。

少なくとも、この人を基準にしたら、世の専業主婦の9割は落第点だろっうなと思っってしまうほどに。

スターシャさんと雪さんは、傍目から見ても姉妹かと思っうほど面影が似ていた。

かつて、スターシャさんが雪さんを妹さんと見間違えたのも無理はないだろっう。

また、スターシャさんと嶋津艦長も、失礼ながら意外なほど気が合っつていた。

守さんによれば、一見、気性が正反対に近い（？）だからという。正反対の気性というのは私にもわかるが、一見、とはどういっう意味なんだろっう……？

根底の部分が共通しているといっうことなだろっうか？

サーシャの代でそれが現実のものになっつたと知っつた時、私達が受けた衝撃が如何程のものだっつたか、察していただきだきたい……。

閑話休題、話を戻そっう。

スターシャさんは雪さんや嶋津艦長と一緒に笑い声を上げていた。

もつとも、スターシャさんと雪さんは慎み深く。
一方の嶋津艦長は大口を開けて膝を何度も叩くギャハハ笑いだっ
たが……。

それにしても、ここにいる大人達は皆お酒が強かった。
ビール、ワインのボトル、一升瓶が次々と空になっていく。
それ自体は一向に構わないのだが。

「あ、あの。嶋津艦長、それは……？」

「ああ。これは、マムシ酒という物さ」

真田技師長や守さんと車座になって酒を酌み交わす嶋津艦長が手
にしていた一升瓶には、清酒ではなく、蛇の死骸と酒らしい液体が詰
められていた。

はやて部隊長やなのはさんから、地球の一部の愛好家に伝わってい
る一種の自家製酒と聞いたが、その時の私が受けた衝撃が如何に大
きいものだったか、おわかりいただけるだろうか？

ミッドチルダや管理世界にも酒は存在するし、果実や野菜、キノコ
等を漬けた酒も存在するが、動物の死骸？を漬けた酒類は存在しな
かった。

フェイトさんも、マムシ酒を直に目にしたのは初めてだったようで、
顔が強張っている。

守さん達はそれを何食わぬ顔で口にし、サーシャをあやしているス
ターシャさんも、別に驚く事ではないという表情だ。
一升瓶に『翠屋』のステッカーが貼られていたのが何とも気になる
のだが。

……まあ、これが地球の文化というならば、私達が論評することで

はないだろう。

だいぶ時間が過ぎ、奥さんが年越しそばを作り始めるのと同時に、酔い醒ましのコーヒーを雪さんと雪菜がいれて持って来た。

私達は雪菜からコーヒーを受け取ったが、雪さんからコーヒーを受け取った嶋津艦長・古代艦長代理・真田技師長・守さんが引き攣った笑顔だったのはどうしてなんだろう？

第125話『悩みは深し管理局』（前書き）

年越しの乱痴気騒ぎは次回です（笑）

第125話『悩みは深し管理局』

ミッドチルダ・首都クラナガン郊外、ナカジマ家

3人の男女が食卓を囲んでいた。

壮年の男性は世帯主のゲンヤ・ナカジマ。若い女性はギンガとスバル。ゲンヤの娘である。

ゲンヤの妻、つまりギンガとスバルの母親は 既に鬼籍入りしている。

そして、娘2人の前には、女性はおるか男性でもそうそう見られない量の献立が、山盛りならぬ山積みになっていた。

3人の表情は、一様に冴えわたっているとは言い難いものだった。娘達の料理の腕や食事の量が原因ではない。

ゲンヤは時空管理局三等陸佐で、首都クラナガン警護の一翼を担う陸士108隊を預かっている立場上、管理局内部の情報に触れる機会は少なくない。

「 気になるか？ティアナ嬢ちゃん達の事」

娘のうち、ショートカットの髪型をしている、次女のスバルに話を振る。

「うん。向こうで元気になっていると解ってはいるけど、ね…」

スーパールスキューとして港湾特別救助隊に勤務するスバルは声を落として答える。

「あの嬢ちゃん達のことだ。ただ無為に向ここの世界で日々を送るはずはないさ」

敏腕で鳴らした執務官とその補佐官だ。あの世界の「生きた」情報を収集して帰ってくるはずだ。

「……そうよね。相手をよく知らないことには対応しようがないものね」

髪が長い娘　長女のギンガが相槌を打つ。

「『海』はどう考えてるのかな……」

地球防衛軍の艦船を接収しに行く、なんてバカな事しなきゃいけない……」

「あれだけの戦闘力を持っているんだ。喉から手が出る程欲しがると連中は少なくないだろうよ。」

1隻でインヘリアル3基分とアルカンシエルを遙かに凌ぐ火力は、管理局から見れば非常識も甚だしいからな」

スバルの懸念に、ゲンヤは地球防衛軍の宇宙戦艦に管理局が抱く不安感を口にした。

「でも、自分達を守るためにあれだけの戦闘力が必要不可欠だとしたら、これまであの世界を知らなかった管理局があれこれ干渉する権利はないんじゃないかしら……」

ギンガは地球　第197管理外世界　の立場を口にする。

彼らは、タキオン機関の設計図こそ外の世界から提供を受けたが、機関自体の製造や艦船の建造は自分達の手で行った。

いわば自分達の手で作り上げたに等しい戦力だ。
管理局に限らず、技術の接收に唯々諾々と応じるとは思えない。

「そこなんだよなあ。『海』が恐れているのは、第197管理外世界のみならず、ガトランチス等の技術が流入して、反管理局勢力や、無理やり管理世界にされた世界にそれが渡る事さ。

そうなれば、今の管理局の戦力では手に負えなくなり、管理世界から離脱するところもあるだろうさ。

それが相次げば、管理局そのものの存亡に関わる。

時空管理局の元でこそ、世界の平和は保たれる。

そう考える者が意外に多いんだよ。特に『海』はな」

「私だって、管理局は平和のための組織だと信じてるけど……」。

第197管理外世界、ううん。地球連邦や地球防衛軍の人達にすれば、ハードもソフトも弱い連中がでしゃばるな、と言いたいのかもね……」

「……戦闘に対する考え方が根底から違うからな。

あの地球が俺のご先祖さんの故郷 第97管理外世界 と似た歴史を歩んできたのなら、戦闘とは相手を殺すか自分が殺されるかさ。

万が一、管理局と地球防衛軍が戦闘状態になったら、向こうがこっちに来ることが出来ない代わりに、管理局が攻め込んで来るのを手ぐすね引いて待ち構えるだろうな。

あの『ヤマト』をはじめとする強力な宇宙戦艦と質量兵器がな。

よしんば降下に成功しても、今度は地上軍の待ち伏せと、住民からの敵意と憎悪の石つぶてが待っているだろうな」

「……」

父が口にする「住民からの敵意と憎悪」の一言に、姉妹は言葉がなかった。

ギンガは捜査官、スバルはスーパーレスキュー隊員として、人々の笑顔を守るために働いているという自負と誇りがあるが、武装隊員としてかの地球に派遣され、住民、特に子供達から罵声と石つづてを投げつけられたら、憤怒以前に悲しくなってしまうだろう。

直に話す機会があつた地球防衛軍の士官は、皆、話がわかる人達だったが、それでもいざとなれば、こちらを殺す事をためらわないだろう。

スバルもギンガも、この時点では『レクサス』のことは知らなかったが、かの艦が第197管理外世界の座標測量に向かい、消息不明になったと知った時は、共に長嘆息することになった。

時空管理局本局

「それ、本当なの！？ クロノ君？」

「……………」

相向っている10年来の友人からもたらされた報せに、高町なのは愕然とし、八神はやては額を押さえて長嘆息した。

「そ、そんな…」

なのははソファから腰を浮かせ、声を上擦らせる。

なのはは元々喜怒哀楽がはっきりした性格だが、そのただならぬ様子に、隣のはやても訝しがった。

「どないしたん？なのはちゃん」

「『レクサス』には、教え子が、2人……」

航空戦技教導官であるなのは教え子は、大半が各世界に配属されている航空武装隊員だが、中には次元航行艦配属の武装隊員もいて、『レクサス』配属の2人もなのは教導課程を修めていた。

その2人も艦もろとも行方不明なのだ。動揺するなと言う方が無理だろう。

絶句し、暗い表情で腰を下ろしたなのはに代わり、はやてがクロノに尋ねる。

「それで、考えられるんは？」

「向こうの太陽系内に侵入した結果、地球防衛軍のスクランブルを受け、領域侵犯の現行犯で拿捕されたか、あるいは……」。

……考えたくはないが、攻撃を受けた可能性もある」

「領海侵犯かあ……。ほんまなら、また余計な事してくれたなあ。上は」

はやても表情を暗くする。

「あくまで仮定の話だがね。」

仮に『レクサス』が太陽系に無断侵入したのなら、地球連邦は怒るだろうし、管理局への印象は悪くなるだろうな……」。

いや、既に悪いのが一層悪くなるか……」

クロノは自嘲気味に言う。

既に管理局は向こうの地球の座標を掴もうとして、次元通信ポッドに小細工をした揚句、『ヤマト』に見破られておちよくられるという醜態を演じた。

あれだけでも、あの嶋津という女性艦長は内心不愉快極まりないはずなのだ。

「相手があの人達だから話ができるんやろうけど、向こうだって、ああいう話せる人達ばかりではないんやろなあ…」

恐らくは向こうの地球でも、魔法はファンタジーかオカルトの類だろう。

フェイト達が魔導師とわかれば、化け物扱いする者だっているはずだ。

ましてやフェイトは出自が出自だ。

今、フェイト達を預かっている嶋津達は、彼女とティアアナが魔導師であることを知っているようだが、フェイトの出自まで知っているのだろうか…？

その時点では、向こうがフェイトの出生の事情を知っており、魔導師資質を持つ少女まで存在していることなど、誰も思いもしなかった。

なのはが何かを言いかけた時、3人の話は唐突に打ち切られることになる。

執務機の端末が呼び出しのアラーム音を立てた。

『提督！！』

用件を尋ねようとしたクロノの機先を制するかのように、画面の秘書が焦った声を上げた。

「…どうした？」

珍しく慌てた様子の秘書にただならぬ気配を感じたクロノは、
敢えてゆっくりと尋ねる。

はやてとなのはも何事かとクロノを見ている。

『L級艦『アストラ』がSOSを発信し、直後に消息を絶ちました

！！！』

「「「

！！！「「「

クロノの表情が凍り付き、はやてとなのはは反射的に立ち上がった。

第126話『デスマッチ・パーティー(1)』(前書き)

年越しパーティー開始です

第126話『デスマッチ・パーティー（1）』

公序良俗に反しなければ何でもあり。階級も一切関係なし。

大晦日深夜から元日早曉にかけて、地球防衛軍の各基地で行われる年越し祭は、カウントダウン・ニューイヤパーティー軍人やその家族を招いて行われるが、徹底した無礼講で知られる。

公序良俗や法令に反しなければ大抵のことは許され、上官・部下すら無関係だ。

ゆえに、日頃パワハラやセクハラをしている上官などは、ここぞとばかりに『復讐』される事すらあると、嶋津冴子から聞かされたフエイトとティアナは引き攣った笑みを浮かべた。

パーティー開始の挨拶に立ったのは、何と藤堂長官だ。

普段の謹厳実直な顔はなく、

「諸君、死んでいった者の分まで、思う存分楽しむのだ！」

と、拳を振り上げて力強く開始を宣言し、おーっ！という戦士達の喚声が大講堂に響き渡る。

長官に呼応して振り上げられたのは拳だけではなく、戦死した者達の写真も見受けられた。

写真を掲げずとも、それを懐に入れて参加した者も少なからずおり、息子や娘に先立たれた親らしき人達もちらほら見受けられた。

（フエイトさん、何なんでしょう？この光景は…）

（うん……）

開始数分にして、大講堂は闇鍋空間と化した。
あちこちで酒盛りが始まったのはいいとして、どこから調達したのか首を傾げるようなコスプレに興じる者もいる。

女装・男装など序の口である。

筋骨隆々とした大の男がチアリーディングに興じたり、禿ヅラに丸縁眼鏡、ステテコと腹巻という加○ちゃん姿の女性士官と、顎がケツ割れした不気味なホステスが升酒をあおっていたりと様々な光景がここかしこにあった。

(何より、この人も何考えてるのか、全然わかんないよ……)

模擬店で貰ったコーヒーを手に、フェイトは内心でぼやきつつ、右隣にいるペンギン 身長約180?のアデリーペンギンの着ぐるみを着込んだ嶋津冴子 に目をやった。

最初にそれを目にしたフェイトは雪菜に尋ねずにいられなかった。

「何でも、防衛軍でテストしている『アーマージャケット』の試作機らしいですよ」

「はい!?!」

あれがアーマージャケット?!

フェイト達は己が耳を疑った。どう見ても脱力系の着ぐるみにしか思えないのだ。

「一見ただの着ぐるみですけど、真田さんが絡んでいるそうですか」
ら

「「そ、そうなの……(汗)」」

それだけでフェイトとティアナは納得した。真田が手を加えているのなら、絶対ただの着ぐるみであるはずがない。

パワードスーツ機能はもちろん、防弾防刃、耐レーザー・ABC対策。さらに宇宙服機能くらいは備えているはずだ。

魔法を無効化する機能も仕込まれていると言われても、真田ならあながち冗談には聞こえない。

管理局ではこんなエンジニアは排除されてしまうだろう。全てが規格はずれな人物だ。

(地球防衛軍は懐が深いわ……)

ティアナは感心半分、呆れ半分で溜息をついた。

……時空管理局はハード以前に人材でも負けている。

こんなイカれた人達が守る世界を管理下に置こうなんてしたら、管理局は間違いなく自滅する。

本局の管理世界拡大派が暴走しないことを、フェイト達は切に願った。

フェイト達は会場の一角、『ヤマト』『相模』乗組員を中心とした一団の中にいた。

多少なりとも気心が知れた連中と一緒にいた方がいいだろうと、冴子と真田が配慮した結果だが、その一団は入れ代わり立ち代わり出入りする者達も交え、一際賑やかだった。

その『原因』にティアナは視線を移した。

(すごい人気なのね、守さんって……)

車座の中心にいるのは古代 守だが、周囲にいるのは『ヤマト』『相模』『クルー』だけではなく、彼の同期やかつての部下と思しき男女も次々と座に加わっていた。

もちろん『人間』だけではなく、巨大ペンギンや猿、鹿、虎、はては『えべっさん』や『オバQ』、脛毛ボーボーのチアリーダーの姿もあった。

(六課の年越しパーティーもすごかったけど、スケールがまるで違うよ……)

頭のネジがどこかに飛んでいってしまった人間の何と多いことか。

管理局や管理世界の基準でこの人達を量ろうなんて端っから無理だ。

(でも、仕方ないか……)

管理局と違い、地球防衛軍は死と隣り合わせな事が多い。

ガミラスとの戦争の傷が癒えないうちに白色彗星帝国がやってきて、宇宙艦隊を中心に夥しい人的・物的損害を出した。

前回のパーティーに出て、今回のパーティーに出る事が叶わなかった者が多数にのぼった事はフェイトもティアナも聞き及んでいる。

(この人達にとっては、生きている事を実感できる場なんだろう……)

では、来年の今日、パーティーに参加できなくなる人も出てしまうのか？

フェイトとティアナは心の中に冷たいものが流れ落ちているような

感覚を覚えた。

今自分達の周りにいる者達。嶋津冴子や古代兄弟、真田や『ヤマト』
『相模』のクルー達の中にも、来年中に命を落としてしまう者がい
るかも知れないのかと思うと、全身に寒気が走った。

第127話『デスマッチ・パーティー(2)』(前書き)

タイトルとは裏腹に、管理局側の話の方が多いです…。

第127話 『デスマッチ・パーティー（2）』

2201年12月31日23時57分、地球防衛軍・新横須賀
基地大講堂

新年まで3分を切った時、大講堂の照明が落とされた。
それまでのカオスが嘘のように講堂全体が静まり返る。
常軌をはずれた乱痴気騒ぎを繰り広げていた戦士達は酒杯を置き、
姿勢を正して起立した。

そして、大講堂に声が流れる。

「……今年、その職に殉じ、また白色彗星帝国との戦闘で倒れた宇宙戦士達よ。

私達はあなたの方の分まで、地球の独立と宇宙の平和のために戦い続けます。

地球は何人をも管理も支配せず、またいかなる者からの管理と支配も許さないことをここに誓います。

宇宙戦士の御霊に、総員敬礼ッ！！」

”ザッ！”

参加していた戦士達はその場で敬礼。家族は頭を垂れて黙祷した。
フェイトとティアナは雪菜に倣って黙祷を捧げた。

（いかなる支配もせず、そして許さない、か……）

この地球が時空管理局の管理下に入ることはありえない、と解つてはいたが、ガトランチスや暗黒星団帝国など、極めて強力で凶悪な

軍事勢力の存在が明らかになり、被害が出ている以上、この地球まで敵にまわすことは自殺行為だ。

（地球連邦や地球防衛軍と、手を取り合うことはできないのかなかしら）……）

ここにいる人達は、いざとなれば死兵になっても侵略者に立ち向かう凄まじき戦士達だが、こういう姿を見ていると、実に愛すべき人達だ。大多数の管理局員と何ら変わるところはない。

この地球と管理局が共存できる落としどころは必ずあるはず。

フェイトとティアナはそこまで思い至ったが、周囲の数字を読み上げる声で現実に呼び戻される。

年明けまで残り30秒を切っていた。

カウントダウンの声が一層大きくなり、ゼロを唱和した一瞬の後、会場は輪をかけたカオスを呈した。

あちこちで水鉄砲の撃ち合いやスポーツチャンバラ、即興のダンスが始まる。

謹厳実直な人物とフェイト達も認識している『ヤマト』の山崎機関長が女性職員と『マイムマイム』を踊るその横で、まだあどけなさを残した男子隊員が、胡散臭いアデリーペンギンと踊っている。

ペンギンの中の人物の表情は窺えないが、相手をしている男子隊員は半泣きになっていた。

「……………」

「……………」

(この人達、頭の中に虫が沸いてるんじゃないの!?)

生来(?)のツツコミ気質が復活したティアナだが、それを聞いた者がいるとすればこう答えただろう。

全くもってその通りだと。

「古代艦長!」

女性の声で呼ばれた古代 守はその方向を見やって目を丸くした。

「アリア……。フランベルク・白百合・アリアか?」

「はいっ!」

守に呼ばれた女性士官、フランベルク・白百合・アリアは、涙目で守の側に駆け寄ると、

「古代かんちよ〜。よかった、よかったよ〜……………」

わんわんと泣き出した。

フェイト達も目を丸くしていたが、横にアデリーペンギン、否、嶋津冴子が来たため、誰なのか尋ねる。

「…あいつは、かつて守が指揮していた駆逐艦『ゆきかぜ』の航海長だったのさ。

怪我で療養中に『ゆきかぜ』が出撃して還らなかつたから、自分だけ生き残ってしまった、とずっと苦ししてたんだよ。

日頃はしっかり者なんだがね。それだけ傷ついてたんだろうな……………」

「そうでしたか……」

フェイトも少ししんみりした声になった。

幸いにも、自分達は参加した作戦で、生還者が自分一人だったことはないし、一緒に参加した局員や魔導師が殉職したこともない。

しかし、こちらの世界での、かつてのガミラスとの戦争では、次第に損耗率が高くなり、雪菜から伝え聞いた『ヤマト』就役直前の戦闘では、出撃した地球軍艦艇12隻の内、『ゆきかぜ』等10隻が戦闘で失われ、敗走中には冴子が指揮していた駆逐艦『ひびき』も損傷が酷く、火星付近で艦を放棄せざるを得なかったという。

幸運と不幸な偶然が重なって地球に帰ってきた古代 守も、『ゆきかぜ』の部下を全員死なせてしまったという悔いと苦しみはあるだろう。

「艦長、か……」

次元航行部隊所属である自分も、将来的には義母のリンディや義兄のクロノ同様、次元航行艦を指揮する可能性がある。

管理局の次元航行艦と地球防衛軍の宇宙戦闘艦では用途も性格もかなり違うが、乗組員の命を預かり、モチベーションを保ち続けなければならぬことは何ら変わりなからう。

(こちらの世界にいる間に、嶋津艦長や守さんと話をしたいな……)

この世界で戦闘艦の艦長に求められるものや、どんな気持ちで戦っていたのか、聞けるものなら聞いてみたいと、フェイトは切に思った。

筋骨隆々な留袖姿の漢が点てた抹茶を、半べそをかきながら口にす

るティアナを横目で見ながら。

時空管理局本局・次元航行本部管制室

『レクサス』の消息不明に次ぐ『アストラ』遭難の報に、管制室は騒然としていた。

自分のオフィスから駆け付けたクロノ・ハラウンも現状と経緯の把握にかかっている。

アストラは、新たな有人世界を発見したと報告を寄せた後、調査のためその本星を確認する予定だったと聞く。

『アストラ』は反管理局活動の鎮圧やロストロギア確保・収集の実績が本局上層部に高く評価されていたが、クロノはかねてからこの「実績」とやらに強い疑念と不信感を抱いていた。

反管理局勢力の殲滅では犯罪組織に無関係の者まで死傷させる、ロストロギア回収もかなり強引な手段で行い、管理局への怨嗟をかう等、反管理局の火種を作って回っていると思えないのだ。前・現艦長とも上層部に強力なコネがあるため、都合の悪い事は揉み消されてしまうところも、クロノが不信感を拭えないのだ。

が、遭難となればなおのこと座視できない。反管理局勢力によるテロか、あるいは、ガトランチスや地球防衛軍のような、管理局を上回る軍事力を持つ勢力なのか。

前者ならまだ打つ手はあるし、再発防止策も打てるが、後者ならオプシオンは大きく縮まる。

地球防衛軍のような、比較的穏健な勢力ならば交渉できる余地があ

るかも知れないが、ガトランチスや暗黒星団帝国のような好戦的・侵略的な組織だと、藪を突ついて餓狼を呼び出すようなものだ。

「一体、何が起きようとしているんだ……」

何か大きな力が、時空管理局を破滅の落とし穴にゆっくりと引き寄せているような気分になるクロノだった。

一方、本局の喫茶室では高町なのはと八神はやてがカップを手にしながら、深刻な表情で向き合っていた。

「L級艦『アストラ』遭難の第一報を聞いたクロノは直ちに航路管理局に赴いたため、管制局に入る資格がない2人は喫茶室に場を移したのだ。」

「信じたくはないけど、カリムの預言が現実のものになり始めるとのと違うやるか……」

長嘆息しながらはやてが呟く。

「それって、管理局が傲慢になつてるといふ事なの？」

「皆が皆傲慢なわけじゃないけど、魔法が万能やと思ひ込んでる者も少なくないんや。」

特に若年の高ランク魔導師にな。

彼らの多くは管理世界しか知らんし、ともすればちやほやされる。結果、今の境遇が当然だと思ひ込み、部下への最低限の気遣いすらできんのや。」

そういう子達が任務に赴いた先で地元の局員や住民を見下すような言動をとって、いざこざになるケースが増えとるんよ。」

結果、本局の魔導師「増上慢というイメージが定着しつつあるんや。次元航行艦船の遭難で本局が慌ててるのを、自業自得とかいい気味だと思つとる人もおるし、私ら本局所属の魔導師を「お貴族様」と呼ぶ局員もおる。

高ランク魔導師と一般の魔導師や非魔導師の溝は明らかに年々広がつとる。

何とかせんと、管理局はいずれ内と外から崩されてしまつて……」

「……………」

はやては特別捜査官として各世界を回ることもあり、現地の局員を指揮することも少なくない。

それゆえに、本局局員と各世界の地元局員との軋轢に悩まされることもしばしばだった。

一方、戦技教導官のなのはは、基本的にミッドを離れることはないため、他の管理世界の実情については必ずしも正確に把握しているわけではない。

「ミッド以外では、そんなにひどくなつてるの……………」

「せや。それに加えて、強力な軍事勢力との相次ぐ接触や。

次元航行能力以外では管理局の戦力なんか話にもならん。

どうしたらいいものか……？」

「……………地球防衛軍と組むことはできないのかな？」

質量兵器云々は別にしても、一連の軍事勢力の中で、まともにお話ができるのはあそこしかないよね……………」

なのはは思い切つて地球防衛軍との提携を口にしてみる。

質量兵器の問題はあるが、彼らの主要兵器はエネルギー光学兵器だ。純粋な質量兵器とは言い切れない。

「……向こうは対等の付き合いを求めてくるやるな。それは極めて当然やる。」

でも、こっちのお偉いさん達がそれを認めるかなあ……」

かの三提督や『陸』は問題ないだろうが、魔法至上主義が罷り通る本局の佐官や提督クラスは、クロノやリンディら一部を除けば、かの地球の管理世界編入を主張するだろう。地球連邦は拒否するに違いない。

もし、管理局が強攻策をとったら、待っているのは魔導師の屍山血河。

仮に自分達が行っても結果は変わるまい。向こうは殺すつもりで迎撃するのだから。

「……………」

なのはも俯いてしまった。

「……………いずれにせよ、しばらく次元世界探索はやめるべきやるな。これ以上の艦船の喪失は管理世界の治安維持に悪影響しか齎さないで」

「そうだよね……………」

これにはなのはも賛同した。

しばらくは既存の管理世界の治安維持に努めるのが最善だ。

その考えは正しいのだが、「海」にとっては弱腰でしかなく、結果として傷口を広げることになる。

第127話『デスマッチ・パーティー(2)』(後書き)

パーティーは、多分次回まで続きます。

第128話 『嶋津家&八神家』 (前書き)

それなりに平和な両家です

第128話 『嶋津家&八神家』

日本時間・2202年1月1日、0900時

「おはよう、お嬢さん達！」

マダオ当主がドアをバンと勢い良く開け放ち、ベッドに倒れ伏しているフェイトとティアナに大声をかけた。

「え……？……っ！？お、おはようございますっ！」

まずティアナが目を覚まし、のろのろと起きかけたが、起こしに来たのが家主の嶋津冴子だと気づくや、慌てて身を起こした。

「これ以上寝ると、今晚寝られなくなるぞ。」

シャワー浴びてるうちに朝飯の用意をしておくから、早く浴びてきな

「は、はいっっ！」

当然ながら、冴子に料理などさせようものなら、貴重な食材をみすみす無駄にすることが火を見るより明らかなため、実際に作っているのは高町雪菜である。

冴子が部屋を離れた後、ティアナは隣で沈没しているフェイトを起こにかかった。

ティアナにシャワーの順番を譲り、部屋で髪を梳いているフェイトは、鏡に映る自分と睨めっこをしながら、昨夜の顛末を思い返した。

(……良し悪しは別にして、あんなカオスなパーティーは、管理局じゃありえないよね……)

地球防衛軍の年越しパーティーは午前3時まで続いた。

子供や家族連れは1時過ぎには皆帰宅したが、残った血気盛んな者達はさらにボルテージが上がり、フェイトとティアナは巨大ペンギンに連れられて、特設のメイドガイカフェでカフェインレスコーヒーを奢られたのだが、「メイドガイ」カフェだけあって、接客要員はメイド服姿の屈強な空間騎兵隊員や宇宙戦士ばかり。

さらに相席になったのは、角刈りで目つきが鋭く腹に晒しを巻いた、どこから見ても「その方面」風の着流し男だったため、この手の事に免疫がないフェイトとティアナはドン引きしながらコーヒを口にしていた。

因みに雪菜は、涙目のフェイト達を横に屈強なメイドガイや、件の着流し男とも顔見知りだったのか、怖がる風もなく談笑し、ペンギンは、これも巨大なマトリョーシカと差し向かいでウォツカを口にしていた。

あまりの異様な光景に何度も気が遠くなりかけ、何時頃帰宅したのかさっぱり思い出せない。

(恐るべし、地球防衛軍……)

時空管理局の物差しで彼らを量ろうなんて、どだい無理なのだ。戦闘では狂戦士化するの辞さないだろう彼らは、騒ぐ時も狂戦士だった。

頭のネジどころか脳味噌そのものを遠い遠い空に飛ばしてしまったかのように騒ぎまくったのだ。

かのリオのカーニバルもかくやとばかりに。

（昨夜は大酒したはずなのに、もうケロツとしてるよ。嶋津艦長）
あの人）は……）

冴子にしても、昨夜は相当深酒したはずなのだが、よほど強肝臓なのか、二日酔いしている様子は見られなかった。

（一体、あの人達の身体づくりはどうなってるのかな……）

そこまで考えたところでティアナが部屋に戻ってきた。

台所では雪菜が湯気を上げている雑煮にかかり、冴子はお節の箱をテーブルに並べていた。

ちなみにお節は中島夫人と雪菜の共同作である。

冴子は小皿に数品のお節をとると、それをお茶の間の一角に設けられた仏壇に供えると線香を点け、鈴を叩いて合掌する。

「……………」

仏壇には、高町家と嶋津家それぞれの位牌と、ちょうど10年前、2192年の正月に翠屋の店先で撮影した、両家が一同に会した写真が立てられていた。

「おはようございます」

フェイト達が来たようだ。

冴子も踵を返して台所に向かった。

時空管理局本局・次元港

大型艦船用バスには、XV級次元航行艦をふた回り大型化した艦船が係留され、その前に数十人の人員が整列していた。

艦船の名は『ルスラン』。『エル・グランド』に次ぐXX級次元航行艦の2番艦だ。

2番艦であることと、次元航行艦の遭難が続発している情勢から、華やかな披露式は行われず、すぐに訓練航行に出発することになっていた。

「……………」

乗組員と相対する位置に立っているクロノ他の提督や高官達は一樣に厳しい表情だった。

XX級ですら歯が立たないと判断される複数の軍事勢力が存在している現状では、管理局の次元航行艦は、戦闘艦としては二流以下と評価されている現状ではやむを得ないことである。

「……………」

テレビで新型艦『ルスラン』就役のニュースを見ていた八神はやてと守護騎士達も厳しい表情だ。

L級艦『アストラ』遭難はまだ発表されていない。

「クロノも頭痛が絶えねーみてーだな…」

「『海』の上層部も、地球防衛軍とどう付き合っのか結論が出せんうちに『アストラ』の一件やからな」

ヴィータが口火を切り、はやてが応じる。

「でも、管理局が主張する『質量兵器全廃』に向こうの地球が応じるとは思えないけど…」

「向こうにすれば、独立を守るのに必要な力だからな。」

仲間を悪く言うつもりはないが、管理局の魔導師の殆どは、戦闘に際して殺し殺される覚悟は持っていないだろうさ。

万一地球防衛軍と戦闘になったら、管理局は多数の人材を失うことになるだろうな…」

シヤマルとシグナムも口を開いた。

管理局の全戦力を投入できれば、あるいは勝てるかも知れないが、そんな事をすれば管理世界の治安を守れなくなる。

第一、そこまでして向こうの地球を制圧する必要があるのかも極めて疑問だ。

また、各管理世界政府が容認するとも思えない。

向こうが侵略してくるような動きを見せたのならまだしも、次元航行の手段がないらしく、手を出してくる気配は全くないのだ。

「向こうは、フェイトさん達の身柄をこちらに返した後、管理局にどう接してくるんですか？」

リンフォース・ツヴァイが疑問を呈した。

今はフェイト達を保護しているから、細々ながらやりとりがもたれているが、シャリオ・フィニーノの体調がある程度回復したら、クロノが『クラウディア』で迎えに赴くことになっている。

そして、フェイト達を見送った後、地球防衛軍は管理局にどう接してくるのか？

「多分、そのままフェードアウトやるなあ……」

はやてが予想を口にする。

「管理局は所帯こそ大きいけど、地球防衛軍と比べれば総じてハードもソフトもひ弱や。」

遭難した『レム』を調査すれば、管理局の裏の顔もわかるやるからな。

積極的に付き合いたくはないな……っちゅうことになるんやないかなあ……。

それはともかく、明日は向こうとの定期通信の日や。まずはフェイトちゃん達の様子を見るのが先や。

明日はシグナムも行けるんやろ？」

「はい」

はやての言つとおり、明日はフェイト達との定期通信の日なのだ。

第129話『激論?』(1)『(前書き)』

定期通信のヒトコママです

第129話 『激論？（1）』

なんでこんな事になつとんねん……。

この人は次元世界拡大派に属してるから懸念はしとつたが、まさか開口一番喧嘩を売るとは。

ヴィヴィオもすっかり怯えとるやないか。全く大人げない人や……。真面目な話、シャルルにコーヒーでも差し入れさせとくんやったわ……。

何やるか。向こうの人達の眼差しが、可哀相な者を見るそれになつてきとるわ……。

時空管理局本局

画面の向こうにいるのは地球防衛軍の古代 守、嶋津冴子、古代進の3名とフェイト・T・ハラウン、ティアナ・ランスターの計5名。

こちらにいるのはクロノ・ハラウン、八神はやて、シグナム、シヤマルに高町ヴィヴィオ。そして次元航行本部の提督、アレクト・エルスガーだった。

高町なのはも出席する予定だったが、同僚の教導官が身内の葬式で忌引休暇をとつたため、急遽教導にあたることになったのだ。

本来はフェイト達の現状とシャリオの治療状況を報告し、クロノが

迎えに行く時期を決めるための会談だったのだが、向こうの世界に向かい、行方不明になったままのXV級『レクサス』の消息を確認しようということ、フェイト達の事が終わったら話を切り出す事になっていたのだが、開始早々、エルスガーが『レクサス』の消息を問い質し始めた。しかも高圧的な口調で。

エルスガーの年齢は確か29。向こうの嶋津や古代守と同輩だろうが、提督という肩書を最大限利用して、上官面して話し始めたのだ。

舐められてはいけないとの一心かも知れなかったが、地球防衛軍側の3人のうち、若い古代進がムツとしているだけで、年長の2人は何の感銘も受けていないようだ。

『……お言葉を返すようですが、こちらの太陽系に時空管理局籍の艦船が進入してきたを確認したのは、3ヶ月前の『レム』ただ1隻です。

ただ、1週間前でしたか、あの通信ポッドを何者かが操作した形跡はありました。それが何者かはわかりませんが。

それだけです』

『第一、時空管理局がこちら太陽系に何のご用があたりで？

ハラオウン提督が用意された通信ポッドにはこちらの司令部との通信回線を後付けしました。

それを使って連絡いただければ、出迎えるなり、取り込み中ゆえ後にして欲しいなりの対応をしますが、それすらもなかった上に、太陽系内に張り巡らせた哨戒網でも感知しなかったのですから、何の対応もしていません。

……正確には、当時は取り込み中で、そちらまで手が回らなかったというのが現実でしたね』

素っ気なく答えた守と冴子に、エルスガーは不機嫌さを隠さない。

「手が回らなかったとはどういうことだ！？」
我が時空管理局を無視したというのか！？」

噛み付くように言うエルスガーに、冴子も素っ気なく答える。

『無視も何も、ちょうどその頃、我々は、太陽系に侵入してきたガトランチス帝国軍の残党を迎撃していたのですから』
「迎撃！？」

これにはエルスガーだけでなく、内心で呆れ返っていたはやて達も反応した。

『そうです。偶然にも件のポッドのある空域から侵入してきた紈部隊と、時間差で地球を直接攻撃するミサイル艦隊の二手に分かれてね』

そう言うや否や、冴子はテーブルの上の端末を操作する。

『これからその時の戦闘光景をお見せしましょう。ただ、15歳未満は見ない方がよろしい』

「……わかりました。シヤマルはヴィヴィオを頼む」

シヤマルがヴィヴィオの手を引いて部屋を後にした。
それを待つて映像が再生される。

海王星軌道付近でぶつかる地球・ガトランチス両軍の艦隊。
そして地球付近で砲火を交える『ヤマト』『相模』ら地球艦隊とガトランチスのミサイル艦隊。

飛び交う大出力のビームに宇宙戦闘攻撃機やミサイル等の質量兵器。時たま広がる大火球の中では艦船が砕け散り、数多の命が消えていく。

はやて達は言葉もなく映像を見る。

(これじゃ、管理局の艦船はお呼びもかからんな……。)

それに案の定、地球防衛軍にも中小型で、かつ快速の艦船もあるやないか……)

『ヤマト』 『相模』 のような戦艦でさえ、驚くような機動力を持っているというのに、中型艦(巡洋艦)や小型艦(駆逐艦と護衛艦)はそれ以上に軽快な動きをする。

管理局の艦船は、地球防衛軍の戦艦はおろか、小型艦にも勝てないだろう。

(管理局にはここまで複雑な艦隊機動運用のノウハウがない。必要とするような事態がなかったからな。

仮に地球等の技術を入手して艦艇を整えても、集中して機敏な運用ができれば何の意味もないぞ……)

『……件の通信ポッドが操作された時間と、ガトランチス艦隊がその空域を通過した時間差は、こちらの時間で1時間もありませんでした。

『レクサス』はガトランチス艦隊の先頭集団に攻撃され、撃破されたのではないのでしょうか?』

「証拠はあるのか!？」

『ありません。立証する義務もないですしね。』

第一、領域侵犯目的で来た艦船が第三者に攻撃されても、それは全て自業自得以外の何物でもありません。

大変お気の毒ではありますがね」

突き放した冴子に、エルスガーは激昂した。

「我が管理局の艦船を不法侵入者呼ばわりするのかわ！？」

何様のつもりだ、貴官らは！？」

『こちらの世界の一般論を言っただけですが？

他人の家に黙って入れれば不法侵入で警察を呼ばれますよ。

黙って上がり込んだ者にお茶菓子まで出す義務があるのですか？

エルスガー提督』

「我が時空管理局は全ての次元世界の平和と秩序を守る唯一の組織だ！

その管理局を犯罪者呼ばわりする気が！？」

(…………あかんで。それを言ったらおしまいやんか)

クロノとはやては微かに肩を落とした。

画面の向こうではフェイトとティアナがいたたまれなくなったか、俯いてしまった。

『…………その自負と誇りは尊重しますが、我々がそれに共感したり同調する義務は全くありません』

エルスガーの言を古代 守が一刀両断した。

(向こうにすれば当然の返事やるなあ。

腸が煮え繰り返つとるか、何じゃこのアホは、と思とるんやるな。

…………しかし困った。これじゃ、誼を結ぶどころの話やあらへん。

次元航行艦船が次々やられとる今の情勢じゃ、地球防衛軍まで敵に回すわけにはいかんのになあ…………)

(主はやて、このままでは決裂します。)

そうなればテストアロツサ達の待遇にも悪影響が及びかねません…)

(あちらさんが急に待遇を変えろとは思えんけど、確かにこのままじゃ物分かれやな。)

いい加減止めんといかんわ。そやろ、クロノ君)

(……そうだな。時期を見て僕が諫める)

(それは私に任せてくれないかしら？クロノ、はやてさん、シグナム)

((え?)))

唐突に、聞き慣れた女性の念話が割り込んできた。

第130話『激論?』(2)『(前書き)』

調整役登場です。

第130話『激論？(2)』

剣呑な雰囲気になりかけた双方の空気を一変させたのは。

『義母さん！？』

『リンディ統括官！？』

「母さん…」

「リンディさん…」

「統括官…」

「提督…」

時空管理局本局統括官にして提督のリンディ・ハラオウンだった。

フェイトとティアナはもちろん、地球防衛軍の3人も目を丸くしている。

(母さん！？)

(おっかさんにしちゃ、すげー若いな。)

魔法にはアンチエイジングの作用もあるのかよ？)

等と冴子達が想像している間に、リンディはエルスガーに向き直る。

「ご苦労様。後は私が話すから、貴方は一旦戻っていいわよ」

(後でじっくり絞ってやるぞと言うことだな。ほんの少しだけ同情するな…)

リンディは微笑を浮かべているが、目は笑っていない。

(怖っ、怖いわ〜。リンディさん…)

(私も同感です。主はやて…)

「は、はい……」

一転して意気消沈したエルスガーは敬礼して退室していった。

冴子達も心の中で合掌し、エルスガーを見送った。

エルスガーを見送ったリンディが向き直り、冴子達も姿勢を正した。

「皆さんとは始めてですね。

時空管理局本局統括官のリンディ・ハラウンです。

……娘達を助けていただいた事、心より感謝致します」

深々と頭を下げた。

「当然の事をしたままでですのでお気になさらないで下さい。

地球防衛軍本部司令部所属先任参謀、古代 守であります」

「戦艦『相模』艦長、嶋津冴子であります」

「宇宙戦艦『ヤマト』艦長代理、古代 進であります」

3人は踵を揃え、守と冴子は海軍式の拳手礼を、進は右腕を胸の上にかざす地球防衛軍式の対上官用敬礼をとる。

(ほえ〜……)

(ほっ……)

地球防衛軍側3人の敬礼は、はやてが思わず見惚れ、シグナムも唸るほどてしまうほど「色気」があった。

「フェイト、ティアナさん、元気だった？」

「ええ、私達は元気です……。」

シャーリーもあとひと月でベッドから起きられるようになるって……」

「それは良かったわ……」

少し母娘の会話をした後、核心の『レクサス』の話題に移る。

リンディは冴子達に向き直るや、

「『レクサス』がそちらに赴いたのは、そちらの太陽系の調査目的でした。」

しかし、それが地球連邦の領域を侵犯する疑いがあるのならば、それは率直にお詫び致します」

と再び頭を下げた。

(あっさり認めたよ、この人……)

(さっきのボンとは明らかに役者が違うな……)

少なくともさっきの奴よりはタフな相手のようだ。

向こうがあっさり認めて謝罪したのだから、こちらも歩み寄りなければなるまい。

「……『レオニダス』の遭難現場に残されていた次元通信ポッドには、クロノ提督も知らなかったという、惑星座標軸を発信する機能が後付けされていました。」

それに気づいた私達は、安全保障上の理由からこのポッドを太陽系外縁のカイパーベルトという小惑星帯に残してきました。

理由はご理解いただけるでしょうか？」

「そうですね、世界の安全を担う者ならば、当然の判断です」

リンディも頷く。

「ただ、さらに、通信発信元の座標を示す機能もついていましたので、安全保障のため、これもこちらで弄り、地球圏以外のランダムな座標を表示するようにしましたが、こっこの回路は急造したのか、工作が荒く、安定性も今一つでした。」

その結果、時々変な座標を出すことがありました」

「……と言つと？」

「こちらの木星や土星等を組成している液化・固体化メタンガスの中や、この太陽系のまさに中央点、つまり太陽の中心核付近などで」

「な……！？」

管理局側の面々は、地球出身者と地球での生活経験がある者ばかりだ。当然太陽や太陽系各惑星の基本的な知識は持っている。

木星から海王星までの大型惑星は液化ガスの海の下に固体化したガスの層が存在する。

重力も地球より遥かに強く、引きずり込まれれば脱出は不可能。そして超低温の液化ガスの海で凍り付くしかない。

太陽に至ってはいわねえもがなだろう。

「そのため、我々はポッドに軍司令部との通信機能を後付けし、かつポッドには、座標を鵜呑みにせず、必ず我が軍に連絡せよとの告知文をつけました。」

幸い、そちらのミッド語はこちらの英語と、ベルカ語はドイツ語との共通点が多かったので、英語とドイツ語併記でね」

冴子達の話を一ときり聞いていたリンディは、ひと息ついて話し始める。

「ということは、『レクサス』はガトランチス帝国軍に撃破されたか、そうでなければ太陽・木星・土星・天王星・海王星のいずれかに落下した可能性が強いという事になりますね……」

「……………」

冴子達は無言だ。

「……………わかりました。この件は、『レクサス』は太陽系に侵入しようとしていたガトランチス残党軍に撃破されたと結論づけるのが妥当ですね」

（政治的決着ということか。太陽や星に墜落したと言うわけにはいかないだろうしな。

それに、ウチらが攻撃したわけではないと理解してくれたのだから、異議を唱えるほどのことではないな……………）

「こちらにも異存はありません。ハラオウン提督」

守が言い、進と冴子も頷いた。

「……………さ、硬い話はこのまでにしまししょうか（笑）」

その後はヴィヴィオとシャマルも戻り、元の和やかな雰囲気になった。

双方に飲み物が出されたが、リンディには例によってクリーム＋砂糖入りの緑茶が出され、さらに身体が小さいリインフォース・ツヴアイとアギトが空中浮遊しながら登場して守達を唾然とさせたが、

飲み物を載せたトレイを持ったアナライザーが登場し、挨拶した時には、今度は管理局勢が目を丸くした。

（ティンカーベルまでいるとは、魔法世界もなかなか面白そうだな……）

（固有人格付き自律A.I.ロボットまで実用化されているとは、地球防衛軍恐るべしやわ……）

ともに相手の文化に対し、微妙に間違った感想を持ったまま、双方の定期会談は終わった。

主人公設定2+ (前書き)

久しぶりに主人公設定と+ です。

データは2202年1月現在です。

主人公設定 2 +

? 嶋津 冴子

(イメージCV: 戸田恵子)

本作主人公(ヒロインニ非ズ)

地球防衛軍内惑星防衛艦隊所属、戦艦『相模』艦長兼独立第13戦隊司令官代行(大佐ノ一佐相当)

2172年3月3日生まれ

神奈川県海鳴市(現湘南市海鳴区)出身

身長176?、自称体重70?

背中までの太く艶やかな黒髪と黒い瞳の持ち主で、右頬に走る一文字傷が良くも悪くもトレードマーク。

顔立ちは『20年後の高町ヴィヴィオ』

地球防衛軍初の女性艦長で、今のところ最年少の戦艦艦長。

駆逐艦による高速機動戦闘を身上としていたため複雑な心境であるが、『相模』を率いて白色彗星帝国との激戦を生き延び、ガミラス残党と共闘して古代守一家の救出にも成功する等の結果を出したため、好むと好まざるとに関わらず防衛軍内部での存在感は増している。

軍人としてはそれなりに能力を発揮しているが、私生活面では正真正銘のマダオで、被保護者になった高町雪菜が初めて冴子宅を訪れた時はあまりの惨状に絶句した。

軍服は艦長制服+制帽と戦闘服を併用。

艦長制服は男性艦長と同じ物で、デザインは黒地(襟は錨マーク入

りの赤)に銀地のラインとマーク。

(司令官クラスのアラインやマークは金地に変わる)
但し冴子は出港・帰還時や儀礼用に着用する程度。

戦闘服は2199年以前のもので『ヤマト』乗組員と同デザインの男性用を手直しして着用。ラインや胸部の錨形マークは黒の艦長用戦闘服。

これに士官用ジャケットを羽織るのが通常スタイル。

私服にはスカートの類いが全くないほどのスカート嫌いで、ブレザー＋スカート制服通学を余儀なくされた中学時代を「屈辱と雌伏の3年間」と自ら評している。

喜怒哀楽ははつきりしており、少女期は口より先に手足が出たほど喧嘩っ早かった。

軍人任官後も攻撃的な傾向は変わらないが、指揮官の立場になるとともに一応の成長を見ている。

艦長・指揮官としては闘将タイプ。

激辛食家かつ酒豪で、飲み友達の1人であるナーシャ・カルチェンコとともに、いくつかの飲み屋からは出入り禁止を喰らっている。

(騒動の中心になった事が多いため)

両親(2193年に遊星爆弾で死亡)は養父母で、出生については一切が不明である。

高町家とは実家が向かい同士で家族同然の付き合い。

長女の若菜とは同い年の幼なじみ同士で、その縁もあって、戦争孤児になった末妹の雪菜を引き取ったが、家庭では下剋上されている。

?高町 雪菜

(イメージCV:南 央美)

2188年4月7日生まれ

満13歳9ヶ月

神奈川県海鳴市出身

嶋津冴子の被保護者。

黒く大きな瞳に艶やかな黒髪を右サイドポニーに結った市立中学1年生。

顔立ちには15歳時の高町なのはに酷似。

身長150?・体重不詳(共に成長中)

5歳の時、ガミラスの遊星爆弾で喫茶店『翠屋』を営んでいた実家と父・姉・祖父母を失い、10歳で宇宙戦士だった兄が戦死。

11歳で母の桃香も病死して戦争孤児になるが、姉の幼なじみだった嶋津冴子の被保護者になった。

家事能力はかなり高く、家庭では早々に下剋上を果たしている。

過酷な環境で育ったためか、感情の起伏は必ずしも大きくないが、引き取られた直後よりは表情の変化が豊かになっている由(冴子曰く)

母の桃香同様、先天的に「魔力」を持っており、母の元でトレーニングを行っていたが、母の臨終に際し、「守り石」の「ピュア・ハート」を譲り受け、所有者契約を完了して現在に至る。

存命者でこの事を知っているのは保護者の冴子のみである。

魔法術式等は今のところ不明

目下の夢は『翠屋』の再興。

?ピユア・ハート

(イメージC.V:小林 修)

高町雪菜の自律人格型魔法制御媒体で、直径15?程の丸く蒼い宝玉形をしている。

元々は雪菜の母・桃香の魔法制御を担っていたが、死を間近にした桃香の遺志と自らの意思で雪菜と契約した。

40年以上前に桃香の所有になったが、地球に来た経緯は不明。

雪菜を「レディ」と呼び、冴子を「カピタン」(艦長)と呼ぶ。

地球滞在が長くなった結果、酒風呂を好む等、地球化・和風化が進んでいる。

地球に魔法文化がないことと、雪菜自身も積極的に魔法を使わないため、自主トレーニングの管理が主だが、白色彗星帝国の巨大戦艦の主砲弾が旧川崎市に着弾し、大量の土砂が横須賀まで飛来した時は強固な障壁を展開して雪菜を守った。

第131話『激論?』(3)『(前書き)』

今週末最後の投稿です。

タイトル関係ないかも……

第131話『激論？(3)』

ミッドチルダ首都クラナガン郊外・高町家

『 というわけなんよ。』

リンディさんのおかげで何とか丸く収めたけど、そうでなかったら決裂したか、あちらさんの前で大恥かいたったかも知れんわ』
「そうだったんだ……」

帰宅するなり、フェイト達との定期通信の場に出ていたヴィヴィオから、冒頭から地球防衛軍側と口喧嘩になったと聞かされ、夕食後はやてに確認の通信を繋いだところ、リンディの仲裁で事なきを得たということだ。

ホッと胸を撫で下ろしながらも、エルスガーや「海」の上層部のやりようには苛立ちを隠せない。

フェイト達を救出し、重体だったシャリオには外科手術までして命を助けてくれた当の『ヤマト』『相模』の指揮官に感謝の一言もなく、いきなり『レクサス』行方不明事件の回答を迫るとは、礼儀知らずにも程がある。

エルスガーが、次元航行艦の艦長時代にも乗組員や現地局員、住民達に同じような姿勢で臨んでいたのかと思うと胸が痛くなる。
よく地球防衛軍側が怒らなかつたと思つたが、

「あちらさんは可哀相なものを見る目やつたわ……」

と聞き、なのはは激しい脱力感に襲われた。

怒るにも値しなかったということなのか？

フェイトとティアナはさぞいたたまれなかったことだろう。

『……まあ、百聞は一見に如かずや』

はやてが一部の映像を再生する。

フェイト、ティアナはもとより、シャリオも前よりは顔色が良くなっている。

それは良かったのだが、クロノの直属上司として自ら同席を希望したというエルスガーはあまりに拙速過ぎた。

地球防衛軍側の3人　宇宙戦艦『ヤマト』艦長代理の古代進と、その兄で本部先任参謀という守。宇宙戦艦『相模』艦長の嶋津冴子は、一番若い古代進こそ最初にむっとしてただけで、彼らがエルスガーを見る視線は、はやての言うとおり可哀相なものを見るそれだった。

地球防衛軍は、これまで管理局と相対してきた反管理局組織とは全く異なる、地球連邦という恒星系国家の正規軍だ。

にも関わらず、従来の反対勢力と同じような対処をしたのでは、まさに墓穴を掘るようなものだ。

いや、たとえ小さな反対勢力に対しても、もつと誠実に対処すべきだったのだ。

それはさておき、なのはの教え子も乗り組んでいた『レクサス』は、例の通信ポッドに接触した直後、地球に報復戦を挑んできたガトランチス帝国軍に撃沈されたか、出鱈目な座標を真に受けて、太陽・木星・土星・天王星・海王星いずれかの強力な重力に引きずり込まれたかのいずれかで、『レクサス』が太陽系内に入ったかどうかは、地球防衛軍も把握していないという。

「一応音声鑑定にかけてはみるけど、彼らが嘘を言っているようには思えなかった…」

「それで、リンディさんはどう結論を出したの？」

「例の通信ポッドに接触してほどなく、太陽系に侵入を図るガトランチス艦隊に急襲され、緊急通信すら出せずに撃破された、としたんや。」

出鱈目な座標を真に受けて、太陽や木星に墜落しましたなんて恥ずかしくて発表できんし、そうなった確証もないんや。

それよりは、ガトランチス艦隊との戦闘で殉職したとする方が、クルーの名誉も保てるし、2階級特進させた上で遺族に十分な補償もできるからということや……」

はやての説明に、なのはは唇を噛んで俯いたが、

「……納得いかないよ。何で『ヤマト』と『相模』は通信ポッドをいじ『それ以上言うたらあかんで。なのはちゃん』どうして!？」

「信用できるかわからん組織に、自分とこの重要な基地や拠点の位置を馬鹿正直に教える軍人なんか即刻クビやで。」

あちらさんの肩持つ気はないけど、『ヤマト』『相模』がとつた処置は正しいで。これはリンディさんも同意しとる。

むしろ責められるべきなのは、クロノ君にも内緒でポッドに小細工させた「海」のアホどもや。

あんな姑息な真似をしなければ、そもそもあそこまで警戒される事はなかったかも知らんし、『レクスス』が出ていく必要もなかったかも知れん。

加えてさらに今日の一件や。管理局はあちらさんのブラックリストに載ったかも知らんな……」

「……そんな!じゃあ、フェイトちゃん達は!？」

地球防衛軍が時空管理局への不信感を募らせれば、かの地に保護さ

れているフェイト達の待遇にも悪影響が及ぶかも知れない。
なのはにとって、目下の心配事はそれだった。

「……それは今のところ大丈夫やる。」

向こうの司令長官さんがフェイトちゃんとティアナに直接面会してくれて、待遇は保証してくれとるそうやから。

だからこそ、管理局はこれ以上あちらさんを刺激したらあかん。

……なのはちゃん、アクルがガトランチス軍にやられ、『ヤマト』
がその艦隊を一撃で掃滅した時点で、管理局は次元世界最強ではな
くなったんや。

今、管理局は真綿でゆっくりと首を絞められ始めているのかも知れ
んのだ。

私ら管理局と協調してくれる可能性があるのは、地球防衛軍だけな
のかも知れんのや。

それを認識できなければ、管理局はいずれ、地球を侮った拳句、返
り討ちに遭ったガトランチスの首脳と同じ運命を辿るで……」

「はやてちゃん……」

いつになく真剣なはやての瞳に、なのはは絶句した。

天の川銀河内・某宙域

「殿下、敵艦は完全に破壊されました」

「ハイパー熱核ミサイル、全弾正常に作動しました」

「宜しい、当然だ。」

参謀長、残骸と死体のサンプル回収を忘れるなよ」

「はっ！」

殿下と呼ばれた青年は、予定調和だとばかりの口調で傍らに控える

参謀長に命じた。

「あんな弱い艦で『次元世界の管理者』とは笑わせてくれる。

……まあいい、ハイパー熱核ミサイルの実用試験に貢献してくれたことだけには感謝しよう。

全艦反転、帰還するぞ！」

「はっ！！！」

デインギル帝国第1皇太子にして第1艦隊司令官のルガール・ド・ザールは嘲笑混じりに呟いて、艦隊の反転を命じた。

第132話『新たなる胎動(1)』(前書き)

……『アンドロメダ』等の拡散波動砲に対して、『ヤマト』の集束波動砲を「助さん波動砲」と呼んだ事がある人はどのくらいいたでしょう？

第132話『新たなる胎動（1）』

ミッドチルダ、首都クラナガン郊外・高町家

夜のニユースでは、次元航行艦『レクサス』が、第197管理外世界「第2地球」に再進攻を図ったガトランチス帝国軍の急襲を受けて撃破された、という時空管理局次元航行本部のプレスリリースを流していた。

管理局としても、『レクサス』遭難の責任を地球防衛軍に問うことは困難との結論に達したのだ。

責任を問えば、事前連絡と地球防衛軍の承諾なしに太陽系内へ進入しようとした目的を問い糾され、領域侵犯目的で来たのかと逆に責められかねない。強行手段に出たとしても、彼我の艦船の性能が段違いな上、地球防衛軍には宇宙戦闘攻撃機まであるのだ。

クラナガンをはじめとする主要都市市民のインタビューが放映されているが、多くは管理局のコントロールが効かない軍事勢力への不安や、次元世界探査の一時中止を求める声だった。

が、同時に管理局は、地球防衛軍・ガトランチス軍とも戦闘力は極めて高いが、彼らに次元航行技術は確認されておらず、管理世界へ侵攻してくる可能性は極めて低いことと、また、地球防衛軍は現在ハラウン執務官らを保護しており、彼女達の身柄返還に向けて、管理局と定期的に連絡を取り合っており、双方の間にトラブルは起きていないので、心配することはないとも報道官は話していた。

「……………」

テレビに見入りながら、高町なのはは複雑な思いに浸っている。

時空管理局と地球防衛軍との関係は、公式発表されたほど良好でないことを肌で感じているからだ。

フェイト達の待遇が思った以上に良好であることは、彼女達の顔色や声の調子でわかっている。

ガトランチスの攻撃で一時は重体だったシャリオも確実に回復していることもわかった。

とはいえ、彼らは質量兵器を多用する純軍事組織であり、地球連邦という統一国家の正規軍だ。

質量兵器は管理局法に違反しているから、本来は取り締まり、必要ならば武力を用いても質量兵器を廃棄させなければならない。

しかし、地球防衛軍はこれまでの武装組織や正規軍とは比較にならない強力な戦闘艦船と機動兵器を持つ。

ガトランチスや暗黒星団帝国軍のような好戦的かつ侵略的ではないようだが、管理局と一線を引く姿勢である以上、潜在的な脅威であることは変わらない。

そして案の定、先日のやり取りで、地球防衛軍側の3人の若い士官が、

『管理局は管理局、うちはずち』

という趣旨を明言したことで、管理局とは一線を画する姿勢を示した。

非公式で、かつ予想していたとはいえ、管理局の下に集う気はないという意思表示をしたことに、本局上層部、特に次元世界拡大派の高官は渋面だろう。実行使すれば甚大な被害を被るのが目に見えるからだ。

「……ねえ、なのはママ」

余程難しい表情をしていたのか、目の前にヴィヴィオが来てこちらを見ている。

「なあに？ヴィヴィオ……」

一人娘は少し考えるようにしてから、顔を上げて母に尋ねてきた。

「かなり局とちきゅうぼうえい軍はどうして喧嘩しちゃったのかな……。
ちきゅうぼうえい軍とせんそうになっちゃったの？」

「ヴィヴィオ……」

ヴィヴィオはエルスガーと地球防衛軍士官の刺々しいやり取りを目にしている。

はやてに言わせれば、いきり立ったのはエルスガーだけで、向こうは白けていたということだが、ヴィヴィオの目には喧嘩しているように見えたことだろう。

しかし、互いに相手をよく知らないでいるのなら、行き違いはあるだろう。

これはかつてなのは自身が、アリサやフェイト、ヴォルケンリッタ達とぶつかり合い、そして友情を結んだ経験則だ。

「大丈夫よ。管理局も、地球防衛軍も、まだお互いの事を知らないからだよ。

じっくり語り合えば、必ず仲良くなれるはずだよ。
フェイトママ達も、向こうの地球の事を勉強して、そして、管理局の事も知ってもらおうと頑張ってるんだから……」

これは確信できた。療養中のシャリオは仕方ないか、フェイトとティアナは無為徒食するような事はしないのだ。
必ず、向こうの地球の生きた情報を持ち帰ってくるはずだ。

地球防衛軍・新横須賀基地庁舎前

「……………」
「……………」

フェイトとティアナは目の前の光景に二の句が継げずにいた。

いい歳をした大人達が、雪の玉を投げ合っている。

ついさつきまで一緒にいた嶋津冴子と古代兄弟も彼らの中に混じって雪の玉を投げつけている。

始めは無視して通り過ぎるつもりだったらしいが、流れ玉が顔面に当たった嶋津冴子は

「ふっふっふ……………。これは私に対する挑戦だな……………」

と、実に素敵なお顔になったかと思うと雪玉を作り、いきなり古代守の顔面目掛けて投げつけた。

それを機に古代兄弟も雪合戦に参戦し、すっかりグダグダな光景になってしまった。

もう上官も部下も関係なしにわーわー、ぎゃあぎゃああ叫びながら雪合戦に興じる古代達を呆気にとられて見ていたフェイトとティアナだが、

「「……………ぷっ、クスクス……………」」

堪えきれずに嘔き出し、肩を震わせて笑い始めた。

新横須賀基地庁舎の一室

「……………何やってんだか、あのバカどもは……………」

その様子を庁舎の一室で目にした真田志郎は呆れた表情でしばらく見ていたが、肩を竦めるとデスクに向き直り、作業に戻る。

画面に図示されたファイル名は「特命：宇宙戦艦『ヤマト』近代改装最終案」……………。

第133話 『新たなる胎動(2)』 (前書き)

新生13TFの輪郭が見えてきました。

第133話 『新たなる胎動(2)』

地球防衛軍・新横須賀基地内、内惑星防衛艦隊司令部

「改装、ですか……」
「そうだ」

一室には古代 守と進、真田、冴子と内惑星防衛艦隊司令官のタナリットが顔を合わせていた。

「連邦各州で独自設計の大型戦艦の設計・建造が進められているのは知っているな？」
「はい」

切り出したタナリットに冴子と古代進が同意する。

白色彗星戦役で大打撃を被った艦隊戦力の再建を急ぐため、各州に独自設計の導入を認め、次期主力艦艇開発も睨んだ戦艦や巡洋艦等の建造を要請していた。

「……日本は戦艦の新造は見送り、『ヤマト』の近代化改装と月村・バニングスグループからの提案をベースにした大型航洋巡洋艦を試作することにした」

「大型巡洋艦、ですか……」
「そうだ。来たるべき宇宙移民時代を睨み、長距離・長期間の航海に使える艦を、ということだ。」

『アリゾナ』等の戦艦もこのコンセプトに則って設計してある」

北米州（旧USA、カナダ）はガミラス戦役中に地球脱出用の宇宙戦艦として計画したものの、ガミラスの攻撃で破損して建造が凍結されていた『アリゾナ』を、『アンドロメダ』の設計を流用して工事を再開。6月に竣工する予定と発表されている。

また、2番艦にあたる準同型艦『モンタナ』も既に起工され、9月に竣工することになっていた。

いずれも基準排水量8万？級で、全長300？に達する大型戦艦だ。また、イギリスやドイツ、ロシア、中国も同様の宇宙戦艦の建造を発表しており、それぞれ『プリンス・オブ・ウェールズ』、『ビスマルク』、『ガガーリン』、『長江』と命名が決定済で、2203年6月までに竣工・就役することになっていた。

一方、日本は既存の『ヤマト』を強化改装して、カタログスペックでは『アンドロメダ』級に並ぶものとする他、前述の大型巡洋艦2隻をこの秋までに就役させる計画を進めていた。

一方、実験艦枠で建造が進められている超アンドロメダ級戦艦『マールス』は7月の竣工、就役と決まっている。

「……しかし、『ヤマト』が改装入りするということは、13TFは存在意義がなくなりますから、解隊と考えるて宜しいのですか？」

冴子がタナリットに質す。

独立第13戦隊は白色彗星帝国本国の来襲が迫り、乗組員の錬成途上の『相模』と、発進の経緯や性能面から艦隊編入が困難な『ヤマト』の2隻を急遽組ませた、いわば泥縄部隊だ。

いつまでもこのままでいいはずがないだろう、というのが冴子の考えだ。

『ヤマト』が改装で長期にわたって休眠状態になるのであれば、1

3TFは解隊し、『相模』はどこかの艦隊に編入されるのだろうと
冴子は思っていたのだが、どっこい、そうはいかなかった。

「……………13TFについては、内惑星防衛艦隊所属のまま再編する方
針だ。」

藤堂長官の裁可も頂いている」

（ぬわんだと　！？）

タナリットが告げ、絶句した冴子の前に守が書類のファイルを差し
出した。

「……………」

『独立第13戦隊編成表（2202年1月10日付発令）』

とあるプリントには、冒頭に、

司令官：内惑星防衛艦隊司令官兼任

司令官代理：嶋津冴子（戦艦『相模』艦長兼任）

と記載され、艦船名も記載されていた。

暫定旗艦・戦艦『相模』（艦長：嶋津冴子、副長：大村耕作）

巡洋艦『鳥海』（艦長：フランベルク・棗・シルヴィア、副長：フ
ランベルク・白百合・アリア）

同・『伊吹』（艦長：塩江龍一、副長：綾歌麗奈）

警備巡洋艦『水無瀬』（艦長：ナーシャ・カルチェンコ、副長：篠
田巖）

冴子に次ぐ次席の艦長は『伊吹』の塩江龍一だ。

(……塩江と綾歌はまだしも、ハッピートリガーとチキンレーサー！？ 副長も問題児ばっかじゃないか！)

自分の事を遠い遠い棚に放り投げた冴子は、内心で大きく溜め息をついた。

地球防衛軍の残念美女、あるいはバッドビューティース等と言われる女性艦長が一堂に会していた。

彼女達は、時空管理局関係者からも

『鋼鉄の魔女』

『地球の魔女王達』

等と畏怖を込めて称されることになるが、それは少し後の話。

時空管理局本局、会議室

L級次元航行艦『アストラ』の遭難を受け、管理局の海・空に加え、陸も交えた緊急会議が開かれた。

まず、『アストラ』の出航から緊急救難信号をキャッチするまでの経過が説明された。

『アストラ』が最後に送ってきた通信文は、

『本艦はこの世界の艦隊に襲撃され……』

で途切れていた。

少なくとも、地球防衛軍やガトランチス、暗黒星団帝国ではない、未知の艦隊と交戦したらしい。

本局の強硬派からは、直ちに搜索・探索隊を派遣すべきだとの声が上がったが、「陸」の高官からは、『アストラ』の搜索だけならまだしも、探索は新たな犠牲を増やすだけだ、との声上がり、本局の慎重派もこれに同調して、互いに譲らぬ激論になった。

また、ミッドチルダ防衛長官のアッテンボロー中將は、新世界探査の無期限中止を提案。これに強硬派が反発することになった。

「我々は次元世界の正義と安全を守る義務がある！」

我が管理局の正義を自ら否定するというのか!？」

「……貴官はそう言うがな。艦船の遭難が相次いでいるのに、尚も世界探査を続けることに何の意味があるのだ？」

ガトランチスや暗黒星団帝国のような好戦的勢力への対策の目処が立っていない上に、唯一話を通じそうな地球防衛軍にまで喧嘩を売るような真似をするなど、正気の沙汰とは思えんがね」

「地球防衛軍も大量破壊兵器を持っている危険な勢力だ!信用などできると思っているのか!？」

「こんな所で吠えないで、地球防衛軍側にそのまま言ってみたらどうかね？」

…ということは、ハラOWN執務官らは用済みということなんだな?」

皮肉混じりに返すアッテンボローに、陸の出席者は失笑し、本局の強硬派が反発しかかるが、フェイトの名が出てきたことで、流石の強硬派も失言に気づいて黙り込んだ。

この時点でフェイト達を切り捨てれば、市民のみならず管理局内部からも激しい反発が起きることに気づいたのだ。

と、ここで「三提督」の一人、ミゼット・クローベルが動いた。

「『アストラ』を襲撃したのが何者かわからない以上、派遣任務は搜索だけに限定し、かつ複数の艦で赴くべきでしょう。

また、この搜索活動の結果が出るまで、新世界探索は一時見合わせ、この任務についている艦船は一旦帰還させて、各管理世界との連絡を密にすべきだと思いますが、皆さんはどうお考えですか？」

陸や本局の穏健・慎重派は賛意を示し、本局の拡大・強硬派も渋々同意した。

議題は『アストラ』搜索任務に移り、次元航行艦4隻を派遣することになった。

その内訳は、XV級が3隻。そして旗艦はXX級1番艦『エル・グランド』と決まった。

第134話『悲劇の予兆』(前書き)

管理局艦隊、出撃です

第134話『悲劇の予兆』

時空管理局本局・次元港

攻撃を受けて消息不明になったL級艦『アストラ』を搜索するため、管理局最大のXX級航行艦『エル・グランド』と3隻のXV級艦が次々と次元港バースを離れていく。

次元港には三提督を筆頭に、本局勤務の局員が多数見送りに出ていた。

「……………」

局員は一様に厳しい、あるいは浮かかない表情だ。

出航した艦に家族や恋人が乗っているのか、涙ぐんでいる女性局員も見受けられる。

同じく見送りに来ている者の中にはクロノ・ハラウンもいた。

乗艦『クラウドディア』がドック入りしたばかりのため、当面出動の予定はないが、事態の推移によってはドック明け後に出動という可能性もあるため、情報収集は欠かせない。

同時に、乗組員には可能な限り一時帰宅を勧めた。

強硬派を中心に、『アストラ』は油断したからやられたのではないかと言う空気が漂っているが、クロノは嫌な予感が沸き上がるのを禁じ得なかった。

ガトランチスや暗黒星団帝国同様、強力かつ好戦的な軍事勢力ではないのか？

クロノの脳裏にカリム・グラシアの預言が蘇る。

管理局は全次元世界の平和と正義の守護者たる唯一の存在と自認し、次元航行手段を実用化していたり、実用化の目処が立ちつつある世界を次々と管理世界に組み入れたが、全てが平和的だったわけではなく、「編入」時の行き違いや、ロストロギア収集を強引に行ったことが原因で、管理局に反発する者も決して少なくはないのだ。

『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり……。盛者必衰、驕れる者久しからず、か……』

フェイトから借りて読んだ日本の代表的古典文学の一つ、『平家物語』冒頭の一部だ。

「管理局は驕り高ぶっていたというのか……？」

「そう思っとる人達も少なくないやろな……」

独白するクロノに、一緒に見送りに出ていた八神はやてが応じる。

「ロストロギアの収集や管理世界に組み入れる時に、管理局の理屈だけを押し付けた事例はいくらでもあったやろ。

一族に伝わる宝みたいな、金で代えられない物を奪われた人や、編入された後に管理局によつて職を追われた人にすれば、後でどんなケアをしようと、私らに対する憎しみは消えんやろな……」

特別捜査官として赴いた先で、地元住民からの冷たい視線や怨嗟の言葉、どこからともなく投げつけられる石つぶて…。

そんな中で捜査協力を得るのは、大変の一言では済まされなかった。

随行の局員には高圧的に振る舞う者もいたが、その都度はやては寤

めていた。

「ああ言う人達からすれば、管理局は傲慢だと大声で叫びたいやろなあ……」

「とはいえ、管理局が崩壊すれば、世界の治安は乱れに乱れてしまふ。」

こちらが悪いところは正さなければいけないが」

「直すべきところは沢山あるやろなあ。」

一番の問題は魔法至上主義やけど、これは私らにとっては自己否定に等しいからなあ……」

続発する次元航行艦の遭難・戦没と地球防衛軍の宇宙戦艦『ヤマト』
『相模』が示した戦闘力は、今の魔導兵器の限界を如実に示している。

そこから導き出される結論は、

『結局のところ、戦闘魔法は訓練された兵士達が扱う質量兵器には
歯が立たない』

と言うことだ。

この局面を打開するには、こういった世界からは完全撤退するか、
逆にこれらの世界の技術を導入するかのいずれかなのだが、撤退には
強硬派が反対し、技術導入は時空管理局を根本から変えなければ
ならない。

質量兵器は、非魔導師でも必要な訓練を受ければ扱える。

そうなれば、これまで魔導師が持っていた優位性は失われ、今の地
位を追われることになる。

自己否定に等しい選択を今の魔導師達ができるとは思えない。

それに、どこからその技術を得るかだ。

『レオニダス』を襲ったガトランチス軍の艦船は『ヤマト』『相模』によって徹底的に破壊され、肝心の推進機関部を回収することはできなかつた。

暗黒星団帝国は『レム』の遭難以降遭遇していない。

そして地球防衛軍も、クロノが用意した通信ポッドに小細工をしたことを見抜かれた挙句、『レクス』を失い、フェイト達の事以外では完全に警戒されてしまっている。

『レム』の船体から遺体とともに機密資料も回収・解析された可能性もあり、管理局のかなり深い部分や、魔法の事も丸裸にされているかも知れない……。

火星宙域、地球防衛軍巡洋艦『伊吹』艦橋

「艦長、本部から入電です。」

帰還後、8日1400時までに本部に出頭されたいとのことでした。

「……わかつた」

通信長から伝えられた艦長の塩江龍一は頷いた。

「新たな配属が決まったんでしょうか……？」

「その可能性が高いが、断言はできないな。」

ともかく、帰還したら本部に行ってみるさ。」

副長兼航海長の綾歌麗奈が塩江に質すが、当の塩江も確答はできないようだ。

バルゼー艦隊との緒戦で潰滅したヒペリオン艦隊で唯一生き延びた『伊吹』は、修復工事後、暫定的に内惑星防衛艦に転属して試験を兼ねた訓練航海の途中で白色彗星帝国軍残党との戦闘に参加。

その後、整備と補給を受けて訓練を再開したのだが、地球への帰還を前に、艦長に本部への出頭命令が来た。

塩江個人ではなく、『伊吹』艦長宛なので、艦そのものに関するものは間違いない。

となれば、正式な配属先が決まったと考えていいだろう。

が、冷静をもって鳴らす塩江も、残念美女達と組まされることになるうとは、神ならぬ身ゆえ、露ほども予想していなかった。

第135話『海鳴へ(1)』(前書き)

私見ながら……。

CXの報道姿勢には疑念どころか不信すら感じます。

第135話 『海鳴へ(1)』

湘南市海鳴区、市民慰霊園・海鳴

高さ100?の慰霊塔と、ガミラス、そして白色彗星帝国との戦争で命を落とした旧海鳴市民64万4千余名の氏名が刻み込まれている。そして慰霊塔の先には、直径500?を超えるクレーター湾が広がっていた。

「クレーターの口辺りが臨海公園の跡です……」

「そう……」

「……………」

高町雪菜がクレーターと相模湾が接するあたりを指差す。

話には聞いていたが、この世界の今の海鳴の姿に、フェイトとティアナは言葉を失っていた。

慰霊塔前で合掌した彼女達は、

一面に荒涼とした枯れ野原が広がり、海側には最近植林された松の若木が、内陸側には広葉樹の若木が並んでいる。

内陸部の奥まった所には風力発電用の風車が立ち並んでゆっくりと回転していた。

(ここが、あの海鳴……?)

世界は異なるが、6年間を海鳴で過ごしたフェイトは言葉が出てこない。

「余りの荒涼さに驚いたかい？」

嶋津冴子が振り返り言う。

「はい……。まさか、これほどとは……」

「そうだな……」

でも、この風景はここだけじゃない。

この地球の方々にこういう風景があるのさ」

「……………」

「……………」

先頭を歩く冴子が静かに話す。

（そう言えば、嶋津艦長は、自分は故郷を守れなかったんだ、と言っていたわ……）

先程、慰霊塔に花を供えた後、冴子はしばらく頭を下げてままだった。

（この人も、ずっと苦しんでいるのかな……？）

軍人は同胞の生命を守るのが仕事であり、結果で評価される。

その意味で、ガミラスの地球への攻撃を阻止できなかった責任は免れまい。

（でも、『ヤマト』以前の地球防衛軍の戦力では仕方なかったと思うけど……）

フェイト、ティアナとも、ただ日々を浪費していたわけではない。

図書館に通ったりしながら、この世界の情報収集を行っていた。

この世界の地球も、フェイトが知っている第97管理外世界の21

世紀初めまでは、ほぼ同様の歴史を辿っている。ただ、『ヤマト』の母体？である旧日本海軍の戦艦『大和』の最期は、フェイト達が知っている第97管理外世界とは異なっており、大爆発は起こさずに徳之島沖に沈んだようだ。

そして21世紀初めから22世紀終わりまでは、

（この間のことは、はやてとなのはや本部には言わない方がいいと思うんだけど……）

（そうですね。忘れてしまいました）

馬鹿正直に管理局に報告して、第97管理外世界に妙な干渉をされては困る。

そして、ガミラスとの戦闘。

彼我の兵器の性能差を考えれば、地球は健闘したと言える。

『ヤマト』就役前の地球軍の主力艦船だった『M-21741式宇宙戦艦』や『M-21881式宇宙突撃駆逐艦』は、ガミラス艦に比べればだいぶ見劣りするが、通常空間での機動力は管理局の艦船を上回り、アルカンシエルを除いた火力でも管理局のそれを上回っている。

そして宇宙・大気圏両用戦闘機の『ブラックタイガー』はガミラス軍の戦闘機と互角以上に戦っていたようだ。

とは言え、客観的事実として遊星爆弾は大半が地球に着弾し、人類を含めた地球上の動植物の大半が消えた。

地球防衛軍はその任務を全うできなかったのだ。

（今いる地球防衛軍の人達は、皆、あの当時に同胞を守れなかった

という後悔と苦しみと悲しみを抱えているのか……)

だとすれば、白色彗星帝国相手に地球防衛軍の残存部隊が死兵と化してでも戦いを挑んだことも頷ける。

(管理局はこの人達と戦ったら、間違いなく負けるわ)

ミッドに帰ったら報告する機会があるだろうが、地球防衛軍や地球連邦を敵に回したら、管理局に味方するところはなくなるとハッキリ言ってる。

「……です」

雪菜の声に、フェイトとティアナは我に還った。

長方形の石板に無数に刻まれた夥しい犠牲者の名前。

その一角に、雪菜を除く高町家一同と、冴子の養父母の氏名もあった。

(……!……!)

(……!……!)

この世界にも高町家が代々続いていたことと、その一家が戦争という愚行で事実上全滅したという事実、フェイト達は一言も発することができなかった。

(向こうの海鳴の街が戦争や大津波で全滅し、高町家の人達やアリス、すずか達が命を落とす事になったら、私はしばらく立ち直れないだろう)

冴子達に続いてフェイト達も花を供え、4人は慰霊園を後にした。

冴子がハンドルを握るレンタル4WDで頭を天井にぶつけそうなほどの悪路に揺すられて15分。レンタカーは海を望む一角に止まった。

4人の目の前の地面には、

『都合によりしばらく休業致します。翠屋』

と、明らかに少女の字で書かれた板が立てられていた。

(この娘(雪菜)は翠屋再建を諦めていない)

『跡地』ではなく『休業中』と書いたところに、雪菜の意思があるのだろう。

世界こそ違え、思い込んだら一途に進むところはやはり高町の血を引いた娘だ、とフェイトとティアナは思った。

第136話『海鳴へ(2)』(前書き)

定期更新です。

地震のとばっちりで、遂に自宅待機指示が出ました……。

第136話『海鳴へ(2)』

海鳴への墓参を済ませた後、ランチタイムを挟んで、冴子達は英雄の丘に足を伸ばした。

「やれやれ、考える事は同じらしいな……」

駐車場に車を入れ、皆が降り立った時、冴子達の車の隣にもう1台のレンタカーが停まり、4人の男女と1人の赤子が降りてきた。

「よう、雪菜ちゃんの保護者」

「なんだ？サーシャの父ちゃん」

「……………」

「……………」

土留め色のオーラを発する同期生コンビに、弟とその許嫁、それと被保護者の少女は天を仰いだり肩を竦め、フェイトとティアナも微笑を浮かべた。

フェイト達も、2人がこういう間柄だということは何度となく目にしたため、免疫がついてしまったようだ。

互いに毒舌を吐き合うあたり、なのはとフェイト、ティアナとスバル、エリオとキャロ、そのいずれとも異なる相棒関係のようだが、何度となく翼やへさきを並べて戦ったからこそなせる業なのかも知れない。

これを成長と言えるかは議論が分かれるところだが……。

そしてスターシャは、頭上にいくつも『？』を浮かべていた。

「古代さんのご両親のお墓参りに？」
「ええ。それとサーシャの初顔見せにね」

ティアナと雪の話し声を聞きながら短い坂道を上ると、やがて杖をついた人物の銅像が見えてきた。

その像を中心に、夥しい人数の氏名が刻み込まれたいくつもの真新しい石板が立てられている。

「……ガミラスや白色彗星帝国との戦闘で亡くなった人達で、銅像の人が『ヤマト』の初代艦長です」

「そう……」

雪菜がフェイトとティアナに耳打ちする。

宇宙戦艦『ヤマト』初代艦長・沖田十三。
自らの身体がボロボロなのを承知の上で、クルーの大半が新人だった『ヤマト』を指揮統率し、文字通り命懸けで地球人類史上初の往復約30万光年の銀河系間航行を成功させ、地球人類を滅亡の淵から救った人物。
古代進はもちろん、兄の守や嶋津冴子ら、地球防衛艦隊の中堅幹部達をも一人前の宇宙戦士に鍛え上げた人物だという。

（この人が、不可能を可能にした人……）

成功率がゼロに近い、まさに手探りの大遠征に自ら挑戦し、途中からは古代進の補佐を受けたとはいえ、艦の士気を最後まで保ち続けて帰還を果たしたのだから、その精神力はどの位のものなのか？

（直接的な比較はできないだろうけど、伝説の三提督をも上回る人かも知れない……）

時空管理局や管理世界が滅亡の崖っぷちに追い詰められた記録はない。

しかし、この世界は一度ならず瀬戸際に追い詰められ、宇宙戦士達の死を厭わぬ闘いで窮地を脱したのだ。

（修羅場とは言うけど、私達が体験した修羅場なんて、多分足元にも及ばないな……）

（地上本部崩壊や、ゆりかご起動の時の絶望感が生易しいもの思えてきたわ……）

フェイト達はまだ知らないが、時空管理局はJS事件とは比べものにならない絶望と無力感を突き付けられることになる。

沖田像の足元に花を供えた時、台座に取り付けられたステンレスらしい金属板に、フェイト達は思わず見入った。

「『明日のために、今日の屈辱に耐えるのだ』……」

フェイトがエッチングされた文字を読む。

「それは、沖田艦長が俺に向けた言葉なんだよ……」

当事者の守と、あの場に居合わせた冴子がほろ苦い表情でその時の一部始終を話して聞かせた。

傍らのスターシャと進、雪も哀しげで複雑な表情になる。

あの時、守が決死の突撃に出なければ、自分と出逢うことはなく、サーシャを授かることもなかったからだ。

「そうだったんですか……」
(すごいドラマよね……)

あの時、沖田の撤退指示に従った冴子は艦を失ったが帰還し、戦争孤児になった雪菜を引き取り、さらに新造艦の艦長としてガミラス軍残党の掃討と土星圏までの資源・物資輸送経路の確保に当たり、『ヤマト』が帰還するまで地球の守りを担っていた。

一方、撤退を肯んぜず、沖田達を撤退させるため突撃した守はガミラスに捕えられるが、移送中に輸送艦が遭難。偶然にもイスカンダルに不時着したためスターシャと出逢った。

一同は沖田像の横にある胸像の前に立つ。
台座には『土方 竜』と彫られている。

「この方は……？」

「白色彗星帝国との戦いで亡くなった地球艦隊の司令官で、私たちの教官だった人さ。」

またの名を『鬼の土方』、通称鬼方教官殿さ。
しよっちゆう拳骨を貰ったものさ」

「その半分近くは、嶋津が事的首謀者だったんだがな……」
「つまり、過半数はお前と真田が首謀者だったということさ」

陰険漫才に発展しかかった2人を止めたのは背後からの声だった。

「おー、お前達も来とったかー!？」

声の主は佐渡酒造だが、後ろには一升瓶の箱を抱えたアナライザーに相原、太田らの『ヤマト』クルー、シルヴィアとアリアのフラン

ベルク姉妹に、『相模』副長の大村と戦闘機指揮官の山本の顔もあつた。

「ふむ、沖田さんの倅や娘達に、孫まで揃ったかい」

佐渡が嬉しそうに言う。

無論、孫とはサーシャだろう。

ともあれ、揃ったところで沖田像前に整列し、最年長の佐渡が号令する。

「沖田・土方両艦長、並びにガミラス・白色彗星帝国との戦いに倒れた戦士達の御霊に、敬礼ーっ！！」

“ザッ！！”

守、冴子、シルヴィアらは海上自衛隊型の挙手礼を、それ以外の皆は防衛軍型の敬礼の姿勢をとる。

ちなみにスターシャ、雪菜、フェイト、ティアナ達は頭を下げた黙祷の礼をとった。

ちなみにティアナは、

（やはり、本物の軍人さん、いえ、宇宙戦士だけのことはあるわね。敬礼の姿勢は管理局よりピシツとしてるわ……）

等ということを考えていた。

第137話『悪夢の幕開け』（前書き）

なのは「雪菜ちゃん、管理局に「固辞します」即答!??どうして?」

雪菜「その意思は全くありません。

それに、職業選択の自由は地球連邦の憲法に明記されていますから

なのは「ぐっ……」。

でも、管理外世界での魔法使用は時空管理局規則で禁止されているんだよ」

雪菜「随分と奇妙な話ですね。

私は貴女が言うところの管理世界出身でもありません。時空管理局?何それ?としか言いようがないです。

……それに貴女は基本的なことをお忘れではありませんか?」

なのは「な、何を?」

雪菜「他人にそんな物騒レイジングハートな物に向けておいて、本当にお話する気が
ありませんか?」

はやて「きつついわ。あのコ。

でも、魔王オーラをあてられても顔色一つ変えないで言い返せとは、
大したタマやな……」

フェイト「……まあ、雪菜は何度も死ぬ思いをしてきたから」

なのは「魔王じゃないもん!」

雪菜「……じゃあ、KY魔女」(ぼつりと一言)

ピュア・ハート『お主も苦勞がたえぬようだな、レイジングハート
……』

レイジングハート『もう慣れましたので……』

第137話『悪夢の幕開け』

横須賀市・地球防衛軍士官住宅、嶋津家

「雪菜、美味しいよ。これ……」

「ホント、美味しいわ。雪菜」

カレーライスを一口食べたフェイトとティアナは異口同音に賛辞を口にした。

（向こうの翠屋のカレーほどじゃないけど、それに近い味だ……）

地球に住んでいた折に何度となく口にした翠屋のカレーライス。

純粋な旨さではまだ及ばないが、その味に近い。

少なくとも、13の少女が作るカレーとしては破格と言って良いだろう。

（正直、年長者としては敗北感を覚えるわ……）

ティアナは内心で忸怩たる思いを抱え、苦笑しながらサラダを突つく。

「『なのはカレー』と言って、母から受け継いだレシピで作ってみました」

「『なのはカレー！？』」

雪菜からその名称を聞いた2人は反射的にスプーンを止めた。

「はい。何でも2代目が考えたレシピで、両親の代まで受け継いで

きたんです。

『なのは』はその2代目日本人の名前です」

「……………」

（この世界にもなのはがいたんだ……………）

（ということは、このコは、この世界のなのはさんの子孫……………？）

だとすれば、雪菜の容貌がなのはと酷似しているのも頷ける。

（管理局に言うつもりはないけど、なのは達にも打ち明けていいのかどうか……………）

雪菜が出処不明なインテリジェントデバイスまで有する高い資質を持つ魔導師（？）で、世界こそ違え、高町なのは直系の子孫であることを管理局が知ったら、どんな拳に出るかわかったものではない。

全ての魔導師が時空管理局の管理下に入る義務があるのかと言われれば、答はノーではないだろうか。

そもそも雪菜の場合、管理局の存在を知らずに育ち、魔法を積極的に使った形跡もない。

話を聞いた限りでは、ガトランチス帝国の超巨大戦艦の砲撃で巻き上げられ、落下してきた大量の土砂と瓦礫から我が身と周囲にいた子供達を守るために、防御魔法と中距離砲撃魔法を一度ずつ使っただけらしい。

それに、雪菜の志望が翠屋の再建ならば、それを妨げる権利など誰にもあるまい。

たとえ時空管理局でも、だ。

干渉すれば、それは基本的人権と精神への侵略だ。

第一、あの嶋津冴子や古代兄弟達がそんな事を認めるわけがないし、

地球防衛軍相手に管理局が戦えるとも思えない。

何としてでも、地球連邦・地球防衛軍とは共存、でなければ逆に一切の接触を断つしかない。

先日の定期連絡の際に一時漂った険悪な雰囲気。

XV級艦『レクサス』がこの太陽系内に進入しようとして行方不明になってしまった。

それも、クロノが用意した次元通信ポッドに、どうやら海の強硬派が細工をして、こちらの地球の位置を突き止めようとしたらしい。

何て余計なことをしてくれたのだ！、と、画面の向こうのエル스가一を怒鳴りつけてやりたかった。

リンデイのとりなしで喧嘩分かれにはならなかったが、あんないたたまれない思いをするとは思わなかった。

結局のところ、『レクサス』遭難は管理局側の自爆としか思えなかった。

知らない者に、お前のアドレス教えろと言われて、はいそうですかなどと応じる馬鹿がいると思っっているのだろうか？

恐れていた事態　管理局の地球への干渉　　が取り沙汰されているのかも知れないが、管理局の全戦力を投入しても勝てるかどうかわからないし、そんなことをすれば管理世界は無法地帯になり、管理局は崩壊する。

得る物はあまりに少なく、失う物は甚大な、愚劣極まることだ。

一連の艦船の遭難で、ガトランチスや暗黒星団に対抗できるだけの戦力や技術を欲するのはわかるが、高圧的に臨めば反発されるのはわかりきったこと。

今まではそれで通じたが、地球防衛軍はそれが通じる相手ではないのだ。

もし地球にアルカンシエルを撃ち込もうものなら、次元航行能力を付加した『ヤマト』が本局に波動砲を撃ち込むだろう。

一度ならず不可能を可能にした彼らだ。

ことに、スカリエッティの上に行くあの男ならば、本当に『ヤマト』に次元航行能力を持たせてしまうだろう。

そんなことができるはずがないと管理局の皆は思うだろうが、ここにいるのは『不可能を可能にした男』の後継者達だ。管理局の基準や常識など、道端の小石以下でしかなかるう。

それに、目の前の高町雪菜にしても、家族を皆失いながらも翠屋再建を志している。

市井の一少女もこれだけの強い意思を見せているのだ。

こういう人達が住まう地球が時空管理局に屈するとは到底思えない。

フェイトとティアナがそんなことを考えていた頃。

時空管理局・本局

先の搜索艦隊出発から2昼夜が経過していた。

定時連絡では予定どおりの行程で、次元震・時空震の発生も確認されてはいない。

間もなく『アストラ』が救難信号を発信した座標に到達するはずだ。

そして、旗艦『エル・グラント』から、

『所属不明の小規模艦隊を確認。所属と目的を確認する』

と通信が入った。

管制室に緊張が走るが、その8分後に事態は暗転した。

『敵戦闘艦からの砲撃と小型艇からの大型ミサイルにより、我が艦隊は壊滅に頻する。』

本艦も被弾。負傷者多数……！』

『エル・グラント』からの悲痛な通信を最後に、一切連絡がとれなくなつた。

忽ち本局はパニック寸前に陥る。

「馬鹿な！接触してから8分しか経っていないのだぞ！」

「『エル・グラント』を呼び出せ！他の艦もだ！」

オペレーターは各艦を懸命に呼び続けるが、結局応答はなかった。翌日、本局の局員は文字通り顔色を失うことになる。

第138話『管理局最悪の日』(1) (前書き)

三文寸劇その2

なのは「と、とにかく、貴女は管理局に入るの!」

雪菜「ですから、お断りすると言っているんですが……」

溜息をつきながら、背中のバックパックからビニール袋を取り出すと、袋の中をぐそぐそ探るように掻き回す。

なのは「…何をしてるの?」

雪菜「なのはさん、掌を上に出して下さい。

私が渡す物を落とさなければ、管理局入りを考えます」

なのは「本当?」

雪菜「女に二言はありません」

なのはは勝ったとばかりに微笑んで、右掌を差し出した。

雪菜「どうぞ」

そういつて、なのはの掌に白っぽい物を数個、そつと置く。なのはは掌に置かれた白い物体を注視する。それはニョロニョロと動き回っていた。

「にゃあああああ……！！（泣）」

次の瞬間、なのははそれを放り投げ、号泣しながら走り去った。

雪菜は何の感慨もないように見送ると、地面に落ちたそれを拾い上げ、袋に入れ直す。

その様子を唾然と見ていたティアナが我に返った。

ティアナ「ゆ、雪菜。貴女、なのはさんに何を渡したの？」

雪菜「父の実家で採った蜂の子と鉄砲虫です

要するに、オオスズメバチとシロスジカミキリの幼虫です。

日本では、地域限定ですが立派な食用ですよ」

ティアナ「ミッドじゃ立派なバイオテロリストよ！

だからこっちに向けないでっば！」

はやて「あの子、やっぱりなのはちゃんの子孫だわ……」

第138話 『管理局最悪の日(1)』

ミッドチルダ首都クラナガン、時空管理局首都航空基地、教育隊隊舎・教官室

「~~~~」

航空戦技教導官の高町なのは一尉は、ランチを口にしながら午後
の教導メニユーを再確認していた。

その時、教官室に緊急放送が流れた。

『緊急連絡、緊急連絡。』

『アストラ』 搜索艦隊が所属不明の艦隊と交戦後、消息不明になっ
た。

繰り返す……」

「え……!?!」

なのはのみならず、在室していた同僚や職員らは蒼白になる。

「そんな馬鹿な! 『エル・グランド』にXV級3隻なんだぞ!」

新型主力艦のXV級と、管理局史上最大最強のXX級からなる部隊
だ。

管理外世界の艦船にはそうそう負けないはずだ、という意見が多か
つただけに、苦戦どころか全滅の可能性大という連絡内容が信じら
れないという者が多い中、

「いやああーっ!」

なのはの隣で叫ぶように泣き伏したのは、なのはと同班の教導官、リサ・セフィー二尉だ。声をかけようとしてはっとした。

彼女は来月に結婚する予定なのだが、確か婚約者が『エル・グランド』のクルーと聞いていた。

「『エル・グランド』は最大最強じゃなかったのぉーっ……！」
「リサさん……」

それ以上声をかけられず、なのはは唇を噛む。

XX級は時空管理局史上最大最強のスペックを持つ次元航行艦だが、最近確認された数勢力の宇宙戦闘艦と比べるとだいぶ見劣りしている。事実上、一部の者しか知らない。

なのははそれを知る数少ない一人なのだが、本局では箝口令が敷かれていた。

先日、フェイト達との定期通信の折に地球防衛軍側が見せた、地球艦隊とガトランチス残党艦隊との戦闘の映像は衝撃的なものだった。

飛び交う大出力のビームや宇宙戦闘機、激しく撃ち合う双方の艦艇。ガトランチスには大型戦闘艦と中型戦闘艦があったが、地球防衛艦隊にも『ヤマト』や『相模』級のみならず、中・小型の戦闘艦も存在し、高い機動性と攻撃力を持っていた。

管理局の艦船は、地球防衛軍の小型艦相手でも勝てないだろう。その後、クロノは憮然として呟いていた。

(……ガトランチスと暗黒星団帝国、地球防衛軍は一部だけとはいえデータ登録されている。

そのどれでもないというのなら、一体どこの勢力なの？

強力な質量兵器を使う軍事勢力と本格的な戦闘状態になってしまふの……?)

魔法が通じない相手なら、強力な実弾兵器やエネルギー兵器、質量兵器で対抗するしかないが、質量兵器は管理局憲章で否定されており、ノウハウは殆ど残っていない。

そして、そんな質量兵器を扱える勢力はと言えば、ガトランチスや暗黒星団帝国は論外。

フェイト達を保護している地球防衛軍とは戦闘状態にこそないが、『レクサス』遭難の一件で、関係は必ずしも良好ではない。

フェイト達の待遇は何ら変わりないようだが、彼女達の帰還と同時に没交渉になりそうな状況だ。

本局の一部や地上本部には、管理局憲章を改訂し、次元航行技術と交換してでも地球連邦政府と地球防衛軍にタキオン機関技術の供与を要請するか、さもなければ無期限の世界探査中止を主張する意見がある。

本局の強硬派が主張するような、タキオン技術の接收は地球防衛軍との全面戦争になり、夥しい犠牲を出してしまうというのだ。

艦船同士の戦闘では、艦船の性能、戦術、地の利いずれも大きく劣り、白兵戦では、初めから殺しに来る地球防衛軍の兵士相手に、殺傷設定戦闘経験がない者が多い管理局の魔導師では精神的に耐えられないだろうと推測されており、各管理世界の地上本部は、

「そんな馬鹿げた作戦に出せる人員はない」

と口を揃えて言い、各管理世界政府も反対の意向を示しているというそんなことをすれば、各管理世界の治安維持が立ちいかなくなるのは明白だったから、本局の強硬派もそれ以上は言えなかった。

しかし、一部が言う管理局憲章の改訂には反対意見が強い。

それは質量兵器の導入を認めることになり、管理世界の平和が脅かされる事に繋がるからだ。

だが、この意見に対し、非魔導師や一般ランクの魔導師からは

「高ランク魔導師による支配体制が脅かされるからだろうさ」

と、侮蔑の声が囁かれていた。

管理外世界出身であるなのは自身は、高ランク魔導師イコール優れた人間だとは思っていないが、本局にはそういう考えがびこっており、一般魔導師や非魔導師との溝が深まっていることは肌で感じていた。

事あるごとに教導生にも話して聞かせているのだが、空戦魔導師自体が高ランク魔導師だから、我が事と受け止める者が少なく、歯痒い思いをしていた。

しかし、ここ最近接触した世界や勢力の大半が、管理局の抑えが効かない軍事力を持つところばかりだ。

（一体、どうしたらいいの？

フェイトちゃん、教えてよ……）

つつい、弱音が出てしまう。

地球防衛軍と接触しているフェイト達なら、何らかの結論に達しているのではないか？

なのは、ここにいない無二の親友に縋りたい思いだった。

時空管理局次元航行本部・第5海上支部航路管制室

時空管理局の次元航行本部は、次元航路の要所に「海上支部」という中継ポイントを設け、航路警備の拠点としている。

“ピーッ!”

そのうちの1つ、第5海上支部にほど近い次元空間に、予定外の転移反応が発生したことを知らせるアラームが鳴った。

「……?」

この時間に転移してくる予定の艦船はないから、不審に思った管制士は即座にコンソールを叩き、データベースから艦船を特定する作業にかかったが、ほどなく緊張に引き締まった。

表示されたシグナルは、『アストラ』搜索艦隊の1隻であるXV級艦『クラウド・G・S・イングヴァルト』(以後、単に『イングヴァルト』と称す)『のものだった。

「『霸王』だ!」

『イングヴァルト』は、その名の由来から『霸王』とあだ名さ

れていた　驚いた管制士は司令に報告するとともに通信回線を繋ごうとするが、応答がない。そこに、報告を受けた司令が現れる。

「『霸王』が戻ってきたって？」

「はい。しかし、全く呼びかけに答えません」

「呼び出しを続ける！」

『霸王』の映像を出せるか!？」

「お待ち下さい…。映像出します！」

一瞬置いて、次元空間に浮かぶ『イングヴァルト』の姿がメインモニターに映し出された。

「な……!？」

「ひどい……!！」

「何だ、これはっ!？」

司令以下の全員が顔色を失って立ち尽くす。

映し出されていたのは、ようやく見慣れたXV級の白を基調とした艦体ではなく、原型を留めぬまでに傷つき、各所から煙を噴き出す赤茶けた残骸同然の『イングヴァルト』だったものだ。

舷側には被弾跡らしい大きな穴が2つあき、そこから火煙が噴き出していた。

誰が見ても、『アストラ』を襲った犯人にやられたものと想像できるだろう。

「すぐに本局に連絡するんだ! 『霸王』への呼びかけも続ける! 総員非常配置につけ！」

だが、管制士達は『イングヴァルト』の惨状に注意を奪われ、重大な事を見落としていた。

我に返ってコンソールを操作し始めた管制士が愕然とした。

「『霸王』が最大巡航速度のまま、こちらへの衝突コースで直進してきますっ!!」

衝突まで3分を切っています!」

「何だと!? 呼び出しを続ける!」

司令も蒼白になる。たった3分では人員の避難転送もままならない。

「……『アルカンシエル』発射用意だ」

「し、司令!？」

「『アルカンシエル』発射用意だ!

責任は私がとる! 復唱はどうした!？」

司令官は苦渋の表情を浮かべて大口径魔導砲『アルカンシエル』のスタンバイを命じる。

このままでは『イングヴァルト』と衝突し、基地自体が崩壊しかねない。

味方艦を撃つのは忍びないが、約300名の基地要員の命には代えられないし、『イングヴァルト』の惨状からみて、生存者は望めないだろう。

しかし……。

「司令、本局から指示です!

……『アルカンシエル』の使用は認めず。艦体を確保せよ!」

「何だと!？」

本局の馬鹿共は我々に死ねと言うのか!?

本気で本局に呪詛を投げつけたくなつた司令官に、追い撃ちをかけるような報告が飛ぶ。

「司令、『霸王』に致死量を遙かに超える強い放射線反応があります!」

最悪だ。この基地には放射線防護服の備えは少数しかない。こつなつたら……。

「『アルカンシエル』以外の全砲門を開け! 『霸王』の進路をずらせばいい!」

それと、第10層より下にいる者を退避させる、急げ!」

「は…はいっ!」

命令を出しながら、司令官は背中に冷たいものが走るのを感じていた。

基地下層部にいる者が第9層以上に退避するには最短でも4分かかる。

『イングヴァルト』の転移を確認した段階で、既にチェックメイトだったのだ。

だから『アルカンシエル』を使おうとしたのだが……。

「全砲門、準備完了しました!」

「連続発射開始! 砲身が焼けても構わん!」

司令官の命令とともに、対艦船用の中・小口径魔導砲から無数の火線が伸び、霸王の名を冠した艦に突き刺さった。

たちまち中小規模の爆発が『イングヴァルト』に発生する。

「衝突まで1分!!」

「撃ち続ける！手すきの者は何かに掴まるんだ！」

砲身が焼けんばかりに撃ち出される魔力弾は『イングヴァルト』の装甲を貫徹して内部で炸裂する。

そして……。

「『霸王』の艦首が下がりました！」

「いいぞ、撃ち続ける！」

『イングヴァルト』の艦首が下がった。もう一頑張りで衝突は免れる。

果たせるかな、『イングヴァルト』は全艦炎に包まれながら、第5海上支部の下部すれすれに通過した。

その様子を見守る一同が胸を撫で下ろした瞬間、『イングヴァルト』の艦後部から凄まじい光芒が広がった。

第139話『管理局最悪の日』(2) (前書き)

2代目?と8代目の三文寸劇(3)

なのは「ま…、まさか、あんなバイオテロで来るとは思わなかったけど、ちゃんとお話ししようね。雪菜ちゃん」

雪菜「……脳筋話や念話ではないでしょうね?」

なのは「……もちろんだよ」

雪菜「(最初の間は何だったのかな?…ま、いいか)わかりました」

一瞬の後、なぜかテーブルと2脚の椅子、湯気を噴き上げるサイホン式コーヒードリッパー、2対のカップとソーサーが現れた。

なのは「……どこから取り出したのかな?これは…」

雪菜「こんなこともあるのかと思ひまして」

なのは「それ説明になってないよ!」

雪菜「あらゆる可能性をシミュレートした結果です」

なのは「だから説明してよ!」

フェイト「いつの間に……。光学迷彩か」

はやて「あのコ、いつの間にか自分の土俵になのはちゃんを引ッ張
り込んでる。歳の割に手強いわ……」

ティアナ（保護者や周囲の大人の影響かしら……。
あるいは高町家の血かしら……？）

………続く???

第139話『管理局最悪の日(2)』

時空管理局・第5海上支部、第6層

「うおおおりゃあッ!」

“ドガアアンツ!”

進路を塞いでいた瓦礫を右拳の一撃で粉碎したスバル・ナカジマー等防災士はさらに奥に突入する。

(スバル、そっちはどう?)

(ダメ、ギン姉。生命反応は全然見つからないよ……)

(クソ!こつちもダメだ。皆死んじまつてる……)

(同じくっス……)

(皆、無理はするなよ、助けに行った側が倒れるわけにはいかんのだからな。

……デイエチ、そっちはどうなった?)

(あと一・二撃で鎮火できる!)

『イングヴァルト』の大爆発の爆圧と衝撃波を至近距離で受けた第5海上支部は、次元港等を擁する下部が大破。管制室や居住ブロック等がある上部は、一見被災を免れているように思えたが、内部に多数飛び込んできた『イングヴァルト』の残骸は致死量を大きく上回る有害放射能がまぶされており、それが放射能を撒き散らしながら内部を切り刻んだのだ。

さらに、その時点でまだ生きていた中央空調システムのメインダクトにも破片が飛び込んだため、有害放射能が支部全体に行き渡るこ

ととなり、大多数の局員が急性放射線症に冒されることになった。

予想外かつ最悪の事態に、本局はパニックに陥った。

直ちに第5海上支部へ救援隊を派遣することになり、定期検査が明けたばかりのXV級『クラウディア』艦長、クロノ・ハラオウンが第1次救援隊部隊長に指名された。

第1次救援隊には、陸士108隊のギンガ・ナカジマと、最近ナカジマ家の養女になることが決まったチンク、ディエチ、ノーヴェ、ウエンディの旧ナンバーズ4姉妹が志願して加わった。

そしてクラナガン港湾特別救助隊からはスバル・ナカジマが本人の強い希望で派遣された。

彼女達はその出自上、かなり苛酷な環境下でも行動できるのだが、それでもバリアジャケットだけで致死量を大幅に上回る放射能の中の活動は無謀であるから、他の隊員達と同様に放射能防護服を着用し、ギンガ、スバル、ノーヴェらは、その上からデバイスを着用した。

そして、彼女達は中層ブロックで人命検索を行っているのだが、空气中の放射能濃度が高いため、下層ブロックには行けず、なおかつ生命反応も確認できないまま、行動限界時間を迎えようとしていた。

『クラウディア』艦橋

クロノの元には刻々と生存者救出・遺体収容の報告が上がってくるが、彼の表情は沈痛なままだ。

増え続けるのは死者の数、收容された生存者も3割は1時間以内に息絶えてしまう。

医務室のシャマルからも悲痛な報告と要請が寄せられてくる。

「放射線病薬が心許なくなりです。

……あと、遺体収容袋も……」

「いずれも『アースラ2』に積み込んであるとのことだ。

あと半日で着くから、もう少し頑張ってくれ、シャマル医務官……」

放射能は空調システムを介して第5海上支部全体に回っており、『イングヴァルト』爆発で死傷しなかった者も皆やられてしまった。

彼らを診たシャマルの診断でも、一刻も早く設備が整った病院で診察と治療を受ける必要があるとのことだが、彼女の表情と声色からすると、容態否、余命は限られているようだ。

当然ながら、放射線障害に治癒魔法は効かない。

内科・外科的措置で症状の進行停止や緩和はできても根治はできず、生涯にわたる後遺症に苦しむことになる。

こういった放射線障害の医療技術は、むしろ第97管理外世界・地球の方がノウハウが豊富な分進んでいる

ふと、クロノの脳裏に、何度か通信を交わした第197管理外世界こと地球防衛軍の士官が浮かんだ。

（地球なら、ガミラスの放射能と戦った彼らの地球の医学ならば、被曝した者達を救えるのだろうか……？）

しかしすぐに首を横に振ってその考えを振り切った。

いずれにせよ、生存者は勿論、遺体もできるだけ『アースラ2』に

移して一刻も早く本局に送らなければならない。
そして、生存者と遺体の収容と移送が済んだら、分析作業が待っている。

何としても、攻撃してきた下手人を突き止めなければならない。

（もつとも、犯人がわかってても逮捕・拘束するのは困難。
否、できないと言った方がいいな……）

恐らくはガトランチスや地球防衛軍等と同等の、質量兵器による軍事力を持っている。管理局で抑えられるものではあるまい。

（鎖国すら考えなければいけないか……）

これ以上次元航行艦と人材が失われることがあってはならない。

『海』では局員の動揺がひどく、空や陸への転属、あるいは退職を希望する者が増えている。

これまで引き抜き放題に近かった陸からの異動もさっぱりで、海は退職・転属希望者の慰留に躍起にならなければならなかった。

空戦魔導師は航空武装隊に行くこともできるが、そうでない者が皆陸に行けるかと言うと、陸の方も強気で、面接や体力テスト等でふるいにかけれられ、大半は追い返されているらしい。

「陸に来る以上、全てこちらのやり方に従ってもらうのが当然さ。
我々が必要なのはミッドチルダの住民のために身を粉にして働ける者なんだ。

情勢が落ち着いたら海に戻ればいい、なんて甘ちゃんなんか、こちらから願ひ下げさ」

ミッド防衛長官のアッテンボロー中将は、異動申請拒否の多さに対

する苦情を伝えに来た本局のレティ・ロウラン人事統括官にそう回答した。

もっとも、レティも内心ではその通りだと思っていたが。

ミッドチルダ首都クラナガン郊外、高町家

娘のヴィヴィオは既に就寝しており、高町なのはは週明けからの教導メニユーをチェックしていたのだが、表情は沈痛そのものだった。

グリフィス・ロウランからの情報では、『イングヴァルト』は完全破壊で乗組員は全員殉職。

第5海上支部も、次元港等の艦船支援設備は大ダメージを受けたが、それより何より、支部スタッフの殆どが急性の放射線障害で、既に6割以上が死亡か手の施しようがなく、残りの者も後遺症の心配がある。

現場に突入したスバル達救助隊員も、1日あたりの許容被曝量に達したら除染しても24時間は再出勤できず、捜索は思うに任せないらしい。

艦船のみならず、海上支部が半壊するほどの被害は管理局史上例がなく、管理局は元より、ただならぬ様子を嗅ぎ付けたマスメディアが独自の取材を始めており、プレスリリースせざるを得ないようだ。

(私達が信じてきた魔法はこつも無力なの……?)

正体不明の敵が核兵器を使ってきたと聞かされた時は愕然とした。

質量兵器の中でも最も忌むべき兵器。

それを使った敵に言いよのない憤りを感じるが、XV級やXX級を撃破してしまう程の軍事力を持つ敵に魔法が通用しないのでは戦いようがない。

仮に攻めていったとて、一方的に虐殺されてしまうだけだ。

（忌み嫌っているだけでは何の解決にならないことはわかっているけど……。

質量兵器には質量兵器でないと対抗できないのかな……）

なのはに限らず、時空管理局の戦闘魔導師達は、理想と現実の乖離に悩む者が多かった。

特になのはは、地球防衛軍の戦闘映像を目にして大きな衝撃を受けていた。

『レオニダス』の時とは違う、多数の艦船から撃ち出される大出力のビームとミサイルに乱舞する地球防衛軍の戦闘機。

メンテに出していたレイジングハートを受け取りにいった時、マリエル・アテンザは、あの戦闘機は大気圏内でも運用可能と看破していた。

空戦魔導師が通常装備で活動できるのは対流圏内の中・低空域。それ以上では断熱・耐圧スーツを着用し、酸素ボンベを追加装着しないと短時間で意識不明になってしまう。
ましてや成層圏以上の高度では活動できない。

だが、戦闘機は成層圏以上の高層域でも運用できる。

航空自衛隊のジェット戦闘機もその位の性能はあるというから、23世紀初頭の地球ならば宇宙・大気圏両用な戦闘機があっても何ら

不思議ではない。

(こんな戦闘機相手に勝てるわけないじゃない……)

低空ならばまだしも、一撃離脱攻撃や高空の戦闘に持ち込まれたらどうにもならない。ましてや宇宙空間では何をか言わんやだ。

(これが魔法の限界なの……?)

あの映像は、現在の魔導師は純粹科学兵器に対抗できないことを如実に示していた。

カレドヴルフ社等で新たな魔導戦闘装備の開発も進んでいるが、あの戦闘機や宇宙戦艦に比べるとだいぶ見劣りするのは否めない。

魔導師は宇宙空間では戦えないし、大気圏内の超音速飛行や成層圏飛行もできないのだ

ガトランチスや暗黒星団帝国には次元航行技術は流出していないようだ、地球防衛軍には『レム』の残骸が渡っているし、未知の敵に次元航行艦が奪われた可能性もある。

もし、既存の艦船に次元航行能力を付加したら……。

例えば『ヤマト』『相模』のような宇宙戦艦が次元航行能力が加わり、管理局の艦隊と交戦状態になったら、多分一方的な虐殺だ。

地球防衛軍とは今のところ話ができているが、今後共に手を取り合えるのだろうか？

時空管理局は質量兵器の全廃こそが次元世界の平和に繋がると主張しており、自分もその趣旨に賛成したから管理局に入った。

しかし、向こうの地球の人達は、魔法ではなくタキオンエネルギー変換技術を得て、別の銀河まで往復する力と、理不尽な侵略者と互角に戦う力を得た。

今さら管理局の傘下に入るわけがないだろう。

先日、エルスガーとやり合った地球防衛軍士官の態度からもわかる。

そちら（管理局）の主張は理解するが、我々（地球）が同じ道を歩むことはない。

彼らはそう言わんばかりの態度だった。

しかし、彼らは危険を冒してフェイトとティアナ、シャリオを助け治療もしてくれている。単に人道的な理由というだけで、何のメリットもないのに。

そういう事をしてのける地球防衛軍を、単に質量兵器を使っているからといって危険視できるわけがない。

遥かに危ない勢力が続々と明らかになっているのだから。

（違う道を歩む世界や組織とも折り合わないと、管理局は立ち行かない時期に来ているのかな……）

管理外世界で生まれ育った彼女の考えは間違っておらず、現実にしたものだが、管理局員の大半はまだそこまでに至らないのが現実だった。

そして、なのはの思いとは関係なく、管理局は再び理不尽な追い打ちに見舞われる。

第140話『管理局最悪の日(3)』(前書き)

三文の値打ちすらない寸劇4 それを言っちゃ、おしまいよ

雪菜「……………どうぞ。ミルクとお砂糖はこちらに」

なのはにコーヒーを差し出す。

なのは「ありがと……………」

因みになのははエクセリオンモードのバリアジャケットである。

なのは「ところで、雪菜ちゃんはどんなバリアジャケットなの？」

雪菜「バリアジャケット?……………戦闘防御力場ならば、既に展開して
います」

雪菜はセーラー服に翠屋のエプロン姿だ。

なのは「え?……………でもそれ、セーラー服とエプロンのままだよね」

雪菜「こちらの地球は魔法が公式には存在していませんから、コス
チュームを変えたら激しく浮いてしまうじゃないですか。

魔導師は、いわば隠れキリシタンみたいなものですからね。人々に
とけ込まなければいきませんので。

だから外見上はほとんど変わりません。

敢えて言うなら、スカートの下が、ショーツの上にスパッツがつく
位ですね」

なのは「そ、そうなの……。
で、管理局に入る決心はついたかな？」

雪菜「……入局する意思が全くない以上、決心する必要はありません」

なのは「どうして！？雪菜ちゃんには力があるのに！」

雪菜「魔法は力のうちの一つでしかありませんし、魔法では遊星爆弾を止められませんでした。」

……それに何より、私はまだ、自分が生まれ育った故郷のために何の貢献もしていません。」

自分の世界のため働いていない者が、他人様の世界を守る力なんかない。

……私はそう考えておりますので」

なのは「……あう」

はやて「はづっ！」

ティアナ「はやて部隊長？なのはさん？」

はやて「いつちゃん痛いところ突かれたわ……」

なのは「……」

2人とも、痛々しいほど肩を落としてしまった。

チンク「夜天の主とエースオブエースを閉口させるとは、未恐ろし

い娘だな……」

嶋津冴子「…なぜそこで私を見る？」

真田志郎「朱に交われれば赤くなるだろう」

冴子「はん！朱が自分で認めるんなら、そつなんだろつよ」

第140話『管理局最悪の日』(3)『

地球防衛軍・司令本部

(……………)

一室に通され、ソファに腰掛けているのは、巡洋艦『伊吹』艦長の塩江龍一だ。

指定された時刻よりだいぶ早く来てしまったため、些か手持ち無沙汰のようである。

その時、ドアがノックされ、女性が入って来る。

女性は艦長制服を着、制帽を脇に抱えているが、振り向いた塩江を見て踵を合わせて敬礼した。

「お久しぶりね、塩江さん」

「ああ、君も元気そうで何よりだ」

敬礼を交わして握手を交わす。

「君も呼ばれたのか……………？」

「ええ。『水無瀬』も暫定的な惑星艦隊所属だから。正式な配属先の通達だと思っただけど、この分では『伊吹』と一緒にいたいね」

「そのようだな……………」

壁の時計と懐中時計を見比べる。指定された時刻まであと7分だ。

5分前集合を是とする地球防衛軍では、事実上2分前である。

その時、ドアの向こうから小走りの靴音と

「遅れる遅れる、遅れる〜！」

と、若い女性の焦った声が近づいて来たかと思うと、

“バターンー！！”

「痛い……………」

ドアに衝突したらしい……………。

「あの声は……………」

「はあ……………」

顔を見合わせて肩を竦めた。

程なくドアが開き、額を押さえた白い肌の女性士官、巡洋艦『鳥海』艦長のフランベルク・棗・シルヴィアが入ってきた。

「塩江さん、ナーシャさん、お久しぶりです……………」

「……………ああ、そうだな」

「……………おっちょこちよいなのは相変わらずね（苦笑）」

3人は苦笑しながら敬礼を交わし、ソファに座る。

「それにしても、私達3人がここに呼ばれたというのは……………」

「揃って同じ部隊所属ということだろうな……………」

「『伊吹』と『鳥海』が同じ部隊というのはわかるけど、『水無瀬』まで同じ部隊というのは今ひとつわからないのよね……………」

ナーシャの疑問も尤もだ。

パトロール艦は充実した探査能力で、平時は太陽系外縁や両極方面の哨戒、戦時には敵艦隊への強行偵察等を目的としており、ナーシヤが前に艦長を務めていた『九頭竜』も、白色彗星軍来襲時はバルゼー・ゲルン艦隊への索敵と追尾を行った。

結局『九頭竜』は戦闘で大破・全損したため、新造艦の『水無瀬』に乗り換えたが、訓練と並行して哨戒行動中に白色彗星残党軍のミサイル艦と遭遇し、要撃戦に参加した。

基本、パトロール艦は単独かパトロール艦同士、護衛任務時は護衛艦と共に行動するもので、有事はともかく平時は巡洋艦や戦艦等と部隊を組む事はないのだが。

と、ドアがノックされたかと思うと、グリーン系制服に参謀肩章をつけた男が入ってきた。

「遅くなって済まん。早速始めようか」

立ち上がり敬礼する3人に、参謀こと古代 守も答礼し、着席を促す。

「早速だが、『伊吹』『水無瀬』『鳥海』の新たな配属先を伝えよう……」

ひと呼吸置いて部隊名を告げた。

「3艦とも、明後日付で独立第13戦隊配属だ」

「……差し支えなければ、決定までのいきさつを教えてくださいよろしいでしょうか？」

一同を代表する形で塩江が尋ねる。

「13TFは実質的な指揮を嶋津冴子がとり、『相模』と『ヤマト』の2戦艦で編成されているが、巡洋艦を加えて規模を拡充するというのか？」

「……『ヤマト』は来月から大規模な改装工事にはいる予定だが、その一方で様々な新任務も提案されていてな。フリーハンドで動ける部隊を常設しておく必要があるんだ。

『ヤマト』ならうつつつけだが、色々改良すべき時期に来ているのでな。」

かといって、このまま何もしないでいるわけにはいかないんだ」

「……『ヤマト』の改装のことはわかりますし、その代わりとして3隻が配属されるのもわかりませんが、予定されている新たな任務とはどのような事でしょうか……？」

古代参謀の説明は尤もだし、嶋津先輩の指揮下に入るのも異存はないが、13TFに課せられるらしい任務とは一体何だろうか？

3人の抱える疑問はまさにそれである。

「疑問は尤もだ。」

新任務の基本骨子は、近隣恒星系の探査だ」

「近隣恒星系探査ですか……」

「そうだ。人の生息に適していたり、有用資源が豊富な無人惑星の探査だ。」

これは将来的に宇宙移民に発展するものだ。

そして、最初の調査対象は、アルファ・ケンタウリ星系方面となる

……」

時空管理局本局

大会議場では『アストラ』捜索艦隊と第5海上支部が壊滅した事件を受けての対策会議が、海・空・陸幹部を召集して開催されていた。

損害は壊滅的以外の何物でもなかった。

捜索艦隊は旗艦『エル・グランド』を含めて4隻とも失われ、乗組員327名も全員殉職。

緊急転移したらしい『イングヴァルト』の爆発の影響で第5海上支部も甚大なダメージを受けた。

『イングヴァルト』は致死量を遥かに超える放射能にまみれており、飛散した残骸が第5海上支部を切り刻むとともに、メインの空調システムにも飛び込んだため、致死量の放射能がダクトを伝わって支部全体に回り、ほぼ全員のスタッフが急性放射線障害に冒され、既に4割を超える者が殉職してしまった。

当面命に別状ないと診断されても、生涯放射線障害に付きまとうれることになり、魔導師としては再起不能になった者もいた。

そして。

「何としても敵対勢力がどこののか掴み、制裁を加えなければ、次元世界は混乱する！」

追加の探査部隊を出すべきだ！」

「今出て行ったところで撃破されるのは目に見えている！」

そんなに行きたいなら、貴官自ら艦を指揮して行ったらどうだ!？」

案の定、本局の次元世界拡大派と慎重派、本局の慎重派側に立つ陸の士官に分かれて大激論になった。

議場の一角に席を与えられたカリム・グラシアは暗い面持ちで議論を聞いていた。

彼女は聖王教会騎士であるとともに、時空管理局では少将待遇の理事官である。

（次元世界拡大と現状維持。どちらに転んでも前途は容易ではないわね……）

このまま拡大方針を維持すれば、今回の正体不明の敵やガトランチス、暗黒星団のような好戦的かつ極めて強力な軍事勢力と再び衝突する可能性がある。

反面、現状維持を通せば、管理世界全体が停滞し、活力を失う。

活力が失われれば、今まで表面化しなかった様々な問題が表面化する。

最大の問題は少数の高ランク魔導師と、一般ランク魔導師に非魔導師の大多数勢力の溝だ。

時空管理局、特に本局の将官や提督は大半が高ランクの魔導師だ。

逆に、非魔導師では亡きレジアス・ゲイズの中将が最高位だ。

陸の部隊ではそうでもないが、本局系の部隊では往々にして差別事例があった。

むろん例外もある。

旧機動六課のように、本局系高ランク魔導師と一般クラス魔導師や非魔導師間の折り合いが良かった部隊もあるが、機動六課の場合は副隊長以上の幹部は皆、管理外世界の出身者や、一定期間管理外世界で生活した経験を持つ者ばかりで、彼女達には非魔導師への差別意識自体が存在せず、かつ差別を許さなかったため、現実には幹部の人柄に左右されることが多かった。

もし現状維持が恒常化すれば、この対立が表面化し、時空管理局は内側から揺さぶられることになる。

そして第3の道 地球連邦・地球防衛軍の持つタキオン粒子エネルギー変換技術の導入 は、次元航行艦の大幅な性能と戦闘力向上に貢献するだろう。

但し、あくまで導入できれば、だ。

最近は一トーンダウンしているが、積極拡大派はかの技術を質量兵器として接收することを主張している。

しかし、地球防衛軍の宇宙戦艦はアインヘリアル並の艦砲を多数装備し、かつアルカンシエルを上回る戦略砲も装備し、1隻で次元航行艦1個艦隊以上の戦力を持つと推定されている。

さらに、中・小型の戦闘艦の存在も確認され、それらもXV級を凌ぐ戦闘力を持つと判定されたため、実力による接收は不可能という結論に近づいている。

正式に技術提供を受けるにしても、当然見返りを用意しなければならぬ。

地球連邦と管理局・管理世界間の相互不可侵協定の締結はもとより、次元航行技術の提供、そして、時空管理局憲章と諸規則の改定 質量兵器の否定や魔法中心主義と魔導師主導の管理局システムを根本から改める を迫られよう。

タキオン粒子のエネルギー変換技術に魔法は必要ないからだ。でなければ、地球側の警戒心を解くことはできないが、既得権を奪われる魔導師達、特に高ランク魔導師は強く反発しよう。

とはいえ、地球側が好戦的でないことは本当のようで、先方に保護されているフェイトら3人が帰還し、彼女達が持ち帰るであろう数々の情報を精査してからでもいいのではないかとカリム自身は考えていたのだが、その思考は一つの報告で中断された。

「デインギル帝国、大神官大総統ルガルと名乗る人物から、時空管理局宛てに映像通信が入っている」

との緊急報告がもたらされたのだ。

会議は一時中断され、その映像通信を見ることになったのは当然だ。その「デインギル帝国」が『アストラ』や搜索艦隊を攻撃した勢力と関わりがあると予想されたわけだが。

映像はどうやら録画されたものらしく、暗く広大な空間が映し出されていた。

しかし、照明が入ったか、徐々に明るくなっていった時、議場から悲鳴や憤激の声が上がった。

30人ばかりの、海の制服を着た男女が十字型の柱にかけられている。中には10歳そこそこの子供も何人が含まれている。

彼らの顔は一樣に恐怖と絶望で染められ、中には失禁した者もいる。

そして、暗い青灰色の肌をした壮年の男が映像の中央に登場した。

「……我が名はデインギル帝国・大神官大総統ルガル。」

次元世界の法と正義の守護者を僭称し、我等が祖先から受け継ぎ守り続けてきた宝を収奪しようとした愚か者どもへの裁きを行う。

自分達の驕慢が招いた結果を、最後まで見届けるがいい！』

ルガルがサツと手を振り上げると、柱の足元からボンツとばかりに火の手が上がった。

。 局員達は、悲鳴と絶叫を上げながら焼かれていった。

あまりの残酷さに、殆どの者が映像を直視できず、口許を押さえながら議場から走り出ていく者もいる。

リンデイ、レテイ、カリムは席を立つことはなかったが、ディンギルのあまりの非道さに、顔面蒼白になりながらも憤怒に身を震わせていた。

「もういい！映像を切れ！！」

見かねた海の高官が映像を切るよう命じ、映像は消えた。

だが、追い撃ちをかけるように予想外の事が起きる。

各議員毎に開かれている映像ウィンドウが突然明滅したかと思うと、背中に恐ろしげな翼が生えた魔神像らしきものが写り、

「我等は最後まで見ると言っただけだ。

それを守らなかった以上、如何なる事態を招こうと、それは貴様らが責めを負わなければならぬ……」

。 デインギル帝国の非道極まる仕打ちはまだ終わらない。

第141話 『管理局最悪の日(終)』 (前書き)

色々な意味でディンギル帝国とルガール大總統の面目躍如です……。

第141話『管理局最悪の日(終)』

ミッドチルダ首都・クラナガン、商業エリア

それは唐突に現れた。

ビルに据え付けられたスカイビジョンの映像が突然乱れ、暗い空間の映像に切り替わる。

「……………」

スカイビジョンを見上げていた市民達は訝しげな表情をしたが、次の瞬間、驚愕と恐怖のそれに変わった。

画面に映る空間が明るさを増すと、そこには「海」の制服を着た男女が猿轡を噛まされたまま仰向けに寝かされ、四肢を大の字に開かされ、両手足首には太いワイヤーが掛けられている。

そして映像の焦点が変わり、より広い範囲が映された時、観衆から悲鳴が上がった。

4本のワイヤーの先には、馬の形をしたロボット　ロボットホース　が繋がれ、ヘルメットを被った兵士らしき者が跨がっている。同じような姿の局員は男女2名ずつ、計4名いた。

そして、画面には薄笑いを浮かべる暗青灰色の肌をした壮年の男が現れた。

「私はディンギル帝国大神官大総統ルガル。

次元世界の管理世界とやらに住まう者どもに告ぐ。

……お前達が守護者と頼む時空管理局とやらが、この大宇宙では弱
き者でしかない事を教えてやるう」

嘲笑を浮かべたルガールがそう告げるや画面が切り替わる。

漆黒の艦艇からの凄まじい砲火によって無数の穴を穿たれ、艦
体を切り刻まれて爆散するXV級航行艦。

そして画面は、どうやら小型の戦闘機または小型艇らしき操縦席か
らの映像に切り替わる。

その正面に映し出されるのはXX級『エル・グランド』。

『エル・グランド』の白い巨体が少し大きくなったと思いきや、画
面の下から黒っぽい何か 対艦ミサイル が噴射炎をきらめか
せて離れていった。

そして画面はまた変わり、『エル・グランド』の横っ腹に何発もの
対艦ミサイルが迫っていく。

観衆の中から悲鳴と絶叫が上がる中、『エル・グランド』に次々と
ミサイルが命中し、横っ腹を食い破るかのように数秒おいてから次
々と爆発。艦体は中央から両断されたかと思うと、大爆発の炎に包
まれ四散した。

見ていた市民は泣き叫ぶ者、怒りの声を上げる者、失神して倒れ伏
す者等々、平静を保っていられた者は誰一人としていない。

そして画面は最初の場に戻ったが、これこそが真の悪夢の幕開けだ
った。

ルガールがさつと右手を上げると、1人あたり4頭、計16頭の口

ボットホースは勢いよくダッシュした。

クラナガン郊外、陸士第108隊本部

テレビからは、四肢を引きちぎられ、夥しい血飛沫の中、断末魔の絶叫を上げて息絶えていく管理局員の無惨な姿が流れていた。

「……………」

「ひどい……………」

「悪魔め！」

「外道がっ！」

ディングルが行った「馬引き裂きの刑」の一部始終はクラナガンを初めとするミッドチルダ全土と一部管理世界のメディアをジャックして流された。

本局大議場に流された、火刑の映像すら生温い残虐極まる映像を目にした市民の相当数が激しい精神的外傷を負わされた。

当然、管理局の諸部隊にも映像が流れたわけだが、たちまち市民からの電話が殺到して対応に追われることになり、108隊も例外ではなかった。

映像の真偽を確かめるもの、映像を見た者が倒れ、救急車の出勤を要請する者等々、あちこちでパニックが発生したのである。

「……………今のところ取り乱す者はいませんが、2割は吐き気を催したようです」

「そうかい。ま、無理もねえさな……………」

先任士官の報告に、部隊長のゲンヤ・ナカジマ三佐が苦い表情で頷いた。

一見平静に見える部隊長だが、ひじ掛けを握る手は憤怒で震えていた。すかさず先任士官に指示を出す。

「パニックになりかねんぞ。総員緊急配置だ！」

「はいっ！」

パニックに陥ったのは市民ではなかった。

映像を目にした時空管理局の職員らも昏倒したり嘔吐したり、泣き叫んだりで、職務遂行困難になった者が続出しており、エースオブエースも逃れることはできなかった。

クラナガン、時空管理局首都航空基地

教育隊隊舎の女性化粧室で、高町なのは一尉は顔面蒼白になって吐き気に耐えていた。

映像を見た者の多くが卒倒したり泣き叫んだり、嘔吐したが、気が遠くなる思いをしながらも自我を失わなかったのは、さすがエースオブエースというべきか？

「どうして、あんな事……っ！」

鏡に向かって憤怒の声をぶつける。

時空管理局が様々な矛盾を抱える組織であることは、10年以上働いていれば嫌が応でもわかってしまう。

それを何とか改善しようと、親友達とともに機動六課で頑張ったり

してきたのだ。

しかし、デインギルという国家はなのは常識を悉く打ち砕くような拳に出てきた。

残虐極まる公開処刑もさりながら、管理局の唱える次元世界観を嘲笑とともに斬り捨て、無限の大宇宙の中では、管理局は単なる弱者に過ぎないと断言したのだ。

当然強い反感を抱いたが、管理局自慢のXV級やXX級の艦船が一糸も報えぬまま、デインギル艦隊の砲火や対艦ミサイルの餌食になつていく様を見せ付けられては、一言も反論できない。

艦の性能は勿論、戦術面でも明らかにデインギル側が上であることを、不特定多数の市民が目にしてしまったのだ。

つまり、次元航行艦部隊の威信は完全に失墜した。艦船には素人のなのでも、その事実は痛い程理解した。

なのははそこで、もう一つの事実に気づき、戦慄する。

処刑された者達はXV級艦『ネストル』のクルーだった。

ということとは、『ネストル』はデインギル帝国に捕獲されたという事で、管理局の機密事項や次元航行の技術もデインギルの手に渡る事を意味していた。

そうなつたら、将来的には管理世界や本局等に対する軍事行動に出てくる可能性が大きいのだ。

もしそういう事態になつたら。

デインギル帝国軍が敵に対して極めて残忍であることはさっきの映像で証明済みだ。

対して管理局の対人戦闘は、基本的に非殺傷設定であり、なのはは

もちろん、管理局の魔導師達はそれを誇りにしてきた。

しかし、ディンギル帝国軍は最初から殺すつもりで来るだろうし、民間人をも容赦なく殺戮するだろう。

そうなった時、管理局の魔導師は相手を殺すつもりで戦えるのか？

八神はやての守護騎士達は心を決めて戦えるだろう。

しかし、自分達魔導師はどうなのか……？

悲しみを打ち砕く力として魔法を使ってきた事を誇りにしてきたが、いくら敵とはいえ、相手を殺し続けることに自分達は耐えきれぬのか？

恐怖に打ち勝つて戦い続けることができるのか……？

そして、自分は娘を守りきれぬのか？

胸中に広がる絶望感は、ゆりかごが起動した時とは比べものにならないほど重く暗かった。

第142話『新生・独立第13戦隊』（前書き）

今週末最後？の更新です

第142話『新生・独立第13戦隊』

デインギル帝国首都・ウルクポリス

ポリスを見下ろす丘陵の頂きにある神殿内部。

奥に鎮座する魔神像の前に、この国の元首にして最高宗教指導者たる大神官大総統・ルガール1世は立っていた。

その背中に、微かな靴音を立てて歩み寄るのは、彼の長男、デインギル帝国の次期指導者たる、ルガール2世ことルガール・ド・ザールだ。

彼は宇宙艦隊司令長官を兼ねている。

「父上、全ての“処理”は終わりました」

「ん。して奴らの艦からの回収状況は？」

「順調です。明日の執務前には最初の報告を申し上げます」

「よろしい、引き続き全軍警戒態勢を続けよ」

「はっ！！」

恭しく臣下の礼をとり、ルガール・ド・ザール將軍は下がった。

ルガールは表情を崩すことなく魔神像を見上げつつ、思いを馳せる。

つい先日、クーデター計画を阻み、異母弟妹とその家族を肅清。その混乱を立て直したところに「時空管理局」なる組織がちよっかいを出してきた。

最初に接触してきた『アストラ』なる艦の艦長は貨物船に対して

「積み荷の中にあるロストロギアを引き渡せ」

と要求し、船長が拒否するや、武力行使すると脅しをかけてきた。

救難信号でド・ザール率いる第1艦隊が駆け付け、最終試験中のハイパー熱核ミサイルであつさりと沈んだと聞いた時は、そんな貧弱な船でよくこの弱肉強食の宇宙に乗り込んできたものだと思つてしまつたものだ。

その後やってきた小艦隊に至つては、搜索に来たのか報復に来たのか理解に苦しんだ。

報復には脆弱に過ぎ、搜索には引き際が拙劣過ぎだった。

旗艦らしい大型艦を含む2隻は呆気なく沈没。

1隻は大破しながらワープして離脱し、残る1隻は機関部を撃ち抜いて行き足を止め、即効性の麻痺ガス弾で乗組員を昏倒させて本国に曳航させた。

生存していた乗組員は即決裁判後全員処理したが、一部は時空管理局への警告を兼ね、神への生贄に差し出した。

あとは艦の解析だ。

学ぶべき物は少ないと思うが、念のためだ。

「時空管理局の身の程知らずどもよ。せいぜい恐怖するが良い。性懲りもなくやって来たら、より素晴らしい恐怖と絶望を味わわせてやるわ……」

哄笑するでもなく、口元に僅かな冷笑を浮かべたのみの無表情を崩さず、ルガールは独語した。

地球防衛軍・新横須賀基地、内惑星防衛艦隊司令部

一室に10人ばかりの男女が集っている。

上座に座るのは内惑星防衛艦隊司令のタナリットと本部付先任参謀の古代 守。

2人と相對して座るのは戦艦『相模』艦長・副長の嶋津冴子と大村耕作。巡洋艦『伊吹』の塩江龍一と綾歌麗奈、同『鳥海』のフランベルク・棗・シルヴィアと白百合・アリアの双子姉妹。

パトロール艦『水無瀬』のナーシャ・カルチエンコと篠田 巖。

4隻中3隻が女性艦長というのも異例だが、彼女達は皆、武勇と容姿の端麗さと裏腹に「残念美女」と言われるほどの問題児だ。

『鳥海』のフランベルク・棗・シルヴィアは、砲術にかけては天才否、鬼才的な手腕を持つが、面倒な事は全て副長である妹のアリアに丸投げし、波動砲をぶつ放したがる『ハッピートリガー』。

『水無瀬』のナーシャ・カルチエンコは過激な操艦指揮で知られる『ミス・チキンレーサー』。

部隊指揮官である嶋津冴子はガミラス戦役時、『スペース・イーグル』こと古代守に劣らぬ戦績から『コスモ・スワロー』の異名を奉られていたが、白色彗星帝国戦役では敵軍ナンバー2のサーベラー総参謀長と罵倒合戦を繰り広げた拳句、座乗艦ごと爆散させたため、『人食い燕』の異名も加わっていた。

『伊吹』副長の綾歌麗奈にしても、一見柔らかな雰囲気的美貌に豊

満かつバランスの取れたスタイルの持ち主だが、『セクハラバスター』と恐れられる毒舌と関節技の使い手で、塩江や大村といった男性士官の方が真人間に見えるほどだ。（篠田を除く）

そんな、一堂に会してしまった残念美女達を前に、タナリット司令が訓示する。

「……地球は引き続き非常に厳しい状況に置かれているが、だからこそ人類は外向きでなければならない。

前途は決して楽ではないが、ガミラス・白色彗星帝国戦を力強く乗り越えた君達の突破力で難局を打開することを期待している」

敬礼と答礼に続き、古代の任務説明が始まった。

「……連邦宇宙開拓本部では、アルファ・ケンタウリ星系向け探査船団を計画し、再来月の出発を目指して準備を始めている。

13TFはこの護衛についてもらうが、それまでの間は訓練を兼ねた重要船団の護衛と、新造艦の慣熟訓練任務等についてもらう……」

その後、質疑応答を経て散会したが、冴子達艦長・副長組はそのまま訓練メニューのすり合わせに入った。

かくして、内輪から『バットビューティーズ・タスクフォースBBTF』。時空管理局からは『バットビューティーズ・タスクフォース聖帝部隊』と呼ばれることになる新生・独立第13戦隊は、波高き宇宙に船出した。

第143話『爪跡』（寸劇削除）

ミッドチルダ、時空管理局地上本部1階、一般受付

「あの映像は事実なのか!？」

「管理局の艦船はあんなに弱かったのか!？」

あの惨劇の映像が流れた直後から、地上本部や管理局各部隊には市民が直接押しかけたり、電話で事実関係の説明を求めていたが、当の職員もわからないのだから説明のしようがない。

そしてルガールの陥穽にはめられた事に気づいた本局の動揺も著しかった。

スプラッター映画等問題にならない残虐行為を一般市民に直接見せつけたディンギル帝国と大神官大総統ルガルルに対する感情は、もはや憤怒を通り越して憎悪に近い。

「あのような人でなしは許せん!

正義の鉄槌を下さなければ、次元世界は奴らにいいように掻き回されるぞ!」

「許せん気持ちは皆同じだ!

しかし、ディンギル艦隊の戦闘力はとんでもないものだぞ!

我々の艦船で対抗できるのか!？」

「向こうは我々に明らかに挑戦してきたのだ!

しかも『ネストル』が捕獲され、次元航行技術も奴らの手に渡る恐れが強いのだ!

奴らがこちらに来る力をつける前に討伐艦隊を差し向けて、踏み潰せばよからう!」

等と激論が交わされている。

自分達が拠って立つ力の象徴たる次元航行艦がろくに反撃できぬまま一方的に撃破されていく。

まだ若い局員が、あんな残虐なやり方で殺されていく様をただ見ているしかできず、彼らは惨めな敗北感と無力感と屈辱のぬかるみに突き落とされていた。

時空管理局の戦力は管理世界でしか通用しない。

たて続けに発生した艦船の喪失で管理局への信頼が揺らいでいるところに、今回の映像とルガールの宣告はダメ押しになった。管理局、特に海の体面は地に墜ちたのだ。

この敗北を挽回し、市民からの信頼を回復するにはディンギル帝国軍に大打撃を与えることではしか打開できない。

ここで後退すれば管理世界は一層動揺し、治安の悪化と反管理局勢力の跳梁跋扈を招く。

強硬派から出た主張は過激だが正鵠を得たものであり、慎重派も強く反対はできない。

地球防衛軍に支援要請を出してはどうかとの意見も出るには出たが、

「彼らもディンギルと同じ質量兵器信奉者だ！

そんな連中の力を借りれば次元世界に質量兵器が拡散するぞ！」

という強硬派に押し切られてしまった。

もつとも、今の地球に管理局を支援する余裕があるかどうかはわからないが。

海上第5支部付近空間、次元航行艦『クラウディア』士官用ラウンジ

「……………」
「……………」
「……………」

第5海上支部の下層部に突入して人命検索と救出任務に当たっているギンガ、スバルのナカジマ姉妹とチンク、ディエチ、ノーヴェ、ウエンディの旧ナンバーズ4姉妹は、コーヒー、紅茶の湯気を顔に当てながら、一言も出せずにいる。

ここは士官専用スペースであり、准尉・司令補以上でないと立ち入れない部屋だ。

スバルやナンバーズ達は士官ではなく、本来は士官同伴でないところには入れないのだが。

「過去最悪の事態だ。」

非常に危険な場所へ突入する者に、階級の上下などない！」

艦長命令で曹長以下の突入隊員にも、放射能除染処置を受けた後の入室権限を与えていた。

第1次の突入隊員だったスバル達は、撤収から最短で12時間経過しないと再突入できないため、休息を兼ねてここにいる。

ちなみに、現在は第3次隊が突入しており、聖王教会から派遣された教会騎士団も含まれ、修業予定者であるセイイン、オットー、ディ

ードの旧ナンバーズも志願し、名を連ねている。

「……ひどいよ、何であんなことするの……？」

見知らぬ敵への憤りを、スバルが絞り出すように呻く。

艦長のクロノを除く『クラウディア』乗組員とスバル達派遣隊員には、デインギル帝国の事や、もっと残虐な行為が行われた事実はまだ知らされていない。

これは追加派遣された艦と派遣隊も同じだ。

「敵が誰かはともかく、管理局やドクター達とも違う正義と価値観を持つ者達のような……」

ナンバーズのリーダー格であるチンクが応じる。

「身を置いた場所によって、正義の概念も違うだろう。」

私も奴らのした事を許すつもりはないが、それを以って奴らを絶対悪とは言えんさ……」

「けど、被害はここだけで済んでるのかな……」

ノーヴェが声のトーンを落とした。

「他にも被害が出るかも知れないって事？」

「……クロノ提督は何も言わないけど、あえて伏せている可能性はあるわね……」

ディエチとギンガだ。

「でも、私達はこの敵に対抗できるんスカね……」

ムードメーカーのウエンディも流石にトーンが落ちている。

「これまでも質量兵器の犯罪はあったけど、せいぜい銃器や携行型のロケットランチャー位。これだけの被害となれば、『アストラ』が発見したという新たな世界がそっくり敵に回ったと言うことかしらね……」

ギンガが推定する。

次元航行艦5隻を簡単にひねってみせたのだ。

もはや反管理局の武装勢力ではなく、暗黒星団帝国やガトランクス、地球防衛軍などと同じ、世界規模の軍事勢力だろうと誰でも推定できる。

「魔法文化はなく、純粹科学兵器で戦う世界と、こつも続けて遭遇するとはな……」

管理局はもたないかも知れない、とは口に出さないチンクだ。

『クラウドディア』艦長執務室

「ふう……」

ミネラルウォーターと一緒に胃薬を飲み下し、ひと息つく。

第5海上支部の半壊をも上回る悪夢のような情報に、冗談ではなく胃痛がひどくなった。

あれは悪意なんてものではない。

地球で読んだ古代・中世史の書籍にあった宗教専制国家そのものだ。

魔法とか質量兵器とかの問題ではない。正邪を含めて根本からして違うのだ。

あの世界　　ディンギル帝国　　相手に交渉は不可能だ。

ではどうする？

武力制裁しようにも、返り討ちに遭うのがおちではないのか？

それに、あのルガルは敵だが、ディンギルにも国民はいるだろう。彼らまで討つ必要はない。

それに、あのルガルがディンギル国民にとって良き為政者であれば、彼を討つ時空管理局は、ディンギル国民にとっては敵だ。

時空管理局の敵だというだけで排除していいのか　　？

そこまで思い至ったところで、クロノは現実に引き戻される。

ディンギル軍の規模がどれほどかわからないが、艦船の性能や武装は管理局のそれを凌いでいるし、地球防衛軍と同様、宇宙戦闘機もある。

そして対艦ミサイル。

遅発性信管でも使っているのか、命中してから爆発するまでのタイムラグが長過ぎる。

「……放射能を目標内部に注入してから爆発するのか？」

全身に寒気が走り、鳥肌が立つ。

単に目標を破壊するだけでなく、人員を確実に殺す……。地球でもそんな兵器は製造されていない。

そんな非人道的な兵器を持つ軍隊相手に、非殺傷戦闘を基本とする

管理局が戦えるのか？

脳裏に何度か通信で顔を合わせた地球防衛軍士官の顔が浮かぶ。

彼らならば、たとえ敵が優勢でも臆さずに戦うだろう。

管理局はいくつかの反管理局武装組織と戦っているが、管理局の方が戦力、物量とも上回っている。

しかし、ガトランチス、地球防衛軍、暗黒星団帝国、デインギル帝国は、物量はわからないが、戦力が段違いで戦意も旺盛。敵を殺すつもりで戦う。

そんな相手に、管理局が物量で勝っていてもアドバンテージにすらならない。

今すぐデインギルが管理世界に攻めて来るとは思えないが、次元航行技術を自分達のものにした時、攻め込んで来てもおかしくはない。その時に必要なのは、敵を殺してでも大切なものを守る覚悟と、敵と互角に戦うための術だが、管理局には両方とも足りない。

「これが魔法の限界なのか……」

暗然たる呟きが漏れた。

クラナガン郊外、高町家

ルガールのあの映像の影響で、関係者の動揺が著しいと判断され、教導プログラムの一部が中止されたため、なのはは定時で勤務を終え帰宅した。

幸い、あの映像が流された時間は学校の授業中だったため、ヴィヴィオからはあの映像を見ていなかったが、周囲の大人や街中の異様な雰囲気から何か変事があったことは悟っていたようだ。そして、子供達は疑問をストレートに尋ねる。

「ママ、かんりきよくの船がたくさんやられたってホントなの？」

「うん……」

もう子供達にも話が伝わっているのか。

既にプレスリリースはなされており、管理局次元航行本部の記者会見も間もなく始まるので、なのも否定できなかった。

「かんりきよくの力でも負けちゃったの？」

不安げな娘を、なののは抱き締める。

「うん。負けちゃった……」

でも、ヴィヴィオは何があっても、なののはママが守るからね……」

「……ヴィヴィオ、早く大人になって、強くなりたいよ。」

そしたら、ママを守ってあげられるのに……」

「……ヴィヴィオ……」

こんな事を考えたくはないが、もしミッドチルダが危なくなったら、子供達だけでもあの地球 第97、あるいは197管理外世界 に疎開できないものか。

第97世界には両親、兄、姉達がいるし、もう一つの地球にはデイングルと互角に戦える戦力があり、今ならフェイト達もいる。

地球防衛軍が如何に時空管理局に不信感を抱いていても、局員でもない子供達を邪険に扱いはしないだろう。

少し前までは、こんな事なんか考えなかったのに。

魔法の力で質量兵器を廃止し、次元世界を平和にするという管理局の理念に賛同したから局に入り、懸命に努力して、少しは世界のために貢献できたという自負があった。

しかし、ガトランチスや地球防衛軍等、魔法とは無縁で、かつ桁外れに強力な質量兵器を使う世界の宇宙軍隊や武装勢力は、なのはや管理局員達の自負を微塵に打ち砕いた。

アインヘリアル並と思われる強力なエネルギー兵器を持つ宇宙戦闘艦に宇宙・大気圏両用の機動兵器等、XX級艦やオーバースクラス魔導師でも太刀打ちできない。

彼らの力の前に自分達の魔法は無力なのか？

後日、ティアナから

「生身で飛んだり戦うことができない人が、鋼の翼と鋭い爪や牙を求めるのは当然で、身一つでも飛べたり戦える魔導師や管理局の理屈だけでそれらを没収するのは、極論すれば『非魔導師は魔導師に逆らうな』と言うようなもので、傲慢以外の何物でもありません」

と言われ、絶句することになる。

登場人物設定5+

(独立第13戦隊の艦長・副長等及び艦の紹介)

(前書き)

古代 守「俺が言うのも何だが、こいつらに任せて大丈夫なんだろうか……?」

嶋津にフランベルク姉にカルチェンコ…。

見栄えはともかく、超ド級の問題児ばかりじゃないか」

真田「性格はともかく、結果はきっちり出す連中だからな。

それに、副長連と塩江はしっかりしてるから大丈夫だろうさ」

冴子「おーい、古代。カミさんにお前の過去の浮名を全部ゲロるぞ」

フランベルク・白百合・アリア「そうですよ、私という者がありながら!」

古代 進「ええ!? 兄さん、そんなに女泣かせだったのか!？」

冴子「そうだぞ、何人の女がこいつの毒牙にかかったか…」

守「バカ! お前ら声がでかい……!!????」

スターシャ「守、あちらでゆっくりお話ししましょうか(微笑)」

……………暗転……………。

登場人物設定5+ (独立第13戦隊の艦長・副長等及び艦の紹介)

?巡洋艦『伊吹』(艦名ご提案: Wilhelm Mohanke様)

2201年4月、標準型巡洋艦の第37番艦として竣工。

白色彗星帝国来襲時は土星圏第2艦隊(通称ヒペリオン艦隊)所属で、白色彗星第6機動艦隊本隊(バルゼー艦隊)への側面攻撃を敢行。

本艦は砲雷撃戦で駆逐艦2隻を屠り、戦艦1隻を大破落伍させたが、戦艦の砲撃で大破し戦線を離脱。

ヒペリオン艦隊の僚艦は全て失われたため、唯一の生還艦となった。

戦争集結後に修復されたが、その際に艦首波動砲を集束型に、主機関もより高出力の新型機関に換装。また、連装パルスレーザー砲を片舷3基、計6基追加した。

艦長: 塩江 龍一(29)

古代 守や嶋津冴子らの1期後輩。

白色彗星戦役では『伊吹』副長だったが、艦長が致命傷を負い、間もなく戦死したため指揮を代行し、生還を果たした。

その時の手腕を評価され、修復なった『伊吹』艦長を拝命した。

性格は冷静沈着で、奇をてらわぬ手堅い指揮が特徴。

独立第13戦隊では司令官代理の嶋津冴子に次ぐ次席艦長である。

趣味はコーヒーで、艦長室に専用の道具・設備を設置し、さらに食堂にも最新型のコーヒーサーバーを設置させているが、本人はブラック以外は口にしない主義。

副長の綾歌麗奈から好意を寄せられているが、全く気づいていない
朴念仁で、乗組員からは溜息混じりに『鈍艦長』と呼ばれている。

(イメージＣＶ：小野大輔)

副長兼航海長：綾歌 麗奈(25)

白色彗星戦役時は航海長だったが、戦後、副長兼任に昇格した。

人当たりが良く、乗組員からの信頼も厚いが、一見おとなしげな美
貌とナイスバディの持ち主であるため、度々上官等からのセクハラ
に遭った。

しかし、得意の関節技と男心をえぐるような毒舌で撃退し、畏怖ま
じりに『セクハラバスター』の二つ名を献上されている。

唯一の例外は艦長の塩江で、菓子差し入れる等、アピールを繰り返して
返しているのだが、当の塩江が鈍過ぎていまだ効果がなく、密かに
乗組員達の涙を誘っている。

(イメージＣＶ：後藤邑子)

【キャラクター原案：龍様】

?巡洋艦『鳥海』(艦名ご提案：selgey kattvins
ky様)

標準型巡洋艦の第8番艦として2201年1月に竣工。

竣工時は旗艦任務に用いる事を想定して艦橋構造物が若干大型にな
っており、ドレッドノート級主力戦艦の就役が進むまでの短期間だ

が、第2外周艦隊旗艦を務めた。

白色彗星帝国来襲時は引き続き第2外周艦隊に所属し、巡洋艦4隻からなる第18戦隊の旗艦だったが、土星圏会戦でバルゼー艦隊旗艦の火炎直撃砲が至近に着弾したため艦橋を中心に大ダメージを受け、操舵士以外のブリッジクルーを失って戦線離脱を余儀なくされた。

終戦時はアステロイドベルトのケレス基地に待避中で、修復時に艦首波動砲を集束型に、機関も高出力の新型に換装。

また艦体中央両舷に連装パルスレーザー砲を片舷3基、計6基追加し、艦橋もコンパクト化されたため、旗艦能力はかなり低下したが、戦闘・航行能力は向上している。

艦長：フランベルク・棗なつめ・シルヴィア（27）

古代 守や嶋津冴子らの3期後輩。

日独混血で、透き通るような白い肌とセミロングの銀髪、赤い瞳というアルビノ体質だが、健康には問題ない。

身長は155?と小柄。

一卵性双生児の姉で、妹の白百合・アリアも宇宙戦士である。

白色彗星来襲時は実戦経験者が激減していたヨーロッパ・ドイツ地区に派遣中で、巡洋艦『プリンツ・オイゲン』艦長の任にあり、土星圏での艦隊決戦では反撃の一番槍を担い、敵旗艦『メダルーザ』に最初の命中弾を与えた。

白色彗星に艦ごと飲み込まれそうになったが、『ヤマト』と衝突して艦の向きが変わったのを逆用し、フライ・バイで超重力圏外に脱出し生還を果たした。

戦後は日本に戻り、『鳥海』艦長に就任。

万事にのんびり屋で、事務処理等の面倒事は全て妹のアリアに丸投げしている有様だが、物事の本質を瞬時に見抜く事に長けている上、長距離射撃にかけては鬼才ともいえる手腕を持つ。

2199年当時は沖田十三が指揮する戦艦『英雄』の第2主砲塔長だったが、同年7月の冥王星会戦において、第2主砲への直撃弾で右腕を失った。

現在は義手を軍から支給されているが、重くて面倒臭いとの理由でつけていない。

しかし、先輩の真田志郎にレーザーガン内蔵義手の製作をせがんでいると、まことしやかに噂されている。

白色彗星戦役では波動砲を撃つ機会がなかった上、イスカンドル救援に赴いた『ヤマト』『相模』が2回波動砲を発射したと知った時は、『鳥海』の艦長室で駄々をこねて悔しかった。

座右の銘は『人生万事勤と運』

副長兼航海長：フランベルク・白百合・アリア（27）

シルヴィアの一卵性双生児の妹だが、健康体のため瞳と髪は黒い。ショートカット
但し身長は姉とほとんど変わらない156?。

性格は真面目で明るく、基本的に誰に対しても丁寧^レに接するが、万事アバウトで雑務を丸投げしてくる姉に対しては何かと厳しい。

白色彗星帝国来襲時は姉が艦長を務める『プリンツ・オイゲン』の副長兼航海長で、白色彗星に吸い寄せられた時、『ヤマト』に衝突して艦の向きが変わったのを利用し、巧みな操舵とフライ・バイ効果で脱出に成功した。

戦後は姉に引つ張られる形で、ともに『鳥海』に転任している。後述するナーシャ・カルチエンコと共に豪快な操艦で知られるが、『ヤマト』と衝突したことを逆用し、フライ・バイで生還した事で、『地球圏最強姉妹』『ヤマトを踏み台にした姉妹』なる異名がついた。

幼少期からゴーイングマイウェイな姉のフォロワー役になってしまうことが多い、『プリンツ・オイゲン』副長に就任するや、事務処理一切を丸投げされ、『鳥海』に転任した後も状況は同じである。

2199年当時は駆逐艦『ゆきかぜ』の正操舵士だったが、6月の海王星軌道会戦で重傷を負い入院したため、冥王星会戦には参加できず、『ゆきかぜ』も未帰還になったため、一人生き残った事で苦悩していた。

故に、守がイスカンドルで生存していることを知った時は欣喜した。

(姉妹とも、イメージCV：桑島法子)

【キャラクター原案：minmin様】

?パトロール艦(警備巡洋艦) 『水無瀬』 (艦名ご提案：雪風様)

警備巡洋艦の第57番艦として2201年11月末に竣工。

艦長・副長ら乗組員の半分近くは、白色彗星帝国軍との戦闘で大破全損したパトロール艦『九頭竜』からの乗り換え組。

乗組員の慣熟訓練を兼ねて太陽系南極宙域を哨戒中、地球に接近する白色彗星残党のミサイル艦隊を発見。そのまま通報・追跡しながら迎撃戦闘にも参加した。

艦長：ナーシャ・イリーノスカヤ・カルチェンコ（28）

在日ロシア人で、父親は駐日ロシア大使館の一等書記官。母親は世界的プリマドンナだったが、2人ともガミラス戦役時に死亡。

ガミラス戦時、出撃中に所属していたオムスク基地が消滅し、他のロシア国内各基地とも連絡困難になったため、日本に移動し、現在まで日本地区を拠点にして軍務についている。

金髪碧眼に推定Gカップの正統派ロシア美人だが、戦闘では一転、アグレッシブな操舵で、宇宙駆逐艦を戦闘機に変える女と言われた。また、自身もコンバットサンボとシステムの有段者。

私生活では大の酒豪、というよりザルで、ウオツカをストレートであおっても二日酔いしない。

嶋津冴子とは飲み友達だが、2人揃うと問題

（下ネタ丸出しトーク/野球拳で相手の男を文字通り身ぐるみ剥がした/店の中で大声でウ○コやゴキブリの話をする/偶然遭遇した露出魔の目の前でフランクフルトソーセージを食いちぎり、逆ギレ

した露出魔を叩きのめした拳句、顔と下半身に落書きした、等）を多発したため、横須賀の飲み屋の4割で出入り禁止を喰っている。

（イメージC V：大原さやか）

副長兼戦闘班長：篠田 巖（38）

角刈りに鋭い目付きが特徴的な戦闘指揮官。

実家は関東有数の「その方面の団体」の有力構成団体で、本人も後継者になるつもりだったが、父が組を解散し引退宣言したため、高校を中退して地球防衛軍陸戦学校に転入。卒業後空間騎兵隊に入隊した。

しかし、25歳の時に一念発起して宇宙戦士訓練学校に入学。宇宙戦士の道に入った。

白色彗星帝国戦役時はパトロール艦『九頭竜』の副長兼戦闘班長で、艦が被弾し戦闘不能になるや敵駆逐艦への移乗白兵戦を敢行。父親から受け継いだ長ドス片手に先頭を切って突入し、艦長を討ち果たして敵艦を占拠するのに貢献。戦後もそのまま『水無瀬』副長兼戦闘班長に横滑りした。

（イメージC V：速水 奨）

正操舵士：月読 伊歩（20）

普段は気弱でオドオドしている印象を受けるが、操舵士席につくや

性格が激変。艦の性能限界ギリギリの激しい操艦を見せる。
元々は加藤三郎や山本 明らの1期後輩にあたるパイロット訓練生
でトップクラスの成績だったが、訓練中のもらい事故で負傷。パイ
ロットの道を閉ざされてしまった。
しかし、才能を惜しんだ土方 竜校長の勧めで航海科に転科し、操
舵士として才能を開花させている。
あだ名は「イヴちゃん」「イヴイヴ」。

(イメージCV：能登麻美子)

【キャラクター原案：黒鷹様】

第144話『萬屋冴ちゃん只今準備中(1)』(前書き)

もはや何の価値も意味もない無一文寸劇

冴子「何だ。この惨状は？」

冴子の足元には、ボロボロになった雪菜が目を回している。
そして少し離れた所では……。

「にゃあああ！誰か助けてえええ！」

必死の形相のなのはが逃げ回っているのだが、背後から無数の虫が飛んだり、地面をゾロゾロはい回りながらなのはを追跡している。

ティアナ「……話が拗れて模擬戦をすることになってしまいました」

冴子「撃ち合ったというわけか……」

フェイト「なのはがスターライト・ブレイカーを撃った直後に、突然無数の……小さなゴキブリが、なのはの目の前に飛び出してきます……」

冴子「あれを撃ったな……」

フェ・ティ「あれ、って……？」

「地下都市に住み着いてたゴキブリを転移させて撃ったな……。
女性にあれはきついぞ」

ティアナ「雪菜はゴキブリが平気なんですか」

冴子「地下都市にネズミとゴキブリは付き物だからな」

フェイト（それにしても、魔法陣が一瞬しか見えなかった……。一体どんな魔法を使ったのよ！？）

第144話『萬屋冴ちゃん只今準備中(1)』

13TFの再編に伴い、近代改装を受ける『ヤマト』は13TFを離れて予備艦籍に編入され、山崎機関長ら一部を除く大部分の乗組員は、それぞれ新たな任務先へ異動した。主だった乗組員の異動先はというと、

古代 進は惑星航路外の宙域を哨戒する警備艇第15号 駆逐艦
や護衛艦もかなり減少したため、数人で運用できる小型高速艇が多数建造されている の艇長。

島 大介と徳川太助は自動(無人)艦隊中央司令準備室。

相原義一と北野 哲は中央司令部。

南部康夫と太田健二郎は内惑星防衛艦隊司令部。

森 雪は正式に司令長官付秘書に復帰した。

コスモタイガー隊の面々もそれぞれの部隊に転属したが、リーダーの坂本 茂他数名は『ヤマト』に残った。

佐渡酒造とアナライザーは佐渡が首む犬猫病院に戻ったが、軍属のままである。

そして改装計画を取り纏めた真田志郎と言えば、アステロイドベルト内の一小惑星に新設される「イカルス第2天文台」の建設責任者を拝命したが、事情を知らない者は真田の異動先に奇異な印象を抱いた。

全体的には地上勤務、それも中央司令部近辺に散らばったのは藤堂長官の深謀遠慮があったが、これは後日結実した。

一方、13TFは艦の再編こそあったが、乗組員の異動は極少数に留まり、士官の異動はなかった。

そして各艦の艦長は今日も参集して、部隊訓練計画を練っていた。

ドレッドノート級主力戦艦のうち、『相模』以降の就役艦は主機出力や各バーニア推力がアップし、内惑星（太陽）土星圏）最大巡航速度が28宇宙ノットから30宇宙ノットに向上。

また旋回等の機動性も向上したため、戦闘空母の護衛や巡洋艦を直率しての高機動戦が可能になったが、白色彗星帝国との戦いで地球防衛艦隊が大損害を被ったため、これらの構想は頓挫した。

しかし、13TFの再編はこの構想が一部復活した形になり、戦艦による高機動戦闘を要求されるだろう。

「何のこたあない。金剛級戦艦と同じ事をやれってか……？」

古代 守から再編の狙いを聞いた嶋津冴子はぼやき半分に呟いた。

冴子が言った金剛級 旧日本海軍の金剛級戦艦（金剛、比叡、榛名、霧島）は、第2次世界大戦において出撃した各国の戦艦でも1・2を争うベテラン艦揃いだったが、度重なる改装で巡洋戦艦から高速戦艦にバージョンアップした結果、空母の護衛から地上目標への艦砲射撃と、西太平洋を縦横無尽に走り回り、大部分がろくに働けずに潰えた日本戦艦の中では、唯一活躍したクラスとなった。

『ヤマト』や、同じドレッドノート級主力戦艦でも初・前期型は中速艦という位置づけだったが、ドレッドノート級後期型とアンドロメダ級は高速艦に分類されていた。

ことに、白色彗星帝国軍の艦船は皆高速艦で、地球艦隊は敵艦隊の進撃に対応するのがやっとという場面が一度ならずあり、戦艦も高速でなければならぬという認識が確立したこともあったため、『アリゾナ』や『マルス』等、現在建造中あるいは今後計画される戦艦は全て30宇宙ノット以上の高速艦とし、『ヤマト』等、既存の中速戦艦も順次強化改装を施工して高速・高機動化することになったのだが、最も戦闘回数が多く、そのダメージがまだ残る『ヤマト』から施工することになった次第だ。

特に『ヤマト』は地球の切り札的存在であるため、マニュアルオペレーション重視の思想はそのままに、カタログデータ上はアンドロメダ級に拮抗する艦にするため、改装期間も長くなりそうだ。

ゆえに『ヤマト』が復帰するまでの間、13TFが代わって「万事屋」としての任務を担うのだ。

当然、臨機応変の対処が要求されるわけで、13TF各艦とも「実績」は十分だが、いまだ蠢動する白色彗星帝国の残党や、本拠地すらわからない暗黒星団帝国への備え等をしながら、他恒星系にも開発・移住の手を伸ばすのだから、これはなかなかハードである。

「我々は、デスラーに学ばなければならない」

打ち合わせの席で、本部先任参謀の古代 守が冴子達に語った。

デスラーの手法には相容れないところがあるが、母なる星を失い、流浪の身になっても、ガミラス再興に邁進するあの執念まで否定することはできない。

地球人類存亡の危機は遠ざかったが、消えたわけではなく、将来、万一地球が消えるような事態が起きてしまっても、人類は生き延びなければならない。

そのためには、他の恒星系にも平和的に進出し、好環境の無人惑星には積極的に移住する必要がある。風に乗って新天地を目指すタンポポの種や子グモのように。

13TFに課せられる任務は探査・輸送船団の護衛、現地惑星周辺の制宙権掌握等多岐にわたる。やるべき事は山積しているのだ。

『相模』士官会議室

冴子を初めとする13TF各艦の艦長による打ち合わせが進められている。

議題は当面の不安要素 敵性軍事勢力 についてだ。

ガミラスや白色彗星帝国は天の川銀河の外から侵略してきたし、暗黒星団帝国もその可能性が高い。

しかし、これからは天の川銀河の内側 深宇宙 に向かう。当然星の密度も高くなり、高度知的生命体 ヒューマノイド が住む惑星もあるだろう。

彼らが宇宙に進出するだけの文明レベルになれば一切接触しないでやり過ごせばいいし、宇宙に漕ぎ出す文明・技術を持ち、平和・穏健的な勢力ならば、対等な外交関係を持つ選択も考えられるが、好戦的・侵略的な勢力ならば話は違う。

基本的には、可能な限り戦闘は避けねばならないが、こちらの艦船や乗組員に危険が迫れば排除しなければならない。

「ガミラスとは極めて特殊ではあるが、休戦状態と言っている。ガミラス艦隊と仮に遭遇しても、こちらから攻撃することは厳に慎

まなければならぬ」

塩江、ナーシャ、シルヴィア達は、些か複雑な面持ちながらも頷いた。

「白色彗星の残党に対しても、基本は無視でよろしいんですか？」

「組織的な報復攻撃をしてくる可能性は低下しているが、喧嘩を売られたら買っしかないだろうな……」。

問題は暗黒星団帝国。それと……」

「暗黒星団帝国以外にも厄介な勢力があるのですか？」

問い返すナーシャ・カルチェンコに冴子は一呼吸置いて口にする。

「時空管理局だ」

第145話『萬屋冴ちゃん只今準備中(2)』(前書き)

今回、管理局サイドは野郎だけです。

第145話『萬屋冴ちゃん只今準備中(2)』

「時空管理局とは……例の魔法の世界の治安維持組織ですか？」

「そうだ。惑星を一つの世界と定義し、魔法文化や、彼らがいうところの『次元の海』に出る技術を有するか否かで、彼らの管理下になるかどうか分かれるようだ」

塩江の質問に冴子が答える。

「……魔法と言っても、ホウキに跨がって飛んだり、黒いトンガリ帽子を被っているわけではない」

と続けた冴子は、用意した映像を再生する。

それは『レム』から回収した時空管理局の航空武装隊の教導用映像で、白いコスチュームに身を包んだ栗色の髪の少女と、黒いコスチュームの金髪の少女が「戦っている」映像。

しかも、2人ともまだ10歳に満たない年頃だ。

「人間が、生身で飛んでいる……？」

「ビームを撃ち合っている……」

ナーシャとシルヴィアが身を乗り出すが、シルヴィアが思い出したように言う。

「黒い服の金髪ちゃんは確か、嶋津艦長が預かっている子じゃないですか？」

「……そうだ。この当時、彼女も対戦相手の子も9歳だったと聞く。」

2人が時空管理局に入ったのはこの後だ」

冴子も敢えて感情を排した口調で説明する。

塩江は腕を組み、無言で見えていたが、冴子に質問する。

「……時空管理局は、このような年頃の子供も第一線に立たせるのですか？」

「去年の9月に『相模』が遭遇した時空管理局の難破船を捜索した時に、10歳から15歳位の子供の魔導師と思しき遺体を確認している。」

管理局は、魔導師としての才能がある者は年齢に関わらず採用、あるいはスカウトしているようだ。

事実、黒い服の少女、フェイト・テストロッサ・ハラオウンは犯罪捜査官になったが、問題はもう一人、白いコスチュームの少女は、時空管理局が言うところの管理外世界、つまり魔法文化がない惑星の出身なんだが、この映像が撮影されてから11年を経過した現在は、やはり管理局のエース的存在だという」

白いコスチュームの少女　高町なのは　が「地球」出身とは敢えて言わなかった。

「　　と言うことは、魔導師の資質が高ければ、誰彼構わないということなのですか？」

「……穿った見方をすればそうだ。犯罪を犯した者でも、魔導師資質があれば、司法取引や情状酌量等で管理局入りするケースもままあるようだ」

一同が無然とした表情になる。

「穿った見方をすれば、洗脳には丁度いいですね」

ナーシャ・カルチェンコが辛辣なコメントを口にする。

「向こうには向こうの事情があるんでしょうけど、たとえ高い資質の持ち主であれ、本来不干渉であるべき世界の子供まで引き込むよくなやり方には、一片の好感も持てませんね」

頷きながら、今度はフランベルク・棗・シルヴィアが質問する。

「ところで、時空管理局が取り締まるといって質量兵器というのは、実弾兵器だけなんですか？」

「フエイト・Ｔ・ハラオウンに質問したことがあるが、管理局は、魔法によらない兵器全般を質量兵器と定義づけているらしい」

「だとすれば、波動砲はその極致じゃないですかね……？」

「そういうことになるなあ。」

今後、あちらさんがちよっかいを出してくることは十分ありえる

「魔導師の優位を保ちたいためにですか？」

質す塩江に冴子が溜息混じりに答える。

「管理局曰く、子供でも扱える質量兵器があるから戦争が絶えないということなんだが、意地悪な見方をすれば、魔法や魔導師の優位を保ちたいがために質量兵器を使わたくないんだらうとも言えるな。」

とはいえ、別に管理局を全否定するつもりはないさ。

彼らの活動で治安が保たれている惑星もあるのだしな。

我々としては、管理局は今の管理世界の治安維持に専念してもらって、こっちの事は放つといてほしいんだがね。

やっこさん達の戦力では白色彗星や暗黒星団の連中にたやすく捻られることは身に染みているらうし……」

冴子の見るところ、言葉は悪いが、管理局の次元航行艦船は次元空間（？）というトンネルでしか生きられないモグラだ。通常空間で宇宙戦艦という猛禽に狙われたら、ろくに抵抗できず、爪と嘴で引き裂かれてしまう。

この宇宙では、時空管理局の常識やルールが全て正しいわけではないことを、いい加減学習してほしいものだ。

「基本、管理局の艦船と接触したら、艦名を名乗る程度にしておこう。」

もし、武装解除しろだの艦を接收するとかほざいたら……」

「その時は……??」

「沖田艦長の故事に学ぶとしよう。」

それでも武力衝突が避けられないのなら……」

そこで一息つき、幾分声を低くして言葉を接ぐ。

「立ち塞がる者が誰であれ容赦しない。」

たとえ子供相手でも、完膚なきまでに叩きのめすだけだ」

時空管理局・無限書庫

次元世界最大の蔵書数を誇る超巨大図書館の実質的責任者であるクロノ・スクライアは、10年来の腐れ縁であるクロノ・ハラオウンと、モニター越しに話をしている。

普段はクロノが突然大至急の資料請求をするため、大抵一悶着あるのだが、珍しくも口論がない。

今のところは、だ　　。

『そうか、やはり見つからないか……』

「恐らくは過去にどこの管理世界とも接触がなかったんだと思う」

クロノとフェイトが『ヤマト』と遭遇してから、ユーノは事ある毎に関係する資料を探しているのだが、無限書庫をもつてしても、もう一つの地球や『ヤマト』、ガトランチス帝国、暗黒星団帝国、デインギル帝国。あるいはタキオン粒子のエネルギー変換技術に関する資料は発見できていないのだ。

「海の様子はどうなんだ？」

『深刻だよ。遠方世界への単独航行は禁止されたから、船の手配は一苦労さ。』

おまけに出航を渋る艦長も相次ぎ、転属や退職を願い出てくる者も増えている。

『正に負の連鎖さ』

「あれだけ一方的にやられた上、あんな残虐な事をされてはね。意気消沈するのも仕方ないといえば仕方ないが……。」

地球防衛軍から技術供与を受けるといふ提案はないのか？」

ユーノの言うとおり、地球防衛軍から造船技術やタキオンエネルギー変換技術を提供してもらうのは一つの手だ。

しかし……。

『僕もそれが最善だとは思いますが、管理局や管理世界の質量兵器アレルギーを何とかしなければならぬし、たとえ技術供与を得ても、こちらの力で艦船を建造できるまでには、相応の期間が要るだろう』

な……」

「それもそうだけど、それ以前に根本的な問題があるな」

クーノが話題を変えにかかる。

『根本的な問題？』

「ああ。地球防衛軍は地球連邦政府の指揮下にあるんだろう。

地球の常識では、軍に対しては文民統制がなされていて、軍や警察が独自に外国と交流することは禁じられている。

ということは、防衛軍に要求したって『政府に言ってくれ』と言われるだろうし、地球連邦政府は政府で、管理局を外交相手と認識する事はあるんじゃないかな……」

『シベリアン・コントロールか。確かにそのとおりだな……』

かといって、数ある管理世界政府の了承を、管理局がいちいち取るようなことをするとも思えないな」

「管理世界といっても、一桁台のところはともかく、強引に管理下にした世界は、小競り合いが続いている所も少なくないからな。素直に従ってはくれないだろうな……」

ロストロギア収集や、管理世界への編入の際、結構強引だったりえげつない手段をとった事もあり、結果、住民の反感や憎悪を買った例も見聞きする。

地球防衛軍に回収された『レム』にもそういう「黒い」資料があったと聞く。

そういう資料が回収されていれば、地球防衛軍や地球連邦政府にとって、時空管理局はガトランチス帝国に準じた侵略的要素を持つ勢力と見られるのではないか……？

ククロのこの懸念は、不幸にも的中していた。

第145話『萬屋冴ちゃん』只今準備中(2)『(後書き)』

『萬屋冴ちゃん』はあと1話続きます。

その後はいよいよフェイトさんお帰り編です。

第146話『萬屋冴ちゃん開店致します』（前書き）

零文寸劇……？

「
……」
「
……」
「
……」

冴子は呆れ顔。フェイトとティアナは呆然としていた。

雪菜は目を回したまま。そしてなのはも目を回していたのだが、彼女の上には大量の紙片が落ちていた。

よく見るとその紙には黒く小さな物体がびっしりついており、まだ動いているものもあった。

冴子「ふむ、ハイトリ攻めとは、また渋い手を使ったな……」

ティアナ「そつちですか！？ 渋いどころかえぐ過ぎますよ！
何ですか！？ ハイトリって！」

冴子「蠅取り紙のとき。ローテクの極致だが、なかなか侮れないぞ」

フェイト「地球に伝わる害虫駆除手段の一つだけど、私も実物は初めて見るよ。

それにしても……」

（ゴキブリやハイトリのえげつなさに目を奪われがちだけど、雪菜が使ったのは召喚じゃなくて、次元跳躍魔法……？）

第146話 『萬屋冴ちゃん開店致します』

何かと多忙らしいマダオ当主は連日午前様かそのままお泊りで放置されている嶋津家では、今日も3人+3機?の夕食だ。

フェイトとティアナもこちらの生活に慣れるとともに、シャリオ・フィニーノも順調に快方に向かっていることが、彼女達の表情に余裕を与えていた。

食後のお茶を口にする3人。話題は地球と時空管理局共通の敵であるガトランチス帝国 白色彗星帝国のことだった。

「……あんな苛烈で容赦がない攻撃は私自身初めてだし、管理局の歴史でもなかったと思う」

「管理局自慢の新鋭艦が手もなくやられちゃったのはもちろんだけど、同じ艦に乗り合わせていた人達が皆死んでしまったのは、それ以上にショックだったわ……」

カップを手にしたまま、フェイトとティアナは心持ち下を向くが

「……でも、尻尾を巻くつもりなんかないわよ
人々の笑顔のために闘うのが私達なんだから」

「そうだね。生き延びた私達は、倒れてしまった人達の間まで一生懸命生きる義務があるんだ……」

ティアナとフェイトは言葉に力を込めた。
そのためには、もう魔法だけに頼るわけにはいかないこともわかっている。

2人にはこれからするべき事がわかっていたが、共通の認識を持つ

管理局員はまだ少数派だった。

次いで、高町雪菜が漆黒の超巨大戦艦の事を口にする。

機動要塞と言った方がしっくりくる、全長100?を超える掟破りな宇宙戦艦による宇宙空間からの無差別対地砲撃。

フェイト達もその戦艦の映像を見た時は戦慄したものだ。

地球の各都市にはガミラス戦時の地下都市があり、市民の大半はそこに避難したため、人的損害はさほどではなかったが、雪菜が避難した横須賀区では川崎〜横浜地区への着弾で大量に巻き上げられた土砂や石が降り注ぎ、まだ地下都市の上層部にいた市民を襲った。

「咄嗟に防御障壁を展開したので、一緒にいた3人の小学生は無傷だったんですが、障壁範囲のぎりぎり外にいた、赤ちゃんを抱いた母親を石が直撃して…。」

赤ちゃんは奇跡的に無傷でしたが、母親は『この子を…』が最期の言葉でした。

赤ちゃんを抱き上げて、泣きじゃくる子供達を叱咤しながら階段を遮二無二駆け降りました。

幸い、赤ちゃんは祖父母に引き取られましたが、あの子の父親も地球艦隊旗艦の『アンドロメダ』と運命を共にしていたそうです……」

雪菜の顔には涙こそないが、口調には僅かに無念さが滲んでいた。

「艦長は、自分達軍人が無力だったばかりに、そんな思いをさせてしまつて済まないと言ってくれましたけど……。」
私がつと魔法をつまく使えていれば、あの母親も救えたのかな、
という思いは消えませんか……」

雪菜の独白を黙って聞いていたフェイトが口を開く。

「……その場にいなかった私がこんな事を言うのは変かも知れないけど、雪菜の行動は称賛されこそすれ、非難される筋合いはないと思うよ」

「私もそう思う。あの場に雪菜がいたからこそ、4人の子供と赤ちやんは助かって未来をつかみ続けることができた。

母親は可哀相だったけど、子供は生き延びたわけだから、きっとその人も貴女に感謝してるわ……」

この赤ん坊は、20世紀を駆け抜けた岡○太郎をも凌ぐ個性派芸術家となるが、それは30年以上後の事

時空管理局本局・無限書庫

一組の男女が難しい顔をして向き合っていた。

女性は言わずと知れたエースオブエース、あるいは白い悪魔こと高町なのは。

男性はこの司書長で、裏館長、あるいはへたれフェレット（A・バニングス命名）の異名を持つユーノ・スクライア。

「……そうなんだ」

「うん。やっと落ち着いてきたけど、まだ動揺は残ってる」

なのはが話しているのは戦技教導の事。

ディングル帝国の大神官大総統ルガルが残した爪痕は予想以上に深く、なのは達の教導が再開されたのは映像が流された3日後だったが、数人の受講生は出席できる状態ではなく、後日再受講としな

ければならなかった。

「こつも管理局の手に負えないまでに強い勢力、あるいは惑星国家が続けざまに出てきたのではね。動揺するなという方が難しいか……」

「どうしたら、いいのかな……」

なのはが声を落とす。

ガトランチス帝国に始まる一連の星間国家軍との遭遇や戦闘で、管理局の限界が明らかにされたが、有効な手を打てないままディンギル帝国の蛮行を招いた。

「唯一話ができそうな地球防衛軍とも険悪になりかけたんだろう？」
「うん。リンディさんが間に入ってくれたから決裂は避けられたけど、どうして向こつの人達は、あかも冷淡なんだろう……」

なのはにすれば、管理局も地球防衛軍も同じ平和を守る組織なのに、エルスガーの高飛車な対応を差し引いても、地球側の士官 古代兄弟と嶋津冴子 の余りに素っ気ないまでの対応には納得し難いものがあつたのだろう。

「……『レム』や『レオニダス』には10歳そこそこの魔導師も乗り組んでいたよね。」

そついう子供を危険を伴う任務に投入するのは、地球の人達の価値観からして到底容認できないんじゃないかな。

……それだけじゃなく、『レム』から回収した資料で、ひよつとしたらなのはや僕らが知らない管理局の情報も知っているのかも知れないし」

「裏情報ってこと……?」

JS事件には、亡きレジアス・ゲイズ以外にも管理局の最高幹部が連座しているという噂が絶えないし、それ以外にも、汚職や不正捜査、冤罪事件が次々発覚している。さらにロストロギア回収や管理世界編入時の経緯にも良からぬ噂が聞こえてくる。

地球防衛軍側がその辺りの詳細を知っているとすれば、管理局に警戒心を抱いても何ら不思議ではないのだが。

「私達は、ただ話し合いたいただけなのに……」

「……話し合いと言っても、『質量兵器全廃』を前提とした話し合いを持ち掛けても、それこそ暖簾に腕押しさ。

第一、向こうの地球を、今の管理局が地球防衛軍に代わって守り切れるとは到底思えないしね」

「ユーノ君……」

ユーノの、表情とは裏腹の辛辣な主張に、なのははまじまじと彼を見るが、反論はできなかつた。

客観的に見れば、艦船の性能に機動兵器、兵士の覚悟の差が余りにも大きすぎ、戦おうものならボコボコにされてしまつたろうことが容易に想像できたからだ。

ふと、なのはの脳裏にある考えが浮かぶ。

「向こうの地球の人達は、ただ放っておいてほしただけなのかな……？」

「多分ね。管理局に対してはそう思ってるんじゃないかな」

ユーノはそれを肯定し、続ける。

「地球防衛軍は地球連邦政府の一機関だろうけど、時空管理局は多数の管理世界、つまり惑星国家の警察・司法・軍事権を一元的

に握っている。

つまり、管理局は管理世界政府の命脈を一手に握っており、間接的に管理世界を支配している。向こうは時空管理局を支配者、あるいは侵略的性格を持つ勢力だと解釈しているんじゃないかな？」

「そんな事！管理局は侵略や支配なんてしないよ！！」

「なのは。ミッドや、古くからの管理世界の人達は思っていないだろうけど、管理世界としての歴史が浅く、かつ管理局と武力衝突した末に組み入れられた世界からの視点はどうなんだろう？」

「よし悪しはともかく、今なお抵抗し続ける者達からすれば、管理局は侵略者であり支配者にしか見えないんじゃないかな？」

月軌道付近、戦艦『相模』艦橋

メインスクリーンには『相模』と『伊吹』『鳥海』『水無瀬』を示す光点が映し出されている。

程なく大村が立ち上がり、艦長席の嶋津冴子に向けて報告する。

「艦長。戦隊全艦、集結しました！」

「ん……」

それを聞いた冴子は頷くと一声だけ告げる。

「第13戦隊、発進する。」

針路34、速力24（宇宙ノット）！」

「針路34、速力24、宜候っ！」

新生13TFは、先頭から『水無瀬』『鳥海』『相模』『伊吹』の
単縦陣を形成し、訓練指定宙域に針路をとる。
後にBBTF（残念美女隊）の二つ名を献上される13TFの、数
奇な戦いが始まるうとしていた。

第146話『萬屋冴ちゃん開店致します』(後書き)

予定どおり、次回からはフェイトさんご一行お帰り篇(?)です

第147話 『快癒？(1)』 (前書き)

前話でお知らせしたとおり、フェイトさんご一行は間もなく(?)
ご帰還いただきます。

第147話 『快癒？（1）』

時空管理局本局

『統括官、提督、ご心配をおかけしまして、申し訳ありませんでした』

画面の中で眼鏡をかけた少女、シャリオ・フィニーノ執務官補が車椅子に座ったまま、クロノとリンディに頭を下げる。

「いいえ。貴女がそこまで回復したのを確認できて、私達も安心よ」

「ん……」

リンディは気にするなと手を振り、クロノも微笑して小さく頷いた。

「重ね重ね、皆さんには何とお礼を申し上げたら良いのか……」

『いえ、お気になさらないで下さい』

予想以上に早く回復しているのは、何よりシャリオさん自身の精神力によるところが大きいと言って過言ではないでしょう。

主治医も、安静にしていれば宇宙船に乗れると判断しております。

彼女達を本来の居場所にお返しできる目処がついたことには私達も安心しております………』

高町家

「ホント！？フェイトママ達帰ってくるの？」

「うん、ホントだよ。」

管理局と地球防衛軍でもう少しお話しして、迎えに行く日を決める
って」

「やったあ。フェイトママが帰って来る」

ヴィヴィオがピョンピョンと飛び跳ねる。

愛娘が無邪気に喜ぶ様に微笑むのはだが、内心では手放して喜べない。

先方とスケジュールを詰めた上で、恐らくはクロノが『クラウド
ア』で出向くことになるが、遠方世界へは複数の艦船で行くこと
になっている。

何より、向こうの地球はガトランチス帝国軍の残党と戦闘状態が
続いており、太陽系は未だ警戒態勢が続いている。

もし合流中にガトランチス軍が攻撃をしかけてくれば、地球軍の艦
艇は反撃できるだろうが、管理局の艦船は回避すらままならないの
だ。

まあ、現地での誘導と警戒は地球防衛軍側が責任を持つことだから
いいとしても、管理局側にも問題の可能性は残る。

『クラウドディア』に随伴する艦船の艦長は、クロノより下位か、思
想穏健な者でないとする。

行った先でクロノの制止を振り切って地球軍側に質量兵器全廃論議
を挑むような事があつたら、最悪全てが台なしになりかねないし、
余計な小細工をすれば挑発行為と受け取られかねない。

なのはにとつてもう一つ気掛かりな事は、『陸』はもとより、本局
の一部からも質量兵器全面禁止の見直し 地球防衛軍等からの軍

事技術導入　　を求める声が上がっていることだ。

これを主張しているのは主に非魔導師の局員だが、一般ランク魔導師や、極少数ながら高ランク魔導師からも賛同者が出ている。

なのは自身は、質量兵器は全廃すべきと考えているが、管理局の艦船が呆気なく失われている現状では、次元航行艦等に限定して地球防衛軍等の技術を導入すべきではないか　。という「一部賛同」になっている。

このままでは、管理局の艦隊はいずれ壊滅し、引いては管理局が崩壊する。

理想に拘泥して崩壊を招くよりは、現実を認識した策を講じた方が遙かにましではないか？

ましてや、地球防衛軍や地球連邦に質量兵器全廃を要求するなど無謀極まりない。

管理局には地球防衛軍に代わってあの地球を守る力がないのは明らかなのだし、向こうにこちらを侵略する意図がないのならば、絶対に干渉すべきではない　。

なのはをしてそこまで妥協させるほど、時空管理局は追い込まれつつあるのだが、地球防衛軍等の技術導入には管理局憲章を初めとする規則をかなり改定しなければならない。

しかし、質量兵器を事実上容認する改定には高ランク魔導師を中心に強い反発があり、特に本局サイドからの反発は激しいと言っても良い。

なのはもそういう声は耳にしている、管理局規則改定反対の集會に誘われたこともあるが、娘の世話ヴィヴィオを理由に辞退している。

ヴィヴィオの世話というのはもちろん本当だが、もし自分がそういエクスオブエクスう集會に出れば、自然と中心人物にされてしまうし、メンバーの多くが魔法至上主義・管理絶対正義の信奉者で、一般ランクの魔導師や非魔導師を蔑視したりと、非魔導師の家族や友人を持つなのはとしては腹に据えかねているからだ。

はやてやシグナム、ヴィータ達にも同様の誘いがあるようだが、やはり断っているという。

特に一隊（艦）を率いるシグナムやクロノは、

「バックヤードスタッフらの多くは非魔導師だ。

彼らの助力あればこそ、我々魔導師が戦える事を忘れるなよ」

と部下に訓示し、自隊（艦）の隊員（乗組員）がその手の集會に出席する事を禁じていた。

質量兵器云々よりも、声高に主張している・させている者への不信感であろう。

（フェイトちゃん達が今の管理局の内情を知ったら、何て言うのかな……）

何ともそれが気掛かりなのはである。

アステロイドベルト、小惑星イカルス付近

イカルスにほど近い宙域に、複数の岩塊を無理矢理組み合わせたような奇妙な小惑星があり、数隻の作業船が停泊していた。その作業船から少し離れた宙域に、13TFの4隻が遊弋し、周囲をコスモタイガーが哨戒飛行していた。

再編から1ヶ月余り、13TFは様々な任務に駆り出されている。

新造艦や航空部隊の訓練の相手はもちろん、天王星圏以遠へ往復する輸送船団の護衛にもついている。

土星圏以遠の外惑星圏や、カイパーベルト、ネメシス、エリス等の外縁部は白色彗星帝国軍残党の侵入が予想されるため、その方面に向かう輸送船団には、通常の護衛艦や駆逐艦等の小型艦のみならず、パトロール艦以上の艦も複数つくことになっており、13TFも既に2度、土星圏以遠での護衛を行っていた。

しかし、今回の任務は些か異なる。

「……しかし、よくこんな小惑星をでっち上げたな」

「ああ。こうもしないとカムフラージュできないからな」

『相模』の艦橋で、コーヒーを口にしながら冴子と真田が言う。

『相模』のモニターには小惑星の表面に建造物が建設されている様子が映し出されている。

この建物は『イカルス第2天文台』のもので、確かに電子望遠鏡のパラボラアンテナや大口径の反射望遠鏡等も設置されているが、これがハリボテ同然であれことを知る者は少ない。

冴子の言うとおり、この小惑星自体がハリボテなのだ。

この小惑星 仮称フェイクイカルス は、ガミラス戦役中、小惑星イカルス近くに大きな空洞部を持つ別の小惑星が発見されたため、2201年に非常用艦船修繕ドックと簡単な居住区の建設を進めていたが、白色彗星帝国が来襲したため、工程87%で中断していた。

戦後の建設再開に際して見直しが行われ、『ヤマト』の近代改装をここで行うとともに、宇宙戦士訓練学校の分校も置くことになり、突貫工事で施設の増強が進められているのだが、施設増強のために近くの岩塊も空洞小惑星に次々と貼り付け、何ともおどろおどろしい不気味な小惑星だった

『ヤマト』自体の改装は既に新横須賀基地の修繕ドックで始まっているが、この第2イカルス天文台が完成するとともに『ヤマト』も回航して、ドック内で工事の核心部分を行うことになっている。

「問題は、暗黒星団帝国軍がいつ来襲してくるかだな……」
「来ないに越した事はないがな」

あの時、『ゴルバ』を指揮していたメルダースは、初遭遇だったにも関わらず、『ヤマト』『相模』に対して「地球の戦艦達よ」と呼びかけた。

こちらの通信を傍受・解析しただけかも知れないが、以前から地球の事を知っていたとしても何らおかしくはないだろう。

もし後者ならば、いずれ接触してくるだろう。友好的とは程遠い方法で。

来なければそれに越した事はないが、嫌な胸騒ぎがするのだ。
危機管理の基本は

『悲観的に準備して楽観的に行動せよ』

だ。

戦力が足りないのは確かだが、泣き声を言うてはられない。
。

第148話『快癒？(2)』(前書き)

短い上にグダグダです……。

鏝一文の値もない猿寸劇

なのは「局員がダメなら、せめて囑託魔導師で入ってもらえないかな、雪菜ちゃん」

雪菜「無理です。こちらの労働基準法に違反します。

……それに何より、保護者の同意を得ていません。

貴女が私の保護者を説得できるなら考えますよ。

……保護者は魔導師じゃないですから、ちゃんと口と拳等で話を付けて下さいね」

ティアナ「今、拳等って言いましたよね!？」

フェイト「うん。純粹な腕っぷしじゃ、運動神経マイナスのなのはじゃ、あの人には勝てないね……」

ティアナ「今、何気に酷い事言ってますか!？」

第148話『快癒？(2)』

時空管理局本局

次元航行本部の提督会議において、フェイト・T・ハラオウン執務官ら3名の本局帰還が議題にのぼった。

転送ポートが使えるはずもなく、クロノが指揮をとるXV級『クラウディア』と改し級『ラットバルド』が赴くことになり、『クラウディア』にはリンデイも乗艦することになった。

随伴する『ラットバルド』の艦長、アバン・スールー等海佐は54歳。

今は亡きリンデイの夫でクロノの父であるクライド・ハラオウンの元部下で、PT・闇の書事件発生時には『アースラ』の副長を務めていたため、リンデイやクロノからの信任が篤く、フェイト達とも顔見知りであるため、随伴にはうってつけの人物だ。

リンデイが同行することになったのは、今後も地球防衛軍とコネクションを維持しておく必要性があると主張しているためだ。

「ハラオウン統括官。かの世界が管理世界入りする意思があるかを確認する必要があると思いますが」

と主張する者が出たが、即座に反論する者が出る。

「管理世界入りすることで、あの世界に何かメリットがあるのかね？向こうは恐らくは魔法文化が存在せず、我々が忌み嫌う質量兵器によって外敵に備えているんだぞ」

呆れた口調でミッド防衛長官のアッテンボローが即座に反応するが、続けて言った言葉に座が凍りついた。

「……住民全員がマゾヒストでもない限り、自分達の国防軍より弱い組織の管理下に入る世界があると思うかね？」

「管理局が地球防衛軍より弱いですと!？」

「君はガトランチスやディングル、地球防衛軍との遭遇や戦闘から何を学んだ？」

彼らに比べ、我が管理局はハードで大きく劣り、武装隊員個々の覚悟でも遅れをとっているんだぞ」

「……覚悟で劣っているですと?」

「戦いにあたって、殺し殺される覚悟だよ。」

仲間の屍を弾除けにしても戦い続ける覚悟を持っている者が、管理局にどれだけいるのかね?」

これにはさすがに強硬派も黙り込む。

そもそも、管理局はこれまで相手より優勢な状況下で戦い、殉職率は一桁%台しかなかったが、ガトランチスやディングル相手の戦闘ではほぼ全員が殉職してしまい、管理局員に深刻な心理ダメージを与えていた。

これからはそういう事態が頻発するだろう。

大部分の局員は、相手を殺してでも守り抜くという覚悟など持っていない。

アッテンボローの懸念はまさにそれだった。

レジアス・ゲイズの在任中から、ミッド地上本部では所属下の陸戦魔導師から選抜した特殊制圧隊を組織して殺傷設定魔法を含めた訓練を行っており、凶悪犯罪者については殲滅もやむなしとした。後任についたアッテンボローもこの方針を踏襲したため、ことあるごとに本局とやり合っている。

『自らの手を汚す覚悟がない者が、世界を救う事などできぬ!』

レジアスが生前口にしていた言葉だが、アッテンボローも概ね同感だった。

別世界にも同じような内容の訓示を教え子達に伝えた、ほぼ同世代の男がいた。

元宇宙戦士訓練学校日本校校長の土方 竜である。

そして、ここに土方の薫陶を受けた者達がいた。

「半月後に決まった」

「……わかった」

任務を終えた13TFが帰還するや否や中央司令部に出頭した嶋津冴子に、古代 守が伝えた。

冴子に代わって定期通信に立ち会った森 雪も同席している。

「で、向こうは誰が来るんだ?」

「リンディ・ハラオウン統括官とクロノ・ハラオウン提督が正副責任者で、XV級『クラウディア』と改L級『ラットバルド』の2隻で来るとのことだ。」

合流ポイントは、今のところ、例の通信ポッドの辺りの予定だ。

……地球や我々の基地の座標を知られるわけにはいかないし、通常空間では向こうの船はこっちの船についてこれないからな」

「ハラオウン親子はいいとしても、随伴する艦の艦長は誰だか聞いたか?」

いつぞやのボン（エルスガー）みたいなのが来たら、またぞろ厄介

な事になりかねんぜ」

げんなりした表情になる冴子に守と雪も苦笑する。

「それは大丈夫でしょう。『ラットバルド』の艦長、アバン・スールー佐はリンディ統括官が次元航行艦の艦長をなさっていた当時の副長だとおっしゃってましたから」

「……ふむ」

ならば問題はないだろう。

時空管理局に尻尾を振る気なんぞ毛頭ないが、共存できるならそれに越した事はない。

「ほどほどの距離で付き合つのがいいんだがな。

変に深入りさせて巻き添え食わすわけにはいかんしなあ……」

現在の地球連邦はまだ復興途上である上、白色彗星帝国残党勢力との抗争、そして暗黒星団帝国来襲の可能性を抱えている。

時空管理局が関わったところで、ピラニアの群れに羊を追い込むようなものだ。

フェイト達を救助できたのは偶然の産物に過ぎず、同じような事がまたあつた時は助けられないだろう。

いけ好かない組織ではあるが、犠牲者が出ていいはずはないのだ。

(果たして、どう釘を刺せばいいのやら……)

三人三様の表情で考え込んでしまった……。

第149話『珍兵器?』(前書き)

最後の部分には銀魂要素が含まれますので、ご了承ください。

第149話『珍兵器?』

地球防衛軍新横須賀基地

森 雪を先頭に、嶋津冴子、フェイト、ティアナの4名は地下1階のやや薄暗い通路を歩いている。

冴子は艦長制服、雪は女性士官の白いスーツだが、フェイト達も久しぶりに管理局執務官/補佐官の黒いスーツを着ていた。

「ここですね……」

雪がある部屋の前で立ち止まった。

ドアには『第3遺骨安置室』のプレートが付いており、フェイト達も居住まいを正した。

4人の足音だけが響き渡る静まり返った空間に、微かに線香の香りが漂っている。

入口から5?ほど入ったところで、4人は足を止めた。

「ここか……」

細かく区分された棚には遺骨が納められているらしい白い箱と、遺品を納めているらしい一回り小さい箱が並んで納められていた。

その棚の一角に『時空管理局艦船乗組員59名』と書かれている。

4人はその場で一礼してから、棚に歩み寄る。

「齒形は収容された全員分確認した。顔の損傷が軽かった者はそれも撮影した。」

それと、火葬する前に一部の髪と爪は切り取り、デバイスや認識票と一緒に保管してある。」

「……確認してみるかい？」

「「はい」」

フェイトもティアアナも声にぶれはなく、意思を確認した冴子と雪は頷いて一歩下がった。

「……………」

「……………」

2人は骨壺の脇に置いてある袋を開き、遺体の顔写真、認識票、ネームプレート、魔導師用デバイス等を確認し、確認できた者の氏名と所属を記録していく。

「……………」

12人目の確認作業にかかっているフェイトの表情が一層強張り、ティアアナも悲痛な顔になる。

（子供の局員か……………）

白色彗星帝国戦の後、『レム』の事を確認したところ、遺体が収容された65名のうち8名が15歳未満で、最年少は11歳。その8名全員が魔導師だった。

『レム』から回収した資料には、目の前のフェイト・T・ハラ

オウンの情報もあった。

出自はアリシア・テストロツサという、幼くして事故死した少女のクローン。

9歳(?)の時に時空管理局の囑託魔導師になり、その後正局員になり、10歳台前半で執務官になったとある。

ティアナ・ランスターは、フェイトのような複雑な出生ではないが、幼くして両親を亡くし、唯一の肉親だった、時空管理局の魔導師だった兄も殉職してしまい、12歳の時に管理局陸士学校に入校し、卒業後は陸士386隊で消防隊員として活動していた、とある。

組織も世界も違うから一概には言えないが、いかに魔法の才能が豊かだとはいえ、未来を託すべき子供を危険が伴う現場に投入し、傷つけたり死なせてしまうようなあり方を許容する組織に好感を抱けるはずがない。

時空管理局は我々が保有する戦力を質量兵器として嫌悪しているよ
うだが、こちらにも言い分はある。

子供達の屍の上に成り立つ平和などまやかした。

それは偽りの平和であって、砂上の楼閣に過ぎない、と。

「ありがとうございます。嶋津艦長、森さん」

安置室を出たところで、フェイトとティアナは目を赤くしながら涙
子と雪に一礼した。

遺骨59柱と遺品はフェイト達が預かり、本局に持ち帰ることにな
っている。

森 雪によれば、『レム』の艦体はほぼ解体され、個々のシス
テム、機器や各種資料は解析中だという。

(管理局の機密情報も知られているだろうけど、地球防衛軍を責めることはできない……)

当時、地球防衛軍は管理局の存在を知らなかった。未知の艦船である『レム』を回収して調査するのは当然だろう。

管理局でも同じ事をするのだから。

とはいえ、これで魔力炉や次元空間航行技術に次元通信など、管理局が事実上独占してきた技術が流出したも同然だ。

この世界の技術力なら、近い将来、次元航行能力を持たせた戦艦も建造できるだろう。

仮に地球と管理局が衝突すれば、次元空間に地球防衛軍の艦船が大挙して押し寄せてくる可能性もあり、そうなっては管理局は大打撃を被るのは間違いない。

(だからこそ、地球とケンカするわけにはいかない……)

地球防衛軍が時空管理局に向けている視線が厳しいものであることは知っているが、だからといって交流を断ったり、管理局の主義主張を押し付けては、結局自分の首を絞めることになってしまう。

自分達は折に触れて嶋津冴子や古代 守らに、管理世界の平和のために頑張っているのは達仲間の事を話してきて、多少なりとも彼らの理解は得たつもりだ。

だから、今度は自分達がこの地球の事を管理局に伝えなければならぬ。

強力な軍事力を持つてはいるが、そこに住まう人達は、自分達と何ら変わらないメンタリテイを持つていることと、余りに悲しい戦い

を強いられてきたこと。

この世界にいる人のほぼ全員が大切な人をガミラスや白色彗星帝国との戦争で失っている。

身近にいる人達だけでも、古代兄弟と嶋津冴子は両親や仲間達を、スターシヤは妹を失い、高町雪菜は戦争孤児だ。

平和を願う気持ちは、ひよっとしたら時空管理局より強いかも知れない。

だからこそ、管理局と地球防衛軍は手を取り合うことができるはずだ。

クリアすべき課題は余りにも多いが。

そんな思いを抱くフェイトとティアナだったが……。

「……何を作ってるんだ？トチロー」

エレベーターに向かう途中、一つの部屋から明かりが漏れ、動く人影を見咎めた守がドアを開けて室内を覗き込んだ。

部屋にいたのは技術本部の大山敏郎。守、冴子、真田の同期生で、真田に負けず劣らずの技術者なのだが、とにかく奇行変行が多い男だった。

「ああ、惑星地上固定形の波動砲、『ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲』の144分の1モックアップさ」
「何だ？その思い切り胡散臭い名称」
「アームストロングを2回言ってるぞ」

「……………//」

「……………//」

フェイトとティアナは模型を見て絶句し、顔を赤らめている。

砲身の根本左右に配置されているエネルギー増幅装置らしき丸みを帯びた物体。

そして砲身には青筋…じゃなくて伝導パイプらしきものが曲がりくねって走っている。

心なしか赤黒いカラーリングと相俟って、嫁入り前の娘には余りに過酷な絵面だ。

「……それに何だ？この形は!？」

セクハラもいいところじゃないか!」

「地上に据え付けるのにはこの形状が一番合理的なんだよ」

守のツッコミに大山は事もなげに答えるが、冴子が救いようのない一言を投げかけた。

「どうでもいいけどよ、棹と筋：パイプは、ちゃんと皮……じゃなくってケーシングするんだろっな?」

「ホントにどうでもいい事をわざわざ言わんでいい!」

「もちろんさ。ちゃんとケーシングするぞ。」

発射の時にはケーシングの先端が後退するようにするつもりだ」

「ふうん……ちゃんとムケるんだな?」

「だから!しょうもない事で悪乗りして納得するな!」

(何?このグダグダな光景とやりとりは……)

中堅を代表するはずである士官達の、余りに緊張感を欠いた会話に、先程の決心が揺らぎかけたフェイトとティアナだ。

第150話『友人達（改）』（前書き）

寝れん…。

ご指摘を受け、著作権上問題がある部分を削除しました。
重ね重ね失礼しました。

第150話『友人達（改）』

フエイトとティアナが、何とも怪し過ぎる新型波動砲？のモックアップと士官達のポケッツコミに啞然としていた頃

クラナガン郊外、八神家

シグナムとアギトが遠方世界の任務から帰ってきたこともあり、久しぶりに家族全員揃っての夕食である。

「そうですか、いよいよ帰ってきますか……」

「せや。シャーリーも車椅子で移動できるから、こっちでリハビリした方がええしな。」

「シャマル、その時はお願いな」

「はい、任せて」

一時は絶望視された友人が帰還することで、八神家一同にも笑顔が出ている。

「それにしても、フエイト達が過ごしているもう一つの地球って、どんな世界なんだろうな」

肉をつつきながらヴィータが言う。

「せやなあ。2度侵略されても屈服せんかった、いわば不撓不屈の世界や。」

「それも魔法ではなく純粋な科学軍事力 質量兵器やからなあ……。管理局内では脅威に思う人が多いみたいや」

はやてが溜め息をつく。

「確かに、あんな絶大な火力を持った艦船は、管理局からすれば理解できないでしょうね。」

しかし、主はやて。一連の宇宙軍事勢力の中で、話し合いができるのは地球防衛軍と、地球連邦政府しかいないのでしょうか?」

「うん、メンタリティは私たちの地球の人とほとんど同じやと思う。何とか共存していければええんやけど、管理局、特に本局は質量兵器アレルギーやからなあ……」

「質量兵器が嫌だと言っても、あたし達は宇宙空間じゃ戦えないし、管理局の船は全く歯が立たないんだから、質量兵器で対抗するしかねーんじゃないの?。」

規則はもちろん大事だけど、それで世界が戦火に焼かれちゃ本末転倒だぜ」

ヴィータが現実的な意見を口にした。

「そうなんよ。宇宙空間に限っては質量兵器禁止法を撤廃してはどうかという意見も出てるし、アッテンボロー中將はアインヘリアル
の再配備を提案するらしい」

第97管理外世界・日本国、海鳴市、ハラオウン家

「アインヘリアルを?」

夕食後のお茶の席で、エイミィ・ハラオウンが2歳下の夫に聞き返した。

次元震の影響で不安定になっていた本局との転送ポートが半月

前に使用可能になったこともあり、クロノも海鳴の自宅から本局に通勤できるようになっていた。

それまでの間は他世界との間を行き来する次元航行艦に便乗しなければならず、クロノは半ば単身赴任。リンディは基本的に在宅勤務で、本局には月に1度、1週間程度出張という形で顔を出さざるを得なかったが、それも解消されている。

「ああ。一連の事件で管理局の次元航行艦船の脆弱さが白日の元に曝されたから、海には任せておけないということなんだろう……。同様の動きはミッド以外の地上本部からも出ている」

「そんなに強いのか？ デインギル軍は……」

妻は少し不安げに夫に尋ねる。

「ああ。XV級もXX級も全く相手にならなかった。

デインギルだけじゃない。ガトランチスもそうだったし、戦闘状態ではないが、第197管理外世界の宇宙軍 地球防衛軍の艦船の戦闘力もほぼ同じさ」

「そんなに、なんだ……」

現在は育児休職中のエイミイだが、結婚する直前までは自らも次元航行艦に乗り組んでいたため、事の深刻さは十分わかってはいるつもりだが、魔法が通用しない程、強力かつ凶悪な軍事勢力が芋づる式に現れている事には戦慄を禁じ得なかった。

「本局としては反対したいが、現に惨敗し続けているし、各管理世界市民からの突き上げや非難も強くなってるんだ。

今度ばかりは止められないな……」

クラナガン市郊外、ナカジマ家

「でも、アインヘリアルで防ぎきれぬのかしら。そんな強力な艦船を……」

「何とも言えぬ……。……」

10隻程度ならどうにかなるかも知れないが、100隻単位で来られたらどうにもなるまいよ。

それに、向こうの射程の方が長ければ、もうタコ殴りだな」

長女ギンガの問いに、煎茶を口にしながらゲンヤ・ナカジマが答える。

「先日の映像でこっちの艦船がディングルに拿捕されたようだからな。

地球防衛軍と同様に次元航行技術が流出したと見るべきだろうが、凶悪さが段違いだからなあ……」

「だとしたら、一連の勢力の中で唯一穏健な地球防衛軍から艦船の技術を教えてもらうしかないんじゃないかな。

もう、質量兵器云々と言ってられる状態じゃないと思うよ」

「正直、それも難しいだろうなあ……」

「どうして？」

地球防衛軍からの技術導入を主張する次女のスバルに、ゲンヤは首を傾げる。

「地球防衛軍より前に地球連邦政府との間に外交関係を結ばなければならぬが、向こうの政府がこっち（時空管理局）を相手にするかねえ。

管理局はあくまで治安維持組織であって国家じゃない。

ミッドみたいな管理世界の政府を通さないといかんかも知れないし、管理世界の意思が統一できるかどうかだな……」

地球防衛軍の艦船は確かに強力だが、武装は質量兵器　魔法に依らない実弾兵器と超高エネルギー光学兵器　だ。

永年魔法戦力を寄りどころにしていた管理世界からは強い反発があるだろう。

「それに、手ぶらとはいかねえだろうよ」

「何らかの代償が伴うということ？」

「ああ。同じ地球でも、高町嬢ちゃん達の故郷とは訳が違うぞ。

管理外世界じゃない。管理不能世界と言うべきだろう。

高圧的に『よこせ』なんて言えば反発されるし、実力行使すれば返り討ちだろうさ。

『下さい』と願い出るにしても、あちらさんにも何らかのメリットがなければ、いい顔はされないだろうな。

それより何より、本局のお偉方が頭を下げられるかねえ……」

三提督はまだしも、その下の連中では、せいぜいリンディ・ハラオウンやレティ・ロウランら、やっと両手に余る位しかないだろうよ。

と、口の中で呟くゲンヤである。

高町家

フェイト達が遭難した当初は夜泣きが絶えなかったヴィヴィオだったが、その後は比較的安定し、笑顔も戻っていた。

「ねえ、なのはママ」

「何？ヴィヴィオ」

枕を並べて布団に入った娘が聞いてくる。

何だろう？

「この前お話した、ちきゅうぼうえい軍の艦長さんで、ヴィヴィオとそっくりな人がいたでしょ？」

「うん、嶋津さんっていう人だったね」

スバルに言われてから改めて嶋津冴子の顔をまじまじと見たが、確かに、髪と瞳の色、それに右頬の傷以外はまさに20年後のヴィヴィオを彷彿とさせる容貌で、全体の雰囲気は、砕けた性格のシグナムという印象を持った。

「向こうの地球にヴィヴィオそっくりな人がいるんだから、なのはママにそっくりな人もいるんじゃないかなあ……」

娘の言葉に、なのはは思わず唖った。

考えてみれば、向こうの地球にも確か海鳴市が存在し、翠屋もあったという。

ということとは、高町家も存在していた可能性が大だ。

ひょっとしたら、向こうの世界の過去に「高町なのは」がいたのかも知れない。

あの人（嶋津冴子）は翠屋の事も知っていた。

フェイトちゃん達が帰ってきたら、そのあたりの事も聞いてみよう。

第150話 『友人達(改)』 (後書き)

ただただ反省中・・・

第151話『諸君、また会えて光栄の極みだ』（前書き）

サブタイトルのとおり、久しぶりにあの方が登場遊ばします。

第151話『諸君、また会えて光栄の極みだ』

フェイト達が卑猥な波動砲にフリーズしていた頃

天の川銀河のとある宙域を、100隻を超える艦隊が移動していた。

一番多いのは、尖った艦首両舷に大きなビーム砲ともミサイル発射口ともとれる開口部を持つ中小型の戦闘艦だが、全長200?を超える大型の戦闘艦や、三段式のデッキを有する航空母艦らしき艦船、さらには目立つた武装がない超大型船も含まれていた。

その艦隊の先頭集団に、1隻だけ、紅色をした空母らしき艦がある。

よく見ると、艦の中央部までは飛行甲板だが、後部の艦橋楼には3連装の砲塔が前後を向いている。

数ある同型艦がグリーン系のカラーリングの中で1隻だけ目立つのは、もちろん理由がある。

艦橋楼の最上部には一見円盤形をした艦橋があり、ブラウン系の服を着た乗組員と、グリーン系の服にマントをつけた高級士官らしき数人の男が立ち、さらにその前に、1人だけグレー系の服とマントに身を包む男が立っていた。

その男　旧ガミラス帝国総統・デスラー　は腕を組み、前方に広がる無数の星を注視している。

かつて支配下においていた大小マゼラン雲銀河を事実上引き払ってまで、かつての敵だった地球がある天の川銀河の深部、核恒星系に艦隊を向けているのは、古代ガミラスの記録による。

データベースに記録されていたいくつかの古文書に、ガミラス民族の起源を示唆する記録が存在したからだ。

遠い昔、ガミラス民族の祖先はこの銀河系にある母星を後にし、星を転々としながら、やがて大マゼラン雲に辿り着き、故郷とよく似た構造を持ったガミラス星に到着し、ここを安住の地として、自分達の国づくりに取り出したという。

デスラーはその古文書を信じ、天の川銀河系の核恒星系のどこかにガミラス民族の同胞とも云うべき民が住む星があると結論づけ、艦隊を天の川銀河の奥深くに向けて進めた。

（さすがに銀河の規模が違うものだな。

これだけの星があるのだ。新たなガミラス星は必ず見つかる……）

『ヤマト』との戦闘でガミラス本星を放棄してからの位になるか。未だあてのない流浪の身ながら、デスラーに新国家建設を放棄する気は全く無く、戦死者を除けば離脱する者が1人もないのは、彼の威光が全く衰えていないという、何よりの証と言えよう。

事実、デスラーは心身とも充実している。

何故なら、彼には遠大なる野望があるから。

第一に新国家の建設。

第二に、新国家をどこからも攻め込まれない強国にすること。

そして第三に、あの暗黒星団帝国なる盗掘者どもへの復讐。

母なるガミラス星と、夜ごと蒼き輝きでガミラスの民を癒してくれたイスカンドル星が消滅する元凶となった暗黒星団帝国をそのままにしておく気など、デスラーには毛頭なかった。

新国家の体制を盤石にしたら、次は暗黒星団帝国の本星を突き止め、彼らが犯した罪に相応しい裁きを下すまで、デスラーに休息はありえないのだ。

「総統、グラフ・スーパーが艦載機の訓練を兼ねた進路哨戒許可を願いで出ております」

「よろしい、やりたまえ。私が講評してやろう」

「はっ！」

腹心のタラン将軍が、航空部隊の司令官であるグラフ・スーパー将軍からの上申を取り次ぎ、デスラーも即座に許可を与えたが、ふと思いつき、通信席に向かうタランを呼び止めた。

「タラン、本艦の戦闘機隊も参加させよ」

「はっ！」

デスラーの旗艦たる第1戦闘空母にも中隊規模のガミラスファイター戦闘機が搭載されているが、いわば近衛部隊だけあって、パイロットも非常に高い技量と戦歴の持ち主ばかりである。

ほどなく、戦闘空母、三段空母から戦闘機と急降下爆撃機、さらには雷撃機も続々と空母から飛び立っていった。

それと呼応して、コルサツク率いる老朽艦隊が離れていく。

コルサツク艦隊は爆撃機・雷撃機両部隊の攻撃演習の標的を演じるのだ。

彼らは艦もクルーも老兵揃いだが、技量は皆一流であり、やすやすと命中させるつもりはなかった。

『総統御自ら講評して下さい。総員、実戦のつもりでかかれっ！』

「 さあ、若僧共に艦隊機動を教えに行くぞ。野郎共！」
「おっつー!!」

老将は旗艦艦橋で不敵な笑みを浮かべ、老兵達も歓呼で応えた。

地球防衛軍、新横須賀基地

「……………」
「……………」

一室に、古代 守と真田志郎がいる。

テーブルを挟んで相對する2人とも厳しい表情をしていた。

そこにドアを叩く音が響く。

「済まん。遅くなった」

入って来たのは、嶋津冴子と大山敏郎だ。

「折り入った話と聞いたが、一体何なんだ？」

と聞く大山に、守が座れと手で示す。

守と真田の顔色からして、ただならぬ事態であることを冴子と大山も悟ったのだが……。

数分後、冴子と大山も絶句し、表情を強張らせていた。

「……弟と雪さんには伝えたか？」
「今夜話す……」

大山の問いに守は一言だけ答える。

「……………」

冴子は唇を噛み、両の拳を握り締めるだけだった。
。

第151話 『諸君、また会えて光栄の極みだ』 (後書き)

歴戦の勇士達をここまで動揺させる事態とは……？

次回、その謎が解けません！

第152話『萬屋冴ちゃん営業中』（前書き）

今週末最後の更新です。

またもグダグダ。

しかも実質2人しか出ていない……。

第152話『萬屋冴ちゃん営業中』

火星軌道付近宙域

4隻連結して進む大型輸送船に随伴する、13TF4隻の姿があった。

近隣恒星系探査船が竣工するまでの間、アグレッツサーや外惑星へ太陽系外縁方面の護衛任務に就く事が多い13TFだが、例外はアステロイドベルトの小惑星イカルス方面への任務だ。

イカルス近くに建設中の人工小惑星『イカルス2』と第2イカルス天文台はカムフラージュで、真の姿は『ヤマト』の近代改装用ドックと宇宙戦士訓練学校分校建設工事のためだ。

これは機密事項をも含むため、施工作业員には真の目的は知らされていないし、軍内部でも藤堂長官ら一部しか知らず、『ヤマト』乗組員でも真田と山崎、坂本らしか知らなかったが、逆に13TF各艦の艦長、副長ら幹部は知っている「一部」になっていたのだ。

「火星軌道を通過。あと70分で到着します」

「周辺空域に異常なし」

「ん……」

三沢と大村の報告に冴子が頷く。

フェイクイカルスこと『イカルス2』の建設は9割強進んでおり、半月後には『ヤマト』を回航して改装工事を続行することになって

いる。

その頃には恒星系探査船も就役するため、本来の目的であるアルファ・ケンタウリ方面への航海に乗り出すこととなる。

地球連邦がアルファ・ケンタウリ方面への探査を行う目的は、第一に居住可能惑星の調査。

ガミラスや白色彗星帝国との戦争で人類存亡の土壇場まで追い込まれた地球は、他恒星系の居住可能惑星を見つけ、そこへの移民を考え始めていた。

これには、旧敵だったデスラーの影響が大きい。

母星を失い、流浪の身になってもなおガミラス帝国再建に邁進するデスラーの、民族再興への執念は大いに見習うべきである。

イスカンドル救援作戦終了後の防衛会議で藤堂司令長官が力説した事に触発されたのか、連邦政府も腰を上げ、まずは一番近いアルファ・ケンタウリ星系探査とそこに至る航路開拓計画が官・軍・民共同プロジェクトとして立ち上がることになった。

柱になる多目的探査艦は、白色彗星帝国との開戦で建造が中断されていた大型高速輸送艦を充てることになり、建造と改装工事を併し、来月には竣工する。

探査船団の航海にあたっての脅威は、シリウス・プロキオン方面を拠点にしていると思われる白色彗星帝国軍の残党なのだが、

（あれ以来、連中は来ていない。

この前潰した艦隊が最後なのか……？）

大規模な来襲は昨年末以来ないが、それ以降はまるで嫌がらせのように太陽系外縁部に接近するだけに終わっている。

本星たる都市帝国の接近が非常に速かったのと、白色彗星帝国首脳が地球の抵抗力を侮っていたらしく、補給拠点はシリウス、プロキオン星系のみだったようだ。

（ひよっとしたら、探査船団自体が奴さん達をおびき寄せる筈ではないのか……？）

探査船団自体を寄せ餌にして白色彗星残党をおびき寄せ、一網打尽にする事だってありえる。

シリウス、プロキオン方面に遠征する手もあるが、それにはまだ艦船が足りない。

建造中の『マルス』、『アリゾナ』、『モンタナ』や自動艦『クレイモア』級が就役し、『ヤマト』が復帰すればそれも可能だが、現状では専守防衛に徹するしかない。

（……となると、探査船団以前に、フェイト達を返す時に押しかけてくるかも知れんな。

考えたくはないが、万一『クラウディア』が撃沈されでもしたら、時空管理局を刺激することになりかねん。

前門に白色彗星残党、後門に暗黒星団帝国がいる以上、管理局まで敵に回しては最悪だ…）

問題児な艦長でも悩む時は悩む。

そして、冴子の悪い予感的中率は低くないのだった。

上本部

ミッドチルダ首都クラナガン、時空管理局ミッドチルダ地

ミッドチルダの防衛を担うミッド地上本部の最高責任者たるリヒヤルト・アッテンポロー中将は、懽然とした表情でアインヘリアル再配備の計画書のチェックにかかっている。

彼に限らず、各管理世界の地上本部は、先日のデインギル帝国の戦闘力と蛮行に、非常な危機感を抱いている。

次元航行艦がデインギルに捕獲された以上、かの国もそう遠くない将来に次元世界に進出、否、侵入してくる可能性が出てきた。

しかも管理局の艦船が脆弱で無力であることが暴露された以上、『海』は当てにならず、自分達の力でミッドを守らなければならない。

そんな中で、ミッド地上本部はいち早くアインヘリアル再配備計画を立てたのだが、本局は相変わらず頑固だ。

代わりに聞こえてきたのが、デインギル討伐艦隊の編成の噂だ。

本局の一部では、先日の戦闘を含めた次元航行艦の喪失は、単艦又は少数艦で、かつ戦う準備が出来ていなかったからで、十分な準備と隻数を揃えれば負けることはない、数十隻ないし100隻の、管理局としては前例がない大艦隊でデインギル艦隊を殲滅し、大神官大統領のルガルら、デインギル帝国の首脳を次元犯罪者として逮捕。デインギル帝国を管理世界に編入すべきと言うのだが。

（武力制裁自体は間違っていないだろうが、デインギル帝国軍の規模を把握しているのか？

向こうにはあの殺人対艦ミサイルがあるんだぞ）

爆発の前に凄まじい放射能をばらまく非人道的な質量兵器。

あのミサイルで、管理局、特に『海』は一層質量兵器への嫌悪感を持ったのだが、あれを放ったのは大型艦船ではなく小型軽快な攻撃艇だ。

（そつちへの対応策もないまま出撃しても、またも一方的虐殺で終わってしまう。）

ディングル討伐が単なる噂であればいいんだが……。

明日、リンディ・ハラウンカレティ・ロウランに質してみるか……）

そこで、アッテンボローはもう一つの事実思い至る。

「そういえば、ハラウンの娘には補佐官がいたな……」

フェイト・T・ハラウンの2人の補佐官は陸士。つまり原所属は地上本部であり、本局へは出向扱いである。

「彼女達から、地球防衛軍の事を直接聞いてみるか……」

本局がそれすら渋るのならば、本局への出向を取り消して有無を言わさず陸士隊へ転属させるまでだが、リンディ・ハラウンなら嫌とは言えない。

（あれ程の宇宙戦艦を建造できる程の科学力と工業力があるのだ。個人携行の拳銃や小銃も実弾ではなく、レーザーガンのような光学兵器に更新されていると見て間違いないだろう。）

レーザーガンなら、魔導師でなくても訓練すれば扱えるし、威力だつて調節できるだろうしな……）

ひいては、管理局の人材不足緩和にも貢献するはずだ。

そのためには、管理局の諸規則を改定する必要があるが、魔法の限界が露呈している今ならば、それもさほど困難ではないかも知れない。

それにしても、魔導師が同じ魔導師をお払い箱にしかねない方法を考えると、何とも本末転倒だ。

レジアス中將が知ったらどんな顔をするのやら。

アッテンボローは皮肉な笑みを浮かべた。

第152話『萬屋冴ちゃん営業中』（後書き）

今回のタイトルは、今後も飛び飛びで再登場します。

次回、フェアウェルパーティーです。

第153話『お世話になりました(1)』(前書き)

番外企画：地球防衛軍艦船の(太陽系内最大巡航)速力比較

これは単なる加速力ではなく、非常制動(逆噴射時)の空走距離によって決定される。
つまり、逆噴射力が強い艦ほど最大速力を高く設定できるといことである。

また、この速力値は外宇宙での最大巡航速力 光速の99%に達するまでの所要時間に比例する。
単位は全て宇宙ノットである。

『ヤマト』：就役時27.0 / 2202年大改装後30.5

護衛艦：31.5

駆逐艦：36.5 / 37.0

パトロール艦：33.0

巡洋艦：33.0 / 33.5

主力戦艦(第38番艦まで)：28.5

主力戦艦(第39番艦以降)：30.5

レキシントン級戦闘空母：31.5

アンドロメダ級：31・5

第153話 『お世話になりました(1)』

横須賀市中心地、ショッピングモール

時空管理局本局への帰還を4日後に控えたフェイトとティアナは、高町雪菜の案内で『地球土産』の購入のため訪れていた。

「電気製品はこちらの方が格段に進んでいるわね……」

家電や情報・AV機器等はミッド等の管理世界よりも、こちらの世界の物方が概ね機能的にできている。

購買欲がないわけではないが、電源仕様の違いや地球連邦の安全保障の関係で、フェイト達が購入するとややこしい事になるため、見るだけなのだ。

「……そうだった」

ホビーショップの前でティアナが思い出したように言い、足早に入っていく。

「ティアナさん、どうしたんでしょう？」

雪菜が首を傾げる。この店の品揃えは男性向けだ。女性が好むような物は少ないはずなのだ……。

(なるほど、そういう事か……)

フエイトは合点がいったらしく、頻りに頷く。

旧機動六課のメンバーの一人、ルキノ・リリエは大の艦船マニアで、事務官補佐の傍らで艦船操舵士の資格も取得していた。

彼女は常日頃、

「管理世界の船はもう見飽きた!!」

と口にしていたから、こちらの艦船には非常に興味をそそられるのではないか？

等と思っていると、ティアナは紙袋を手に戻って来る。

「何を買ったの?」

「えっと……。これです」

フエイトの問いに答えながらティアナはプラモデルの箱を取り出した。

700分の1スケールの『宇宙戦艦ヤマト』『地球防衛艦隊旗艦・アンドロメダ』『ドレッドノート級主力戦艦』『巡洋艦』『パトロール艦』『駆逐艦』『護衛艦』各1隻と『地球防衛軍主力戦闘機・コスモタイガー?』1機のプラモデル。

「漢らしい趣味をお持ちですね」

雪菜は激しく勘違いしているようだ。

「ち、違うの!向こうにいる友達に艦船マニアがいるのよ」

「……彼氏さんですか」

まだ勘違いしているようだ。

「だ、だから違うんだってば！

私は生まれてこの方彼氏なんて……？？……あ、あう…… / / o r z」

思わず大声になってしまいが、ふと周囲を見回すと、何本もの生温かい視線に囲まれていた。

傍らのフェイトと、失言の原因を作った雪菜も、ともに啞然とした表情になっている。

この後、ティアナは雪菜の勘違いを正すのに5分を要した。

しかもその間、フェイトは薄情にも面白そうに笑うだけでティアナに全く加勢しなかった。

（フェイトさん、貴女だって年齢〓彼氏いない歴じゃないですか！？

……それに雪菜、あんたがそもその元凶じゃない。何他人事みたいな顔してんのよ？

……そうだ、この子、誰かに似ていると思ったら、ルーテシアに一脈通じてるんだわ。

見た目がなのはさんで中身はルーテシアとは、何とも難儀な子だわ……）

その後、3人は書店に立ち寄り、フェイトは雑誌を何冊か購入した。うち1冊は軍事雑誌で、地球防衛軍とガミラス軍艦船の特集号だ。

普通に市販されているものならば本局に持ち帰っても問題ないが、近代史関係、特に21世紀以降の書物は持ち帰らない方がいい、と嶋津冴子から言われていたが、それには2人とも異存はな

かった。

執務官としてそれなりのキャリアを積んだ結果、自分が身を置く組織の後ろ暗い面も見てきたフェイトとしては、管理局に親友の故郷までちょっかいを出されるのは真つ平御免だからだ。

それにしても、この3人は人目を引いていた。

3人とも掛け値なしの美女／美少女で、発育途上の雪菜以外の2人はスタイルも群を抜いており、すれ違ったカップルの男の方が見とれ、彼女の方が不機嫌になったり、怒り始めたりした。

そして、ナンパを試みようとして接近を図る、いかにも軽い3人連れがフェイト達の進路を遮るように立ち、怪訝な表情の彼女達に声をかけようとした刹那、

「何だ、3人揃って買い物かね」

フェイト達の背後から女性の声がかかる。

「あん？……！！？？」

その声に不機嫌そうな顔をした3人組だったが、声の主と目が合うや、表情が引き攣った。

黒を基調にした軍の高級士官ジャケットを着て制帽を被った長身の女性が近づいてくる。

見る限りではかなりの美貌のようだが、よく見ると右の頬に一目でわかる一文字傷が走っている。

なまじ美女なだけに、まるで鋭い刃のような雰囲気醸し出していた

“あの女、ホントに軍人かよ!?”

被っている制帽のモールからして、艦長あるいは中規模以上の部隊司令官クラスの宇宙戦士であろう。

それほどの年齢には見えないのに、頬に大きな傷をこさえた女の高級士官クラスの宇宙戦士なんて聞いたことがない。

ぶっちゃけ、その女が纏う雰囲気は、どう見ても“素人”のそれではなかったのだ。

「人のツラ拝むやそそくさと逃げるとはな。キャンタマついてんのか?あの野郎共は」

(いたよ。なまじな男共より漢らしい人がここにいたよ……)

特に睨んだつもりはなかったのだが、そそくさと退散していく3人組を見て、嶋津冴子は溜め息をつき、フェイトとティアナは苦笑い、雪菜は呆れた表情になっていた。

かれこれ4世紀に跨がる歴史を持つ軍港都市だから、軍服姿の者がここかしこに闊歩しているが、それでも冴子の歩く姿は颯爽としていた。

(軍服を来ている時はやはり雰囲気が違う。

これがこの人の戦う姿なんだわ……)

冴子と同年輩の管理局員にも佐官や提督クラスの者はいるが、今の彼女や古代守のような、有無を言わさぬ雰囲気を持つ者はいない。

(管理局とはくぐってきた修羅場の質が違うからか……)

ガミラスとの戦争から起算すれば、かれこれ10年近くも命懸けで戦ってきたのだから、管理局員より強いオーラを纏うのも当然だろう。

それは古代守や真田にも言えるし、自分達とさほど変わらない年頃の古代進ら、『ヤマト』のクルーにも同じことが言えた。

(今さらだけど、地球防衛軍、地球連邦と喧嘩してはまずい。何とか協調していくことはできないものかな……)

つい最近、管理局の若い提督と冴子達が険悪な雰囲気になったことを思うと気が重くなるフェイトとティアナだが、当の管理局ではそれどころではなくなっていた。

時空管理局本局、次元港

第4バースに接岸したXV級次元航行艦『クラウディア』と改L級次元航行艦『ラットバルド』に次々と物資が積み込まれ、乗組員や港側の職員が慌ただしく行き来している。

次元航行艦が次々と失われている中、まだ警戒態勢にあるという太陽系に赴くこともあり、両艦の乗組員は緊張を隠せずにいるが、それでも多少なりとも不安感を和らげているのは、地球防衛軍は比較的穏健な軍事勢力であり、きちんと話し合える相手であると、先方と何度かコンタクトしたクロノ・ハラウンが説明したからだ。

何より、何のメリットもないのに、ガトランチス軍に襲われた『レオニダス』救援に向かい、フェイト執務官達を救出したという動かぬ事実があるのだ。

上層部はどう考えているか知らないが、最前線で働く艦船乗組員達の間では、地球防衛軍に対する印象は意外に良いのだ。質量兵器を使う軍隊であることを割り引いても。

バースを見下ろす一室に、特別捜査官の八神はやてとその補佐官にして彼女の守護騎士たるシグナム一等空尉がいた。

「やっとフェイトちゃん達が帰って来れる、か……」

感慨深げにはやてが呟く。

「ええ……。テストロツサ達が、もう一つの地球からどんな土産話を携えてくるのか、私も非常に興味深いです」

「そやなあ……。未来の地球やからな。あんな強力な軍備を持つに至った詳しい事もわかるかも知らん」

向こうの地球が2度、外宇宙からの侵略にさらされ、多大な犠牲を払いながらも侵略者を退けてきた詳しい経緯は、管理局員ならずとも知りたいところだ。

大まかな経緯は定期通信でも知らされていたが、フェイト達ならもっと詳しい事を調べているだろう。はやてはそう確信していた。

第153話 『お世話になりました(1)』 (後書き)

フェアウェルパーティーは次回以降です。
予告どおりにはいかんかった……。

第154話 『お世話になりました(2)』 (前書き)

金返せゴルア・ショートショート

高町なのは&土方 竜

土方

「……高町、この(国語)成績は何だ？」

なのは、土方の威圧感に戦慄。

「す、すみません…(管理局の仕事が忙しくて勉強時間がなかったなんて言えないよ)」

土方、一冊の本を手渡して

「……これを読んで、次の私の授業までに感想文を原稿用紙きっかり10枚にまとめてこい」

なのは

「ふえ……？」

土方

「復唱はどうした!?!高町」

なのは、半泣きで

「は、はいっ!?!」

……半ば悲鳴だった。

土方が渡したのは、『金瓶梅』だった……。

第154話『お世話になりました(2)』

翌日、地球防衛軍新横須賀基地

大型艦船用発着ベースにドレッドノート級主力戦艦2隻が並んで係留されている。

1隻は、近接防御用パルスレーザー砲塔が増設されている以外は、標準型戦艦本来のフォルムをしているが、もう1隻は、艦体はド級主力戦艦ながら、艦橋構造物は亡き『アンドロメダ』とほぼ同型で、艦橋両側のフルカバードされたリーダーが特徴的な、見るからに旗艦任務に特化した戦艦だと窺える。

さらに、艦首周りのカラーリングも、標準型の方はクリームホワイトなのに対し、旗艦型のそれは赤系のカラーリングだった。

外側の戦艦はド級主力戦艦第39番艦の『相模』。

内側の戦艦は第47番艦の『アレクサンドロス』で、惑星防衛艦隊の旗艦であるが、地球防衛艦隊自体が再建途上にある現状では、同艦が事実上の総旗艦である。

艦首周りの塗り分けが異なるのは、『相模』は拡散波動砲なのに対し、『アレクサンドロス』は集束波動砲ゆえで、特性が異なる波動砲を一目で見分けるためである。

白色彗星に対し、拡散波動砲を一齐に発射したにも関わらず、周囲のガスを消滅させただけで、その下から現れた都市帝国や要塞戦艦によって壊滅的打撃を受けたという現実に衝撃を受けた軍の艦政本部は、以後の新造艦や修復艦の何割かに、急遽集束波動砲も搭載していた

因みに、天王星空域で『ヤマト』と交戦し大破放棄された新デスラー艦も既に回収され、瞬間物質移送装置やデスラー砲も綿密な調査が行われていて、瞬間物質移送装置はともかく、デスラー砲の解析は比較的順調であり、『ヤマト』の改装にフィードバックできる事が期待されていた……。

白色彗星帝国との短くも凄惨な戦争で旗艦『アンドロメダ』を含む地球防衛艦隊が壊滅したのに加え、建造中のアンドロメダ級2・3番艦も諸般の事情で工事凍結となってしまったため、艦体がほぼ完成していたドレッドノート級『アレクサンドロス』を急遽改修してアンドロメダ級の艦橋や司令部設備等を取り付けることにしたのだが、艦隊指揮管制システムを安定動作させる為のエネルギーを確保するために第3主砲塔を撤去せざるを得なくなり、何とも泥縄な旗艦になってしまった。

とはいえ、現在建造中の超アンドロメダ級『マルス』が9月に竣工するまでの間だけ総旗艦任務に耐えれば良いと、軍上層部は割り切っていた。

その『アレクサンドロス』艦長室に、艦隊司令のタナリット、中央司令部先任参謀である古代守、独立第13戦隊を構成する各艦艦長の嶋津冴子、塩江龍一、ナーシャ・カルチエンコ、フランベルク・棗・シルヴィアらが参集していた。

同じドレッドノート級とはいえ、中・大規模艦隊旗艦任務に用いるだけあって、司令官を兼務する艦長公室は、かつて冴子が実質的な操艦指揮をとっていた暫定旗艦『長門』と比べても広々とし、調度も良くなっていた。

あくまで相対的な評価ではあるが……。

彼・彼女達が一堂に会しているのは、数日後に迫った時空管理局執務官のフェイト・T・ハラオウンら3名を、迎えに来る先方に無事に引き渡すための打ち合わせである。

合流ポイントは、結局、太陽系外縁部の準惑星『エリス』付近と決まった。

時空管理局のあらましは軍首脳を通じて連邦政府にも伝えられていたが、政府サイドも、

旧ガミラスや白色彗星のような侵略軍事勢力ではないが、本来干渉してはいけない惑星にも無断で侵入したり、アルカンシエルなる大規模攻撃兵器で大量破壊兵器で、都市一つを壊滅させかねない行為を現地政府に無断で実行しようとしていた事実（闇の書事件における次元航行艦『アースラ』の行動）が存在する以上、時空管理局は管理外世界Ⅱ魔法文化が存在しない世界の生命を軽視する傾向がある組織であり、現時点では信用に値する組織とは判断できず、積極的な交流は避けるべしという方針になっており、今回の任務にも政府関係者は同行しないことになっていた。

……魔法という、地球ではファンタジーかオカルトの範疇に入る力へのアレルギー的反応とも言えるわけだが……。

フェイトが『プロジェクトF』の技術で生み出されたクローンだと知った時は驚いたが、解析が進むにつれ、戦闘機人事件や、管理局が言うところの第97管理外世界　もう一つの地球　の海鳴の街を舞台に起きたという『PT事件』と『闇の書事件』の記録を見た時は憤りすら湧いたほどだ。

その時の時空管理局側の指揮官がリンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンだったとは、一体何の皮肉だ？

まあ、あれから約11年経っているのだから、彼らも色々変わったのかも知れないが。

フエイト達を帰したその後が、時空管理局と正面から向き合う時なのだろう。

次元航行艦『クラウドディア』艦橋

「艦内全システムオールグリーン、出港準備完了しました」

「……了解。『クラウドディア』『ラットバルド』、第197管理外世界恒星系に向けて発進する」

係留アームが外され、2隻の次元航行艦はバースから離れていく。地球防衛軍との会合ポイントまでの所要時間は約70〜80時間だ。

本局次元港・展望カフェ

『クラウドディア』と『ラットバルド』の出発を見守る局員は1000人を超えている。

ガトランチス帝国、暗黒星団帝国、デインギル帝国と、管理局を遙かに凌ぐ軍事力を持つ勢力が悉く敵に回っている現状において、偶然とはいえ管理局を助ける行動を取った地球防衛軍に対する印象は、階級が下の者ほど良く、逆に高ランク魔導師が多い高級士官からは相変わらず不安視する声が高かった。

さすがに、武力を用いても質量兵器を接收しろと公言する者は激

滅していたが、地球防衛軍・地球連邦と関わる自分が自分達の優位性を突き崩すのではないか、という懸念は隠せずにはいた。

『クラウディア』と『ラットバルド』を見送る者の中には、特別捜査官・八神はやて二等陸佐とシグナム一等空尉、そして白魔様こと高町なのは一等空尉と甲斐性無しフレット（高町恭也命名）ことユーノ・スクライア・無限書庫司書長が加わっていた。

「フェイトちゃん達があと1週間足らずで帰還か……。何事も起こらなければ、なんやけどな」

「問題は、お偉方がリンディさんに預けた親書なんやがな。

……果たして何が書いてあるのやら」

「……内容によっては、せつかく築いたコネクションが断絶してしまいかねないからね……」

はやてにユーノが相槌を打つ。

「魔法とか質量兵器とか、ハードルは高いけど、何とか共存できる方向に進むといいんだけど……」

「そうだな……」

なのはとシグナムだ。

現地に赴くリンディは管理局から地球防衛軍司令長官と地球連邦大統領に宛てた親書を預かっている。

内容は解らないが、質量兵器を廃止しろとか、ロストログリア捜査を自由にさせるだのという内容だと門前払いになるのは間違いない。

4人は、親書の内容が、向こうが歩み寄れるような穏健な内容であ

ることを切に願う。

第154話『お世話になりました(2)』(後書き)

リリカルなのはStrikerS+宇宙戦艦ヤマト あるわきゃね
ーよ1(もちろん寸劇)

目の前に広がる風景に、なのは達は訳がわからずにいた。

ここは幼馴染みであるアリサ・バニングスの別邸の敷地内のはずで、
目の前には青く澄んだ湖が広がっているはずだが、いずれも存在し
ない。

目の前に広がるのは、一面の野原と窪地だけ。

海沿いらしい場所に、巨大なモニュメントがそそり立っているのが
見えるが、それ以外には何も見えない。

住宅街も、中心街のビル群も。

「なのはさん、ここが海鳴、ですか？」

なのは率いるスターズ隊のフロントアタッカー、スバル・ナカジマ
が戸惑った声を上げる。

ティアナ、エリオ、キャロ、そしてフェイトも訳が解らないという
表情だ。

「わ、私も訳わかんないよ……」

一番この地理に詳しい筈のなのはが一番この事態に戸惑っていた
。

その時だ。1台の車がこちらに向かってくるのが見えたのだが、道

が悪いのか、かなり揺さぶられているようだ。

その時、低い轟音が一帯の空気を震わせた。

何事かと思いい、音が聞こえてきた方向を向いた一同は愕然とした表情を浮かべた。

「な、何……？あれ……」

沖合の空に、船が浮かんで移動していた。

いや、どう見ても、あれは軍艦。それも巨大な砲塔らしきものを3つ備えた、まさに戦艦だ。

「宇宙、戦艦……？そんな、まさか、地球が……」

フェイトも信じられないと呻いた。

(続くかなあ……)

第155話『お世話になりました(2・5)』(前書き)

金なら返せない寸劇

八神はやて+リインフォース?(ユニゾン中)&沖田十三

泣きながら感想文を書くのはを横目に……

沖田

「……………」

一升瓶を傍らに置き、無言でコップを差し出す

ユニゾン状態のはやて、一礼して

「いただきます……………」

そのまま差し向かいで冷酒を酌み交わし始めた。
無言のまま。

嶋津冴子

(おい　！始まっちゃったよ、沖田さんの無言酒盛りが！
あれだけは私達もついていけないんだ　！！！)

ティアナ

(見てないで助けてあげて下さいよ！)

冴子、真田志郎

「「無理！！」」

キャロ・ル・ルシエ

「そんなあ……」

冴子

「ああなったら、どちらかが潰れるまで終わらないんだ。私は3本半で撃沈した」

真田

「オチがつかないな、今回は……」

ティアナ

「作者の頭の中に白蟻がわいてるからでしょうね」

冴子

「今に始まったことじゃないからな。色んな意味で終わってるしょ」

スバル

「ああっ！？リイン曹長が」

ユニゾンに耐えられなくなったリインがユニゾンを解き、はやての傍らに、それこそポトリと落ちた。

リイン

「で、泥酔したです……」

……ホントにオチがない……。

第155話『お世話になりました(2・5)』

内惑星防衛艦隊旗艦『アレクサンドロス』

13TF艦長陣と内惑星防衛艦隊司令部、中央司令部先任参謀・古代 守らの会議は続く。

「やはり、土星圏での会合は無理なんだな？」

「そうだ。防衛会議が、平和的に付き合えるか否か見極めがつかない武装組織と、内惑星圏(土星圏より内周)で接触することは罷りならん、とな」

会合点を再確認する冴子に古代が答える。

自らの怠慢で白色彗星帝国への対処が出遅れた防衛会議は、その反省と反動から異世界/地球外生命体との接触にはかなりナーバスになっている。

「それには賛成ですが、会合中を白色彗星の残党に襲われる可能性もあるでしょう。」

『クラウドディア』と『ラットバルド』に損害が及ぶと、時空管理局まで敵に回す懸念がありますが……」

『伊吹』艦長の塩江が懸念を口にする。

準惑星エリスはまさに太陽系の最果てだ。それだけに外宇宙からの侵略者と最初に接触する。

現在は無人観測拠点が設置され、パトロール艦と駆逐艦からなる警

備隊が巡回しているが、太陽系防衛の戦力を再建・再編している現状では、一部隊当たりの担当宙域がだいぶ広くなり、手薄なのは否めない。

将来的にはこの手の任務は無入艦艇主体にする予定だが、肝心の無人艦はようやく就役が始まり、運用試験が始まった段階なので、今しばらくは現有の戦力で凌ぐしかない。

白色彗星帝国軍の残党は、昨年末以来大規模な侵攻をして来ないが、冥王星軌道付近まで度々侵入を繰り返しており、虎視眈々と再侵攻。報復戦の機を窺っている可能性が高く、今回、時空管理局との接触を知れば、当然仕掛けて来ることは考えられる。

地球の艦船だけでなく応戦できようが、管理局の艦船は戦闘力・航行能力とも大きく劣り、戦闘では足手まといにしかない。しかも、万一そういう事態になっても、絶対に傷つけてはならない。

今回、こちらに赴いてくるリンディとクロノのハラオウン母子は、単にフェイトの養母・義兄というだけではなく、こちらにも比較的好意的な態度で臨んでおり、無用なトラブルを抱えたくない地球連邦・防衛軍としても、リンディ達の身の安全を保証しなければ、後々厄介な事になる。

時空管理局の内情に疑念を隠せないだけに、今敵対するわけにはいかないのだ。

話を戻す。

塩江の疑問にタナリットが応じる。

「訓練名目で第6艦隊を天王星軌道に移動しているが、会合当日は外縁部に展開する。」

後、ガニメデ付近で訓練中の第1航空戦隊（戦闘空母『キエフ』、グラーフ・ツェッペリン』と巡洋艦1、駆逐艦7）を派遣することになっている」

先日のように、別動隊で地球を直接攻撃する可能性が払拭できない以上、地球圏の防備も固める必要がある、当日はさりげない厳戒態勢になりそうだ。一旦休憩を挟み、技術本部から来た大山敏郎を加えて再開する。

大山は、かの『レム』の解析状況を知らせにやって来たのだ。

一同の最大の関心事は、時空管理局艦ならではの艦装である魔力炉と仮称「次元転移装置」で、これはダイレクトリックしているという。

推進・補助機関としてはレーザー核融合炉が併設されていたが、こちらは技術的には地球の方が明らかに進んでおり、通常空間での航行能力は『ヤマト』以前の地球の突撃駆逐艦や戦艦の方が高いと判断された事もあり、見るべきものはないという。

「魔力炉はなかなか頑固な代物だよ。全く違う概念で造られたものだからな。」

だから、次元転移装置の解析を先に進めている。こっちもタフな代物だが、時間さえあれば解析やコピーはできるだろう。

……しかし、より実現性が高いのは、艦内居住エリアのアコモデーションやパーソナルAED装置だな」

管理局の次元航行艦も長期間の無補給行動任務があり、居住性ではアンドロメダ級をも上回るだろうという。

もつとも、直接防御力はそれに反比例しているため、一概に称賛することはできないのだが、他の恒星系へも進出するつもり地球連邦・地球防衛軍が見習う点が多いというのが大山の主張だ。

「パーソナルAEDとは、個人の制服にAEDが装着されているということですか？」

フランベルク・棗・シルヴィアが質問する。

「そうだ。それも極めて薄いのが両肩と左胸部に縫い込んであった。これはあちらさんの方が先を行っている。

魔法文化圏の底力は決して侮れないぞ……」

一同が感心したように頷くが、直後、冴子が声を上げる。

「アルカンシエルとかいう大型砲はどうなんだ？」

時空管理局の艦船が持つ大型魔導砲『アルカンシエル』は、少なくとも破壊力なら波動砲に見劣りはしない。

今のところ先方とは敵対関係にないとはいえ、対策は立てておくに越した事はない。

それに対する大山の回答は、彼自身が再生した映像にあった。

約11年前、もう一つの地球は海鳴市を舞台に発生した『闇の書事件』で、闇の書の防御プログラムとやらを大気圏外に転移させ、『アースラ』のアルカンシエルで消滅させた一部始終の映像だ。

一同は渋面でその映像を見たが、再生が終わるや、

「対艦船戦闘には使い勝手が悪過ぎますね……」

「我々が知ってる敵さん達なら、簡単に回避してしまうな。こりゃ」

一同が、対宇宙艦船用兵器としてのアルカンシエルが抱える問題点に気づいてしまった。

波動砲にせよアルカンシエルにせよ、発射直前には砲口から光が溢れるものだが、アルカンシエルは発光してから発射までのタイムラグが長く、チャージタイムが短いというアドバンテージを相殺してしまっている。

艦首部の発光を確認したらさっさと離脱か散開すれば避けられるし、管理局艦船の機動性からみて、通常空間を亜光速で巡航できる性能の艦船には追い追えない。

「これはあくまで地上目標や要塞に対するものだ。どんなに威力があっても、当たらなければ意味がない」

大山はそう結んだ。

第155話『お世話になりました(2・5)』(後書き)

宇宙戦艦ヤマト外伝・お留守番艦隊

2200年2月、舞鶴市、地球防衛軍舞鶴地下工廠

「これが、新型艦……」

嶋津冴子、大村耕作ら旧「ひびき」乗組員の前にその艦はあった。

「^{フランク}松級護衛駆逐艦・『若竹』」

松級護衛駆逐艦の2番艦というその艦は、当時としては中型の、全長110?余りの紡錘形をした戦闘艦だが、数ヶ月前にイスカンダルに向けて出撃していった『ヤマト』と同じ波動エネルギー技術を採用して設計・建造された艦で、カタログスペックなら在来のM-21741式戦艦をも上回り、ガミラス軍の主力艦であるデストロイヤー艦とも互角以上に渡り合える。

建造期間と工程を短縮するため、波動エンジンはワープ機能を省略したが、冥王星圏まで半日で到達できるというのは目覚ましい進歩だ。

武装も波動エネルギーによって強化され、主砲である5インチショットカノン砲はデストロイヤー艦の射程外から砲撃でき、艦首に2本並べて内蔵した18インチ砲の射程は『ヤマト』主砲をも上回り、ガミラス戦艦を一撃で撃沈できると期待されていた。

が、これらはいくまでもカタログスペックに過ぎず、これを現実にするのは我々しかない。

「行くぞ、皆」

冴子は自ら乗組員の先頭を切り、新たな乗艦に向かった。

第156話 『お世話になりました(3)』 (前書き)

5月3～5日は外出等で週半ばの更新が困難なので、今話を以って今週半ば分の更新とします。

第156話 『お世話になりました(3)』

新暦79年4月、ミッドチルダ首都クラナガン、スバル・ナカジマ宅

「はあ〜……………」

「あ、あははは……………」

新進気鋭の執務官、ティアナ・ランスターは目の前の光景に長い溜息をつき、彼女の親友でこの部屋の主たるスバル・ナカジマは苦笑するしかなかった。

「……………あんた、とうとうマツハキヤリバーまで引き込んだわね……………」
『申し訳ありません、マスター。』

しかし、実にリフレッシュできますもので』

『クロスミラージユの勧めどおりです、ミス・ティアナ。これは実に心地好い……………』

巷を騒がせた、霸王イングヴァルトの姓を名乗る喧嘩屋の身柄を、偶然発生したストリートファイトをきっかけに確保し、四方丸く収めることができてホツとしたと思っただらこの騒ぎだ。

ティアナは、ダメだこりゃとばかりに相棒に振る。

ティアナが脱力感に襲われているのは、偏に自らの愛機たるクロスミラージユの変貌ぶりだ。

「スバル、あんたはいいの？クロスミラージユはもう諦めてるけど、マツハキヤリバーまで引き込まれて」

「ん〜……………、私は別にいいよ。それでマツハキヤリバーがリフレッ

シユできるんなら」

「……あんたの、その無駄なまでの前向きさが羨ましいわよ」

ティアナは肩を落とした。

3年前の一時期滞在した第197管理外世界、否、来年にも「第1特別交流世界」魔法文化こそないが、次元の海に出る技術と時空管理局を凌駕する軍事力を有し、対応を誤れば壊滅的打撃を被る事が確実であるため、管理局が渋々ながら特例指定した指定される予定の『地球連邦』で、現地在住の魔導師資質を持つ少女とその愛機から教えられたデバイスメンテナンス法、『ホットアルコール浴』こと酒風呂。

滞在時はアンビリバボーと言っていたくせに、帰還するや否や、自らも酒風呂をせがみ、果てはサボタージュまでちらつかせる始末。

仕方なくウイスキーのお湯割りに漬けてみたら、確かに射撃の精度が上がっていて、あまりのメチャクチャさに再び頭を抱えたのだが、やはり共にあの世界に滞在した先輩のフェイト・T・ハラオウン執務官の愛機であるバルディッシュも同様で、親友の高町なのはの愛機、レイジングハートまで『感染』したため、ひと騒ぎ起きたほどだ。

「お酒に漬けてメンテナンスするなんて聞いたことないよ！

こんなこと恥ずかしくて誰にも言えないじゃない！」

フェイトとティアナは、半泣きのなのはに呼び出され、正座の上ぎゅづぎゅづに絞られたほどだ。

さらには『犯人達』を知るや、

「いつかOHANA SHIしてあげるんだから！」

とまで言い出す始末で、

「それだけはやめて（下さい）。色んな意味で返り討ちに遭う（遭います）から！」

と2人がかりで止める始末。

たとえ機動六課の前線メンバーが勢揃いしても、あの面々相手に勝つ自信は全く持てなかったから。

「マツハキヤリバー、あんたとスバルが納得してるんなら、私は何も言わないけど、クリスや他のデバイスにこんな事教えるんじゃないわよ!？」

クロスミラージュもいいわね？」

クリスとは、高町なのはの一人娘であるヴィヴィオに数日前に与えられたインテリジェントデバイス、『セイクリッド・ハート』のことだ。

うさぎのぬいぐるみを外装とし、言語を発しない代わりにジェスチャーで自らの意思を伝えることができるのだ。

ただでさえややこしい事になったのに、クリスまで酒風呂に入ろうものなら、今度こそなのはにスターライト・ブレイカーを撃たれる。

それだけは全力で遠慮したい　!!

『了解しました。』

しかし、セイクリッド・ハートの身近には、既に感染したあのお二方バルディッシュとがおりますので、私達では如何ともし難いのですが……』(マツ)

ハキヤリバー)

『善処します、マスター』(クロスミラージュ)

「感染つて何よ!? マツハキヤリバー!

それにクロスミラージュ!

あんたはやる気がない公務員かー!?!?」

どこの世界に、デバイスとポケッツコミを演じる魔導師がいるというのか ?

激しい脱力感に襲われながら、ティアナは、一連の事案の張本人を思い浮かべ、長嘆息をついた。

(雪菜、ピュアハート。あなた達と嶋津艦長には感謝してるけど、これだけはツッコませてよ。

……私の愛機に変な事教えるな !!!)

彼女やフェイトと共にあの世界に滞在した、先輩のシャリオ・フィニーノはデバイスマスターでもあるが、どこで知ったのか、デバイスマスターであるマリエル・アテンザと共に、デバイスの酒風呂式メンテナンスを広めようとして、それを聞き付けたのはとフェイトは、

「土下座でも何でもするから、それだけはやめて!!」
と泣きついたという。

機能が問題が生じたのならともかく、実際にリフレッシュ効果が認められているのだから、尚更始末が悪い。

(今さらながら、絶対敵に回せないわ、あの地球は)

未だ難色を示す時空管理局を尻目に、ミッドチルダをはじめとする幾つかの管理世界政府が外交協議を始めようとしているかの世界の、強烈なまでに個性的な面々を思い出し、ティアナは再認識する。

遡ること2年余り

地球・新横須賀市、地球防衛軍士官住宅、嶋津家

「リンディ・ハラウン統括官から、『今日出発した』と連絡があった」

夕食の席で、嶋津冴子はフェイトとティアナに告げた。

「それと、会合点も海王星付近に変更した。エリスではさすがに遠すぎるんでね」

当初の予定だった準惑星エリスへの距離は冥王星までの約3倍で、光速でも約15時間かかる。また、警備上の理由もあり、衛星トリトン等の基地に艦艇が常駐している海王星圏を会合点に変更するよう内惑星防衛艦隊司令部を通じて具申し、認められたのだ。

ふと、冴子がフェイトに尋ねる。

「フェイトは、太陽系の他の惑星を直に見たことがあるかい？」
「いえ……」

イスカンドルから地球へ来る時は先代サーシャの墓参のために火星に立ち寄ったが、木星以遠の惑星を直に見たことはない。

向こうの地球（第97管理外世界）に転送ポートを設置する前は『アースラ』で行き来していたが、その時も、静止衛星軌道の外で次元転移に入っていたから、月の表面すら見たことがなかった。

「そうか。じゃ、ミッドチルダ周辺の惑星は？」

「2つの月は近いので見たことがあります、他の惑星はまだ……」

「ふむ、何とも勿体ない話だな。長距離航行ができる宇宙船を保有してるというのに」

(……………!!)

冴子は首を傾げながら話を続ける。

「今回は木星と天王星の近くも通過するから、木星の環や大赤斑、天王星の縦の環も直に見ることができる。

なかなかの迫力だから、土産話に見ていくといい。撮影しても構わんよ」

「ありがとうございます……」

言葉とは裏腹に、フェイトとティアナは大きな衝撃を受けていた。

(嶋津艦長の言うとおり、私達は管理世界そのものとはかく、周囲の無人惑星や衛星、ましては恒星系のことをほとんど知らない……)

(白色彗星や暗黒星団は次元転移技術こそ確認できないけど、この地球やテレザート等と同一次元に管理世界が存在すれば、将来攻め込んでくることだってあり得る。)

各世界の恒星系もよく知らないと、ある日突然大艦隊や大型ミサイ

ルがやってくるだってある。

擧猛な軍事勢力の存在が明らかになった以上、これからは、個々の世界だけじゃなくて、恒星系まで広げて見ていないと、ある日突然、大艦隊やミサイルがやって来るなんてことになりかねないわ……)

時空管理局は、自分達が思っているより遙かに視野が狭くなっているのではないか？

嶋津冴子はそれを遠回しに指摘しているのではないか？

思い至った事の余りの重大さに、フェイトとティアナは顔と脳から血の気が引いていくのを感じていたが、嶋津冴子と高町雪菜はそれを静かに見守るだけ。

時空管理局の真の苦闘が始まるのは、それから間もなくだった。

第157話 『お世話になりました(4)』 (前書き)

短いです。

久々?ご登場のあの方が色々間違えています。

第157話 『お世話になりました(4)』

地球防衛軍士官住宅・中島家

これが漫画やアニメだったら、対峙する2人の視線は稲妻となり、真ん中で衝突し、火花を飛び散らせているだろう。

「……………」

「……………」

「……………」

「……正直、貴女がここまでやるとは予想外だったよ……………」

「……貴女こそ。さすがに女性戦闘士官の第一人者と目されるだけのことはありますね……………」

(……………フェイトさん、お2人ともメチャクチャ怖いです)

(ティアナ、同感だよ。)

この人はわかるけど、まさか、あの人がここまで闘志心を露わにするなんて……………)

シャリオ・フィニーノがフェイトに耳打ちする。

「あの…、こう言うのは何ですが、あのお2人とも、色々間違ったオーラを「それ以上言っちゃダメだよ、シャーリー」……………は、はい」
「……………シャーリーさん、気持ちは十分わかりますけど、口にしたら色々な意味で命取りですよ」

「……………そ、そうだね。ティアナ」

二人が醸し出す闘志、否、殺気は、旧機動六課の隊長陣も涙目で逃げ出すだるう程に鋭利で重かった。

たとえそれが、色々と間違ったオーラであつても。

既に森 雪、フェイト、ティアナ、高町雪菜は戦意喪失でリタイヤ。一時外出で同席しているシャリオ・フィニーノは訳がわからずオロオロ。

そして、未だバトルフィールドに踏み留まっているのが、嶋津冴子と……スターシャだった。

出発を翌々日に控えたフェイトら、時空管理局3人娘の送別会を、例によつて例の顔ぶれで開き、食後の腹ごなしにカードゲームを始めた。

始めはポーカーだったが、スターシャも参加できるようにと神経衰弱に変えたら、イスカンダル人は記憶力がずば抜けているのか、ルールを覚えた2回目からいきなり1位争いに食い込み、3回目以降は圧倒的強さで1位だった。

次に体力系の男女別「七五三」に移つたところ、ここでもスターシャは予想外にも反射神経の高さと旺盛な闘争心を存分に発揮。

これにあてられた雪、フェイト、ティアナ、雪菜は脱落し、残った嶋津冴子と一進一退の勝負になつた次第だ。

女2人のガチンコ勝負を目の当たりにした古代 守やホストたる中島龍平ら男性陣も呆れ顔だったり、額に無数の縦線を刻んでいる。

一方、スターシャの生活指南役たる、ホステス役の中島夫人と雪菜は、これでスターシャさんも地球にとけ込めると妙に安心してた。

……因みに、リトル・プリンセスはと言うと、間違えたオーラを纏つた母親とオバちゃんまが周囲を圧する中、閉口した進叔父様が揺ら

す揺り籠　真田志郎謹製、防弾防爆・アンチレーザーコーティング仕様　で、ゆっくりお休み遊ばしていた。

「では最後の1枚、逝きましようか、冴子さん……」

「合点承知の助だ、決着を着けよう、スターシャ……」

男性陣は、色々と間違えた2人に生温かい視線を送っていた。

時空管理局本局、士官喫茶室

『クラウディア』と『ラットバルド』を見送った八神はやたとシグナム、リインフォース？は、事務処理が一段落したため、午後のお茶を楽しんでいた。

と、そこに

「相席させていただいて宜しいかしら？」

聞き覚えがある声に振り向くと、人事担当統括官のレティ・ロウラ
ン提督がカップを載せたトレイを持っていた。
はやて達は、直立してどうぞ、と応じる。

「お疲れのようですね、レティ提督」

浮かない表情のレティを案じたシグナムが声をかける。

「ありがとう。大丈夫よ……」

レティはハーブティを一口啜り、静かに息を継いだ。

「……陸と何かあったんですか？提督」

次元航行艦の喪失が相次いだ結果、“海”からの人材流出が止まらなくなっていた。

“陸”への転属願を出す者や、退職願を出す者が日を追って増えているのに加え、それまで実質的に人材を引き抜き放題だった“陸”からの異動申請がパツタリと止まり、ヘッドハンティングが今までにない程困難になっているのだ。

一方、異動申請を受けた“陸”も甘くはなく、階級に反比例して異動申請の受理率が下がっていた。

『ほとぼりが冷めたらまた“海”に戻ればいいなんて腰抜けは要らん！』

管理局の“陸”の総元締である地上総本部長、ハンス・ルントシュタット大将やミッド防衛長官のアッテンボロー中將ら、“陸”生え抜き高官の意向が強く反映され、転属希望者をふるいにかかけ、海士・海曹クラスは希望者の大半を受け入れていたが、士官クラスは大半を追い返していたのだ。

追い返された士官は居場所を失い、退職願を出さざるを得なくなっていたが、これに業を煮やした本局の高官が、レティを通じてルントシュタットらに士官の受け入れを要求したのだが、当のルントシュタットは、立派なカイゼル髭を擦りながらせせら笑っただけだったという。

アッテンボローはもつときつく、

「海曹以下には、本当に市民の為に身を粉にして働く気がある者が多いが、士官クラスは大半がダメだな。

ほとぼりが冷めたら、また“海”に戻るつもりの方ばかりだ。

君が私の立場なら、そんな者を受け入れるのか？」

こう言われてはレティも二の句が接げない。人事担当とすれば、全くその通りだからだ。

それだけに、陸に転属していった士官は、人物的には優秀で、海としても残って欲しい者ばかりだったが、調査してみると、大抵は上官に問題があるケースだった。

ただ、今のレティの悩みの原因はそれではなかった。

「 3人とも、場所を移せる？」

いつになく真剣なレティに、はやて達は思わず頷いていた。

第157話『お世話になりました(4)』(後書き)

金貰っても嫌な寸劇

魔王様と残念美女

なのは「だから魔王じゃないもん!(泣)」

冴子「なら 軍魔女だな(笑)」

はやて「うわ、めっちゃきつついわ」

エリオ「軍って何ですか?」

雪菜「地球のとある国の軍隊のこと。

相手をまず叩きのめしたり殺しまくってから』さあ、お話ししましょう』が常套句だから」

なのは「うわああん!!(号泣)」

ティアナ「雪菜も全然容赦してないじゃないよ!?(でも、否定できないのは何で!?)」

第158話 『お世話になりました(5)』 (前書き)

【おことわり】

冒頭の一段落は時空管理局の解体を示唆しています。

当然ながら独自設定で、設定についてのクレームには応じませんので、時空管理局職員の方はご承知おき下さい。

第158話 『お世話になりました(5)』

自他共に認めた『時空管理局の葬儀委員長&副委員長』ことフ
エイト・T・ハラウンとティアナ・ランスターは、六十年余り前
のこの日の事を、あの年越しパーティーと共に、今も鮮やかに思い
出せるという……。

戦い済んで日は暮れて、ではなく、戦い済んで夜は更けて、屍累々
……。

「済まないね、主賓に手伝わせてしまって」

「お気になさらないで下さい。」

色々とお気遣いいただいてたんですから、せめてこの位しないと……」
片付け物をしているのは主催者たる中島夫妻と真田志郎、古代 進、
高町雪菜、ティアナ・ランスターの6人。残る面々はといえば、車
椅子のシャリオ・フィニーノと、サーシャのお守りをしている古代
守以外は、スターシャも含めて“沈没”していた。

スターシャと嶋津冴子は、“七五三”の最後の1枚に手を伸ば
した時に勢い余って正面衝突し、両者リングアウト。

スターシャは守がお姫様抱っこして隣室へ運ばれたが、冴子は真田
と雪菜の手で、隣室に文字通り放り込まれた。

一方、森雪とフェイトは同じ年同士で意気投合し、拳げ句酔い潰れ
たため、今は4人揃って隣室でお休み中である。

中島夫人を除く年中・年長女性陣が役立たずになった結果、ホスト夫妻に男性陣、年少女子組が後片付けをすることと相成ったのだが、最年少者は、母親VSオバチャまの壮絶バトルとその後の“惨劇”にも目を覚ますことなく、スヤスヤとお休み。

その、天使以外の形容詞が出ない愛らしい寝顔とは裏腹の強心臓ぶりに、父親は呆れ半分畏怖半分、

「……この分では、あいつら（嶋津、ナーシャ、フランベルク姉妹）を継いでしまいかもな……」

と、本心は逆の希望的観測を口にしたが、願い空しく、母の面影を色濃く継いで美しく成長した娘は、

『朱に交わってマツカチンになってしまった……』

と、溺愛した父と叔父を慨嘆させる『バトル・プリンセス バトル・クイーン』になってしまった。

尤も、『朱』の親玉と名指しされた某女性提督は、

「何言つてやがる。あの血の気の多さは、間違いなく両親から受け継いだ気質だ」

と意に介さなかったという。

八神はやてとシグナムを自分のオフィスに招いたレティは早速切り出した。

「2人は、エルスガー提督と面識があるわよね」
「はい」

はやてとシグナムは微かに苦い顔つきになった。

先月、地球防衛軍との定期通信の席に同席したはいが、いきなりKY発言を繰り返して先方と一触即発になり、急遽リンディがとりなす事態になったのだ。

典型的な魔法至上主義者で、はやて達の印象も芳しくない。

「そのエルスガー提督がどうなさったんですか？」

「クルーの集団造反よ」

「造反!？」

エルスガーもXV級『アルシオーネ』の艦長であり、分艦隊司令官を兼任しているのだが、自分が指揮する艦で造反が起きているとは、一体何が起きているのだろう。

「乗組員の半数近くが一斉に退職願と転属願を出してきたのよ」

「ほんまですか!？ 何があつたんです？」

レティが打ち明けた内容は、確かに聞き流すには余りに深刻なものだった。

1人や2人ならまだしも、半数近くが抜けては、艦船はまともに運航できない。

「時期が時期だから、事情聴取と説得に当たってるんだけど、芳しくないのよね…」

「一体、『アルシオーネ』で何があつたのですか？」

浮かぬ表情のレティにシグナムが質すと、他言無用と念押しして口を開いた。

「……一口で言えば、パワハラよ」

「パワハラ、ですか……」

「そう。それも艦長も加担しているのよ。」

彼の人となりは、直に会った貴女達も大体わかるでしょう？」

「はい……」

はやてとシグナムは、やっぱりという表情になった。

ニアスクラスの空戦魔導師で、武装隊時代は反管理局勢力の摘発に活躍したらしいが、指揮官としては独善的などころがあり、部下からは敬遠されていた。

それでも『アルシオーネ』がこれまで実績を挙げていたのは、非魔導師ながらも実直な副長が乗組員をよく纏めていたからだ。3ヶ月前に副長が交替したら、途端に艦の雰囲気が悪くなり、不満を募らせた乗組員が、抗議の意味を込めて、艦長の頭ごなしに、一斉にレティ宛に退職・転属願を提出したというのだ。

本来は所属長たる艦長経由とすべきところを、いきなり本部宛に提出したというのは、艦長や副長が全く信用されていないという証拠だ。

「……事情を聞いた限り、原因は典型的な高ランク魔導師VS一般ランク魔導師+非魔導師の対立ね」

「……そりゃあかんわ。魔導師ランクと人間の出来は全く関係ないのに」

はやてとシグナムも思わずため息をつく。

「ちなみに、エルスガー提督は何と主張しとられるんですか？」

艦長の側にも言い分はあるだろう。

「副長の統率力不足だと言うばかりで、自分の指揮に問題はない、とね」

「……奇妙な論理ですね。」

副長を指導しフォローするのは艦長の責任では？

ましてや当の副長は新任だったのでしょう？」

シグナムも呆れた口調で指摘する。

「そうね。副長の指導力不足もあるけど、新任副長を育てる責任は艦長にあるからね」

レティはさらに、呟くように付け加えた。

「……この際、荒療治がベターかしらね……」

幸い、ここ1ヶ月余りは艦船が遭難したとの知らせはないが、問題は全く解決していないのだ。

そんな状況下で、内部に問題を抱える艦船は使えない。

第158話『お世話になりました(5)』(後書き)

押し売り寸劇

なのはVS冴子

雪菜の管理局入りをめぐって対峙するのはと冴子。

なのはの目の前にいたのは、冴子ではなく巨大なSuocaペンギンだった。

一同「……………」

なのは「……………何のつもりですか?」

巨大Suocaペンギン「……………」

無言のままだが、その頭上にウィンドウがともり、
『士官たる者、細かい事を気にしては大局を見誤ってしまうぞ』
と書かれた文字がスクロールしている。

なのは「何言ってるんですか!大局以前に根本から誤ってますよ!
ペンギンになる意味あるんですか!?」

Suicoペンギン『ある!それはな……………』

なのは「それは…?」

Suocaペンギン『面白いからだ!』

なのは「……頭、冷やしたげましょうか……」

立ち上がり、レイジングハートを向ける。

S u o c a 『……上等だ。殺ってみな』

立ち上がり、バックパックから地球防衛軍2114年式コスモガンとスコップを引っ張り出す。

なのは「質量兵器！？反則だよ！」

S u i o a ペンギン『アホか。死合に質量兵器も魔法も関係あるかい！』

スバル「死合！？ 試合じゃないの？」

シグナム「……まずいな。この閉鎖空間でレーザーガンとスコップは有効な殺傷武器だぞ」

さあ、エースオブエースと巨大ペンギンのバトルや如何に？

……オチがなくてゴメンナサイ……

第158・5話『子供のロマンは大切に』（前書き）

後半は、冴子の真骨頂が発揮されます。

第158・5話『子供のロマンは大切に』

レティ・ロウランが八神はやたとシグナムをオフィスに招いた2日後、次元航行艦『アルシオーネ』艦長らの異動人事が発表された。

艦長のラルフ・エルスガー提督（准将）は本局人事局統括官補佐、つまりレティの補佐官に異動。

副長のアリーナ・チェンバレン二等海佐は、一時、次元航行本部付に異動の後、改し級航行艦『ラットバルド』次席副長に異動する予定だ。

そして、後任の艦長は、同艦の前副長だったアーノルト・シエーア一等海佐が“復帰”し、副長はアグネス・フランコ三等海佐が新たに赴任することになった。

なお、シエーア一佐は代将権限を与えられ、分艦隊司令官代行と兼務するとも発表されていた。

一方、転属願や退職願を提出した『アルシオーネ』乗組員については、説得に応じて意思を撤回した者も大半を別の艦船や支部等に転勤させ、彼らが抜けた穴は異動や新任者を充当することになった。

この人事は当然物議を醸した。

「おいおい、騒動の原因はあのお坊ちゃんだろう。奴が本部に横滑りで、何でチェンバレンが次席副長に降格なんだ？」

「チェンバレンの力量不足があったにせよ、あのボンボンも飛ばさなきゃ不公平だろう」

と、チエンバレンに同情する声が大きかったが、事情を知る一人である八神はやては、

「エルスガー提督はレティ提督の監視下に置かれたんや。もう我が儘は出来んで。」

一方のチエンバレン二佐は一見左遷やけど、『ラットバルド』のスール艦長は人材育成と再生に定評がある人やからな。どっちが得したか、解る人には解るで」

今はクロノと共にフェイト達を迎えに行っているスールは、リンデイの亡き夫であるクライド・ハラオウンの良き補佐役であり、リンデイヤクロノの補佐役兼教育係でもあった。

はやてやなのは、フェイト達の事もよく知っており、いわば『アースラのお父さん』的存在だったから、一番得をしたのがチエンバレンであると、はやては看破したのだった。

「ま、これでチエンバレン二佐が復活してくれば、雨降って痔硬まる…、もとい、地固まる、や。」

……それにしても、ルガールの大虐殺からこのかた、海は静かやな。不気味な程に平穏や……」

はやての言うとおり、ディンギル帝国による局員公開虐殺から二ヶ月近く、管理局や管理世界の艦船が襲われたという報告はない。

反管理局のテロ組織ですら、あの凶行に恐れをなしているからかも知れないが、問題解決の兆候すら見えていないことに変わりはない。

「過大な期待は禁物やけど、フェイトちゃん達が帰って来れば、問題解決の糸口に繋がるんかなあ……」

はやての独り言は紅茶の湯気とともに消えていった……。

火星、地球防衛軍オリnpos造船工廠

標高27?、裾野の直径が約600?に迫る太陽系最高峰の称号を頂く活火山、オリnpos山の裾野の端から更に約700?離れた地下造船所の第2船台に、1隻の艦船らしき船体が据えられている。

船体の全長は約230?。ドレツドノート級主力戦艦と比べてもそれほど変わらない規模だ。

そして、この船がれっきとした戦闘艦であることを主張しているのが、船首上方に突き出した、偏平六角形の開口部だ。

船首部の下には20人ばかりの人員が整列していたが、やがて、一人の高官が進み出て、高らかに宣言する。

「本艦を、『海鳴』と命名する！」

月村・バニングス重工グループが提案した、外・深宇宙域での長期間・長距離航海を念頭にした遠洋型試作巡洋艦の1番艦が、その存在を明らかにした瞬間だ。

横須賀市、嶋津家

「向こうの地球には、ウルト○マンが放映されていたかね？」

前夜、スターシャと共倒れになったダメージを感じさせない程のいい顔色で朝食をとる冴子がフェイトに問うた。

「はい。私が暮らしていた時は放映開始から30年以上経っていましたが、恐らく今も続いているはずです」

「ふむ。こっちではもう200人を超えて、まだ増えているな。仮面ライダーもかな？」

「ええ、恐らく続いています」

多少の違いはあるが、文化の流れも近いようだ。

「仮面ライオンは置いていて、ウトラの星が、実在するM78星雲であることは知ってるかな？」

「はい。男の子達の話の中で聞いた事があります……………」

実は企画段階で、これも実在するM87星雲の誤植がそのまま定着してしまったらしいが、この際どうでもいい。

ティアナは別として、フェイトは冴子の話の意図をつかみかねていたが、雪菜はひそかに溜息をつき、僅かに肩を落とした。

「そのM78星雲は、地球から約1600光年離れているんだが、技術の進歩は、時にロマンを色褪せさせてしまっただよなあ……………」

そう言うや、冴子は心底がっかりしたように溜息をつく。

「……………そういう事ですか……………」

フェイトとティアナも合点がいったという表情をする。

「……そういう事さ。ほんの3年前までは本当に空想の世界だったんだけどなあ。今や技術的には何の問題もないもんなあ……」

波動エネルギーを手中にしたことで、地球人類は太陽系どころか往復30万光年の長距離航海をも可能にした。

しかも、今や大小マゼラン雲までなら片道10日以内に行けてしまうのだ。片道1600光年の距離は、航路が開拓されれば数日、いずれは日着で行ける距離でしかなくなるだろう。

「いずれはあつちにも探査計画が持ち上がるだろうが、日本人としては、あの一帯は聖域にしておきたいんだ。」

地球人は、オルトラマンやウルトラセオン達と敵対しちゃいけないんだよなあ……」

(はぁ………)

(…て、あなたの懸念はそっちですか!?) (x2)

仮にも一隊の部隊長とは程遠い発想と発言に、約1名は処置なしと言わんばかりに肩を落とし、約2名は内心本気でツツコミを入れた。

「……よし、探査計画からM78とM87の1帯を外すよう、今から根回ししておくか!」

……誤植の事も折り込み済みらしい……。

「………」 (啞然)

「………」 (呆然)

「……もう、好きにして下さい……」

嶋津冴子と同じ事を考えていた者は意外に多かった。何しろ、地球連邦の政・財・官・軍の枢要部には必ず日本人がいたから。

特に、ガミラス帝国の地球侵略が始まった2192年より前に地球防衛軍の前身である各国の宇宙軍　日本は宇宙自衛隊　に入隊した者達は、純粹に宇宙に憧れた者が多く、現在の地球防衛軍を主導しているのは、現司令長官を筆頭に、そういうロマンチスト達であり、沖田十三や土方竜も例外ではなかったのだ。

第158・5話『子供のロマンは大切に』（後書き）

巡洋艦『海鳴』は、ヤマト完結編に出てくる地球巡洋艦のプロトタイプのご解釈下さい。

諸元はまた改めて載せます。

第159話 『お世話になりました(6)』

横須賀市、地球防衛軍士官住宅、嶋津家

冴子は出仕、雪菜は学校のため、フェイトとティアナは中島夫人の手伝いを受けて私物の整理をしていた。

迎えに赴いた『クラウディア』『ラットバルド』と合流するのは明後日だが、明日は病院でシャリオの私物整理をしなければならないため、今日中に自分達の身辺整理をしなければならないのだ。

時空管理局員が管理外世界に赴いた場合、現地で入手した物品を持ち帰ることは制限されているが、今回ばかりは事情が異なり、地球防衛軍側とクロノ、リンデイの合意のもと、図書等限られた物品を持ち帰ることが許された。

何しろこれまでの管理外世界は、管理世界より文化・技術レベルが下回っていたのだが、地球連邦は軍事・科学技術等で管理世界より先行している分野が多く、何より、次元航行技術こそないが、通常空間での行動半径が15万光年もある艦船を有する等、慎重に対処する必要があるため、正確な資料が要るのだ。

一方の地球防衛軍側も、時空管理局に情報を提供することに吝かではなかった。

ガミラスや白色彗星との戦争の傷を癒している最中の地球としても、人的規模が桁外れに大きな時空管理局と敵対するのは得策ではない。何も好き好んで敵を増やす事はなかるうというわけだ。

しかし、あらゆる星間国家と対等な平和的共存を国是とする地球連

邦は、時空管理局の下風につく気など毛頭なかった。

嶋津家を実際に采配している高町雪菜から、台所にある物は自由に使つて構わないと言われているため、フェイト達は中休みのお茶や昼食も自分達で用意する。

昼のニュースを見ていた2人の表情が改まったのは、火星にある防衛軍工廠で、新型巡洋艦の命名式の報せの時だ。

画面に映る艦船は、巡洋艦とは名ばかりで、主力戦艦に匹敵する艦体規模と主砲、波動砲を持ちながら、なおかつ現行の紡錘形巡洋艦に劣らない高速と航行能力を有し、かつ無補給で半年超の単艦行動が可能だという。

「戦艦並みの巡洋艦…ですか？」

「うん。地球で20世紀の前半に2回起きた世界規模の戦争で使われた『バトル・クルーザー』」。

戦艦並の攻撃力と巡洋艦に迫る高速を兼ね備えた水上戦闘艦のこと……でも、言い換えれば、防御力は戦艦に、スピードは巡洋艦に及ばないわけですよね？

それに普通の巡洋艦より大きい分小回りもきかないし、懐に潜り込まれたり、戦艦の攻撃をまともに受けたらまずいんじゃない……」

ティアナに地球の海戦史の知識はなく、この場に冴子や古代守がいたら、思わず唖っていたかも知れない。

20世紀の初めに装甲巡洋艦から発展した巡洋戦艦は、第1次世界大戦では欧米列強や日本で多く建造され、主力艦として運用されたが、1916年のジュットランド島沖海戦と1941年のデンマーク沖海戦ではイギリスの巡洋戦艦がドイツ戦艦と交戦し、あつ

さりと撃沈された。

この手の艦は、艦隊の前衛で敵の巡洋艦や駆逐艦を蹴散らすためのもので、戦艦と撃ち合うためのものではなかったのだ。

ただ、後に地球が遭遇する天の川銀河中心部の星間国家軍では大型戦闘艦と中型戦闘艦で遠征艦隊を編成しており、この『海鳴』を量産化した大型巡洋艦群と、『アリゾナ』等をベースにした新型戦艦群の投入は当を得ていた。

尤も、さらなる戦訓と技術革新の結果、2212年から配属された新ドレッドノート級戦艦や、2216年から建造が始まったスーパーアンドロメダ級戦艦は、より高い攻防力を持ちながらもダウンサイジングし、2220年になると、全長300?を超える戦艦で第一線に留まっていたのは、最新型の戦闘空母『ブルーノア』級と、近代化改装を受けたマルス級（超アンドロメダ級）等のワンオフ性が強い艦で、近代化改装を受けながらも旧式化していた量産艦は、護衛艦隊や植民星防衛艦隊等の二線級任務や練習艦隊等に運用されるだけになっていた。

それはよだんです
閑話休題

「とはいっても、管理局の艦船より遙かに強いんでしょうけどね……」

そんな事を話していた2人だったが、アナウンサーが新造艦の艦名を読み上げた時は共に固まった。

『海鳴』。

フエイトにとつても思い出深い地名が新造艦の名だった。

かつての海軍もそうだったが、雄大で攻防力が強い戦艦、特に今ならヤマトやアンドロメダ級に耳目が集まりがちだが、かつての海軍も、そして今の地球防衛艦隊も、艦隊戦力の中核は巡洋艦であり、それは今後も堅持するという。

近い将来に到来する宇宙移民時代の先駆けとして、今後建造される巡洋艦には、原則として地球上の都市の名前をつける方針で、その第1艦には日本で最初にガミラスの遊星爆弾の攻撃を受けた都市の名を永く記憶するための一環として、海鳴の名を与えたという。

フエイトは内心複雑な思いを禁じ得ないが、異邦人たる自分がどうこう言う権利はないし、当のフエイトも口を挟むつもりはない。コメントできる権利があるとすれば、それは冴子や雪菜ら、この世界の旧海鳴市民達だろう。

(それにしても、「月村・バニングスグループ」とは)

この世界にも高町家と翠屋が存在し、過去には「なのは」も実在していたことも驚きだが、月村にバニングスと、馴染み深いファミリナーームも存在するとは。フエイトは内心で苦笑するしかなかった。

しかし、第97管理外世界と同様に、この世界、いや、この星は紛れもない地球だ。

住まう人はあちらの地球と何ら変わらない。

雪菜のような極一部の例外を除けば、魔導師資質を持っていない人が圧倒的に多いが、それだけだ。

人間性も管理世界の住民に劣るところはない。

それどころか、絶滅戦争を生き延びただけあって、雪菜達のような

子供世代も含めて、バイタリティが高い人が多いように思えた。

アナウンサーは、2201年の凶悪犯罪発生数と検挙率の話をしているが、

「悔しいけど、治安の良さでは、ミッドや先進管理世界も、地球にはまだ及ばないね。こちらの地球にも、私達が知っている地球にも……」

「管理世界は管理外世界を格下に見る傾向がありますけど、とんだ思い上がりだったんですね……」

ティアナの言葉がほろ苦く聞こえた。

第160話『お世話になりました(7)』（前書き）

週末分の更新です。

白色彗星帝国軍で名前しか知られていなかった方が登場する等、オリ設定ばかりですので、公式設定と違う等、ヤボはなしですよ。既にヤマトの原作からダッチロールしていますし、リリカルなのはのそれから離脱していますので……。

第160話『お世話になりました(7)』

次元空間内某空域

フエイト達を迎えに行く『クラウディア』『ラットバルド』のかなり後方を、同じ程度の速度で追尾する漆黒の艦船が4隻。

4隻とも共通のシルエットをしているが、その外形は突起物が極端に少ない平べったい楕円形で、1隻だけ艦首部が赤く塗装されていた。

その赤い艦首の艦のブリッジ

そこには数人の男達がそれぞれの任務に当たっている。彼らが着ているのは時空管理局本局の制服と共通のデザインだが、色合いは白とクリーム系と、乗艦とは似つかわしくない色だ。

その内の1人が立ち上がって報告する。

「次元流に異常なし。前の2隻も変わりありません」

「ん、引き続き監視を続ける」

艦長らしき壮年の男が答える。

この4隻は既に一昼夜以上、『クラウディア』達の後をつけている。

「……しかし艦長、お偉方は本気なんですか？

ハラオウン母子を消そうなんて……」

「余計な事を考える必要はないぞ、三佐。

我々は与えられた任務をこなすだけだ。……あるべき管理局とする

ためにな」

「……………」

艦長と言われた男はそれきり瞑目する。

彼と話していた件の士官も、内心で溜息をつきながらもそれ以上は何も言わなかったが、着席するや内心で毒づいた。

（艦長殿を含め、どうかしているな、海の一部のお偉方は。

ましてやハラオウン母子殺害の責任を地球防衛軍になすりつけてどうするつもりだ？

戦って勝てる相手じゃないんだぞ……………」

その艦の副長たる三佐は一連の作戦に危惧を抱いていた。

リンデイ達と地球防衛軍が会合し、フェイト達の移乗が済んだところへアルカンシエルを撃ち込む。

地球艦には回避されるかも知れないが、管理局の艦船の航行性能では回避しきれまい。

そして、管理世界には卑劣な地球側の騙し撃ちと喧伝し、全管理世界でじわじわと圧力をかける。

地球連邦がいかに軍事力が突出していようが、管理局に比べれば組織規模は小さく、遠からず屈服させ、管理世界に編入できる。

もちろん、『ヤマト』をはじめとする艦艇は管理局が接收し、次元世界の安定に役立てる。

作戦の骨子は以上のようなものだが。

（向こうの地球はあのガトランチスとまだ戦争状態だ。当然警戒は厳重だろう。

そこへ所属不明の艦船がノコノコ顔をだせば、どんなことになるだろう？

良くて拿捕抑留。撃破されても文句はいえんぞ。

なにしろこの部隊は、管理局でもほんのひと握りしか存在を知らない特殊部隊だからな)

この艦の用途は管理局が手を焼く対立武装組織等を制圧・殲滅すること。

ステルス性や航行性能は最優秀の折り紙つきで、殺傷設定戦闘に長けた戦闘魔導師を転送させて制圧したり、アルカンシエルで文字通り一網打尽に葬り去る。

非殺傷戦闘を基本とした時空管理局にはあるまじきやり方だが、ならず者を増長させては次元世界の不安定の元だ。

平和のための汚れ役になるのは一向に構わないが、今回の相手は訳が違う。

文字通りの絶滅戦争で否応なしに鍛えられた地球防衛軍が、時空管理局の常識や規則に従う義務などないのだ。

(下手すれば、無警告で攻撃されても文句は言えない。

管理局と地球は正式に交流を始めたわけじゃないからな。

事前に通告されている『クラウディア』と『ラットバルド』以外の艦船を、不審船として一様に排除対象としてもおかしくないんだからな)

もしそんな事態になれば、もともと非公然部隊である彼らは『死して屍拾う者なし』なのだ。

(ま、そんな末路を辿ったとしても、俺には悲しむ者なんぞい

ないから構わんがね。

逆に拿捕されれば、脳味噌もとか、管理局のヘドロがわんさか浚い出されるぞ。ハイリスク・ローリターンの典型だな……)

副長たる三佐は暗然たる口調で呟いた。

太陽系近縁・某空域

白色彗星帝国軍残党の艦船が40隻ほど遊弋していた。

戦艦が6隻、駆逐艦が30隻以上、支援艦艇が数隻。

さらに大型と中型の空母が各1隻存在しており、小規模ながらも無視できない規模だ。

「……………」

そのうちの戦艦の1隻の艦橋に、提督服を着る壮年の男が立っている。

この艦隊を率いる旧白色彗星帝国軍のナグモー提督は、大型空母や中型空母ではなく、戦艦に座乗していた。

理由は簡単。『ヤマト』ら地球軍別動隊によるゲルン機動部隊壊滅事件で、空母の脆弱性が表面化したためだ。

ついでに言えば、大型空母は所定の搭載機数の2割、中型空母も半分に分らず、大型空母は、いざとなればあの巨体を逆用して被害担当艦にするつもりだ。

彼はコズモガード・ナスカと共に太陽系進攻の先鋒を担ったが、ナ

スガが太陽系内の地球勢力の分析や攪乱等を行ったのに対し、ナグモーはシリウス・プロキオン星系に補給拠点を構築し、その後は守備に当たっていたため、地球軍との戦闘に参加しないまま、本隊たるバルゼー艦隊と帝国本星の崩壊、ズオーダーら国家首脳陣の壊滅という悪夢を見ることになった。

その後は補給拠点に集積した大量の物資を使いながら太陽系へのゲリラ的攻撃や嫌がらせを行っていたが。

（地球軍も急速に戦力を回復しつつある。もうこの流れは止められない。まい。

じきに我が拠点も地球軍の逆襲を受ける事になろう……）

あくまで地球への復讐を叫ぶ者もいるが、大半は帝国の支配下にあるであろうアンドロメダ銀河への里心に揺れていた。

正直、そろそろ潮時ではないのか？

そんな最中に飛び込んできた地球軍艦隊の移動の情報。

演習と思われるが、これを叩けば地球艦隊の再編に楔を打てるという意見にも一理あるため、ナグモー自身が艦隊を率い、慎重に太陽系へ向かっていた。

「提督、太陽系最外縁のカイパーベルトの小惑星帯まで35ガトランチス時間です」

「ん。まだ地球軍の監視網には距離があるが、哨戒を厳重にせよ」

ナグモーの表情が厳しさを増した。

第160話『お世話になりました(7)』(後書き)

末期的な寸劇

「……無茶苦茶だね。でもこれで終わり！
スターライト・ブレイカー！！」

『ネオアームストロングサ○クロンジェットアームストロング砲、
発射！』

高町なのはの必殺技と、Suiaペンギンが腹部に抱えた赤黒い
“卑猥な大砲”が同時に発射された。

巨大な閃光と爆圧に皆が身を低くする。

視界が戻った時、まず見えていたのは、頭上に『我、戦闘不能』と
いうウィンドウを光らせたポロポロのペンギンが下半身を地面にめ
り込ませ、斜めになっている。
そして、高町なのはは、

「……にゃあああ……」

ぬかるみに撃墜されて泥まみれになっていた。

第161話 『お世話になりました(8)』 (前書き)

今回は13TF側の話で、フェイト達は全く出てきません。

第161話『お世話になりました(8)』

地球防衛軍、新横須賀基地・大型艦船バース

接岸している戦艦『相模』の士官食堂には嶋津冴子以下の13TF各艦艦長と、中央司令部代表として古代 守先任参謀、さらに技術本部代表として真田志郎が参集していた。

守はフェイト達の引率責任者であり、軍代表として同行するが、真田もまた、フェイト達の事情を知る一人であるため、同行者の一人になっていた

戦艦は旗艦としての運用を想定しているため独立した士官食堂があるが、『相模』は艦長以下のチーフクルーも一般隊員と一緒に食事をとるため、士官食堂は会議室として用いている。

その会議室化した士官食堂で、4艦の艦長と古代 守は雁首を揃えて、明日の時空管理局との会合に備えた打ち合わせを行っていた。

時空管理局の次元航行艦『クラウドディア』『ラットバルド』が海王星域に滞在している間は地球防衛軍が護衛の責任を有する。

万一、彼らを白色彗星帝国残党や暗黒星団帝国軍との衝突に巻き込んだら、時空管理局や数多の管理世界を敵に回すことに繋がりにかない。

管理局の戦力一つ一つは大したことはないが、軍隊蟻のようなもので、人海戦術で来られたら厄介極まりない事になる。付け入る隙を与えるわけにはいかないが、露骨に警戒して相手を挑発する事は禁物だ。

まあ、あのハラオウン母子はこちらに好意的だから粗探しはしないだろうが。

「問題は、フェイト達を返した後の事だ」

古代 守が口を開く。

「彼女達を帰した時点で、時空管理局が接点を持つ必要性は薄くなる。

我々が時空管理局と交流を持ち続ける必要性は高くないし、下手をすれば我々の戦争に巻き込んでしまう可能性があるからな。

ただ、問題は向こうの事情だ」

「時空管理局が言うところの『管理世界』入り、つまり現行の軍備全廃を要求してくるかも知れない、ということですか？」

『水無瀬』艦長のナーシャ・カルチェンコが声を上げ、守と冴子が頷く。

「向こうが空気を読めない連中揃いならあり得るだろうな。

時空管理局は、魔法文化があり、かつ次元移動手段を有する世界については管理世界に指定し、治安維持等に一元的に管理している。

一方で、魔法文化も次元航行手段も持たない世界は『管理外世界』に指定し、干渉しないことにしている。建前はな（ニヤリ）」

「建前…ですか」

底意地悪い笑顔を浮かべる冴子に、一同も苦笑する。

「つまり、実のところ干渉しているケースがある、ということですね？」

『伊吹』艦長の塩江が頷く。

「ああ、どういう手段を使ったかは知らんが、戸籍を偽造して現地に定住したり、高い魔導師資質を持つ現地住民を巻き込んだり、果ては管理局員にする。相手の事情などお構いなしにな。

自由意思という事だが、10歳前後の子供の意思がどこまで反映されるのやら。

……深刻な魔導師不足等、向こうには向こうの事情があるんだろうが、管理外世界の住民まで巻き込んだ時点で、同情する余地は存在しないさ」

溜息混じりの冴子に、真田が続く。

「地球連邦には、当然魔法文化は存在しないし、導入する予定もないが、先日漂着した管理局艦船『レム』を解体調査して、次元転移装置をほぼ無傷で入手した。

つまり、次元航行能力を持つ艦船の開発も不可能ではなくなる。

あちらさんに目をつけられても仕方ないだろうな」

「かなり一方的な理屈ではありませんけどね」

『鳥海』艦長のフランベルク・棗・シルヴィアが皮肉混じりに言う。

「いずれにしても、時の流れを止める事はできない。

魔法はともかく、次元航行や次元通信等、今の我々にとっても有用な技術を知ってしまった。

しかも、不正な手段を使って入手したわけではないからな。

今更あちらさんがどうこう言ってきたとしてもどうにもならんし、敵だらけのこの宇宙では、躰いた石を拾うくらいでなきゃ生き延びられんさ」

真田が言うとおり、地球連邦・地球防衛軍は敵対したガミラス、白色彗星帝国軍艦船や施設の残骸の収集に躍起になっており、地球の衛星軌道上で撃破され、大気圏に落下しても燃え尽きなかった残骸についても、発見者への報奨金までつけて回収しているのだ。（有害な放射線等があるため、個人による回収は禁止されていた）

特に白色彗星帝国軍の場合、土星圏や地球付近での戦闘で、残骸や原型を留めたまま放棄された艦艇、はては都市帝国の下部まで残されたのだ。

技術者にすれば、正しく宝の山だ。

原型を留めたまま回収された艦艇の一部は艦装・武装を地球の物に改めて地球防衛軍に編入しているし、都市帝国の下半部は増改築して要塞化することになっている。

「いずれにせよ、我が地球連邦はいかなる国家や勢力を支配したり管理する事はないが、同時に支配や管理されることを拒絶し、対等な友好関係の構築を国是としている。

これはガミラスにも、白色彗星帝国にも、時空管理局、いや、管理世界の各惑星国家に対しても、だ」

「管理世界云々はともかく、時空管理局にはもう一つ問題がある」

話題を変えるように冴子が発言する。

「彼らが言うところのロストロギア、つまり古い時代、幾つかの文明や世界を滅ぼす元になったという古代遺物。この収集に関わる事だ。

管理局は、本来出入りが厳しく規制されている管理外世界にも立ち

入り、収集活動を行っている。

それでも現地住民に一切害が及ばなければいいが、結構強引に収集
実態は限りなく強奪 した事例もある。

それこそ、一部族伝来の守り神のような、金で代わりのきかない物を一方的に没収したり、障害になる家屋を勝手に破壊して知らん顔したりな。

中には、輸送船の事故で散乱したそれが現地で事故の原因になったこともある」

「事実とすれば、随分と勝手な話ですね。自分達の不始末のつけを現地住民に支払わせるとは」

呆れた口調でシルヴィアが評した。

「だからこそだ。我々は管理局と喧嘩するつもりは毛頭ないが、だからと言って、地球上や太陽系内で勝手な振る舞いを許すつもりはない。

もしロストロギアとやらを回収したいのなら、連邦政府を通し、かつこちらの軍と警察を立ち会わせてしてもらおうし、実害が発生すれば、相応の代償を支払ってもらおうさ」

管理世界の常識が管理外世界では必ずしも通用するわけではないのだ。

「しかし、時空管理局はいわば治安維持機構ですよね？
連邦政府が相手にするでしょうか？」

ナーシャが疑問を提示する。

地球にせよ、ガミラスや白色彗星帝国、暗黒星団帝国にしても、国家が最前面に出ている。

ガミラスや白色彗星が地球に降伏を要求した時も、国家や国家元首

の名の元に行っていた。

しかし、管理世界とやらは、警察・司法機構である時空管理局が前面に出ており、惑星国家と思われる各管理世界はその後ろに立っているように見えるのだ。

地球人からすると、何とも奇妙な話だ。

きつと、ガミラスや白色彗星帝国も似たような感想を抱くのではないか。

「それがあちらさんのしきたりなら、こちらが干渉する権利はないが、だからと言って、向こうの言い分を鵜呑みにするつもりはないさ。交渉していくしかないだろうな。」

あくまで向こうが外交関係の確立を求めてくれればの話だがね」

実際のところ、時空管理局の中も地球連邦・地球防衛軍との付き合い方を模索している最中で、ハラウン母子や八神はやて、ミッド防衛長官のアッテンボローのような、地球連邦との協調を主張する者と、逆に没交渉、あるいは何らかの手段で管理下に置くべきだと主張する者に分かれていたが、次第に前者が後者を凌ぎつつあった。

もつとも、問題は地球連邦や地球防衛軍内部にも存在する。

何と言つても、魔法の存在を信じない者が少なくないのだ。

何分、地球において、魔法とはアニメ等のバーチャルな存在、あるいはオカルト的評価を下されている。

これは大人より、むしろ子供世代の方がついていけるかも知れない。

また、連邦政府の政治家や官僚自体が異星人、あるいは異世界人と直接接触した経験が極めて乏しく、ともすれば自分達の価値基準に

相手を当て嵌めてしまいがちなことだ。

この点は、地球防衛軍の制服組、あるいは時空管理局局員の方がよほど免疫がある。

1140
地球側も解決すべき問題は少くないのだ。

第161話 『お世話になりました』(8) 『後書き』

艦船設定 8 『地球防衛軍の新型艦・編入艦 2202?』 (前書き)

本編はお休みし、建造中の地球防衛軍艦船(鹵獲・編入艦を紹介します。

もちろん、作者の妄執を元にしたものですから、細かいところは気になさらいで下さいね。

艦船設定 8 『地球防衛軍の新型艦・編入艦2202?』

2202年9月までに竣工予定の艦船と旧白色彗星帝国軍ミサイル艦改造戦艦の諸元です。

(竣工時のデータは若干異なっていることがあります)

? 『海鳴』級巡洋艦

同型艦: 『海鳴』 『タコマ』

基準排水量: 32000?

全長235?・全幅34?

主兵装

艦首波動砲×1 (『海鳴』は集束波動砲、『タコマ』は拡散波動砲)

40・6?3連装ショック・カノン砲塔×2

艦首魚雷発射管×4

対空ミサイルランチャー×12

亜空間・波動爆雷ランチャー×8

パルスレーザー×26

コスモタイガー×4搭載可能

月村・バニングス重工が提案したプランをベースとした、外・深宇宙域での運用を念頭にした試作大型巡洋艦。

艦の規模は現行の巡洋艦の3倍近くに及び、攻撃力ではドレッドノート級主力戦艦に匹敵するため、能力的には巡洋戦艦といふべき艦約6〜7ヶ月間の無補給航海を可能とする居住設備を持ち、波動機関もスパーチャージャーを持つ新型で、長距離・連続ワープが可能になる。

『海鳴』『タコマ』の2隻が火星で建造中で、それぞれ2202年5・6月に竣工し、各種のテストに用いられる予定。

? 『アイオワ』級宇宙戦艦

同型艦 『アリゾナ』『モンタナ』

基準排水量：84000?

全長302?・全幅50?

主兵装

艦首拡散波動砲×1

40・6?3連装シヨック・カノン砲塔×5

大型ミサイルランチャー×8

ファンネル(煙突)型8連装対空ミサイルランチャー×1

対空ミサイルランチャー×16

パルスレーザー×36

コスモタイガー×12機

元々はガミラス戦時代に地球脱出用亜光速宇宙艦として計画された艦で、1番艦『アイオワ』、3番艦『アーカンソー』とともに建造されていたが、ガミラスの攻撃で3隻とも被爆し、『アリゾナ』以外は大破放棄された。

『アリゾナ』は工程35%で工事を停止していたが、白色彗星帝国戦役で地球防衛艦隊が壊滅したため、北米州政府が連邦政府と防衛軍に建造再開をアピール。2201年末から建造を再開するとともに4番艦『モンタナ』を起工した。

単艦でほぼ1年間の無補給航海能力を有する居住施設を持つ。

元々艦体規模は『ヤマト』を上回っていたが、『アンドロメダ』級と同型の主・補助機関を採用したため、一層大型化している。

主砲は16インチだが、砲自体が新設計であるのに加え、アンドロメダ級の高出力機関の恩恵を受け、射程と破壊力は『ヤマト』にほぼ拮抗。

また、艦前半部両舷にも主砲塔（緊急時に強制パーズ可能）を装備したことで、前方に指向できる主砲は12門。上下方に対しても指向できるため、カタログ上の砲戦能力はヤマトをも凌ぐ。

『アリゾナ』は2202年6月、『モンタナ』は8月に竣工する予定。

？クレイモア級自動戦艦

基準排水量：115000？

全長295？・全幅70.5？

主兵装

艦首波動砲×2（拡散・集束を各1門）

50.8？4連装主砲塔×4

大型ミサイルランチャー×12

中小型ミサイルランチャー×24

亜空間波動爆雷ランチャー×1

地球防衛軍の無人艦としては第2期に当たる大型戦艦。

主力戦艦並の戦闘力、火器運用能力を追求した結果、搭載AIの大型も招き、艦自体も大型化してしまった。

また、遠隔操作による調整に不安がある新型波動機関は搭載されず、アンドロメダ級の主機を並列2基、補機4基を配置した。

地上、又は『アレクサンドロス』『マルス』等の旗艦型戦艦からの遠隔操作により運用される。

『クレイモア1』12』の12隻を2203年初めまでに建造する予定で、1番艦は2202年5月に竣工が見込まれている。

？レイピア級自動駆逐艦

基準排水量：5000？

全長150？・全幅24？

主兵装

20.3？2連装主砲塔×2

大型ミサイルランチャー×4

中小型ミサイルランチャー×8

亜空間用波動爆雷ランチャー×1

クレイモア級とともに自動艦第2世代を形成する。

クレイモア級でもあるが、初めから無人艦として設計されたため、有人艦では不可能な急機動も可能であり、またエネルギーを居住区画に振り向ける必要もないため、主砲の破壊力は同口径の主砲を持つ巡洋艦を大きく上回るとされる。

2202年9月までに第1期分32隻を竣工させる予定。

？ホワイト・サーベル級戦艦
同型艦『ホワイト・サーベル1』～4』

基準排水量：80100？

全長237？・全幅162？

主兵装

艦首拡散波動砲×2

40・6？3連装主砲塔×10

15・2？3連装対空速射砲塔×14

大型ミサイルランチャー×6

中小型ミサイルランチャー×20

パルスレーザー砲×60

地球付近での戦闘で鹵獲した白色彗星帝国のミサイル艦の内、状態良好だった4隻を改装したもの。

砲塔等は建造中止になった艦や修復用ストック品を活用し、艦橋もドレッドノート級主力戦艦のものを手直ししたものを載せることとした。

また、超大型ミサイルランチャーの跡には、白色彗星軍との戦闘で全損した巡洋艦やパトロール艦の波動砲付き艦首を取り付ける予定。

？ホワイト・ダガー級駆逐艦

同型艦『ホワイト・ダガー1』～16』

基準排水量：7500？

全長148・5？・全幅51・7？

主兵装

12・7?2連装速射シヨック・カノン砲塔×6

中型ミサイルランチャー×8

パルスレーザー砲×32

本級も土星・地球圏で放棄された艦を修復改装して編入した。駆逐艦といっても艦の規模はパトロール艦に近く、砲戦能力も地球の突撃駆逐艦を大きく凌ぐため、空母直衛任務に使う予定。

この他にも白色彗星帝国艦隊に随伴していた補給艦や揚陸艦等の支援艦艇も多数が接收され、状態良好なものは順次地球仕様に変更される予定。

旧白色彗星帝国軍艦艇は、ミサイル艦等の例外を除くと長距離進攻作戦に対応したものが多く、居住区設備等には地球より優秀な物も存在したため、後の地球防衛軍艦艇にも影響を与えた。

?超アンドロメダ級戦艦

同型艦『マルス』（当面、増備予定はない）

基準排水量：約165000?

全長381?・全幅93?

主兵装

艦首拡散波動砲×2

艦首集束波動砲×1

50・8?4連装シヨック・カノン砲塔×5
30・5?4連装シヨック・カノン砲塔×2

大型ミサイルランチャー×6

中小型ミサイルランチャー×36

パルスレーザー砲×90

コスモタイガー×18機搭載。

実験戦艦として建造された超大型戦艦。

アンドロメダ級並の艦隊指揮能力を持つが、クレイモア級、レイピ
ア級自動戦闘艦群の運用機能も持つ。

機関はクレイモア級自動戦艦同様、アンドロメダ級戦艦の主機関を
2基並列配置し、補機は4基配置した。

それゆえ、航行あるいは戦闘しながらの波動砲発射も可能。

アンドロメダ級以上の旗艦能力を持つが、同時に自動艦艇運用機能
を持たせた。

単純な戦闘能力では地球防衛軍最強のスペックを持つ。

第162話 『お世話になりました(9)』 (前書き)

相も変わらぬグダグダさ。

やっと出発しましたが……。

本文中、高町なのについて独自設定がありますのでご注意ください。

第162話『お世話になりました(9)』

地球防衛軍・新横須賀基地

(……………)

基地外周のフェンス際で、高町雪菜は遙か宇宙目指して上昇する『相模』を見上げていた。

「魔法の世界……か」

3時間前、フェイト、ティアナ、シャリオは雪菜、スターシャ達と別れの挨拶を交わした。

その時はかのプリンセスもお目覚め遊ばし、拙いながらもフェイト達3人の名前を呼んだ。

「ヘイト」

「ティアナ」

「シャリ」

で、何故か某執務官を涙目にしていた。

因みに、姫君は既に何も掴まらずに歩き回るまでになっていた。

「雪菜、色々ありがとう。」

今度は、もっと穏やかな形で会いたいわ」

「いつか、ミッドにも来てくれると嬉しいな……」

「……こっちが穏やかになれば、お目にかかる機会もできますよ」

雪菜は再会を期待するフェイト達にそう応えた。
それが現実になるまでには今暫くの年月を要したのだが。

（時空管理局か……）

とはいえ、雪菜はフェイト達が属する組織については些か警戒せざるを得ない。

彼女達からチラリと聞いた話では、時空管理局が保有する艦船は、白色彗星帝国の艦船に全く齒が立たなかつたらしい。

そうでなければ、そもそも彼女達と会う事すらなかつたのだから。

また、フェイト達は地球防衛軍と時空管理局が何らかの形で提携できないだろうかと思ひ始めたようだ。

ただ、魔法以外の戦力保有を認めていないという時空管理局が、果たして質量兵器上等の地球防衛軍のあり方を受け入れられるのか？ それを言うならば、魔法文化がない地球側とて似たようなものなのだ。冴子はもとより、周囲の軍人達は冷静に受け止めているように。

とはいえ、軍事にはど素人である雪菜個人としては懐疑的にならざるを得ない。

また、管理局は、魔法資質が高い者は子供すらも戦闘に参加すると仄聞いた時は、自分はそんな世界に生まれなくて良かったと本気で思った。

たとえこの世界の現実が辛く悲しい事が多過ぎても、だ。

（フェイトさん達はそういう世界に生まれ育つたのだから、私があるこれ言う資格はないけれど、フェイトさんの親友さん達とは衝突

してしまつかもね……)

後年、雪菜は旧機動六課のフォワードメンバーや高町ヴィヴィオ、アインハルト・ストラトスら年少者とも意気投合し、生涯にわたって交流したが、『スクライア・高町なのは』や『八神はやて』といった地球出身者達とはさほど親密に交流しなかった。

なのはと雪菜の間で何らかの意見の相違があつたらしいが、はやて、フェイトやティアナ、ヴィヴィオらも、その辺りの事情は語らなかつた。

フェイト達を乗せた『相模』は屋久島上空から一気に大気圏を離脱し、1時間後には月軌道を抜けた。

「月軌道を通過しました！」

「機関、火星圏出力へ切り換えます！」

「『伊吹』『鳥海』『水無瀬』との会合点まで20分です！」

「僚艦と合流後、木星圏までワープする。準備急げよ」

艦長席の嶋津冴子は頷き、ワープ準備を指示した。

「君達、気分は悪くないか？」

ひと通り報告と指示が済んだのを見計らい、艦長席横の特設席にいた古代 守がフェイト達に声をかけた。

彼は今回の会合において地球防衛軍側の代表であり、藤堂長官から一部の権限を委任されていたのだ。

ド級主力戦艦のうち、『相模』のような艦隊旗艦任務にない艦の艦橋には、通常は艦長・航海長・機関長・通信士・砲術士・観測

士ら6〜7名が詰めているが、この日に限り、フェイト、ティアナと古代 守、まだ車椅子が欠かせないシャリオの付添兼護衛で同行した森 雪のための特設席が用意され、シャリオの車椅子は雪の近くに固定されている。

さらに、フェイト達の救出作業に当たった真田志郎も同行していたが、彼は機関室に詰めていた。

話を振られたフェイトはティアナとシャリオを見てから、

「大丈夫です。3人とも体調良好です」

と守に応じた。

メカ好きであるシャリオはひと通り艦橋内を見渡し、小さくだが感嘆の声を上げる。

「やはり、管理局の艦船とはだいぶ違いますね…」

「うん、ブリッジクルーが10人もいないというのは驚いたよ」

「自動化が進んでいるからでしょうね…」

フェイトとティアナは一度『ヤマト』の第一艦橋に入ったことがあるが、『相模』はそれより自動化が進んでいるからか、クルーの数はもとより、計器の数も少ないようだ。

そんな中であって、シャリオの目を引いたのは操舵士席だった。

管理局の艦船は操船もタッチパネルで行われているが、地球の艦船のそれはステアリングとレバーが存在感を主張していた。

（確かに、ステアリングやレバー方式の方がいかにも艦船を動かし

ていると実感できるし、地球ではこれが定着しているからでしょうね。

マリーさんやルキノだったらきつと目を輝かせるわね……)

等と緊張感のない事を考えており、事実、帰還後に2人から『ずるい!』と言われる始末だった。

木星圏

『相模』『伊吹』『鳥海』『水無瀬』の13TF4艦は木星から500万?の宙域にワープアウトした。

「本艦に異常ありません!」

「『伊吹』『鳥海』『水無瀬』も異常ありません!」

大村は『相模』、パクは僚艦の状況を報告する。

一方、森 雪はフェイト達の状態を確認したが、シャリオを含めて異常を訴える者はなかった。

「木星最接近まで40分です」

「よし、『糸川539』射出用意だ」

冴子は木星本星調査ブイの準備命令を出す。

『ヤマト』『相模』がイスカンダル救援作戦に赴いている最中、木星に小惑星が落下し、その痕跡は今なお表面のガス雲に残っていた。

その痕跡を調査するための探索機『糸川539』を『相模』の格納庫に搭載し、木星目掛けて射出するのだ。

もつとも、射出後のコントロールは地球で行うので、射出後、13 TFはすぐその場を離れることになっていた。

宇宙艦船からの観測衛星／惑星射出はガミラス戦以前からも行われていたが、波動エンジンがもたらされて以後、これら観測機もより大型・高性能化され、太陽系各惑星もかなりの部分が解明されていた。

（地球のような有人惑星はまだしも、人間が住めない惑星や衛星の調査や開発では、管理局は全くお話にならないわ……）

（白色彗星帝国や暗黒星団帝国はもつと大規模にやっているはず……。
管理局は取り残されているんじゃないだろうか……？）

射出された『糸川539』の光を見ながら、フェイト達は焦りにも似た思いを抱いた。

波動エンジンがもたらしたものは、単に宇宙艦船の航行・戦闘力向上だけではなかった。

それ以前の艦船は動力部分とともに燃料（主にヘリウム）スペースが必要で、艦のかなりの部分を占めていたため、装甲重量の増加とや艦内スペースの減少を招いていたが、波動エンジンは燃料スペースを不要としたため、その分、居住スペースを確保することができた。

たとえば、M21741式宇宙戦艦には何とか食堂があったが、M21881式駆逐艦にはそんなスペースを確保できず、乗組員達は

栄養はともかく見栄えしない戦闘糧食^{レーション}で我慢しなければならなかった。

しかし、『ヤマト』以後に建造された艦船は波動エンジンの恩恵を受け、小型の護衛艦や駆逐艦にも小さいながら厨房と食堂が設けられ、作りたての食事が口に入るようになった。

そしてパトロール艦以上では士官専用食堂も設けられ、厨房の設備も充実し、下拵えから自艦で行えるようになったが、戦艦ともなればバーコーナまで設けられた。

供食設備の充実に伴い、各艦の艦長や乗組員からの要望、あるいは司厨担当者のこだわりで各艦ごとの様々なメニューが登場した。

ことに日本籍艦の司厨担当者のこだわりは、旧帝国海軍や海上自衛隊の艦船のそれに劣らなかった。

この時期の代表的なメニューに、『ヤマト』のオムライスがあるが、これは第1次航海（イスカンダル行）で出されたもので、旧『大和』のオムライスのレシピに独自のアレンジを加えたものだった。

一方、金曜日の昼食メニューはカレーライスがデフォルトなのも海軍自來の伝統で、13TF各艦のカレーライスもそれぞれ細部が異なっていた。

ちなみに、『鳥海』の司厨長はシルヴィアが連れて来たドイツ人で、『水無瀬』は艦長のナーシャ同様の在日ロシア人で、当然カレーライスにも独自のアレンジが加えられていた。

で、土曜日であるこの日の昼食は、幕ノ内勉強製『シヤリアピン・ステーキ』にグラムチャウダー、ライスプリンであった。

シャリアピンという名前からして、ロシア人考案の料理とお思
いの方もいるかも知れないが、れっきとした日本人考案のステーキ
である。(レシピや経緯はぜひ検索を！)

クラムチャウダーはともかく、他の2点にはフエイト達も興味をそ
そられた様子で、冴子は幕之内を呼んで基本レシピを用意させた。

(地球防衛軍恐るべし、ですね……)

(特に日本の船は伝統的にハイレベルなんだ。

ティアナ。地球では、世界各国のおいしい料理を食べたければ日本
に行けと言われてたんだよ。

それはこの地球も変わらないみたいだね)

(そういう伝統があったんですか……)

大スクリーンに映る木星の大赤斑に圧倒されながら、ティアナは感
心していた。

第163話『お世話になりました』(10)『(前書き)』

短いです。

テイアナがひたすら割り切っています。(現実主義者になったわけ
ではありませんが……)

第163話『お世話になりました(10)』

海王星・衛星トリトン付近宙域、『相模』艦橋

「戦隊全艦、軌道ブイに係留しました！定時到着です」

「会合予定時刻まであと1時間です」

「よし、警戒態勢を維持。コスモタイガーは全機発進せよ」

時空管理局との会合先に先着した『相模』以下の13TFは所定の軌道ブイに係留し、『クラウディア』と『ラットバルド』の到着を待つ。

無論、海王星に展開する地球防衛軍の戦力は13TFだけではなく、巡洋艦6、パトロール艦2、駆逐艦16からなる海王星駐留艦隊が衛星トリトンに常駐しているが、今回はレキシントン級戦闘空母『キエフ』、『グラーフ・ツェッペリン』からなる第1航空戦隊と第6艦隊が演習名目で進出しており、戦闘機3個小隊が13TFを遠巻きにして旋回しているが、それに『相模』から発進した山本隊8機が加わった。

地球防衛軍は時空管理局をも潜在的脅威とみており、『クラウディア』と『ラットバルド』以外の管理局所属艦船については、不審船として対処することになっていた。

宇宙空間を飛び交うコスモタイガーを、フェイトは複雑な思いで見ている。

コスモタイガー(?)は宇宙空間・地球型惑星の重力圏内両方で運用できる。

宇宙空間で運用できるのなら、次元空間でも運用できるだろう。そして、パイロットは選抜された人材だが、魔導師である必要はない。

質量兵器云々を別にして、もし管理局がああいう戦闘機を導入すれば、次元空間や宇宙空間はもとより、成層圏等、航空魔導師が活動できないエリアもカバーでき、かつ、魔導師資質がないばかりに埋もれている人材も活用できるだろうから、管理局の人材不足も緩和されるだろう。

しかし、自分達をお払い箱にしかねないような戦闘機の導入には、空戦魔導師を中心に反発が予想される。

自分達の首を危くする物を誰が好き好んで導入したくはないだろう。

でも、既に私達は強力な敵対勢力と遭遇してしまっている。

彼らがミッドや管理世界に侵攻してきたら、今の“海”と“空”では到底対抗しきれないし、制空権を奪われれば陸戦魔導師も活動できない。

建前に固執し続ければ、管理局は滅ぶ。

一方、現実を選び、戦闘機や宇宙戦艦を導入すれば戦力は強化されるが、管理局は管理局でいられなくなるかも知れない。

心中で懊悩するフェイトの隣にいるティアナは、上官より確実にドライだった。

（建前にこだわって破滅するよりは、たとえ矛盾に苦しむことになっても、守り通せる確率が高い方を選ぶのが、世界の守り手として

のあるべき姿じゃないかしら……)

管理局がいうところの、

『質量兵器はボタン一つで世界を滅ぼせる危険な物』

という質量兵器観に対しても、ティアナはクールに見るようになっていた。

一番身近な地球連邦の場合、武装できるのは軍人と警察官だけだが、その全てが試験をパスし、教育・訓練課程を修了しなければならぬ。さらに、宇宙戦艦や戦闘機を扱える人材は一層厳しい試験と訓練で選抜され教育されるが、途中でもエリミネートで振るい落とされてしまう。

地球で見た雑誌に地球防衛軍の宇宙戦士訓練校での教習メニューが掲載されていたが、管理局の陸士学校と比べても倍以上に厳しい課程が課されていた。訓練生が満15歳以上に限定されている事を割り引いてもかなり厳しいと感じた。

(不正に魔法を扱う連中だって後を絶たない。

要は魔法も質量兵器も、それを使う人次第ということよね……)

管理世界の質量兵器嫌いは半ばアレルギーといってもいいかも知れない。

普通の市民はともかく、治安を預かる管理局員までもが過敏に反応するのは行き過ぎであり、目を背けるだけというのでは甚だ心許ない。

ましてや、管理局は質量兵器の極致ともいうべき宇宙戦艦を保有す

る勢力と敵対してしまった。
いつまでも目を背けてはいられないのだ。

フェイト達が、管理局を取り巻く情勢が一層悪くなっている事に啞然としたのはそれから間もなくの事だった。

第164話『お世話になりました(11)』

海王星衛星トリトン付近、次元航行艦『クラウディ

ア』ブリッジ

「あ、ああ……」

「あれが、戦闘機……？」

スクリーン画面の中を飛び交うコスモタイガーに、ブリッジクルーは驚愕と戦慄の声を上げていたが、それを見てとった艦長席のクロノ・ハラオウンが声を上げる。

「うるたえるな。ここは魔法文化が存在しない世界なんだ。平和を守る為に質量兵器を使うのは至って当然のことだ。

……それに、彼らはこちらを護衛してくれているということをお忘れなよ」

「は、はい……」

一応得心したようだが、完全に呑まれている。クロノは内心で溜め息をついた。

(些かシヨックが強すぎたか……？)

しかし、これも現実世界の一つだと受け止められないと、今後の難局は乗り切れないぞ……

「皆、驚くのはまだ早いぞ。

これから落ち合うのは、1隻でアルカンシェルやアインヘリアルを凌ぐ攻撃力を持つ宇宙戦艦なんだからな」

「はい……」

ブリッジクルーは総じて顔色が冴えなかったが。

(いよいよ、地球防衛軍の艦船をこの眼で見れるのね……)

操舵士研修生、ルキノ・リリエー等海士は早々に立ち直り、好奇心に目を輝かせていた。

旧機動六課で唯一の艦船マニアである彼女は、操舵士教習課程での研修先がクラウディアであることの幸運に感謝していたのだ。

「提督、地球防衛軍の戦闘機隊指揮官から、音声通信が入っています」

「わかった。繋いでくれ」

通信オペレーターがコンソールを操作すると、ブリッジに若い男の声が流れる。

「こちら、地球防衛軍・内惑星防衛艦隊所属、独立第13戦隊飛行隊長の山本 明です。

そちらは次元航行艦「クラウディア」「ラットバルド」でよろしいですか？」

「……こちら、時空管理局・次元航行本部所属、次元航行艦「クラウディア」艦長、クロノ・ハラオウンです

お出迎えに感謝致します」

「同じく、次元航行艦「ラットバルド」。

私は艦長のアバン・スールです。

わざわざのお出迎えに感謝致します」

「了解しました、ハラオウン提督。スール艦長。これからそちらに誘導通信を送りますので、よろしく願います」

一旦通信が切れたと思うと、スクリーンに機首や尾部等を黄色く塗った戦闘機が現れ、翼を振って飛び去った。他の地球側戦闘機は同じ部分をオレンジ系に塗装しているため、一際目立っている。

「……あの機体が隊長機か」

（話し方にも落ち着きと自信が感じられる。

世界こそ違え、彼もエースか……）

気持ちを少し先に向ける。

「周辺の状況はどうだ？」

「事前に情報提供された地球防衛軍の艦船と戦闘機以外の反応はありません」

（何事もなくフェイト達を引き取らないと……）

この宙域には既に複数の地球艦が展開してきているようだ。ガトランチスの奇襲・強襲を警戒しているのだろう。

「誘導通信波を受信しました。シグナルに従い、半速航行します。

『相模』との合流まで10分です」

「いよいよね……」

正操舵士の報告に、クロノの左後ろに陣取ったリンディが独語した。公式な地球防衛軍との直接接触は初めてだが、これは同時に管理外世界の公的機関との初会合でもある。

この会合は時空管理局の将来に少なからぬ影響を及ぼす。リンディはそう考えていた。

『相模』艦橋

「『クラウドディア』『ラットバルド』との合流まで、あと6分です！」

「ん。微速前進、左5度」

「微速前進、左5度。宜候！」

メインスクリーンにはゆっくりと接近してくる『クラウドディア』『ラットバルド』の白を基調とした船体が映し出されていた。

「やはり、火器は内装式か……」

真田志郎が唸る。

「我々とは建艦思想が全く違うし、管理世界の住民に必要以上のプレッシャーを与えないよう配慮しているのかも知れんな……」

古代 守が応えるが、フェイト達は複雑な思いでそれを聞いていた。

(確かにそういう配慮はあるけど、今となっては全て空しいな……)

白色彗星帝国や暗黒星団帝国の艦船に簡単に捻られる程度の戦闘力しかないのでは、この世界では戦闘艦と名乗ることすら恥ずかしく、内心忸怩たる思いを抱いたのだ。

もつとも、この半日後、フェイト達はさらに愕然としたのだが。

「艦長と古代参謀宛で、『クラウドディア』から通信が入っています」「わかった。繋いでくれ」

「はっ！」

パク通信長がキーを叩き、メインスクリーンの画面が変わるのに合わせ、冴子達士官とフェイト、ティアナは立ち上がった。

画面にはリンディとクロノ、別ウィンドウに『ラットバルド』艦長のスールが映っていた。

冴子達とリンディ、クロノは面識があるため改めて話すことはなく、初対面となるスールとの自己紹介を行う。

『時空管理局所属、次元航行艦「ラットバルド」艦長のアバン・スールであります』

「地球防衛軍中央司令部付参謀、古代 守です」

「戦艦『相模』艦長、嶋津冴子です」

「宇宙戦艦『ヤマト』技術班長、真田志郎です」

「地球防衛軍中央司令部秘書室所属、森 雪です」

正確に言えば、真田は『イカルス第2天文台所長』なのだが、ある意味軍の機密に触れるため、元の役職名を名乗った。

『合流しましたら、こちらから娘達を迎えに伺いますが、よろしいでしょうか？』

「わかりました。お待ちしております」

敬礼を交わして通信を終える。

副長席では大村が幕之内と回線を繋ぎ、何やら打ち合わせを始めた。

「さて、河岸を変えようか」

赤ちようちんをはしごするような口調の冴子に告げられたフェイト達が立ち上がり、雪はシャリオの車椅子を押した。

『クラウドディア』ブリッジ

「それじゃ、私達は行くから、後をお願いしますね、アバンさん」
『わかりました。お気を付けて』

これからリンディとクロノは小型シャトルで『相模』に向かう。もしもガトランチス帝国軍が来襲してきたら、両艦はスールが指揮して次元空間に待避し、戦闘をやり過ごす手筈なのだ。

「遺憾なことだが、この空域で、我々は紛れもない弱者なんだな……」

『クラウドディア』から発進していくシャトルを見ながら、『ラットバルド』のアバン・スールは呟いた。

『クラウドディア』艦載シャトル

シャトルの両側を『相模』のコスモタイガーが固めている。

「あの機体を見ると、世界こそ違い、あのフォルムは地球の戦闘機なんだなと思うよ……」

寄り添うように飛行する戦闘機を見ながらクロノは呟いた。
そして。

「どの艦も、いかにも戦う為に生まれたという雰囲気ですね……」
操縦桿を握るルキノ・リリエが言う。

「ええ。それでもガトランチス帝国との戦闘では戦力の大半を失い、『相模』も2度大ダメージを被ったというわよ」
「大半って、管理局では全滅扱いですよね!？」

リンディから聞かされた内容に、思わずルキノは聞き返した。

「地球防衛軍とすれば、降伏すれば地球人類は奴隷化され、いずれ絶滅させられると思ったのだろう。だから戦友の屍の山を築いてでも戦ったと思う。」

管理局の戦いとは根本からして違っただろうさ」
「……………」

シャトルの右前方に『相模』が近づいていた。

第165話 『お世話になりました(12)』 (前書き)

やっごとご対面です。

でもすぐに雰囲気が一変……。

『管理局規則』とやらには、オリジナル設定をぶち込んであります。

第165話 『お世話になりました(12)』

『相模』艦載機格納庫

「ご足労痛み入ります。ようこそ『相模』へ」

「こちらこそ。娘達が大変お世話になりました、ありがとうございます。」

コスモタイガーの整備を担当する技術班員が敬礼する中、シャトルを降りたリンディ、クロノと冴子、守、雪が敬礼と握手を交わす。

リンディとクロノは既に映像通信で何度か話しているので、改めて自己紹介することはなかったが、ルキノ・リリエと地球側の3人は当然初顔合わせであり、皆の視線が向けられるや。

「ル…ルキノ・リリエー等海士でありまふっ！！」

緊張の余り、噛んでしまった。

リンディ、クロノは管理局でも歴戦の勇士として名を馳せているが、初対面である地球側の3人も雰囲気こそ違え、数多の戦いと修羅場を潜り抜けてきたであろうことが解ったため、ルキノは気圧されてガチガチになってしまった。

「本艦艦長の嶋津です。」

「こちらこそよろしくな、リリエー士」

「地球防衛軍本部参謀の古代です」

「防衛軍司令部秘書室付の森です。」

「楽しんでくださいね、ルキノさん」

「は、はい……」

少し緊張が解けたルキノは、チラと視線をめぐらして格納庫を見渡した。

（やはり、管理局の艦船に比べると造りは武骨ね。でも、被害を受けた時はすぐパーツ交換ができそう。実戦向きな造りと言うべきね……）

天井や隔壁には各種のパイプが剥き出しになって走っており、如何にも実戦本位な造りが印象的だった。

「早速ですが、娘さん達の元にご案内します」

冴子が先導して居住区へのエレベーターに向かう。

（ それにしても、実際に会ってみると、なおさらよく似ているな。ヴィヴィオと…… ）

クロノは冴子の横顔を見ながら思った。

髪と瞳が黒いのと、右頬に走る一筋の裂傷痕を除けば、ヴィヴィオの未来の可能性の一つと言ってもいいかも知れない。

『 撃てっ！ 』

冴子と同じ、黒を基調とした地球防衛軍の艦長制服に身を包み、戦闘命令を下すヴィヴィオ。

（ もっとも、なのははそういう未来は断固却下だろうがな…… ）

エレベーターの微かな揺れを感じながら、クロノはふと思いついた未来絵図に苦笑し、軽く首を横に振った。

『相模』艦長公室

「フェイト!!」

「母さん!!」

入室するや、リンディとフェイトは駆け寄り、涙目で抱き合った。

「……………」

「……………」

抱き合つて啜り泣く2人を、冴子達は穏やかな表情で眺める。

「ティアナ! シャーリーさん!!」

「ル…、ルキノ!? (x2)」

リンディ、クロノに続いて入室したルキノも、ティアナとシャリオの姿を目にするや、泣きながら駆け寄り、ティアナに抱き着き、ティアナと、傍らのシャリオも涙目になった。

「…………… フェイト、シャリオ、ティアナ、三人とも、よく頑張ったな」

クロノが三人に声をかける。

「……………グスツ……………、クロノ、ごめんね。心配かけちゃって」

「……………色々のご心配をかけてしまい、申し訳ありませんでした。提

督

ひとしきり泣いた後、リンディが冴子達に頭を下げる。

「……皆さんには、本当に何から何までお世話になりました。何とお礼を申し上げたらいいのか……」

「いえ。あの場に私共が通りかかったのは正真正銘の偶然でしたし、地球の船乗りとして当然の事をしたまですから、どうぞ、お気になさらないで下さい」

冴子は手を振ってそう答え、守や真田も頷いた。

数分後、

着席した一同の前には日本茶と和菓子が並べられていた。守の言葉は意思の確認ではなくそして、リンディとルキノの茶碗の傍らには、生クリームと角砂糖が当然のように置かれていた。

保安上の理由でそれほど時間はないため、リンディは携えてきた親書 地球連邦大統領と地球防衛軍司令長官宛の2通 を差し出す。

これを受けとつたのは古代 守だが、受け取るや、

「リンディ提督。私は、防衛軍司令長官宛の文書を開封し、内容を確認する権限を委譲されております。

故に、連邦大統領宛の親書はこのままお預かりしますが、長官宛親書はこの場で開封します。

よろしいですね？」

「……はい、結構です」

地球側はこういう事態を予想したようだ。
だからこそ、艦長のみならず、軍本部の参謀を寄越したのだろう。

（親書の内容によっては、この場で突っ返されるかも知れないな……）

リンディもクロノも親書の内容は知らされていないが、地球側の対応が予想以上にシビアだった事には気が重くなった。

守は司令長官宛の親書の封を切るや、親書を取り出して目を通し始めた。

「リンディ提督、クロノ提督、これだけは最低限確認しなければなりません……」

冴子は守を横目に切り出した。

「我々は、かの『レム』が大破状態で太陽系内に転移してきた折、救助活動と並行して、同艦にあった各種資料も回収して精査しました。」

その結果、時空管理局が管轄する世界 我々は惑星と解釈しますが、管理世界においては、“魔法”が科学として成立し、広範囲にわたり普及していると判断しましたが、この解釈に誤りはあるでしょうか？」

（……！！）

リンディとクロノは一瞬息が詰まった。

傍らのフェイト達を振り返ると、無言で頷いた。

「これは明確に申し上げますが、我々が魔法の存在を知り得たのは『レム』からであり、フェイトさん達からではありません」

管理局規則で、管理外世界 非魔法文化圏 の住民に魔法の存在を露顕させた局員はやむを得ない場合を除いて厳しい懲戒処分の対象とされているが、地球側はフェイト達に機密漏洩の責任はないと言っているのだ。

今度は真田が質問してきた。

「管理局の規則では、魔法を知った管理外世界の住民は、管理世界への移住又は現地協力者として、管理局に協力する義務を負うとありますし、第97管理外世界、もう一つの、21世紀の地球において、魔導師の家族や友人一家等がそれに該当しているようですが、我々もまた管理局法の適用対象になるのでしょうか？」

(つー!!)

魔法を知り得た管理外世界の住民も管理世界への移住 拒否すれば身柄拘束 か、現地協力者と指定され、他の住民に魔法のことを知らせてはならない等の条件をつけられるのだが。

冴子が真田に続く。

「『レム』と『レオニダス』同様、魔法の件は軍上層部に報告済で既に連邦政府にも資料は報告されておりますが、私達は連邦市民の生命財産を守る為に活動しており、命令なくしてそれ以外のいかなる組織にも協力はできません。」

それはご理解いただけますね？」

要は、ここにいる者達のみならず、地球防衛軍や連邦政府内で魔法

の存在を直接・間接問わず知った者は、時空管理局法に従う気は毛頭ないということだ。

「はい。『レム』『レオニダス』共に不可抗力ですし、私達も組織の一員ですから、それは十分認識しています」

リンディが応じる。地球側の言い分は至極まともであるし、自分達が彼らの立場なら同じ事を言うだろう。

第一、関係した者が膨大な上、戦闘力では話にならないのだ。

仮に強硬派が管理世界編入を目論み、実力行使すれば、一方的に叩きのめされる。

(我々だけじゃない。市民にちよっかい出したら承知しないということだな……)

(でも、国防に携わる者なら当然のことだと思つよ、クロノ)
(そうだな。今までが傲慢過ぎたということか……)

(親書の内容も気になりますけど、上層部が納得するんでしょうか？。三提督はまだしも、その下の提督クラスには管理世界拡大派が根強いですよ)

(……その事なんだけど、最近、管理局を取り巻く状況が悪化しているの(え!?)……詳しい事は『クラウドディア』でゆっくり話すわ)

クロノ、フェイト、ティアナの念話はリンディが止めた。

(上層部の意向はどうあれ、地球連邦と防衛軍と敵対することだけは避けないと。

地球連邦がガトランチスや暗黒星団帝国と敵対しているからと言って、自動的に管理局に味方してくれるわけじゃないんだし……)

それに、フェイト達がこの世界の地球でどんな事を見聞きしてきたかも聞かなければならない。

フェイト達は軟禁されたようには思えず、比較的自由に行動できたようだ。

地球に住まう人達がどんな思いで生きているか、是非とも知ってみたい。

やがて、親書に一通り目を通し終えた古代 守が顔を上げ、親書を封筒に戻した。

「お2人は、親書の内容をご存じですか？」

「いえ。私共は作成には一切関わっておりません……」

「わかりました。この親書は本部に持ち帰り、司令長官と連邦大統領に提出して回答します。」

……ただ、この内容で、回答期限が地球時間で1週間というのは、余りに性急かつ一方的である、とだけ申し上げます」

(……ちゃんとまとまるのかしら。この交渉……)

他世界に対して高姿勢という、管理局中央の悪癖がまた出たようだ。リンディ達は前途を案じずにはいられなくなった。

第165話『お世話になりました(12)』(後書き)

ご存じのとおり、管理局員の名前には自動車の名称が取り入れられています。ならばこつこつのもありですね。

『エルガ』
『セレガ』
『ガーラ』
『ダイナ』
『キャンター』
『タイタン』
『タツカー』
『ダットサン』
『ボクサー』
『ジュピター』
『ミンセイ』
『アトラス』
『キャブオール』

……一部を除いて、トラックやバスばっかだ。

『ボクサー』 『ジュピター』なんてトラック、何人の人が知っているのやら……。

今後の管理局員オリキャラはトラック・バス主体でいきましょうか

第165・5話『BAD・BEAUTY?』(前書き)

地球・管理局の非公式会談中の各艦ブリッジの様子です。

第165・5話『BAD・BEAUTY?』

海王星宙域・『ラットバルド』ブリッジ

「……周辺空間の異状はないか？」

「はい。地球軍の艦船と艦載機以外の反応は感じられません」

艦長のアバン・スール一佐の問いに観測担当のオペレーターが答える。

異状があれば地球側から緊急通信が入ることになっているが、自分の“目”でも確かめるのは至って当然だろう。

（改めて見ても、管理局の艦船とはまるで違うな。宇宙空間での戦闘に特化するとああいう造りになるのか……）

実際には大気圏への突入と自力離脱も可能なのだが。

旗艦たる『クラウディア』は戦艦『相模』と並び、スールが預かる『ラットバルド』の左右には、巡洋艦という中型戦闘艦『伊吹』『鳥海』が佇んでいる。

さらに、後方にはもう1隻、『水無瀬』が監視のため遊弋していた。

（艦のサイズなら『ラットバルド』の方が大きいけど、戦闘力ではお話にもならないだろうな……）

そのような考えに浸っているスールに、まだ十代の女性クルーが不安を隠さずに問ってくる。

「……艦長。地球連邦は、管理局とどう関わるつもりなんでしょう

か？
「ん……」

彼女の心配も無理はなからう。

すぐ近くに佇む『相模』は『ヤマト』とともに、XV級をあっさり撃破したガトランチス帝国の艦船を粉碎してしまった。

出発前、クロノから映像を見せられた時は一様に信じられないという表情だった彼らだが、本物の『相模』や宇宙戦闘機等を目のあたりにした時は、文字通り絶句してしまった。

「……それは、リンディ統括官が携えてこられた親書の内容と、それに地球側がどう回答するか、だな。

……もし、管理局が地球連邦に対し、管理世界編入や質量兵器全廃を要求したとして、地球連邦がうんと言うと思うかね？」

「……………」

スールの問いに、クルーは力なく首を横に振った。

(……ま、全国民がマゾヒストでもない限り、自分達の防衛力が弱くなるような選択をする者はいないだろうさ)

スールは内心で苦笑するとともに、親書の内容が穏やかなものであることを祈った。

巡洋艦『伊吹』艦橋

地球防衛軍艦船には、各所に自動給水湯設備があり、冷水と熱湯に2〜3種類の飲料が冷温で選べる。

コーヒーは大体万国共通だが、日本艦なら煎茶か玄米茶、中国艦なら烏龍茶、イギリス艦やロシア艦なら紅茶、イタリア艦ならエスプレッソが選択される。

それは『伊吹』も例外ではないのだが、この艦の場合、艦長が筋金入りのコーヒー党で、その影響か、艦内食堂には『アンドロメダ』や『アレクサンドロス』にしかないバリスタマシンが設置されているのに加え、艦橋の給湯装置には、煎茶とアメリカンコーヒー、更には“艦長監修”なるブレンドコーヒーが用意されていた。

それゆえなのかは解らないが、平時の『伊吹』ブリッジにはコーヒーアロマが他の日本艦や並のアメリカ艦より濃く漂っている。それは異邦人の来客が来た時も変わらなかった。

「 時空管理局（魔法の世界）は、我々に対しどんな姿勢をとるつもりなんスカねえ……」

アメリカンコーヒーのカップを手にした戦闘班長のチャン・永井が、操舵席に座る副長兼任の綾歌麗奈に尋ねる。

「何とも言えないわね…。」

彼らは魔法以外の力を質量兵器として廃絶したがっているみたいだから……。

それでも魔法文化がない惑星には干渉しない方針らしいけど、それは相手が管理局の世界より文明が遅れているからでしょう。

でも、偶然とはいえ、私達は管理局や魔法の事を知ってしまったからね。

いくら魔法文化がないとはいえ、このまま放置してくれるかしら…？」

麗奈は溜息まじりに答える。

万一戦闘になった場合、当面局地戦で負ける要素はないが、何分にも組織の規模が桁違いだ。

消耗戦に持ち込まれたらかなり面倒なことになる。

「まあ、嶋津艦長が預かっていた局員の子が、ちゃんと地球の事を話してくれ、管理局が耳を傾けてくれるのを願うしかないわね……」
「そうっすねえ。あちらさんも俺らと同じ人類なんですからね……」

麗奈の願望を色濃く出した回答に、心底共感すると言わんばかりにチャンも頷いた。

(……次はグアテマラとコナをブレンドするか……)

艦長席の塩江は一言も発さず、自らブレンドを決めたコーヒを味わいながら、次のブレンドを考案していた。

パトロール艦『水無瀬』艦橋

13TFの目とも言つべき『水無瀬』は、僚艦の少し後方に陣取っている。

「……あの子達は家族と仲間達に再会した頃かしらね……」

ブリッジ内をゆっくり歩き回りながら、ナーシャ・カルチェンコは一人ごちる。

「そうでしょうね。後は艦長の勘が外れてくれれば言う事はありませんが……」

至極真面目な強面で、副長兼戦闘班長の篠田 巖が応える。

「……私もそう願ってるわ、副長。

我ながら、嫌な予感ばかり中途半端に当たるのは、いい加減に御免蒙りたいもの」

篠田が指摘したのはナーシャの“勘”だ。

敵襲等の悪い勘の的中率は約4割強。単なる偶然と片付けるには妙なほど高いのだ。

ナーシャの勘の良さは旧『九頭竜』からのクルーは元より、彼女の飲み友達である嶋津冴子もよく知っており、この日もそれとなく伝えていた。

当然ながら『水無瀬』のクルーは、

「艦長の預言が下ったぞっ！」

とばかりに、各々受け持ちの機器や武装の整備に熱が入っていた。

因みに操舵士の“イヴィヴ”こと月読伊歩はと言えば、目を閉じて操縦桿とスロットルを操作していたが、これもいつもの光景なので、誰もツッコまない。

普段はオドオドしている彼女が、いざ訓練や戦闘となると、駆逐艦すら躊躇つようなアクロバティックな操艦ぶりをよく知っているからだ。

今回、その凄まじい操艦術が発揮されるかどうかは、まさに戦神マルスのみぞ知る。

巡洋艦『鳥海』艦橋

「
」
「……………」

鼻唄を奏でているのは艦長のフランベルク・棗・シルヴィア。

そして彼女に無言でツッコんでいるのは、副長兼航海長のフランベルク・白百合・アリア。

他のブリッジクルーは、もう誰も何も言わずにいる。

「……………何をなさってるんです？艦長」

低く抑えた口調で艦長を糾すのはアリア。

彼女の目に映るのは、波動砲発射トリガーと電撃クロスゲージを極めて上機嫌かつ念入りに磨く上官でもある双子の姉だった。

「だあってえ。今日必要になるかも知れないじゃない？」

戦場ですらゴーイングマイウェイな姉は、何の屈託もなく返してきた。

白色彗星帝国との戦いで大ダメージを被りながらも生還した『鳥海』と『伊吹』は修復工事に際して、近接防御火器の増強と、『ヤマト』同様の集束型波動砲に換装していた。

これに伴い、波動砲照準機器の追加、戦闘指揮席と艦長席には『ヤマト』のそれを改良した電影クロスゲージとトリガーが増設されたのだが、『鳥海』で最も喜んだのは『プリンツ・オイゲン』から転任してきたシルヴィアで、暇ができる度にトリガーと電影クロスゲージを自ら整備したり磨いている。

要するに、姉は波動砲を撃ちたくてうずうずしている。こんな時の姉に何を言っても無駄な事は、幼少期からフォローに奔走させられているアリアは嫌というほどわかっていた。

何しろ姉は地球防衛艦隊名つての若き砲術家。否、ハッピートリガー。戦闘指揮以外は全て丸投げしてくる、実に凶悪な艦長なのだ。それに付き合っている自分も大概なのだ。

「はあ……」

せめてもの意趣返しとばかりに盛大な溜息をつきながら、艦内各部署からの定時報告に目を戻したアリアと、苦労人の副長（裏艦長）に心底同情したブリッジクルー達だった。

第166話『海王星会戦?』(前書き)

いよいよ(?) 戦闘開始です

第166話『海王星会戦?』

『相模』 霊安室

「南無妙法蓮華経……」

法華経が唱えられる中、嶋津冴子ら地球防衛軍と、リンデイら管理局の面々が焼香する。

彼らの前には、約5ヶ月前に大破状態で太陽系にランダム転移し、『相模』が発見したL級航行艦『レム』乗組員の遺骨を納めた骨箱と、デバイス等の遺品が並んでいる。

経を詠んでいるのは機関士の川南良三。

機関班のNo.3であると共に日蓮宗の僧侶資格を持ち、こういう時は必ず駆り出される。

「 それでは、私はこれで失礼します」

「 ありがとうございます」

「 ありがとうございます……」

経を詠み終え、退出挨拶をする川南に、冴子ら地球側の面々は答礼し、リンデイ達は礼を言いながら頭を下げた。

あとは、遺骨と遺品を管理局側に引き渡すだけだ。

その時、艦内に警報が鳴り響く。

「 ……!?!?」

「 ……ん……」

「え　！？」

『緊急事態！海王星圏に白色彗星帝国艦隊の出現を確認！約10分で第6艦隊と接触する模様！
総員戦闘配備につけ！繰り返し……』

その場にいた全員の表情が厳しくなり、冴子は艦橋を呼び出す。

「すぐ戻る……。そうだ、それでいい。

戦隊全艦、対潜空艦戦闘用意。山本達を呼び戻せ。『ラットバルド』と『クラウディア』にも伝えるんだ！」

『わかりました！……』

取り敢えずの指示を出し終えた冴子は、リンディ達に向き直る。

「リンディ提督かクロノ提督のどちらかお一人、艦橋にご同道いただけますか？」

「……私が伺います」

即座にクロノが同行を引き受けた。

管理局所属である『クラウディア』と『ラットバルド』への命令権を有するのはリンディかクロノであり、地球側はあくまで勧告しかできないのだ。

「　じゃ、俺達は他の方々を案内する」
「頼む」

残るリンディ・フェイト・シャリオ・ティアナは真田と雪が、最も防御が堅い居住区に待避させることになり、冴子と守、クロノは霊

安室を駆け出ていった。

実際のところ、警戒配備の段階で全員が持ち場についていたため、戦闘配備になっても乗組員が走り回る光景は殆ど見られなかった。

真田の先導で居住区への道を急ぎながら、リンディ達は念話を交わす。

(何というモード移行の素早さなんでしょう……)

(ここにいるのは、数多くの修羅場をくぐり抜けてきた人達だから、たった1秒の差が生死を分けた事もあったんだろうね……)

(フェイトの言う通りだわ。
管理局もこの位のスピードを持たないと、取り返しのつかない事態になりかねないわね……)

いつになく深刻な表情のリンディに、フェイト達は先刻同様の違和感を持った。

(母さん、一体、管理局で何が起きてるの……?)

(詳しくは後で話すけど、フェイト達が不在の間に、管理局の“海”は過去になかった苦境に立たされているのよ……)

((え……?))

フェイトとティアナは顔を見合わせた。

(フェイトさん、ひよつとして、『レム』や『レオニダス』と同じような事がまた続発しているんじゃない……)

(うん……)

白色彗星帝国や暗黒星団帝国の様な、時空管理局の魔法が通じない程に強力かつ凶悪な軍事勢力と衝突したのではないかという予感と不安が2人の脳裏に広がる。

彼女達の予感には不幸にもほぼ的中していたが、内情を知って言葉を失うのは約半日後になった。

『相模』艦橋

冴子が席につくや、大村が歩み寄り、現状を報告する。
ちなみに、冴子の左後ろに古代守が、右後ろにクロノが着席した。

「第6艦隊の前方90宇宙？付近に、約40ないし50隻の白色彗星帝国艦隊がワープアウト。あと15分で第6艦隊前衛の有効射程距離に入ります」

「艦隊の構成は解るか？」

「大型空母と中型空母が各1隻と戦艦10隻が確認されました。残りには恐らく駆逐艦と思われます」

「大型空母？間違いないのか？」

4つの滑走路を持つ大型空母は推定で120機以上の戦闘機・攻撃機を搭載できる。

（まずいな。連中の態勢が万全に近ければ、搭載機数は1航戦（第1航空戦隊）の倍以上あるぞ……）

実際のところ、実のところ、白色彗星空母の搭載機は、2隻とも定数の半分にも満たなかったのだが、地球側がそれと気づくのは少し後になった。

「通信長、『ラットバルド』に繋いでくれ」
「わかりました」

地球側にとっては最早日常茶飯事と化しているが、管理局側にとっては恐怖に値する事である。

まずは総指揮官たるクロノから何がしかの指示を出せば、向こうも幾らかは落ち着こう。

「繋がりました。どうぞ、ハラオウン提督」

「ありがとうございます」

メインスクリーンに『ラットバルド』のスール艦長が映る。

「こちらは全員問題ありません。」

緊急空間転移の準備はできていますか？」

『はい、『クラウディア』『ラットバルド』とも座標固定は完了しております』

「わかりました。敵艦または艦載機の接近が確認されたら、こちらには構わず転移して下さい」

『了解しました』

管理局の2隻は、白色彗星軍の艦なり艦載機が13TFに接近してきたら緊急転移で一時待避することになっていた。

「スール艦長、敵には潜空艦というステルス艦が存在し、いきなり対艦ミサイルで攻撃してきますので、早期に待避なさることをお勧めします」

『ステルス艦ですか……。』忠告感謝します。嶋津艦長』

『ラットバルド』艦橋

通信を終えたアバン・スールー佐はブリッジクルーを見渡す。

皆緊張した面持ちだ。

(皆、込み上げる恐怖と闘っているのだろうか……)

管理局と地球防衛軍では戦闘に対する解釈が全く違う。

良し悪しは別にして、管理局で、殺し殺される覚悟で戦える局員は、かのヴォルケンリッター等数える位しかないのが現状。

もし目の前で地球艦隊とガトランチス残党艦隊が撃ち合いを始めたら、本格的にパニックに陥る者が出かねない上、管理局の艦船ではたった1発の被弾が致命傷になりかねず、そんな艦船を守って戦う地球艦隊の足手まといになりかねない。

一時の恥を忍んでも生き延び、ここにいる全員を本局に連れて帰る。

それが自分に課せられた責任と、スールは自らに言い聞かせた。

『相模』艦橋

「敵艦載機と1航戦の戦闘機隊が接触。ドッグファイトが始まりました!」

トリトン基地からの戦闘機隊、あと5分で接敵します!」

「敵の本隊は?」

「あと7分で前衛部隊の射程に入りま……、え!?!」

観測士席の三沢が戸惑った声を上げる。

「どうした？報告を続ける！」

大村の叱咤に、三沢は表情を改め、報告を続ける。

「申し訳ありません、続けます。」

……敵本隊が急にスピードダウン、陣形に乱れあり。艦隊内に複数の高エネルギー反応を認めています」

(???)

(高エネルギー反応!?)

三沢の報告に、冴子と守は思わず顔を見合わせた。

第167話『海王星会戦?』(前書き)

白色彗星艦隊側の視点で書いてみました……(^ - ^) ;

第167話 『海王星会戦?』

ガトランチス帝国残党艦隊・旗艦（大戦艦）

突然の僚艦の爆沈に、艦橋は騒然となる。

「何が起きている!? 急ぎ確認しろ!」

次席幕僚が現状把握と原因究明を下令する。

地球艦隊を間近にして予想外の事態。すぐに収拾しなければつげ込まれてしまう。

「……………」

指揮官席のナグモーは無言を通してているが、込み上げてくる焦慮と闘っていた。

（地球の機雷網に引っかけたとしてもいづのか……?）

ガミラスを破り、偉大なるズオーダー大帝をも討ち果たした奴らだ。当然その位の備えがあつて当然だとナグモーは考えていたが、それは些か買い被りに過ぎた。

「提督、原因が判明しました!

複数の艦艇が我が艦隊内にワープアウトして、僚艦と衝突。また、回避しようとした艦同士も衝突や接触が相次ぎました!」

「艦艇だと? どの馬鹿共だ!」

聞き返す幕僚に、ブリッジクルーはしばしコンソールを操作してか

ら再びナグモーと幕僚に向き直った。

「……排熱パターンからすると『ジクウカンリキヨク』の艦船と推定されます!!」

「おのれ、中途半端な艦船しか造れん雑魚共が、邪魔しおって……っ!」

「うるたえるなっ!!」

奴らの残存艦があるなら捻り潰せ。損傷がひどい艦は放棄せよ! 駆逐艦2隻を護衛に残すのだ! 急げ!!」

歯軋りする幕僚を一喝したナグモーは、無事な艦での進撃続行と、大破した艦の放棄、乗組員の脱出を命じた。

しかし、予想外の事態にパニック状態になった艦は統一した行動がとれず、味方艦同士での接触や衝突が相次ぐ。

そんな中、衝突・接触を免れた艦が闖入者を捕捉し、怒りの集中砲火を浴びせ始めた。

『この野郎、邪魔しやがって。生かして帰さんぞ!!』

生き残った闖入者達も、回避行動をとる前に十字砲火を浴び、呆気なく爆散していく。

程なく。

「ワイプアウトした闖入者共は5隻でしたが、うち2隻が我が僚艦と衝突して爆発。

残った3隻中2隻を集中砲火で完全撃破しました。

……旗艦らしき1隻は取り逃がしましたが、後部ノズルを中心に火

炎に包まれましたので、奴らの脆弱な艦船ではそう長くはもちますまい」

首席幕僚が報告した直後、観測員が半ば絶叫するように報告する。

「前方から地球艦隊、接近してきますっ！」

遅かったか……。

ナグモーは臍を噛む。しかし、このままでは全滅が待つのみ。反転する時間はない。回頭中に敵の砲火でズタズタにされるか、敵の決戦兵器“カクサンハドーホー”で殲滅させられる。

「損傷艦を内側に入れる。密集隊形で敵の右翼を突き崩した後、転進する！全ての火線を前方に向けるのだ！」

密集していれば、たとえ地球艦隊が拡散波動砲を放つても、何割かは生き延びられる。

ナグモーはそう読んでいた。

「地球艦隊から高エネルギー反応2！」

“カクサンハドーホー”来ますっ！」

「総員、閃光に備えよ！」

観測員の絶叫に続き、地球艦隊から光の壁が迫る。

地球艦隊からの波動砲は白色彗星艦隊の手前で拡散。これを見越したナグモーの命による密集隊形で、残存艦の7割は爆散を免れた。

「よし、残存艦はこのまま突撃、戦艦は衝撃砲を準備せよ！」

いいぞ、被害は大きかったが、これなら半分は離脱できるだろう。

ナグモーはしてやったりとばかりに笑みを浮かべた。

「カクサンハドーホー”第2射、来ますっ!”

「速度そのまま!隊形を崩すなっ!”

馬鹿め、同じ手が何度も通用するものか。

地球軍も我が帝国との戦争で人材が底をついたようだな。

そこまで思った時、ナグモーの旗艦左舷を光の柱が駆け抜けた。

「拡散しないだと……っ?」

ナグモーがそれだけを言った直後、大光芒は消えた。

「か、艦隊の9割、消失っ!!」

「バカな!拡散するはずじゃなかったのかっ!??」

呆然となっていたナグモーだが、頭を振って我に戻り、ある1隻の地球戦艦に思い至る。

(そうだ。ゴーランドとナスカを葬り去った『ヤマト』の“ハドーホー”は集束型だった……。

だとすれば、他の地球艦に同じ集束型の“ハドーホー”が搭載されていてもおかしくはない。

あるいは、我が帝国との戦いの後に方針転換したのかも知れない。

……“カクサンハドーホー”との二段構えで我が艦隊を叩くつもりだったのか。

何故、その可能性を考えなかったのだ……っ)

ナグモーは血が出る程唇を噛み締めた。

残った艦船は旗艦を含めて戦艦2隻と駆逐艦4隻。空母は2隻とも遙か後方で火煙を噴き上げ、既に乗組員の退去が始まっているようだ。

「提督、攻撃機隊は壊滅した模様です」

「……無念なり。こうなれば、せめて地球の奴らを道連れにして、天上の大帝にお詫びせねばなるまい」

艦載機も全滅し、艦隊もここまで撃ち減らされては、もう組織的な復讐戦はできない。

この銀河を制覇するどころか、まさかここまで零落するとはな……。

どこで我らは間違っただろうか？

地球人の底力を甘く見ていたというのか？

だが、今となってはもう、どうでもいいことだ。

「残存全艦に告ぐ。」

全砲門開け！地球艦隊に突撃する！！

衝撃砲、最大射程に入ったら発射始めっ！！」

たった6隻にまで撃ち減らされたナグモー艦隊は、旗艦を先頭に菱隊形で前進を再開した。

たちまち、前方の地球艦隊から無数の火線が向けられ、戦艦の盾になった駆逐艦がまず撃ち抜かれて爆散した。

盾を失った戦艦にも多数の火線が叩きつけられる。

凄まじい衝撃と振動で、艦橋の照明が半分以上落ち、ブリッジクルーの殆どが薙ぎ倒された。ナグモーも指揮官席から投げ出されている。

「艦橋基部、被弾っ！！」

衝撃砲へのエネルギー回路が切断されましたっ！！」

艦橋基部に地球戦艦の大口径砲が直撃したのだろう。

「く……、生き残った砲で敵を撃てっ！！」

額から血を流し、左肩を押さえながら起き上がったナグモーは一歩も退かず、突撃を下令するが、その間にも無数の火線に曝される2戦艦。

戦艦ならではの強固な装甲で、巡洋艦や駆逐艦かの砲撃は弾き返すが、戦艦からの火線には耐え切れず、内部で爆発や火災が発生し、乗組員の命を飲み込んでいく。

そして彼我の距離が近づくにつれて直撃が増え、巡洋艦や駆逐艦からの砲撃も装甲を穿ち始める。

「前方及び左右から、中型ミサイル多数接近……！！」

地球の巡洋艦と駆逐艦から対艦ミサイルが放たれたのだろう。

2戦艦は生き残った回転砲で迎撃するが、余りに数が多過ぎる。

「直撃、来ますっ！！」

ブリッジクルーが絶叫する。

「大ガトランチス帝国に、栄光あれーっ！！！」

何人かが帝国万歳を叫んだが、次の瞬間、凄まじい衝撃と爆発が全てを粉微塵にした。

地球防衛軍に残された映像資料では、2戦艦のうち、左側（地球側から見て右側）の戦艦は艦体が三分断された後爆散。旗艦らしき右側の戦艦は、艦橋に魚雷が複数命中して崩壊。中枢を失った艦体部分は猛火に包まれながら尚も前進したが、艦橋崩壊から3秒余り後に大爆発を起こし四散した。

第167話『海王星会戦?』(後書き)

次回は時空管理局?側からの視点です

第168話『海王星会戦?』(前書き)

今回は管理局(リンディ達)に非ず(視点)です。

第168話『海王星会戦?』

海王星圏、時空管理局・SS級特殊戦術次元航行艦、SS
03艦橋

「全艦の転移を確認しました」

「よし、『クラウディア』『ラットバルド』を探せ」

「提督、周辺監視が先です」

艦長兼部隊長のレース・レゾナ提督が目標たる『クラウディア』『ラットバルド』の搜索と捕捉を命じるが、副長のクラウス・ディーゼル三佐が異議を唱える。

部下の異議に不機嫌さを露わにしたレゾナが口を開こうとした時、メインスクリーンは閃光に満たされ、衝撃波が艦を激しく揺さぶった。

「何が起きた!?!」

「04、06の反応消失!

本艦周辺に多数の艦船が存在しますっ!」

「何だと…?どこの勢力だっ!?!」

だから言わんこっちゃない!

内心で上官を罵りながらも、艦船の解析を命じたディーゼル三佐だが、解析結果を聞き、顔面蒼白になった。

「…………ガ、ガトランチス帝国の艦です。少なくとも40隻以上!」
「な…………っ!」

顔色を失ったのはディーゼル三佐や解析を行ったクルーだけではな

かった。

最悪だ。よりによって敵対しているガトランチス帝国艦隊と鉢合わせするとは！

反応が消えた2隻は、空間転移直後にガトランチス艦と衝突したのだろう。

デューゼル三佐は艦長に向き直る。

「提督、作戦を一時中断し、空間転移でこの場を離脱すべきです！」

「……残存全艦、右90度回頭、全速離脱！」

「提督、通常空間では我々の艦船は彼らに歯が立ちません！次元空間に待避すべきです！」

「ならん、次元空間でのアルカンシエル使用は慎重派に要らん口実を与えかねんっ！！」

「アルカンシエルを撃つではありません！！単に待避せよと申し上げているのですっ！！」

次元空間でのアルカンシエル使用は管理局のサーチャーに感知されてしまうし、そもそも秘密部隊は公的には存在しない部隊だ。何かあれば容易に切り捨てられてしまう。

しかし、デューゼル三佐は単なる一時待避を進言しただけで、攻撃までは考えていなかった。

しかし、2人の口論はそれ以上続かなかった。

さつきとは比べものにならない激しい衝撃が艦を揺さぶり、ブリッジクルーは全員床に投げ出された。

「第5から第12エリア破損、応答ありません！」

「何…っ」

ガトランチス艦からの砲撃は管理局艦の脆弱な外板を貫通し、一番強固な隔壁内にある生活エリアを破壊した。

さらに。

「05と07、ガトランチスからの攻撃で反応消失!!」

「くっ!!」

何故だ。我々は『クラウディア』『ラツバルド』に送られてきた座標信号を傍受し、それに従って空間転移したのだ。

それなのに、彼らは無事に地球防衛軍と合流し、我々はよりによってガトランチス艦隊と鉢合わせしてしまうのだ……？

そこまで思い至ったレゾナ提督は、傍受した地球防衛軍と『クラウディア』とのやりとりを思い出し、憤激に身を震わせた。

「あの女狐と蛮人どもが……っ」

空間転移する直前、『クラウディア』と地球防衛軍は盛んに通信をやりとりしたが、その中には一見奇妙な通信が混じっていた。

曰く

『フェイトが聖祥学園中等部3年生だった時の担任教師の氏名』

『喫茶・翠屋の人気メニュー』

等々。

そんな話題、当事者しかわからない。

ハラオウン一家を除けば、わかるのはエースオブエースと夜天の主くらいなものだ。

恐らく、その中に正確な座標信号が混ざっており、我々が受信したのは微妙かつ故意に位置をずらした座標信号だったのだ。要は、ハラオウン一家と地球防衛軍はグルになって我々を陥穽に嵌めたのだ。

我々のような存在が追尾して来る事をも予想して、当事者にしかわからないキーワードを用意していたのだろう。おのれ、このままでは済まさん。

「次元空間に転移する。座標は……」

怒りに身を震わせながらレゾナ提督は次元空間への転移を下令しかけたが、再び激しい震動が艦を襲った。

「ま、魔力炉の機能消失。全壊した模様です……！」
「……………」

報告に、全員が絶望の色を浮かべた。

管理局の次元転移装置の駆動には、魔力炉からの膨大なエネルギー供給が欠かせない。

その魔力炉が機能を失ったということは、次元転移ができなくなった事に他ならないのだが、彼らには絶望する事すら許されなかった。ガトランチス艦からの集中砲火が離脱を図るSS03を襲い、03の後半部は炎に包まれた。

炎と煙の尾を引きながら、ガトランチス艦隊から見て南極方向、艦首を落とし垂直降下するように遠ざかっていく03は艦橋の外壁に大破口を穿たれ、ブリッジクルーは瓦礫の下敷になるか、宇宙空間に吸い出されていた。

時空管理局特殊戦術次元航行艦のSS03が地球防衛軍に発見されたのは、この6時間後だった。

第168話『海王星会戦?』（後書き）

今回は、地球第6艦隊側からの視点です。

管理局側のレゾナ提督とディーゼル三佐ですが、『レゾナ』とは、UDトラックス（旧日産ディーゼル）の大型トラック『クオン』から数えて2代前、1980年代に製造された大型トラックの前期モデルについていた名称です。（後期モデルでは何故か単なる型式記号だけに……）

また、『ディーゼル』はディーゼル機関の発明者であるルドルフ・ディーゼル博士からいただきました。

第169話『海王星会戦?』(前書き)

今週末最後の更新です。どうぞ。

今回は地球側第6艦隊などからの話です。

我ながら管理局の扱いが酷いな……。

第169話『海王星会戦?』

海王星圏、地球防衛軍第6艦隊、旗艦『讚岐』

予想外の事態に『讚岐』艦橋は騒然となった。

「何が起きた!? 分析急げ!」

目前に迫った敵艦隊が突然隊形を乱した。

自作自演かも知れないが、原因次第では最大限利用させてもらう。

艦長席に陣取った松平定保・艦長兼第6艦隊司令官は戦闘体制を維持させつつ、原因究明を指示する。

やがて、トリトン基地の偵察機と前衛部隊から通信が入る。

「トリトン基地航空隊の“梟3号”から報告!

『敵艦隊内で艦艇同士の衝突事故が発生、10隻以上が爆発炎上中です!』

「パトロール艦『ゼーアドラー』から報告!

『敵艦隊内部通信が飽和状態、混乱状態にあり』ですっ!」

同様の報告がさらに続いた。混乱しているのは確実のようだ。

よし、一気に畳みかけてやろう。

「全艦砲雷撃戦用意! 最大戦速で前進せよ!

本艦は拡散波動砲スタンバイ! 『メリーランド』にも波動砲を準備させるんだ!」

「わかりました!」

敵艦隊が何故あんな状態になっているかはわからないが、立ち直る前に叩きのめしてやる。

敵艦隊の数からして、戦艦1隻の拡散波動砲で十分だが、密集隊形をとられては撃ちもらす恐れがある。

艦隊の1隻、戦艦『メリーランド』は昨年未に竣工した新鋭艦で、波動砲は『ヤマト』のそれを強化した集束式波動砲を持っている。

拡散波動砲と集束波動砲の時間差砲撃は、先にイスカンダル救援作戦で『ヤマト』『相模』が暗黒星団帝国艦隊に行つて全滅させた実績がある。

白色彗星の連中にはまだ知られていないだろう。

「拡散波動砲、エネルギー急速充填開始！」

「拡散開始点座標固定！…拡散範囲固定！」

「『メリーランド』、波動砲にエネルギー充填開始！」

「拡散波動砲、カウントダウン開始、10 / 9 / 8 / 7…」

「『メリーランド』波動砲発射10秒前！」

「…撃てっ！」

ブリッジクルーの報告の声が飛び交う中、松平の号令一下、『讃岐』から拡散波動砲が放たれた。

…数秒後、

「敵艦隊の半数を撃沈！残存艦は再び密集しています！」

「『メリーランド』撃ちますっ！」

約10秒の間隔を置いて『メリーランド』から放たれた光の柱は、密集していた残存艦を飲み込んだ。

「敵艦隊、9割の反応消失、残りは10隻を切りました!」

戦闘力を維持していそうなのは戦艦2隻と数隻の駆逐艦だけのだ。

無駄かも知れないが……。

「……敵残存艦に勧告。

降伏か死か、二度と我が恒星系に立ち入らぬかのいずれかを選択せよ、とな」

しかし、そのメッセージが送られることはなかった。

「敵艦隊、こちらに向けて前進してきます!」

「……是非に及ばずか。全艦砲雷撃再開っ!」

そこからの1分余りの事を、松平は後年、『23世紀のスリガオ』と述懐している。

驟雨のように浴びせかけられる十字砲火の中、突撃を図った敵残存艦は、まず駆逐艦が艦体を引き裂かれて爆沈。

さらに左右から巡洋艦と駆逐艦が突進し、猛火に包まれながら前進を続ける戦艦に魚雷を発射。

無数の命中弾を浴びた戦艦の1隻は三つに折れた後消滅。

旗艦らしい1隻は先に艦橋が崩壊。直後に艦体が分断されて大火球と化した。

トリトン付近、巡洋艦『鳥海』

「あ　　っ！！何で　　っ！！??？」

……スクリーンを指差して大声を上げたのは、艦長のフランベルク・
棗・シルヴィアだ。
スクリーンには、続けざまに波動砲を放つ第6艦隊の『讃岐』『メ
リーランド』が映っていた。

「……………（^- - ^-;）」

「はあ……………」

「……………」

副長を除くブリッジクルーはただ苦笑するだけで、それぞれの役割
には全く影響しなかった。

そして副長は

「……………いじけてないで、仕事して下さい。艦長」

「ずるいよずるいよずるいよずるいよ……………」

譫言のように呟き続ける双子の姉に、にべもない妹がそこにいた…
…。

『相模』艦橋

「…今のは、一体…………？」

地球戦艦から続けざまに放たれた超高エネルギー砲でガトランチス艦隊が呆気なく消滅していくのを、クロノ・ハラオウンは愕然とする思いで見ている。

(ブレイカー 集束砲だけでなく、クラスター 拡散砲まであるのか…!?)

集束砲は『ヤマト』が放つのを目撃したが、拡散砲を見るのは初めてだ。

「古代参謀、今のは一体…?」

「波動砲です、クロノ提督」

「波動砲…。」

あれもタキオン粒子を応用しているのですか?」

クロノの問いに、守と冴子は無言の首肯で応えた。

『相模』艦長公室

モニターに映るガトランチス艦隊の最期を、リンディ達は言葉もなく見詰めていた。

「フェイト、今のは…?」

「波動砲…。主動力に使う、圧縮したタキオン粒子を前方に向けて撃ち出すんだって」

同席していた雪と真田も頷く。

「そうですね…」

(…ヤマトの波動砲は、木星にあったオーストラリア大陸クラス

の浮遊大陸を崩壊させたんだって、母さん……)

(え!?)

フェイトからの念話で、『ヤマト』が初めて波動砲を発射した時の逸話を聞かされたリンディは思わず戦慄した。

(数千? 四方の目標を破壊できるの!? 波動砲は…)

本当なら、アルカンシエルの約100倍の破壊力ということよ!?)

(そういう事になるね)

でも、『相模』や同型の戦艦はもっと強力な波動砲を搭載してるし、さらに強力な戦艦も建造が進んでるよ。

……こっちの地球は、ガトランチスとの戦争で宇宙艦隊が壊滅しちゃったからね)

(そう……)

リンディの脳裏には、波動砲を撃ち込まれて崩壊する本局が浮かんだ。

(……そんな事態を現実にさせないためにも、地球連邦とは協調していかないと、管理局はいずれ命脈を断たれてしまうわ……)

一方、ルキノ・リリエは、見てはいけないものを見ているような表情になっていた。

(私、本当にここに来て良かったのかな……)

波動砲といい、情け容赦ない砲撃といい、憎むべき敵の筈のガトランチス艦隊に同情心すら抱いてしまった。

(これが本当の戦争なら、管理局は戦えないよ……)

「……ショックだったかい？」

俯いたルキノに、真田が声をかける。

無理もない。今まで比較的平穏な生活をしてきたであらうまだ16・7の少女に、宇宙戦争の生々しい光景はあまりに衝撃的だ。

「……我々も、できればこんな事はしたくないさ。

しかし、彼らは我々と交渉することもなく、一方的な絶対服従を要求してきた。

そして、国家の中枢が消滅した今も、残党達は我々の呼びかけに
えず、太陽系に侵入しては破壊活動を続けているんだ。

それを見逃せば、また罪もない市民が殺されるかも知れない。

それを防ぐためには、我々は鬼になり、殺してでも彼らを止めなければならぬんだよ……」

「……」

「……」

絞り出すような真田の独白に、リンディ達は言葉がなかった。

(……管理局もロストロギアの収集や封印のやり方が独善的だと非難されることがある。

世界によっては、私達管理局がガトランチス帝国のように映っているのかも知れないわね……)

些か重くなってしまった空気を入れ換えるかのように、ティアナが口を開く。

「……それにしても、ガトランチス艦隊は、何故急に隊形を乱したんでしょうか？」
戦場ですから、何が起きても不思議ではないと思いますが、余りにも呆気なさ過ぎます……」

素朴な疑問を口にする。

「……そうだな。彼らがあも呆気なく敗れ去るとは、俺も予想していなかった。」

嶋津達や第6艦隊も、今頃は同じ疑問を抱いているだろうな……」

地球側がある程度の事情を知り、色々な意味で言葉を失ったのは、さらに数日後の事だった。

第169話『海王星会戦?』（後書き）

突然のすごく変な寸劇

レゾナ「おのれ、リンディ・ハラウン!

おのれ地球人もめ!

汚い罠を仕掛けおつて!」

冴子「はて?何の事??」

真田「被害妄想、ここに極まれりだな」

古代守「……お前ら、とんでもない悪党だな」

冴子「え〜?あたち、わかんない」

真田「あんなの、ダボハゼを採るような初歩的な仕掛けなんだがな
……」

レゾナ「貴様ら……もう許さん!?!?!な、何をする!?!?!?!?!」

よーし、簞巻にしてしまえ!

シルヴィア、アリア、そっち押さえ込め!

了解です!

……そうだ、雪菜。あれだ、あれ持って来てくれ!

……わかりました、艦長。

あれ、ティアナ?どこ行くの?

面白そうだから参加してきます、なのはさん。
ティア、私も加わるよ
ちよ、ちよっと、スバルまで！フェイトちゃん、止めてよ。
なのは、それ無理。あの人達を止められるのは、多分2人しかいな
いから。

アタシも一枚噛ませろー！

ちよ、ちよっと、ヴィータちゃんまで！

私達もやるっスー！

……艦長、持って来ました。これですね。

よし、それだ。人肌に温めたか？

もちろんです。

……何か楽しそうだね、なのはママ。

やーめーてー！！（泣）

さあ提督、一杯どうぞ。私達の奢りです。

や、やめろ、よせ……！！

仕方ないな、漏斗噛ませろ。

フゴフゴー！！

よーし、流し込め！

フガ~~~~~……

……口ほどにもありませんでしたね、この人。

そうだな。たった1杯も飲めないとは、とんだ根性無しだな。

ガタガタガタガタ……（恐怖におののく）

一体、何を用意したの、あのコは……。

第170話『戦い果てて』（前書き）

グダグダに進む中、23日を以って満1年になります。

これもご笑読いただいております皆様のお蔭以外の何物でもありません。

心より御礼申し上げます。

さて、時系列では『相模』竣工から半年も経たないのに、本編では1年もかかっています。

本編は2204年/新暦79年（完結編後/vivid）あたりまでやりたいのですが、この分では何年、そして何百話かかるのやら（^- - ^- ;

ともあれ、途中フェードアウトだけはせず、グダグダでも完結を目指す所存ですので、今後ともよろしくお願い申し上げますm（）ー・

E F 1 2

第170話『戦い果てて』

海王星圏・衛星トリトン空域、『相模』艦橋庫

「『クラウディア』『ラットバルド』、転移を確認しました」

三沢の報告の声が響くと、艦橋にホツとした空気が流れる。これで、地球側の責務は全て果たした。

先々どうなるかはともかくとして、保護責任者でもあった冴子も人知れず長い吐息を吐き、肩の力を抜いた。

（ また、雪菜一人きりにしてしまうか。

……やれやれ、柄にもないことを）

些か感傷的になった自分に気づき、冴子は思わず苦笑してしまった。

同居している間中、フェイトやティアナと同じ魔法少女？（同士、話が弾んでいたようだが、何を話していたかを詮索することはしなかったし、今後もしない。

フェイト達は将来、雪菜をミッドチルダに招きたい意向を持っているようだが、地球と時空管理局の間には現状ではクリアすべき問題が山積している。

地球は殊更、時空管理局と事を構えるつもりはないが、彼らの管理下に入るつもりは毛頭ない。

わざわざ弱体化するのが目に見えている選択をするほどマゾヒストが住んでいるわけでもないし、魔法という、極限られた者にしか使

えないスキルでは、この世界では実用に耐えることができないし、質量兵器 非魔導兵器に対する認識にもかかなりの差があり、資料で時空管理局の質量兵器観を見た時は思わず嘖いてしまった。

また、フェイトやティアナ、クロノやリンディ達は、直に話したり共に暮らしたりしていて、人となりは解っており、個人的には信頼に足る人物だと思っているが、

彼女達もまた時空管理局という組織の一員だ。

組織同士の軋轢があれば干戈を交える事態になりかねない。

(それは向こうも同じように思っているだろうが、な……)

地球に戻れば、フェイト達を保護下に置いていた件の総括報告を上げなければならぬが、一人の人間としての彼女達は、我々地球人と何ら変わらず、不器用な生き方しかできない女の子に過ぎない事も明記しないと……。

冴子の物思いはそこで中断した。

「艦長、第6艦隊より入電、

『13TFは我が艦隊の南極方向を哨戒せよ』との事です！」

「了解と返電してくれ。

コスモタイガーを全機帰還させる。戦隊全艦集結、信号弾撃て！」

40分後、13TFは『水無瀬』を先頭に、第6艦隊から指定された空域に近づいていた。

第6艦隊からの指示は、

「敵艦隊の中から南極方向に極めて低速で離脱した艦船を搜索し、捕獲又は撃沈せよ」

というものだ。

山本らコスモタイガー隊はずっと管理局側の護衛にあたっていたため、現在はアラートで待機中だ。

問題の謎の艦船は低速で離脱しており、戦闘で指揮系統か機関部に致命傷を受けているとみられており、できれば乗組員を収容して、事情聴取なり尋問なりを行いたいというのだ。

まあ、我々は敵艦隊との戦闘には参加せず、“接客業務”を行っており、殆ど消耗していないのだから当然と言えば当然だろう。

一連の戦闘では、敵艦隊は一部が太陽系外に逃亡したのみで、旗艦を含む大部分の艦艇はデブリと化したか放棄されたようだ。

放棄されたらしい艦艇の中には大型空母も含まれており、既に工作部隊が向かっているという。

我々は、艦を放棄するにしても、敵に回収されないように他艦に攻撃させるか、波動機関を暴走させる自沈措置を行うし、艦が占拠された場合は、決められたパスワードを打ち込むことで、遠隔操作で自沈させることもできる。

しかし、良し悪しは別として、白色彗星帝国にはそういう発想はないらしい。

まあ、おかげで我々もそれらの艦艇を編入したり、解体溶解して新造艦船の資材に転用したりできるのだが。

「艦長、『水無瀬』が、漂流中の艦船1隻を発見！映像データ、開きます！」

「
……」
「
……」
「
……」

メインスクリーンに映るそれは外殻に無数の穴があき、煙の尾を引いて戦闘区域から慣性だけで遠ざかっている。

「誰何は続けているか？」

「はい。しかし応答はないとの事です」

少し置いてから冴子は指示を出す。

「まずは生命検索が先決だな

搜索隊を「艦長、『水無瀬』から、篠田副長指揮の搜索隊が出勤します」「搜索隊を編成しようとしたところ、既に『水無瀬』では副長の篠田率いる搜索隊が準備を整えたとの連絡が入った。

「……わかった。では搜索隊は『水無瀬』と本艦からとし、『伊吹』
『鳥海』は周辺監視。」

搜索隊の全体指揮は篠田副長とする」

「わかりました。本艦からは私が」

即座に大村が志願した。

「わかった。しかし無理はするなよ」

「承知しております」

大村は敬礼すると艦橋を駆け出ていった。

冴子はスクリーンに目を戻し、しばらくボロボロの不明艦船を見ていたが、ポンと掌を叩いて宣う。

「……よし、あの不明艦船を、『仮称・コックローチ』級『コックローチ1』とする」

「」

「」

「」

「……お前……」

ブリッジクルーと司令長官秘書は絶句し、居合わせた2人の同期生は呆れた表情になった。

『伊吹』艦橋

「……ストレート過ぎるくらいがあるが、言い得て妙だな」
「確かに、スリッパで潰されたアレに似ていますね」

『水無瀬』艦橋

「言われてみれば、触角と脚をもがれて素焼きにされたゴキちゃんに見えますね」

「……まあ、そうね……（その喻えもどうかと思うわよ、イヴ）」

『鳥海』艦橋

リンディは頷くと、

「その分だと、一晩位じゃ語り尽くせないみたいね……。それじゃ、まずは貴女達が不在の間の管理局の事から話しましょうか……」

リンディとクロノは交互にこの数ヶ月の間の出来事を話していき、フェイトとティアナは愕然とした表情になっていく。

「初めは新たな有人世界発見というだけだったんだが……。相手をよく確認しないまま、一気にロストロギアの回収にまで及んだのがそもそものミスだった……」

結果、ディンギル艦隊との戦闘で、管理局は最大最新鋭のXX級『エル・グランド』を含む艦船多数を失っただけでなく、戦闘の余波で海上支部まで重大なダメージを受けた。そして失われた人命の何と多いことが。

ディンギルは管理世界に見せつけるように公開処刑すら行ったという。

さすがにその映像は最後まで見ることはできなかった。

「それで、本局はどう出るつもりなの？」

「……次元世界積極拡大派はディンギル帝国への討伐艦隊を出すべきと声高に主張しているが、陸や管理世界政府の多くは反対している。」

無論、母さんや僕、レティ提督も反対だ」

「悔しいですけど、そのご判断は正しいと思います」

ティアナはクロノに賛意を示し、フェイトも頷く。

「恐らく、ディングル帝国も正規の宇宙軍を保有していると思います。」

例えば、地球防衛軍の艦船を標準にして考えても、通常空間における管理局の艦船の能力は沿岸警備隊の中型巡視船並みではないでしょうか……」

「……平和への思いで私達管理局が負けているとは思わないけど、大半の管理局員には殺し殺される覚悟で戦う覚悟はないし、所謂特殊部隊のメンバーも、自分達が殺される覚悟までは持ってないんじゃないかな。圧倒的に不利な条件下で戦う事は極めて少ないからね」

フェイトの言葉にクロノとリンディは考え込んだ。

「……陸からは、質量兵器の一部解禁を求める声が上がっているし、ミッドやヴァイゼンではアインヘリアル再配属を、現地政府と地上本部が強く要求している。」

前者はともかく、後者は一連の艦船喪失のおかげで、今度ばかりは“海”も強くは反対できないだろうな……」

クロノの口調には些か苦さが混じっていた。

第171話『ゴキ〇リ探査』（前書き）

利子付きでも嫌な寸劇

ティアナ

「ふざけんじゃねーわよ、あんのク〇提督……！」

スバル

「ティ、ティア？　口調がすんごく怖いんだけど？」

なのは

「そ、そうだよ、ティアナ。

一体どうしちゃったの……！」

フェイトちゃん、何か知ってる？」

フェイト

「十中八九、嶋津艦長の影響だね……！」

なのは

「ふーん、そうなんだ……。」

しっかりお話聞かせてもらわないとね？　レイジングハート」

レイジングハート

『……マスター、背後をご覧下さい……』

???

「来てやったぞ、お話とやらを……」

なのは

「え？」

……なののはの背後には、「代理」と大書した襷を掛け、目漬しピ―スをした高町雪菜が立っていた……。

第171話『ゴキオリ探査』

不審船『コックローチ1』こと時空管理局『SS-03』艦内

「誰かいないか!？」

『水無瀬』副長の篠田が指揮をとる捜索隊はレーザー突撃銃やコスモガンを携えながら、日本語と英語、ドイツ語で生存者を求め声を張り上げる。

英語のみならずドイツ語も取り入れたのは嶋津冴子の指示による。

「……時空管理局がまたそろちよつかいを出しに来た可能性がある」

『相模』が遭遇した『レム』『レオニダス』から回収した管理局の資料で、公用語として使われているミッドチルダ語は英語と、ベルカ語はドイツ語と共通点があるからだ。

さらに、先刻の白色彗星残党艦隊に起きた突然の混乱は、冴子と真田が仕掛けた“穴”にまんまと嵌まった管理局の艦船がど真ん中に空間転移したせいではないかと考えたのだが、だとしても、管理局にこちらを責める権利はない。

地球側は『クラウディア』『ラットバルド』以外の艦船が太陽系内に進入することを認めておらず、未登録の艦船については不審船として対処する旨を通告しており、リンディ・ハラウンも異議を申し立てなかったからだ。

「嶋津、もし管理局の艦だったらどうする?」

「そりゃあ、データだけいただいで頼つかむり。だな。
……どうもありゃあ、真つ当なフネとは思えなくてな」
「……確かにな」

守、冴子ともに、“鷲”“燕”と呼ばれた一流の宇宙戦士である。
何度も修羅場を潜り抜けてきた戦士の勘が、目の前の艦の生臭さを
感じとっていた。

たとえ、私人としてはマダオであろうと、だ。

「……っ、へぶしっ！ツチキショー……」

（くそ、参謀本部の肛門狭窄症どもだな……）

「……嶋津、お前な……」

「……」

『相模』艦橋に女らしさとは程遠いくしゃみが響き、それにツッコ
む同期の高級参謀と呆れ顔の技術将校がいた。

場を戻そう。

篠田達は慎重に人命検索を進めていったが、乗組員は皆絶命してい
た。

喉を掻きむしったり、失禁している者が多く、艦内空気の減圧によ
る窒息死と推定されたが、

「……嶋津艦長の読み通りでしたね……」

「そつだな……」

搜索隊の次席指揮官である大村耕作が篠田に告げ、篠田も賛意を示
した。

倒れている者は皆、色違いだが時空管理局次元航行本部の制服である他、バリアジャケットと思いき変わった服装をしており、傍らに杖や刀剣形のデバイスが落ちていた。

「ただ、ガキや女は乗ってないようだな……」

「そうですね。まあ、今のところ、前よりは気が楽ですがね」

時空管理局は女性も数多く勤務しており、先の『レム』や『レオニダス』も、乗組員の四割は女子・女性クルーだった。

しかし、この艦は全乗組員が男で、見た限りでは皆が20歳以上のようで、篠田・大村とも、時空管理局にしては特殊ではないのかとの感想を持った。

「……こちら篠田。現在のところ生命反応はなし。」

時空管理局らしき制服を着た男と、魔導師らしき男の遺体を確認した

「……こちら八夕坊（『相模』）。」

了解しました。十分注意して人命検索と救出に当たって下さい」

「……………」

篠田の報告を聞いた冴子・守・真田は渋面になり、心の中で合掌した。

（……………のこのこ出て来なければ、あんな目に遭わずに済んだのに…

…）（x3）

捜索隊は大村が率いる艦橋組と篠田が率いる深奥部組に分かれて人命検索を続けていた。

篠田ら深奥組は一層下のデッキを奥に向かっていたが、開いているドアから中に入った時、息を呑んだ。

「これは……？」

「無人戦闘メカのようなだが……。
ここに人はいないようだ。何機か撮影しておけ」

篠田は隊員にメカを撮影しておくよう指示すると、人命検索を続行した。

篠田達が発見したのは、JS事件の後に時空管理局が導入した無人戦闘ガジェットドローンで、元を正せばJS事件の首謀者ことジェイル・スカリエツィが開発した無人兵器を管理局が接收し、再設計したものだ。

無論、これも地球防衛軍が接收し、徹底的な調査の後、地球規格による軍用・民需用のガジェットドローンが製造される。

搜索は1時間余りで打ち切られた。

艦内空気の流出が著しく、とても生身での生存が望めないと判断されたからだ。

『……以上が、取り急ぎの報告事項です』

「お疲れ様。あとは工作艦に引き継ぐので、全員撤収を」

『わかりました』

篠田からの報告を受け、冴子は芳いの言葉とともに総員撤収を指示した。

「やはり、生存者はいなかったか……」

「言っちゃ悪いが、彼らの艦船の艦体強度はかつての『ゆきかぜ』等を下回る。」

「発被弾すればたちまち内部にもダメージが及んだだろうな」

「……それに、案の定、叩けば埃が沢山舞いそうだな、あのフネは」
「案外、管理局も一枚岩ではないのかも……」

ガジェットドローンはともかく、ブリッジや士官室等から大村達がいくつかの資料を回収しているので、帰路に目を通すことにした。

『クラウドディア』 艦長執務室

「どづいこと？それ……」

フエイトは義兄のクロノに問い質した。

「というのも、本局到着までは『クラウドディア』乗組員との接触は避けるように、とクロノから指示されたためである。」

「向こうの地球は真冬だったけど、インフルエンザ等の伝染病には全然感染していないんだよ、私達は」

「……………」

ティアナも同感であると表情で語っていた。

「……………管理外世界の病原体持ち込み防止というのが表向きだが、要は、向こうの地球での事を余り喋ってくれるな、ということだ」

「……………管理局の思想に靡きそうにない世界の事を広められては困る、

というわけですね」

「ティアナ、手厳しい事を言うな、君は……。しかし、要はそういうことなんだ」

些か苦い表情でクロノが管理局の真意を口にした。

（そういうことが。

……だとすれば、一層遠方世界や凶悪な事件を任されることになる、か……）

（フフン、随分と疑い深いことで。

皆、昨日今日管理局に入ったわけじゃないのにさ。

……ホント、ケツの穴がちっちゃい連中ね。

生グリセリンでもブチ込んでやろうかしら……）

内心で激しく毒づいたティアナだが、滞在先での保護責任者だった某マダオ女史の影響を受けていることには気づくのは少し先のこと。

第172話 『組織なんて大して変わらないのよ』 (前書き)

復路出発前のひとコマです。

第172話 『組織なんて大して変わらんよ』

海王星空域 『相模』 格納庫

「で、結局持つて来させたわけか……」

「ああ。とても興味深いものだからな」

「……………」

呆れた口調の参謀としれつとした技術将校、苦笑する副長とエースパイロットがいた。

彼らの目前では、巨大なカプセル型をした物体　　ガジェットドローン　　が台車に横たえられている。

技師長は、魔法の世界の産物に興味津々らしい。

「お前、『ヤマト』の改装はどうした？」

「使える者は親でも使っさ。」

それに、ヒントはどこに転がっているかわからないからな」

「……………あつ、そう……………」

技術者・真田志郎の恐るべきところは、素人の思いつきすらも無視しないところだ。

数ヶ月前、『ヤマト』が復讐鬼と化していたデスラーに追い詰められた時、新人クルーの独語同然のアイデアを即決で採用し、窮地を脱してみせたのは一つの事例だ。

なお、真田の才能は軍事面に留まらず、懇意にしている中島真理亜夫人や高町雪菜らとの“共同発明”による台所用品等の日用品

にまで及び、特許を何件か取得しているほどだ。
因みに特許料等は、共同発明者の意向もあつて、戦争孤児育英事業等に充当されている。

『相模』艦長室

13TFは海王星空域に留まっていた。

あとは地球に戻るだけなのだが、白色彗星残党との戦闘を避けて安全空域に待避していた地球・火星行資源輸送船団の護衛任務を命ぜられ、船団の集結を待っているためだ。

戦闘終結からまだ時間が経っておらず、残敵による奇襲を受ける可能性が払拭できず、護衛部隊のフリゲート艦だけでは些か心許ないための措置だ。

まあ、“万事屋冴ちゃん”としては一向に構わないのだが、待機時間を浪費しているわけではなかった。

真田は格納庫の一角に作業スペースをこしらえ、『相模』の工作班員を徴発して件のガジェットドローンの調査を始めていた。

古代 守と森 雪は士官食堂を借りて、リンディ・ハラウンから預かった藤堂長官宛の“親書”の内容を吟味しているが、2人とも一様に難しい顔をしていた。

そこへ。

「……2人揃って、眉間に皺寄せてどうした？」

「義兄貴はともかく、義妹は皺作るにはまだ早いだろうに」

「……………」

その言葉の主、冴子を胡乱気に見上げた守は、無言で手にしている紙 親書 を差し出した。
読んでみるというのだろう。

冴子は早速それに目を通し始めたが、ほどなく無然とした表情になる。

やがて、親書を守に返しながら、一言だけ口にした。

「……………これ、親書の意味あんのか？」

漸く。もとい要約すると、

？お互いの存在を認知した以上、無関係・無関心というわけにはいかない。

何らかの形で交流を始めたい。

？我々時空管理局は、あまねく次元世界に存在するロストログアという古代の危険物を回収し管理している。

ロストログアは一つの世界を滅ぼしかねない危険極まりない物である。

については、そちらの世界にもロストログアが存在する可能性があるので探査し回収を考えている。

については全面的な協力を要請する。

？次元犯罪者の捜査・犯人引き渡しに関する話し合いをしたい。

「……いつもこういう調子で活動してるのか？管理局は」

「勝手に魔法を使うべからずとか、山のように条件をつけて回答することになるだろうが、果たして連邦政府が相手にするかな……」

「……魔法使用に制限をつけられたら、あちらさんはいい顔しないだろうよ。」

とはいえ、町一つを消し飛ばせるような魔導師だっているわけだからな。魔法文化がない世界にとっては、歩く戦術核みたいな連中こそが脅威なんだがな……」

「交流を持つのであれば、事前にとことん意見交換する必要があるですね」

地球連邦は時空管理局や管理世界の主権に干渉するつもりは毛頭ない。

従って、その逆も同じ事だ。地球連邦の主権に対する干渉は受け付けない。

質量兵器 非魔導兵器 の全廃などは、地球からすれば噴飯もの以外の何物でもない。

それさえクリアすれば、ゆっくり交流を進めていく事もできるだろう。

「ところで、あの艦では何か解ったのか？」

『コックローチ1』について質問してきた古代 守に、やや間を置いて冴子が応える。

「詳しくは地球での解析待ちだが、管理局にも闇が存在するのは間違いないな」

「と、いうと？」

「そもそも艦全体が黒で、ゴキブリみたいに凹凸が極端に少ないくせに、しっかりアルカンシエルは装備してある。」

それに、艦の規模からして機関室のスペースが大きい。管理局艦船の中では航行性能が優れているんだろう。

……考えられるのは、ステルス特性を活かして目標近くに転移し、アルカンシエル或いは突入部隊で目標を短時間で制圧か殲滅し、証拠を残さず直ち撤収して空間転移するような強襲殲滅艦といったところか。

もつとも、今回は相手が悪過ぎたようだが……」

「そんな艦が、わざわざここに来る理由は……？」

雪が緊張した口調で質してくる。

「……断言はできないが、ハラオウン母子を消すためではないだろうか？

『レム』から回収された資料から推測するに、あちらさんには本局と地上総本部の間に深刻な対立があるし、さらには本局内にも対立があつて、リンディ・ハラオウンはその一方、いわゆるハト派と言われる側のリーダー格らしく、管理外世界に妥協的だと批判する声が少なからずあるようなんだ」

「……ということは、タカ派もいるんだろうな」

守も自分なりの推測を口にする。

「そついうこつた。

ここから先は全て私の想像、あるいは妄想だな。

あのゴキブリを差し向けた連中は、ハト派リーダー暗殺の罪を我々になすりつけるつもりだったんじゃないのか……？」

「……目的は？」

「対立派閥の頭目格を合理的に消す。そして、最終的には地球連邦を管理下におき、防衛軍の軍備や技術を手中に収める……とかな。

もつとも、まさか本当に“コ〇バット”に引つ掛かるとは思わなか

つたが……」

「お前らしいブラックジョークと言いたいが、ジョークと断言しきれんところが手に負えんな……」

「私もさ。とても笑えんよ。」

ウチらが管理局に戦力で劣るとは思わないが、相手を侮った挙げ句に元も子もなくすという体たらくは、ガミラスと白色彗星が実証しているからな。

……それに、内部対立を抱えているのはウチらも大して変わらないだろう？」

「……確かにな」

組織あるところ“派閥”あり。

一枚岩のように見える地球連邦・地球防衛軍にも、深刻ではないが対立の種は存在する。

代表的といえるのが、ガミラス戦後における連邦政府や軍内部での主導権争いだ。

最初の核被爆国だった日本が、相対的ではあるが、最も被害が軽かったこと、イスカンドルからの使者に最初に接触したのが日本人の軍訓練生（古代進と島大介）だったこと、波動エンジンを搭載して早期に出発できる大型宇宙船が『ヤマト』しか存在せず、かつイスカンドルまでの航海が多大な犠牲を払いながらも成功したこと。

さらに『ヤマト』に続いて波動エンジン搭載戦闘艦を早期に揃え、内惑星圏（水星、土星圏）を掌握したのが日本、それに隣国として一枚噛んだ韓国と中国だったことが、新生・地球連邦政府と地球防衛軍の主導権を誰が握るかを事実上決定づけた。

連邦政府の方は、旧アメリカ大統領が初代連邦大統領に就任したこともあってか、それほどの対立はないが、軍は、最高司令長官や防衛艦隊司令長官は日本人が就任し、主要なポストのあちこちにも日

本人や韓国人、中国人が座るようになったが、それを快く思わない者達も存在する。

代表的なのが北米州を中心に少なからず存在する、白人優位・至上主義者だ。

別に旧アメリカ・カナダが政治的・軍事的に致命的なミスを冒したわけではなく、ニューヨーク等の主要都市が真つ先に全滅させられたり、完成間近の『アイオワ』級移民戦艦を破壊されたりとアンラッキーが重なってしまったわけだが、一部の極端に視野が歪んだ者は、日本とガミラスが密約を結んだとまで言い出す始末だ。

それでも対立が表面化しないているのは、ガミラスや白色彗星帝国のような全人類の敵が存在しており、地球人同士で揉めているところではないということがわかっていたため、それらの先鋭的な言論は自制されているが、いざ平和が長く続けば、対立が表面化しかなない。

「もっとも、内輪揉めも平和なればこそできる業さ。

こっちに深入りして、鱗みたいな連中に噛みつかれてほしくはないんだがね、管理局には……」

「ん……」

「そうですね……」

資源船団の再編成作業が済んだとの連絡が入ったのは10分後だった

第172話『組織なんて大して変わらないのよ』（後書き）

今回は管理局サイドのひとコマです

今後、不定期寸劇は後書き部分に書きますので、読者様の自己責任においてご覧下さいませm()m

早くも暑い日が始まりました。皆様御自愛下さいませ。

第173話『付き合い方』（前書き）

管理局サイドの話です。

でも、2人しか出てゐません……。

後書きは寸劇です。ご希望の方のみご覧下さい。

第173話『付き合い方』

時空管理局本局

人事統括官のポストにいるレティ・ロウランの執務室にいるのは、レティと航空戦技教導官・高町なのはの両名。

航空武装隊本部での用務を終えたなのはとレティが鉢合わせし、こうしてレティのオフィスにいるのだが。

「フェイトさん達は無事『クラウドディア』に移乗したわ。

既に次元巡航に入ってて、予定では明後日の23時に帰還するそうよ」

「そうですか、良かった……」

ほっとするなのはに優しいげな視線を送り、レティは続ける。

「念のため、メディカルチェックと色々な報告が先になるから、ミッドに戻るまでにはさらに2〜3日かかるけど、来週末は一度帰宅できるはずよ……」

「ありがとうございます」

レティは紅茶を一口啜ると、改まった口調になった。

「……これでひと安心だけど、問題はこれからよね」

「そうですね……」

フェイト達を保護していた「第197管理外世界」こと地球連邦とどう付き合っていくのか、管理局は難しい選択を迫られている。

これまでの管理外世界は、文明・科学技術レベルが時空管理局や主な管理世界を下回っていたが、かの世界の文明・科学技術レベルは管理世界と同等かそれ以上と推定されていた。

例を挙げれば、『レオニダス』で遭難負傷し、一時は重態だったシヤリオ・フィニーノのカルテを地球側から提供してもらい、医務官のシャマルに見せたところ、管理世界では後遺症が残っていてもおかしくないレベルの重傷だとの回答が帰ってきた。

にも関わらず、シヤリオは『ヤマト』での外科手術と療養、地球防衛軍病院での治療とリハビリで後遺症の心配すらないほどの回復を見せており、管理局の医務官達は少なからず衝撃を受けていたのだ。

そして国防軍たる地球防衛軍は、XX級すら歯牙にもかけないような宇宙戦闘艦を多数保有している。

もし彼らが次元世界に乗り出してきたら、管理局が築いてきた世界秩序に重大な影響を及ぼしかねない。

故に“海”の高官の中には、あの世界の軍備を接收すべきと主張する者が少なからずいるが、最前線に立つ次元航行艦の艦長や乗組員達からは反対の声が意外なほど多く、同じ本局の航空本部も難色を見せていた。

ましては本局と険悪な地上本部は言わずもがなの冷笑。これではどうにもならない。

「地球連邦と地球防衛軍は、管理局の法秩序を受け入れる気はないんでしょね……」

「拗って立つものや戦う相手が違うからね。」

それに、管理局が地球防衛軍に代わってあの世界を守れる力や覚悟があるとは思えないし、向こうとは一度険悪になりかけたでしょう？」

「はい……」

レティはエルスガールの勇み足の一件を口にしていた。

管理局員としての誇りを持つのはいいが、端から管理局の価値観を押し付けたところで、喧嘩になるか無視されるしかなく、事実、地球防衛軍の将校からは痛い目で見られていた。

「あの世界を他の管理外世界と同列視しては痛い目に遭うだけ……。というより、他の管理外世界に対しても優越意識を捨て去らないと、これから出会うであろう世界から相手にされなかったり、痛い目に遭わされるわ。」

「……問題はリンディが預かった親書だけど、どんな内容なんだか」「親書、ですか？」

当然ながら、なのははリンディが地球連邦大統領と防衛軍司令長官宛の親書を携えて行った事は知らされていない。

「ええ。ただ、リンディも私も親書の内容は全然知らないのよ。ラブレターのもりが果たし状と受け取られるような内容になっくなきゃいいけど……」

なのはは少し考え込んでいたが、ゆっくりと話し始める。

「……レティ提督、私は地球の両親や学校の先生から、

“手紙や新聞は、書かれている文字や画像だけ見ていては本質を見

失う。

行間や文字の間に隠されているものを読み取れ”

と教えられました。

むこうの地球でも同じような教えがあれば、当然行間に隠されたものを読み取るうとするでしょう。

……親書の本音が地球防衛軍に対して質量兵器廃止や武装解除を求めるものだったら、向こうは当然そっぽを向きますよね。

そうだったら、管理局と管理世界は事実上孤立してしまうのでは……？」

「全然飛躍してなんかいいわよ。

現に強力な宇宙軍を持つ世界で話ができそうなのは、今のところ地球連邦しか存在しないもの。

そこまで敵に回したら、管理局は崩壊。管理世界も蹂躪されかねない。

その時になってから助けを求めても、どうにもならないわね。

理想を貫いて滅ぶか、理想を捨てても生き延びて戦うか……」

「……………」

管理局を体現する魔法戦闘や次元航行艦では、ディングルみたいな皆殺し集団には到底通用しない。

一方、地球防衛軍やガトランチス帝国軍等が運用している宇宙戦闘艦ならば互角に戦える可能性があるが、それを導入するには管理局法を変えなければならぬ。

何しろ魔法に関係ないのだから。

しかも、管理局にも管理世界にも非魔導戦闘艦を建造するノウハウは残っていないし、たとえ艦船だけ造っても、運用する人材がいなければ話にならないが、こちらのノウハウもない。

何より、殺し殺される覚悟を持って戦う兵士、否、宇宙戦士と呼べる人材をゼロから育成しなければならぬが、そもそも教育する者がいないのだ。

「お付き合いしたいなら、まず友達にならないということ伝えればいいんだけど、まさかいきなり、ロストロギアを探させるなんて書いてなきやいいけど……」

「……」

“お友達になりたい”

かつて、なのはがフェイトに語りかけた言葉。

個人と組織・国家では付き合い方も違うだろうが、友誼を結びたいのなら、まず胸襟を開かなければならない。

親しくなる前から色々な条件や要望を突き付けられ、真意を疑われる。

まずは互いの抱える事情を理解するところから始めなければならぬ。

「こちらの魔法の事も……」。

と、そこまで考えて、なのはは重要な事に思い至った。

「提督、地球防衛軍は私達の世界に魔法文化が存在することを掴んでいるんでしょうか……?」

すかさずレティは答えた。

「……知っている可能性はかなり高いわね。」

『レム』を調査分析すれば自ずと知るでしょうしね。
それに、管理局のかなりの部分まで筒抜けになったかも知れないわ。
それでも、こちらと顔を合わせた時は至って普通に振る舞ったんだ
から、端から魔法を信じていないか、魔法を率直に受け止めている
のかのどちらかね」

なのはは考え込む表情になった。

「だとしたら、上層部が放っておくでしょうか……？」

「……下手にちよっかいを出したら焼け死ぬのが目に見えてるから
ね。どうにもならないでしょ。」

「……もっとも、地球側も皆ああいいう人達ばかりじゃないでしょうか
らね。」

簡単に距離は縮まらないでしょうね……」

向こうの地球も魔法文化は存在しないだろう。

となれば、魔法はファンタジーかオカルト扱いに等しい。

定期通信の時、決まって同席していた嶋津冴子・古代兄弟・真田志
郎・森 雪らは“話せる”相手だろうが、それ以外の軍人や政治家
となるとどうだろうか。

端から管理局に警戒心を露わにしてくてもおかしくないのだ。

（でも、そういう人達が相手だからこそ、逃げるわけにはいかない
ね。

私達魔導師や管理局の事を知ってもらうと同時に、向こうの人達の
思いを知らなければダメだね。

……まずはフェイトちゃん達が向こうで何を見聞きし、考えたかを
知らないか……）

管理世界しか知らない魔導師には難しいが、自分とはやては世界こ

そ違え、同じ地球人なのだ。

まず自分達が知ろうとしなければ何も始まらない。

もっとも、海鳴市のみならず、もう一人の自分の遠い子孫がいること、なのは自身が啞然とすることになるのだが。

第173話『付き合い方』（後書き）

懲りない寸劇

嶋津冴子

「君らは幾つになった……？」

リリカル3人娘

「20歳になりました」

冴子

「そうか……」

では一言だけ言っておく。

……20代なんてあつという間さ。

年々坂道を転げ落ちるように年齢が増えて、気がいたら三十路の仲間入りだからな。

私なんか、私なんか……

ガミラスとの戦争で始まり、白色彗星との戦争で終わっちゃったんだ
！！

バカヤロー！鼻……じゃなくて花の20代を返せ

！！（慟哭）

はやて

「何や、JS事件がごつつ可愛いものに思えてきたわ……」

なのは

「何だかんだ言って、次元世界って平和だったんだね……」

フェイト

「だから、この世界の犯罪者が半端者にしか見えないんだよね。」

捕まえたらモヒカンにして、下の毛全部剃ってやるのかな……」

はやて

「何気に恐ろしい事言ってるわ！」

なのは

「にやははは……。」

次回はタイタン寄り道話だそうですよ」

第174話 『ゆきかぜの眠る地』 (前書き)

幾分短いです。

第174話『ゆきかぜの眠る地』

2199年7月、冥王星空域、地球防衛軍第3艦隊駆逐艦

『ひびき』

嶋津冴子、大村耕作らは、火煙に包まれながらも前進をやめない僚艦『ゆきかぜ』から目を離さずにいた。援護のミサイル1発すら撃てずにいる自分達の腑甲斐なさに悲憤しながら。

「『ゆきかぜ』爆沈……！」

「っ……」

ブリッジクルーから痛憤の呻きが漏れる。

『ゆきかぜ』艦長の古代 守は冴子の同期生。他にもあの艦に友人や兄弟、親戚が乗っている者がいるのだから無理もないが、『ひびき』艦長である冴子は生き残った乗組員の命に対する責任を果たさなければならぬ。直ぐさま艦内電話をとる。

「……機関長、エンジンはどこまで保ちますか？」

「……火星までは何とかしますが、月に行く迄に間違いなくお釈迦ですね。伝導管のスペアさえあれば……」

「……行ける所まで行きますから、それまで保たせて下さい」

「……了解」

機関長への指示を終え、冴子は大村に向き直る。

「最終的には旗艦に移乗することになるだろうが、ともかく戻れる所まではこいつ（ひびき）で戻るぞ」

「わかりました！」

地球に戻ったところで絶望的な状況であることには変わらないが、まだギブアップするつもりはない。と、その時だ。

「艦長、あれを！」

驚きの声を上げたクルーが指し示す先を、光の尾を引いた宇宙船らしきものが内惑星方面に物凄いスピードで飛び去っていった。亜光速は出ていよう。

「……ガミラスには見えなかったが、何てスピードだ。あれじゃ、ものの数時間で地球圏に達するぞ」

呆れた声を上げた冴子だが、数日後、彼女達が移乗した『英雄』に、火星基地から訓練生の古代 進と島 大介も合流。運命は大きく変わることになった。

現在、土星圏・衛星タイタン地上

氷に閉ざされた大地に、息絶えた『ゆきかぜ』の骸が横たわっている。

「……………」
「……………」
「……………」

古代 守は2年7ヶ月ぶりに、変わり果てたかつての乗艦に向けて敬礼した。

同道し、共に敬礼するのは『相模』から嶋津冴子と真田。『鳥海』副長のフランベルク・白百合・アリアだ。

真田は当時『ゆきかぜ』の整備主任技師で、冥王星域での艦隊決戦に際し、十分な整備ができないまま『ゆきかぜ』を出撃させてしまった事を悔やんでいた。

そして当時『ゆきかぜ』の航海士だったアリアは、その前の戦闘で重傷を負い、入院加療中だったため、結果として守を除けば唯一の生存者になった。

「……う、うう……ぐすっ……」

アリアは日頃の冷静さが影を潜め、早くも涙声になっている。

他の場なら自分の感情をコントロールできたのだろうが、戦友を抱いたまま眠り続けるかつての乗艦を目にしたのと、この場にいるのは皆、同じ傷を持つ者ばかりだったため、必死に抑えこんでいた感情が堰を破って一気に噴き出したようだ。

「皆、ごめん、ごめんね……！うああああ　っ！！」

「……………」

「……………」

「……………」

アリアが泣きじゃくる理由は、不可抗力とはいえ冥王星会戦に参加できずに“生き残ってしまった”事と、戦友の棺になった『ゆきかぜ』を訪ねる機会をつくれなかった事に自責と悔恨の念を抱き続けていた事だ。

守達は泣きじゃくるアリアをしばらく静かに見守っていた。

「そういうことがあったんですか……」

待機中のブリッジで、町田と三沢は大村から冥王星会戦のあらましを聞いていた。

2199年当時、町田は商船学校の学生、三沢は訓練生で、『ヤマト』就役前最後の艦隊決戦だった『第8次冥王星会戦』の事は公式記録でしか知らない。

何しろ、あの戦闘の生還者は『英雄』『ひびき』両艦の乗組員しかいなかったのに加え、生存者の大半も白色彗星戦役で没した結果、20名強しか生存していない上、士官クラスの生存者は守、冴子、大村だけなのだ。

あの戦闘は出撃した戦艦3隻、駆逐艦12隻のうち、帰還したのは旗艦1隻（『ひびき』は帰路、火星付近で放棄）という惨憺たる負け戦だったが、帰路、火星でイスカンダルからの重大なメッセージを回収した訓練生が同乗した結果が回り回って、地球は崖っぷちで踏ん張りきったという、大局的には大きな転機になった戦いなのだが、当事者にとっては失われた物が余りに多かった。

「……………ぐすつ……………済みませんでした。古代艦長」

「気にするな。少しは気が晴れたらろう？」

「はい……………」

エリアは守の職名を間違えたが、誰もそんな瑣末事にはこだわらなかつた。

というか、そこまで繊細な神経を持つ者は、この場に一人としてい

なかったのだ。

“ いい奴ほど早く死ぬ ”

“ 憎まれっ子世に憚る ”

とはよくぞ言ったものである。

横須賀市、中島家

「 ? 」

「 どうなさいました？ スターシャさん」（真理亜夫人）

「 いえ、何も……（どなたか、守の悪口を言っているようですね）」

『 クラウディア 』 艦長執務室

「 大気圏全体が AMF、じゃなくて アンチ・マギリング・エア AM A ! ? 」

リンディが心底驚いた声を上げた。

「 はい。私の魔導士ランクが D、フェイトさんですら B ランクまで落ちていました 」

クロスミラージュとバルディッシュが共に同じ結論を出していた。

「 ……原因は推測できる？ 」

「 そこまでは何とも……。 」

考えられるのは

? 元からこういう空気組成だった

？ガミラスの遊星爆弾攻撃の影響
？イスカンドルから齎されたコスモクリーナーによるリテラフォー
ミングの影響

のいずれかだと思うんだけど……」

「正に魔導師にとつての鬼門だな。

まあ、ちよっかいを出さなければいいだけの事なんだがな」

フエイトの推測にクロノが頭を左右に振りながら応える。

「しかし、下手をすると、上層部がそのイスカンドル製コスモクリーナーをロストロギア指定しかねないな……」

「既に地球製のデッドコピーや改良機が大量生産されていますし、地球の宇宙艦船には標準装備されているそうです。

それに、イスカンドル製のオリジナル機は、イスカンドルの王女殿下が命と引き換えに情報を齎し、『ヤマト』が数多の犠牲者を出しながら持ち帰りましたから、管理局が接收しようとするれば、間違いなく強盗団と見做されます」

「確かにその通りだわ。

血も汗も流さなかつた者が所有権云々で介入する権利なんてないわね」

溜息をつきながら続けるクロノに、今度はティアナが答え、リンデイが締めた。

「そもそも、地球は魔法文化がないし、現地の暮らしには何の支障もないんですから、私達よそ者の魔導師が目くじらを立てる事自体おかしいんですよね」

はい、ごもつともです、ランスター執務官補。

第174話『ゆきかぜの眠る地』(後書き)

そろそろインターミッションのお開きも考えんといけませんな…。

第175話『戻りました……』（前書き）

しばらく“回収エピソード”中心で、8月初め〜旧盆前には新章に入るつもりです……。

第175話 『戻りました……』

時空管理局本局次元港、第5バース

フェイト達の帰還の日程は伏せられていたため、出迎えはささやかなものだったが、当事者達にとっては十分なものだったろう。

「フェイトさん!！」

「ティア!！」

「シャリオ!！」

「エリオ、キャロ!！」

「スバル!！」

「お父さん、お母さん!！」

本局はミッドチルダの首都クラナガン標準時間を採用しており、深夜帯にあたるため、一人娘を置き去りにはできない高町なのはこそいかなかったが、八神はやて、シャマル、ザフィーラ、スバルにシャリオの両親、グリフィス・ロウラン、更に所属先の上司から半強制的に休暇を取らされたエリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエまでもが、『クラウディア』から下艦してきたフェイト、ティアナ、シャリオと再会を喜び合った。

大半は泣き顔で、スバルに至っては3人に続けざまに抱き着いて泣きじゃくったため、顔は涙と鼻水で無残な状況になったほどだ。

また、バースにこそ降りられなかったが、大半の局員はお帰りなさいムードだったのだが、フェイト達の帰還を苦々しい思いで見る者がいないわけではなく、第5バースを見下ろせる一室に、その主だった面々がいた。

「まんまと帰ってきおったか。女狐に犯罪者の小娘が……」
「あの程度の奴らを仕留め損なうとは、あの役立たずどもが……！」

彼らは特殊次元航行艦SS級 地球防衛軍からは某生活害虫扱い
されてしまった 5隻を極秘に派遣し、何かと反りが合わない対
立派閥の頭目の1人であるリンディ・ハラウンを葬り去り、その
責任を第197管理外世界 地球連邦 になすりつけて窮地に
追い込み、最終的にはかの世界の管理世界編入と軍備の接收 管理
局の戦力化を目論んでいるのだが、結果は『クラウドディア』『ラッ
トバルド』は無事帰還。その一方で派遣したSS級は5隻全てが消
息不明という有様だ。

『クラウドディア』からの報告では、地球側と合流した直後、ガトラ
ンチス帝国軍艦隊が太陽系に侵入してきたが、待ち構えていた地球
艦隊と短時間戦った末に壊滅したとのことで、SS級はこの戦闘に
巻き込まれたのではないかと予測されたが、真相を問い質そうに
も、地球側は事前に『クラウドディア』『ラットバルド』以外の艦船
が太陽系内に進入した場合、たとえ管理局の艦船でも不審船として
対処すると通告してきた上、SS級自体が公式には存在していない
艦船であるため、知らぬ存ぜぬで通されればそれまでだし、逆に地
球側に付け込まれかねない。

それより何より痛いのは、表沙汰にできない汚れ仕事をこなしてく
れた“裏”の精鋭が艦船もろとも失われてしまったことだ。

管理局では極少数の殺傷設定や殲滅戦闘が可能な部隊の一つなのだ
が、何らなすところなく行方不明になってしまったのだ。

彼らは殺す事には慣れていても、自分達が殺される覚悟はなき
に等しく、覚悟がないのに戦場にしゃしゃり出てきた者の典型的な

末路である　と、当時『相模』副長だった大村耕作が航海日誌に記入し、艦長だった嶋津冴子が引いた赤いアンダーラインが残されている。

火星空域、パトロール艦『水無瀬』

『水無瀬』は『相模』『伊吹』『鳥海』と一時離れ、一路地球に向かっていった。

時空管理局からの親書を預かった古代　守と森　雪、白色彗星帝国や管理局艦船の残骸調査の仕事が増えた真田志郎の3人は急ぎ地球に戻るため『水無瀬』に移乗した。

一方、他の3隻は土星で船団護衛任務を解かれ、そのまま海王星方面にとんぼ返りしていた。

先の戦闘で損傷した第6艦隊の艦船は重傷者と共に地球や火星に戻って修理を受けるため、その穴埋めが13TFに命じられたのだ。

最大巡航速力で地球に向かう『水無瀬』で、雪は別室で長官宛のレポートを作成中。

守と真田は『コックローチ1』から回収した資料の一部に目を通していた。

「……いいコ達だったな」

「そうだな……」

入院していたシャリオは別としても、嶋津冴子が保護責任者だった

フエイト・T・ハラウンとティアナ・ランスターの評判は良かった。
魔導師としてではなく、魔法文化がない地球では魔導師の力量を量りようがない、1人の人間としてだ。

「ただ、俺達が言うのも何だが、生き急いでいるようにしか思えないんだがな、彼女達は」

「ん……」

地球防衛軍は満15歳に満たない者は入隊できない上、早い者は16・7歳で配属されるが、あくまで後方での任務であり、宇宙戦士等の戦闘を伴う危険な任務に就けるのは満18歳以上と決められており、ガミラス戦役中もこれだけは変更されなかった。

翻って、フエイト達の話聞いた限り、時空管理局では、魔導師なら10歳未満でも戦闘任務に就くことがあるという。

防衛軍本部の背広組が露骨に嫌悪感を示したのもまさにそれで、向こうには向こうの事情があるにせよ、本来なら守られるべき、事の本質を見る目ができているとは考えづらい。管理局員も地球人とほぼ同一のヒューマノイドと断定されている。子供を危険な任務に投入するのもさりながら、魔導師資質が高いというだけで、年端もいかず、死の概念すら実感していない子供を士官にするのは理解の必要すらない。

あげく、戦闘を絶対数が少ない魔導師に依存しているから慢性的な人材不足に悩まされ、魔法文化がない惑星の、たまたま魔導師資質を持ち合わせた子供にまで食指を伸ばした事実。信じ難いが、もう一つの地球で実例があり、当事者は士官として活動中。に至っては、軽蔑に値するとまで言い、今後一切、時空管理局と関わるべきではないと主張する者も少なからずいた。

また、時空管理局が治安維持を担当する各世界 地球側にすれば
惑星 での治安も、地球連邦と比べると決して良好とはいえない。

管理局をして“次元の海の中心世界”と位置付けているミッドチル
ダという惑星の治安は、平均すると20 - 21世紀のニューヨーク
ときほど変わらず、寧ろあの当時の東京23区内の方が遥かに安全
だったし、絶滅戦争で人口が激減してしまった分、当局の目が行き
届くようになった現在では、相対的に治安が良くないと評価されて
いるリオデジャネイロ等、中南米やアフリカの都市ですら、ミッド
チルダの首都クラナガンより犯罪発生率が僅かながら低いのだ。

単純比較はできないにしろ、質量兵器追放の行き過ぎと魔導師人口
の不足が負の連鎖を引き起こしていると推定された。

実際には、非魔導師局員の場合、トンファー等の携行打撃武器
や、許可を得れば実弾拳銃程度の携行は可能なのだが、周囲の無理
解も手伝ってか、携行する者は極少数の者に限られていた。

しかし、第197管理外世界こと地球連邦では、半世紀以上も前に
レーザーガンが実弾銃にとって替わったと知った“陸”の高官がこ
れに興味を示し、物議を醸すことになる。

話を戻そう。

「……とはいえ、『レクサス』といい、今回のゴキブ〇級といい、
彼女らとはまた別の考えを持っている者も少なからずいるんだろう
な……」

「それはこっちも似たようなものだろうさ。」

違うのは、こっちは主に外患、あちらさんは内憂ということだな」

時空管理局も地球防衛軍も、それぞれ難問を抱えている点ではさほど変わらないのであった。

第176話『宮仕えは要領なの？』（前書き）

関東も『梅雨明けしたと見られる』宣言が出ました。

あまりの暑さに、厨房以来のスポーツ刈りにしました。
色んな意味ですっきりしましたよ、毒男は。

最後の一節は『涼宮ハルヒちゃんの憂鬱』の“お正月の牧羊犬”を
イメージしてみました。

第176話『宮仕えは要領なの？』

時空管理局本局・第1会見所

フェイト・T・ハラウン執務官の帰還を受け、次元航行艦『レオニダス』遭難事件の経過報告を兼ねた記者会見が行われている。

管理局側の出席者はフェイト、リンディ、クロノに次元航行本部の幕僚と本局広報部員が同席したのだが、案の定、会見に先立ち、もう1つの地球こと第197管理外世界と“地球防衛軍”関係の質問は受け付けない旨の通告があった。

地球防衛軍の宇宙戦艦『ヤマト』『相模』や現地での生活、魔法のことが露見したか等、重要事項を質問できないことに報道陣から不満の声が上がったが、管理局でも分析が始まったばかりであり、まだ正式に発表できる段階ではないとの理由説明がなされたが、これはこれで当然な措置と言えよう。

向こうの地球の大気圏全体がAMFならぬAMAのため、AAランクの魔導師ですら無力化される上。オーバースランク魔導師も大幅に力を減殺されるといふ、管理局魔導師にとつては地獄同然の環境であること、軍の主力戦闘機は宇宙空間から大気圏内まで連続して運用できること、さらに地球防衛軍の戦艦1隻の通常火力が管理局のインヘリアル3基分を超え、決戦兵器たる波動砲の破壊力に至っては、アルカンシエルの10倍とも100倍ともいふ、凶悪極まる戦闘力を持っている等と明らかになるものなら、管理世界の住民に無用な動揺を与え、管理局への不信任を招きかねない。

ミッドチルダ首都・クラナガン郊外、高町家

「フェイトママ、すごくがまんしてるね」

「……そうだね」

記者からの質問に言葉を選びながら答えるもう1人の母親の姿に、少女 高町ヴィヴィオ はそう評し、親友が見た目とは裏腹な激情家である事を誰よりも知っている彼女の養母も、同感とばかりに頷きながら、フェイトが帰宅した時の事を思い出していた。

管理局員が管理外世界に赴いた時、現地で見聞きした事は、当然ながら親しい者にさえもむやみに話してはいけないのだが、フェイトは

「要は公私をきちんと分ければいいんだよ」

と含み笑いを浮かべ、本局には敢えて報告しなかったという事項 向こうの世界の「高町なのは」から6代後の子孫だという「高町雪菜」が存在し、その雪菜も亡き母から継承したインテリジェントデバイスまで所有する魔導師(?)であることを他言無用で打ち明け、バルディッシュに保管した雪菜の画像を見せた。

髪と瞳が漆黒であること以外は自分と瓜二つに近い容貌に、初めは啞然としたのははすぐに興味津々になり、

「私も会ってみたいな、雪菜ちゃんに」

と言い出し、いつ起きたのか、彼女達の一人娘も

「ヴィヴィオも会いたい〜!」

と左右色違いの瞳を輝かせて駆け寄ってきた。

とはいえ、なのはがもう1人の自分の子孫と対面するには、クリアしなければならぬ問題が山積しているのだが。

「それに、向こうの地球も魔法文化はないけど、雪菜以外にも魔力持ちの人はいたし、かなり高い資質を持つ人もいたんだ」
「そうなんだ……」

代表的なのはスターシャとサーシャだが、彼女達はまた別格だろう。

「でも、そんな事を上層部が知ったら、正直、何を言い出すか心配だね」

“海”の高官の中には過激な言動をとる者も少なからずおり、彼らの失言で各管理世界との間に軋轢を生じた事例もある。

「うん……管理局自体が、向こうの地球とどう付き合っていくのか戸惑ってるんだもんね。」

最悪でも、武力衝突なんて事にはならないでほしいな」

「うん。仮にそんな事になったら、向こうは初めから殺し殺される覚悟でかかってくるよ……」

通常空間での艦船同士の戦闘では話にならない。

単艦でも高い戦闘力を持つ地球艦は当然艦隊運用もでき、アルカンシエルの射程外から一方的に撃ち減らされる上、地球の艦載機は対艦攻撃もでき、単独で大気圏に突入し、戦闘を続行できる。

地上戦でも向こうの地球特有の“AMA”で大半の魔導師は無力化

され、高ランク魔導師も大幅な能力ダウンは避けられず、並の魔導師と大差ない能力しか出せない。

一方で、地球の地上軍や警察は、銃も含めてレーザーガンが標準装備だ。

亜光速で飛んでくる対人レーザーはほぼ回避不可能で、これまで拳銃弾には通用してきた魔導師の防御障壁やバリアジャケットも対人レーザーに通用する保証はないし、障壁やバリアジャケットを展開する前に狙撃されたらどうにもならない。

「それに何より、地球防衛軍の人達は、いざとなれば死兵になっても戦う。」

『ヤマト』や『相模』の人達からガトランチス首都要塞攻防戦の話聞いた時は、背筋に冷たい物が走ったよ」

首都要塞　都市帝国と相對した『ヤマト』のクルーは19名を残して戦死したという。

また、『ヤマト』の支援に駆け付けた『相模』等地球の残存艦隊も、ガトランチス艦隊との戦闘や超巨大戦艦の砲撃で8割が失われ、『相模』もクルーの4割を失い、艦長の嶋津冴子は右頬を負傷したが、その傷痕を残したままなのだという。

しかし、なのはが驚いたのは、この一連の戦闘が降伏を決めた連邦政府の意向を無視して行われた事だ。

さらに『ヤマト』はその前にも命令違反行為をやらかし、嶋津冴子や当時の地球艦隊総司令もそれに連座していたというのだ。

「向こうの地球に、『将は戦場にあれば主命といえども従わざる事もあり』という諺があるんだけど、もしそのまま降伏していたら、地球の人達は奴隷として強制労働か、軍の弾除けになっていただろうし、ミッドや管理世界がガトランチスの侵略対象になっていたか

も知れないよ……。ガトランチスはテレザートやアクルで管理局と接触しているんだから、こちらのことを掴んでいたとしてもおかしくはないでしょう?」

ガトランチス帝国が提示したのは地球人類全員の奴隷化か絶滅の二者択一。地球人類は絶対にのめない条件だ。

命令違反には違いないが、地球人類が人としての尊厳を持ち続けるためには徹底抗戦しか選択肢がなかったのだろうと、フェイトは付け加えた。

「そういう人達を従わせたり飼い馴らそうなんてしたら、逆に大怪我を負うか噛み殺されるのがオチなんだから、友達になる方が管理局にとっても得るものが多いと思うんだけどね……」

(フェイトちゃん、向こうにいる間に何があったの!?)

なのは親友の微妙かつ確実な変化に戸惑っていた頃、キッチンでは。

『 ……バルディッシュ? 貴方は何をしていますのですか? (震えた声)』

『 ピュア・ハート殿に倣ってみました(キツパリ)』

『 NO ……!! (泣)』

料理用ワインが注がれたままのグラスに身を沈めた『黄金の戦斧(待機)』と、パニックに陥り、周囲を飛び回る『魔導師の杖(待機)』の姿があった。

『 やはり、料理用酒では物足りんな……』

白ワインにどっぷり浸かりながら、“彼”はのんびりと呟いたので

ある。

海王星軌道付近・『相模』左舷展望室

『頭を出しましよ打ち首だ』
お花をあげましよ墓の前』……』

星の海を眺めつつ、どこか虚ろな微笑を浮かべながら物騒な替え歌を唄う女艦長がいた。

「あ、あの……機関長？あれは……？」

「……そつととしてやれ。地球に戻ったらすぐ誕生日だそうだ。30歳のな……」

（まあ、あの顔であんな物騒な歌を歌ってちゃ、びびるのもわかるな……）

これが初航海だという、まだ18歳の生活班員は、見てはいけない物を見たとはかりにすっかりびびって涙目になり、艦長との付き合いが長い機関長の長尾が、そんな彼女を落ち着かせていた。

第176話『宮仕えは要領なの？』（後書き）

来週末の更新は、作者トチ狂いの為、多分お休みになります。

第177話『ティアの土産話』（前書き）

言わずと痴れ…知れたグダグダ話です<>

第177話『ティアの土産話』

ミッドチルダ首都クラナガン郊外、ナカジマ家

居間のテレビには本局で記者の質問に慎重に答えるフェイトとクロノ、リンディ達が映っている。

リビングで見入るのはスバル・ナカジマと、地球からの帰還間もないティアナ・ランスターだ。

父のゲンヤと姉のギンガはまだ陸士108隊で勤務中だ。

ティアナは、本局への報告と聴取をひとまず終えた後、5日間の待機を命ぜられたが、マスコミの取材攻勢を案じたスバルの強引な勧めで、ナカジマ家に逗留していた。

「正直、私がこうしているのはもどかしい気もするわね……」

フェイトは、記者会見には自分だけが出ると言い、療養中のシャリオはもちろん、心身に問題がないティアナにも待機を指示していた。フェイトだけに負担を強いる事には抵抗があつた彼女は異議を唱えたが、

「私は大丈夫だよ。」

今のその気持ち、将来ティアナの補佐官になる人に使ってあげて

と、上司は笑って辞退した。

「……まあ、フェイトさんの言うとおりだよ。ほら、『ミッドの借金

をヴァイゼンで返す』っていうじゃない」

「……それを言うなら、『親の恩は子に返せ』よ。おバカ」

「……あはは、そうだったっけ？」

「まったく……」

親友の相変わらぬのトンチキぶりに溜息をつきながら、どこか安心してしまふ若き執務官補だ。

「…ね、ティアア？」

管理局の記者会見中継を見終わった後、スバルが話を振ってきた。

「守秘義務があるだろうから詳しい事は聞かないけど、『ヤマト』って、どんな艦だった？」

ティアアは少し考えてから一言だけ答える。

「一言で言うなら『地球のストライカー』ね。

存亡の瀬戸際に追い込まれた地球を窮地を2度も救ったんだからね。……でも、ガトランチスとの戦争の時は『ヤマト』1隻だけでやったわけじゃないわ。

『相模』や他の地球の艦艇も加わってたし、普段は輸送船団を護衛しているフリゲート艦、さらに地球各州の海軍や空軍も加わったのよ。

その意味じゃ、皆がストライカーだったと言っていいわね。

それでも『ヤマト』の存在は別格なのよ。

何もかもがぶつつけ本番で、敵と戦いながら1年弱、往復30万光年近い単独行動任務を成功させたなんて、管理局世界では多分前例がないわね。

そして、今回もガトランチスの意図を挫いてみせたんだから、『ヤマト』の存在感はより大きくなったとみていいわ」

「愛されてるんだね。『ヤマト』は……」

「ええ。誇大じゃなく、あの艦は地球の人達の心のよりどころと言ってもいいわね。」

「一般市民だけじゃない。同じ地球防衛軍の軍人さん達の大半からもね……」

「そうなんだ。」

「……ところでティア、気になってることがあるんだけど」

「ん？何？」

ひとしきり感心していたスバルが、確かめたくてうずうずしているように尋ねてきた。

「『ヤマト』の古代艦長代理に婚約者がいるって、ホント？」

「……何かと思えば、アンタってコは……」

ティアナは思わず額に掌を当てる。

「……事実よ。相手は同じ年で、同じ『ヤマト』のクルーよ。」

乗組員や防衛軍司令長官も公認の仲なんだって」

「……あゝあ、いい男は売約済かあ」

心底落胆したようだ。

（はあ……このとんちきは……）

「……ま、いい男というのは当たってるわね。あの人も、お兄さんも」

「えー！？ 古代艦長代理って、お兄さんがいるの？」

「ええ。10歳違いで、あんたも話した事がある『相模』の嶋津艦長の同期生なんだって。

でも、あの人…、古代守さんには、それはそれはすごい奥さんがいるわよ」

「すごい奥さんって？どゆ人？」

スバルのそれは、ゴシップ話に食いつく主婦のノリである。

「イスカンドル星の女王陛下よ。

守さんがガミラスの捕虜になって、本国に移送される途中に護送船が遭難し、イスカンドルに漂着したところを保護されたそうよ」

「それでラブラブになったんだ」

「……すごい簡潔だけど、まあそういう事ね」

（ フェイトさんが、守さんと目が合うと赤くなってしまう事は黙っていてよう…… ）

ティアナは溜息をつきながら、クロスミラーージュを出すと、「画像再生を指示し、しばらくしてスバルにクロスミラーージュを手渡した。表示された画像を見てみるというのだ。

「どれどれ……、って、この人が!？」

驚いた声を上げたスバルが指差したのは、『ヤマト』で行われた艦上結婚式で撮影された集合写真の中央で座っている金髪の成人女性。周囲の軍人達と比べても雰囲気は全く違うため、一目でわかるというものだ。

「そう。その方がスターシャ陛下。ご本人はもう“陛下”じゃないから普通に接してほしいとおっしゃったけど、気品というか、オーラがまるっきり違うのよね……」

「うん、わかるわかる……って、ティアとフェイトさんも出席したの!?!」

「うん、是非手伝ってほしいと言われてね。」

……それに、異世界の風俗を知るのも同員の仕事よ。断る理由なんかなかったし」

写真には、執務官制服姿のフェイトとティアナも中央近くで映っている。

「いいなあ……こんな楽しいお祭りしてたんだ」

「だから、お祭りじゃなくて、正式な結婚式よ。」

……まあ、『ヤマト』『相模』の人達にとってはお祭りの側面もあったと思うわ。」

つい先日までは辛く悲しい戦いを強いられてきたんだから。イベントを楽しむ事で、自分達が生きていることを実感するんだって。

年越しパーティーは、それはそれは壮絶などんちゃん騒ぎだったんだから……」

「そんなにすごかったの!?!」

ティアナの土産話は、まだまだ序盤に過ぎないのだが

(……そう言えば、中島課長って、ナカジマ三佐を若くしたような顔立ちだったわ。

ひょっとして、なのはさんと雪菜みたいな関係なのかも……)

地球・日本州、東京メガロポリス、地球防衛軍司令本部

司令長官執務室には、主である藤堂平九郎、参謀長のマクシミリアン・カラジッチ、前任参謀の古代 守に秘書官の森 雪、そして防衛会議議長のジェフリー・スペンサーがテーブルを囲んで着席し、壁のモニターには『相模』艦長の嶋津冴子が映っている。

時空管理局から地球連邦大統領と防衛軍司令長官宛てに届けられた親書への回答を考える必要があるが、大統領はまず防衛軍としての姿勢を決めるようスペンサー議長に指示し、スペンサーは防衛会議での審議に先立ち、司令長官を交えた打ち合わせを行うこととし、関係者を召集したのだ。

大統領は、先日の白色彗星に地球艦隊が敗北した時、公式発表のタイミングを誤って市民の混乱を招いた苦い経験があるため、時空管理局や魔法世界との関係については過ちを繰り返すまいと、かなり慎重になっているのだ。

「……交流を持つというのは構わないのだが、時空管理局はそもそも警察軍みたいなものだろう。そういう組織が外交まで一元化するのかね？」

スペンサーが基本的な疑問を口にする。

「……時空管理局は、これまで魔法文化がない有人惑星に対しては原則として不干涉でした。

もともと、惑星によっては現地当局に無断で出入りしたり、ある程度文明や科学技術水準が、彼らが言う“次元の海”に進出可能な水準に達すると、“干渉”しては管理世界に編入しているようです」

「質量兵器全廃と魔法文化導入を強制して、かね？」

「管理世界といっても、全ての惑星が元から魔法文化を有していたとは限りません。」

『レム』から回収された記録には、不穏分子・過激派による抵抗を排除したとありますが、歴史は勝者の都合に合わせていくらでも創作できますからね。

『コックローチ1』から回収した資料を解析すれば、もっと詳しくわかるかも知れません」

「……要は、魔法が使えない者は魔法が使える者に従えと言つことかね？」

不快そうに言うカラジツチに、今度は冴子が答える

『当たらずとも遠からじでしょうね。』

……しかし、今回敢えて親書をこちらに寄せたということは、こちらがこれまで相手してきた惑星国家とは違つと認めているからでしょう。

ただ、管理局員が全て魔法を持たない世界を一律に見下しているというわけではないようです。

つい先日までこちらに滞在していたフェイト・T・ハラウン達の言動を見聞きした限り、選民意識は持つていないようです。

しかし、一方で『レクサス』や、今回の『コックローチ級』といい、十字軍を気取りの連中も少なからずいるでしょう。

……ただ、気に入らないから付き合わない、では、かつての北〇〇と同じレベルです。

20世紀の冷戦下でも、米ソはお互いにこん畜生と思いつながらも、国交は持ち続けたでしょう？

これ以上は軍人の職務を逸脱しますので、申し上げませんが……」

地球連邦において、現役の軍人が政治、外交に関わる事は厳禁されている。

地球の歴史、特に近代以降、現役の軍人が政治に関わるとろくな事にならなかつた。

言論の圧殺、政敵や反体制派に対する弾圧や粛清。
当然、地球連邦でも現役軍人は政治に関わらない、という原則は堅持されている。

それを不満に思つ者が皆無というわけではないが。

「……君達の見解は承つた。

これを叩き台にして防衛会議に諮ると共に、大統領にもお伝えし、十分検討して回答しよう。

……ただ、古代参謀、期限は無視しても構わないのかね？」

「期限はあちらが一方的に通告してきたものですし、私はあちらの定めた期限内に回答するとは一言も言っていないません。

しかし、それはそれとして、余り引き延ばすわけにはいかないですよ。

10日ないし2週間以内で回答すべきと思います」

管理局側が求めてきた回答期限は1週間だったが、守はその場で拒絶。リンディ・ハラオウンも強い異議を唱えなかつた。

「……そうだな。あまり引き延ばすのも失礼というものだ。前倒しで進めるとしようか」

地球連邦の基本姿勢は、

？支配せず・させず、管理せず・させず

？互いの主権を尊重する。

？対等の立場で交流する。

だが、果たして時空管理局はどう受け取るか？

第177話『ティアの土産話』（後書き）

次回、いよいよ年貢の納め時です。

第178話『投げ返されたボール?』(前書き)

回答とお覚悟の話です。
短いです。

第178話『投げ返されたボール?』

時空管理局本局・総務統括官執務室

決裁書類に目を通していたリンディ・ハラオウンの前にウィンドウが開かれ、次元航行本部のオペレーターが現れた。

「統括官、地球防衛軍から統括官宛てで映像通信が入っておりますが、お繋ぎしますか?」

「ありがとうございます。繋いでちょうだい」

「わかりました。どうぞ」

オペレーターの言葉とともに、画面が切り替わると、先日会談した地球防衛軍の古代守と、壮年の男がいた。

「先日お預かりした親書に対する連邦政府と防衛軍の回答をお伝えします」

敬礼しながら、画面の中の古代守が言う。

続いて、隣にいるスーツ姿の壮年の男が口を開いた。

「お初にお目にかかります。地球連邦政府副首相の木梨鷹次です」

「ご丁寧に痛み入ります。」

時空管理局総務統括官のリンディ・ハラオウンと申します。木梨閣下

挨拶もそこそこに、回答内容が文書ファイルで送信されてきた。受信が終わるまでの間、古代守が口を開いた。

『我々地球防衛軍は、地球連邦政府の一部門であり、最高命権者たる連邦大統領の指揮で動きますので、司令長官宛の親書も大統領に回付し、回答も政府方針に沿ったものになっていきますので、ご了承ください』

「はい、それは重々承知しております」

複数の管理世界にまたがって治安維持活動を行う時空管理局と異なり、地球防衛軍は地球連邦政府の一部門であり、危急の事態が発生した場合を別にすれば、政府の命令なしに動く事は許されない。従って、司令長官宛ての親書の内容も連邦政府の知るところになっており、回答には連邦政府のチェックが入るから、軍と政府で回答が異なることはない。

『まず、防衛軍司令長官宛て親書への回答をお伝えします』

？交流を持つ事の要否は連邦政府に決定権があるので、軍独自の回答はありえない。

先日の管理局員3名については、人道上的の特例措置により滞在を許可したものである。

？『ロストロギア』についての概念は時空管理局と地球連邦の間で共通の条件を定める必要がある。

地球連邦政府機関や連邦市民の同意なき指定と回収は地球連邦の主権への侵害であり、地球防衛軍は必要な措置をとる。

また、『ロストロギア』積載の有無に関わらず、太陽系等、地球連邦領域への無断進入は認めない。

？犯罪者の引き渡し協定については政府が決定権を持つが、公正な協定が結ばれることを望む。

等々。

数分かけて地球防衛軍からの回答がひと通り読み上げられた。

(……地球側としては至極尤もな回答ね。

という事は、地球政府の姿勢は、相互の交流は段階を踏んで行おう、ロストログアについても管理局の都合だけでの指定や回収は許さない、か。

……やはり、一筋縄でいく相手ではない。あるいは、これまでが無神経過ぎたのかもね……)

かのPT事件や闇の書事件のような事がこちらの地球で起きていたら、魔導師達は早々に拘束あるいは射殺され、『アースラ』も拿捕抑留か撃沈されてしまい、地球と管理局の間に軍事的緊張状態が起きていただろう。

それに比べれば今の状況は課題山積であるものの、決して悪くはないのだ。

(地球大統領からの回答も、基本的な姿勢は変わらないだろうし……)

“三提督”はわかって下さるだろうけど、問題はその下のお歴々ね……)

何十回となく修羅場をかい潜り、死ぬ思いをしてきたあの3老人は話がわかるが、その次以降の世代は、ともすれば管理局の力を過信したり、非魔導師や管理外世界を見下す言動をとる者が少なからずおり、実際に軋轢が生じているため、リンディヤレティは危惧しているのだ。

(頭を失ったガトランチスはまだしも、暗黒星団帝国やディンギル帝国みたいな肉食国家が敵として存在している今、地球連邦とも揉

めたり、内輪ですつた揉んだなどしている場合じゃないんだけどね）
一部の高官が提案しているディンギル討伐作戦は、各地上本部や管理世界政府から慎重な対応を求める意見や反対意見が出ており、具体化する気配はないが、水面下で説得に動いている者もあるようで、未だ予断を許さない状態だが、リンディ達にすれば、現時点でのディンギル討伐は更なる弱体化を招くと思えず、絶対阻止したいところなのだ。

「…レテイ、地球から回答が来たんだけど、時間取れる？」

『わかった。こつちもすぐ空けるわ』

リンディは地球防衛軍からの回答書と、地球連邦大統領からの回答文書が収められているメディアカードを手に、レテイ・ロウランの執務室に向かった。

2002年3月3日、横須賀市・地球防衛軍士官官舎

「緊張の夏、地球の夏^{シャキーン}」

「艦長、カメラ目線で明後日の方向に向かって何言ってるんですか？それに、まだ早春ですよ。いい加減、現実を直視して下さい」

「……認めたくないものだな。製造から30年経ったということを」

第6艦隊指揮下での外惑星圏警戒任務を終え、艦の整備のため地球に戻った嶋津冴子を待っていたのは、満30歳の誕生日だった。尤も、冴子が2172年の3月3日に生まれたという確証はないのだが。

「あいな、私や捨て子だったんだぜ。」

ホントに桃の節句に生まれた証拠なんかないんだぞ」

「でもあながち間違ってもいないんでしょう？」

そうでなくても、時計と日めくりがある限り、必ず誕生日はやってくるんです。

それに、先に逝ってしまった仲間達の間まで生きる義務があるんですから、いい加減年貢を納めて下さい。はい、これそこに置いて下さい」

「……………（私は主賓じゃないのか？）」

釈然としない思いになりながらも、雪菜に言い付けられるまま、自らの誕生パーティー用の食器をテーブルに並べていく冴子（30）だ
『3030とやかましいわ!!』
った。

第178話『投げ返されたボール?』(後書き)

一応前後編の予定ですが、終わるかな?

第179話『投げ返されたボール?』(前書き)

臨時理事会開催です。
ややループ気味です。

第179話『投げ返されたボール?』

時空管理局本局

地球連邦大統領と地球防衛軍司令長官宛の親書に対する回答が届いたため、臨時理事会が開催されることになった。

いきなり理事会の開催というのはは異例だが、“三提督”が、事前根回しなしの開催を命じたからだ。

出席者は“三提督”に陸海空の中将以上の提督や将官。さらに聖王教会からは少将待遇のカリム・グラシア理事官、主な管理世界政府の代表達だが、オブザーバーとして、少将相当官のクロノ・ハラオウン提督と、フェイト・T・ハラオウン執務官も出席を命じられていた。

ちなみにフェイト達3人は、“地球連邦の情報を持ち帰った”功績により昇進し、武装隊における階級は、フェイトは三等空佐、ティアナが陸曹、シャリオは陸曹長になっていた。尤も、あの彼女達は、親しい者の前では無然とした表情を隠さなかったのだが。

「……随分のんびりした回答だな。」

現地時間で7日以内に回答せよと決めたはずだが？」

「……それはあくまで我々だけで決めた事で、先方の同意を得たわけではありません。事実、一方的だとはねつけられたようですが、あまり時間を置かずに回答を返してくれたわけですから、無礼と決めつけることはできないと思いますが」

気分を害したらしい海の高官にレティが切り返したところで、“三

提督”の紅一点、ミゼット・クローベルが口を開く。

「期限については先方にも言い分があるのは当然でしょう。ともあれ、回答は来たわけですから、その内容と論点を精査することが先決です。」

……リンディ、先方からの回答を」

「わかりました、申し上げます」

ミゼットから発言を促されたリンディは起立し、地球防衛軍司令長官からの回答をスクリーンに映しながら読み上げ始めた。

回答が披露されるにつれ、三提督や陸の高官は考え込むような表情になり、本局 海と空 の高官は苦虫を噛みつぶした表情になる者と、考え込む者が半々に分かれた。

一通り回答を読み上げると、意見が出始める。

「双方に共通したロストロギアの定義を定めることと、無断な探査や回収は認めない、か……。」

管理局だけの視点で指定や回収はさせないぞということだな？」

「ということは、魔法も使うなということですか？」

「当然、地球側当局者の立ち会いが必要になるでしょうし、使えるにしても、向こうの地球の気圏全体がAMMAですから、管理局の大部分の魔導師は無力化されますし、高ランク魔導師も“普通かそれ以下”の力しか発揮できません。まさにあの世界は魔導師の鬼門です」

「……その空気を形成した原因らしいのは、イスカンダルとやらから持ってきた“コスモクリーナーD”というじゃないか。」

そんな危険極まる物、何とか回収することは出来ないのか？」

海の高官が発言する。

“ A M A 発生容疑者 ” であるコスモクリーナーDを回収し、魔導師にとつて苛酷な環境形成を抑えることは管理局の利益に合っていることかも知れないが。

「お言葉ですが、“コスモクリーナーD”は前所有者のイスカンダル王国のスターシャ女王が地球に譲渡することを決め、妹のサーシヤ女王や宇宙戦艦『ヤマト』の乗組員達が命懸けで戦い、多大な犠牲と引き換えに持ち帰ったものです。

それを管理局が回収することは、『ヤマト』やスターシャ、サーシヤ姉妹を、赤の他人が否定する事と同じです。

そうなれば、地球連邦は、管理局を掠奪者と見なすのではないですか？」

「我らが掠奪者集団だと!?!？」

「……他人が汗水垂らして、ましてや夥しい血まで流してまで得た物を、横から掠め取る行為を掠奪と言わずして何と言うのかね？」

いきり立つ“海”に冷水を浴びせたのは“陸”のトップであるルトシユタット大将だ。

「……地球連邦に、我々時空管理局について今少し理解を深めてもらう必要はあるにしても、地球防衛軍の回答は、国あるいは世界の守り手としては別段過激なものではないと思うがね？」

「しかし閣下！彼らは本局と艦隊を何百回も壊滅させられるような戦力を持っているのですぞ！

野放ししておくわけにはいきません！」

「危険度ならディングルやガトランチス、暗黒星団帝国の方が余程危ないだろう。彼らは端からこちらを皆殺しにするつもりで撃つてきているんだ。

それに対し、地球連邦はハラオウン執務官らを救出し、治療のみな

らず、当座の生活まで面倒を見たんだ。どちらが信頼に足るか、子供でもわかる理屈だろう？

それに、地球防衛軍、特に彼らの宇宙艦隊と戦って勝てる成算があるのかね？海は」

「しかし！」

「そこまでにしたまえ」

海側が何か反論しようとしたが、それはラルゴ・キールが遮った。

「地球防衛軍が地球連邦政府傘下の組織というのなら、軍の最高指揮権者たる地球連邦大統領からの回答こそが正式なものだろう。ならばそちらの内容を聞いた上で対処を決めるべきだろう。」

ハラオウン統括官、続けたまえ」

「はい」

姿勢を正したリンディは、地球連邦大統領の回答書を読み上げ始めた。

横須賀市・地球防衛軍士官官舎・嶋津家

「……ま、予想していたとはいえ、いい歳こいた野郎と女が一升瓶を枕に沈没している図というのは、何ともしまらん……」

「正確には“悶絶”ね」

軍務局第1課長の中島龍平と妻の真理亜は、隣室でのびている後輩6人と、巻き添えになったさらに年少の後輩2人を見遣りながらコメントした。

5人のうち、3人は言うまでもなく“華の90年組”の三馬鹿。後の2人は大村耕作と『鳥海』のフランベルク・棗・シルヴィア。年少組は先輩／兄の甘言（+脅迫）に騙されて連れて来られた古代進と相原義一だ。

まあ、中島夫人の手料理は、食べ盛りの青年の胃袋にとってはまさにフェロモンなのだ。

しかし、彼らは主賓のはずの冴子を巻き込んで“闇チーズフォンデュ”を始め、さらに冴子の蝮酒まで持ち出して闇酒盛りをやらかす始末。

“闇”と言う位だから、食べられるというだけで味は全く考慮しておらず、最初に相原が沈没。

次いで古代 進が倒れ、あとはグダグダになって、5人とも相次いで意識を刈り取られた。

「しかし、意味がない事を本気になってするとかろは全く変わらないな。こいつらは……」

「……でも、これで3人とも晴れて30歳を迎えられたんだから、これはこれでいいんじゃないかしら……？」

主賓が脱線転覆したままの宴席では、中島夫妻とフランベルク・白百合・アリアに森 雪、高町雪菜が茶菓を楽しんでいた。

因みに女王陛下とプリンセスは別室でお休みである。

このところ陛下の体調が優れないこともさりながら、とてもお見せできるような光景ではないからだ。

『……………』

その様を、雪菜の護り石は蝮酒に浸りながら見ていた。

第179話『投げ返されたボール?』(後書き)

次回、地球の“正式”回答が!!

第180話『投げ返されたボール?』(前書き)

3話で終わりませんでした(汗)

第180話『投げ返されたボール?』

時空管理局本局

地球連邦大統領からの回答はリンディ・ハラウンが読み上げるとともに、プロジェクターによってスクリーンに映し出されている。

「……………」

「……………」

それを聞く高官達の表情は千差万別だ。

無表情で聴き入る者、何か考え込んでいる者、惘然とする者、苛立つているように見える者……。

地球の大統領からの回答は、ある意味お約束なものだった。

基本骨子は

?交流を持つ事にはこちらも賛成である。

ただ、管理世界の治安・軍事組織たる時空管理局は管理世界政府から外交権を委譲されているのか、どの程度の管理世界が地球連邦と交流を持つ事に賛同しているのかを確認したい。

地球連邦としては、全管理世界のうち3分の2以上の賛同があることが理想であると考える。

?同時に、地球連邦政府も、時空管理局と管理世界の存在とあらましを連邦市民に公表し、交流について広く意見を求める予定である。

?しかし、地球連邦は、時空管理局にも攻撃を加えたガトランチス

帝国や暗黒星団帝国と今なお戦争・紛争状態であり、現時点で地球連邦と交流を持てば、それらの星間国家や軍事勢力との戦争・紛争に巻き込まれる恐れがあるが、それでもよろしいか？

？地球連邦の国是はいかなる国家・勢力とも平和的かつ対等の関係を築くことで、管理や支配はいかなる場合も行わず、かつ許さない。我が国の独立を脅かす動きや企みに対しては断固として戦い、その意図を挫く所存である。

？ゆえに、貴局からの提案、“他惑星の調査・入植に際し、都度時空管理局の許可を得る”必要は存在しない。

？地球連邦は時空管理局の精神を理解する努力を払い、かつ尊重して干渉はしないが、共有はしない。
故に、時空管理局も、地球連邦の精神を共有する必要はないが、尊重する努力を要望する。

相互の精神への理解・尊重から交流を始めたい。

「……理解はするが、必ずしも共感はしないし、してもらった必要もない。」

そして、管理局の下風にも立たない、ということか……」

ルントシュタットがぼつりと呟く。

「たかが一惑星の国家が、我が管理局と対等だと？生意気な……！」

本局の提督が嘲弄気味な声を上げるが、

「その『たかが一惑星の国家』が、魔法抜きでガトランチスの国家元首を討ち果たしたり、たった2隻の戦艦で暗黒星団帝国の2個艦

隊を壊滅させるだけの軍事力を持っているんだぞ。

……それよりも、管理世界でもないのに、他の星に行くのに、いちいち管理局にお伺いを立てる等と、誰があんな下らん条項を加えた！？

あの一節だけで管理局に侵略的性格を持つ勢力だと思わせるに十分過ぎるぞ」

「管理局が侵略者だと言うのか！？。

彼らのあの宇宙戦艦の方が余程凶悪だ！」

「そう受け取られても仕方ないということだ。

ただでさえ、ディンギルがいつ来襲してくるかわからないというのに、敵を増やすような事をしてどうするのだ？

管理局の艦船では彼らの艦船に簡単に撃ち負けてしまっただぞ！？」

「それは戦術が悪かったからだ！！」

「ろくに敵を見ずに艦船を差し向けておいて、失敗は現場のせいかな？」

「やめたまえ」

本局と陸で水掛け論になりかけたところに、“三提督”の一人、法務顧問のレオーネ・フィルス元帥が割って入った。

「……ディンギルという獰猛極まる軍事国家が敵対し、解決する目処が立っていない以上、自ら敵対勢力を作ることには絶対に避けねばならん。

一つ聞くが、地球連邦や地球防衛軍は、管理局に対して重大な軍事的挑発をしたのかね？」

フィルスの問いに、幾人かは俯ぐが、ルントシュタットやリンディ、レテイ達は顔を横に振る。

フェイトもまた、顔を横に振る。

(『レクサス』の件は、どうみてもこちらの自爆行為……)

過日、『レクサス』が秘密裡に太陽系に進入しようとして行方不明になった一件は回り回って三提督の知るところとなり、同艦を派遣させた本局の高官達には免職等の厳しい懲戒処分が下されていた。

実のところ、まだ懲りていない面々は特殊工作艦SS級5隻を派遣して、対地球協調派のハラウン母子の抹殺を図ったが、派遣した5隻は未帰還という最悪の結果に終わっていたが、この時点ではまだ露見していなかった。

「今我々がすべき事は、地球連邦から投げ返されたボールに対し、どう応えるか、だ。」

地球連邦は我々の提案に対して回答してきた。

我々がすべき事は何かね？

対決かね？対話かね、それとも“シカト”かね？」

ラルゴ・キールが全員の顔を見ながら言う。

(地球連邦と対決だなんて、余りに非現実的だ。

そんな事したら、管理局自体が立ち行かない。

それに、こちらが持ちかけた話で、回答が気に入らなかったからと交渉を断ったら、それこそ物笑いの的だ。

それに、デインギルみたいな勢力に対抗できる技術を供与してもらう可能性もなくなってしまふ……)

先日、フェイトとティアナは無限書庫でなのは、シグナムとユーノ・スクライアの5人で会い、ユーノに地球連邦や地球防衛軍関係の出版物を手渡しながら向こうの世界のことを話したが、その席でフェイトとティアナは異口同音に言った。

“地球連邦とは並立共存するか没交渉しかない。管理下に置くことしようものなら、本局に波動砲を撃ち込まれることになる。”

と。

「…そうなる前に話し合うことはできないのかな？」

と、高町なのはは初めこそ半信半疑だったが、ティアナは

「もちろん、文化交流とかなら向こうの人達と大いに話し合うことはできます。」

でも、魔法文化の採用や質量兵器廃絶については絶対応じませんね。残念ですが、管理局の戦力では地球を侵略した勢力には全然歯が立たないんですから」

「うん……」

これにはなのはも同意するしかない。

ディングルやガトランチスは“取り敢えずお前ら死ねよ”とばかりに戦闘を挑んできた。

そういった勢力と対等に渡り合うには、こちらも相手を殺めるつもりでいかないとこちらが殺されてしまう。

フェイト達、時空管理局員の多くは人を殺めずに事件を解決してきたことを誇りにしているが、今般知己を得た地球防衛軍や、管理局の新たな敵になったディングルやガトランチスなどは、これまでの管理局の戦闘が兇戯に等しい、れっきとした正規軍や殺傷上等な戦闘集団なのだ。

それらに互していくには、武器はもとより、殺し殺される覚悟を持

つた兵士、あるいは戦士が必要なのだが、管理局の武装隊員の大半は、兵士でも戦士でもなかった。それも仕方ない事ではあるのだが。

（これからは犯罪者やテロリストじゃなく、元の思考からして異なる武装勢力や正規軍とも互していかなければならない。

もし、相手を殺さなければ生き残れないような状況になったら……）

自分は、相手を殺すつもりで戦えるのか、部下に殺せと命じることができるのか。

また、自分達の魔法が通用するのだろうか？

艦船の戦闘力ではお話にならないし、機動兵器である艦載戦闘・攻撃機は大気圏から宇宙空間まで運用できるし、地上なら戦車や装甲車もある。

何より衝撃的だったのは個人携行火器がパルスレーザーガンということ。

地球連邦や地球防衛軍でも、もう半世紀以上前に拳銃やライフル銃が代替されていた事実は部内に驚愕をもたらした。

実弾銃から代替されたのは、射程距離や精度、扱い易さ等が勝れていたからと見ていいが、管理局の魔導師が対決してきた質量兵器は拳銃やカービン銃で、レーザーガンを相手にしたことはなきに等しい。

そもそも防壁障壁がレーザーガンに有効なのかすらわからない。

ガトランチスも携行火器はレーザーガンであり、ディングルもそう考えていいだろう。

「管理局が“N.O.I”ではなくなりつつある、か……」

「ガトランチス、ディングル、暗黒星団帝国は管理局に牙を剥き出

している狼だし、地球連邦も切れ味鋭い刀を鞘に入れて、すぐ居合抜きできる侍みたいなものだ。

共通しているのは、管理局にはすり寄らない事。

対応を誤れば、管理局はあのドイツ第3帝国のような末路を辿ることになるね……」

シグナムが続いてユーノが口にした言葉に、フェイトはギクリとしたのはも驚いた表情をしていたが、今、目の前で激論を交わす高官達を目にしながら、フェイトは脳裏に、管理局の前途に巨大なブラックホールが口を開けて待ち構えている構図を描いていた。

第180話『投げ返されたボール？』（後書き）

じじじ次回でケリがつきます。多分……。

第181話『投げ返されたボール?』(前書き)

今話でひと区切りです。

第181話『投げ返されたボール?』

「それにしても、全ての管理世界の意味を確認してくれとは、なかなか痛いところをついてくるな」

“海”の提督がぼやくように言う。

「一桁台はまだしも、管理世界歴が浅い世界の中には、政府関係者から子供まで管理局嫌が多い世界もあるからな。万一そういう世界が地球連邦と独自に国交を結んだら、えらい事になるぞ」

管理世界といっても、全ての世界が時空管理局に好意的なわけではない。

ロストログアの回収やその他諸々の経緯や行き違いが生じた結果、管理局を嫌ったり、憎悪する者もいるが、管理世界への編入する過程で現地側の抵抗が激しく、その遺恨が色濃く残る世界もある。そういう世界に対しては管理局も様々な融和策を打ったりしているが、犯罪発生率や検挙率は悪化したり、誤認逮捕が増えたりと、編入前よりも治安が悪くなった世界も少なからず存在し、そういう世界の住民が管理局に向ける目は非友好的であり、反管理局活動に身を投じる者も少なくないのだ。

管理局が懸念するのは、そういう反管理局勢力と地球連邦が結んだり、管理局の保護下から離れて地球連邦と歩調を共にしようとする世界が増えることだ。

「地球連邦が単なるテロリストと結ぶ事は考えにくいですが、管理局の頭ごなしに政府同士で対話することはあり得るでしょうね。」

彼らの世界では、軍が外交に関わることは制限されていますから」「そんな事にならないためにも、まずは問題ない世界だけで地球連邦と対話すべきだ。

牽制したところで効果はないんだから」「地球連邦は『レム』を調査して、J S事件直前のこちらの内情も掴んでいるだろう。

その場凌ぎじゃ足元を見られるぞ」

「それだけじゃない。地球連邦はこちらの事も全国民に公表すると言っているんだ。

管理局はもとより、魔法の事も露見してしまうぞ！

それも管理下に置く事が不可能に近い世界に！」

時空管理局規則では、非魔法文化圏の住人に魔法の存在を知られてはならず、万一露見した場合は管理局の保護・監視下に置かなければならない。

典型的な例が第97管理外世界の高町、月村、バニングス各家で、彼らは身柄を保護されない代わりに協力者登録されているのだが、地球連邦こと第197管理外世界は軍事力が突出している上、既に管理局や魔法の事を知っている者の数が多く、しかもその殆どが政治家や軍人で、国家や軍のトップもいる。言うては何だが、とても“保護”などできない。

地球防衛軍はもとより、地球連邦政府にまで管理局や魔法の事が筒抜けになり、さらに全国民にまで公表されればどんな事態になるか。

「こちら各管理世界政府への説明はこれからなんだ。

しばらく公表を延期してもらおうよう要請してはどうだろうか？

向こうでも調整の時間が要るだろうから、嫌とは言われないと思うが」

「確かにそうですね」

“空”の将官からの提案に、他の出席者からも賛同の声が上がる。中には、要請など生温い。要求にしると言う者もいたが、無視されるだけだと言い返され、沈黙を余儀なくされた。

更に議論を詰め、各管理世界に、地球連邦との交流の是非と、窓口を時空管理局かミッドチルダ政府に一元化することについての同意をもらう事になると共に、地球連邦に対しても、各管理世界政府の意思が明らかになるまでの間、連邦市民への公表を保留するよう申し入れる事とした。

地球側も、国内の調整にそれなりの時間がかかるだろうから、この要請は先方にも受け入れられやすかるう。

「リンディ、レティ。地球連邦との調整は貴女達に任せていいかしら？」

「わかりました。お任せ下さい」

ミゼット・クローベルの指示に、リンディとレティは敬礼して応えた。

ミッドチルダ首都・クラナガン郊外、高町家

「　　」という事になったんだ　　」

「そうなんだ　　」

規則正しい寝息を立て始めたヴィヴィオを間に、フェイトはなのはに日中の理事会の様子をかい摘まんで説明した。

「でも、よく本局の偉い人達が承知したね」

「本音は、渋々だったかも知れないけどね。ちよっかいを出せば大火傷を負わされるのが目に見えているからね」

でも、肝心なのはこれからだよ」

「うん」

地球連邦自体はともかく、地球防衛軍は文字どおり、質量兵器のオンパレードだ。

管理局でも、質量兵器アレルギーは強い。

それでも、時空管理局草創期の魔導師は命懸けで重火器とも渡り合ったが、そんな魔導師は若くして殉職したか、とうに現役を退き、今なお管理局に籍を置くのは、三提督他数人の老将しかない。

「管理局草創期の魔導師は質量兵器にも臆さず立ち向かっていったけど、ともすれば私達の世代は、質量兵器と聞くだけで目も耳も塞いでしまう。

これまではそれでもやっていけたけど、もうそれじゃダメなんだ。現に、強力な宇宙戦艦同士が殴り合う世界と遭遇し、大きな被害を出している。

それでも付き合わないと立ち行かなくなっているし、ひよっとしたら、ガン〇ムみたいな人型機動兵器を使う世界や、スター〇オーズみたいな世界とも遭遇するかも知れない」

なのはは不安を隠せない。

「これからも、管理局は次元世界の平和の守り手でいられるのかな」

管理局に正式に奉職してから11年目。

武装隊士官として、教官官として全力で物事に当たってきた。

敵対した者とも真つ向から向き合い、相手の事情も理解した上で戦ってきたが、新たに登場した敵対勢力は全く話が通じず、こちらを無慈悲に破壊しようとする。

地球連邦と地球防衛軍は穏健で話も通じるが、管理局とは見ているものも歩む道も違っている。

理念的な対立は既に生じており、地球側は譲歩する様子はない。

「これまで管理局はこちらの主張を通してきたけれど、今後はある程度譲歩しないと立ち行かないだろうね。」

私達は力づくで今まで自分達の言い分を押し通してきた。

客観的に考えれば相手の主張の方が正しい部分が多くても、力でそれを潰してきたこともある。

でも、ガトランチスや暗黒星団帝国は力で破壊しようとするし、地球連邦は、ある一線より先は管理局立入禁止。

もちろん力づくでもダメ。

それなら粘り強く話し合いするしかないよ。

唯一話ができる地球連邦とも話せなくなったら、管理局はおしまいだね。」

「フェイトちゃん。」

（地球連邦の人達は魔導師じゃない。もし、地球防衛軍の人達と対峙するようなことになったら、私は、私達はどうしたらいいんだろう。）

向こうは、戦闘＝命懸けの死闘であり、非殺傷設定はありえない。殺さない事もあるが、それは負傷者を後送させるために敵の戦力を削ることが目的で、ともすれば殺すより辛辣なやり口だ。

倫理や感情はさておき、敵に出血を強いるのが正規軍の戦い方だが、シグナム達ヴォルケンリッターや旧ナンバーズを除けば、管理局の魔導師の大半はできないだろう。

自分も 無理だ。

高町なのはの苦惱は始まったばかりだ。

地球防衛軍中央司令部

一室で、古代 守と真田志郎、嶋津冴子、大山歳郎が向き合っている。

「本気で言ってるのか、古代!？」

「ああ、お前のところで面倒を見てほしい」

「もうそこまで進んでるのか？スターシャは」

「」

数多の修羅場と死線をかい潜ってきた彼らだが、数倍するガミラス軍や白色彗星帝国軍を相手にした時よりも苦渋に満ちた表情になっていた。

第181話『投げ返されたボール?』（後書き）

なのは「足を停めて確実に狙いをつけて!」

冴子「撃つたらすぐ動け!足を止めたら狙撃の的だぞ!」

ティアナ「どちらの指示が正しいのよ!?!」

はやて「訓練はなのはちゃん、戦場では嶋津艦長やろなあ」

第182話『いざイカルス』（前書き）

ぼつぼつ新たな動きが始まります

第182話『いざイカルス』

地球防衛軍、新横須賀基地

発進準備を整えている『相模』の舷門には十数人の軍人がいる。

「じゃ、頼む。真田」

「この期に及んじゃ、やるしかないさ」

イカルス第2天文台所長に任じられた真田志郎は、古代 守と握手を交わした。

傍らには嶋津冴子と大村耕作も佇んでいるが、皆の表情はともかく、内心はお世辞にも冴え渡っているとは言えなかった。

任務のせいではない。

『相模』以下の独立第13戦隊（13TF）はアルファ・ケンタウルス方面への探査隊の護衛任務を受け、探査艦との合流地であるタイツン基地に向かうのだが、その途中、アステロイドベルト内に建設した第2イカルス天文台　　いうまでもなく、天文台とは名ばかりの『ヤマト』近代改装用ドック　　に立ち寄り、かの地に赴任する真田達を送り届けるためだが、今回のゲストは、真田ら天文台スタッフだけではなかった。

真田 漣という、6〜7歳ほどの少女が彼らに同行するのだ。

漣は真田志郎の姉の一人娘で、姉夫婦はガミラスの遊星爆弾で死亡したため、叔父である真田が引き取っていたのだが、特別な事情により、叔父に同行することになった。

むろん、これはでっち上げだ。

真田と親しい者は、彼が少年時代、自らのミスに起因した事故で姉を失った事を知っているが、皆一様に口をつぐんでいた。

何より、真田と守と漣を慮ったことだ。

言うまでもなく、漣の本名は古代サーシャ。

古代 守とスターシャの一人娘であり、イスカンドル王家の第一王女。

つまり、次期イスカンドル国王となる身のはずだが、継ぐべきイスカンドルは既に星も国民もなく、母も娘を王位につける気は毛頭なかった。

で、漣ことサーシャがなぜイカルスに行くのかと言えば、地球では何かと気ぜわしいのと、幼少期の成長速度が地球人の十倍以上なイスカンドルの血を引くサーシャの身体を気遣った事、そして、母スターシャの病のためだ。

守によれば、イスカンドル人は地球人やガミラス人ほど頑健ではなく、生殖能力も低いという。

また、スターシャは、自らイスカンドル星を消滅させた事実が、心身にかなりの負担をかけていたようだ。

フェイト・T・ハラウンらが帰還したあたりから寝たり起きたりを繰り返し始め、3月には伏せていることが多くなっていた。

医師の見立てでは、症状からして膠原病の一つではないかということだが、地球では症例がなく、投薬の効果も今ひとつだった。

当のスターシャの証言では、イスカンドル人特有の病で、伝染性は

ないとの事だが、彼女自身が積極的な治療を固辞し、医師団の説得にも首を縦に振らなかった。

その反動なのかはわからないが、澁川サーシャは、幼少期の成長速度はイスカンドル人に匹敵しているが、頑健さは地球人の子供並で、風邪くらいしかひかなかつたし、何より容姿は完全に母親のそれを引き継ぎつつあり、半年を待たずして“絶世の”美少女になることは確実といえた。

もつとも、性格は保証の限りではないのだが。

そして当の澁本人はと言えば、

「たいくつだよ」

『相模』の土官用ゲストルームでペンギンの大型ぬいぐるみを抱きながらぼやいていた。

同い年の子供は親と離れることに悲しみ、泣きじゃくるものなのだが、彼女はそんな様子は見せない。

幼少期の成長速度のせいか、両親、特に母の教育のせいなのかは俄かに判断しかねた。

「ふわ〜あ」

可愛らしい声とともに欠伸をする。

両親からは、欠伸を他人様の前ではいけない、欠伸する時は手で口元を覆い隠すように躡られているのだが、当の本人は手を口元にやることもなく、大欠伸をかましていた。

「だれもいないからいいよね」

「

どこぞの誰かの影響か、プリンセスはふてぶてしさをも身につけつつあるようだ。
いやはや、未恐ろしや。

ディンギル帝国本星

軍工廠バースに、1隻の漆黒に塗られた艦が鎮座していた。ただ、この艦は周囲に並ぶディンギル軍艦とは全く異なるフォルムをしており、全く違うポリシーのもとに設計・建造されたことが窺われる。

「ふむ、これが」

「はい、父上。鹵獲した時空管理局のXV級を改造した次元哨戒艦『インダス』です」

バースにはこの国の元首たる大神官大總統のルガールと、長男で宇宙艦隊司令長官の任にあるルガール・ド・ザールが並んで、改装なった『インダス』を見上げている。

基本的なフォルムはXV級だが、機関換装、武装更新、艦体強化と装甲の追加等を行った上に塗装をディンギル軍式に改めたため、何とも禍々しいスタイルになった。

艦首部はアルカンシエルから3連ガトリング式インパルスキャノンに替わり、埋め込み式備砲も魔導砲ではなくインパルスキャノンやレーザーに替わった。

しかし、大きく変わったのは艦首両舷で、備砲を撤去した代わりに大型のミサイルランチャーを片舷2基、計4基装備したことだ。

「新設したミサイルランチャーはハイパー熱核ミサイルにも対応しております」

「ん」

「当面は本艦でデータを収集し、今後の新造艦船に反映させます」

「よろしい。だが、些か消極的に過ぎるな。本艦をもっと積極的に活用するのだ」

ルガルは息子が提示した『インダス』運用計画よりも積極的な活用を考えていたようだ。

「と、おっしゃいますと?」

「時空管理局への嫌がらせに使うのだ。」

そろそろ緊張感もゆるむことだろうしな。災いは忘れた頃にやってくることに、魔法などでは何も守れないことを、管理世界とやらの人間どもに知らしめてやるのだ」

「わかりました。至急運用計画を練り直します」

最強かつ最凶最悪のXV級は、新たな猛毒の牙を古巣に剥こうとしていた。

第182話『いざイカルス』（後書き）

次回、いよいよデザリアム帝国登場です 多分。

第183話『管理局とガミラス』（前書き）

初めにお詫びします。

フエイトさんの話が長いです。

第183話『管理局とガミラス』

時空管理局本局

「フェイト・Ｔ・ハラOWN執務官、ティアナ・ランスター執務官補、出頭致しました」

「ご苦労。座りたまえ」

帰還から半月余り経つが、フェイト達は未だ捜査任務を拝命することなく本局とミッドチルダを行き来する身である。

というのも、一時滞在していた第197管理外世界こと地球連邦についての説明や『レオニダス』唯一の生存者としての経過説明や遺族との面会、慰霊会への出席などに追われていたのだ。そして今日も。

「2人とも、今日来てもらった理由はわかっているね？」

「はい。ガミラス帝国残党の事と伺っております」

「そうだ。一連の軍事勢力や国家との接触で、管理局は多大な損失を被り、各管理世界に大きな動揺を与えている。

幸い、君達がいた第197管理外世界こと地球連邦とは話し合いを続けて共存する方向に進んでいるが、見逃せない軍事勢力として、旧ガミラス帝国軍が存在する。

取るに足らぬ存在と軽視して、ディングルやガトランチス等と同じ目に遭うことだけは何としても避けなければならぬのだ」

議長である“海”の将官は静かな調子で告げた。

フェイトとティアナは、地球連邦から提供された『ガミラス戦役』

の映像資料を使いながら、地球連邦と旧ガミラス帝国、『ヤマト』とデスラー総統の戦いと因縁について説明していった。

ひと通り説明が終わると、今度は高官達の意見が飛び交う。

「この、デスラーという人物は危険過ぎる。野放しにしたら、いずれ管理局にも牙を剥いてくるぞ！地球連邦にも協力させて、早期に捜し出して逮捕か排除すべきだ！」

「しかし、ガミラスは今や流浪の境遇。復活できるとは限らんぞ。

それに、地球防衛軍も再建途上なのだろう？」

デスラー捜索に割ける戦力などないだろう」

高官の意見が飛び交う中、フェイトが発言を求める。

「僭越ながら、現時点で地球連邦・地球防衛軍がガミラス艦隊を捜索することはないと思います」

「その理由は？」

「デスラー総統自身が、地球と『ヤマト』への復仇心を昇華させているのと、長きにわたる隣人であったイスカンドル星のスターシャ女王とサーシャ女王が地球に亡命しているからです。

イスカンドルはこれといった軍備を持っていなかったようですが、旧ガミラス帝国は武力侵攻しておらず、代々の国王はガミラス人からも敬愛されていたと聞きました。

また、ガミラス星が消滅したことで暴走したイスカンドル星に急行し、危険を冒してスターシャ女王一家を救おうとしたガミラス艦隊の行動が証明しています。

あの行動は、ガミラスの復興という大義名分の前には不要なものはずだからです。

にも関わらず、デスラー総統とガミラス軍人は被害を度外視して女王一家を救おうとしまし、さらに同じくイスカンドルにゆかりがあ

る旧敵の『ヤマト』を名指しして支援を要請したほどです。そこまでしたデスラー総統が、スターシャ女王母娘がいる地球を再び攻める可能性は限りなく低いと思います。

むしろ、万一、管理局と地球連邦との間に武力紛争が生じた場合、ガミラスが地球の側に立って管理局と敵対する可能性の方が遙かに高いでしょう。

地球側もそれを知っていますから、彼の動向に注意しながらも、排除まではせずにいると考えます。

少なくとも、デスラー総統の人となりは、我々管理局より地球防衛軍、特に『ヤマト』乗組員の方が十分知っているでしょう。

第一、イスカンドル星消滅の後、ガミラス艦隊がどこに向かったか、『ヤマト』『相模』はもちろん、地球防衛軍も掴んでいません」

フエイトの発言に、居並ぶ高官達は様々な表情を浮かべる。

特に信じ難いのは、『ヤマト』とデスラー総統の奇妙な因縁だ。

当然、それを指摘する者がいてもおかしくはない。

その点を指摘した高官に、フエイトは応える。

「私見ですが、デスラー総統は敵にも美学を求めていると考えます。『ヤマト』は大切なものを守るために全てを賭けてガミラスと死闘を繰り広げましたが、その姿をデスラー総統やガミラス軍人は評価したのではないのでしょうか……？」

「なるほど、ガミラスから見ればそういう事もあり得るだろう。しかし、地球連邦の一般住民の感情は違うのではないか？」

数多の同胞を殺されているのに、そんな簡単に恨みや憎しみを捨てきれぬのかね？」

「もちろん、市民の間には今なおガミラス討つべしなどの声がありますし、それは当然でしょう。」

しかし、地球もまた、『ヤマト』の作戦行動の結果、ガミラス本星を死の星にし、多数の住民を殺傷してしまいました。地球連邦は

その事実も義務教育の授業で教えています。

また、解決方法は全く誤っていましたが、ガミラスもまた、本星の余命が僅かになり、いつ消滅してもおかしくない状態にありました。何より、生き延びたガミラス人の中において、デスラー総統は今なお最高の指導者であり続けています。

デスラーを排除しようとするれば、ガミラス人は死兵となって抵抗しますし、ガミラス軍の艦船も管理局の艦船より格段に戦闘力は高くかつ機動部隊も有しています。

資料にもありましたが、瞬間物質移送装置を使った転送戦闘は『ヤマト』の波動砲を封じ込め、二度も撃沈寸前まで追い詰めたほどで、地球防衛軍も今なお警戒する戦術です」

ガミラス艦隊は、波動砲に相当するデスラー砲を搭載する艦は今のところデスラーの総旗艦だけだ。

むしろ、瞬間物質移送装置を利用して艦載機を敵の鼻先まで送り込み、飽和攻撃で仕留める戦闘こそがガミラス軍の真骨頂だ。

しかも、主力艦である駆逐型デストロイヤー艦もかなり高い機動性を持つという。

「……波動砲やアルカンシエルみたいな殲滅兵器ではなく、戦闘機や小型快速艦による高機動戦か。管理局の艦船では追従すらできまいよ」

「ガミラスの艦載機も大気圏内で行動できるとなると、航空魔導師でも対応は難しいな」

内心ではデスラーみたいな危険人物は早々に逮捕するか排除したいが、所在不明な上に強力な質量兵器による軍備、そして今なお衰えないカリスマ性で内部崩壊も望めない。

“被害者”である地球連邦も、デスラーを追跡したり追討する事は

考えていないようで、仮に管理局がデスラー逮捕に動いても、地球連邦や地球防衛軍の協力は期待できないし、高圧的に要求したところで無視されるのがオチなのだ。

（確かに、デスラー総統は管理局にとっては危険人物。でも、生き延びたガミラスの人達にとっては偉大な指導者。

ましてや直接の被害者である地球連邦が報復を思い止まっているのに、まだ被害らしい被害を受けていない管理局がデスラーを逮捕しようとするれば、ガミラスは死に物狂いで抵抗するし、地球連邦もそっぽを向きかねない。)

議論を交わす高官達を、ティアナは些か冷めた目で見ていた。

「ハラオウン執務官、ランスター補佐官に尋ねるが、地球連邦や防衛軍内部にガミラスへの報復を主張する声はなかったのかね？」

“海”の、次元世界拡大派に属する提督が尋ねてきた。

何とか、地球連邦に協力させたいというのだろうか。

「そういう声は少なからずあります。殆どの人は今なおガミラスを許していないでしょう。」

しかし、イスカンドルを間近にした『ヤマト』が、デスラー総統の挑戦を受けたとはいえ、ガミラス首都を壊滅させて多数の住民を殺傷したことは、『ヤマト』のクルーや地球連邦政府にとっても痛恨事だったようです。

『ヤマト』の目的は同胞の救済であって、敵の殲滅ではありませんでしたから。

ゆえに、地球防衛軍も、ガミラスに地球再侵攻の意図がない限り、わざわざ戦う理由がないとの見解です。

何より、暗黒星団帝国は双方共通の敵ですから、状況次第では再度

共闘する可能性の方が高いでしょう」

暗黒星団帝国に対する感情では、地球は警戒心だが、母なる星を失ったガミラスは憎悪であり、デスラーは新国家が安定したら間違いなく復讐戦を開始するものと見られている。

「デスラーが暗黒星団帝国に復讐すると断言したのかね？」

「私が知る限り、彼が暗黒星団帝国を名指しして復讐を宣言したわけではありませんが、自ら“屈辱を忘れない男”と、『ヤマト』の古代艦長代理に明言しています。

イスカンドルをめぐる戦闘では、ガミラス艦隊は暗黒星団帝国艦隊や機動要塞『ゴルバ』に苦戦を強いられたあげく、イスカンドル星も守れませんでした。

デスラーとすれば耐え難い屈辱であり、やられっ放しではないだろうと、『ヤマト』の人達も話していました」

「……宿敵同士にしかわからない感情、か……」

ぼつりと呟いたのは“三提督”の一人、レオーネ・フィルス元帥だ。

「デスラー一党の動向がわからない以上、搜索は極めて困難だろうが、次元航行艦が偶然遭遇する可能性はあるう。」

“海”は一層慎重な対応をとってくれたまえ。

たとえ相手が単艦で行動していたり、ロストロギアの反応があっても、停船や臨検は控えるようにな」

「わかりました」

“海”側の将官は同意したが、それが徹底されるかはまた別問題。

とある宇宙空間

太陽系からアンドロメダ座銀河方面に約27万光年離れた宇宙空間に多数の漆黒の艦船が遊弋しているが、その艦隊のすぐ前には、艦船“だった”金属片や残骸、人間だった有機物が漂っていた。

漆黒の艦隊の中で一際大きな艦の艦橋で、中央の席に座るスキンヘツドの男に、幕僚らしき、これもスキンヘツドの男が姿勢を正して立つ。

「カザン司令、ガトランチス艦から回収した記録媒体から、地球艦隊と『ヤマト』の資料が発見されました！」

「そうか、やはりあったか……」

カザンと呼ばれた司令官の表情が僅かに綻ぶ。

「取り急ぎ資料を用意しますが、引き続き解析と更なる収集を行います！」

「ん」

(フツ……、遂に見つけたぞ、地球への道の欠片をな……)

カザンは自らの読みが的中したことに、内心で快哉を上げた。

地球に敗れたガトランチス軍は、支配下においていると思っっているアンドロメダ座銀河に引き揚げるものと読み、網を張っていたところにガトランチスの敗残艦隊が引っ掛かったのだ。

(もっとも、現地に行けたとしても、聖総統御自らお打ちになった手で、奴らの占領軍は大揺れだろうがな……)

ガトランチスとはいずれ雌雄を決するつもりでいたが、地球を取るに足らぬ存在と侮った挙げ句、愚かにも元首たるズオーダーが斃されてしまった。

アンドロメダ座銀河にいる彼らの現地占領軍は勢力争いで早くも共食いを始めてくれたし、占領地の奴隷達も蜂起しつつある。ズオーダーの復讐戦など夢のまた夢だろう。

地球がどんな手でズオーダーを討ち取ったかはわからないが、この大宇宙は勝ち残った者こそが強者だ。

だが、我が帝国はそんな愚策はとらない。十分かつ迅速に地球を調べ、彼らが戦力を回復する前に制圧してやる。

カザンは、前方、天の川銀河がある方向に鋭い視線を射込んだ。

第183話『管理局とガミラス』（後書き）

次回は総統閣下がご登場遊ばします。

第184話『デスラー宣言』（前書き）

何とまあ、通算200話過ぎてしまいました。
さらに進むグダグダ展開……。

第184話『デスラー宣言』

ガルマン星

つい数日前まで、この地を支配していたボラー連邦の総督府だったビルの前には数万もの人々が群れ集まり、歓呼の声を上げている。群衆の視線は、ビルのテラスに立つ数人の人物の中央にいる男に注がれていた。

歓呼に手を挙げて応えた男はマイクの前に立ち、宣言する。

「本日、ガルマン星は暴虐なる支配者、ボラー連邦から解放された事をここに宣言する」

人々の喚声が一際高くなった。

男 元大ガミラス帝国総統デスラーは再び拳手し、喚声が鎮まるのを待つて再び口を開く。

「ボラー連邦の理不尽極まる支配は、もはや過去のものである。これからはガルマン、ガミラス両民族が手を取り合つて新たな国を造り、暴虐なるボラー連邦を打倒して、この銀河に真の平和を齎そうではないか！」

デスラーと共にテラスに立つのは、タラン、グラフ・シュパーら旧ガミラス軍高官と、キーリング、ガイデルら、デスラーに協力した反ボラー活動のガルマン人指導者達だ。

ボラー連邦に対するレジスタンス活動は長く続いていたが、当然ながら凄まじい弾圧を受け続け、活動の中心的指導者がいなかった。

そこに現れたのが、遙か昔に宇宙の海原に漕ぎ出していったガルマン人の末裔、デスラー率いる旧ガミラス艦隊と、ガミラス本星等から脱出してきたガミラス人の移民船団だった。

同胞達の惨状を見聞きしたデスラーは憤怒し、ボラーの駐留艦隊を奇襲し撃滅。一気にガルマン星に迫った。

ボラー連邦は当初、事態をさほど重視しておらず、近隣星系の駐留艦隊を討伐艦隊として派遣したが、ガミラス艦隊はこれも“瞬殺”してしまった。

この時期、ボラー連邦には同格の敵対勢力は存在せず、軍、特に占領地の駐留軍の士気は弛緩が見られていたようだ。

一方、旧ガミラス軍は『ヤマト』や暗黒星団帝国などの強敵と戦ってきたことで技量・士気は保たれており、しかも祖先の同胞を救うという大義名分もあってか戦意は旺盛。数で勝るボラー連邦軍を戦術と戦意で圧倒したのである。

『手応えがなさ過ぎる。地球の連中はもつとしぶとかったぞ!』

かつて冥王星基地に赴任したことがある士官は、かつての敵と比較しつつボラー連邦軍を酷評したという。

2度惨敗した現地駐留軍の醜態に、ボラー連邦の実質的リーダーである連邦首相ベムラーゼは激怒。逃げ帰った現地軍の幹部を即刻解任・粛清した上、ボラー本星防衛艦隊から1個艦隊約500隻を抽出し、“叛徒どもと扇動者を討伐するため”に派遣した。

本国艦隊の出撃で、不逞なる叛徒どももひとたまりもなかるうと、連邦政府中央や軍首脳部も考えたのだが。

戦力を増やしていたのはガミラス側も同じだった。各地に散らばっていた艦隊が“新天地”に到着したデスラーの後を追って続々とガルマン星に到着したり、接近しつつあった。

しかもこれらの艦隊は行き掛けの駄賃とばかりにせつせとボラー軍の補給線をつつき、輸送船団を襲って物資の強奪もやってのけた。デスラーはこれら戦利物資のうち、軍事物資は接收したものの、食糧や医薬品などの過半をボラーの支配に喘いでいた住民に分け与えたため、否応なしにデスラーとガミラス軍の人気は高まったのである。

祖先を同じくする者同士ということもあるが、ガミラス軍は厳しい軍規を敷いており、住民に狼藉を働いた者は公開銃殺刑にすると総統名で布告したこともあり、住民に乱暴狼藉を働くガミラス兵はいなかった。

当然ながらガルマン人かの評判もボラー軍とは段違い。急速に人心が離れたボラー駐留軍や総督府は孤立無援に陥った。

そこに、ボラー本国からの艦隊が叛徒と扇動者を討つべくやってきたのだ。

ここが正念場と判断したデスラーも全艦隊に集結を命じて迎撃準備にかかり、ガルマン人レジスタンス達もボラー陸上軍との全面対決に備えた。

果たせるかな、ガルマン星から約1光日余りの空域でボラー艦隊とデスラー直率のガミラス艦隊は激突したのだが、ここでデスラーは伝家の宝刀とも言つべき“デスラーノドメル戦法”を以ってボ

ラー艦隊本隊を急襲。

旗艦だけでも30発以上被弾して落伍し、司令官ボゼストエンスキイ上級大将と艦隊司令部幕僚も全滅した。

開戦早々に指揮系統が乱れたボラー艦隊にガミラス艦隊は容赦なく襲いかかり、ボラー艦隊は司令部と戦力の半分を失って退却したのだが、退却するボラー艦隊に、ガルマン人のフラーケンが率いる新造間もない次元潜航艦が執拗な追撃をかけたため、ボラー首都星に辿り着けた艦は出撃したうちの3割に過ぎなかった。

頼みの綱の本国艦隊が敗れたことで抗戦の手段を失ったボラー連邦のガルマン総督府と軍司令部は陥落し、軍司令官は自殺。総督はデスラーの親衛隊に逮捕され、デスラーの面前に引き出されて不正蓄財を暴露・断罪された末に、住民に対する残虐行為の責任も問われて即決裁判の後公開処刑された。降伏したボラー軍人達は処刑こそされなかったが、貨物船に乗せられて追放された。

ボラー連邦の勢力が一掃されたことで、ガルマン星は長きにわたるボラーの支配下から解放され、今日の解放宣言に漕ぎつけた。

演説するデスラーを眩しく見ながらも、タランは新天地を得た喜びより、これから待ち受ける難問に身が引き締まる思いだった。

（ボラーの支配で荒廃したガルマン星の整備と、再び侵攻してくるであろうボラー連邦の魔手から同胞を守るための軍備増強、そしてガミラス人とガルマン人の融和。これが一番大切だ……）

デスラーを先頭に、このガルマン星を銀河の中心にするための闘いが始まるうとしていた。

太陽系・アステロイドベルト内、『相模』格納庫

「さ、漣、お礼の挨拶をしなさい」
「はい！」

真田志郎が目の中の少女に言い聞かせると、少女は元気に答えて、目の前の軍人達に向き直った。

「皆さん、どうもありがとうございます」
「どういたしまして」
「元気でね」

漣という少女は『相模』乗組員にペコリと頭を下げると、手を振りながら真田に続いて連絡艇に向かった。
そして搭乗口へのタラップでもう一度振り返り、見送りの列の中央に立つ長身の女に笑顔を向けてのたまった。

「ごきげんよう、冴子おばちゃま！」
「ああ、元気でな！」

当の“おばちゃま”はサムアップで応えたが、周囲の乗組員達はど
う反応しているのか、真剣に悩んでいた。

第186話『アルファ星系へ』（前書き）

航行中の一幕です。

第186話『アルファ星系へ』

天の川銀河、オリオン腕外縁部

『相模』以下13TFの4隻と探査母船『白鳳丸』、補給兼工作艦『そつや』はアルファ星系に3光日まで接近していた。

ケンタウルス座アルファ星は太陽系から4光年余りと、太陽系から最も近い恒星である。

中心であるアルファ星はA・B・Cの三連星で、A星とB星は太陽と同じ位の大きさで、C星は遙かに小さな矮星だ。

いくつかある惑星の中には地球に近い環境の星もあることは前世紀までに判明していたが、ガミラスとの戦争で探査できずにいた。

2140年代、日米・ヨーロッパ、中国、ロシア等がそれぞれバサード・ラムジェット機関を搭載した亜光速無人探査船を差し向け、2170 - 80年代に日米とロシアの探査機が帰還した実績を元に、来たる23世紀には有人探査船を投入する計画が立てられ、国連の主導下で設計が進められたが、その最中にガミラスとの戦争が勃発し、計画は自然消滅したのだが、冷凍睡眠カプセル等の長期間宇宙旅行技術は地球脱出艦『ヤマト』、『アイオワ』級等に応用されていた。

しかし、イスカンドルからのタキオン推進機関技術の提供と『ヤマト』によるイスカンドル往復行の成功で、地球人類は一気に恒星系間はおろか、近隣銀河系まで航行できる技術を手にした。

外洋宇宙であったイスカンドル行きとは異なり、深宇宙行とも言え

るアルファ星系の場合は、星等の密度が濃いため、長距離ワープには制限があり、航路開拓、測量も兼ねた今航海は片道10日〜15日程度を要すると予想されていた。

探査船団は『水無瀬』を先頭に、『鳥海』『白鳳丸』『そうや』『相模』、『伊吹』の順で単縦陣を組み、航路データを収集しつつ慎重に進んでいた。

山本率いるコスモタイガー隊はアラートで待機し、必要に応じて周辺警戒に当たっている。

(まるで酔っ払いの集団だな)

護衛指揮官を仰せつかった嶋津冴子は艦長席でぼやく。

ガミラス軍とは実質的な休戦状態にあるが、白色彗星帝国軍の残党や、暗黒星団帝国軍と遭遇する可能性は拭いきれず、万一遭遇すれば10隻にもならない小船団はいいのだ。

この手の護衛任務に戦艦や戦闘機まで動員するのは、地球防衛軍の苦しい台所事情を考えれば異例の大盤振る舞いといえよう。

それだけ連邦政府はこの探査計画に力を入れていることに他ならなかった。

船団は万一の場合、一時退避できそうな小惑星や、航行の障害になり得る天体等を確認しつつ進んでいたため、船団の行程はまさに酔っ払いの千鳥足のようだった。

「全方位、異状ありません」

「重力異常ありません」

「前方障害ありません」

「……了解。船団各艦船に伝えて」

ブリッジクルーからの報告を受けた艦長、ナーシャ・カルチェンコは船団全てへの通知を指示した。

船団の先頭を進む『水無瀬』は、いわば船団の眼だ。

パトロール艦は太陽系外での行動も想定したため、レーダーやセンサー、通信機能はなまじな戦艦より上だ。

『白鳳丸』にも同等の性能を持つレーダーやセンサーを備えてあるが、こちらはあくまで航路データの収集や分析がメインで、戦闘データの分析は二次だ。

パトロール艦の、お世辞にも広いとは言えないブリッジには、緊張感こそ漂っていたが、張り詰めるほどのものではなかった。

それは、艦長のナーシャ・カルチェンコの表情が比較的柔和だからだ。

ナーシャの第六感には定評があり、彼女の表情が柔和な時には凶事は起きていないからだ。

とはいえ、篠田以下のクルーは、口はともなく目、耳、手は休んでいない。

船団にとっての脅威は何も敵軍だけではない。宇宙塵や艦船の残骸なども、直撃すれば致命傷になりかねないからだ。

さらには難破船。過日のイスマンダル救援作戦では実際に遭遇し、3名を救出しているからだ。

……まあ、その後の付き合い方が些か厄介なのだが、事は既に軍の

手を離れた。後は政府に丸投げ、お任せホーヤレホ。

実際のところ、13TFはこの後も魔法使い（厄介者）ばかり拾ってくる”と、軍中央や国防系政治家達をうんざりさせることになるのだが。

時空管理局本局

「賛成と保留が半々なんだ……」

「ああ。もう少し様子見という世界が意外に多かった」

クロノ・ハラオウンのオフィスで、フェイトとティアナ、復帰間もないシャリオは、クロノからの報告を聞いていた。

地球連邦こと第197管理外世界と交流を持つ事について、各管理世界政府の意思を確認しているのだが、賛成と回答保留　もう少し様子を見たい　が概ね同数で、反対は意外に少なかった。

賛成しているのは比較的管理世界としての歴史が浅く、かつ管理局への反感が残る世界。反対はヴァイゼン等の親管理局世界と、管理局への温度差がはつきり出していたのだが、回答を保留した中にミッドチルダが入っていたのは誰も予想していなかった。

次元の海の中心世界、魔法世界の中心と位置づけられている第1世界のミッドチルダが、対極の存在である地球連邦との交流に明確に反対しなかった事は、管理局のみならず、親・反管理局勢力にとっても衝撃的だったようだ。

「……ミッドに勤務している魔導師局員の大半にとってはショックでしょうね」

ティアナが息を飲むように応え、他の3人も同感とばかりに頷く。

「うん。管理局の魔導師の能力に疑問符を付けたも解釈されても仕方ないからね」

(……アインヘリアルではなく、地球防衛軍艦船に使われているシヨック・カノン砲やパルスレーザー砲を高射砲として導入することを考えているのかも知れない。

かの『ヤマト』は、シヨックカノン主砲の初射撃のエネルギーは地上からの供給だったという。それでも大気圏外のガミラス高速空母を一撃で破壊してみせた。

波動機関でなくてもエネルギー供給と射撃管制が万全なら、地上から大気圏外の目標を攻撃でき、かつ短時間で連射できる地球型シヨックカノン砲は魅力的だ。

フェイトが持ち帰った資料では、パトロール艦や巡洋艦の主砲に使用している8インチ砲以上なら衛生軌道上から直接地上に艦砲射撃を加えることができ、戦艦に使用されている16インチ砲以上ならば、もはや戦術核並の破壊力だ。射程もアルカンシエルを軽く凌ぐ。それに、地球防衛軍の軍人や警察官が持つパルスガンは実弾拳銃より使い勝手が良く、エネルギー弾は亜光速だから魔力弾より遥かに速く、回避は困難。しかもスタンモードにもできるから非殺傷戦闘にも対応できる。

これなら非魔導師局員が違法魔導師と渡り合うことも不可能ではないのだ。

（言っちゃ何だけど、“陸”にすれば福音ね。使い方さえ覚えれば魔導師である必要はないし、極めて短時間で、かつ詠唱なしで撃てるというのは戦術面で有利だわ。でも……）

管理局員のみならず、管理世界の住民は、質量兵器を全否定する教育を受けた者が多い。

それ自体の正否はともかく、情勢が急転している今、いつまでも変わらないでいると、管理局は、世界を守るどころか、自分の身すら守れないお馬鹿組織になってしまうわ。

……尤も、地球連邦も管理局をウザいと思ってるんだろっけどね（

ティアナは自嘲気味に呟いた。

第186話『アルファ星系へ』（後書き）

次回で本作はひとまず完結？します。

番外話3 『時空管理局・陸士696隊』 (前書き)

え、完結間際にごめんなさい。
ちよいと寄り道します。

本編とは全く関係ありません。

番外話3 『時空管理局・陸士696隊』

新暦75年5月、ミッドチルダ首都クラナガン郊外、機動六課部隊長室

「皆、まだ物入りなのに時間とらせてごめんなあ」
「構わないよ。はやて」

部隊長の八神はやて二等陸佐はスターズ、ライトニング分隊の隊長・副隊長と部隊長補佐であるグリフィス・ロウランを召集していた。

「でも、何かあったの？はやてちゃん」

皆を代表する形で、スターズ分隊長である高町なのは一等空尉が尋ねる。

「うん：実はな、ここから5？程離れたところにある廃工場を改築して、新設の陸士部隊が入るそうなんや」

「廃工場を改築してって、アタシらに対する嫌がらせかよ？」

スターズ分隊の副隊長であるヴィータ三等空尉が呆れた口調になる。

「仕方ないんよ。予算の大部分は本局が持って行くし、高ランク魔導師も本局が引き抜いてるしで、各世界の地上本部は本局に恨み骨髄なんや。」

この六課は明らかに本局系の部隊やしな。
レジアス中将にすれば、六課は癌細胞にしか見えんやろなあ……」

機動六課の隊舎は完全新築で、設備・什器も全て新品だ。

それに対し、陸士隊の隊舎は既存の建物を改築することも少なくないし、什器等にも中古品が混じることが多く、今度の陸士隊も同じ□らしい。

「……その事はさておいて、そこに入る部隊はわかっているの？」

お隣りさんみたいなものだし、仲良くとまではいなくても、「コミユニケーションはとっておく必要があるよね？」

ライトニング分隊長のフェイト・T・ハラオウン執務官（一等空尉相当）が話題を切り換えるようにはやてに尋ねた。

「うん、これを見てや」

そこに映し出されたのは、件の廃工場改造隊舎に入るという陸士部隊の資料だ。

「……え？」

「……マジかよ」

分隊長と副隊長が揃って顔色を変えた。

“陸士第696隊”

統括部隊長：リュウ・ヒジカタ准将（53歳。陸士第007隊・第386隊部隊長兼任）

部隊長代理：サエコ・シマーズ三等陸佐（28歳。捜査官・教導官、空戦S-、陸戦S+）

部隊長補佐：コザック・オームラ三等陸尉（25歳。陸戦A）

第一分隊

分隊長：リュウイチ・シオヤー等陸尉（27歳。陸戦A）

副隊長：レナ・アヤウタ三等陸尉（24歳。空戦A、陸戦A）

第二分隊

分隊長：ナーシャ・イリーナスカヤ・カルチエンコー等陸尉（26歳。空戦A、陸戦AA）

副隊長：ロツク・シノダ准陸尉（36歳。陸戦AA、）

第三分隊

分隊長：シルヴィア・N・フランベルク二等陸尉（25歳。陸戦A）

副隊長：アリア・S・フランベルク（25歳。陸戦A）

技術主任：トチロー・ビッグマウント一等陸尉（28歳。陸戦D）

……。

「……何だ？このメンバー。」

“鬼も泣かす”部隊長に最凶最悪な部隊長代理。

分隊長や副隊長も“雲撃ち”に“人食い鰐”……。シマーズ以外の士官は魔導師ランク詐称もいとこじゃねーか」

ヴィータは心底呆れたように呟いた。

統括部隊長のヒジカタはレジアス・ゲイズの同期で、魔導師ランクこそ平凡ながら、部隊長や教官として定評があり、はやてをゲンヤ・ナカジマに預けたのも彼だ。

特に教官としては、陸は元より、本局の魔導師からも鬼神の如き畏怖と畏敬を受けているという。

そのヒジカタが現在率いる陸士007隊は、スバルとティアナがいた陸士386隊をも傘下に置く一大部隊で、クラナガン西部の治安維持の要である。

「私に指揮官の基礎を叩き込んでくれたり、今回、ティアナとスバルを寄越してくれたんもヒジカタ准将や。だから今度の696隊とも何とか仲良うやっていきたいんよ」

「それはいいけどよ。実質的な部隊長はあのシマーズだぜ。大丈夫かよ？」

「……………」

ヴィータの指摘にシグナム、フェイト、なのはは苦笑する。

それもそう。本局におけるシマーズ評は“容姿端麗・性格最悪”。

容貌だけなら管理局で十本の指に入るほどの美貌なのだが、言動は漢、否、オヤジそのもの。

彼女の捜査や戦闘も正に苛烈の一言が相応しい。

犯罪者は老若男女関わらず、一片の情も与えずに叩きのめす。時には“ハリセン”で、魔力なしでシバき倒すような事もしたり、ド汚い手や、必要とあらば殺すことも躊躇わないという。

また、魔導師が相手ならば、相手の魔導師生命を奪う事も厭わず、高ランク魔導師や“身内”相手の場合、リンカーコアを回復不能なまでに潰し、再起不能にしたことも一度や二度ではない。

当然、本局を中心に非難の声が上がったが、当のシマーズは、

「高ランク魔導師なら、犯罪を犯しても管理局に降れば軽い処分で

済む等と下らん期待をされては、被害者や家族に示しがつかない。魔法を使つて積極的に人を殺傷したのなら、魔導師生命を以つて償うのが当然だろう？」

表情を変えずに反論したが、それを聞いた幾人かの魔導師は、過去を思い出して心底戦慄した。

高ランク魔導師の場合、本局と“裏取引”し、おざなりな刑罰に仮釈放の後、何食わぬ顔で管理局の本局に士官として就職した者もいる。

(フェイトやはやて達は不可抗力同然なのだが……)

そういつた者は、真摯に反省して職務とボランティア活動に当たる者がいる反面、反省しているのか疑わしい者も少なからずいる。

シマーズはそこを指摘して、現状に異議を唱えているのだが、有望な戦力候補者を潰された本局とすれば許し難く、ともすれば実像以上に悪く言われてしまうのだ。

当の本人は意に介する様子はないのだが……。

そして、シマーズ以外の分隊長と副隊長も何癖も持った連中で、実力はどう見てもニアスクラス。

魔導師ランクだけで与しやすしと侮った違法魔導師を幾人も返り討ちにした。

てな具合に、前線部隊だけで20名以上おり、実質戦力は機動六課を大きく凌ぐ。

「こりゃ、クラナガンの『西〇警察署』やな。696隊は」

「……そうだね。間違つても喧嘩だけは避けないとね」

はやてとフェイトは疲れたように言う。

当然ながら、六課は696隊にさんざん振り回されることになったのだった。

続かん……。

番外話3 『時空管理局・陸士696隊』 (後書き)

次回こそ、ひとまず完結です。

第187話『初めから大成功したのはヤマトだけ』（前書き）

とりあえず、今話を以って拙作は完結です。

ご笑読ありがとうございます。

……とは言っても、単にパート2に移行するだけなんですけどね。

最後に“爆弾”を仕込みました。

第187話 『初めから大成功したのはヤマトだけ』

アルファ星系第4惑星

探査船団は底軌道に位置して惑星周辺の監視にあたり、探査母船『白鳳丸』は惑星自体の探査と監視機材の設置にかかっていた。

探査は、惑星の大気や地殻の組成、引力、風力、水脈、原住生物等を分析して、人間の行動や居住に適した環境かどうかを調べる一方、有用な鉱物資源の有無も確認する。

監視機材は地上と宇宙空間に設置し、敵性勢力であればその存在をタキオン通信で中央司令部に自動連絡する。

この手の監視機材や監視用人工衛星・惑星はこのアルファ星系のみならず、地球を球状に囲むように設置し、太陽系に近づく艦隊や大型天体を監視するのだ。

更に、時空管理局の艦船から得たテクノロジーで異次元空間用アクティブ・パッシブソナーを開発中で、異次元空間というトンネルで太陽系や地球に近づこうとする艦船等を探知する試みも進められていた。

『相模』艦長公室

『……………以上がこれまで判明したデータです』

冴子の目の前にはスクリーンが開かれ、十数人の人物が映し出されていた。

13TF各艦の艦長は元より、船団司令官の周 邦健、『白鳳丸』
に乗り組んだ軍・学・民の責任者達。

学界からは恒星研究の第一人者である地球連邦大学教授のエドガー・サイモン、民間からは南部、揚羽、月村バニングス等、有力な宇宙開発企業体からのスタッフも少なからず乗り組んでいる。

太陽系外の惑星の中には有用な資源が埋蔵されていたり、人間の生活に適した環境の星が存在する可能性がある上、各種新機材のデータ取りもできるため、企業にとってもフロンティアなのだ。

打ち合わせ自体は概ね順調だった。

地学班からは、重力は地球の104%。地殻構造も地球にオスニウム、ハイコスモナイト等の貴重な鉱物資源らしき鉱脈や鉱床の存在が確認されているとの報告があった。

気象班からは大気や気象状況の報告があった。

大気組成も、窒素の比率が若干多い代わりに二酸化炭素が少ないが、それ以外は地球とほぼ同じで、宇宙服等の特別な装備は要らないようだ、気候は地球の砂漠地帯に近く、また地下水脈も細いため、居住者の人数はかなり抑えられるとの見解がとられた。

(軍関係者や資源採掘関係者の居住はともかく、移民先としては気候が厳し過ぎる、か。
ま、のっけから何もかもがうまくいくわけもないか……)

有用な鉱物資源がありそうで、酸素の心配をしないで済むだけでも上出来というものだろう。

何しろ、外宇宙への本格的な進出は初めてだ。人類はこれから長い

長い時間をかけ、風に乗ったタンポポの種のように天の川銀河系、そしていずれは他の銀河系にも乗り出していくのだろう。

観測スタッフの報告を聞きながら冴子は、遙か先のゴールに思いを馳せた。

そのゴールは、冴子が生きている間に見えることはないだろう。

時空管理局本局、土官喫茶室

本局の喫茶室ともなれば、ミッド首都クラナガンの喫茶店にある大抵のメニューは提供できる。

そして、最近、女性局員の間でとみに人気のメニューがあった。

『ミッドチルダで人気！！第107無人観測世界“ビーメラ”産口ーヤルエキスブレンドアイスクリーム』。

第187話『初めから大成功したのはヤマトだけ』（後書き）

『或る戦艦と艦長2』に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1542m/>

或る戦艦と艦長

2011年8月22日00時13分発行